



近世の市場経済と地域差 : 物価史からの接近

草野, 正裕

(Degree)

博士 (経済学)

(Date of Degree)

1996-04-17

(Date of Publication)

2011-06-14

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙2030

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.11501/3117009>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2002030>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



近世の市場経済と地域差

—— 物価史からの接近 ——

草 野 正 裕

目 次

序 章 物価史とその周辺	
— 課題と方法 —	1
はじめに	(1)
I 近年の研究	(5)
II 課題と方法	(11)
おわりに	(19)
第1章 京都における物価と賃金の変動	
— 三井家新データの検討を中心に —	29
はじめに	(29)
I 建築労働者賃金の変動	(30)
(1) 資料と加工	(30)
(2) ファクト・ファインディングス	(36)
II 日雇賃金の変動	(39)
— 建築労働者賃金変動との対比において	
(1) 資料と加工	(39)
(2) ファクト・ファインディングス	(42)
おわりに	(50)

第2章 物価と賃金の地域差	
— 京都対江戸 —	105
はじめに	(105)
I 資料と加工	(105)
II 京都、江戸における物価と賃金の動向	(109)
— ファクト・ファインディングス	
おわりに	(119)
第3章 生産物価格の変動と反収および肥料価格の時系列	141
はじめに	(141)
I 生産物価格と要素価格の変動	(142)
II 反当収量の変動と物価	(151)
III 相対価格の変動	(160)
— 要素価格／生産物価格比	
おわりに	(170)
第4章 物価の地域差と米価・豊凶循環	201
はじめに	(201)
I 物価の地域差	(202)
— 中央との対比において	
II 反収上昇趨勢と米価・豊凶循環	(209)
(1) 年貢減免のクロノロジイ	(209)
(2) 反収と年貢と米価	(217)
おわりに	(220)

付 論 地方における物価と生産の新データ	
— 播州加古郡野添村文書「御月見日記」について —	…233
はじめに	(233)
I 史料「御月見日記」について	(233)
II 整理と加工	(236)
(1) 米、麦、綿、干鰯の価格	(236)
(2) 米、麦、綿の反当収量	(239)
(3) 米、麦、綿の作況	(241)
おわりに	(243)
付 録 史料「御月見日記」全文	…259
はじめに	(259)
「御月見日記」全文	(261)
第5章 近世後期における米価の地域差	
— 越前勝山と大阪 —	…333
はじめに	(333)
I 資料と加工	(334)
II ファクト・ファインディングス	(338)
III 解釈にかえて	(355)
おわりに	(362)
第6章 移行期における米価変動と地域差	
— 勝山と大阪 1781～1915年 —	…371
はじめに	(371)

I	資料と加工	(371)
II	ファクト・ファインディングス	(374)
III	解釈にかえて	(383)
	おわりに	(390)
第7章	近世後期越前における米価の地域差(その1)	……405
	はじめに	(405)
I	資料と加工	(405)
II	ファクト・ファインディングス	(408)
III	解釈にかえて	(416)
	おわりに	(421)
第8章	近世後期越前における米価の地域差(その2)	……429
	はじめに	(429)
I	福井における実勢米価と換算米価	(430)
II	三貨交換比率の地域差と物価の地域差	(438)
	おわりに	(448)
結 章	近世の市場経済と地域差	……461
	はじめに	(461)
I	関西における生産・物価・賃金	(462)
II	関東における生産・物価・賃金	(478)
III	関西対関東	(481)
IV	米価の地域差	(496)
	おわりに	(500)

序 章 物価史とその周辺

— 課題と方法 —

はじめに

本研究のテーマは、タイトルにあるように『近世の市場経済と地域差 — 物価史からの接近 —』である。

そこでまず、（近世の市場経済ではなくて）一般的に市場経済というのは、だいたい次のようなものであると考えることにしよう。まず人々の好みや嗜好が変化する、あるいは所得や人口が変化する。したがって消費のパターンも変化する。一方で、生産も変化する。そして生産の変化の背後には、さらにいくつかの変化を考えることができるであろう。すなわち、土地、労働（人口）、資本といった生産要素の賦存量あるいは賦存比率の変化、またこれら生産要素の価格すなわち地代、賃金、利子率の変化、さらには技術や効率の変化等々である。この場合、消費者および生産者の行動原理は、消費者の場合は効用の極大化を、生産者の場合は利潤の極大化をはかることが仮定されよう。

そして、これらの需要と供給の諸力は、（完全）競争市場において相会し、価格を通じて調整されることとなる。これが価格機構と呼ばれて

いるものである。さらにいえば、生産物価格は生産物市場で、要素価格は要素市場で、しかも相互依存的、同時決定的に、あるいは、一般均衡的に決定されることとなる。このような全過程を通じて、最適な資源配分が達成されることになる。すなわち市場経済とは、価格機構をメインとした、このような全体系を指しているものと理解してよいであろう。

しかしながらこのような市場経済モデルは、どのような経済についてもあてはまらない。まして、われわれが考察の対象とした近世の市場経済との懸隔は大なるものがあると言わなければならないであろう。というのも、この市場経済モデルは、慣習や伝統の要素を取り入れていないし、また政府による指令の要素をも捨象しているからである。ところが、近世の市場経済は、近代のそれ以上に、慣習や指令の要素が、数多くは入りこんだ経済だったのではなからうか。

すなわち近世の市場経済において、多くの人々が極大化原理にのっとって行動していたかどうかは難しい問題であろうし、どのような作物を作っても勝手であったとか、土地の売買は自由であったとか、あるいはどこに住んでも、どのような職業についても問題はなかったとかは、やはりもちろん言うことはできないであろう。

さらには、需要が供給をリードしたと考えることには問題があろうし、資本蓄積や技術進歩を簡単に仮定することもできないであろう。また、（とりわけ要素市場において）十分な競争市場が保証されていたかどうかとも疑わしい。まして最適な資源配分がなされていたなどと、誰も考えないであろう。そして最後に、なによりも、統一的な全国市場の確立を前提にすることはできないのである。近世は、市場経済であったと言えようが、しかし、市場経済モデルからは、ほど遠いものであった。

以上縷々述べてきたのは、理論的な市場経済モデルが、われわれの研

究にとって、役立たないということが言いたかったのではない。話は逆である。われわれの意図は、近世の日本が、どの程度市場経済的であったかを検討する際に、さしあたり市場経済モデルを念頭においてみてはどうか、ということである。そうは言っても、たとえば近世中後期をひとまとまりのものとしてとらえ、全体としてどの程度市場経済が機能していたかを、モデルに照らして検証しようと考えているわけではない。むしろ、近世市場経済の（発展と言うよりは）変動のダイナミズムを、あるいは動学的な変化の過程を明らかにしたいと思っている。もうすこし具体的にいえば、およそ以下のようなことを考えている。

まず第1に、近世の市場経済においては、生産、物価、賃金といったものについてかなりの地域差が存在した。この解消は多くの場合近代を待たなければならなかったであろう。そこでこの地域差の存在と解消のプロセスを、時間の経過にしたがい、あるいは循環的な局面ごとに検討し、市場経済モデルを念頭におきながら、存在と解消についてのダイナミズムを追求したいと考えている。

第2に、いくつかの経済時系列は、相互に関係しながら変動している。しかし時間の経過とともに、あるいは循環的な局面ごとに、通常、相互依存のあり方は異なったものとなる。あるいは、（これは市場経済の発展と考えてさしつかえないと思われるが）しばしば、時間の経過とともに、諸変数間の相互依存関係が、ますます緊密なものになってゆくといった場合もある。われわれとしては、このような変動のダイナミズムを、市場経済モデルに固有の論理あるいは論理的連関を基準にして、ひとまずどの程度説明できるかを模索したいと思っている。その過程で、特定の時期に、市場経済の構造変化、あるいは転換点を認めることができるのであれば、無論これもまた、市場経済の構造と変動を論じたことになる

と考えている。

ここで、急いでつけ加えておきたいのは、つぎの点である。すなわち、われわれは市場経済モデルを念頭において、近世の市場経済を論じた。しかし、だからといってモデルのなかに、史実を押し込めようとしたわけでは毛頭ない。さらには、特定の仮説を採用して、史料から得られたデータをその検証のための素材にするといった方法も避けている。むしろ話は逆で、あくまで実証主義的に、素朴に事実を積み重ねることによって、そこから客観的に全体像を浮かび上がらせることを意図しているつもりである。本研究は、その意味で基本的に伝統的な経済史研究と、大きく異なるものではないと考えている。

ところで、1960年代半ばから80年代半ばにかけて、数量経済史としての物価史研究が、めざましい進展を遂げたことは疑いをいれないであろう。本研究もまた、やはり基本的には、当時の物価史研究の延長線上に位置するものといってよいであろう。しかし、早くも10年近くの歳月が経過したことでもあるし、いまさら、同じような問題意識で、同じような史資料、同じような手法をもちいて、たいして代わり映えのしない結果を提示することは許されないであろう。

最初に心がけたことは、新しいデータを提供することである。この点についてはこれ以上つけ加えることはない。しかし、同時に重要なことは、どのような課題を設定するかということであろう。

本研究で中心にすえた問題は地域差である。これまでの研究で、地域差の問題は手薄な部分であったといえよう。そこで本研究では、物価の地域差だけでなく、要素価格や生産の地域差も含めて、詳細な検討を行なうこととした。

というのも、従来の物価史研究の領域は、米価を中心とした生産物価格の検討が中心で、要素価格についての研究ははるかに少なかった。また、米価と生産（反収）を結びつけて解釈するといった試みもなかった。そこでわれわれは従来の物価史研究の領域をもうすこし拡げて、要素価格（賃金と肥料価格）はもちろん、生産（反収）データも本格的に取り扱うこととしたのである。

さらに、従来の物価史研究は、生産物市場と要素市場の相互依存、あるいはもっと一般的に言って、諸変数間の相互依存関係を検討するという点で、かならずしも十分であったとは言えないであろう。そこで、本研究結章で、ささやかではあるがこの問題にチャレンジしてみることにする。

また、手法についても二三の工夫をしている。そして、研究支援ツールとして、全面的にコンピュータを活用している。もっと言えば、コンピュータの活用なくしては、本研究は、ついに日の目をみることはなかったと思われる。

最後に、この研究は、どの程度新しくかつ意味のある結果を提示することができたであろうか。言うまでもなく、この点は筆者の判断領域ではない。

1 近年の研究

本研究で中心にすえた問題は、地域差とりわけ物価の地域差であるが、このことと関連して、要素価格や生産もまた本研究の重要なトピックをなしている。そこでまず、これらの点について簡単に研究史を振り返っておくこととしたい。

まず物価、とりわけ米価を中心とした生産物価格の変動分析にかんするものからはじめることとする。もっとも既存の研究を、どの部分に割り振るかということはむづかしい問題である。したがってこの点については、ある程度恣意的にならざるを得なかったことをお断りしておきたい。

周知のように1970年代から80年代にかけて、竹岡敬温¹⁾、新保博²⁾、岩橋勝³⁾、山崎隆三⁴⁾各氏によって、この分野の研究すなわち物価史研究の著作があいついで刊行された。そして1985（昭和60）年には、これらの代表的著作を中心にすえ、このときまでに公にされた諸論稿を集大成した回顧と展望の書『歴史のなかの物価』⁵⁾が出版された。しかしいまにして思えば、盛行をきわめた物価史研究も、この出版が一段落だったかに見え、その後はこの分野の研究（とりわけモノグラフ）は明らかに減少しているといつてよいであろう。

『歴史のなかの物価』には、その刊行までに発表された著作や論文がほとんど網羅的に紹介されている。そこで本章では、その後およそ最近10年ぐらいの間におおやけにされた（多いとはいえない）文献を中心として、近年の物価史研究の動向に触れることにしたい。

物価史研究における近年の大きな成果のひとつは三井家新データの刊行であろう。すなわち『近世後期における主要物価の動態』〔増補改訂〕⁶⁾および「三井大坂両替店物価関係資料」⁷⁾であるが、とくに前者はたんに増補改訂版であるというにとどまらず、のちに詳しく紹介するように、あまねくもちいられた旧版⁸⁾に比べてさえ、さらに格段に豊富な内容をもっているものと思われる。

つぎに個々の研究についてであるが、米価を扱ったものものとしては、宮本又郎氏の著作⁹⁾の後半部分および加藤慶一郎氏の論稿¹⁰⁾がある。また、

米価以外の物価については、長谷川彰氏の著作^{1.1)}に該当の部分を見いだすことができる。さらには、一般物価水準や相対価格（および農工間相対価格）を検討したものとして、宮本又郎^{1.2)}、有田富美子・中村隆英^{1.3)}、岩橋勝^{1.4)}各氏の論稿が公にされている。また、産物政策、物価政策の観点から、田中喜男^{1.5)}、土肥鑑高^{1.6)}各氏による著作も刊行されている。

二三の展望論文も発表されている。生産物価格だけではなく賃金や人口、財政、貨幣的側面なども含めた包括的なサーベイが、宮本又郎^{1.7)}、尾高煌之助^{1.8)}、速水融・宮本又郎^{1.9)}、新保博・斎藤修^{2.0)}各氏によって書かれている^{2.1)}。

さて本研究では、新史料をもちいて、播州および越前における二三の新しい米価系列を紹介している。そして播州、越前いずれの場合についても、いわゆる換算米価（石代値段や切米値段）が、どの程度米価の実勢の変動を反映していたか、という問題を検討している。また、米価以外の物価として、播州における大麦と綿の価格時系列を報告している。さらには、『近世後期における主要物価の動態』〔増補改訂〕をもちいて、新たに京都と江戸における消費者物価指数を作成している。

要素価格の問題に移りたいと思う。土地、労働、資本は生産の三要素と呼ばれるが、農業部門の比重が圧倒的に大きかった前工業化社会においては、肥料も重要な生産要素であったと考えてよいであろう。いちいち引用することはしないが、これまでに土地、労働、資本、肥料について耕地面積、人口、資本（ストック）、施肥量といったデータが、全国レベルあるいは一村レベルの集計量としてまたは個別経営上の帳簿類から、時系列的にあるいは断片的に、精粗さまざまではあるが報告されてきている。このような問題が重要であることは論を待たないであろう。

しかし、ここでサーベイの対象としたのは、土地、労働、資本、肥料そのものではなくて、それらの要素価格（要素報酬）、すなわち地代（またはその資本還元価値としての地価）、賃金、利子、肥料価格である。

要素価格についても以前の文献は『歴史のなかの物価』に譲ることとして、ここでは最近およそ10年ぐらいのあいだに公刊されたものについて簡単に述べておくこととしたい。

要素価格とくに賃金の場合も、近年の大きな成果は、さきに述べた三井家新データの刊行であろう。旧版では京都日雇賃金を文政初期までしか知ることができなかったが、新データによれば、三都の日雇賃金を幕末まで知ることができるのである。このことは賃金データが少ない現状では、まことに貴重であると言わなければならないであろう。

個別の研究としては、地価を扱ったものは植村正治氏の著作^{2.2)}だけであろう。賃金についても植村正治^{2.3)}、青木美智子^{2.4)}各氏以後、目立ったものはなかったが、ごく最近になって、鈴木ゆり子^{2.5)}、斎藤修^{2.6)}各氏の論稿が発表されている。斎藤氏は、30年前の佐野推計^{2.7)}を修正する一方で、賄い等現物給付を含めたときの賃金の動向はどのようになるかといった問題、あるいは賃金の地域差を考える際の留意事項など、複雑で困難な問題を提起していると思われる。つぎに利子率の場合も植村氏の著作^{2.8)}以降、新しい研究は行なわれていないようである。肥料価格についても、近年新しいデータの報告例は見あたらないと言ってよいであろう^{2.9)}。植村氏の地価、賃金、利子率についての研究も、モノグラフの発表はもっと以前にさかのぼることを考えると、要素価格時系列の研究は、結局、近年ほとんど進んでいないと言ってよいのではなかろうか。

さて本研究では、さきの三井家新データをもちいて、京都および江戸における実質賃金を計測している。また、新史料をもちいて、新たに要

素価格としての肥料（干鰯）価格データを提供している。

つぎに生産であるが、これはデータそのものが極端に乏しい。近年発表されたものでは、宮本又郎氏が中村哲氏の推計^{3.0)}にすこし手を加えたという「実収石高」（たとえば1800（寛政12）年の場合でいえば3,765万石といったような）の系列^{3.1)}が存在するが、これはあくまで推計である。

そこで、近世中後期には耕地面積の拡大はあまりなかったということにして、さしあたり、米の反収収量を実収石高の代理変数としてもちいることも考えられよう。しかし良好な反収時系列を得ることもまた容易ではない。管見によれば、これまでわずかに岸英次^{3.2)}、今井林太郎・八木哲浩^{3.3)}、山崎隆三^{3.4)}、佐藤常雄^{3.5)}各氏といった研究者によって、米の反収時系列にかんするデータが提供されているにすぎない。

また、ここで述べておくのが適当と思われるが、農業生産量の趨勢や循環あるいは豊凶サイクルといった問題は、かならずしも実収石高や反収によらなくても、ときには他の系列からうかがい知ることも可能であろう。たとえば幕府や藩の年貢収量や年貢率、もしくは小作人年貢納入量などの数量データの動向から、農業生産量の趨勢と循環を推測するといった場合がそれである。各研究者がそのような志向をもったかどうかを別にすれば、古島敏雄^{3.6)}、植村正治^{3.7)}、宮本又郎^{3.8)}各氏などが、関連のデータを提供していると考えられる。が、この点については本研究4章で触れることとしたい。

さて本研究では、新しい史料をもちいることによって、のちに3、4章および付論で述べるように、研究史に二三の新しい生産データを追加することができた。一村レベル（播州）ではあるが、（かなり良好と思われる）米と、新たに麦の反収時系列を報告することができた。また、

コンピュータを駆使することで、史料が元々もっていた深みのある内容を、限界まで引き出すように努力した。さらに、断片的ではあるが綿の反収データについても触れているし、またさきに述べた年貢収量との関連で、減免年の系列にもについても論じている。

さて最後に、本研究が中心テーマとした地域差の問題について、若干、研究史を振り返っておくこととしたい。

この点についても、すこし以前の文献は、『歴史のなかの物価』に譲ることとすれば、最近では、新保博³⁹⁾、長谷川彰⁴⁰⁾、岩橋勝⁴¹⁾各氏の研究をあげることができる。なかでも新保博氏は、近年、幕末期（1830～67年）における江戸と大阪の物価の比較を行ない、江戸と大阪における物価変動のパターンや物価水準の比較を中心に考察を試み、いくつかの重要な観察事実を得ている。そして、これらの観察事実を幕末期の経済発展のなかに位置づけるという課題に対するひとつの接近を、最近の論文「江戸後期における全国市場の構造 — 物価史からの一接近 — 」⁴²⁾において行なっている。

地域差の問題ということになると、いま述べた物価の地域差だけでなく、要素価格（地代、賃金、利子、肥料価格）や生産の地域差も検討の対象としなければならないであろう。しかし、近年このような問題について論じたものはほとんど無い。さらには、地域差の問題を真に検討するためには、三貨交換比率の地域差に関する情報がぜひとも必要である。しかしこの点についても、現在利用可能なデータは、無いに等しいという状況である。これまでわずかに鶴岡美枝子⁴³⁾、宮本又郎⁴⁴⁾、岩橋勝⁴⁵⁾、山崎隆三⁴⁶⁾、天野雅敏⁴⁷⁾各氏などによって各地の金相場、銭相場、あるいは藩札価格が報告されているにすぎない。

さて本研究では、越前や播州における米価の地域差（越前の場合は勝山と福井といったような）を検討し、また越前米価や播州米価を、大阪米価との対比において考察している。そして一部の物価について、地方と中央との比較を行なっている。さらには、米価や物価、そして生産データや賃金まで含めて、関西と関東（京都と江戸）を比較している。また、新史料をもちいることで、三貨交換比率にかんし、新たに福井金相場データを報告している。

ところで、われわれのような研究に必要な数量データは、なおいくつかのものを考えることができよう。すなわち改鑄、貨幣流通量、藩札のような貨幣的側面、全国や地方の人口変動、幕府や藩の財政収支にかんするデータなどで、いずれも重要なものであろう。しかし本研究では、これらを直接の分析対象としなかったので、研究史についても触れないこととする。ただここでは、貨幣的側面にかんする近年における重要な論稿として、明石茂生氏の研究^{4,8)}を指摘しておくこととしたい。

II 課題と方法

さてつぎに、物価史とその関連分野（さらにいえば近世マクロ経済史）を研究する際の、課題と方法について述べることにしたい。

第1は、史料についてである。われわれは、I節で見たようなさまざまな数量データ、すなわち生産量、米価や物価、地代、賃金、利子率、肥料価格といった要素価格、さらには人口、財政収支、貨幣量、三貨交換比率等々の数量データを必要としている。従来から新しい史料の収集整理の重要性が叫ばれながら、I節でも見たように近年その成果は、は

かばかしいとは言えないようである。そこで新しい史料の発掘とその整理が、第一義的に重要であるという点を、ここでも重ねて指摘しておくこととしたい。

第2の課題は、本研究が中心テーマとした地域差についてである。いまだ統一的な全国市場が確立していなかった近世中後期においては、当然のことながら米価や物価の地域差が存在した。まず、この点を具体的な事例にもとづいてできる限り明らかにすることが必要であろう。ついでこの地域差が解消する過程を検証しなければならない。具体的にはしだいに一物一価の法則が貫徹していく過程、あるいは米価や物価の地域間連動性が高まっていく過程を検討しなければならないであろう。このような分析を通じて、市場経済の構造と変動の問題を展望する際のひとつの手掛りにしようというのが、われわれの課題であると言ってよいであろう。

地域差を論じる場合に、米価や物価の地域差だけで、ことたれりとする訳にはゆかないであろう。米価や物価との関連で、生産量、賃金のような要素価格、さらには人口や貨幣的側面といったものについても、地域差を検討することが必要であろう。このような検討を通じて、たとえば関西と関東における経済発展の態様の相違といった大きな問題に対しても、ときには多少の接近が可能となる場合も考えられるからである。これまでの物価史研究のなかで、地域差は手薄な部分であったが、I節でもみたように、物価以外の地域差についてはなおさらそうであった。したがって、物価の地域差はもちろん、物価との関連で生産量や賃金についても地域差を論じることは、今後の大きな課題のひとつであると言ってよいであろう。

第3の課題は、多変数間の相互依存の問題である。I節の研究史に関

する叙述では、もっぱら便宜のために、物価・賃金・生産および地域差を個々別々に取り上げた。しかし、近世マクロ経済史を真に分析叙述しようという段になれば、生産や物価を個別に分析するだけにとどまらず、なんとかして多変数間の相互依存関係を視野におさめなければならないであろう。そうすることによって、歴史のダイナミクスを理解するという点で、多少の進歩が見込めるのではないだろうか。

ある戦略的に重要な地域で、残されているかもしれない一次史料をなんとかして発掘解読し、生産量の代理変数としての米の長期にわたる反収時系列を整備したとする。その結果、米反収量の趨勢的上昇や循環的変動が観察されたとしよう。研究史は、このような問題について、かならずしも豊かであるとは言えないから、上記観察事実は、ひとまず多少の意味があるということになる。そこでつぎにこの反収時系列を、もうひとつのやはり戦略的に重要な地域における反収時系列と比較してみることにする。その結果、さらに新たな観察事実が得られたとすれば、これもやはり意味のあることと思われる。

しかし以上のことは、地域差の問題を別にすれば、あくまで一変数の世界にすぎず、この程度ではとうてい知的関心を惹くものであるとは言えないであろう。

反収時系列にかかわる変数としては、当然米価（物価）の時系列を取り上げなければならない。反収と米価を関係させる、あるいは一般に多変数間の相互依存関係を検討することによって、われわれのマクロ経済史研究はにわかに色彩を帯びてくると言ってよいであろう。この場合でいえば、反収と米価（物価）は、短期循環的には逆に相関していたとか、あるいは反収と農工間相対価格とが、やはり逆に相関していたとかいった自明とはいえない興味ある事実を観察することができるのである。

しかしまだ十分とはいえないであろう。個別商品価格、一般物価水準、相対価格（農工間相対価格）そして反当収量といった変数相互の関係が明らかになったとしても、それはあくまで生産物市場を扱ったにすぎないからである。つまりこれでは、新古典派の同時決定モデル、あるいは一般均衡モデルを持ち出すまでもなく、もうひとつの市場、すなわち要素市場の観察が抜け落ちてしまっているのである。

そこでわれわれは、賃金や肥料価格といった要素価格の時系列を観察し、これを生産物市場における生産や物価と結びつるという段階に達する。その結果、反当収量と実質賃金は正に相関したとか、あるいは農業における費用圧力はさほどではなかったとかいった驚くべき事実が観察されるとしたら、素晴らしいことではないだろうか。

じつは、まだこれでも十分とは言えないであろう。生産物市場と要素市場との相互依存関係に加えて貨幣市場を組み込まなければならないし、また、技術や制度の問題も無論重要である。しかしわれわれとしては、とりあえず生産物市場と要素市場との相互依存関係に重点をおきながら、多変数間の相互依存という複雑きわまる問題を、なんとかして追求することとしたい。そして、この格闘のなかから、たとえば農業部門から工業部門への労働の移動や、あるいは複数の地域（中央と地方、関西と関東といった）における経済発展の相違が、いきいきと浮かび上がってくることをひそかに期待している。

とはいうものの、急いでつけ加えておきたいのはつぎの点である。もし要素市場を本格的に取扱おうとすれば、土地、労働、資本、肥料といった生産要素の賦存量（耕地面積、人口、資本や肥料のストック等）あるいは賦存比率の変化、またこれら生産要素の価格すなわち地代、賃金、利子、肥料価格とその変動といったものを一通り検討しなければならな

いであろう。しかし、本研究では種々の制約から、要素市場といってもせいぜい賃金や肥料の問題を分析したにすぎないという点をお断りしておきたい。

第4の課題は、やや技術的になるが、趨勢と循環、あるいは長期、中期、短期といった、いわば時系列の区切り方についての問題である。たとえば、長期趨勢の観点から、近世中後期およそ一世紀半にわたる米価時系列を観察すれば、それは明らかに上昇傾向にあったといえよう。一方で、われわれは移動平均法をもちいるなどして、米価系列の峰と谷を識別し、その上昇局面と下降局面を特定することによって、米価の短期循環的変動を見いだすことができよう。たとえ米価一本であっても、このような作業には十分意味があると思われる。したがって、時系列の観察にあたっては、長期的趨勢と短期的循環⁴⁹⁾をできるだけ区別し、しかも両者について十分な検討を行なわなければならないであろう。

時系列が複数になると、新たな興味ある問題が生じる。近世中後期およそ一世紀半にわたる玄米反当収量（播州）の時系列を見ると、この場合も長期趨勢は上昇傾向にあったと考えられる。したがって、さきの米価とは正に相関したことになる。ところが、反当収量の場合も当然短期循環的変動が観察されるから、これを米価の短期循環と比較すると、こんどはおおむね負に相関しているのである。すなわち、2変数の相関は、長期的にみるか短期的にみるかで、もちろん同じ場合もあるが、いまみたように異なる場合も生じるのである。ここまで来ると、趨勢と循環、長期と短期を区別することの重要性は明らかであると思われる。これまでの物価史研究で、この点が不十分だったというわけではないが、しかしわれわれとしては、この問題をもうすこし意識化することを課題としたい。

さて、このあたりで本研究の構成について簡単に述べておくこととしたい。繰り返し述べたように、本研究で中心にすえた問題は、地域差（とりわけ物価の地域差）である。そこでまず、1章と2章では、さきの三井家新旧データに全面的に依拠しながら、京都と江戸といういわば中央市場同士の比較を行なうこととした。

1章では、京都における消費者物価指数の動向を一瞥したのち、建築労働者や日雇労働者の賃金（要素価格）を取り上げ、実質賃金や賃金格差の動向を観察検討している。2章では、江戸における物価と賃金を取り上げ、賃金を中心に京都と江戸との対比を試みている。

ところで、周知の通り、中央市場大阪における物価については、これまでに十分な研究が行なわれている。したがって、本研究では京都物価を取り扱うことにした。が、一般的に言って、京都と大阪で、物価動向に大きな差はなかったと考えてよいであろう。

つぎに、3章と4章では、主として新しい物価史料をもちいることで、地方市場（播州）と中央市場（大阪および江戸）における物価や生産の地域差を論じている。

3章は、播州加古郡野添村文書を素材として、物価データを中心に、生産データ（反当収量）および要素価格（干鰯価格）データの時系列が観察検討され、かつこれらの変数が緊密に結びつけられている。同時に生産の地域差（播州対関東）についても触れている。4章は、播州と大阪における物価（米と綿）の地域差、および豊凶と年貢減免の関係が分析されている。続く付論では、3、4章でもちいた新しい物価史料の紹介と解題が行なわれ、付録として新史料の翻刻をつけている。

つぎに、5章と6章は、やはり地方市場（越前）と中央市場（大阪）

における物価（米価）の地域差をとりあげている。

すなわち5、6章は、新しい米価史料を中心にして越前勝山米価の動向を論じ、さらにはこれを大阪米価との対比において検討している。5章は近世後期にかんするものであるが、6章は本研究では唯一、近代移行期および明治、大正期を扱っている。というのも、われわれは地域差の存在だけでなく、その解消の過程についても分析する必要があると考えたからである。地域差の解消を見届けたうえで、振り返って、近世においてしだいに発展する市場経済が、どの程度のものではあったかを推し量ることができるのではないだろうか。

最後に7、8章は、地方市場（越前）内部における物価（米価）の地域差について検討している。もっともこの場合、地方市場内部の米価を直接比較するだけでなく、共通の尺度としてつねに大阪米価を基準にしている。

すなわち7章は、福井米価を中心に勝山米価や大阪米価との比較を行なっている。また8章では、まず、福井米価を素材として、換算米価（切米値段）の動向と実勢米価のそれとの比較検討を行なっている。ついで、福井における貨幣相場データを利用して、福井と大阪における米価の地域差をさらに詳細に検討している。

以上8章のあとには、結章「近世の市場経済と地域差」を配置している。結章は本研究の一応のまとめではあるが、同時に本研究でとりあげたすべての素材についての有機的連関を意図し、本格的な議論を試みたものである。

さて、以下ではデータの加工やコンピュータの利用といった二三の技術的側面について簡単に述べておくこととしよう。

史料に残された数量データの集まりは、そのままではなにも語ってくるところはないであろう。したがって、史料が多くの場合本来もっている意味のあるゆたかな内容を、なんとかして明るみに出す努力をしなければならぬ。そのためには、まず収集されたデータの秩序だった整理と加工がぜひとも必要である。

本研究でもちいた統計計算はごく簡単なものである。物価指数の作成、移動平均法、変動係数や相関係数（および残差相関係数）の計算、最小2乗法といったものが中心である。しかし一二の新しい工夫も行なっている。たとえば、のちにも述べるように変動係数や相関係数を期間ごとに比較するのではなく、「5ヵ年移動変動係数」や「5ヵ年移動相関係数」といったかたちで、もっと連続的に比較できるようにしている。後掲、図2-4および図2-5はそのような例である。われわれはこういった統計量を工夫することで、そうでない場合よりもはるかに多くの興味ある事実を観察することができたと考えている。

本研究ではデータ加工のプロセスあるいはグラフ化について、できるだけ詳細な説明を付けている。また今回、各章末に付表として、本研究でもちいたほとんどすべてのデータを、新たに収録することとした。既発表拙稿は、多くの場合紙幅の制約がきびしく、この面で十分なものとはいえなかったからである。もっとも付表は、原則として各章において初出のデータのみ順に掲げているので、それぞれの章だけで完結したかたちにはなっていない。場合によって前の章の付表を参照していただく必要があるかと思われる。もってたとされたい。

われわれのように数量データの操作を不可欠とする研究においては、データの資料出所を明示することはもちろん、加工のプロセスについても詳しく記述する必要があるのではないだろうか。記述がなければ、あ

るいは不完全であれば、他の研究者による追認が不可能になってしまうからである。⁵⁰⁾

データ処理の実際についてもすこし述べておきたいと思う。本研究における計算およびグラフ化の作業等は、すべてパソコンによっている。言語は、MS-DOS版N88-日本語BASIC、Ver6・0である。

われわれは、一次史料あるいはその他の資料から得られた数量データを入力して、はじめにいわゆるデータベースを作成した。ついで、さきに述べた移動平均値、変動係数、相関係数、最小2乗回帰値といったさまざまの統計諸量を計算した。そののち、これら各種時系列をグラフ化した。グラフ化に際しては各種時系列の峰と谷を識別するために、いわゆる極値を見つけるといったことも必要であった。

また、本研究章末の付表は、すべて計算結果を直接出力したもので、転記あるいは再入力したものではない。このようにすることで、可能な限り正確な統計表を作成しようと考えたのである。

うえに述べたすべての作業は、プログラミングによった。が、ほかの方法、いわゆる表計算ソフトをもちいることもできた。表計算ソフトはデータベースの作成、統計計算、グラフ化が本領で、まさにわれわれの待望久しかった道具であると思われる。しかし、表計算ソフトにはいくつかの点で、ややなじめないものがあるように感ぜられ、結局本研究ではこれをもちいかなかった。⁵¹⁾

おわりに

なお本研究は、筆者がこれまでに発表してきたモノグラフを中心にして成ったものである。もっともさきに述べたように、今回新たに各章末

に付表として、本研究でもちいたほとんどすべてのデータを収録したし、また、付録として史料の翻刻をつけている。その点とこの序章を別とすれば、残りはおおむね旧稿を再編成したものである。

が、今回旧稿を再録するにあたっては、全体に大幅な変更を行なっている。当然のことながら、近年における物価史関連の研究成果に言及したことがあるし、また、本文や図表の追加や削除、あるいは組み替えや再配置を行なっている。しかし、データおよびデータの加工、ファクトファインディングおよびその解釈といった点については、ほとんど変更していないつもりである。

ちなみに本研究各章と既発表拙稿との対応を示せば、おおむね下記のとおりである。

序章 今回新たに書き下ろしたもの。

1章 「徳川後期における生産物価格の変動 — 京都小売物価を中心に — 」『六甲台論集』20巻3号（1973年）、「江戸後期における生産物市場 — 京都小売物価を中心に — 」『福井県立短期大学研究紀要』10号（1985年）、「近世後期における生産物市場と要素市場 — 京都小売物価と賃金を中心に — 」（神木哲男・松浦昭編著『近代移行期における経済発展』（同文館、1987年）所収）、「江戸後期における賃金の変動 — 三井家新データの検討を中心に — 」『福井県立短期大学研究紀要』16号（1991年）。

2章 前掲「江戸後期における賃金の変動」、「江戸末期（文政～幕末期）における賃金の地域差 — 京都対江戸 — 」『福井県立短期大学研究紀要』17号（1992年）。

3章 「江戸中後期における物価と農産物の反当収量 — 播州加古郡

野添村「御月見日記」解題 ― 『福井県立短期大学研究紀要』15号（1990年）、「江戸中後期における生産物価格の変動と反収および肥料価格の時系列 ― 新しい物価史料の分析を中心に ― 』『社会経済史学』58巻2号（1992年）。

4章 「近世中後期播州物価についての二三の覚え書き」『福井県立短期大学研究紀要』18号（1993年）。

付論 前掲「江戸中後期における物価と農産物の反当収量」、および一部書き下ろし。

付録 今回新たに翻刻したもの。

5章 「江戸後期における米価の地域差 ― 越前勝山と大阪 ― 』『福井県立短期大学研究紀要』8号（1983年）。

6章 「移行期における米価変動と地域差 ― 勝山と大阪1781～1915年 ― 』『福井県立短期大学研究紀要』12号（1987年）。

7章 「江戸後期における米価 ― 越前と大阪 ― 』『福井県立短期大学研究紀要』9号（1984年）。

8章 「近世後期越前米価についての二三の覚え書き」『福井県立短期大学研究紀要』14号（1989年）。

結章 前掲「徳川後期における生産物価格の変動」、同「江戸後期における生産物市場」、同「近世後期における生産物市場と要素市場」、「近世市場経済の変動と構造 ― 生産・物価・賃金および地域差 ― 』『福井県立大学論集』3号（1994年）、および一部書き下ろし。

注

- 1) 竹岡敬温『近代フランス物価史序説 ― 価格革命の研究 ― 』（創文社、1974年）。
- 2) 新保博『近世の物価と経済発展 ― 前工業化社会への数量的接近 ― 』（東洋経済新報社、1978年）。
- 3) 岩橋勝『近世日本物価史の研究 ― 近世米価の構造と変動 ― 』（大原新生社、1981年）。
- 4) 山崎隆三『近世物価史研究』（塙書房、1983年）。
- 5) 原田敏丸・宮本又郎編著『歴史のなかの物価』（同文館、1985年）。
- 6) 三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』〔増補改訂〕（東京大学出版会、1989年）。
- 7) 樋口知子「三井大坂両替店物価関係資料」『三井文庫論叢』24号（1990年）。
- 8) 三井文庫（中井信彦）編『近世後期における主要物価の動態』（日本学術振興会、1952年）。
- 9) 宮本又郎『近世日本の市場経済 ― 大坂米市場分析 ― 』（有斐閣、1988年）。
- 10) 加藤慶一郎「近世中後期大坂における米穀流通機能の変質過程 ― 堂島帳合米商内のヘッジ機能を中心にして ― 」『社会経済史学』58巻2号（1992年）。
- 11) 長谷川彰『近世特産物流通史論 ― 龍野醤油と幕藩制市場 ― 』（柏書房、1993年）、3章。
- 12) 宮本又郎「物価とマクロ経済の変動」（新保博・斎藤修編『日本経済史2 近代成長の胎動』（岩波書店、1989年）所収）。
- 13) 有田富美子・中村隆英「東京における卸売物価指数の一推計：1830－1936年」『東洋英和女学院大学人文・社会科学論集』5号（1

992年)。

- 14) 岩橋勝「近代移行期名古屋物価の動き；1830～79年 — 京阪物価との比較を中心として — 」『大阪大学経済学』42巻3・4合併号（1993年3月）、同「日本の物価変動；1620－1984 — 景気循環の長期波動を求めて — 」『松山大学論集』5巻3号（1993年8月）。なお、さかのぼってつぎの二稿も公にされている。同「広域濃尾地方圏の物価変動 1756－1867 — 刈谷物価を中心として」『松山商大論集』39巻2号（1988年）、および同「地方経済構造の地理学 — 「広域濃尾地方圏の分析」」（前掲『日本経済史 2 近代成長の胎動』所収）。
- 15) 田中喜男『近世産物政策史の研究』（文献出版、1986年）。
- 16) 土肥鑑高『近世物価政策の展開』（雄山閣出版、1987年）。
- 17) 宮本又郎「近世物価史：成果と問題点」（尾高煌之助・山本有造編『数量経済史論集 4 幕末・明治の日本経済』（日本経済新聞社、1988年）所収）。
- 18) 尾高煌之助「空白の四半世紀へ」（前掲『数量経済史論集 4 幕末・明治の日本経済』所収）。
- 19) 速水融・宮本又郎「概説 一七 — 一八世紀」（速水融・宮本又郎編『日本経済史 1 経済社会の成立 17－18世紀』（岩波書店、1988年）所収）。
- 20) 新保博・斎藤修「概説 一九世紀へ」（前掲『日本経済史 2 近代成長の胎動』所収）。
- 21) 広い意味で数量経済史に関連する文献ということになると、まだまだ多くのものに言及しなければならない。が、さしあたり最近10年ぐらいのあいだに刊行されたものとして、下記の文献をあげ

ておくこととしたい。斎藤修『プロト工業化の時代 — 西欧と日本の比較史 — 』（日本評論社、1985年）、西川俊作『日本経済の成長史』（東洋経済新報社、1985年）、穂本洋哉『前工業化時代の経済 — 「防長風土注進案」による数量的接近 — 』（ミネルヴァ書房、1987年）、竹岡敬温『「アナル」学派と社会史 — 「新しい歴史」へ向かって — 』（同文館、1990年）。

- 22) 植村正治『近世農村における市場経済の展開』（同文館、1986年）、第Ⅱ部 讃岐農村。
- 23) 同上、第Ⅰ部 播磨農村。
- 24) 青木美智子「近世の関東畑作農村における雇傭労働の変質過程 — 武州平山村・斎藤家の年期・日雇奉公人を中心に — 」『社会経済史学』51巻4号（1985年）。
- 25) 鈴木ゆり子「醤油製造業における雇用労働」（林玲子編『醤油製造業史の研究』（吉川弘文館、1990年）所収）。
- 26) 斎藤修「幕末－明治の賃金変動再考」『経済研究』44巻4号（1993年）。なお、さかのぼってつぎの論稿も公にされている。同「江戸市中のサービス業賃金：1775－1871年」『日本歴史』430号（1984年）。
- 27) 佐野陽子「建築労働者の実質賃金 — 1830～1894年 — 」『三田学会雑誌』55巻11号（1962年）。
- 28) 前掲植村『近世農村における市場経済の展開』。
- 29) もっとも、ごく最近になってつぎの論稿が公にされた。山崎隆三「幕末・明治初年西撰の中農経営と農産物・肥料価格」『名城商学』43巻4号（1994年）。
- 30) 中村哲『明治維新の基礎構造』（未来社、1968年）、169～170ペ

ージ。

- 31) 前掲「概説 一七 — 一八世紀」、44ページ。
- 32) 岸英次『関谷家稲刈覚帳の研究 — 一農家における文化七年以降の水田生産力の変遷 — 』（農林省農業総合研究所、1947年）、69～72ページ。なお、梅村又次「徳川時代の人口趨勢とその規制要因」『経済研究』16巻2号（1965年）、143ページにはこのデータが使われている。
- 33) 今井林太郎・八木哲浩『封建社会の農村構造』（有斐閣、1955年）、105ページ。
- 34) 山崎隆三『地主制成立期の農業構造』（青木書店、1961年）、152ページ。同「江戸後期における農村経済の発展と農民層分解」（岩波講座『日本歴史12 近世4』（岩波書店、1963年）所収）、338ページ、第8・1表。
- 35) 佐藤常雄『日本稲作の展開と構造 — 坪刈帳の史的分析 — 』（吉川弘文館、1987年）、5 - 1表 坪刈帳の平均一坪初収量（巻末折込）。
- 36) 古島敏雄「商品流通の発展と領主経済」（前掲『日本歴史12 近世4』所収）、78～79ページ。第2・1図 享保1 - 天保12年幕府直轄領の年貢収納総額（米換算）・収納率と大坂卸売米価格の変遷。同『近世経済史の基礎過程 — 年貢収奪と共同体 — 』（岩波書店、1978年）、266～267ページ。
- 37) 前掲植村『近世農村における市場経済の展開』、151～158ページ。
- 38) 前掲宮本「物価とマクロ経済の変動」、75ページの図2 - 2。なお出所は、細川藩政史研究会編『熊本藩年表稿』（1974年）。
- 39) 新保博「江戸の物価変動，1830 - 67年 — 大阪との対比において

- 」『国民経済雑誌』142巻6号（1980年）、同「幕末期における江戸の物価水準 — 大阪との比較において —」『国民経済雑誌』145巻5号（1982年5月）、同「幕末期における江戸と大阪の物価水準 — 農林産物価格・工産物価格・農工間相対価格をめぐって —」『国民経済雑誌』145巻6号（1982年6月）、同「江戸末期（文政～幕末・維新时期）における物価動向と経済発展」（前掲原田・宮本編著『歴史のなかの物価』所収）、同「幕末期における江戸と大阪の物価 — 個別商品価格を中心にして —」『国民経済雑誌』153巻3号（1986年）。なお、賃金の地域差（上方と江戸）をあつかった研究は、管見によれば、前掲新保「江戸の物価変動、1830-67年 — 大阪との対比において —」、16～19ページのみである。もっともここで分析の対象とされたのは大工賃金である。
- 40) 前掲長谷川『近世特産物流通史論』、3章。
- 41) 前掲岩橋「近代移行期名古屋物価の動き；1830～79年」。
- 42) 新保博「江戸後期における全国市場の構造 — 物価史からの一接近 —」『中京大学経済学論叢』2号（1989年）。なお、さかのぼって新保博・長谷川彰「商品生産・流通のダイナミックス」（前掲『日本経済史1 経済社会の成立 17-18世紀』所収）、253ページ、および、前掲「概説 一九世紀へ」、46～48ページ。
- 43) 鶴岡美枝子「近世米穀取引市場としての大津」『史料館研究紀要』5号（1972年）、114～207ページ。
- 44) 宮本又郎「幕末明治初期京都の物価変動について；1830～79年 — 大阪との比較において —」『大阪大学経済学』30巻2・3合併号（1981年）、168ページ。
- 45) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、225～272ページ、293～299

ページ。

- 46) 前掲山崎『近世物価史研究』、391ページ。
- 47) 天野雅敏『阿波藍経済史研究 — 近代移行期の産業と経済発展 — 』（吉川弘文館、1986年）、138～139ページ。また、同「幕末明治前期の地方産業と商業経営」（前掲『数量経済史論集4 幕末・明治の日本経済』所収）、89ページ。
- 48) 明石茂生「近世後期経済における貨幣、物価、成長：1725－1856」『経済研究』40巻1号（1989年）。
- 49) もっとも本研究では中期という言葉をもちいなかったのので、ここで言う短期的循環とは、多くの場合、いわば中期、たとえば（形式的な意味においてではあるが）20年前後のクズネッツ循環、あるいはもっと長い循環のことを指している。
- 50) 安場保吉「“新しい経済史”：革新と偏向」（梅村又次・新保博・西川俊作・速水融編『数量経済史論集1 日本経済の発展 — 近世から近代へ — 』（日本経済新聞社、1976年）所収）、365ページを参考にした。
- 51) 以下は一家言にすぎないであろう。しかし一応書きとめておくこととしたい。すなわち、表計算ソフトは一般にデータの入力が面倒ではないだろうか。またグラフの出力も、制約（たとえば一枚のグラフには6本しか折れ線グラフが描けないといったような）が多すぎて、目指すものはなかなか描けないのではなかろうか。さらにもっと大きな問題は、たとえば演算プロセスの一覧可能な記録が残らないという点であるように思われる。もとのデータから出発して数回の統計操作をほどこし、最終的な系列を得たような場合、プログラムであれば、一二年経過したあとでも正確に追

32字×25行＝800字

跡できるが、表計算ソフトの場合は容易ではないように思われる。もっとも、たとえばマクロ機能を使うこともできる。しかしそれは、ほとんどプログラミングといってさしつかえないものではないだろうか。結局当然のことながら、表計算ソフトの簡便さは、うえに述べたような問題点と引き替えなのであろう。

第1章 京都における物価と賃金の変動

— 三井家新データの検討を中心に —

はじめに

本章では、三井家新データ¹⁾をもちいて、一般物価²⁾との関連で、近世後期京都における賃金変動および賃金格差を観察し、のちの章で、近世後期における労働市場の構造と変動について、若干の解釈を試みる際の準備としたい。

ところで、のちにⅡ節で詳しくみるように、三井家新データには、旧データ³⁾にはあった大工、左官といった熟練労働の賃金が、掲げられていない。そこでまず、Ⅰ節では、あえて旧データに依拠して、建築労働者の賃金変動を中心に、簡単な観察と分析を行なっておくこととしたい。もっとも、旧データに拠った京都建築労働者および日雇の系列については、すでに簡単な実質賃金推計の試みが存在する⁴⁾。したがってここでは、京都建築労働者および日雇の系列について、実質賃金趨勢のみならず、両者の賃金格差および波動的遅れの問題などについても検討を試みることにしたい。

そして、Ⅱ節では、日雇労働者の賃金変動を、建築労働者の賃金変動との対比で、詳細に論じることとする。

Ⅰ 建築労働者賃金の変動

(1) 資料と加工

ここでもちいた資料は、『近世後期における主要物價の動態』（旧データ）に収録されたもののうち、第2部（3）「宝永7年より明治4年に至る京都・江戸日用品小売物価並賃銀表」である。本節では、さらにこのうち京都小売物価および賃金に限定して検討を行なうこととした。資料「宝永7年より明治4年に至る京都・江戸日用品小売物価並賃銀表」に記載されている諸価格および賃金は、『近世後期における主要物價の動態』に付せられた解題によれば、「京都及び江戸における日用品の小売物価を越後屋呉服店の購入価格によって示したものである」。また、「原典には白米、味噌、塩、醤油、酒、茶、煙草、燈油の九品が記載されているが、本表では酢、茶、煙草は省略した」（原文のまま）と述べられている。さらに、「消費物品の物価と対象するため、賃金を追加した。……これも越後屋が実際に雇入れて支払った実際の額である⁵⁾」という。

われわれは、近世後期京都における、一般的物価変動を知るために、あるいは、要素価格たる賃金を実質化するためのデフレーターを得るためにも、米、味噌、塩、醤油、酒、灯油の6品目の価格データをもとにして、いわゆる消費者物価指数を作成しなければならない。

「京都・江戸日用品小売物価並賃銀表」には、ある年について上記6品目の価格が、通常春秋ごとに記載されているので、春秋平均をもってその年の価格としたけれども、しばしば春秋いずれかの価格に欠落があり、この場合には記載のある方の価格をもってその年の価格とした。

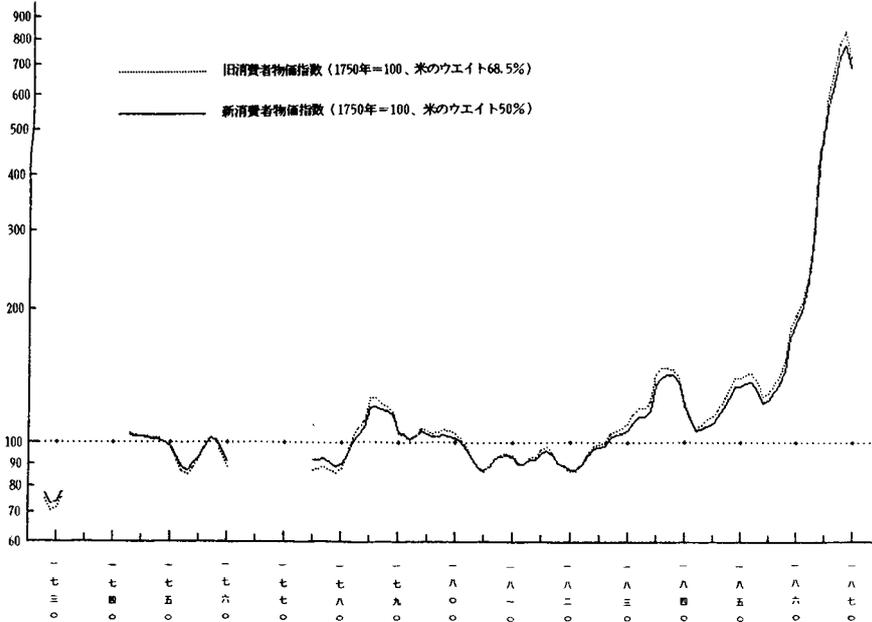
味噌は1貫につき銀匁で表示されるのが普通であるが、享保・元文期に1石につき銀匁で表示されている場合があり、これは1石＝40貫として換算した。同様にして、塩は1石につき銀匁で表示されるのが普通であるが、しばしば1俵につき銀匁で表示されている場合があり、これも1俵＝3斗2升として換算した⁶⁾。なお、塩は欠年が多く、また解題によれば、やや異種のデータも含まれているようである⁷⁾。

さて、消費者物価指数を作成するためには、かくて得られた6品目各年ごとの価格を基準年＝100として指数化し、しかるのち、適当な重みをつけて平均しなければならない。ここでは、6品目の価格および賃金に資料上の欠落がないこと、および、基準年の前後で価格変動が比較的穏やかであることなどの観点から、1750（寛延3）年を基準年とした。

本章では米のウエイトを50%にしている。新保博氏は、京都消費者物価指数の作成にあたり、暫定的に米に30.0の重みをあたえているが（他は等ウエイト）、「米のウエイトは30.0よりも大きくなるはずである」と述べている⁸⁾。また、同氏の「徳川後期の物価水準」においても京都消費者物価指数が算定されているが、そこでは米に50パーセントのウエイトがあたえられている（他は等ウエイト）⁹⁾。

本節では米以外の5品目、すなわち、味噌、塩、醤油、酒、灯油の各ウエイトは、とりあえず、『長期経済統計―物価』に収録された「品目別ウエイト、1879～1893年」¹⁰⁾にもとづき、味噌1.300、塩0.256、醤油3.698、酒3.849、灯油1.680とした。したがって品目ごとのウエイトは、結局、米50.0%、味噌6.0%、塩1.2%、醤油17.1%、酒17.9%、灯油7.8%となった。しかし、年によっては、いくつかの品目に資料上の欠落があり、この場合には結果的に上記品目別ウエイトが異なることとなった。また、ここでの品目別ウエイトは明治期のものであり、これを固定ウエ

図1-1 新旧消費者物価指数の比較（5ヵ年移動平均）



イトとして近世後期に適用したという点で、ここで作成した消費者物価指数は限定を受けることとなろう。このような手続きを経て作成された1750年=100とする消費者物価指数の系列は、5ヵ年移動平均をとったうえで、図1-2下段にグラフ化されている（半対数目盛）。

ところで、われわれは旧稿¹¹⁾において、同じ消費者物価指数を、米のウェイトを68.5%（約70%）にして計算したことがある。この場合と、本章のように、米のウェイトを50%にした場合とで、消費者物価指数の動きは、いったいどの程度異なるであろうか。図1-1は、この点を明らかにするために作成したものである。点線で描かれているのが、旧消費者物価指数（米のウェイト68.5%）で、実線が新消費者物価指数（米のウェイト50%）を表わしている（1750年=100、5ヵ年移動平均、半対数目盛）。

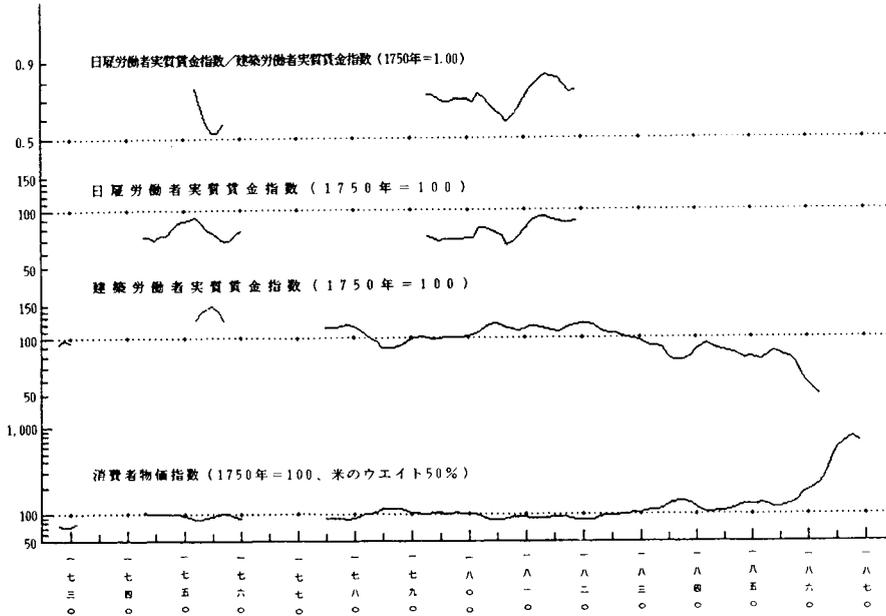
結論をさきにいえば、新消費者物価指数の系列は、旧消費者物価指数のそれと、ほとんど異なるところはないといえる。しかし、あえていえば、新消費者物価指数は旧消費者物価指数に比べて、波動のピークの水準はやや低く、波動の谷の水準はやや高い。いかえれば、新消費者物価指数の振幅はやや小さいことがわかる。このことの理由はむずかしくない。一般に米価は、他の物価に比べて波動の振幅が大きい。しかるに新消費者物価指数においては、この米のウェイトが小さくされているので、物価全体の振幅も小さくならざるをえないというわけである。

なるほどそうではあるが、しかし、両者はほとんど平行に動いているから、どちらの系列を選んだとしても、分析結果に、さほど大きな相違が生じるとは思えない（もっとも、相対価格系列の動きなどには、観察結果に多少の相違が生じる）。そういう事情であるから、ウェイトの問題に、いたずらに拘泥することは、あまり実際的とはいえないであらう。

さて、残る系列は、要素価格たる賃金に関するものである。まず、図1-2中段には建築労働者の実質賃金指数がグラフ化されている。ここでいう建築労働者とは大工および左官のことである。「京都・江戸日用品小売物価並賃銀表」には、畳屋、屋根屋その他の賃金についても若干の記載がみられるが、ここでは、できるだけ長期の時系列が得られること、また経済的重要性などを考慮して、職種を大工および左官に限ることとした。

加工にあたっては、まず大工および左官の貨幣賃金を1750年＝100として指数化し、しかるのち両者を加重平均した¹²⁾。加重に際してのウェイトは、前掲『長期経済統計—物価』に依拠し¹³⁾、大工81.8%、左官18.2%としたが、これも近代におけるウェイトを、近世後期に固定ウェイトと

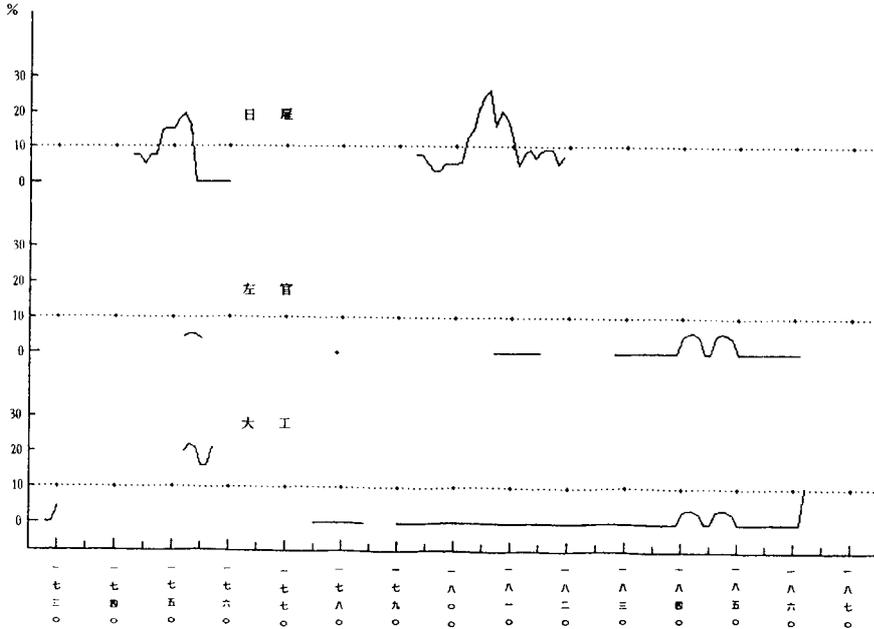
図1-2 京都における物価と賃金の変動(旧データ、5ヵ年移動平均)



してもちいたもので、暫定的なものにすぎないであろう。以上の手続きを経たのち、建築労働者の貨幣賃金指数を、さきに作成した消費者物価指数（図1-2下段、1750年＝100、米のウエイト50%、5ヵ年移動平均、半対数目盛）で除して100倍したものが、建築労働者の実質賃金指数であり、グラフ化に際しては5ヵ年移動平均をとっている（半対数目盛）。

つぎに、図1-2上段には、日雇労働者の実質賃金指数がグラフ化されている。「京都・江戸日用品小売物価並賃銀表」には、限られた期間についてではあるが、春秋ごとに日雇賃金の記載がみられる。問題となるのは、労働の質、すなわち日雇の種類とか形態であるが、資料の性格上この点について知ることはできない¹⁴⁾。加工にあたっては、春秋平均をもってその年の日雇賃金としたが、春秋いずれかについて記載を欠く場合には、記載のある方をもって当該年の日雇賃金とした。この系列の場

図1-3 大工、左官、日雇貨幣賃金の「5ヵ年移動変動係数」



合も、まず、1750年 = 100とした貨幣賃金指数を作成し、これを年ごとに、さきの消費者物価指数で除して100倍したものを、その年の日雇労働者実質賃金指数とし、グラフ化に際しては5ヵ年移動平均をとった（半対数目盛）。

さらに、図1-2最上段には、日雇労働者実質賃金指数の建築労働者実質賃金指数に対する比（日雇労働者実質賃金指数 / 建築労働者実質賃金指数）がグラフ化されている（1750年 = 1.00、5ヵ年移動平均、普通目盛）。

さて、図1-3は、大工、左官、日雇について貨幣賃金の5年期ごとの変動係数を図示したものである。変動係数は、いくつかの変量について、標準偏差が平均の何パーセントにあたるかというかたちで定式化される。グラフ化に際しては、1726年から1730年の5年間の変動係数を17

28年にドットするというふうに、いわば「5ヵ年移動変動係数」とでも呼べるようなかたちで処理されている。本研究で頻繁に変動係数をもちいたのは、このタームをたんに変動の激しさを表わす目安にしようというにすぎない。変動係数をもちいることによって、大工、左官、日雇の賃金系列が、実際にどの程度の幅で変動していたか、あるいは変動しなかったかが明らかとなる。

従来、変動係数は、長期の時系列に適用する場合には、「期間変動係数比較」のような形でもちいられることが多かった。すなわち時系列をたとえば20年ごとに区切って、20年ごとに変動係数を算出し、相互に比較するという方法がとられた。この方法によると、期間の区切り方に恣意性が残るということも、標準偏差の計算において変量の順序はまったく任意でよいということから生じる避けがたい問題に逢着する。たとえば、はじめの10年間に変動が激しく、つぎの10年間は安定的であった場合と、その逆の場合とが、まったく同様に扱われるというような問題が生じる。そこでこれらの問題を、できるだけ回避するために、「5ヵ年移動変動係数」とでも呼べるようなものを工夫し、期間の区切り方についての恣意性をなくし、順序交換可能性から生じる問題をなるべく小さくするように配慮したのである。

以上で資料および加工の手続きについての説明を終えたので、以下でこれらをもとにして検討をすすめることとしたい。

(2) ファクト・ファインディングス

図1-3によれば、大工、左官の貨幣賃金の変動は極端に小さく、日雇のそれはかなりの大きさであったことが明らかである。とりわけ、大工の貨幣賃金は、1773（安永2）年から1841（天保12）年まで、約70年

間にわたって不変であった。¹⁶⁾ このことの理由としては、さしあたり、つぎのような点を指摘することができよう。すなわち、大工、左官のような職種はいわば熟練労働であり、また徒弟制の存在にみられるような閉鎖的性格をもっていたので、賃金決定のメカニズムは、相当程度管理されていたと考えることができる。¹⁷⁾

これとは対照的に、日雇の貨幣賃金の変動は、かなりの大きさであった。このことは、斎藤修氏による西摂農村日雇賃金指数の変動についてもほぼ同様である。¹⁸⁾ 日雇の賃金は、建築労働者の場合とは異なって、その賃金決定のメカニズムは、ある程度の自由な競争を前提としていたと考えてよいであろう。

つぎに、図1-2にグラフ化された実質賃金の系列に移ろう。まず、建築労働者の実質賃金指数が、図1-2中段にグラフ化されている。建築労働者の貨幣賃金は、ほぼ固定的であったから、これを消費者物価指数で除した実質賃金指数は、当然のことながら、物価の波動とは逆に動いている。すなわち、建築労働者の実質賃金の変動は、物価の動きとは逆相関の関係にある。

このことを念頭においたうえで、実質賃金の動きを追ってみると、この系列は、享保期（1716～35年）に低い水準にあったが、宝暦期（1751～63年）には高水準となり、その後、1786（天明6）年のボトムに向かって低下した。しかるに、実質賃金は天明期（1781～88年）から上昇の傾向を示し、1820（文政3）年にはピークに達した。けれども、実質賃金は文政期（1818～29年）以降は一貫して下降趨勢をもち、幕末まで、趨勢的には、反騰のきざしはみられなかったといえよう。

さて、図1-2上段には、日雇労働者の実質賃金指数の変動がグラフ化されている。この系列も、建築労働者実質賃金指数の変動と同じく、

物価の波動とは逆に動く傾向が強いが、その逆相関関係は、建築労働者の場合に比べれば、はるかに不明瞭であると考えられる。日雇労働者の実質賃金は、1740（元文5）年ごろから、1760（宝暦10）年ごろにかけては、1752（宝暦2）年のピークを含みながらも、全体として不変の趨勢にあった。その後、1790（寛政2）年ごろから、1820（文政3）年ごろにかけて、実質賃金は顕著な上昇趨勢をもったことが明らかである。なかでも、化政期（1804～29年）の上昇圧力は大きく、1814（文化11）年のピークは宝暦期（1751～63年）の水準を凌いでいることが観察される。

つぎに、賃金格差の問題についてすこし考えてみよう。ここでも19世紀前後に焦点を合わせると、日雇労働者の実質賃金は顕著な上昇趨勢をもったのに対し、建築労働者のそれは微増にとどまった。したがって、日雇労働者実質賃金指数の建築労働者実質賃金指数に対する比（日雇労働者実質賃金指数／建築労働者実質賃金指数、図1－2最上段）は、化政期（1804～29年）を中心にかなりの程度上昇した。換言すれば、日雇労働者と建築労働者の賃金格差はかなりの程度縮小することとなった。

最後に、要素価格における先導性の問題について検討することとした。旧稿で生産物価格の変動を論じた際に、醤油、酒、灯油の価格は、米価に対して波動的遅れをもつことが指摘された。類似の傾向は、要素価格変動についても観察される。図1－2を仔細に観察すると、建築労働者実質賃金の峰および谷の時点は、日雇労働者実質賃金のそれに対して、二三年の遅れを示すことが多い。換言すれば、日雇労働者の実質賃金は、建築労働者の実質賃金を先導していたと考えられる。

たとえば、宝暦期（1751～63年）における日雇労働者実質賃金のピークは、1752（宝暦2）年で、建築労働者実質賃金のそれは1755（宝暦5）

年である。また享和（1801～03年）・文化期（1804～17年）における日雇労働者の最初のピークは、1803（享和3）年で、建築労働者のそれは、1805（文化2）年である。さらに日雇労働者のボトムは1807（文化4）年で、建築労働者のそれは1809（文化6）年である。

ところで、さきに変動係数による分析から、日雇労働者の賃金決定メカニズムは、ある程度の自由な競争を前提としており、一方、建築労働者のそれは相当程度管理されていたと仮定した。ここに述べた日雇労働者実質賃金の建築労働者実質賃金に対する先導性は、あくまで暫定的なものである。しかし、日雇労働者賃金が建築労働者賃金を先導していたとすれば、このことは、うえに述べた仮定を補強するものと考えてさしつかえないと思われる。自由競争的な価格は、管理された価格に比べて、変動が激しく、前者が後者を先導するという傾向は、生産物価格の変動についても観察されたところである²⁰⁾。

II 日雇賃金の変動

―― 建築労働者賃金変動との対比において

(1) 資料と加工

さて、いよいよ三井家新データの分析に取り掛かるわけであるが、その前にまず本節で、新旧両データの相違、および分析のための加工手続きについて述べておかなければならない。

本節でもちいた資料は、『近世後期における主要物価の動態』〔増補改訂〕（以下、新データと呼ぶ）のうち、第6表「京都日用品小売物価表」である。が、以下の行論においても、一部『近世後期における主要物価の動態』（以下、旧データと呼ぶ）に拠ったところがある。新デー

タと旧データとの大小さまざまな異同については、増補改訂版に付された解題に詳しいので、ここでは、本節に直接かかわる二三の点について指摘するにとどめたい。

第一点は、新データにみられる日雇貨幣賃金系列の整備である。旧データに拠るかぎり、1821（文政4）年秋以降、京都における日雇賃金を知ることはできなかった。しかるに新データに拠れば、この年以降、1871（明治4）年にいたるまで、欠年なしに、京都の日雇賃金を知ることができるのである。この点は、賃金資料の乏しい物価史研究の現状に鑑みて、まことに貴重であると言わなければならないであろう。ところで、旧データには京本店の「小遣方用事留」に拠った²¹⁾という大工、左官の賃金が含まれていたが、今回は、はずされている。したがって、本節では、これら建築労働者の賃金については、旧データを利用した。

第二点は、小売物価データについての異同である。旧データに収められていた価格系列は、京都の場合、白米、味噌、塩、醤油、酒、燈油の6品目にすぎなかったが、新データでは、品目数が大幅に増えて、白米、麦、餅米、塩、味噌、醤油、酢、酒、煎茶、上茶、番茶、煙草、堅炭、和炭、火入炭、薪、燈油、蠟燭の18品目となっている。

つぎに、日雇実質賃金系列を得るための、デフレーター（消費者物価指数）の作成過程について書き留めておくこととしよう。まず、さきの18品目それぞれについて、春秋平均をとって各年値とした。資料には、通常、春秋2回価格データが記載されているからであるが、しばしば春秋いずれかの価格を欠いている場合があり、このときは記載のある方の価格をもってその年の価格とした（なおこの点は、日雇貨幣賃金の場合も同様である）。ついで、1818（文政元）年を100として各品目を指数化した。

この過程でいくつかの調整を行なった。1) 麦はデータ数が少なく、基準年(1818年)の価格を欠いているので除外した。2) 塩の価格は、1713(正徳3)年以降、1762(宝暦12)年春までは、1石ニ付銀匁の表示であるが、1791(寛政3)年以降、1俵ニ付銀匁の表示に変更されている。換算することも考えられるが、今回は、1762年春までのデータを除外した。3) 上茶の価格は、1827(文政10)年以降についてしか知ることができない。1818年を基準年としている以上、これも除外するほかはなかった。4) 新データに拠れば、1755(宝暦5)年春、および1832(天保3)年～1871(明治4)年までの時期について、番茶の価格を知ることができる。が、これは煎茶の価格であるという解釈が示されているので、ここでもこれに倣った。5) 煙草の価格は、1713(正徳3)年以降、1806(文化3)年春までは、1斤ニ付銀匁の表示であるが、1806(文化3)年秋以降は、1玉ニ付銀匁の表示に変更されている。この場合も、1806年春までのデータを除外した。6) 堅炭の価格は、1741(寛保元)年以降、1762(宝暦12)年春までは、10貫匁ニ付銀匁の表示であるが、1791(寛政3)年以降は、1俵ニ付銀匁の表示に変更されている。これも、1762(宝暦12)年春までの価格データを除外した。7) 和炭の価格も、1713(正徳3)年以降、1762(宝暦12)年春までは、10貫匁ニ付銀匁の表示であるが、1791(寛政3)年以降は、1俵ニ付銀匁の表示に変更されている。この場合も1762(宝暦12)年春までの価格データを除外した。8) 火入炭は、1791(寛政3)年以降、価格データの記載がみられないのでこれも除外した。9) 蠟燭の価格は、100匁ニ付銀匁の表示であるが、1713(正徳3)年秋のみ1丁ニ付銀匁の表示となっている。したがって、この年の価格データはとらなかった。

さてこのようにしてデータを整えたうえで、消費者物価指数の系列を

得るために、いまや（白米、餅米、塩、味噌、醤油、酢、酒、煎茶、煙草、堅炭、和炭、薪、燈油、蠟燭の）14品目となった各年の個別商品価格指数を、適当な重みをつけて平均しなければならない。ここではさしあたり、前節同様、米に50パーセントのウエイトをあたえ、他は等ウエイトとした。しかし、年によっては、いくつかの品目について、価格データが得られない場合があり、結果的に、ある品目についてのウエイトが、つねに一定というわけにはゆかなかった。以上のようにして算定された系列を京都消費者物価指数(A)（1818年＝100）と呼ぶことにする。

つぎに実質賃金の計測について書き留めておこう。まず京都の日雇貨幣賃金（1人ニ付銀匁）を、1818年を100として指数化した。ついでこの貨幣賃金指数を、京都消費者物価指数(A)で除して100倍することで、京都日雇実質賃金指数(A)（1818年＝100）を算出した。以下、必要と目的に応じて、データに簡単な統計操作をほどこしたり、グラフを作成したりしたが、この点については、のちに、その都度、触れることにしたい。

（2）ファクト・ファインディングス

前節でみたように、われわれは京都における実質賃金の動向にかんして、すでにつぎのような観察事実を得ている。1) 大工、左官貨幣賃金の変動（係数）は極端に小さく、日雇貨幣賃金のそれはかなりの大きさであった。2) 建築労働者実質賃金の変動は、物価の動きと逆相関の関係にある。3) 日雇労働者実質賃金は、1740（元文5）年ごろから、1760（宝暦10）年ごろにかけては、全体として不変の趨勢にあった。その後、1790（寛政2）年ごろから、1820（文政3）年ごろにかけて、実質賃金は顕著な上昇趨勢をもった。4) 日雇労働者実質賃金の建築労働者実質賃金に対する比は、化政期（1804～29年）を中心にかんがりの程度上昇した。

5) 建築労働者実質賃金の峰および谷の時点は、日雇労働者実質賃金のそれに対して、二三年の遅れをしめすことが多い。

さて本節では、新データをもちいて、3)、4)の問題を中心に、新たな検討を行なうこととしたい。

図1-4は、この目的のために作成したものである。下段に実線で描き込まれているのは、京都消費者物価指数(A) (1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛)である。もうひとつの点線で描き込まれているグラフ(1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛)は、前節でもちいた物価指数^{2.2)}である(以下、旧データ京都消費者物価指数と呼ぶ)。両者は、一見して、ほぼ同様に推移しているとみなして差し支えないであろう。中段に描かれているのは、前節でもちいた建築労働者(大工、左官)実質賃金指数^{2.3)}(1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛)である。上段は、実線が、京都日雇実質賃金指数(A) (1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛)、点線は、前節でもちいた京都日雇実質賃金指数^{2.4)}(1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛)のグラフである(以下、旧データ京都日雇実質賃金指数と呼ぶ)。この場合も、両者は、ほぼ同様に推移しているとみなして差し支えないであろう。最上段に描き込まれているのは、(新)日雇労働者貨幣賃金/建築労働者貨幣賃金比^{2.5)}(5ヵ年移動平均、普通目盛)のグラフである。

つぎに図1-5は、貨幣賃金の系列をグラフ化したものである。下段に描き込まれているのは、京都消費者物価指数(A) (図1-4の再掲)である。中段に描かれているのは、建築労働者(大工、左官)貨幣賃金(1人二付銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛)である。上段は、(新)京都日雇貨幣賃金(1人二付銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛)、最上段に描き込まれているのは、(新)日雇労働者貨幣賃金/建築労働者

図1-4 京都における建築労働者と日雇労働者の実質賃金(5ヵ年移動平均)

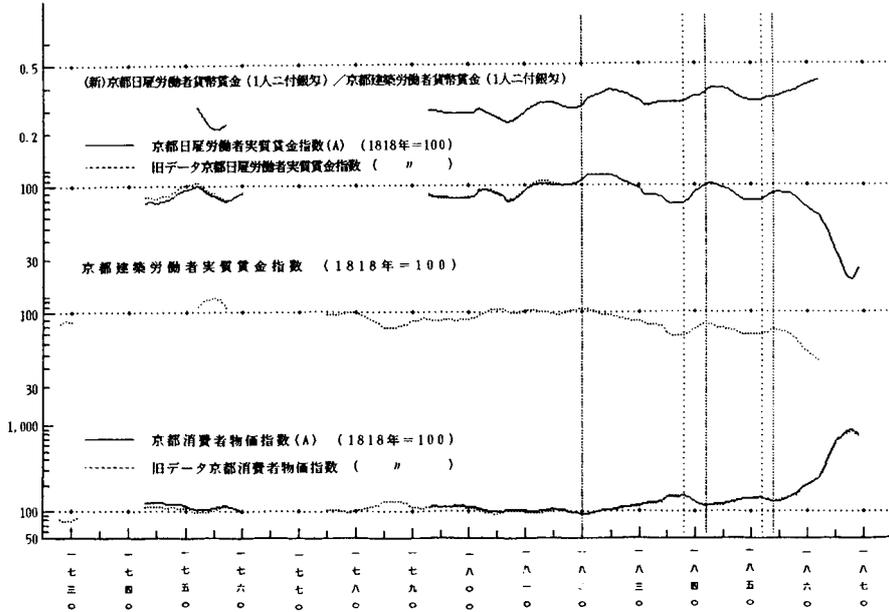
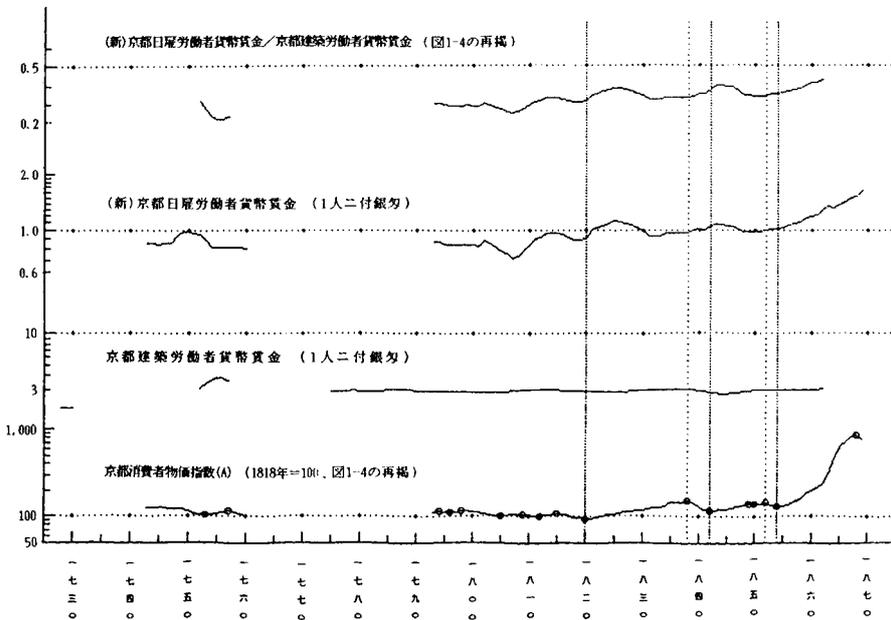


図1-5 京都における建築労働者と日雇労働者の貨幣賃金(5ヵ年移動平均)



貨幣賃金比のグラフ（図1-4の再掲）である。

ところで、図1-4、図1-5には、時期区分を表わす縦の線が描き込まれている。この点については、次章で詳しく述べる予定であるが、簡単にいえば、京都、江戸の両地で、賃金データがそろった文政期（1818～29年）以降の時期について、両地の消費者物価の峰および谷に着目して時期区分を行なったものである。すなわち、Ⅰ期は、1820（文政3）年の谷から、1838（天保9）年の峰をへて、1842（天保13）年の谷まで。Ⅱ期は、1842（天保13）年の谷から、1852（嘉永5）年の峰をへて、1854（安政元）年の谷まで。Ⅲ期は、1854（安政元）年の谷以降の時期である。なお、図1-5下段の京都消費者物価指数(A)の系列には、参考のために、波動の峰（○）と谷（●）を描き込んでおいた。

さて、まず、京都日雇実質賃金指数の動きについて検討することとしよう。1820（文政3）年以前の時期についてみると、物価は、ほぼつぎのように動いた。すなわち、1730（享保15）年ごろは低い水準にあり、1740（元文5）年ごろから1760（宝暦10）年ごろにかけては低落の傾向をみせている。ついで1775（安永4）年ごろから1786（天明6）年ごろにかけて上昇圧力がみてとれ、1786（天明6）年のピークをさかいに、1820（文政3）年ごろにかけては、いくつかの小循環をふくみながらも、長期低落傾向が観察される²⁶⁾。

これに対して、日雇実質賃金は、1740（元文5）年ごろから1760（宝暦10）年ごろにかけては、全体として、不変ないしはやや上昇の趨勢にあった。（ピークは、1752（宝暦2）年である）。その後、1790（寛政2）年ごろから、1820（文政3）年ごろにかけて、実質賃金は顕著な上昇趨勢をもったことが明らかである。なかでも化政期（1804～29年）の上昇圧力は大きく、1814（文化11）年のピークは宝暦期（1751～63年）

の水準をしのいでいることが観察される。

要するに、1820（文政3）年以前の時期について、物価の動向と、日雇実質賃金のそれとは、（物価と建築労働者の実質賃金との関係ほどではないにせよ）ほぼ逆相関の関係にあったといえよう。1820（文政3）年以降の時期についても、ほぼ同様の事実が観察される。物価のⅠ期（1820年から1842年まで）、Ⅱ期（1842年から1854年まで）、Ⅲ期（1854年以降）それぞれの上昇局面と下降局面は、日雇実質賃金の下降局面、上昇局面と、（この場合も、物価と、建築労働者の実質賃金との関係ほどではないにせよ）だいたいにおいて対応しているとみられる。もっとも、化政期（1804～29年）における日雇実質賃金の上昇は特別で、1820（文政3）年以降、物価が上昇を始めても、実質賃金は、なおしばらく上昇した。

以上は、短期的な循環の視点から観察したものであるが、長期的な趨勢についてはどうであったろうか。グラフによれば、京都日雇実質賃金指数(A)は、1820年代前半のピークにかけて、ほぼ着実に上昇している。しかし、新データをもちいることで、今回はじめて明らかになったのであるが、1820年代後半以降は、実質賃金の下落が著しく、とりわけⅢ期（1854年以降）においてそうであった。したがって、1820年代後半以降は、建築労働者（熟練労働）であると、日雇労働者（未熟練労働）であるとを問わず、実質賃金の低落は顕著であった。このことはさしあたり、この時期の都市（京都）労働者の生活水準が、著しく悪化したことを物語っているといえよう。

さてここで、（けっして多くはない）既存の賃金系列について、すこし振り返っておくこととしたい。建築労働者のものから始めるとして、まず梅村系列は、推計上の手続きに多少の相違はあっても、資料は、本²⁷⁾

章と同じく三井家データ（ただし旧データ）に拠っている。したがって当然のことながら、観察事実には、ほとんど差がない。

しかし、さきに述べた1820年代後半以降における建築労働者実質賃金の下降趨勢については、重要な反証が存在する。ひとつは佐野系列^{2,8)}であって、これは、『我国商品相場統計表』^{2,9)}をもちいて、江戸における建築労働者実質賃金を推計したものである。この系列によると、実質賃金は幕末期に明らかに上昇している^{3,0)}。もうひとつは、新保系列^{3,1)}であって、これは『近世大阪の物価と利子』^{3,2)}をもちいて、大阪における建築労働者実質賃金を推計したものである。この系列によると、実質賃金は、1830～46年に明らかに上昇している。

他の、建築労働者（熟練労働）以外の賃金系列（未熟練労働）に目を転じると、1820年代後半以降の時期について、実質賃金の上昇例を見つけることはできないと言ってよいであろう。斎藤系列^{3,3)}（ここでは大阪地方および諏訪地方の農業賃金）によれば、文政期（1818～29年）以降、農業実質賃金は明らかに低下している。さらに、播州農村における奉公人賃金を扱った植村系列^{3,4)}の場合、1790（寛政2）年以降実質賃金は趨勢的に上昇するが、1812（文化9）年には早くもピークに達し、その後下降傾向が続いている。また、播州龍野円尾家雇用労働の賃金を扱った長谷川系列^{3,5)}の場合も、文政期（1818～29年）以降その賃金は低下している。

以上の整理からもわかるように、本章での結果（京都）、およびのちに述べる予定の次章での結果（江戸）をも含めて、少なくとも未熟練労働にかんする限り、1820年代後半以降の時期について、その実質賃金は下降趨勢にあったと結論してよいと思われる。しかし、熟練労働の場合には、実質賃金趨勢にかんして、なお、確定的なことを言う段階に達しているとはいえないであろう。

さて本節における残された課題は、日雇労働者（未熟練労働）と建築労働者（熟練労働）との賃金格差を論じることである。図1-4（図1-5）最上段に描き込まれた日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比（5ヵ年移動平均、普通目盛）の系列は、この目的のために作成されたものである。

一見して明らかなように、この比は、近世後期を通じて着実に上昇した。移動平均系列の最小値は、1755（宝暦5）年の0.219で、その最大値は、1862（文久2）年の0.427である。したがって、はじめ建築労働者のおよそ22パーセントぐらいしかなかった日雇労働者の貨幣賃金は、時代を下るにつれて、しだいに建築労働者貨幣賃金との差を縮め、幕末期には、ついに建築労働者の約43パーセントぐらいの賃金水準に達したことになる。

もっとも、建築労働者の貨幣賃金はほとんど動かなかった（図1-5）。したがって、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比の着実な上昇は、ひとえに、日雇労働者貨幣賃金の着実な上昇の結果であるということが出来る。事実、日雇労働者貨幣賃金の移動平均系列の最小値は、1807（文化4）年の0.712（1人ニ付銀匁）で、その最大値は、1869年（明治2）年の1.622であったから、貨幣賃金は、この間に、実に2倍以上に上昇しているのである。

このように、趨勢的には、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比は、近世後期を通じて着実に上昇した³⁶⁾のであるが、短期的あるいは循環的には、どうであったろうか。図1-4を仔細に観察してみると、まず、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比の系列と、京都日雇実質賃金指数の系列とは、局面的にみて、多くの場合順相関をなしている

（明らかに例外と思われるのは、ほぼ1830年代とⅢ期（1854年以降）である）。

ということは、実質賃金と物価が逆に相関している以上、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比は、局面的にみて、多くの場合京都消費者物価指数と逆相関の関係にあったということである。さらに言えば、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比は、ほぼ日雇労働者貨幣賃金の動向と平行であったから（図1-5）、結局は、日雇労働者貨幣賃金の動向が、局面的にみて、多くの場合消費者物価指数と逆相関の関係にあったということになる（図1-5）。

この最後の、（日雇実質賃金と物価の逆相関のみならず）日雇貨幣賃金と物価の逆相関がしばしばみられたという事実は、どのように解釈すればよいであろうか。いったい、物価が下落しているのに貨幣賃金が上昇している（したがってこのとき実質賃金は大きく上昇する）、あるいは、物価の上昇期に貨幣賃金が下落している（したがってこのとき実質賃金は大きく下落する）、というのは大変なことである。

賃金と物価のラグ、すなわち、はじめに物価が上昇（下落）して、しばらくしてから貨幣賃金も上昇（下落）を開始する、というふうに考えてよいであろうか。このこと自体は、さきにみた物価と実質賃金との逆相関関係と矛盾しないであろう。しかし、このようなラグは、（なかったとは言い切れないにせよ）やはり、これを仮定するのは無理があると思われる。もしラグとみるならば、それは、おそらく10～20年単位のものとなるからである。賃金の下方硬直性、賃金・物価ラグ、物価と実質賃金の逆相関といった現象が、セットでみられるのは、おそらくもっと後の時代で、近世後期の賃金については、近代とはもっと別個の説明原理が必要であると考えられる。

そこで、われわれはのちの章で、第3の変数として、農業生産力の変動を組み込むことによって、本格的な検討を試みる予定である。

おわりに

ここでは本章で得られた観察結果を、1820年代を境目として、さらには、趨勢的なものと循環的なものとを区別しながら、簡単に要約しておくこととしたい。

(1) まず、京都日雇実質賃金は、1820年代前半のピークにかけて、趨勢的には、ほぼ着実に上昇した。この間、物価は、(データを欠いている時期を別にすれば) 下降の趨勢にあったから、賃金と物価は逆相関の関係にあったといえよう。循環的にみても、1820(文政元)年以前の時期について、物価の動向と、日雇実質賃金のそれとは、やはりほぼ逆相関の関係にあった。そしてこの逆相関は、多くの場合、物価が下落しているときに貨幣賃金が上昇し(したがってこのとき実質賃金は大きく上昇し)、物価の上昇期には貨幣賃金が下落する(このとき実質賃金は大きく下落する)という内容をともなっていた。また賃金格差の問題に目を転じると、1820年代前半にかけて、趨勢的には、日雇労働者貨幣賃金/建築労働者貨幣賃金比は、着実に上昇した(そしてこの比は、趨勢的にも循環的にも、多くの場合、物価とは逆に動いた)。

(2) つぎに、京都日雇実質賃金は、趨勢的にみて、1820年代後半以降、下落が著しく、とりわけⅢ期(1854年以降)においてそうであった。この間、物価は急速に上昇したから、やはり実質賃金と物価は逆相関の関係にあったといえよう。この点は、循環的にみた場合も同様である。ところがこの逆相関の内実は、1820年以前の時期とは少しく異なると思わ

れる。なるほど、物価が下落しているときに貨幣賃金が上昇し（したがってこのとき実質賃金は大きく上昇し）、物価の上昇期には貨幣賃金が下落する（このとき実質賃金は大きく下落する）という局面の方が、やはりまだ多いようである。だがしかし、1830年代とⅢ期（1854年以降）のインフレ局面にみられるように、貨幣賃金は上昇(!)しているのに、物価がさらに上昇する結果、実質賃金は下落するという新しい現象（これは近代ではむしろ常態であると思われるが）もあらわれているのである。賃金格差の問題に目を転じると、これは前の時期と同じく、趨勢的には、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比は、着実に上昇した。しかしこの間、物価は急速に上昇したから、この比は、前の時期とは異なって、物価と正に相関したことになる。（また、循環的には、前の時期と同じく逆に相関する場合と、1830年代とⅢ期にみられるように、正に相関する場合とが生じた。）

注

- 1) 前掲『近世後期における主要物価の動態』〔増補改訂〕。
- 2) 生産物価格の検討については、山崎隆三氏の物価史研究、および、その課題と方法ににかんする提言以来（山崎隆三「元禄・享保期の米価変動について」『経済学雑誌』48巻4号(1963年)、同「近世後期における農産物価格の動向」『大阪市立大経済学年報』19集(1963年))、新保博氏の著書（前掲新保『近世の物価と経済発展』）をはじめとして、著しく研究の進展した分野である。しかし、三都のひとつ京都における生産物価格の変動については、新保氏が三井家データをもちいて副次的に（前掲新保『近世の物価と経済

- 発展』、2、3、5章)、宮本又郎氏が新データをもちいて幕末明治期について(前掲宮本「幕末明治初期京都の物価変動について; 1830～79年」)分析したものをあげうるのみである。
- 3) 前掲『近世後期における主要物價の動態』。なお『近世後期における主要物價の動態』を使用した研究には、梅村又次「建築労働者の実質賃金 1726～1958年」『経済研究』12巻2号(1961年)、宮本又郎「近世後期大阪米価の短期変動」『大阪大学経済学』24巻3号(1975年)(のちに、前掲同『近世日本の市場経済』に所収)、前掲新保『近世の物価と経済発展』などがある。
 - 4) 前掲梅村「建築労働者の実質賃金 1726～1958年」、前掲新保『近世の物価と経済発展』、150～154ページ。
 - 5) 前掲『近世後期における主要物價の動態』、67ページ。
 - 6) この換算は、前掲梅村「建築労働者の実質賃金 1726～1958年」のなかで行なわれたものに倣った。
 - 7) 前掲『近世後期における主要物價の動態』、67ページ。
 - 8) 前掲新保『近世の物価と経済発展』、23～24ページ。資料は前掲『近世後期における主要物價の動態』。
 - 9) 新保博「徳川後期の物価水準(2) — 大坂卸売物價の動向を中心に — 」『国民経済雑誌』127巻3号(1973年3月)、14ページ。資料は前掲『近世後期における主要物價の動態』。
 - 10) 大川一司・野田孜・高松信清・山田三郎・熊崎実・塩野谷祐一・南亮進『長期経済統計 — 物価』(東洋経済新報社、1967年)、138～139ページ。
 - 11) 拙稿「徳川後期における生産物價格の変動 — 京都小売物價を中心に — 」『六甲台論集』20巻3号(1973年)、および同「江戸後

期における生産物市場 — 京都小売物価を中心に — 』『福井県立短期大学研究紀要』10号（1985年）。

- 12) その際、推定による補間値をある程度もちいた。また、左官の賃金を欠く年については、大工のそれをもって当該年の建築労働者の賃金とした。
- 13) 前掲大川他『長期経済統計 — 物価』、105ページ。
- 14) しかし、資料における貨幣賃金の数値には、これといった飛躍ないしは不連続は見当たらないので、労働の質については、これをほぼ同質のものであったとみなしてよいのではないかと思われる。
- 15) ここでの算式は、
$$\sigma = \sqrt{\frac{\sum_{i=1}^n x_i^2 - n\bar{x}^2}{n-1}}$$
 をもちいたが、
$$S = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i^2 - \bar{x}^2}$$
 とする方がよかったかもしれない。後者をもちいると、変動係数は、もうすこし小さくなる。
- 16) 斎藤修氏による西摂農村大工賃金指数においても、類似の傾向をみてとることができる。斎藤修「徳川中期の実質賃金と格差」『社会経済史学』41巻5号（1976年）、4～5ページ。
- 17) 新保博氏によれば、「……三井へ出入りの大工は特定されており、両者の間には事実上長期契約が成立し、しかもその契約が数世代にわたることも稀ではないから、三井の支払う賃金が固定的であっても不思議ではない」という。前掲新保『近世の物価と経済発展』、153～154ページ。
- 18) 前掲斎藤「徳川中期の実質賃金と格差」、4～5ページ。しかし、長谷川彰氏による播州龍野円尾家日雇賃金の系列によれば、化政、天保期に、日雇賃金は不変である。長谷川彰「幕末期醤油醸造業

における雇用労働と賃金 — 播州龍野・円尾家の場合 — 」桃山学院大学『経済経営論集』25巻2・3号（1983年）、206（296）ページ。

- 19) 前掲拙稿「江戸後期における生産物市場」、および拙稿「近世後期における生産物市場と要素市場 — 京都小売物価と賃金を中心に — 」(神木哲男・松浦昭編著『近代移行期における経済発展』(同文館、1987年)所収)。
- 20) 同上。
- 21) 前掲『近世後期における主要物價の動態』（1952年）、67ページ。
- 22) 前節では、1750（寛延3）年を100としていたが、今回はこれを、1818（文政元）年を100として再計算した。このさい、データを欠いている1818（基準）年の塩の価格には、新データの春秋平均価格、1俵ニ付銀6.08匁を充てた。なお、グラフをみれば明らかのように、旧データ京都消費者物価指数は、新データ京都消費者物価指数(A)に比べて、カバーする期間がやや長くなっている。
- 23) これについても、今回基準年の変更にあたって、データを欠いている1818（基準）年の左官貨幣賃金を、一人ニ付き銀3.0匁として推定補間した。
- 24) これについても、1818（文政元）年を100として再計算した。
- 25) 新データによる各年の日雇労働者貨幣賃金を、旧データによる各年の建築労働者貨幣賃金で除して、しかるのち移動平均をとった。
- 26) しかし、物価は1820（文政3）年ごろの谷をさかいに、強い長期的上昇趨勢を示し、天保（1830～43年）中期の高水準を含みながら明治期にいたっている。すなわち 総じて、1786（天明6）年ごろから、1820（文政3）年ごろまでの長期的下降趨勢と、1820

(文政3)年ごろから明治期にかけての強い長期的上昇趨勢とが明らかである。このような一般物価の趨勢は、これまでに指摘されてきたことと一致するといつてさしつかえないであろう(たとえば前掲新保『近世の物価と経済発展』、42ページの表2-4)。なお、江戸後期をかりに二つに分けるとすれば、1820(文政3)年前後をもって、ひとつの転換点と考えることができる。「……文政3年を転換点として、それ以前とそれ以降とでは、物価の動向は鋭い対照をみせている。文政期を画期として、徳川時代の経済発展は新しい局面を迎えるにいたったといつてできよう」。新保博「徳川後期の物価水準(1) — 大坂卸売物価の動向を中心に — 」『国民経済雑誌』127巻2号(1973年2月)、39ページ。

- 27) 前掲梅村「建築労働者の実質賃金 1726～1958年」、175ページ。
- 28) 前掲佐野「建築労働者の実質賃金」、73ページ。
- 29) 金融研究会編『我国商品相場統計表』(1937年)。
- 30) もっとも序章でも述べたように、ごく最近、斎藤修氏はこの推計を修正し、幕末期における実質賃金の上昇を否定している(前掲斎藤「幕末—明治の賃金変動再考」、331ページ)。
- 31) 前掲新保『近世の物価と経済発展』、275～277ページ。
- 32) 宮本又次編『近世大阪の物価と利子』(創文社、1963年)。
- 33) 斎藤修「農業賃金の趨勢 — 徳川中期から大正前期にかけて — 」『社会経済史学』39巻2号(1973年)、65ページ。なお、1820年代前半までの時期については、同じく西摂農村農業日雇の実質賃金を推計した同氏の系列があって(前掲「徳川中期の実質賃金と格差」、15ページ)、この系列を1770年代後半以降1820年代前半まで、わずかながら上昇趨勢にあったとみれば(前掲新保『近世の

物価と経済発展』、159ページ)、これは、本章の観察事実とそれほど大きく異なるものではないといえよう。

- 34) 植村正治「近世農村における奉公人賃銀」(新保博・安場保吉編『数量経済史論集2 近代移行期の日本経済 — 幕末から明治へ —』(日本経済新聞社、1979年)所収)(のちに、前掲同『近世農村における市場経済の展開』に所収)、163ページ。
- 35) 前掲長谷川「幕末期醤油醸造業における雇用労働と賃金」、206(296)ページ。
- 36) 斎藤修氏は、西摂農村における農業日雇賃金の大工賃金に対する比率(農業日雇賃金/大工賃金)の趨勢(および他の趨勢)を観察し、1727(享保12)年～1760年代前半の局面を賃金格差縮小期、1760年代前半～1830(天保元)年の局面を格差構造固定期であると結論づけた。しかし、この結論は、本章で得られた結果と矛盾する(斎藤修「徳川後期の賃金格差構造と実質賃金水準」(前掲『数量経済史論集2 近代移行期の日本経済』所収)、142ページ)。

付表 1 - 1 (その1)

個別商品

年次	米			味噌				塩						
	春秋平均(石につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(銀匁)	同(貫につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(銀匁)	同(石につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5年カ移動平均			
1713(正徳 3)	153.5	198.1		3.2	3.2	206.5		29.3	29.3	194.7				
14(4)														
15(5)														
1716(享保 1)														
17(2)														
18(3)														
19(4)														
20(5)														
1721(6)														
22(7)														
23(8)														
24(9)														
25(10)														
1726(11)	69.0	89.0		104.5	2.6	168.5		14.0	14.0	93.0				
27(12)	63.0	81.3		110.0	2.8	177.4		1.9	5.9	39.5				
28(13)	49.0	63.2		71.0	102.2	2.6		164.8	161.4	2.9		9.1	60.2	58.1
29(14)	45.3	58.4		65.9	97.4	2.4		157.0	155.9	2.4		7.5	49.8	48.8
30(15)	48.8	63.0		67.1	86.4	2.2		139.4	163.0	2.3		7.2	47.8	51.3
1731(16)	49.2	63.4	71.0	87.4	2.2	140.9	173.6	2.3	7.0	46.7	49.2			
32(17)	67.8	87.4		132.0	3.3	212.9		2.5	7.8	51.9				
33(18)	64.0	82.6		135.2	3.4	218.1		2.4	7.5	49.8				
34(19)														
35(20)														
1736(元文 1)	70.0	90.3			126.5	3.2		204.0		4.4		13.8	91.4	
37(2)														
38(3)														
39(4)														
40(5)														
1741(寛保 1)	90.8	117.2		1.9	1.9	122.6		20.1	20.1	133.2				
42(2)	83.5	107.7		1.6	1.6	103.2		20.2	20.2	133.9				
43(3)	80.8	104.3		106.1	1.7	1.7		106.5	107.1	21.6		21.6	143.2	138.5
44(延享 1)	80.0	103.2		105.1	1.6	1.6		100.0	104.5	19.9		19.9	131.9	138.3
45(2)	76.2	98.3		104.4	1.6	1.6		103.2	107.1	22.7		22.7	150.5	136.5
1746(3)	86.6	111.7	104.6	1.7	1.7	109.7	109.7	19.9	19.9	132.2	133.1			
47(4)	81.0	104.5	102.9	1.8	1.8	116.1	110.3	18.8	18.8	124.6	131.0			
48(寛延 1)	81.4	105.0	103.2	1.9	1.9	119.4	109.7	19.0	19.0	126.2	120.9			
49(2)	73.5	94.8	100.2	1.6	1.6	103.2	107.1	18.3	18.3	121.3	115.4			
50(3)	77.5	100.0	95.8	1.6	1.6	100.0	101.3	15.1	15.1	100.0	110.8			
1751(宝暦 1)	74.8	96.5	88.7	1.5	1.5	96.8	93.5	15.8	15.8	105.0	106.0			
52(2)	64.3	82.9	82.7	1.4	1.4	87.1	90.3	15.3	15.3	101.7	105.2			
53(3)	53.6	69.2	81.6	1.3	1.3	80.6	91.6	15.4	15.4	102.0	108.5			

価格の動向（旧データ）

醤油			酒			灯油			年次
春秋平均 （石につき 銀匁）	指数 （17 50年 = 100）	同5年 カ移動 平均	春秋平均 （石につき 銀匁）	指数 （17 50年 = 100）	同5年 カ移動 平均	春秋平均 （升ニ 付銀匁）	指数 （17 50年 = 100）	同5年 カ移動 平均	
123.1	130.7		221.0	191.5		8.8	247.9		1713(正徳 3) 14(4) 15(5) 1716(享保 1) 17(2) 18(3) 19(4) 20(5) 1721(6) 22(7) 23(8) 24(9) 25(10) 1726(11) 27(12) 28(13) 29(14) 30(15) 1731(16) 32(17) 33(18) 34(19) 35(20) 1736(元文 1) 37(2) 38(3) 39(4) 40(5) 1741(寛保 1) 42(2) 43(3) 44(延享 1) 45(2) 1746(3) 47(4) 48(寛延 1) 49(2) 50(3) 1751(宝暦 1) 52(2) 53(3)
65.0	69.0		105.0	91.0		2.0	56.3		
65.0	69.0		105.0	91.0		1.8	50.7		
65.0	69.0	69.0	93.0	80.6	82.8	1.7	47.9	55.2	
65.0	69.0	67.9	92.5	80.2	78.9	1.9	53.5	56.3	
65.0	69.0	67.4	82.0	71.1	77.3	2.4	67.6	58.0	
60.0	63.7	67.4	82.5	71.5	82.0	2.2	62.0	62.0	
62.5	66.3		96.3	83.4		2.1	59.2		
65.0	69.0		120.0	104.0		2.4	67.6		
62.5	66.3		130.0	112.7		3.0	84.5		
74.2	78.8		122.9	106.5		4.5	126.8		
74.5	79.0		127.3	110.3		4.8	133.8		
82.9	88.0	84.7	125.4	108.7	108.6	4.4	122.5	117.2	
80.3	85.2	87.2	128.6	111.4	108.6	3.7	104.2	110.7	
87.3	92.6	90.3	122.9	106.5	106.8	3.5	98.6	102.3	
86.0	91.3	91.6	122.6	106.2	105.4	3.4	94.4	97.7	
89.0	94.5	93.5	117.1	101.4	103.3	3.3	91.5	97.2	
89.2	94.6	95.0	117.0	101.3	102.0	3.6	100.0	97.5	
89.2	94.7	97.6	116.7	101.1	101.1	3.6	101.4	97.7	
94.2	100.0	99.0	115.4	100.0	100.9	3.6	100.0	97.7	
98.0	104.0	99.1	117.2	101.6	96.6	3.4	95.8	94.1	
95.9	101.8	99.5	116.0	100.5	92.1	3.3	91.5	88.5	
89.5	95.0	99.0	92.1	79.8	89.7	2.9	81.7	85.1	

付表 1-1 (その2)

個別商品

年次	米			味噌				塩			
	春秋平均(石につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(銀匁)	同(實につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(銀匁)	同(石につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5カ年移動平均
1754(宝暦 4)	50.3	64.8	86.4	1.4	1.4	87.1	96.8	17.7	17.7	117.6	112.8
55(5)	73.2	94.5	90.8	1.7	1.7	106.5	103.9	17.5	17.5	116.3	117.2
1756(6)	93.5	120.6	96.2	1.9	1.9	122.6	111.0	19.1	19.1	126.6	119.5
57(7)	81.5	105.1	102.1	1.9	1.9	122.6	113.5	18.6	18.6	123.6	118.7
58(8)	74.6	96.3	99.8	1.8	1.8	116.1	110.3	17.1	17.1	113.3	117.3
59(9)	73.1	94.3	90.6	1.6	1.6	100.0	104.5	17.2	17.2	114.0	113.6
60(10)	64.2	82.8	83.8	1.4	1.4	90.3	98.1	16.4	16.4	109.0	111.6
1761(11)	57.7	74.4		1.5	1.5	93.5		16.3	16.3	108.3	
62(12)	55.3	71.4		1.4	1.4	90.3		17.1	17.1	113.6	
63(13)											
64(明和 1)											
65(2)											
1766(3)											
67(4)											
68(5)											
69(6)											
70(7)											
1771(8)											
72(安永 1)											
73(2)	60.5	78.1									
74(3)	54.5	70.3									
75(4)	59.0	76.1	80.6								
1776(5)	66.9	86.3	82.1								
77(6)	71.6	92.4	84.2								
78(7)	66.2	85.4	83.1								
79(8)	62.8	81.0	82.6								
80(9)	54.7	70.6	85.9								
1781(天明 1)	64.8	83.6	94.8								
82(2)	84.5	109.0	105.5								
83(3)	100.8	130.0	111.9								
84(4)	104.0	134.2	117.6								
85(5)	79.5	102.5	134.7					1.3	4.1	27.0	
1786(6)	87.0	112.2	131.8								
87(7)	150.8	194.5	125.8								
88(8)	89.8	115.8	123.2								
89(寛政 1)	80.4	103.7	119.1								
90(2)	69.6	89.7	104.0								
1791(3)	71.2	91.8	104.4	1.8	1.8	116.1		6.3	19.5	129.8	
92(4)	92.1	118.8	102.6	2.0	2.0	125.8		6.7	20.8	138.1	
93(5)	91.2	117.7	105.8	1.9	1.9	122.6	120.0	6.8	21.1	140.2	131.2
94(6)	73.6	94.9	110.1	1.8	1.8	116.1	120.6	6.3	19.5	129.8	131.9

価格の動向（旧データ）

醤油			酒			灯油			年次
春秋平均（石につき銀匁）	指数（1750年=100）	同5年移動平均	春秋平均（石につき銀匁）	指数（1750年=100）	同5年移動平均	春秋平均（升ニ付銀匁）	指数（1750年=100）	同5年移動平均	
91.2	96.8	98.2	90.7	78.6	91.5	2.6	73.2	84.2	1754(宝暦 4)
92.0	97.6	97.7	101.4	87.9	94.8	3.0	83.1	85.1	55(5)
93.8	99.6	98.8	127.6	110.6	100.0	3.3	91.5	88.2	1756(6)
94.0	99.8	99.3	135.3	117.2	106.0	3.4	95.8	93.5	57(7)
94.6	100.4	99.5	122.1	105.8	109.6	3.5	97.2	94.6	58(8)
93.3	99.0	98.8	125.5	108.7	107.2	3.6	100.0	92.1	59(9)
92.9	98.6	98.1	122.0	105.7	102.7	3.2	88.7	87.6	60(10)
90.7	96.2		113.8	98.6		2.8	78.9		1761(11)
90.4	96.0		109.2	94.6		2.6	73.2		62(12)
									63(13)
									64(明和 1)
									65(2)
									1766(3)
									67(4)
									68(5)
									69(6)
									70(7)
									1771(8)
									72(安永 1)
100.0	106.2		130.5	113.1		3.0	84.5		73(2)
100.0	106.2		126.0	109.2		2.9	81.7		74(3)
100.0	106.2	106.2	126.0	109.2	106.8	3.7	102.8	89.8	75(4)
100.0	106.2	106.2	117.0	101.4	104.5	3.4	95.8	85.9	1776(5)
100.0	106.2	104.4	117.0	101.4	102.9	2.9	81.7	83.1	77(6)
100.0	106.2	100.1	117.0	101.4	101.4	2.4	67.6		78(7)
91.6	97.2	95.9	117.0	101.4	101.4	2.4	67.6		79(8)
80.0	84.9	91.6	117.0	101.4	101.4				80(9)
80.0	84.9	87.4	117.0	101.4	102.8	2.5	70.4		1781(天明 1)
80.0	84.9	84.9	117.0	101.4	109.1				82(2)
80.0	84.9	84.9	125.3	108.5	110.1	2.8	78.9		83(3)
80.0	84.9	84.9	153.0	132.6	111.7	3.7	104.2		84(4)
80.0	84.9	84.9	123.0	106.6	124.6	3.3	93.0	101.4	85(5)
80.0	84.9	84.9	126.5	109.6	132.5	3.7	104.2		1786(6)
80.0	84.9	90.3	191.0	165.5	133.3	4.5	126.8		87(7)
80.0	84.9	90.3	170.9	148.1	133.5				88(8)
105.5	112.0	89.7	158.0	136.9	131.4				89(寛政 1)
80.0	84.9	89.0	124.0	107.5	121.8				90(2)
77.0	81.7	88.5	114.3	99.0	118.4	2.7	76.1		1791(3)
76.5	81.2	86.6	135.5	117.4	112.2	3.3	93.0		92(4)
77.9	82.7	86.1	151.3	131.1	111.3	3.1	87.3	88.5	93(5)
96.6	102.5	86.0	122.2	105.9	113.7	3.3	91.5	92.4	94(6)

付表 1-1 (その3)

個別商品

年次	米			味噌				塩			
	春秋平均(石につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5カ移動平均	春秋平均(銀匁)	同(貫につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5カ移動平均	春秋平均(銀匁)	同(石につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5カ移動平均
1795(寛政 7)	82.0	105.8	108.4	1.9	1.9	119.4	120.0	5.7	17.8	118.4	123.1
1796(8)	88.0	113.5	106.9	1.9	1.9	119.4	119.4	6.4	20.0	132.9	121.3
97(9)	85.4	110.1	109.3	1.9	1.9	122.6	118.1	4.6	14.2	94.5	118.8
98(10)	85.5	110.3	111.8	1.9	1.9	119.4	117.4	6.3	19.7	130.8	115.9
99(11)	82.9	106.9	110.9	1.7	1.7	109.7	117.4	5.7	17.7	117.3	116.9
1800(12)	91.7	118.3	109.3	1.8	1.8	116.1	115.5	5.0	15.6	103.8	127.5
1801(享和 1)	84.5	109.0	106.3	1.9	1.9	119.4	114.8	6.7	20.8	138.1	134.3
02(2)	79.2	102.1	100.4	1.8	1.8	112.9	112.9	7.1	22.2	147.4	137.5
03(3)	73.7	95.0	92.4	1.8	1.8	116.1	112.3	8.0	24.8	165.1	145.8
04(文化 1)	60.2	77.7	87.6	1.6	1.6	100.0	109.7	6.4	20.0	132.9	144.3
05(2)	60.7	78.3	85.2	1.8	1.8	112.9	109.7	7.0	21.9	145.3	140.6
1806(3)	65.9	85.0	87.6	1.7	1.7	106.5	110.3	6.3	19.7	130.8	135.8
07(4)	69.7	89.9	93.5	1.8	1.8	112.9	113.5	6.2	19.4	128.7	137.0
08(5)	82.9	107.0	94.9	1.9	1.9	119.4	111.6	6.8	21.3	141.2	134.8
09(6)	83.2	107.3	95.6	1.8	1.8	116.1	111.0	6.7	20.9	139.1	135.6
10(7)	65.9	85.0	94.5	1.6	1.6	103.2	107.1	6.5	20.2	133.9	136.4
1811(8)	68.8	88.8	90.6	1.6	1.6	103.2	102.6	6.5	20.3	135.0	135.6
12(9)	65.5	84.5	89.8	1.5	1.5	93.5	101.9	6.4	20.0	132.9	133.3
13(10)	67.6	87.2	93.8	1.5	1.5	96.8	103.2	6.6	20.6	137.0	132.1
14(11)	80.2	103.5	95.5	1.8	1.8	112.9	105.2	6.2	19.2	127.7	133.5
15(12)	81.4	105.0	100.0	1.7	1.7	109.7	110.3	6.2	19.2	127.7	133.7
1816(13)	75.5	97.4	101.1	1.8	1.8	112.9	114.8	6.9	21.4	142.2	
17(14)	83.0	107.1	96.7	1.9	1.9	119.4	118.7	6.5	20.2	133.9	
18(文政 1)	71.8	92.6	90.1	1.9	1.9	119.4	120.6				
19(2)	63.2	81.5	87.1	2.1	2.1	132.3	121.3				
20(3)	55.9	72.1	84.6	1.9	1.9	119.4	120.6				
1821(4)	63.8	82.3	85.0	1.8	1.8	116.1	120.0	34.8	34.8	230.9	
22(5)	73.2	94.4	88.9	1.8	1.8	116.1	117.4	20.0	20.0	132.9	
23(6)	73.2	94.5	95.0	1.8	1.8	116.1	118.7	34.2	34.2	227.2	200.6
24(7)	78.4	101.1	101.3	1.9	1.9	119.4	121.3	40.0	40.0	265.8	187.6
25(8)	79.6	102.6	101.2	2.0	2.0	125.8	125.2	22.0	22.0	146.2	
1826(9)	88.3	113.9	102.1	2.0	2.0	129.0	127.7	25.0	25.0	166.1	
27(10)	72.8	93.9	108.7	2.1	2.1	135.5	131.6				
28(11)	76.9	99.2	111.3	2.0	2.0	129.0	131.6				
29(12)	103.8	133.9	113.0	2.2	2.2	138.7	132.9				
30(天保 1)	89.5	115.5	116.3	2.0	2.0	125.8	131.6				
1831(2)	94.8	122.3	124.1	2.1	2.1	135.5	132.3				
32(3)	85.5	110.3	128.1	2.0	2.0	129.0	131.0				
33(4)	107.4	138.6	127.2	2.1	2.1	132.3	131.6				
34(5)	119.3	153.9	132.9	2.1	2.1	132.3	133.5				
35(6)	85.8	110.7	155.4	2.0	2.0	129.0	152.9				

価格の動向（旧データ）

醤油			酒			灯油			年次
春秋平均（石につき銀匁）	指数（1750年=100）	同5年移動平均	春秋平均（石につき銀匁）	指数（1750年=100）	同5年移動平均	春秋平均（升につき銀匁）	指数（1750年=100）	同5年移動平均	
77.3	82.1	85.8	118.8	102.9	112.2	3.4	94.4	92.4	1795(寛政 7)
76.9	81.6	85.1	128.3	111.1	107.7	3.4	95.8	91.0	1796(8)
75.4	80.0	79.4	127.1	110.1	109.3	3.3	93.0	89.6	97(9)
74.5	79.0	77.5	125.1	108.4	111.3	2.9	80.3	85.9	98(10)
69.9	74.2	75.8	131.6	114.0	112.3	3.0	84.5	83.9	99(11)
68.6	72.8	74.3	130.3	112.9	111.7	2.7	76.1	80.6	1800(12)
68.8	73.0	72.8	134.0	116.1	112.3	3.1	85.9	82.0	1801(享和 1)
68.3	72.5	71.3	123.5	107.0	109.4	2.7	76.1	81.4	02(2)
67.3	71.4	70.1	128.7	111.5	106.3	3.1	87.3	82.0	03(3)
63.2	67.0	70.3	114.9	99.6	102.3	2.9	81.7	79.7	04(文化 1)
62.9	66.8	71.8	112.3	97.3	100.7	2.8	78.9	79.7	05(2)
69.7	73.9	73.1	111.1	96.2	100.5	2.7	74.6	78.0	1806(3)
75.4	80.0	74.4	114.2	99.0	101.7	2.7	76.1	76.9	07(4)
73.4	77.9	75.7	127.5	110.5	103.1	2.8	78.9	76.1	08(5)
68.9	73.1	75.4	121.6	105.3	104.7	2.7	76.1	77.2	09(6)
69.1	73.3	73.9	120.5	104.4	105.9	2.7	74.6	77.7	10(7)
68.5	72.7	73.0	120.7	104.6	103.3	2.9	80.3	76.9	1811(8)
68.5	72.7	73.1	120.6	104.5	102.9	2.8	78.9	76.3	12(9)
68.8	73.0	73.2	112.6	97.6	102.8	2.7	74.6	75.2	13(10)
69.6	73.8	73.5	119.4	103.4	102.1	2.6	73.2	71.3	14(11)
69.7	73.9	75.1	119.9	103.9	102.2	2.5	69.0	69.0	15(12)
69.8	74.1	75.6	116.7	101.1	103.1	2.2	60.6	69.0	1816(13)
76.0	80.7	77.5	121.5	105.2	100.8	2.4	67.6	69.6	17(14)
71.3	75.7	78.6	117.8	102.1	98.1	2.7	74.6	69.6	18(文政 1)
78.5	83.3	79.1	105.8	91.7	96.7	2.7	76.1	74.4	19(2)
74.5	79.0	78.2	104.3	90.3	94.4	2.5	69.0	75.2	20(3)
72.2	76.6	78.4	108.9	94.3	92.4	3.0	84.5	74.4	1821(4)
72.0	76.4	77.2	108.0	93.6	93.4	2.6	71.8	72.7	22(5)
71.9	76.3	76.8	106.5	92.3	95.7	2.5	70.4	73.0	23(6)
73.0	77.5	76.7	111.5	96.6	99.2	2.4	67.6	70.4	24(7)
72.7	77.2	76.7	117.4	101.7	102.1	2.5	70.4	72.7	25(8)
71.7	76.1	76.7	129.2	111.9	104.1	2.6	71.8	76.1	1826(9)
72.0	76.4	76.6	124.5	107.9	108.2	3.0	83.1	77.5	27(10)
72.0	76.4	76.0	118.0	102.3	110.2	3.1	87.3	78.9	28(11)
72.3	76.8	76.8	135.5	117.4	111.9	2.7	74.6	78.9	29(12)
69.9	74.2	78.2	128.5	111.4	111.5	2.8	77.5	76.1	30(天保 1)
75.5	80.1	80.6	139.4	120.8	113.1	2.6	71.8	73.2	1831(2)
78.5	83.3	82.4	122.0	105.7	118.4	2.5	69.0	76.6	32(3)
83.4	88.5	83.9	127.4	110.4	117.6	2.6	73.2	81.1	33(4)
80.7	85.6	84.6	166.2	144.0	116.8	3.3	91.5	87.0	34(5)
77.1	81.8	88.7	123.6	107.1	132.1	3.6	100.0	95.5	35(6)

付表 1 - 1 (その4)

個別商品

年次	米			味噌				塩			
	春秋平均(石につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(銀匁)	同(貫につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(銀匁)	同(石につき銀匁)	指数(1750年=100)	同5カ年移動平均
1836(天保 7)	117.1	151.0	157.7	2.3	2.3	145.2	160.6				
37(8)	172.8	223.0	154.6	3.5	3.5	225.8	165.8				
38(9)	116.2	149.9	152.1	2.7	2.7	171.0	169.0				
39(10)	107.2	138.3	142.5	2.5	2.5	158.1	165.8				
40(11)	76.2	98.3	120.8	2.3	2.3	145.2	147.7	27.8	27.8	184.4	
1841(12)	79.7	102.8	111.8	2.0	2.0	129.0	138.7	22.7	22.7	150.8	
42(13)	88.7	114.5	107.6	2.1	2.1	135.5	132.9	25.1	25.1	166.4	
43(14)	81.4	105.0	113.0	2.0	2.0	125.8	131.6	23.3	23.3	154.5	
44(弘化 1)	91.0	117.4	118.7	2.0	2.0	129.0	133.5				
45(2)	97.1	125.3	121.0	2.2	2.2	138.7	138.7				
1846(3)	101.7	131.2	126.1	2.2	2.2	138.7	144.5				
47(4)	97.7	126.0	130.9	2.5	2.5	161.3	152.9				
48(嘉永 1)	101.3	130.6	140.3	2.4	2.4	154.8	156.8				
49(2)	109.6	141.4	148.9	2.7	2.7	171.0	163.9				
50(3)	133.6	172.3	149.4	2.5	2.5	158.1	162.6				
1851(4)	135.0	174.2	152.2	2.7	2.7	174.2	162.6				
52(5)	99.7	128.6	154.2	2.4	2.4	154.8	161.3				
53(6)	112.1	144.6	144.7	2.4	2.4	154.8	160.6				
54(安政 1)	117.1	151.1	133.6	2.6	2.6	164.5	156.8				
55(2)	96.7	124.8	135.6	2.4	2.4	154.8	161.9				
1856(3)	92.2	119.0	142.9	2.4	2.4	154.8	163.9				
57(4)	107.3	138.5	148.8	2.8	2.8	180.6	164.5				
58(5)	140.3	181.0	161.7	2.6	2.6	164.5	178.7	31.2	31.2	207.0	
59(6)	140.2	180.8	194.9	2.6	2.6	167.7	212.3	32.6	32.6	216.6	
60(万延 1)	146.5	189.0	208.2	3.5	3.5	225.8	236.8	38.7	38.7	256.8	267.0
1861(文久 1)	221.1	285.3	217.9	5.0	5.0	322.6	281.9	52.2	52.2	346.5	318.7
62(2)	158.9	205.0	239.9	4.7	4.7	303.2	330.3	46.4	46.4	308.0	393.4
63(3)	177.7	229.2	305.6	6.1	6.1	390.3	391.0	70.1	70.1	465.8	
64(元治 1)	225.4	290.8	489.4	6.4	6.4	409.7	566.5	88.8	88.8	590.0	
65(慶応 1)	401.3	517.8	678.5	8.2	8.2	529.0	756.1				
1866(2)	933.4	1204.3	751.0	18.6	18.6	1200.0	886.5				
67(3)	891.7	1150.5	861.3	19.4	19.4	1251.6	981.3				
68(明治 1)	458.6	591.7	923.1	16.2	16.2	1041.9	1044.5				
69(2)	652.8	842.3	778.8	13.7	13.7	883.9	974.8				
70(3)	640.8	826.8		13.1	13.1	845.2					
1871(4)	374.0	482.5		13.2	13.2	851.6		93.1	93.1	618.6	

(出所) 三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物價の動態』(日本學術振興會、1952年)。

なお、味噌は1貫につき銀匁で表示されるのが普通であるが、享保・元文期に1石につき銀匁で表示されている場合があり、これは1石=40貫として換算した。同様に、塩は1石につき銀匁で表示されるのが普通であるが、しばしば1俵につき銀匁で表示されている場合があり、これも1俵=3斗2升として換算した。

価格の動向（旧データ）

醤油			酒			灯油			年次
春秋平均（石につき銀匁）	指数（1750年=100）	同5カ年移動平均	春秋平均（石につき銀匁）	指数（1750年=100）	同5カ年移動平均	春秋平均（升ニ付銀匁）	指数（1750年=100）	同5カ年移動平均	
78.8	83.7	93.6	135.1	117.0	141.1	3.6	101.4	102.5	1836(天保 7)
97.9	103.9	98.4	209.9	181.9	150.7	4.0	111.3	105.4	37(8)
106.6	113.2	102.4	179.3	155.4	151.2	3.9	108.5	109.6	38(9)
103.2	109.6	106.5	222.0	192.3	148.5	3.8	105.6	111.8	39(10)
95.9	101.8	104.3	126.5	109.6	133.0	4.3	121.1	109.0	40(11)
98.1	104.1	99.4	119.0	103.1	121.9	4.0	112.7	106.2	1841(12)
87.7	93.0	92.9	120.5	104.4	104.1	3.5	97.2	101.4	42(13)
83.3	88.4	87.3	115.6	100.1	103.6	3.4	94.4	93.8	43(14)
72.6	77.0	81.2	119.0	103.1	106.3	2.9	81.7	92.1	44(弘化 1)
69.5	73.8	77.4	124.0	107.4	109.0	3.0	83.1	97.7	45(2)
69.5	73.7	75.1	134.6	116.6	112.7	3.7	104.2	103.9	1846(3)
69.7	73.9	76.6	136.1	117.9	119.7	4.5	125.4	110.7	47(4)
72.7	77.1	78.1	136.9	118.6	125.8	4.5	125.4	115.2	48(嘉永 1)
79.4	84.2	81.0	159.2	138.0	139.7	4.1	115.5	115.8	49(2)
76.6	81.3	81.7	159.2	138.0	138.9	3.8	105.6	112.7	50(3)
83.1	88.2	82.4	214.6	186.0	138.9	3.8	107.0	110.4	1851(4)
73.3	77.8	82.2	131.5	113.9	138.9	3.9	109.9	111.3	52(5)
75.9	80.5	82.5	137.2	118.8	135.2	4.1	114.1	111.5	53(6)
78.5	83.3	81.6	159.1	137.8	120.6	4.3	119.7	113.0	54(安政 1)
77.9	82.7	85.1	137.8	119.4	121.8	3.8	107.0	114.9	55(2)
79.1	83.9	87.3	130.2	112.8	127.9	4.1	114.1	116.6	1856(3)
89.6	95.1	89.8	138.3	119.8	134.2	4.3	119.7	115.8	57(4)
86.2	91.5	93.4	172.7	149.6	140.8	4.4	122.5	119.2	58(5)
90.3	95.8	108.6	195.5	169.4	160.5	4.1	115.5	135.8	59(6)
95.1	101.0	117.9	176.0	152.5	169.4	4.4	123.9	145.1	60(万延 1)
150.3	159.6	131.0	243.7	211.2	177.9	7.0	197.2	161.4	1861(文久 1)
133.5	141.7	149.9	189.8	164.5	194.5	5.9	166.2	191.3	62(2)
148.0	157.1	191.9	221.3	191.8	251.2	7.3	204.2	225.6	63(3)
179.4	190.4	241.7	291.7	252.7	352.0	9.4	264.8	266.8	64(元治 1)
292.7	310.7	328.8	503.1	436.0	509.7	10.5	295.8	337.2	65(慶応 1)
385.0	408.7	388.4	825.2	715.1	575.6	14.3	402.8	372.7	1866(2)
543.5	576.9	443.9	1099.6	952.8	637.3	18.4	518.3	448.5	67(3)
428.7	455.1	483.4	601.6	521.3	664.7	13.6	381.7	496.3	68(明治 1)
440.8	467.9	496.8	647.6	561.2	603.2	22.9	643.7	503.4	69(2)
478.8	508.3		661.3	573.1		19.0	535.2		70(3)
448.1	475.6		470.5	407.7		15.6	438.0		1871(4)

付表 1-2 (その1) 消費者物価指数の動向 (旧データ)

年次	新消費者物価指数 (米のウエイト50%)		旧消費者物価指数 (同 68.5%)		年次	新消費者物価指数 (米のウエイト50%)		旧消費者物価指数 (同 68.5%)	
	指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均		指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均
1713(正徳 3)	189.7		192.8		1754(宝暦 4)	75.4	90.1	71.5	88.7
14(4)					55(5)	93.9	93.4	94.1	92.4
15(5)					1756(6)	113.1	97.9	115.9	97.3
1716(享保 1)					57(7)	106.9	102.6	106.2	102.4
17(2)					58(8)	100.1	101.9	98.7	101.1
18(3)					59(9)	98.7	96.2	97.1	94.1
19(4)					60(10)	90.8	91.1	87.8	88.4
20(5)					1761(11)	84.4		80.7	
1721(6)					62(12)	81.5		77.8	
22(7)					63(13)				
23(8)					64(明和 1)				
24(9)					65(2)				
25(10)					1766(3)				
1726(11)	88.2		88.5		67(4)				
27(12)	83.8		82.9		68(5)				
28(13)	72.2	76.8	68.9	74.7	69(6)				
29(14)	69.6	73.0	65.4	70.4	70(7)				
30(15)	70.2	73.9	67.5	71.4	1771(8)				
1731(16)	69.3	77.6	67.1	75.1	72(安永 1)				
32(17)	88.0		87.8		73(2)	91.6		85.7	
33(18)	90.7		87.7		74(3)	86.6		79.5	
34(19)					75(4)	91.5	92.0	84.8	87.1
35(20)					1776(5)	94.3	91.9	90.8	87.7
1736(元文 1)					77(6)	96.0	92.1	94.5	88.7
37(2)					78(7)	91.3	90.2	88.7	86.9
38(3)	96.6		94.3		79(8)	87.3	88.6	84.6	85.8
39(4)					80(9)	82.0	89.6	76.1	87.9
40(5)					1781(天明 1)	86.4	93.7	85.2	94.2
1741(寛保 1)	109.9		112.6		82(2)	101.1	100.5	105.2	102.6
42(2)	105.3		106.2		83(3)	111.8	103.7	119.7	107.4
43(3)	104.3	104.2	104.3	104.9	84(4)	121.3	107.6	126.9	112.0
44(延享 1)	101.8	103.4	102.3	104.0	85(5)	98.0	119.4	99.9	126.0
45(2)	99.7	102.8	99.2	103.4	1786(6)	105.5	120.3	108.4	125.3
1746(3)	106.0	102.6	108.1	103.3	87(7)	160.3	118.9	175.2	121.7
47(4)	102.2	101.7	103.0	102.1	88(8)	116.5	117.9	116.1	120.0
48(寛延 1)	103.3	101.7	104.0	102.3	89(寛政 1)	114.2	115.2	108.8	116.7
49(2)	97.2	100.3	96.3	100.2	90(2)	93.1	105.3	91.4	104.4
50(3)	100.0	97.9	100.0	97.2	1791(3)	92.1	104.5	92.0	104.0
1751(宝暦 1)	98.7	92.8	97.9	91.3	92(4)	110.8	101.6	113.8	101.8
52(2)	90.4	88.4	87.6	86.3	93(5)	112.3	103.2	114.3	104.2
53(3)	77.5	87.2	74.4	85.1	94(6)	99.6	106.1	97.9	107.6

付表 1-2 (その2) 消費者物価指数の動向 (旧データ)

年次	新消費者物価指数 (米のウェイト50%)		旧消費者物価指数 (同 68.5%)		年次	新消費者物価指数 (米のウェイト50%)		旧消費者物価指数 (同 68.5%)	
	指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均		指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均
1795(寛政 7)	101.3	104.8	103.0	106.2	1834(天保 5)	133.8	117.9	141.5	123.6
1796(8)	106.8	103.0	109.3	104.4	35(6)	105.2	134.5	107.3	142.5
97(9)	104.2	103.3	106.4	105.5	1836(7)	128.7	139.2	137.2	146.2
98(10)	103.0	104.2	105.7	107.0	37(8)	185.8	140.8	199.9	146.0
99(11)	101.1	103.5	103.3	106.2	38(9)	142.5	141.0	145.3	145.3
1800(12)	105.9	102.1	110.5	104.8	39(10)	141.8	136.5	140.4	138.8
1801(享和 1)	103.3	100.6	105.4	102.7	40(11)	106.6	121.3	103.5	121.1
02(2)	97.1	96.7	98.9	98.1	1841(12)	106.0	113.2	104.8	112.7
03(3)	95.4	92.1	95.3	92.2	42(13)	109.5	106.0	111.4	106.6
04(文化 1)	82.1	88.7	80.4	88.3	43(14)	102.3	106.8	103.3	109.1
05(2)	82.6	87.4	81.0	86.6	44(弘化 1)	105.5	108.9	110.0	112.6
1806(3)	86.2	88.6	85.7	88.2	45(2)	110.4	110.5	116.1	114.5
07(4)	90.6	92.1	90.4	92.6	1846(3)	116.8	114.1	122.3	118.7
08(5)	101.6	93.0	103.6	93.7	47(4)	117.5	119.1	120.7	123.6
09(6)	99.6	93.7	102.4	94.4	48(嘉永 1)	120.1	125.7	124.1	131.3
10(7)	87.3	93.0	86.5	93.5	49(2)	130.5	133.6	134.7	139.4
1811(8)	89.6	90.0	89.3	90.2	50(3)	143.9	133.5	154.7	139.6
12(9)	86.7	89.5	85.9	89.6	1851(4)	155.9	134.8	162.9	141.5
13(10)	86.8	91.5	87.0	92.3	52(5)	117.1	135.8	121.5	142.8
14(11)	96.9	92.1	99.3	93.3	53(6)	126.9	130.4	133.6	135.8
15(12)	97.2	94.8	100.1	96.7	54(安政 1)	135.1	121.9	141.2	126.4
1816(13)	92.6	95.7	94.4	97.7	55(2)	116.8	124.2	119.9	128.5
17(14)	100.2	93.6	102.8	94.8	1856(3)	113.5	129.8	115.6	134.7
18(文政 1)	91.6	90.0	92.0	90.1	57(4)	128.5	134.5	132.3	139.8
19(2)	86.4	89.0	84.5	88.3	58(5)	154.8	144.2	164.5	150.7
20(3)	79.3	87.2	76.6	86.2	59(6)	158.8	170.8	166.9	179.8
1821(4)	87.5	87.3	85.6	86.4	60(万延 1)	165.4	183.3	174.1	192.5
22(5)	91.2	89.3	92.4	89.1	1861(文久 1)	246.6	196.5	260.9	204.4
23(6)	92.0	93.0	92.9	93.7	62(2)	191.1	219.8	196.2	227.3
24(7)	96.7	96.5	98.3	98.3	63(3)	220.7	276.7	223.9	287.5
25(8)	97.5	97.3	99.4	98.7	64(元治 1)	275.5	409.5	281.1	439.9
1826(9)	105.3	98.3	108.5	99.7	65(慶応 1)	449.4	565.2	475.5	608.3
27(10)	95.1	102.2	94.6	104.6	1866(2)	910.9	634.2	1022.6	678.6
28(11)	96.7	103.7	97.6	106.6	67(3)	969.4	721.5	1038.3	774.7
29(12)	116.4	104.9	123.1	108.0	68(明治 1)	565.9	772.1	575.7	829.6
30(天保 1)	105.1	106.4	109.0	110.2	69(2)	711.9	687.6	761.5	722.3
1831(2)	111.4	110.9	115.6	115.9	70(3)	702.4		749.7	
32(3)	102.6	114.4	105.5	119.6	1871(4)	488.4		486.2	
33(4)	119.0	114.4	126.5	119.3					

(出所) 三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物價の動態』(日本学術振興会、1952年)。

付表 1 - 3 (その1) 大工と左官賃金の動向 (旧データ)

年次	大工賃金					左官賃金				
	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5カ年移動変動係数	貨幣賃金指数(1750年=100)	実質賃金指数(1750年=100)	同5カ年平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5カ年移動変動係数	貨幣賃金指数(1750年=100)	実質賃金指数(1750年=100)	同5カ年平均
1713(正徳 3)										
14(4)										
15(5)										
1716(享保 1)										
17(2)										
18(3)										
19(4)										
20(5)										
1721(6)										
22(7)										
23(8)										
24(9)										
25(10)										
1726(11)	2.00		71.4	80.9						
27(12)	2.00		71.4	85.2						
28(13)	2.00	0.0	71.4	98.9	93.9					
29(14)	2.00	0.0	71.4	102.7	98.3					
30(15)	2.00	4.6	71.4	101.7	95.9					
1731(16)	2.00		71.4	103.1						
32(17)	1.80		64.3	73.0						
33(18)										
34(19)										
35(20)										
1736(元文 1)										
37(2)										
38(3)										
39(4)										
40(5)										
1741(寛保 1)										
42(2)										
43(3)										
44(延享 1)										
45(2)										
1746(3)	2.80		100.0	94.3		3.00		100.0	94.3	
47(4)										
48(寛延 1)										
49(2)										
50(3)	2.80		100.0	100.0		3.00		100.0	100.0	
1751(宝暦 1)	2.90		103.6	104.9		3.00		100.0	101.3	
52(2)	2.80	19.9	100.0	110.6	128.7	3.00	4.4	100.0	110.6	117.3
53(3)	2.80	22.2	100.0	129.0	140.6	3.00	5.3	100.0	129.0	120.8

付表 1-3 (その2) 大工と左官賃金の動向 (旧データ)

年次	大工賃金					左官賃金				
	貨幣賃 金(1人 二付 銀匁)	5ヵ年 移動 変動 係数	貨幣賃 金指数 (1750年 = 100)	実質賃 金指数 (1750年 = 100)	同 5 ヵ年 移 動 平 均	貨幣賃 金(1人 二付 銀匁)	5ヵ年 移動 変動 係数	貨幣賃 金指数 (1750年 = 100)	実質賃 金指数 (1750年 = 100)	同 5 ヵ年 移 動 平 均
1754(宝暦 4)	4.20	21.1	150.0	199.0	146.2	3.30	5.2	110.0	145.9	120.0
55(5)	4.20	16.0	150.0	159.7	152.1	3.30	4.1	110.0	117.1	118.4
1756(6)	4.20	16.0	150.0	132.6	146.3	3.30		110.0	97.2	
57(7)	4.20	21.1	150.0	140.3	126.8	3.30		110.0	102.9	
58(8)	2.80		100.0	99.9						
59(9)	2.80		100.0	101.3						
60(10)										
1761(11)										
62(12)										
63(13)										
64(明和 1)										
65(2)										
1766(3)										
67(4)										
68(5)										
69(6)										
70(7)										
1771(8)										
72(安永 1)										
73(2)	2.90		103.6	113.1						
74(3)	2.90		103.6	119.5						
75(4)	2.90	0.0	103.6	113.2	112.7					
1776(5)	2.90	0.0	103.6	109.8	112.8					
77(6)	2.90	0.0	103.6	107.8	112.6	3.00		100.0	104.1	
78(7)	2.90	0.0	103.6	113.5	115.2	3.00		100.0	109.6	
79(8)	2.90	0.0	103.6	118.6	117.3	3.00	0.0	100.0	114.6	113.2
80(9)	2.90	0.0	103.6	126.4	116.2	3.00		100.0	122.0	
1781(天明 1)	2.90	0.0	103.6	119.9	112.0	3.00		100.0	115.8	
82(2)	2.90	0.0	103.6	102.4	105.3					
83(3)	2.90	0.0	103.6	92.6	101.2					
84(4)	2.90	0.0	103.6	85.4	96.9					
85(5)	2.90		103.6	105.6						
1786(6)	2.90		103.6	98.2						
87(7)						3.00		100.0	62.4	
88(8)	2.90		103.6	88.9						
89(寛政 1)	2.90		103.6	90.7						
90(2)	2.90	0.0	103.6	111.3	99.4					
1791(3)	2.90	0.0	103.6	112.5	100.0					
92(4)	2.90	0.0	103.6	93.5	102.7	3.00		100.0	90.3	
93(5)	2.90	0.0	103.6	92.2	100.9					
94(6)	2.90	0.0	103.6	104.0	97.8					

付表 1-3 (その3) 大工と左官賃金の動向(旧データ)

年次	大工賃金					左官賃金				
	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5カ年移動変動係数	貨幣賃金指数(1750年=100)	実質賃金指数(1750年=100)	同5カ年移動平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5カ年移動変動係数	貨幣賃金指数(1750年=100)	実質賃金指数(1750年=100)	同5カ年移動平均
1795(寛政 7)	2.90	0.0	103.6	102.3	99.0					
1796(8)	2.90	0.0	103.6	97.0	100.6					
97(9)	2.90	0.0	103.6	99.4	100.3					
98(10)	2.90	0.0	103.6	100.5	99.4					
99(11)	2.90	0.0	103.6	102.4	100.1					
1800(12)	2.90	0.0	103.6	97.8	101.5					
1801(享和 1)	2.90	0.0	103.6	100.3	103.2					
02(2)	2.90	0.0	103.6	106.7	107.9					
03(3)	2.90	0.0	103.6	108.5	113.4					
04(文化 1)	2.90	0.0	103.6	126.2	117.4					
05(2)	2.90	0.0	103.6	125.4	118.9	3.00		100.0	121.0	
1806(3)	2.90	0.0	103.6	120.2	117.6	3.00		100.0	116.1	
07(4)	2.90	0.0	103.6	114.3	113.2	3.00	0.0	100.0	110.4	109.3
08(5)	2.90	0.0	103.6	102.0	111.8	3.00	0.0	100.0	98.4	108.0
09(6)	2.90	0.0	103.6	104.0	110.9	3.00	0.0	100.0	100.4	107.1
10(7)	2.90	0.0	103.6	118.6	111.9	3.00	0.0	100.0	114.5	108.1
1811(8)	2.90	0.0	103.6	115.6	115.4	3.00	0.0	100.0	111.6	111.4
12(9)	2.90	0.0	103.6	119.4	116.0	3.00	0.0	100.0	115.3	112.0
13(10)	2.90	0.0	103.6	119.3	113.5	3.00	0.0	100.0	115.2	109.6
14(11)	2.90	0.0	103.6	106.9	112.8	3.00	0.0	100.0	103.2	108.9
15(12)	2.90	0.0	103.6	106.5	109.6	3.00	0.0	100.0	102.8	105.8
1816(13)	2.90	0.0	103.6	111.8	108.3	2.90		100.0	107.9	
17(14)	2.90	0.0	103.6	103.3	110.9	3.00		100.0	99.8	
18(文政 1)	2.90	0.0	103.6	113.1	115.7					
19(2)	2.90	0.0	103.6	119.9	117.1					
20(3)	2.90	0.0	103.6	130.5	119.1					
1821(4)	2.90	0.0	103.6	118.4	119.0					
22(5)	2.90	0.0	103.6	113.6	116.5					
23(6)	2.90	0.0	103.6	112.6	111.6					
24(7)	2.90	0.0	103.6	107.1	107.6					
25(8)	2.90	0.0	103.6	106.2	106.6					
1826(9)	2.90	0.0	103.6	98.4	105.6	3.00		100.0	95.0	
27(10)	2.90	0.0	103.6	108.9	101.9	3.00		100.0	105.2	
28(11)	2.90	0.0	103.6	107.1	100.4	3.00	0.0	100.0	103.4	96.9
29(12)	2.90	0.0	103.6	89.0	99.3	3.00	0.0	100.0	85.9	95.9
30(天保 1)	2.90	0.0	103.6	98.6	97.7	3.00	0.0	100.0	95.2	94.3
1831(2)	2.90	0.0	103.6	93.0	93.7	3.00	0.0	100.0	89.8	90.5
32(3)	2.90	0.0	103.6	100.9	91.4	3.00	0.0	100.0	97.5	88.2
33(4)	2.90	0.0	103.6	87.0	91.3	3.00	0.0	100.0	84.0	88.2
34(5)	2.90	0.0	103.6	77.4	88.9	3.00	0.0	100.0	74.7	85.8
35(6)	2.90	0.0	103.6	98.4	79.8	3.00	0.0	100.0	95.0	77.1

付表 1-3 (その4) 大工と左官賃金の動向 (旧データ)

年次	大工賃金					左官賃金				
	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5カ年移動変動係数	貨幣賃金指数(1750年=100)	実質賃金指数(1750年=100)	同5カ年平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5カ年移動変動係数	貨幣賃金指数(1750年=100)	実質賃金指数(1750年=100)	同5カ年平均
1836(天保 7)	2.90	0.0	103.6	80.5	77.0	3.00	0.0	100.0	77.7	74.3
37(8)	2.90	0.0	103.6	55.7	76.1	3.00	0.0	100.0	53.8	73.5
38(9)	2.90	0.0	103.6	72.7	75.8	3.00	0.0	100.0	70.2	73.2
39(10)	2.90	0.0	103.6	73.1	79.3	3.00	0.0	100.0	70.5	76.6
40(11)	2.90	3.1	103.6	97.2	85.7	3.00	4.6	100.0	93.8	82.2
1841(12)	2.90	3.9	103.6	97.7	90.1	3.00	5.7	100.0	94.4	85.8
42(13)	2.70	3.9	96.4	88.0	93.7	2.70	5.8	90.0	82.2	88.7
43(14)	2.70	3.3	96.4	94.3	91.7	2.70	4.9	90.0	88.0	86.3
44(弘化 1)	2.70	0.0	96.4	91.4	88.7	2.70	0.0	90.0	85.3	82.8
45(2)	2.70	0.0	96.4	87.3	87.5	2.70	0.0	90.0	81.5	81.7
1846(3)	2.70	3.3	96.4	82.6	85.9	2.70	4.9	90.0	77.1	80.7
47(4)	2.70	3.9	96.4	82.1	83.5	2.70	5.8	90.0	76.6	79.0
48(嘉永 1)	2.90	3.9	103.6	86.2	80.4	3.00	5.7	100.0	83.3	76.6
49(2)	2.90	3.1	103.6	79.4	77.2	3.00	4.6	100.0	76.6	74.0
50(3)	2.90	0.0	103.6	72.0	78.5	3.00	0.0	100.0	69.5	75.8
1851(4)	2.90	0.0	103.6	66.4	77.6	3.00	0.0	100.0	64.1	74.9
52(5)	2.90	0.0	103.6	88.4	77.0	3.00	0.0	100.0	85.4	74.4
53(6)	2.90	0.0	103.6	81.6	80.4	3.00	0.0	100.0	78.8	77.6
54(安政 1)	2.90	0.0	103.6	76.7	85.3	3.00	0.0	100.0	74.0	82.4
55(2)	2.90	0.0	103.6	88.6	83.8	3.00	0.0	100.0	85.6	80.9
1856(3)	2.90	0.0	103.6	91.2	80.8	3.00	0.0	100.0	88.1	78.0
57(4)	2.90	0.0	103.6	80.6	78.5	3.00	0.0	100.0	77.8	75.8
58(5)	2.90	0.0	103.6	66.9	73.3	3.00	0.0	100.0	64.6	70.8
59(6)	2.90	0.0	103.6	65.2	63.5	3.00	0.0	100.0	63.0	61.3
60(万延 1)	2.90	0.0	103.6	62.6	58.2	3.00	0.0	100.0	60.5	56.2
1861(文久 1)	2.90	0.0	103.6	42.0	54.2	3.00	0.0	100.0	40.5	52.3
62(2)	2.90	10.3	103.6	54.2	50.5	3.00		100.0	52.3	
63(3)	2.90		103.6	46.9		3.00		100.0	45.3	
64(元治 1)	3.60		128.6	46.7						
65(慶応 1)										
1866(2)	17.10		610.7	67.0		11.40		380.0	41.7	
67(3)	16.80		600.0	61.9		19.80		660.0	68.1	
68(明治 1)	16.80		600.0	106.0		19.80		660.0	116.6	
69(2)										
70(3)										
1871(4)										

(出所) 三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物價の動向』(日本学術振興会、1952年)。

付表 1-4 (その1) 建築労働者と日雇労働者賃金の動向 (旧データ)

年次	建築労働者		日雇労働者					日雇労働者実賃金指数 (1750年=1.00)	
	実質賃金指数 (1750年=100)	同5年移動平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5カ年移動変動係数	貨幣賃金指数(1750年=100)	実質賃金指数(1750年=100)	同5年移動平均	同5年移動平均	
1713(正徳 3)			1.20		104.3	55.0			
14(4)									
15(5)									
1716(享保 1)									
17(2)									
18(3)									
19(4)									
20(5)									
1721(6)									
22(7)									
23(8)									
24(9)									
25(10)									
1726(11)	80.9								
27(12)	85.2								
28(13)	98.9	93.9							
29(14)	102.7	98.3							
30(15)	101.7	95.9							
1731(16)	103.1								
32(17)	73.0								
33(18)									
34(19)									
35(20)									
1736(元文 1)									
37(2)									
38(3)									
39(4)									
40(5)									
1741(寛保 1)			0.85		73.9	67.2			
42(2)			0.95		82.6	78.4			
43(3)			0.80	7.6	69.6	66.7	71.8		
44(延享 1)			0.90	7.6	78.3	76.9	72.3		
45(2)			0.80	5.4	69.6	69.8	70.2		
1746(3)	94.3		0.85	7.6	73.9	69.7	72.9	0.74	
47(4)			0.80	7.6	69.6	68.1	73.6		
48(寛延 1)			0.95	14.5	82.6	80.0	79.7		
49(2)			0.90	14.7	78.3	80.5	85.1		
50(3)	100.0		1.15	14.7	100.0	100.0	86.9	1.00	
1751(宝暦 1)	104.2		1.10	17.5	95.7	96.9	88.8	0.93	
52(2)	110.6	126.6	0.80	19.2	69.6	76.9	91.2	0.70	0.76
53(3)	129.0	137.0	0.80	15.6	69.6	89.7	86.0	0.70	0.66

付表 1-4 (その2) 建築労働者と日雇労働者賃金の動向 (旧データ)

年次	建築労働者		日雇労働者					日雇労働者賃金指数 (1750年 = 1.00)	
	実質賃金指数 (1750年 = 100)	同5年移動平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5年移動変動係数	貨幣賃金指数 (1750年 = 100)	実質賃金指数 (1750年 = 100)	同5年移動平均	賃金指数 (1750年 = 1.00)	同5年移動平均
1754(宝暦 4)	189.3	141.4	0.80	0.0	69.6	92.3	78.9	0.49	0.57
55(5)	152.0	146.0	0.80	0.0	69.6	74.1	76.5	0.49	0.53
1756(6)	126.2	140.2	0.80	0.0	69.6	61.5	72.5	0.49	0.53
57(7)	133.5	122.6	0.80	0.0	69.6	65.1	68.1	0.49	0.57
58(8)	99.9		0.80	0.0	69.6	69.5	68.6	0.70	
59(9)	101.3		0.80	0.0	69.6	70.5	72.8	0.70	
60(10)			0.80	0.0	69.6	76.6	76.9		
1761(11)			0.80		69.6	82.5			
62(12)			0.80		69.6	85.3			
63(13)									
64(明和 1)									
65(2)									
1766(3)									
67(4)									
68(5)									
69(6)									
70(7)									
1771(8)									
72(安永 1)									
73(2)	113.1								
74(3)	119.5								
75(4)	113.2	112.6							
1776(5)	109.8	112.5							
77(6)	107.2	112.2							
78(7)	112.8	114.7							
79(8)	117.9	116.5							
80(9)	125.6	115.6							
1781(天明 1)	119.1	111.5							
82(2)	102.4	105.0							
83(3)	92.6	101.0							
84(4)	85.4	96.9							
85(5)	105.6	88.8							
1786(6)	98.2	88.1							
87(7)	62.4	89.2							
88(8)	88.9	90.3							
89(寛政 1)	90.7	93.2							
90(2)	111.3	99.3							
1791(3)	112.5	99.9	0.80		69.6	75.6		0.67	
92(4)	92.9	102.6	0.95		82.6	74.6		0.80	
93(5)	92.2	100.8	0.90	7.6	78.3	69.7	72.5	0.76	0.72
94(6)	104.0	97.7	0.80	7.6	69.6	69.8	70.4	0.67	0.72

付表 1-4 (その3) 建築労働者と日雇労働者賃金の動向 (旧データ)

年次	建築労働者		日雇労働者					日雇労働者実質賃金指数 (1750年=1.00)	
	実質賃金指数 (1750年=100)	同5年移動平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5年移動変動係数	貨幣賃金指数 (1750年=100)	実質賃金指数 (1750年=100)	同5年移動平均	同5年移動平均	
1795(寛政 7)	102.3	99.0	0.85	5.4	73.9	73.0	68.9	0.71	0.70
1796(8)	97.0	100.6	0.80	3.3	69.6	65.1	69.3	0.67	0.69
97(9)	99.4	100.3	0.80	3.3	69.6	66.8	69.1	0.67	0.69
98(10)	100.5	99.4	0.85	5.4	73.9	71.7	69.3	0.71	0.70
99(11)	102.4	100.1	0.80	5.4	69.6	68.8	69.7	0.67	0.70
1800(12)	97.8	101.5	0.90	5.4	78.3	73.9	70.7	0.76	0.70
1801(享和 1)	100.3	103.2	0.80	5.5	69.6	67.4	70.9	0.67	0.69
02(2)	106.7	107.9	0.80	12.6	69.6	71.7	79.4	0.67	0.73
03(3)	108.5	113.3	0.80	14.2	69.6	72.9	80.4	0.67	0.71
04(文化 1)	126.2	117.1	1.05	20.3	91.3	111.2	79.1	0.88	0.67
05(2)	124.6	118.5	0.75	24.4	65.2	78.9	76.2	0.63	0.64
1806(3)	119.5	117.0	0.60	25.9	52.2	60.6	72.8	0.51	0.62
07(4)	113.6	112.5	0.60	15.7	52.2	57.6	65.4	0.51	0.58
08(5)	101.3	111.1	0.65	20.0	56.5	55.6	67.5	0.55	0.61
09(6)	103.4	110.2	0.85	17.5	73.9	74.2	71.9	0.72	0.65
10(7)	117.8	111.2	0.90	12.5	78.3	89.6	78.4	0.76	0.70
1811(8)	114.9	114.7	0.85	4.7	73.9	82.5	86.3	0.72	0.75
12(9)	118.7	115.2	0.90	8.2	78.3	90.2	90.3	0.76	0.79
13(10)	118.5	112.8	0.95	9.3	82.6	95.1	91.2	0.80	0.81
14(11)	106.2	112.1	1.05	6.8	91.3	94.2	92.5	0.89	0.83
15(12)	105.8	108.9	1.05	8.6	91.3	93.9	89.2	0.89	0.82
1816(13)	111.1	107.8	0.95	9.3	82.6	89.2	87.3	0.80	0.81
17(14)	102.7	110.5	0.85	9.1	73.9	73.8	85.6	0.72	0.78
18(文政 1)	113.1	115.5	0.90	5.1	78.3	85.4	85.4	0.76	0.74
19(2)	119.9	116.9	0.85	7.3	73.9	85.6	87.5	0.71	0.75
20(3)	130.5	119.1	0.85		73.9	93.2		0.71	
1821(4)	118.4	119.0	1.00		87.0	99.4		0.84	
22(5)	113.6	116.5							
23(6)	112.6	111.6							
24(7)	107.1	107.5							
25(8)	106.2	106.4							
1826(9)	97.7	105.2							
27(10)	108.2	101.4							
28(11)	106.5	99.8							
29(12)	88.4	98.7							
30(天保 1)	98.0	97.1							
1831(2)	92.4	93.1							
32(3)	100.3	90.8							
33(4)	86.5	90.8							
34(5)	76.9	88.3							
35(6)	97.8	79.3							

付表 1-4 (その4) 建築労働者と日雇労働者賃金の動向 (旧データ)

年次	建築労働者		日雇労働者					日雇労働者賃金指数 (1750年 = 1.00)	実賃金 同5年移動平均
	実賃金指数 (1750年 = 100)	同5年移動平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	5年移動変動係数	貨幣賃金指数 (1750年 = 100)	実賃金指数 (1750年 = 100)	同5年移動平均		
1836(天保 7)	80.0	76.5							
37(8)	55.4	75.6							
38(9)	72.2	75.4							
39(10)	72.6	78.8							
40(11)	96.6	85.1							
1841(12)	97.1	89.3							
42(13)	87.0	92.8							
43(14)	93.1	90.7							
44(弘化 1)	90.3	87.6							
45(2)	86.3	86.5							
1846(3)	81.6	85.0							
47(4)	81.1	82.7							
48(嘉永 1)	85.7	79.8							
49(2)	78.9	76.6							
50(3)	71.5	78.0							
1851(4)	66.0	77.1							
52(5)	87.9	76.6							
53(6)	81.1	79.9							
54(安政 1)	76.2	84.8							
55(2)	88.1	83.2							
1856(3)	90.7	80.3							
57(4)	80.1	78.0							
58(5)	66.5	72.9							
59(6)	64.8	63.1							
60(万延 1)	62.2	57.8							
1861(文久 1)	41.7	53.9							
62(2)	53.9	50.2							
63(3)	46.6								
64(元治 1)	46.7								
65(慶応 1)									
1866(2)	62.4								
67(3)	63.0								
68(明治 1)	108.0								
69(2)									
70(3)									
1871(4)									

(出所) 三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物價の動態』(日本学術振興会、1952年)。

付表 1-5 (その1) 個別商品

年次	白米			餅米			塩			味噌		
	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均
1713(正徳 3) 14(4) 15(5)	151.51	214.24								31.74	173.68	
1716(享保 1) 17(2) 18(3) 19(4) 20(5)												
1721(6) 22(7) 23(8) 24(9) 25(10)												
1726(11) 27(12) 28(13) 29(14) 30(15)												
1731(16) 32(17) 33(18) 34(19) 35(20)												
1736(元文 1) 37(2) 38(3) 39(4) 40(5)												
1741(寛保 1) 42(2) 43(3) 44(延享 1) 45(2)	90.83 83.52 80.78 79.96 76.22	128.44 118.09 114.22 113.06 107.78		103.00 99.71 91.97 91.44 95.39	148.05 143.32 132.20 131.43 137.86 137.11					18.85 15.90 16.59 15.50 16.04	103.12 87.00 90.78 84.79 87.74	
1746(3) 47(4) 48(寛延 1) 49(2) 50(3)	86.59 80.98 81.41 73.42 77.05	122.44 114.50 115.11 103.82 108.95	114.58 112.73 112.96 109.62 104.88	101.03 88.80 96.98 98.75 87.10	145.22 127.64 139.40 141.94 125.19	136.16 138.26 135.88 130.77 126.54				17.07 17.19 18.20 16.21 15.41	93.38 94.06 99.56 88.67 84.30	91.91 92.68 91.99 89.17 85.34
1751(宝暦 1) 52(2) 53(3)	74.75 64.24 53.60	105.70 90.83 75.78	97.02 90.47 89.38	83.25 74.12 69.40	119.66 106.53 99.76	118.62 111.77 111.85				14.49 13.69 12.78	79.26 74.88 69.93	79.41 76.22 77.48

価格の動向（新データ）

醤油			酒作			酒			煎茶			年次
春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1斤二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	
123.10	172.61		93.96	208.80		221.20	189.18		1.28	145.46		1713(正徳 3) 14(4) 15(5) 1716(享保 1) 17(2) 18(3) 19(4) 20(5) 1721(6) 22(7) 23(8) 24(9) 25(10) 1726(11) 27(12) 28(13) 29(14) 30(15) 1731(16) 32(17) 33(18) 34(19) 35(20) 1736(元文 1) 37(2) 38(3) 39(4) 40(5)
74.24	104.10		42.27	93.92		119.16	101.91		0.96	109.09		1741(寛保 1)
74.11	103.92		40.76	90.58		127.26	108.84		0.97	109.66		42(2)
82.98	116.36	111.82	36.77	81.70	84.14	125.42	107.27	106.50	1.01	114.77	111.59	43(3)
80.34	112.65	115.20	35.24	78.30	79.62	128.55	109.94	107.09	1.02	115.34	112.27	44(延享 1)
87.07	122.09	119.59	34.29	76.19	77.08	122.26	104.56	105.35	0.96	109.09	113.41	45(2)
86.27	120.97	121.34	32.09	71.31	76.76	122.59	104.85	103.87	0.99	112.50	115.11	1746(3)
89.77	125.88	123.85	35.07	77.92	77.17	117.06	100.12	101.83	1.02	115.34	113.41	47(4)
89.22	125.11	125.93	36.04	80.08	77.07	116.78	99.87	100.66	1.09	123.30	111.93	48(寛延 1)
89.29	125.20	129.22	36.16	80.34	77.65	116.65	99.76	99.74	0.94	106.82	111.02	49(2)
94.48	132.48	130.94	34.06	75.68	76.76	115.41	98.70	99.55	0.90	101.71	110.68	50(3)
98.03	137.45	130.99	33.41	74.23	74.57	117.20	100.24	95.67	0.95	107.96	108.98	1751(宝暦 1)
95.88	134.45	131.53	33.05	73.44	72.80	115.95	99.17	91.22	1.00	113.64	114.66	52(2)
89.42	125.39	130.82	31.13	69.17	73.87	94.09	80.47	88.82	1.01	114.77	120.68	53(3)

付表 1-5 (その2) 個別商品

年次	白米			餅米			塩			味噌		
	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1俵二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均
1754(宝暦 4)	50.28	71.10	94.66	74.94	107.72	115.79				13.30	72.75	82.64
55(5)	73.17	103.46	99.53	87.38	125.59	121.38				16.56	90.59	88.18
1756(6)	93.46	132.15	105.46	96.93	139.33	129.72				19.20	105.03	93.73
57(7)	81.44	115.16	111.92	93.57	134.49	132.56				18.75	102.60	95.95
58(8)	74.58	105.45	109.36	98.42	141.47	128.29				17.85	97.67	93.25
59(9)	73.11	103.37	99.24	84.81	121.90	120.89				15.32	83.83	87.74
60(10)	64.14	90.69	91.85	72.55	104.28	113.96				14.09	77.10	82.21
1761(11)	57.66	81.53		71.16	102.29					14.16	77.48	
62(12)	55.30	78.20		69.47	99.86					13.70	74.97	
63(13)												
64(明和 1)												
65(2)												
1766(3)												
67(4)												
68(5)												
69(6)												
70(7)												
1771(8)												
72(安永 1)												
73(2)												
74(3)												
75(4)												
1776(5)												
77(6)												
78(7)												
79(8)												
80(9)												
1781(天明 1)												
82(2)												
83(3)												
84(4)												
85(5)												
1786(6)												
87(7)												
88(8)												
89(寛政 1)												
90(2)												
1791(3)	70.71	99.98		94.65	136.05		6.27	103.13		18.05	98.77	
92(4)	92.08	130.20		104.03	149.53		6.65	109.38		19.26	105.39	
93(5)	91.21	128.97	115.16	104.35	149.99	142.36	6.75	111.02	105.66	18.57	101.59	100.86
94(6)	73.55	104.00	120.03	96.75	139.07	144.12	6.25	102.80	106.15	17.86	97.73	101.20

価格の動向（新データ）

醤油			酢			酒			煎茶			年次
春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1斤二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	
91.20	127.88	129.63	32.17	71.48	76.74	90.64	77.52	90.60	1.19	135.23	124.20	1754(宝暦 4)
91.95	128.94	129.11	36.47	81.04	79.57	101.41	86.73	93.90	1.16	131.82	127.95	55(5)
93.79	131.52	130.55	39.85	88.56	83.51	127.60	109.13	98.67	1.11	125.57	129.77	1756(6)
94.00	131.81	131.13	39.43	87.61	87.38	135.21	115.63	104.62	1.17	132.39	124.09	57(7)
94.58	132.62	131.38	39.99	88.86	90.36	122.00	104.34	108.14	1.09	123.86	121.93	58(8)
93.26	130.77	130.49	40.87	90.82	92.02	125.44	107.28	105.77	0.94	106.82	122.73	59(9)
92.85	130.19	129.47	43.18	95.94	93.73	121.97	104.32	101.33	1.07	121.02	123.30	60(10)
90.62	127.07		43.59	96.86		113.75	97.28		1.14	129.55		1761(11)
90.36	126.71		43.28	96.18		109.22	93.41		1.19	135.23		62(12)
												63(13)
												64(明和 1)
												65(2)
												1766(3)
												67(4)
												68(5)
												69(6)
												70(7)
												1771(8)
												72(安永 1)
												73(2)
												74(3)
												75(4)
												1776(5)
												77(6)
												78(7)
												79(8)
												80(9)
												1781(天明 1)
												82(2)
												83(3)
												84(4)
												85(5)
												1786(6)
												87(7)
												88(8)
												89(寛政 1)
												90(2)
78.34	109.84		49.53	110.06		111.28	95.17		1.02	115.91		1791(3)
77.49	108.66		48.98	108.83		136.61	116.84		0.98	111.36		92(4)
77.89	109.21	108.96	50.28	111.72	113.67	151.83	129.85	108.90	1.05	119.32	116.93	93(5)
77.53	108.71	108.55	50.91	113.13	114.42	118.12	101.02	111.81	1.04	117.61	118.52	94(6)

付表 1-5 (その3) 個別商品

年次	白米			餅米			塩			味噌		
	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1俵二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均
1795(寛政 7)	79.68	112.66	118.13	95.42	137.15	142.54	6.20	101.97	99.18	18.43	100.82	100.49
1796(8)	87.92	124.31	116.49	100.78	144.86	140.09	6.42	105.59	97.88	18.36	100.47	100.71
97(9)	85.37	120.71	118.55	98.52	141.61	138.64	4.53	74.51	95.92	18.61	101.83	99.97
98(10)	85.40	120.75	121.92	95.83	137.75	140.55	6.36	104.52	91.92	18.77	102.71	99.87
99(11)	80.83	114.29	121.14	91.72	131.84	140.66	5.66	93.01	94.06	17.19	94.04	100.02
1800(12)	91.63	129.56	119.38	102.04	146.67	141.40	4.99	81.99	104.15	18.34	100.33	98.99
1801(享和 1)	85.14	120.39	115.96	101.19	145.45	137.36	7.07	116.28	109.42	18.49	101.18	98.17
02(2)	79.15	111.91	110.12	101.08	145.29	130.97	7.60	124.92	111.83	17.68	96.72	96.16
03(3)	73.29	103.63	101.37	81.77	117.54	124.45	7.96	130.92	115.40	18.02	98.60	95.30
04(文化 1)	60.19	85.11	95.92	69.51	99.91	117.09	6.39	105.02	112.24	15.35	83.99	93.48
05(2)	60.68	85.80	93.25	79.33	114.03	118.69	6.07	99.84	107.58	17.55	96.01	93.55
1806(3)	65.87	93.14	95.97	75.62	108.70	123.63	6.11	100.49	103.65	16.83	92.07	94.00
07(4)	69.70	98.56	102.46	106.63	153.27	128.43	6.18	101.65	104.75	17.75	97.10	96.68
08(5)	82.91	117.24	103.92	98.96	142.25	127.79	6.77	111.27	106.04	18.43	100.82	95.11
09(6)	83.13	117.55	104.75	86.21	123.91	129.79	6.72	110.53	107.22	17.80	97.40	93.93
10(7)	65.85	93.11	103.55	77.10	110.82	121.52	6.46	106.25	107.96	16.11	88.15	90.64
1811(8)	68.80	97.29	99.22	82.59	118.72	117.54	6.47	106.41	107.53	15.75	86.16	86.73
12(9)	65.47	92.57	98.60	77.84	111.89	115.21	6.41	105.35	105.61	14.74	80.66	86.28
13(10)	67.61	95.60	103.06	85.14	122.38	118.16	6.64	109.13	104.57	14.85	81.26	87.49
14(11)	80.93	114.44	104.96	78.07	112.22	121.97	6.14	100.91	105.79	17.40	95.18	89.33
15(12)	81.62	115.41	109.92	87.37	125.59	125.18	6.15	101.07	105.97	17.22	94.20	93.20
1816(13)	75.50	106.76	110.81	95.86	137.79	120.70	6.84	112.50	104.15	17.43	95.35	96.95
17(14)	83.04	117.41	105.38	88.98	127.90	116.20	6.46	106.25	103.42	18.28	100.00	97.02
18(文政 1)	70.72	100.00	98.25	69.57	100.00	115.47	6.08	100.00	105.63	18.28	100.00	96.53
19(2)	61.75	87.32	94.74	62.43	89.74	109.02	5.92	97.29	104.79	17.47	95.57	95.49
20(3)	56.42	79.77	91.18	84.81	121.91	105.69	6.82	112.09	102.29	16.77	91.74	93.94
1821(4)	63.08	89.20	91.08	73.45	105.58		6.59	108.31	102.16	16.47	90.12	96.69
22(5)	70.44	99.60	94.77	77.38	111.23		5.70	93.75	99.97	16.87	92.28	99.33
23(6)	70.36	99.49	101.04				6.04	99.34	99.65	20.79	113.76	102.09
24(7)	74.81	105.78	108.05	84.51	121.48		5.25	86.35	101.68	19.88	108.76	110.09
25(8)	78.58	111.11	108.67	105.89	152.21		6.72	110.53	104.10	19.29	105.53	110.54
1826(9)	87.90	124.29	111.70				7.20	118.42	104.80	23.78	130.12	109.26
27(10)	72.62	102.69	119.81	80.06	115.08		6.44	105.84	111.50	17.28	94.56	112.19
28(11)	81.08	114.65	122.89	110.77	159.22		6.26	102.88	110.74	19.62	107.33	113.97
29(12)	103.47	146.30	125.43	107.89	155.08	145.47	7.29	119.82	112.01	22.55	123.39	111.96
30(天保 1)	89.48	126.53	128.19	99.04	142.36	152.94	6.49	106.74	113.65	20.92	114.45	115.97
1831(2)	96.88	136.99	134.74	108.26	155.61	157.61	7.59	124.75	112.48	21.95	120.08	119.13
32(3)	82.37	116.47	139.53	106.04	152.42	156.46	6.94	114.06	110.31	20.95	114.61	121.72
33(4)	104.26	147.42	139.29	127.00	182.55	160.39	5.90	97.04	109.16	22.50	123.09	123.74
34(5)	120.39	170.24	145.93	103.90	149.35	178.60	6.63	108.96	105.59	24.93	136.39	126.00
35(6)	88.65	125.35	173.11	112.73	162.04	185.81	6.14	100.99	109.10	22.76	124.54	141.02

価格の動向（新データ）

醤油			酢			酒			煎茶			年次
春秋平均(1石二付銀匁)	指数(18年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(18年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(18年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1斤二付銀匁)	指数(18年=100)	同5カ年移動平均	
77.29	108.37	109.59	56.07	124.60	112.61	118.82	101.62	110.89	1.06	120.46	118.64	1795(寛政 7)
76.88	107.80	108.63	51.22	113.82	115.78	128.28	109.71	105.92	1.09	123.86	118.75	1796(8)
81.20	113.86	106.48	44.91	99.79	114.46	131.26	112.26	106.94	0.99	111.93	119.21	97(9)
74.45	104.39	104.03	57.40	127.54	110.87	122.79	105.01	108.91	1.06	119.89	122.16	98(10)
69.86	97.96	101.76	47.95	106.54	109.05	124.09	106.12	109.89	1.06	119.89	124.20	99(11)
68.57	96.14	98.15	47.99	106.64	110.14	130.30	111.44	108.55	1.19	135.23	127.16	1800(12)
68.77	96.42	96.13	47.13	104.73	105.64	134.00	114.60	109.60	1.18	134.09	131.71	1801(享和 1)
68.33	95.81	94.25	47.37	105.26	105.16	123.45	105.58	107.99	1.12	126.71	134.66	02(2)
67.26	94.31	92.74	47.25	105.00	104.00	128.92	110.26	104.90	1.26	142.61	135.11	03(3)
63.14	88.53	92.98	46.88	104.18	103.68	114.66	98.06	100.88	1.19	134.66	132.16	04(文化 1)
63.20	88.61	94.96	45.38	100.84	103.17	112.27	96.01	99.30	1.21	137.50	133.64	05(2)
69.64	97.64	96.67	46.41	103.13	102.96	110.47	94.48	99.06	1.05	119.32	130.91	1806(3)
75.37	105.68	98.28	46.22	102.70	102.76	114.21	97.67	100.24	1.18	134.09	132.39	07(4)
73.38	102.89	99.92	46.79	103.97	103.31	127.54	109.08	101.55	1.14	128.98	136.70	08(5)
68.86	96.55	99.60	46.41	103.13	103.48	121.53	103.94	103.33	1.25	142.05	148.18	09(6)
69.06	96.84	97.68	46.63	103.61	103.67	119.95	102.58	104.41	1.40	159.09	152.84	10(7)
68.50	96.05	96.40	46.79	103.97	103.67	120.86	103.37	101.85	1.56	176.71	160.34	1811(8)
68.52	96.08	96.60	46.65	103.67	103.89	120.55	103.10	101.50	1.39	157.39	167.61	12(9)
68.81	96.49	96.77	46.79	103.98	103.84	112.56	96.27	101.50	1.47	166.48	163.52	13(10)
69.58	97.56	97.13	46.90	104.21	103.47	119.50	102.20	100.87	1.57	178.41	149.20	14(11)
69.66	97.67	97.69	46.51	103.36	102.88	119.92	102.56	101.03	1.22	138.64	136.59	15(12)
69.78	97.85	98.39	45.97	102.16	102.08	117.20	100.23	101.78	0.93	105.11	123.30	1816(13)
70.53	98.89	98.82	45.31	100.68	100.17	121.47	103.89	100.26	0.83	94.32	109.21	17(14)
71.32	100.00	98.94	45.00	100.00	95.58	116.93	100.00	98.40	0.88	100.00	102.16	18(文政 1)
71.09	99.68	99.15	42.61	94.68	91.12	110.61	94.59	97.06	0.95	107.96	102.61	19(2)
70.11	98.30	99.41	36.19	80.41	87.35	109.05	93.26	94.37	0.91	103.41	106.14	20(3)
70.53	98.89	99.59	35.93	79.83	83.52	109.41	93.57	92.72	0.95	107.39	108.41	1821(4)
71.46	100.20	99.62	36.83	81.84	81.16	105.73	90.42	92.68	0.99	111.93	110.46	22(5)
71.93	100.86	99.94	36.38	80.84	83.78	107.27	91.74	94.14	0.98	111.36	116.93	23(6)
71.21	99.85	100.11	37.30	82.88	87.22	110.37	94.39	98.07	1.04	118.18	119.77	24(7)
71.24	99.89	99.63	42.07	93.49	89.08	117.60	100.58	101.45	1.20	135.80	112.84	25(8)
71.12	99.73	99.37	43.67	97.04	93.07	132.36	113.20	103.21	1.07	121.59	105.68	1826(9)
69.75	97.80	99.69	41.03	91.17	95.06	125.52	107.35	109.08	0.68	77.27	97.16	27(10)
71.01	99.57	100.53	45.35	100.77	95.99	117.57	100.55	110.89	0.67	75.57	85.11	28(11)
72.37	101.48	101.61	41.77	92.82	95.73	144.68	123.73	112.74	0.67	75.57	76.02	29(12)
74.23	104.09	105.52	44.16	98.13	96.64	128.18	109.63	113.41	0.67	75.57	76.02	30(天保 1)
74.95	105.09	109.17	43.10	95.78	95.14	143.14	122.42	115.58	0.67	76.14	76.02	1831(2)
83.69	117.35	111.29	43.06	95.69	94.87	129.48	110.74	120.82	0.68	77.27	76.25	32(3)
84.05	117.85	111.91	41.98	93.29	94.54	130.23	111.38	121.19	0.67	75.57	76.59	33(4)
79.91	112.05	112.92	41.15	91.44	94.49	175.33	149.95	122.46	0.68	76.70	76.82	34(5)
76.45	107.20	112.84	43.43	96.51	95.29	130.35	111.48	141.80	0.68	77.27	76.48	35(6)

付表 1-5 (その4) 個別商品

年次	白米			餅米			塩			味噌		
	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年平均	春秋平均(1俵二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年平均
1836(天保 7)	120.35	170.18	177.87	171.60	246.66	193.00	6.50	106.91	118.50	24.01	131.35	151.74
37(8)	178.49	252.39	175.35	131.11	188.46	191.07	8.00	131.58	122.06	34.68	189.74	159.08
38(9)	121.06	171.18	173.59	152.00	218.49	188.77	8.76	144.08	123.57	32.29	176.69	162.75
39(10)	111.49	157.65	162.03	97.20	139.72	168.91	7.71	126.73	125.54	31.63	173.05	162.78
40(11)	82.43	116.56	135.91	104.74	150.55	156.78	6.60	108.55	122.25	26.12	142.90	152.06
1841(12)	79.46	112.36	124.81	102.50	147.33	143.55	7.10	116.78	116.28	24.04	131.52	142.53
42(13)	86.13	121.78	116.82	88.91	127.80	149.53	7.00	115.13	113.31	24.88	136.14	133.07
43(14)	81.81	115.68	119.58	106.00	152.37	151.62	6.95	114.23	113.47	23.58	129.03	129.24
44(弘化 1)	83.25	117.72	125.72	118.00	169.61	153.35	6.80	111.84	110.10	22.98	125.75	127.78
45(2)	92.18	130.34	128.57	112.00	160.99	161.71	6.65	109.38	110.10	22.62	123.78	127.08
1846(3)	101.20	143.10	133.67	108.50	155.96	171.91	6.08	99.92	115.46	22.70	124.21	126.56
47(4)	96.20	136.03	139.43	118.00	169.61	171.77	7.00	115.13	121.18	24.24	132.61	132.08
48(嘉永 1)	99.82	141.14	151.07	141.50	203.39	184.14	8.58	141.04	121.86	23.11	126.43	139.48
49(2)	103.63	146.54	160.20	117.50	168.90	194.05	8.54	140.46	125.40	28.03	153.35	148.86
50(3)	133.33	188.53	160.30	155.02	222.82	195.41	6.86	112.75	124.87	29.38	160.77	153.37
1851(4)	133.50	188.77	162.38	143.00	205.55	192.25	7.15	117.60	116.07	31.28	171.14	160.65
52(5)	96.56	136.53	164.50	122.72	176.39	192.76	6.84	112.50	106.07	28.36	155.16	162.87
53(6)	107.15	151.51	152.46	130.50	187.58	180.42	5.90	97.04	101.61	29.76	162.82	163.64
54(安政 1)	111.15	157.16	140.20	119.29	171.46	171.49	5.50	90.46	96.20	30.06	164.46	159.32
55(2)	90.75	128.32	143.24	112.08	161.10	170.21	5.50	90.46	93.29	30.09	164.62	158.74
1856(3)	90.17	127.50	152.59	111.97	160.94	177.04	5.51	90.54	93.47	27.33	149.55	154.04
57(4)	107.29	151.71	160.79	118.25	169.97	190.15	5.96	97.94	98.57	27.82	152.23	149.38
58(5)	140.23	198.28	176.54	154.26	221.73	210.71	5.96	97.94	105.15	25.46	139.32	154.22
59(6)	140.12	198.13	213.57	164.88	236.99	258.44	7.05	115.95	124.61	25.80	141.18	178.96
60(万延 1)	146.46	207.10	228.16	183.61	263.92	287.84	7.50	123.36	140.64	34.51	188.84	200.33
1861(文久 1)	221.10	312.64	238.75	278.00	399.60	312.08	11.42	187.83	201.20	49.93	273.22	239.06
62(2)	158.89	224.68	262.85	220.52	316.98	368.47	10.83	178.13	265.82	47.35	259.10	280.25
63(3)	177.65	251.20	334.92	238.57	342.91	463.84	24.37	400.74	335.97	60.86	333.00	332.24
64(元治 1)	225.34	318.63	536.40	361.02	518.92	750.68	26.70	439.06	402.57	63.44	347.11	481.61
65(慶応 1)	401.30	567.45	743.64	515.37	740.79	994.00	28.83	474.10	502.81	82.01	448.76	641.52
1866(2)	933.53	1320.03	823.08	1275.77	1833.79	1154.75	31.67	520.81	547.57	186.42	1020.08	751.60
67(3)	891.70	1260.88	943.97	1066.91	1533.58	1287.88	41.31	679.36	579.49	193.47	1058.66	832.27
68(明治 1)	458.56	648.41	1011.70	797.73	1146.66	1348.86	37.97	624.51	610.99	161.44	883.37	886.06
69(2)	652.81	923.08	853.45	824.13	1184.60	1119.55	36.40	598.68	619.46	137.15	750.48	823.92
70(3)	640.78	906.08		727.48	1045.67		38.40	631.58		131.17	717.73	
1871(4)	373.95	528.78		478.12	687.24		34.24	563.16		129.64	709.38	

(出所) 三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』[増補改訂] (東京大学出版会、1989年)。

価格の動向（新データ）

醤油			酉作			酒			煎茶			年次
春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1斤二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	
78.57	110.17	111.64	42.98	95.50	98.20	150.57	128.78	153.09	0.68	77.27	76.82	1836(天保7)
83.40	116.95	112.46	44.86	99.69	101.48	242.53	207.42	162.22	0.67	75.57	76.82	37(8)
79.77	111.85	113.79	48.53	107.83	101.18	196.20	167.80	161.49	0.68	77.27	76.70	38(9)
82.82	116.13	112.45	48.55	107.88	101.22	228.75	195.64	157.47	0.68	76.70	76.59	39(10)
81.20	113.86	109.81	42.76	95.01	96.86	126.09	107.83	135.43	0.68	76.70	76.02	40(11)
73.77	103.44	107.38	43.07	95.70	93.28	127.07	108.68	119.48	0.68	76.70	75.34	1841(12)
73.99	103.74	104.21	35.04	77.86	91.59	113.65	97.19	100.11	0.64	72.73	74.89	42(13)
71.13	99.73	101.59	40.47	89.93	92.77	102.95	88.04	99.07	0.65	73.86	74.20	43(14)
71.51	100.27	100.87	44.75	99.44	93.52	115.52	98.80	99.23	0.66	74.43	73.52	44(弘化1)
71.86	100.76	99.95	45.42	100.93	100.42	120.01	102.63	102.01	0.65	73.30	74.09	45(2)
71.20	99.84	100.40	44.74	99.41	103.29	128.00	109.47	106.47	0.65	73.30	73.98	1846(3)
70.72	99.17	101.30	50.57	112.38	102.44	129.93	111.12	112.37	0.67	75.57	72.39	47(4)
72.73	101.98	102.37	46.93	104.28	102.62	129.01	110.34	117.64	0.65	73.30	70.00	48(嘉永1)
74.72	104.77	104.98	42.84	95.20	103.56	150.00	128.29	131.22	0.59	66.48	67.61	49(2)
75.68	106.11	106.90	45.83	101.84	101.59	150.84	129.01	131.24	0.54	61.36	64.77	50(3)
80.49	112.87	108.46	46.84	104.08	100.07	207.40	177.37	132.26	0.54	61.36	62.16	1851(4)
77.55	108.74	110.58	46.16	102.57	100.96	130.00	111.18	132.87	0.54	61.36	60.91	52(5)
78.33	109.83	111.64	43.49	96.64	99.96	135.00	115.46	130.24	0.53	60.23	60.68	53(6)
82.28	115.37	111.56	44.86	99.69	101.92	153.55	131.32	116.38	0.53	60.23	60.34	54(安政1)
79.43	111.38	114.92	43.57	96.81	102.05	135.50	115.89	117.82	0.53	60.23	60.23	55(2)
80.22	112.49	117.11	51.25	113.89	106.15	126.36	108.07	124.26	0.53	59.66	60.11	1856(3)
89.54	125.56	119.36	46.45	103.21	117.57	138.40	118.36	131.44	0.54	60.80	59.32	57(4)
86.12	120.75	123.74	52.73	117.17	130.21	172.66	147.66	138.36	0.53	59.66	60.00	58(5)
90.29	126.61	143.39	70.55	156.78	158.74	195.51	167.21	158.44	0.50	56.25	63.30	59(6)
95.07	133.31	155.71	72.00	160.00	187.31	176.00	150.52	167.24	0.56	63.64	67.05	60(万延1)
150.26	210.70	173.05	115.44	256.53	235.98	243.74	208.46	175.56	0.67	76.14	73.75	1861(文久1)
133.48	187.17	198.04	110.74	246.09	290.68	189.85	162.37	192.01	0.70	79.55	90.91	62(2)
147.95	207.46	253.45	162.24	360.52	432.62	221.30	189.26	247.96	0.82	93.18	125.00	63(3)
179.39	251.54	319.28	193.61	430.23	676.17	291.65	249.43	347.42	1.25	142.05	167.61	64(元治1)
292.68	410.40	434.22	391.37	869.70	1067.68	503.09	430.26	503.17	2.06	234.09	195.11	65(慶応1)
384.98	539.83	512.37	663.45	1474.32	1270.32	825.22	705.77	568.17	2.55	289.21	215.80	1866(2)
543.32	761.85	585.66	991.63	2203.62	1492.90	1100.42	941.13	629.06	1.91	217.05	220.00	67(3)
426.64	598.24	637.83	618.18	1373.72	1619.53	601.31	514.27	656.13	1.73	196.59	208.75	68(明治1)
440.71	617.98	647.64	694.42	1543.16	1573.46	647.60	553.86	595.60	1.44	163.07	178.18	69(2)
478.69	671.23		676.27	1502.81		661.37	565.63		1.57	177.84	70(3)	
419.96	588.88		559.80	1243.99		471.35	403.12		1.20	136.36		1871(4)

付表 1-6 (その1) 個別商品価格 (つづき)

年次	煙草			堅炭			和炭			薪		
	春秋平均(1玉二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(1匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(1匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5年カ移動平均
1713(正徳 3) 14(4) 15(5)										3.82	135.46	
1716(享保 1) 17(2) 18(3) 19(4) 20(5)												
1721(6) 22(7) 23(8) 24(9) 25(10)												
1726(11) 27(12) 28(13) 29(14) 30(15)												
1731(16) 32(17) 33(18) 34(19) 35(20)												
1736(元文 1) 37(2) 38(3) 39(4) 40(5)												
1741(寛保 1) 42(2) 43(3) 44(延享 1) 45(2)										2.63 2.42 2.45 2.60 2.61	93.09 85.64 86.70 92.02 92.55	 90.00 89.72 92.06
1746(3) 47(4) 48(寛延 1) 49(2) 50(3)										2.59 2.75 2.61 2.55 2.60	91.67 97.34 92.55 90.43 92.02	93.23 92.91 92.80 93.40 92.09
1751(宝暦 1) 52(2) 53(3)										2.67 2.56 2.72	94.68 90.78 96.28	92.84 94.36 96.63

と消費者物価の動向（新データ）

燈油			蠟燭			京都消費者物価指数(A)		年次
春秋平均(1石二付銀匁)	指数(18年=100)	同5年移動平均	春秋平均(100匁二付銀匁)	指数(18年=100)	同5年移動平均	指数(18年=100)	同5年移動平均	
877.93	367.55					206.60		1713(正徳 3) 14(4) 15(5) 1716(享保 1) 17(2) 18(3) 19(4) 20(5) 1721(6) 22(7) 23(8) 24(9) 25(10) 1726(11) 27(12) 28(13) 29(14) 30(15) 1731(16) 32(17) 33(18) 34(19) 35(20) 1736(元文 1) 37(2) 38(3) 39(4) 40(5)
451.66	189.09		4.41	308.39		133.70		1741(寛保 1)
471.57	197.43		4.55	318.18		128.19		42(2)
439.54	184.01	173.37	4.64	324.48	329.37	125.90	126.82	43(3)
369.69	154.77	163.68	4.84	338.46	340.21	124.18	126.14	44(延享 1)
338.08	141.54	151.60	5.11	357.34	344.62	122.12	125.45	45(2)
335.99	140.66	144.27	5.19	362.59	343.71	130.28	125.42	1746(3)
327.26	137.01	143.26	4.87	340.21	337.48	124.78	124.19	47(4)
351.99	147.36	144.65	4.58	319.93	327.90	125.73	123.64	48(寛延 1)
357.63	149.72	145.24	4.40	307.34	318.32	118.03	121.17	49(2)
354.71	148.50	144.85	4.43	309.44	309.37	119.37	117.78	50(3)
342.99	143.59	139.37	4.50	314.69	299.44	117.95	111.84	1751(宝暦 1)
322.66	135.08	130.96	4.23	295.46	288.88	107.83	107.04	52(2)
286.47	119.93	125.68	3.87	270.28	274.13	96.00	105.80	53(3)

付表 1-6 (その2) 個別商品価格 (つづき)

年次	煙草			堅炭			和炭			薪		
	春秋平均(1玉二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(1俵二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(1俵二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5年カ移動平均
1754(宝暦 4)										2.77	98.05	98.09
55(5)										2.92	103.37	99.82
1756(6)										2.88	101.95	100.71
57(7)										2.81	99.47	100.67
58(8)										2.84	100.71	99.54
59(9)										2.76	97.87	101.03
60(10)										2.76	97.70	104.96
1761(11)										3.09	109.40	
62(12)										3.36	119.15	
63(13)												
64(明和 1)												
65(2)												
1766(3)												
67(4)												
68(5)												
69(6)												
70(7)												
1771(8)												
72(安永 1)												
73(2)												
74(3)												
75(4)												
1776(5)												
77(6)												
78(7)												
79(8)												
80(9)												
1781(天明 1)												
82(2)												
83(3)												
84(4)												
85(5)												
1786(6)												
87(7)												
88(8)												
89(寛政 1)												
90(2)												
1791(3)				4.20	113.84		2.36	99.16		2.59	91.84	
92(4)				3.96	107.33		2.43	102.10		2.76	97.70	
93(5)				4.05	109.91	107.33	2.39	100.42	100.42	2.83	100.18	98.01
94(6)				3.75	101.76	104.83	2.38	99.79	101.26	2.83	100.36	99.65

と消費者物価の動向（新データ）

燈油			虫燭			京都消費者物価指数(A)		年次
春秋平均 (1石二付銀匁)	指数 (18年=100)	同5年 カ移動平均	春秋平均 (100匁二付銀匁)	指数 (18年=100)	同5年 カ移動平均	指数 (18年=100)	同5年 カ移動平均	
257.18	107.67	124.13	3.64	254.55	245.11	94.04	107.72	1754(宝暦 4)
291.65	122.10	125.67	3.37	235.66	219.16	113.17	110.03	55(5)
324.48	135.85	130.59	2.43	169.58	198.04	127.55	113.58	1756(6)
341.10	142.80	138.74	2.37	165.73	180.35	119.39	116.82	57(7)
345.28	144.55	140.70	2.36	164.69	166.78	113.77	114.70	58(8)
354.46	148.39	136.85	2.38	166.08	163.71	110.23	108.58	59(9)
315.08	131.91	130.30	2.40	167.83	157.13	102.58	103.50	60(10)
278.45	116.58		2.21	154.20		96.91		1761(11)
262.89	110.06		1.90	132.87		94.01		62(12)
								63(13)
								64(明和 1)
								65(2)
								1766(3)
								67(4)
								68(5)
								69(6)
								70(7)
								1771(8)
								72(安永 1)
								73(2)
								74(3)
								75(4)
								1776(5)
								77(6)
								78(7)
								79(8)
								80(9)
								1781(天明 1)
								82(2)
								83(3)
								84(4)
								85(5)
								1786(6)
								87(7)
								88(8)
								89(寛政 1)
								90(2)
268.55	112.43		1.67	116.78		104.28		1791(3)
315.30	132.00		1.67	116.78		122.01		92(4)
311.22	130.29	129.72	1.67	116.43	116.92	122.40	113.82	93(5)
324.78	135.97	135.75	1.67	116.78	118.11	107.61	116.86	94(6)

付表 1-6 (その3) 個別商品価格 (つづき)

年次	煙草			堅炭			和炭			薪		
	春秋平均(1玉二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1俵二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1俵二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均
1795(寛政 7)				3.83	103.80	103.91	2.40	100.63	101.13	2.82	100.00	100.11
1796(8)				3.74	101.36	102.36	2.46	103.36	101.56	2.82	100.00	100.04
97(9)				3.79	102.71	102.31	2.42	101.47	102.10	2.82	100.00	99.93
98(10)				3.77	102.17	101.95	2.44	102.52	102.44	2.82	99.82	99.89
99(11)				3.74	101.49	101.98	2.44	102.52	102.27	2.82	99.82	99.89
1800(12)				3.76	102.04	101.41	2.44	102.31	102.48	2.82	99.82	99.86
1801(享和 1)				3.74	101.49	100.71	2.44	102.52	102.44	2.82	100.00	99.82
02(2)				3.68	99.86	100.03	2.44	102.52	102.35	2.82	99.82	99.79
03(3)				3.64	98.64	99.35	2.44	102.31	102.27	2.81	99.65	99.79
04(文化 1)				3.62	98.10	99.95	2.43	102.10	102.23	2.81	99.65	99.89
05(2)				3.64	98.64	99.67	2.43	101.89	102.90	2.82	99.82	99.68
1806(3)	1.82	105.51		3.85	104.48	100.33	2.44	102.31	104.41	2.84	100.53	99.86
07(4)	1.75	101.16		3.63	98.51	101.03	2.52	105.88	105.67	2.79	98.76	99.96
08(5)	1.77	102.61	102.73	3.76	101.90	101.68	2.62	109.87	106.30	2.84	100.53	100.00
09(6)	1.76	102.03	101.97	3.75	101.63	101.17	2.58	108.40	106.85	2.83	100.18	99.86
10(7)	1.77	102.32	101.86	3.76	101.90	101.71	2.50	105.04	106.72	2.82	100.00	100.07
1811(8)	1.76	101.74	101.86	3.76	101.90	102.17	2.50	105.04	106.13	2.82	99.82	100.14
12(9)	1.74	100.58	102.03	3.73	101.22	103.09	2.51	105.25	106.64	2.82	99.82	99.54
13(10)	1.77	102.61	102.32	3.84	104.21	102.96	2.55	106.93	106.39	2.85	100.89	99.04
14(11)	1.78	102.90	101.62	3.92	106.24	102.77	2.64	110.92	105.88	2.74	97.16	99.22
15(12)	1.79	103.77	101.86	3.73	101.22	103.28	2.47	103.78	105.50	2.75	97.52	99.15
1816(13)	1.70	98.26	101.33	3.72	100.95	102.44	2.44	102.52	104.12	2.84	100.71	98.97
17(14)	1.76	101.74	101.04	3.83	103.80	101.06	2.46	103.36	101.35	2.81	99.47	99.54
18(文政 1)	1.73	100.00	100.75	3.69	100.00	100.60	2.38	100.00	100.08	2.82	100.00	100.04
19(2)	1.75	101.45	101.62	3.66	99.32	101.60	2.31	97.06	100.04	2.82	100.00	99.93
20(3)	1.77	102.32	101.68	3.65	98.91	100.35	2.32	97.48	100.04	2.82	100.00	99.57
1821(4)	1.77	102.61	102.20	3.91	105.97	100.98	2.44	102.31	100.13	2.83	100.18	99.50
22(5)	1.76	102.03	102.32	3.60	97.56	100.57	2.46	103.36	100.92	2.76	97.70	99.47
23(6)	1.77	102.61	102.61	3.80	103.12	100.24	2.39	100.42	103.57	2.81	99.65	99.43
24(7)	1.76	102.03	101.91	3.59	97.29	102.17	2.41	101.05	105.97	2.82	99.82	99.40
25(8)	1.79	103.77	101.97	3.59	97.29	102.93	2.64	110.71	107.86	2.82	99.82	99.86
1826(9)	1.71	99.13	101.62	4.26	115.60	102.47	2.72	114.29	110.29	2.82	100.00	99.93
27(10)	1.77	102.32	101.91	3.74	101.36	102.82	2.69	112.82	112.35	2.82	100.00	99.93
28(11)	1.74	100.87	102.32	3.72	100.81	103.64	2.68	112.61	112.52	2.82	100.00	99.96
29(12)	1.79	103.48	104.70	3.65	99.05	102.14	2.65	111.35	113.28	2.82	99.82	99.89
30(天保 1)	1.83	105.80	104.99	3.74	101.36	101.98	2.66	111.56	114.79	2.82	100.00	99.86
1831(2)	1.92	111.01	105.68	3.99	108.14	101.30	2.81	118.07	115.63	2.81	99.65	99.79
32(3)	1.79	103.77	105.91	3.71	100.54	100.24	2.87	120.38	114.08	2.82	99.82	98.26
33(4)	1.80	104.35	105.62	3.59	97.42	99.73	2.78	116.81	111.77	2.81	99.65	97.13
34(5)	1.81	104.64	104.35	3.46	93.76	98.86	2.47	103.57	109.92	2.60	92.20	96.42
35(6)	1.80	104.35	104.52	3.64	98.78	98.97	2.38	100.00	107.06	2.66	94.33	96.13

と消費者物価の動向（新データ）

燈油			蝋燭			京都消費者物価指数(A)		年次
春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(100匁二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	
329.36	137.89	137.16	1.69	117.83	120.42	112.80	115.59	1795(寛政 7)
340.66	142.62	135.03	1.76	122.73	124.06	119.50	114.53	1796(8)
332.15	139.06	133.15	1.84	128.32	125.94	115.66	115.32	97(9)
285.68	119.60	128.29	1.93	134.62	125.73	117.07	116.66	98(10)
302.42	126.61	125.21	1.81	126.22	124.48	111.56	116.13	99(11)
271.30	113.58	120.02	1.67	116.78	122.17	119.49	115.29	1800(12)
303.84	127.20	122.22	1.67	116.43	118.60	116.88	113.47	1801(享和 1)
270.16	113.10	121.18	1.67	116.78	116.71	111.47	110.11	02(2)
312.01	130.62	121.89	1.67	116.78	116.71	107.95	105.35	03(3)
289.90	121.37	119.02	1.67	116.78	116.78	94.74	101.73	04(文化 1)
279.84	117.16	118.76	1.67	116.78	116.78	95.70	100.26	05(2)
269.52	112.83	116.22	1.67	116.78	116.50	98.81	101.52	1806(3)
267.04	111.80	114.72	1.67	116.78	112.10	104.09	105.09	07(4)
281.68	117.93	113.93	1.65	115.39	110.70	114.29	106.03	08(5)
271.97	113.86	115.35	1.36	94.76	109.09	112.56	106.98	09(6)
270.46	113.23	116.08	1.57	109.79	107.62	100.39	106.11	10(7)
286.53	119.96	114.44	1.56	108.74	105.66	103.59	103.63	1811(8)
275.75	115.44	113.34	1.57	109.44	108.32	99.74	103.52	12(9)
262.10	109.73	111.20	1.51	105.59	106.99	101.87	105.56	13(10)
258.75	108.33	105.29	1.55	108.04	105.94	112.00	105.88	14(11)
244.90	102.53	102.10	1.48	103.15	104.06	110.59	107.98	15(12)
215.95	90.41	100.15	1.48	103.50	102.94	105.20	107.61	1816(13)
237.64	99.49	99.13	1.43	100.00	101.33	110.24	103.79	17(14)
238.86	100.00	100.08	1.43	100.00	100.70	100.00	99.70	18(文政 1)
246.56	103.22	103.74	1.43	100.00	98.53	92.91	97.55	19(2)
256.27	107.29	103.44	1.43	100.00	96.64	90.16	95.24	20(3)
259.62	108.69	106.63	1.33	92.66	94.69	94.45	95.27	1821(4)
234.08	98.00	108.51	1.30	90.56	93.50	98.68	97.41	22(5)
276.90	115.93	109.78	1.29	90.21	91.96	100.16	101.38	23(6)
269.10	112.66	114.93	1.35	94.06	91.75	103.61	106.04	24(7)
271.41	113.63	123.75	1.32	92.31	92.17	110.00	106.89	25(8)
321.06	134.41	128.81	1.31	91.61	95.52	117.78	109.16	1826(9)
339.52	142.14	130.55	1.33	92.66	97.55	102.90	114.07	27(10)
337.29	141.21	130.40	1.53	106.99	100.00	111.49	115.40	28(11)
289.85	121.35	126.61	1.49	104.20	103.01	128.20	116.76	29(12)
269.68	112.90	123.54	1.50	104.55	107.34	116.61	118.97	30(天保 1)
275.81	115.47	124.02	1.53	106.64	110.35	124.61	122.83	1831(2)
302.82	126.78	131.43	1.64	114.34	113.99	113.92	125.75	32(3)
343.06	143.62	139.54	1.75	122.03	117.48	130.81	126.14	33(4)
378.35	158.40	147.89	1.75	122.38	120.84	142.80	130.47	34(5)
366.47	153.43	155.96	1.75	122.03	122.59	118.56	146.08	35(6)

付表 1-6 (その4) 個別商品価格 (つづき)

年次	煙草			堅炭			和炭			薪		
	春秋平均(1玉二付銀匁)	指数(18年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(1俵二付銀匁)	指数(18年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(1俵二付銀匁)	指数(18年=100)	同5年カ移動平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指数(18年=100)	同5年カ移動平均
1836(天保 7)	1.81	104.64	104.93	3.83	103.80	99.57	2.59	108.82	105.84	2.71	96.10	97.16
37(8)	1.81	104.64	105.28	3.73	101.09	100.90	2.53	106.09	107.82	2.78	98.40	99.65
38(9)	1.84	106.38	106.20	3.70	100.41	101.76	2.64	110.71	111.98	2.96	104.79	102.31
39(10)	1.84	106.38	107.77	3.70	100.41	107.60	2.70	113.45	116.89	2.95	104.61	106.03
40(11)	1.88	108.99	108.64	3.80	103.12	110.31	2.88	120.80	121.72	3.04	107.62	108.37
1841(12)	1.94	112.46	109.04	4.90	132.97	113.03	3.18	133.40	124.79	3.24	114.72	109.01
42(13)	1.88	108.99	109.39	4.23	114.65	116.15	3.10	130.25	127.94	3.11	110.11	109.79
43(14)	1.87	108.41	109.51	4.20	113.98	118.21	3.00	126.05	130.08	3.05	107.98	110.07
44(弘化 1)	1.87	108.12	108.70	4.28	116.01	116.04	3.08	129.20	130.21	3.06	108.51	110.14
45(2)	1.89	109.57	108.12	4.18	113.43	119.16	3.13	131.51	132.73	3.08	109.04	111.38
1846(3)	1.87	108.41	107.83	4.50	122.12	121.47	3.19	134.03	136.09	3.25	115.07	113.26
47(4)	1.83	106.09	108.23	4.80	130.26	120.46	3.40	142.86	137.35	3.28	116.31	113.30
48(嘉永 1)	1.85	106.96	108.52	4.63	125.51	118.54	3.40	142.86	136.39	3.31	117.38	114.04
49(2)	1.90	110.15	109.16	4.09	110.99	115.28	3.23	135.50	134.50	3.07	108.69	113.51
50(3)	1.92	111.01	110.67	3.83	103.80	110.89	3.02	126.68	130.71	3.18	112.77	112.55
1851(4)	1.93	111.59	112.00	3.90	105.83	106.46	2.97	124.58	126.93	3.17	112.41	111.53
52(5)	1.96	113.62	111.77	3.90	105.83	104.64	2.95	123.95	124.41	3.15	111.53	112.16
53(6)	1.96	113.62	110.90	3.90	105.83	104.42	2.95	123.95	123.45	3.17	112.23	112.06
54(安政 1)	1.88	108.99	111.54	3.76	101.90	104.29	2.93	122.90	123.95	3.16	111.88	112.13
55(2)	1.84	106.67	114.67	3.79	102.71	107.46	2.90	121.85	128.61	3.17	112.23	113.44
1856(3)	1.98	114.78	116.17	3.88	105.16	113.11	3.03	127.10	134.71	3.18	112.77	115.89
57(4)	2.23	129.28	117.68	4.49	121.71	120.03	3.51	147.27	140.42	3.33	118.09	118.40
58(5)	2.09	121.16	121.51	4.94	134.06	123.91	3.68	154.41	146.30	3.51	124.47	120.85
59(6)	2.01	116.52	126.49	5.03	136.50	131.10	3.61	151.47	154.16	3.51	124.47	123.19
60(万延 1)	2.17	125.80	128.70	4.50	122.12	136.55	3.60	151.26	161.35	3.51	124.47	126.88
1861(文久 1)	2.41	139.71	132.46	5.20	141.11	150.50	3.96	166.39	178.82	3.51	124.47	145.39
62(2)	2.42	140.29	141.10	5.49	148.98	184.75	4.36	183.19	215.34	3.85	136.53	185.57
63(3)	2.42	140.00	215.36	7.51	203.80	243.56	5.76	241.81	281.35	6.12	217.02	248.79
64(元治 1)	2.76	159.71	288.81	11.34	307.73	324.59	7.95	334.03	378.82	9.18	325.36	325.99
65(慶応 1)	8.58	497.10	367.83	15.34	416.15	414.36	11.46	481.30	477.23	12.43	440.60	399.04
1866(2)	8.75	506.96	433.39	20.13	546.27	486.84	15.56	653.78	550.92	14.40	510.46	446.21
67(3)	9.24	535.36	513.80	22.03	597.83	531.40	16.07	675.21	589.87	14.15	501.77	467.94
68(明治 1)	8.07	467.83	515.25	20.87	566.21	549.39	14.53	610.29	584.71	12.77	452.84	455.39
69(2)	9.69	561.74	499.65	19.55	530.53	532.18	12.59	528.78	542.98	12.24	434.04	425.60
70(3)	8.70	504.35		18.65	506.11		10.84	455.46		10.66	377.84	
1871(4)	7.40	428.99		16.96	460.24		10.60	445.17		10.20	361.53	

(出所) 三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』[増補改訂] (東京大学出版会、1989年)。

と消費者物価の動向（新データ）

燈油			蝋燭			京都消費者物価指数(A)		年次
春秋平均 (1石 二付銀 匁)	指数 (18 18年= 100)	同5 カ 年 移動 平均	春秋平 均(100 匁二付 銀匁)	指数 (18 18年= 100)	同5 カ 年 移動 平均	指数 (18 18年= 100)	同5 カ 年 移動 平均	
375.51	157.21	160.48	1.77	123.43	129.23	146.27	150.48	1836(天保 7)
399.26	167.15	159.18	1.76	123.08	146.08	191.96	150.91	37(8)
397.01	166.21	160.14	2.22	155.25	159.37	152.81	151.03	38(9)
362.80	151.89	162.84	2.96	206.64	170.70	144.95	145.51	39(10)
377.97	158.24	161.81	2.70	188.46	179.30	119.15	131.01	40(11)
407.80	170.73	155.41	2.58	180.07	178.60	118.66	123.47	1841(12)
386.96	162.00	149.73	2.38	166.08	166.99	119.46	117.90	42(13)
320.50	134.18	145.59	2.17	151.75	157.20	115.13	118.74	43(14)
295.01	123.51	145.32	2.13	148.60	149.16	117.09	121.24	44(弘化 1)
328.51	137.53	154.39	2.00	139.51	143.57	123.34	123.70	45(2)
404.53	169.36	164.66	2.00	139.86	141.47	131.20	127.71	1846(3)
495.33	207.37	173.35	1.98	138.11	141.12	131.73	131.54	47(4)
443.11	185.51	174.96	2.02	141.26	142.38	135.19	138.34	48(嘉永 1)
398.84	166.97	172.61	2.10	146.85	146.29	136.21	144.22	49(2)
347.78	145.60	164.29	2.09	145.80	150.91	157.35	143.91	50(3)
376.42	157.59	162.13	2.28	159.44	155.87	160.60	144.53	1851(4)
395.94	165.76	164.75	2.31	161.19	158.88	130.18	145.47	52(5)
417.40	174.75	169.99	2.38	166.08	160.21	138.30	138.89	53(6)
430.12	180.07	174.60	2.32	161.89	158.53	140.91	131.73	54(安政 1)
410.35	171.80	177.23	2.18	152.45	155.66	124.47	133.71	55(2)
431.43	180.62	179.02	2.16	151.05	154.06	124.77	139.57	1856(3)
427.40	178.93	177.39	2.10	146.85	157.69	140.09	145.68	57(4)
438.72	183.67	179.46	2.26	158.04	172.24	167.60	156.99	58(5)
410.66	171.93	201.78	2.58	180.07	196.01	171.45	184.43	59(6)
435.11	182.16	215.00	3.22	225.18	218.39	181.03	198.43	60(万延 1)
698.02	292.23	239.07	3.86	269.93	237.97	261.95	215.33	1861(文久 1)
585.17	244.99	283.25	3.70	258.74	264.97	210.11	245.31	62(2)
726.30	304.07	334.79	3.66	255.94	299.37	252.13	314.16	63(3)
938.20	392.78	395.71	4.51	315.04	355.46	321.35	468.77	64(元治 1)
1050.72	439.89	500.61	5.68	397.20	455.32	525.28	639.24	65(慶応 1)
1425.57	596.82	552.36	7.87	550.35	512.73	1034.96	719.35	1866(2)
1837.98	769.48	665.25	10.84	758.04	554.13	1062.48	816.20	67(3)
1344.38	562.83	736.15	7.77	543.01	571.33	652.68	866.63	68(明治 1)
2286.37	957.20	746.92	7.47	522.03	566.22	805.62	767.93	69(2)
1897.58	794.43		6.91	483.22		777.42		70(3)
1554.20	650.67		7.51	524.83		541.45		1871(4)

付表 1-7 (その1)

個別商品価格

年次	米			味噌			塩		
	春秋平均(石につき銀匁)	指数(1818年=100)	同5年移動平均	春秋平均(貫につき銀匁)	指数(1818年=100)	同5年移動平均	春秋平均(石につき銀匁)	指数(1818年=100)	同5年移動平均
1713(正徳 3)	153.50	213.79		3.20	172.97		29.30	154.21	
14(4)									
15(5)									
1716(享保 1)									
17(2)									
18(3)									
19(4)									
20(5)									
1721(6)									
22(7)									
23(8)									
24(9)									
25(10)									
1726(11)	69.00	96.10		2.61	141.22		14.00	73.68	
27(12)	63.00	87.74		2.75	148.65		5.94	31.25	
28(13)	49.00	68.25	76.62	2.56	138.11	135.26	9.06	47.70	45.99
29(14)	45.25	63.02	71.09	2.43	131.55	130.62	7.50	39.47	38.65
30(15)	48.80	67.97	72.41	2.16	116.76	136.57	7.19	37.83	40.63
1731(16)	49.15	68.45	76.59	2.18	118.04	145.49	7.03	37.01	38.98
32(17)	67.75	94.36		3.30	178.38		7.81	41.12	
33(18)	64.00	89.14		3.38	182.70		7.50	39.47	
34(19)									
35(20)									
1736(元文 1)									
37(2)									
38(3)	70.00	97.49		3.16	170.95		13.75	72.37	
39(4)									
40(5)									
1741(寛保 1)	90.80	126.46		1.90	102.70		20.05	105.53	
42(2)	83.50	116.30		1.60	86.49		20.15	106.05	
43(3)	80.80	112.54	114.57	1.65	89.19	89.73	21.55	113.42	109.74
44(延享 1)	80.00	111.42	113.40	1.55	83.78	87.57	19.85	104.47	109.58
45(2)	76.20	106.13	112.70	1.60	86.49	89.73	22.65	119.21	108.11
1746(3)	86.60	120.61	112.87	1.70	91.89	91.89	19.90	104.74	105.42
47(4)	81.00	112.81	111.05	1.80	97.30	92.43	18.75	98.68	103.74
48(寛延 1)	81.40	113.37	111.41	1.85	100.00	91.89	19.00	100.00	95.74
49(2)	73.45	102.30	108.11	1.60	86.49	89.73	18.25	96.05	91.42
50(3)	77.50	107.94	103.44	1.55	83.78	84.86	15.05	79.21	87.79
1751(宝暦 1)	74.75	104.11	95.70	1.50	81.08	78.38	15.80	83.16	83.95
52(2)	64.25	89.48	89.23	1.35	72.97	75.68	15.30	80.53	83.37
53(3)	53.60	74.65	88.04	1.25	67.57	76.76	15.35	80.79	85.95

と消費者物価（1818年=100）（旧データ）

醤油			酒			燈油			旧データ 京都 消費者物価指数		年次
春秋平均（石につき銀匁）	指数（1818年=100）	同5カ年平均	春秋平均（石につき銀匁）	指数（1818年=100）	同5カ年平均	春秋平均（升につき銀匁）	指数（1818年=100）	同5カ年平均	指数（1818年=100）	同5カ年平均	
123.10	172.65		221.00	187.61		8.80	332.08		208.11		1713(正徳 3) 14(4) 15(5) 1716(享保 1) 17(2) 18(3) 19(4) 20(5) 1721(6) 22(7) 23(8) 24(9) 25(10)
65.00	91.16		105.00	89.13		2.00	75.47		94.86		1726(11)
65.00	91.16		105.00	89.13		1.80	67.92		90.04		27(12)
65.00	91.16	91.16	93.00	78.95	81.07	1.70	64.15	73.96	77.73	82.87	28(13)
65.00	91.16	89.76	92.50	78.52	77.25	1.90	71.70	75.47	75.14	78.93	29(14)
65.00	91.16	89.06	82.00	69.61	75.76	2.40	90.57	77.74	76.58	79.77	30(15)
60.00	84.15	89.06	82.50	70.03	80.35	2.20	83.02	83.02	75.18	83.61	1731(16)
62.50	87.66		96.25	81.71		2.10	79.25		94.21		32(17)
65.00	91.16		120.00	101.87		2.40	90.57		96.92		33(18) 34(19) 35(20)
62.50	87.66		130.00	110.36		3.00	113.21		103.46		1736(元文 1) 37(2) 38(3) 39(4) 40(5)
74.20	104.07		122.85	104.29		4.50	169.81		120.36		1741(寛保 1)
74.45	104.42		127.25	108.02		4.75	179.25		115.77		42(2)
82.85	116.20	111.92	125.40	106.45	106.44	4.35	164.15	156.98	114.70	114.41	43(3)
80.25	112.55	115.23	128.55	109.13	106.38	3.70	139.62	148.30	111.65	113.58	44(延享 1)
87.25	122.37	119.31	122.85	104.29	104.65	3.50	132.08	136.98	109.58	112.85	45(2)
86.00	120.62	121.08	122.55	104.03	103.22	3.35	126.42	130.94	116.19	112.61	1746(3)
89.00	124.83	123.59	117.05	99.36	101.20	3.25	122.64	130.19	112.14	111.72	47(4)
89.15	125.04	125.54	116.95	99.28	99.93	3.55	133.96	130.57	113.50	111.91	48(寛延 1)
89.20	125.11	128.91	116.65	99.02	99.02	3.60	135.85	130.94	107.21	110.53	49(2)
94.20	132.12	130.84	115.40	97.96	98.84	3.55	133.96	130.94	110.53	108.15	50(3)
98.00	137.45	130.93	117.20	99.49	94.62	3.40	128.30	126.04	109.25	102.73	1751(宝暦 1)
95.90	134.50	131.49	115.95	98.43	90.20	3.25	122.64	118.49	100.28	98.04	52(2)
89.45	125.46	130.86	92.10	78.18	87.83	2.90	109.43	113.96	86.35	96.66	53(3)

付表 1 - 7 (その2)

個別商品価格

年次	米			味噌			塩		
	春秋平均(石につき銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(貫につき銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(石につき銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均
1754(宝暦 4)	50.25	69.99	93.25	1.35	72.97	81.08	17.70	93.16	89.37
55(5)	73.20	101.95	98.04	1.65	89.19	87.03	17.50	92.11	92.84
1756(6)	93.45	130.15	103.89	1.90	102.70	92.97	19.05	100.26	94.63
57(7)	81.45	113.44	110.25	1.90	102.70	95.14	18.60	97.89	94.05
58(8)	74.60	103.90	107.73	1.80	97.30	92.43	17.05	89.74	92.89
59(9)	73.10	101.81	97.76	1.55	83.78	87.57	17.15	90.26	90.00
60(10)	64.15	89.35	90.47	1.40	75.68	82.16	16.40	86.32	88.42
1761(11)	57.65	80.29		1.45	78.38		16.30	85.79	
62(12)	55.30	77.02		1.40	75.68		17.10	90.00	
63(13)									
64(明和 1)									
65(2)									
1766(3)									
67(4)									
68(5)									
69(6)									
70(7)									
1771(8)									
72(安永 1)									
73(2)	60.50	84.26							
74(3)	54.50	75.91							
75(4)	59.00	82.17	87.05						
1776(5)	66.90	93.18	88.62						
77(6)	71.60	99.72	90.93						
78(7)	66.15	92.13	89.74						
79(8)	62.80	87.47	89.15						
80(9)	54.70	76.18	92.73						
1781(天明 1)	64.80	90.25	102.37						
82(2)	84.45	117.62	113.84						
83(3)	100.75	140.32	120.74						
84(4)	104.00	144.85	126.91						
85(5)	79.45	110.66	145.38				4.06	21.38	
1786(6)	86.95	121.10	142.31						
87(7)	150.75	209.96	135.74						
88(8)	89.75	125.00	132.98						
89(寛政 1)	80.40	111.98	128.58						
90(2)	69.55	96.87	112.24						
1791(3)	71.15	99.09	112.65	1.80	97.30		19.53	102.80	
92(4)	92.10	128.27	110.74	1.95	105.41		20.78	109.38	
93(5)	91.20	127.02	114.21	1.90	102.70	100.54	21.09	111.02	103.95
94(6)	73.55	102.44	118.89	1.80	97.30	101.08	19.53	102.80	104.44

と消費者物価（1818年=100）（旧データ）

醤油			酒			燈油			旧データ 京都 消費者物価指数		年次
春秋平均 (石につき 銀匁)	指数 (18 18年= 100)	同5 カ年 移動 平均	春秋平均 (石につき 銀匁)	指数 (18 18年= 100)	同5 カ年 移動 平均	春秋平均 (升につき 銀匁)	指数 (18 18年= 100)	同5 カ年 移動 平均	指数 (1818年 =100)	同5カ 年移動 平均	
91.20	127.91	129.68	90.65	76.95	89.59	2.60	98.11	112.83	83.81	99.59	1754(宝暦 4)
91.95	128.96	129.14	101.40	86.08	92.87	2.95	111.32	113.96	103.59	102.96	55(5)
93.80	131.56	130.59	127.60	108.32	97.95	3.25	122.64	118.11	123.90	107.75	1756(6)
94.00	131.84	131.18	135.25	114.81	103.86	3.40	128.30	125.28	117.17	112.77	57(7)
94.60	132.68	131.45	122.05	103.61	107.36	3.45	130.19	126.79	110.26	112.12	58(8)
93.30	130.86	130.56	125.45	106.49	105.02	3.55	133.96	123.40	108.91	105.97	59(9)
92.90	130.30	129.55	122.00	103.57	100.59	3.15	118.87	117.36	100.35	100.55	60(10)
90.65	127.14		113.80	96.60		2.80	105.66		93.16		1761(11)
90.40	126.79		109.20	92.70		2.60	98.11		90.07		62(12)
											63(13)
											64(明和 1)
											65(2)
											1766(3)
											67(4)
											68(5)
											69(6)
											70(7)
											1771(8)
											72(安永 1)
100.00	140.25		130.50	110.78		3.00	113.21		103.65		73(2)
100.00	140.25		126.00	106.96		2.90	109.43		98.33		74(3)
100.00	140.25	140.25	126.00	106.96	104.67	3.65	137.74	119.62	104.04	104.35	75(4)
100.00	140.25	140.25	117.00	99.32	102.38	3.40	128.30	115.09	107.09	104.25	1776(5)
100.00	140.25	137.88	117.00	99.32	100.85	2.90	109.43	111.32	108.64	104.27	77(6)
100.00	140.25	132.27	117.00	99.32	99.32	2.40	90.57		103.13	101.64	78(7)
91.55	128.40	126.66	117.00	99.32	99.32	2.40	90.57		98.42	99.60	79(8)
80.00	112.20	121.05	117.00	99.32	99.32				90.91	100.20	80(9)
80.00	112.20	115.44	117.00	99.32	100.72	2.50	94.34		96.91	104.46	1781(天明 1)
80.00	112.20	112.20	117.00	99.32	106.83				111.63	111.72	82(2)
80.00	112.20	112.20	125.25	106.32	107.85	2.80	105.66		124.44	115.48	83(3)
80.00	112.20	112.20	153.00	129.88	109.47	3.70	139.62		134.71	119.73	84(4)
80.00	112.20	112.20	123.00	104.41	122.03	3.30	124.53	135.85	109.71	132.75	85(5)
80.00	112.20	112.20	126.50	107.39	129.78	3.70	139.62		118.14	133.26	1786(6)
80.00	112.20	119.36	191.00	162.14	130.63	4.50	169.81		176.74	131.61	87(7)
80.00	112.20	119.36	170.90	145.08	130.80				126.98	130.22	88(8)
105.50	147.97	118.51	158.00	134.13	128.72				126.44	126.67	89(寛政 1)
80.00	112.20	117.53	124.00	105.26	119.30				102.77	115.40	90(2)
77.00	107.99	116.94	114.25	96.99	115.97	2.70	101.89		100.40	114.36	1791(3)
76.50	107.29	114.45	135.50	115.03	109.89	3.30	124.53		120.42	110.99	92(4)
77.90	109.26	113.69	151.30	128.44	109.00	3.10	116.98	118.49	121.79	112.58	93(5)
96.60	135.48	113.66	122.20	103.74	111.38	3.25	122.64	123.77	109.60	115.79	94(6)

付表 1-7 (その3)

個別商品価格

年次	米			味噌			塩		
	春秋平均(石につき銀匁)	指数(18年=100)	同5年移動平均	春秋平均(貫につき銀匁)	指数(18年=100)	同5年移動平均	春秋平均(石につき銀匁)	指数(18年=100)	同5年移動平均
1795(寛政 7)	82.00	114.21	117.01	1.85	100.00	100.54	17.81	93.75	97.53
1796(8)	87.95	122.49	115.40	1.85	100.00	100.00	20.00	105.26	96.05
97(9)	85.35	118.87	117.99	1.90	102.70	98.92	14.22	74.84	94.08
98(10)	85.45	119.01	120.68	1.85	100.00	98.38	19.69	103.62	91.78
99(11)	82.85	115.39	119.71	1.70	91.89	98.38	17.66	92.93	92.60
1800(12)	91.65	127.65	117.98	1.80	97.30	96.76	15.63	82.24	100.99
1801(享和 1)	84.45	117.62	114.69	1.85	100.00	96.22	20.78	109.38	106.41
02(2)	79.15	110.24	108.38	1.75	94.59	94.59	22.19	116.78	108.88
03(3)	73.65	102.58	99.75	1.80	97.30	94.05	24.84	130.76	115.46
04(文化 1)	60.20	83.84	94.58	1.55	83.78	91.89	20.00	105.26	114.31
05(2)	60.65	84.47	91.95	1.75	94.59	91.89	21.88	115.13	111.35
1806(3)	65.90	91.78	94.53	1.65	89.19	92.43	19.69	103.62	107.57
07(4)	69.70	97.08	100.92	1.75	94.59	95.14	19.38	101.97	108.55
08(5)	82.90	115.46	102.38	1.85	100.00	93.51	21.25	111.84	106.74
09(6)	83.15	115.81	103.19	1.80	97.30	92.97	20.94	110.20	107.40
10(7)	65.90	91.78	102.02	1.60	86.49	89.73	20.16	106.09	108.06
1811(8)	68.80	95.82	97.76	1.60	86.49	85.95	20.31	106.91	107.40
12(9)	65.50	91.23	96.94	1.45	78.38	85.41	20.00	105.26	105.59
13(10)	67.60	94.15	101.25	1.50	81.08	86.49	20.63	108.55	104.61
14(11)	80.20	111.70	103.11	1.75	94.59	88.11	19.22	101.15	105.76
15(12)	81.40	113.37	107.98	1.70	91.89	92.43	19.22	101.15	105.92
1816(13)	75.45	105.08	109.15	1.75	94.59	96.22	21.41	112.66	104.21
17(14)	83.00	115.60	104.40	1.85	100.00	99.46	20.16	106.09	
18(文政 1)	71.80	100.00	97.30	1.85	100.00	101.08	19.00	100.00	
19(2)	63.15	87.95	94.05	2.05	110.81	101.62			
20(3)	55.90	77.86	91.31	1.85	100.00	101.08			
1821(4)	63.80	88.86	91.70	1.80	97.30	100.54	34.75	182.90	
22(5)	73.15	101.88	95.93	1.80	97.30	98.38	20.00	105.26	
23(6)	73.20	101.95	102.52	1.80	97.30	99.46	34.20	180.00	158.90
24(7)	78.35	109.12	109.33	1.85	100.00	101.62	40.00	210.53	148.63
25(8)	79.55	110.79	109.22	1.95	105.41	104.87	22.00	115.79	
1826(9)	88.25	122.91	110.25	2.00	108.11	107.03	25.00	131.58	
27(10)	72.75	101.32	117.34	2.10	113.51	110.27			
28(11)	76.90	107.10	120.11	2.00	108.11	110.27			
29(12)	103.80	144.57	121.94	2.15	116.22	111.35			
30(天保 1)	89.50	124.65	125.49	1.95	105.41	110.27			
1831(2)	94.80	132.03	133.98	2.10	113.51	110.81			
32(3)	85.50	119.08	138.30	2.00	108.11	109.73			
33(4)	107.40	149.58	137.27	2.05	110.81	110.27			
34(5)	119.30	166.16	143.47	2.05	110.81	111.89			
35(6)	85.80	119.50	167.79	2.00	108.11	128.11			

と消費者物価（1818年=100）（旧データ）

醤油			酒			燈油			旧データ 京都 消費者物価指数		年次
春秋平均（石につき銀匁）	指数（1818年=100）	同5カ年移動平均	春秋平均（石につき銀匁）	指数（1818年=100）	同5カ年移動平均	春秋平均（升につき銀匁）	指数（1818年=100）	同5カ年移動平均	指数（1818年=100）	同5カ年移動平均	
77.30	108.42	113.35	118.75	100.81	109.94	3.35	126.42	123.77	110.67	114.42	1795(寛政 7)
76.90	107.85	112.38	128.25	108.87	105.48	3.40	128.30	121.89	116.44	112.46	1796(8)
75.40	105.75	104.90	127.05	107.85	107.08	3.30	124.53	120.00	113.60	112.52	97(9)
74.45	104.42	102.44	125.05	106.16	109.04	2.85	107.55	115.09	111.99	113.35	98(10)
69.90	98.04	100.17	131.60	111.72	110.02	3.00	113.21	112.45	109.91	112.46	99(11)
68.55	96.14	98.18	130.30	110.61	109.41	2.70	101.89	107.93	114.83	110.79	1800(12)
68.80	96.49	96.16	134.00	113.75	110.03	3.05	115.09	109.81	111.95	109.09	1801(享和 1)
68.30	95.79	94.26	123.45	104.80	107.19	2.70	101.89	109.06	105.27	104.98	02(2)
67.25	94.32	92.68	128.70	109.25	104.13	3.10	116.98	109.81	103.49	99.95	03(3)
63.15	88.57	92.92	114.90	97.54	100.23	2.90	109.43	106.79	89.34	96.33	04(文化 1)
62.90	88.22	94.91	112.25	95.29	98.66	2.80	105.66	106.79	89.67	95.04	05(2)
69.65	97.69	96.63	111.05	94.27	98.46	2.65	100.00	104.53	93.86	96.40	1806(3)
75.40	105.75	98.23	114.20	96.94	99.58	2.70	101.89	103.02	98.82	100.13	07(4)
73.40	102.95	99.96	127.50	108.23	100.98	2.80	105.66	101.89	110.29	101.19	08(5)
68.85	96.56	99.64	121.55	103.18	102.62	2.70	101.89	103.40	107.99	101.93	09(6)
69.05	96.84	97.70	120.45	102.25	103.70	2.65	100.00	104.15	95.01	101.08	10(7)
68.50	96.07	96.41	120.70	102.46	101.17	2.85	107.55	103.02	97.53	97.95	1811(8)
68.50	96.07	96.61	120.60	102.38	100.80	2.80	105.66	102.26	94.56	97.39	12(9)
68.80	96.49	96.77	112.60	95.59	100.71	2.65	100.00	100.76	94.65	99.50	13(10)
69.55	97.55	97.14	119.95	101.32	100.02	2.60	98.11	95.47	105.20	100.06	14(11)
69.65	97.69	99.24	119.90	101.78	100.16	2.45	92.45	92.45	105.54	102.92	15(12)
69.80	97.90	99.94	116.65	99.02	101.04	2.15	81.13	92.45	100.36	103.99	1816(13)
76.00	106.59	102.45	121.45	103.10	98.74	2.40	90.57	93.21	108.82	101.89	17(14)
71.30	100.00	103.80	117.80	100.00	96.09	2.65	100.00	93.21	100.00	98.18	18(文政 1)
78.50	110.10	104.47	105.80	89.81	94.76	2.70	101.89	99.62	94.71	97.13	19(2)
74.45	104.42	103.35	104.25	88.50	92.48	2.45	92.45	100.76	87.00	95.21	20(3)
72.20	101.26	103.52	108.85	92.40	90.56	3.00	113.21	99.62	95.14	95.17	1821(4)
72.00	100.98	101.98	108.00	91.68	91.53	2.55	96.23	97.36	99.23	97.14	22(5)
71.90	100.84	101.49	106.50	90.41	93.75	2.50	94.34	97.74	99.75	100.89	23(6)
73.00	102.38	101.35	111.50	94.65	97.20	2.40	90.57	94.34	104.59	104.63	24(7)
72.70	101.96	101.35	117.35	99.62	100.00	2.50	94.34	97.36	105.74	105.51	25(8)
71.70	100.56	101.37	129.15	109.64	101.95	2.55	96.23	101.89	113.84	106.68	1826(9)
72.00	100.98	101.18	124.50	105.69	106.03	2.95	111.32	103.77	103.61	111.02	27(10)
72.00	100.98	100.38	118.00	100.17	107.92	3.10	116.98	105.66	105.61	112.72	28(11)
72.30	101.40	101.45	135.50	115.03	109.65	2.65	100.00	105.66	126.28	114.14	29(12)
69.85	97.97	103.27	128.50	109.08	109.23	2.75	103.77	101.89	114.26	115.79	30(天保 1)
75.50	105.89	106.47	139.35	118.29	110.82	2.55	96.23	98.11	120.93	120.62	1831(2)
78.50	110.10	108.81	122.00	103.57	116.02	2.45	92.45	102.64	111.86	124.44	32(3)
83.40	116.97	110.83	127.35	108.11	115.18	2.60	98.11	108.68	129.77	124.64	33(4)
80.65	113.11	111.75	166.15	141.04	114.45	3.25	122.64	116.60	145.36	128.50	34(5)
77.05	108.07	117.18	123.55	104.88	129.37	3.55	133.96	127.93	115.27	146.24	35(6)

付表 1 - 7 (その4)

個別商品価格

年次	米			味噌			塩		
	春秋平均 (石につき 銀匁)	指数 (18 18年 = 100)	同5 カ 年 移動 平均	春秋平均 (貫につき 銀匁)	指数 (18 18年 = 100)	同5 カ 年 移動 平均	春秋平均 (石につき 銀匁)	指数 (18 18年 = 100)	同5 カ 年 移動 平均
1836(天保 7)	117.05	163.02	170.24	2.25	121.62	134.60			
37(8)	172.80	240.67	166.87	3.50	189.19	138.92			
38(9)	116.20	161.84	164.19	2.65	143.24	141.62			
39(10)	107.20	149.30	153.77	2.45	132.43	138.92			
40(11)	76.20	106.13	130.35	2.25	121.62	123.78	27.75	146.05	
1841(12)	79.65	110.93	120.66	2.00	108.11	116.22	22.70	119.47	
42(13)	88.70	123.54	116.13	2.10	113.51	111.35	25.05	131.84	
43(14)	81.40	113.37	121.95	1.95	105.41	110.27	23.25	122.37	
44(弘化 1)	90.95	126.67	128.09	2.00	108.11	111.89			
45(2)	97.10	135.24	130.59	2.15	116.22	116.22			
1846(3)	101.70	141.64	136.11	2.15	116.22	121.08			
47(4)	97.65	136.00	141.31	2.50	135.14	128.11			
48(嘉永 1)	101.25	141.02	151.46	2.40	129.73	131.35			
49(2)	109.60	152.65	160.74	2.65	143.24	137.30			
50(3)	133.55	186.00	161.31	2.45	132.43	136.22			
1851(4)	135.00	188.02	164.33	2.70	145.95	136.22			
52(5)	99.70	138.86	166.42	2.40	129.73	135.14			
53(6)	112.10	156.13	156.16	2.40	129.73	134.60			
54(安政 1)	117.10	163.09	144.23	2.55	137.84	131.35			
55(2)	96.70	134.68	146.35	2.40	129.73	135.68			
1856(3)	92.20	128.41	154.19	2.40	129.73	137.30			
57(4)	107.30	149.44	160.61	2.80	151.35	137.84			
58(5)	140.25	195.33	174.49	2.55	137.84	149.73	31.15	163.95	
59(6)	140.15	195.20	210.39	2.60	140.54	177.84	32.60	171.58	
60(万延 1)	146.50	204.04	224.76	3.50	189.19	198.38	38.65	203.42	211.47
1861(文久 1)	221.10	307.94	235.18	5.00	270.27	236.22	52.15	274.47	252.47
62(2)	158.90	221.31	258.91	4.70	254.05	276.76	46.35	243.95	311.63
63(3)	177.65	247.42	329.89	6.05	327.03	327.57	70.10	368.95	
64(元治 1)	225.35	313.86	528.29	6.35	343.24	474.60	88.80	467.37	
65(慶応 1)	401.30	558.91	732.40	8.20	443.24	633.51			
1866(2)	933.35	1299.93	810.64	18.60	1005.41	742.70			
67(3)	891.65	1241.85	929.71	19.40	1048.65	822.16			
68(明治 1)	458.55	638.65	996.42	16.15	872.97	875.14			
69(2)	652.80	909.19	840.60	13.70	740.54	816.76			
70(3)	640.80	892.48		13.10	708.11				
1871(4)	373.95	520.82		13.20	713.51		93.10	490.00	

(出所) 三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物價の動態』(日本学術振興会、1952年)。

と消費者物価（1818年=100）（旧データ）

醤油			酒			燈油			旧データ 京都 消費者物価指数		年次
春秋平均（石につき銀匁）	指数（1818年=100）	同5カ年移動平均	春秋平均（石につき銀匁）	指数（1818年=100）	同5カ年移動平均	春秋平均（升につき銀匁）	指数（1818年=100）	同5カ年移動平均	指数（1818年=100）	同5カ年移動平均	
78.80	110.52	123.69	135.05	114.64	138.19	3.60	135.85	137.36	140.23	151.38	1836(天保 7)
97.85	137.24	130.01	209.90	178.18	147.67	3.95	149.06	141.13	200.59	153.10	37(8)
106.60	149.51	135.30	179.30	152.21	148.17	3.85	145.28	146.79	155.44	153.45	38(9)
103.20	144.74	140.72	221.95	188.41	145.43	3.75	141.51	149.81	153.99	148.76	39(10)
95.90	134.50	137.85	126.50	107.39	130.26	4.30	162.26	146.04	117.00	132.57	40(11)
98.10	137.59	131.30	118.95	100.98	119.43	4.00	150.94	142.26	116.78	123.86	1841(12)
87.65	122.93	122.71	120.50	102.29	101.95	3.45	130.19	135.85	119.65	116.08	42(13)
83.25	116.76	115.30	115.55	98.09	101.52	3.35	126.42	125.66	111.87	116.68	43(14)
72.55	101.75	107.27	119.00	101.02	104.17	2.90	109.43	123.40	115.08	118.75	44(弘化 1)
69.50	97.48	102.22	123.95	105.22	106.82	2.95	111.32	130.94	120.03	120.43	45(2)
69.45	97.41	99.24	134.55	114.22	110.43	3.70	139.62	139.25	127.13	124.27	1846(3)
69.65	97.69	101.15	136.10	115.54	117.26	4.45	167.93	148.30	128.02	129.60	47(4)
72.65	101.89	103.14	136.85	116.17	123.24	4.45	167.93	154.34	131.05	136.80	48(嘉永 1)
79.35	111.29	106.97	159.20	135.14	136.83	4.10	154.72	155.09	141.77	145.03	49(2)
76.60	107.43	107.98	159.20	135.14	136.04	3.75	141.51	150.94	156.05	144.95	50(3)
83.10	116.55	108.88	214.60	182.17	136.10	3.80	143.40	147.93	168.24	146.38	1851(4)
73.25	102.74	108.63	131.45	111.59	136.07	3.90	147.17	149.06	127.63	147.40	52(5)
75.85	106.38	108.99	137.15	116.43	132.44	4.05	152.83	149.43	138.24	141.67	53(6)
78.45	110.03	107.85	159.05	135.02	118.11	4.25	160.38	151.32	146.86	132.84	54(安政 1)
77.90	109.26	112.43	137.80	116.98	119.27	3.80	143.40	153.96	127.37	135.39	55(2)
79.05	110.87	115.32	130.20	110.53	125.30	4.05	152.83	156.23	124.09	141.26	1856(3)
89.55	125.60	118.63	138.30	117.40	131.49	4.25	160.38	155.09	140.39	146.18	57(4)
86.15	120.83	123.45	172.65	146.56	137.97	4.35	164.15	159.62	167.59	156.37	58(5)
90.25	126.58	143.44	195.50	165.96	157.24	4.10	154.72	181.89	171.48	184.99	59(6)
95.10	133.38	155.76	176.00	149.41	165.99	4.40	166.04	194.34	178.31	198.32	60(万延 1)
150.30	210.80	173.10	243.70	206.88	174.24	7.00	264.15	216.23	267.17	212.45	1861(文久 1)
133.50	187.24	198.11	189.80	161.12	190.57	5.90	222.64	256.23	207.07	237.78	62(2)
147.95	207.50	253.52	221.30	187.86	246.10	7.25	273.59	302.26	238.23	299.84	63(3)
179.40	251.61	319.36	291.65	247.58	344.83	9.40	354.72	357.36	298.13	442.01	64(元治 1)
292.65	410.45	434.35	503.10	427.08	499.29	10.50	396.23	451.70	488.61	609.72	65(慶応 1)
385.00	539.97	513.10	825.20	700.51	563.85	14.30	539.62	499.25	978.01	684.67	1866(2)
543.45	762.20	586.41	1099.55	933.40	624.28	18.40	694.34	600.76	1045.60	780.68	67(3)
428.70	601.26	638.63	601.55	510.65	651.14	13.55	511.32	664.91	612.99	836.51	68(明治 1)
440.75	618.16	656.31	647.60	549.75	590.92	22.85	862.26	674.34	778.20	747.71	69(2)
478.80	671.53		661.30	561.38		19.00	716.98		767.75		70(3)
448.05	628.40		470.50	399.41		15.55	586.79		533.99		1871(4)

付表 1-8 (その1) 建築労働者(旧データ)と日雇労働者(新旧データ)賃金の動向

年次	建築労働者				旧データ 日雇労働者			新データ 日雇労働者					新データ日雇労働者貨幣賃金/建築労働者貨幣賃金	
	貨幣賃金(1人2付銀匁)	同5カ年移動平均	実質賃金指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実質賃金指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	貨幣賃金(1人2付銀匁)	同5カ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実質賃金指数(A)(1818年=100)	同5カ年移動平均	貨幣賃金	5カ年移動平均
	1713(正徳 3)					133.33	64.07		1.19		134.46	65.08		
14(4)														
15(5)														
1716(享保 1)														
17(2)														
18(3)														
19(4)														
20(5)														
1721(6)														
22(7)														
23(8)														
24(9)														
25(10)														
1726(11)	2.00		72.70											
27(12)	2.00		76.60											
28(13)	2.00	2.00	88.72	83.97										
29(14)	2.00	2.00	91.78	87.78										
30(15)	2.00	1.96	90.06	85.64										
1731(16)	2.00		91.74											
32(17)	1.80		65.89											
33(18)														
34(19)														
35(20)														
1736(元文 1)														
37(2)														
38(3)														
39(4)														
40(5)														
1741(寛保 1)					94.44	78.47		0.83		93.22	69.72			
42(2)					105.56	91.18		0.91		102.26	79.77			
43(3)					88.89	77.50	83.57	0.83	0.85	93.79	74.49	76.17		
44(延享 1)					100.00	89.56	84.13	0.88	0.86	98.87	79.62	77.06		
45(2)					88.89	81.12	81.75	0.84	0.84	94.35	77.26	75.50		
1746(3)	2.84		83.64		94.44	81.29	84.85	0.86	0.86	96.61	74.15	77.32	0.30	
47(4)					88.89	79.27	85.59	0.80	0.86	89.83	71.99	78.63		
48(寛延 1)					105.56	93.00	92.49	0.93	0.93	105.09	83.58	84.95		
49(2)					100.00	93.27	98.60	0.90	0.98	101.70	86.16	91.67		
50(3)	2.84		87.92		127.78	115.60	100.48	1.15	0.99	129.94	108.86	94.57	0.41	
1751(宝暦 1)	2.92		91.53		122.22	111.88	102.47	1.13	0.96	127.12	107.78	96.80	0.39	
52(2)	2.84	3.09	96.91	110.83	88.89	88.64	105.02	0.83	0.95	93.22	86.45	99.87	0.29	0.31
53(3)	2.84	2.33	112.54	119.99	88.89	102.94	99.06	0.81	0.88	90.96	94.75	94.08	0.28	0.27

付表 1-8 (その2) 建築労働者(旧データ)と日雇労働者(新旧データ)賃金の動向

年次	建築労働者				旧データ 日雇労働者			新データ 日雇労働者					新データ日雇労働者賃金/建築労働者賃金	
	貨幣賃金(1人二付銀匁)	同5カ年移動平均	実質賃金指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実質賃金指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	同5カ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実質賃金指数(A)(1818年=100)	同5カ年移動平均	賃金	5カ年移動平均
1754(宝暦 4)	4.04	3.56	165.26	124.04	88.89	106.06	91.04	0.85	0.82	95.48	101.53	86.70	0.21	0.24
55(5)	4.04	3.80	133.70	128.30	88.89	85.81	88.48	0.80	0.81	90.40	79.88	84.93	0.20	0.22
1756(6)	4.04	3.79	111.78	123.30	88.89	71.74	84.02	0.80	0.82	90.40	70.87	82.07	0.20	0.22
57(7)	4.04	3.54	118.21	107.98	88.89	75.87	79.13	0.82	0.81	92.66	77.61	78.47	0.20	0.24
58(8)	2.80		87.56		88.89	80.61	79.68	0.81	0.81	91.53	80.45	80.12	0.29	
59(9)	2.80		88.65		88.89	81.62	84.42	0.82	0.81	92.09	83.54	84.60	0.29	
60(10)					88.89	88.58	88.98	0.80	0.81	90.40	88.12	88.31		
1761(11)					88.89	95.41		0.80		90.40	93.28			
62(12)					88.89	98.69		0.80		90.40	96.16			
63(13)														
64(明和 1)														
65(2)														
1766(3)														
67(4)														
68(5)														
69(6)														
70(7)														
1771(8)														
72(安永 1)														
73(2)	2.90		96.48											
74(3)	2.90		101.70											
75(4)	2.90	2.90	96.12	95.94										
1776(5)	2.90	2.91	93.38	96.04										
77(6)	2.92	2.91	92.04	96.02										
78(7)	2.92	2.91	96.96	98.80										
79(8)	2.92	2.92	101.60	100.76										
80(9)	2.92	2.91	110.00	100.27										
1781(天明 1)	2.92	2.91	103.19	96.95										
82(2)	2.90	2.91	89.59	91.47										
83(3)	2.90	2.90	80.36	87.70										
84(4)	2.90	2.90	74.23	83.99										
85(5)	2.90	2.92	91.15	77.39										
1786(6)	2.90	2.92	84.64	77.07										
87(7)	3.00	2.92	56.58	78.04										
88(8)	2.90	2.92	78.75	79.27										
89(寛政 1)	2.90	2.92	79.09	82.27										
90(2)	2.90	2.90	97.31	87.56										
1791(3)	2.90	2.90	99.60	88.23	88.89	88.54		0.82		92.66	88.85		0.28	
92(4)	2.92	2.90	83.04	90.66	105.56	87.66		0.92		103.96	85.20		0.32	
93(5)	2.90	2.90	82.11	89.27	100.00	82.11	84.95	0.90	0.87	101.70	83.08	86.48	0.31	0.30
94(6)	2.90	2.90	91.24	86.53	88.89	81.10	82.51	0.83	0.87	93.22	86.63	84.03	0.28	0.30

付表 1-8 (その3) 建築労働者(旧データ)と日雇労働者(新旧データ)賃金の動向

年次	建築労働者				旧データ 日雇労働者			新データ 日雇労働者					新データ日雇労働者賃金/建築労働者賃金	
	貨幣賃金(1人二付銀匁)	同5ヵ年移動平均	実質賃金指数(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実質賃金指数(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実質賃金指数(A)(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	賃金	5ヵ年移動平均
	1795(寛政 7)	2.90	2.90	90.36	87.52	94.44	85.34	80.63	0.89	0.85	100.00	88.66	83.01	0.31
1796(8)	2.90	2.90	85.88	88.96	88.89	76.34	81.07	0.81	0.84	91.53	76.59	82.71	0.28	0.29
97(9)	2.90	2.90	88.03	88.91	88.89	78.25	81.03	0.82	0.84	92.66	80.11	82.10	0.28	0.29
98(10)	2.90	2.90	89.29	88.25	94.44	84.33	81.38	0.85	0.84	95.48	81.56	81.01	0.29	0.29
99(11)	2.90	2.90	90.99	88.94	88.89	80.88	81.99	0.83	0.84	93.22	83.56	81.64	0.28	0.29
1800(12)	2.90	2.90	87.09	90.34	100.00	87.09	83.23	0.88	0.84	99.44	83.22	82.04	0.30	0.29
1801(享和 1)	2.90	2.90	89.33	91.80	88.89	79.40	83.54	0.83	0.83	93.22	79.76	82.48	0.28	0.29
02(2)	2.90	2.90	94.99	95.99	88.89	84.44	93.48	0.81	0.88	91.53	82.11	91.65	0.28	0.30
03(3)	2.90	2.90	96.63	100.88	88.89	85.89	94.65	0.80	0.86	90.40	83.74	92.95	0.28	0.29
04(文化 1)	2.90	2.91	111.93	104.32	116.67	130.58	92.97	1.09	0.82	122.60	129.41	91.18	0.37	0.28
05(2)	2.92	2.91	111.52	105.56	83.33	92.93	89.58	0.76	0.78	85.88	89.74	88.00	0.26	0.27
1806(3)	2.92	2.91	106.54	104.37	66.67	71.03	85.50	0.62	0.75	70.06	70.90	84.80	0.21	0.26
07(4)	2.92	2.92	101.19	100.51	66.67	67.46	76.87	0.61	0.71	68.93	66.22	76.68	0.21	0.24
08(5)	2.92	2.92	90.67	99.25	72.22	65.49	79.34	0.69	0.74	77.40	67.72	78.55	0.23	0.25
09(6)	2.92	2.92	92.60	98.45	94.44	87.46	84.50	0.89	0.79	100.00	88.84	83.67	0.30	0.27
10(7)	2.92	2.92	105.25	99.36	100.00	105.25	92.16	0.88	0.84	99.44	99.05	90.48	0.30	0.29
1811(8)	2.92	2.92	102.53	102.36	94.44	96.83	101.36	0.89	0.89	100.00	96.54	97.68	0.30	0.31
12(9)	2.92	2.92	105.75	102.85	100.00	105.75	106.05	0.89	0.92	100.00	100.26	100.80	0.30	0.32
13(10)	2.92	2.92	105.66	100.75	105.56	111.53	107.11	0.94	0.96	105.65	103.71	102.54	0.32	0.33
14(11)	2.92	2.92	95.05	100.17	116.67	110.90	108.78	1.04	0.96	116.95	104.42	102.68	0.35	0.33
15(12)	2.92	2.92	94.75	97.40	116.67	110.54	104.99	1.06	0.96	119.21	107.79	100.46	0.36	0.33
1816(13)	2.92	2.91	99.64	96.27	105.56	105.18	102.68	0.91	0.95	102.26	97.21	99.72	0.31	0.33
17(14)	2.92	2.91	91.89	98.37	94.44	86.79	100.45	0.87	0.92	98.31	89.18	100.24	0.30	0.32
18(文政 1)	2.90	2.91	100.00	102.41	100.00	100.00	100.05	0.89	0.89	100.00	100.00	100.99	0.31	0.30
19(2)	2.90	2.90	105.59	103.51	94.44	99.72	102.37	0.88	0.89	99.44	107.02	103.44	0.30	0.31
20(3)	2.90	2.90	114.95	105.28	94.44	108.56		0.89	0.91	100.57	111.54	107.48	0.31	0.31
1821(4)	2.90	2.90	105.11	105.33	111.11	116.79		0.92	1.00	103.39	109.47	117.71	0.32	0.34
22(5)	2.90	2.90	100.78	103.34				0.96	1.03	107.91	109.35	119.54	0.33	0.36
23(6)	2.90	2.90	100.25	99.26				1.34	1.06	151.41	151.18	117.98	0.46	0.36
24(7)	2.90	2.90	95.61	95.81				1.07	1.09	120.34	116.15	117.19	0.37	0.38
25(8)	2.90	2.91	94.57	94.96				1.01	1.12	114.12	103.75	119.15	0.35	0.39
1826(9)	2.92	2.91	87.84	93.85				1.10	1.11	124.29	105.53	114.76	0.38	0.38
27(10)	2.92	2.91	96.51	90.56				1.09	1.09	122.60	119.15	108.63	0.37	0.37
28(11)	2.92	2.92	94.69	89.15				1.28	1.07	144.07	129.22	105.52	0.44	0.37
29(12)	2.92	2.92	79.19	88.12				0.97	1.03	109.61	85.50	100.73	0.33	0.35
30(天保 1)	2.92	2.92	87.52	86.70				0.91	1.00	102.83	88.18	96.04	0.31	0.34
1831(2)	2.92	2.92	82.69	83.17				0.90	0.93	101.70	81.61	86.18	0.31	0.32
32(3)	2.92	2.92	89.39	81.09				0.97	0.94	109.04	95.72	84.51	0.33	0.32
33(4)	2.92	2.92	77.06	80.94				0.93	0.94	104.52	79.90	84.79	0.32	0.32
34(5)	2.92	2.92	68.80	78.66				0.98	0.96	110.17	77.15	83.92	0.33	0.33
35(6)	2.92	2.92	86.75	70.75				0.94	0.96	106.22	89.59	76.20	0.32	0.33

付表 1-8 (その4) 建築労働者(旧データ)と日雇労働者(新旧データ)賃金の動向

年次	建築労働者				旧データ 日雇労働者			新データ 日雇労働者					新データ日雇労働者賃金/建築労働者賃金	
	貨幣賃金(1人二付銀匁)	同5ヵ年移動平均	実質賃金指数(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実質賃金指数(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金(1人二付銀匁)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実質賃金指数(A)(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	賃金	5ヵ年移動平均
1836(天保 7)	2.92	2.92	71.31	68.21				1.00	0.97	112.99	77.25	74.27	0.34	0.33
37(8)	2.92	2.92	49.85	67.44				0.97	0.96	109.61	57.10	73.73	0.33	0.33
38(9)	2.92	2.92	64.33	67.18				0.95	0.97	107.35	70.25	74.59	0.33	0.33
39(10)	2.92	2.92	64.94	70.05				0.96	1.00	107.91	74.45	80.28	0.33	0.34
40(11)	2.92	2.87	85.47	75.54				0.99	1.02	111.86	93.89	89.29	0.34	0.35
1841(12)	2.92	2.83	85.63	79.22				1.11	1.01	125.42	105.70	92.90	0.38	0.36
42(13)	2.70	2.79	77.34	82.32				1.08	1.05	122.03	102.16	100.31	0.40	0.38
43(14)	2.70	2.74	82.72	80.64				0.90	1.08	101.70	88.33	102.78	0.33	0.39
44(弘化 1)	2.70	2.70	80.41	78.07				1.16	1.07	130.51	111.46	99.90	0.43	0.40
45(2)	2.70	2.70	77.09	77.06				1.16	1.06	131.07	106.27	96.88	0.43	0.39
1846(3)	2.70	2.74	72.79	75.78				1.06	1.06	119.77	91.29	94.34	0.39	0.39
47(4)	2.70	2.79	72.28	73.80				1.02	1.02	114.69	87.06	87.98	0.38	0.37
48(嘉永 1)	2.92	2.83	76.31	71.20				0.91	0.98	102.26	75.64	80.59	0.31	0.35
49(2)	2.92	2.87	70.54	68.53				0.96	0.99	108.48	79.64	77.60	0.33	0.34
50(3)	2.92	2.92	64.08	69.74				0.97	0.98	109.04	69.30	76.93	0.33	0.33
1851(4)	2.92	2.92	59.44	68.95				1.09	0.98	122.60	76.34	77.09	0.37	0.34
52(5)	2.92	2.92	78.35	68.46				0.97	0.99	109.04	83.76	77.36	0.33	0.34
53(6)	2.92	2.92	72.34	71.35				0.94	1.02	105.65	76.39	83.83	0.32	0.35
54(安政 1)	2.92	2.92	68.09	75.58				1.01	1.02	114.12	80.99	88.03	0.35	0.35
55(2)	2.92	2.92	78.51	74.15				1.12	1.04	126.55	101.67	88.54	0.38	0.36
1856(3)	2.92	2.92	80.59	71.62				1.08	1.07	121.47	97.35	87.89	0.37	0.37
57(4)	2.92	2.92	71.23	69.66				1.07	1.09	120.90	86.30	86.33	0.37	0.37
58(5)	2.92	2.92	59.67	65.18				1.09	1.11	122.60	73.15	81.35	0.37	0.38
59(6)	2.92	2.92	58.31	56.55				1.11	1.17	125.42	73.16	73.52	0.38	0.40
60(万延 1)	2.92	2.92	56.08	51.96				1.23	1.19	138.98	76.77	69.06	0.42	0.41
1861(文久 1)	2.92	2.92	37.43	48.42				1.35	1.21	152.54	58.23	65.05	0.46	0.42
62(2)	2.92	3.05	48.29	45.08				1.19	1.31	134.46	64.00	61.50	0.41	0.43
63(3)	2.92		41.98					1.19	1.33	133.90	53.11	51.99	0.41	
64(元治 1)	3.60		41.64					1.58	1.33	177.97	55.38	43.23	0.44	
65(慶応 1)								1.36	1.36	153.67	29.26	33.34		
1866(2)	16.06		56.40					1.32	1.42	149.15	14.41	27.80	0.08	
67(3)	17.35		56.81					1.37	1.48	154.80	14.57	22.02	0.08	
68(明治 1)	17.35		96.90					1.47	1.52	165.54	25.36	20.72	0.08	
69(2)								1.89	1.62	213.56	26.51	25.43		
70(3)								1.57		176.84	22.75			
1871(4)								1.82		205.65	37.98			

(出所) 三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物価の動向』(日本学術振興会、1952年)、三井文庫編『近世後期における主要物価の動向』[増補改訂](東京大学出版会、1989年)。

なお、旧データ建築労働者実質賃金指数(1818年=100)、および旧データ京都日雇実質賃金指数(1818年=100)のデフレーターは旧データ京都消費者物価指数(1818年=100)で、新データ京都日雇実質賃金指数(A)(1818年=100)のデフレーターは新データ京都消費者物価指数(A)(1818年=100)である。

第2章 物価と賃金の地域差

— 京都対江戸 —

はじめに

前章では、京都市場における未熟練労働（日雇）と熟練労働（大工、左官）との賃金格差を中心として、いくつかのファクト・ファインディングを行なった。本章では、これをうけて、賃金の地域間格差、すなわち京都および江戸における未熟練労働（日雇）間の賃金格差¹⁾の問題を取り扱うこととする。前章同様、本章においても、とりあえず事実の観察に専念し、のちの章で、近世後期における労働市場の構造と変動について、若干の解釈を試みる際の準備としたい。

1 資料と加工

本章でもちいた資料は、前掲『近世後期における主要物価の動態』〔増補改訂〕（以下、新データと呼ぶ）のうち、第6表「京都日用品小売物価表」と第7表「江戸日用品小売物価表」である。「京都日用品小売物価表」については、前章で詳しく論じたので、ここでは、「江戸日用品小売物価表」にかんして、新データと旧データ（前掲『近世後期に

おける主要物價の動態』)との異同を、本章に直接かかわる二三の点について指摘しておくこととしたい。

第一点は、新データにみられる日雇貨幣賃金系列の整備である。旧データに拠るかぎり、江戸についてはほぼ全期間、日雇賃金を知ることはできなかった。しかるに新データに拠れば、1818（文政元）年以降、1871（明治4）年にいたるまで欠年なしに、江戸の日雇賃金を知ることができる。この点は、賃金資料の乏しい物価史研究の現状に鑑みて、まことに貴重であると言わなければならないであろう。

第二点は、小売物価データについての異同である。旧データに収められていた価格系列は、京都同様、江戸の場合も、白米、味噌、塩、醤油、酒、燈油の6品目にすぎなかったが、新データでは、品目数が大幅に増えて、白米、麦、餅米、塩、味噌、醤油、酢、酒、煎茶、煙草、炭、薪、水油、蠟燭の14品目となっている。

つぎに、日雇実質賃金系列を得るための、デフレーター（消費者物価指数）の作成過程について書き留めておくこととしよう。まず、さきの14品目それぞれについて、春秋平均をとって各年値とした。資料には、通常、春秋2回価格データが記載されているからであるが、しばしば春秋いずれかの価格を欠いている場合があり、このときは記載のある方の価格をもってその年の価格とした（なおこの点は、日雇貨幣賃金の場合も同様である）。ついで、1818（文政元）年を 100^2 として各品目を指数化した。なお、この過程で、麦はデータ数が少なく、基準年（1818年）の価格を欠いているので除外した。

さてこのようにしてデータを整えたうえで、消費者物価指数の系列を得るために、いまや（白米、餅米、塩、味噌、醤油、酢、酒、煎茶、煙草、炭、薪、水油、蠟燭の）13品目となった各年の個別商品価格指数を、

適当な重みをつけて平均しなければならない。ここではさしあたり、京都の場合と同様、米に50パーセントのウエイトをあたえ、他は等ウエイトとした。以上のようにして算定された系列を、江戸消費者物価指数(A) (1818年＝100) と呼ぶことにする。

ところでわれわれの目的は、京都と江戸、両地における実質賃金の動向を比較することにある。京都と江戸、両地の貨幣賃金指数 (1818年＝100) を、それぞれ京都消費者物価指数(A) (1818年＝100) および江戸消費者物価指数(A) (1818年＝100) で除して100倍すれば、一応、両地の実質賃金指数 (1818年＝100) を算定することができる。しかしこの方法によっては、ある年の両地の実質賃金のいずれが、基準年に比して、より上昇しているか、あるいは下落しているかということは知り得ても、ある年の両地の実質賃金そのものが、もう一方との比較で、どのような水準にあったのかという点については知ることができない。そこで本章では、後者の比較をも可能にするようなもうひとつの物価指数を新たに作成することとした。

まず、京都における白米以下各品目の価格を、それぞれ1818年を100として指数化し、ついで、江戸における白米以下の各品目についても、京都の各品目1818年の価格を100として、指数化した (もちろん江戸を基準にすることも可能である)。このばあい、両地における品目構成は、単位もふくめて共通でなくてはならない。そこで、京都14品目のうち、塩 (1俵ニ付銀匁)、煙草 (1玉ニ付銀匁)、堅炭 (1俵ニ付銀匁)、和炭 (1俵ニ付銀匁) をはずし、江戸13品目の中から、塩 (1石ニ付銀匁)、煙草 (1斤ニ付銀匁)、炭 (10貫匁ニ付銀匁) を除外した。京都の燈油と江戸の水油はそのまま残した。この結果、両地における品目構成は、白米 (1石ニ付銀匁)、餅米 (1石ニ付銀匁)、味噌 (10貫匁ニ付銀匁)、

醤油（1石ニ付銀匁）、酢（1石ニ付銀匁）、酒（1石ニ付銀匁）、煎茶（1斤ニ付銀匁）、薪（10貫匁ニ付銀匁）、燈油（水油）（1石ニ付銀匁）、蠟燭（100匁ニ付銀匁）の都合10品目となった。

以下、京都および江戸の、1818年の京都を100とする個別商品価格指数に対して、米に50パーセントのウェイトをあたえ（他は等ウェイト）、それぞれ加重平均した。この両者を、京都消費者物価指数(B)（1818年＝100）、江戸消費者物価指数(B)（1818年京都＝100）と呼ぶことにしよう。³⁾

つぎに実質賃金の計測について書き留めておこう。まず京都および江戸の日雇貨幣賃金（1人ニ付銀匁）を、京都および江戸の1818年を100としてそれぞれ指数化した。ついでこの両地の貨幣賃金指数を、それぞれ京都消費者物価指数(A)、江戸消費者物価指数(A)で除して100倍することで、京都日雇実質賃金指数(A)（1818年＝100）、および江戸日雇実質賃金指数(A)（1818年＝100）を算出した。前章における分析は、この京都(A)系列に拠ったものである。そして、本研究結章では、江戸(A)系列をもちいる予定である。

もうひとつの賃金系列は、まず京都および江戸の日雇貨幣賃金を、いずれも京都の1818年を100として指数化した。それからこの両地の貨幣賃金指数（1818年京都＝100）を、それぞれ京都消費者物価指数(B)、江戸消費者物価指数(B)で除して100倍することで、京都実質賃金指数(B)（1818年＝100）、および江戸実質賃金指数(B)（1818年京都＝100）を計算した。本章ではこの(B)系列が使われている。以下、必要と目的に応じて、データに簡単な統計操作をほどこしたり、グラフを作成したりしたが、この点については、のちに、その都度、触れることにしたい。

II 京都、江戸における物価と賃金の動向

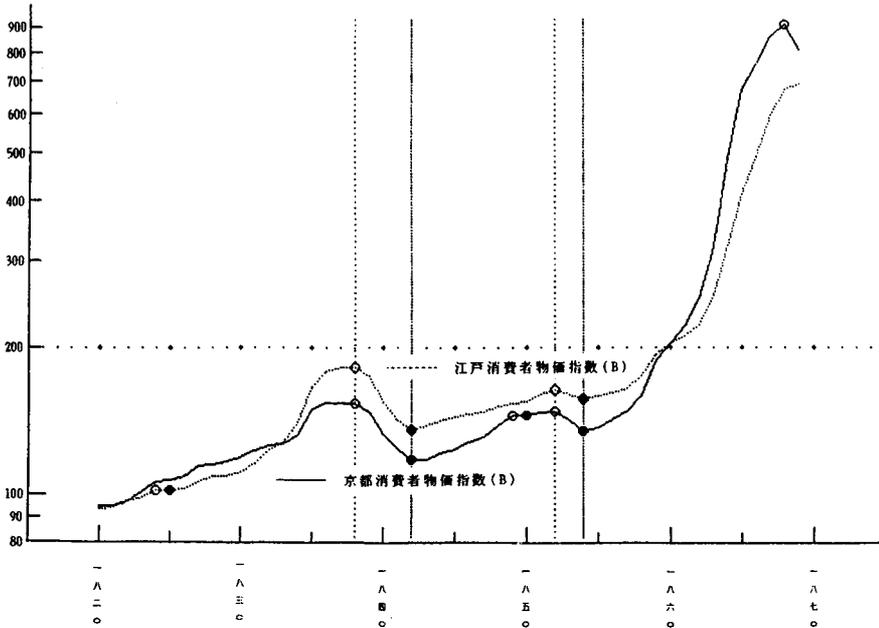
— ファクト・ファインディングス

図2-1は、京都および江戸双方のデータが得られる1818（文政元）年以降の時期について、京都消費者物価指数(B)（実線）、江戸消費者物価指数(B)（点線）（いずれも1818年京都＝100）のそれぞれ傾向線（5ヵ年移動平均）をグラフ化したものである（半対数目盛）。

ここで、図2-1をもちいて、のちの分析に便利なように、あらかじめ、おおよその時期区分を行なっておくこととしたい。グラフには、波動の峰（○）と谷（●）が描き込まれている。そこで、1820（文政3）年以降の時期について、波動の谷に着目することで、一応の時期区分をおこなうと、おおむね、つぎのとおりとなる。Ⅰ期は、1820（文政3）年の谷⁴⁾から、1838（天保9）年の峰をへて、1842（天保13）年の谷まで。Ⅱ期は、1842（天保13）年の谷から、1852（嘉永5）年の峰をへて、1854（安政元）年の谷まで。Ⅲ期は、1854（安政元）年の谷以降の時期である。この時期区分は、こまかい点を別にすれば、新保博氏によってすでにおこなわれた時期区分⁵⁾と、ほとんど変わらないと言ってよいであろう。なお、この時期区分にもとづいて、本章で掲げたすべてのグラフに、区切りの線を入れておいた。

さて、京都と江戸では、どちらが物価が高かったであろうか。大ざっぱに言えば、1820年代と60年代は、京都消費者物価が、江戸消費者物価よりも高い水準にあったといえよう。逆に、1830、40、50年代は、江戸消費者物価のほうが高かったと考えられる。この点を、後掲図2-3、中段にグラフ化した、京都消費者物価指数(B)／江戸消費者物価指数(B)比（5ヵ年移動平均、普通目盛）の系列についてみると、京都／江戸比

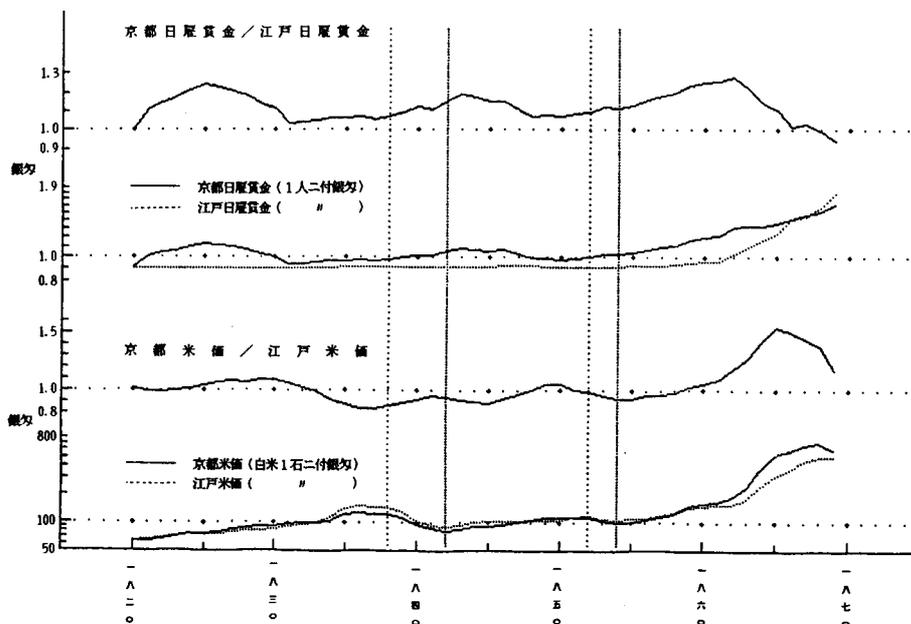
図 2 - 1 京都と江戸の消費者物価指数 (1818年京都=100、5ヵ年移動平均)



は、1820年代後半を中心に1.00より大きかったが、しだいに下落し、1830年代後半以降、1850年代前半にかけては、ほぼ横ばいの傾向にあったと考えられる。が、Ⅲ期（1854年以降）に入ると、京都／江戸比は急速に上昇することとなり、1865（慶応元）年に鋭いピーク（1.52）を形成した。しかし、その後、この比は下落した。

つぎに、図 2 - 2 は、京都および江戸における米価と日雇賃金の名目系列をグラフ化したものである。下段に実線で描き込まれているのは、京都米価（白米1石ニ付銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛）である。もうひとつの点線で描き込まれているグラフは、江戸米価（白米1石ニ付銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛）である。中段に描かれているのは、名目米価の京都／江戸比（5ヵ年移動平均、普通目盛）である。上段は、実線が、京都日雇賃金（1人ニ付銀匁、5ヵ年移動平均、半対数

図 2 - 2 京都と江戸における米価と賃金賃金(5ヵ年移動平均)



目盛)、点線は、江戸日雇賃金(1人二付銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛)のグラフである。最上段に描き込まれているのは、日雇貨幣賃金の京都/江戸比(5ヵ年移動平均、普通目盛)のグラフである。

さて、まず、京都、江戸の米価の動きを観察してみると、これはさきに述べた両地の物価の動きと、趨勢的にも循環的にも、基本的に変わるころはなかったといってよいであろう。天保(1830~43年)中期に、京都米価、江戸米価ともに1836(天保7)年がピークで、両地消費者物価指数のピーク1838(天保9)年よりも、若干早くなっている(米価の先導性)ほかは、全期間を通じて、両地米価の峰や谷は、消費者物価指数の峰や谷と、ほぼ一致していたと考えらる。

それでは、名目米価の水準は、京都、江戸のいずれが高かったであろうか。この点について、中段の京都/江戸比をも参考にしながら観察を

進めることとしよう。

大ざっぱに言えば、1820年代と60年代は、京都米価は江戸米価よりも高い水準にあったといえよう。逆に、1830、40、50年代は、しだいに差は詰まってくるにせよ、江戸米価のほうが高かったと考えられる。この点を京都／江戸比の系列についてみると、京都／江戸比は、1820年代後半を中心に1.00より大きかったが、しだいに下落し、1836（天保7）年には深い谷（0.84）をむかえた。が、ついでこの比は、振動を繰り返しながら上昇することとなり、1865（慶応元）年に鋭いピーク（1.55）を形成した。しかし、その後、この比は下落した。

ここでひとつ注目しておきたいのは、1830年代後半以降の京都／江戸比の上昇傾向である。というのは、さきにみたように、消費者物価指数の京都／江戸比は、1830年代後半以降、1850年代前半にかけては、ほぼ横ばいの傾向にあって、これは米価の場合とは大きく異なるからである。つまりこの期における京都米価の相対的上昇は、米以外の他の京都物価（おそらくは工産物）の相対的下落によって相殺された。その結果、消費者物価指数の京都／江戸比は横ばいになったと考えられよう。

つぎに、日雇貨幣賃金の系列について観察することとしたい。京都日雇賃金は、1820年代の高水準を別とすれば、1830年代以降着実な上昇趨勢をもった⁶⁾。これに対して、江戸日雇賃金の方は、1820年代、30、40、50年代とほぼ横ばいの趨勢で、60年代になって急速に上昇した。したがって、60年代を別にすれば、のちにもみるとおり、京都賃金の方が、市場に対する感応の度合は大きかったといえよう。

貨幣賃金の水準は、京都、江戸のいずれが高かったであろうか。賃金の京都／江戸比をも参考にして、観察を進めることとしよう。まず、1820（文政3）年に両地の貨幣賃金水準はほぼ等しかった（京都／江戸比

＝1.01)。その後、1825（文政8）年ごろにかけて、京都賃金は江戸のそれに対して相対的に上昇し、賃金の京都／江戸比は、1825（文政8）年に、ひとつのピーク（1.24）を形成した。それから、この比は下落して、1831（天保2）年には、再び1.00の水準に接近した（1.04）。しかるにその後、京都賃金は、江戸のそれに対して、相対的に着実に上昇し、したがって京都／江戸比も着実に上昇することとなり、1862（文久2）年にはピーク（1.28）に達した。しかし、以後京都／江戸比は急速に下落し、1869（明治2）年には1.00の水準を下回ることとなった（0.94）。

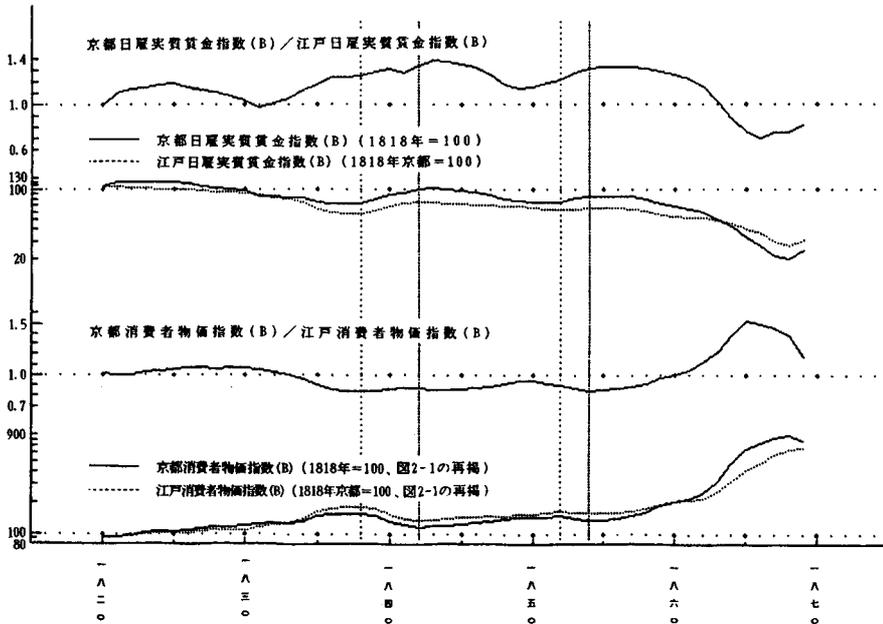
もっとも全期を通じていえば、江戸との対比で、日雇貨幣賃金は、明らかに京都の方が高かったといえるであろう。

さてつぎに、京都、江戸両地における実質賃金の変動について観察することとしたい。図2－3は、この目的のために作成したものである。

下段に実線で描き込まれているのは、京都消費者物価指数(B)（1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛、図2－1の再掲）である。もうひとつの点線で描き込まれているグラフは、江戸消費者物価指数(B)（1818年京都＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛、図2－1の再掲）である。中段に描かれているのは、京都消費者物価指数(B)／江戸消費者物価指数(B)（5ヵ年移動平均、普通目盛）である。上段は、実線が、京都日雇実質賃金指数(B)（1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛）、点線は、江戸日雇実質賃金指数(B)（1818年京都＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛）のグラフである。最上段に描き込まれているのは、京都日雇実質賃金指数(B)／江戸日雇実質賃金指数(B)（5ヵ年移動平均、普通目盛）のグラフである。

一見して明らかなように、京都、江戸両地の日雇実質賃金の変動パターンは、趨勢的にも、循環的にも大きく異なるところはなかったといえ

図2-3 京都と江戸における物価と実質賃金(5年平均)



るであろう。むろん、両地の実質賃金は、趨勢的にも、循環的にも消費者物価の変動パターンとほぼ正確に逆相関した。

すなわち、物価のⅠ期(1820年～1842年)、Ⅱ期(1842年～1854年)、Ⅲ期(1854年以降)それぞれの上昇局面と下降局面は、日雇実質賃金の下降局面、上昇局面と、ほぼ正確に対応しているとみられる。もっとも、文政(1818～29年)前期における京都日雇実質賃金の上昇は特別で、1820(文政3)年以降、物価が上昇を始めても、実質賃金は、なおしばらく上昇した(京都日雇実質賃金指数(B)のピークは、1822(文政5)年で、その値は119.80であった)。

以上は、短期的な循環の視点から観察したものであるが、長期的な趨勢についてはどうであったろうか。この点は、今回、新データをもちいることで、はじめて明らかになったのであるが、京都の場合も、江戸の

場合も、全期を通じて、実質賃金の下落は著しく、とりわけⅢ期（1854年以降）においてそうであった。

さて、それでは、日雇実質賃金の水準は、京都、江戸のいずれが高かったであろうか。この点についても、最上段の京都／江戸比をも参考にしながら観察を進めることとしよう。

まず、日雇実質賃金水準は、1860年代を別にすれば、全期を通じて京都の方が高かったとってよいであろう。

もうすこし詳しくみると、京都／江戸比の系列は、1820（文政3）年に0.99で、このころ両地の日雇実質賃金水準はほぼ等しかったことがわかる。それからこの系列は、しばらくのあいだ上昇を続け、1825（文政8）年にピーク（1.19）に達した。が、その後この比は下落し、1831（天保2）年に谷（0.98）を迎える。が、以後は1843（天保14）年のピーク（1.39）に向けて上昇した。すなわち、京都実質賃金は相対的に上昇した。

しかし、このピークを境として、京都／江戸比は、どちらかといえば下落の趨勢となり、1849（嘉永2）年の谷（1.14）、1857（安政4）年の峰（1.33）を経過したのち、1863（文久3）年には、1に接近し（1.02）、ついで、1866（慶応2）年の深い谷（0.70）に達した。すなわち、京都賃金は江戸との対比で、相対的に大きく下落した。そして、以後は、京都／江戸比は、やや上昇しているといえよう。

ここでもうひとつ指摘しておきたいのはつぎの点である。すなわち、日雇実質賃金の京都／江戸比の系列と、消費者物価指数の京都／江戸比の系列とが、1820年代前半を別にすれば、趨勢的にも、循環的にも、おおむね逆に相関しているという事実である。換言すれば、京都物価が江戸物価との対比で、相対的に上昇（下落）するときには、逆に、京都実

質賃金は江戸実質賃金との対比で、相対的に下落（上昇）するということである。あるいは、京都物価が相対的に低水準（高水準）にあるときには、京都実質賃金が相対的に高水準（低水準）になるということである。

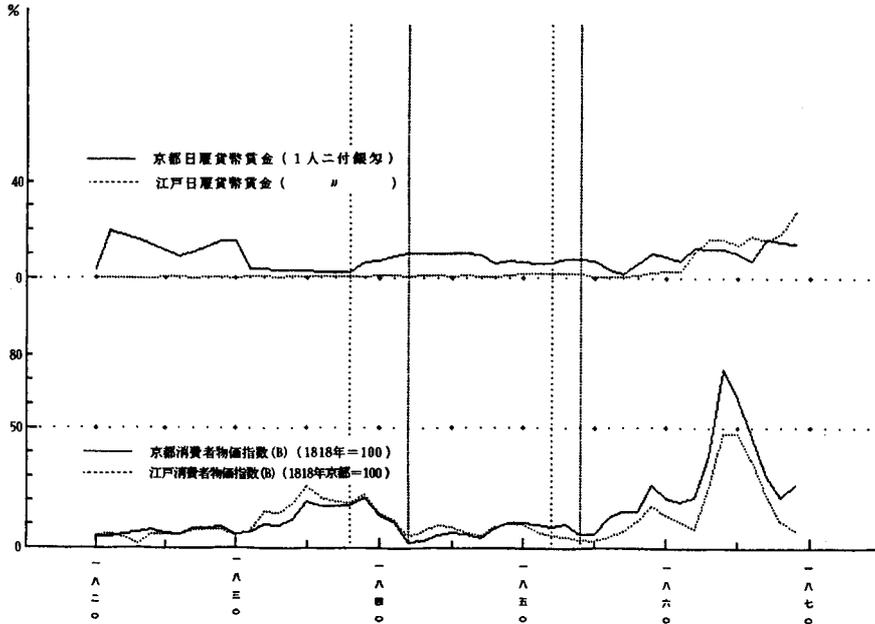
ところが1820年代前半は、京都物価が江戸との対比で、相対的に上昇しているにもかかわらず、京都実質賃金もまた江戸実質賃金との対比で、相対的に上昇(!)しているのである。さきに述べたように、この時期には、京都貨幣賃金の大幅な上昇がみられ、物価の上昇が始まってもおお、しばらくのあいだは、実質賃金も上昇するという、例外的な時期であった。一方、江戸の場合は、この時期に、貨幣賃金は停滞していて、物価の上昇とともに実質賃金は低下した。この結果、京都実質賃金は江戸との対比で、相対的に上昇することとなったのである。

さて以下では、京都、江戸両地における物価（生産物価格）と賃金（要素価格）の変動について、両地におけるその変動パターンの地域差、あるいは、連動性の有無といった問題にかんして、変動係数や相関係数をもちいることで、さらに詳細な観察を行なうこととしたい。

図2-4下段には、さきの京都消費者物価指数(B)（1818年＝100）の「5ヵ年移動変動係数」が実線で、また江戸消費者物価指数(B)（1818年京都＝100）の「5ヵ年移動変動係数」が点線で、それぞれ図示されている（普通目盛）。上段には、京都日雇貨幣賃金（1人二付銀匁）の「5ヵ年移動変動係数」が実線で、また江戸日雇貨幣賃金（1人二付銀匁）の「5ヵ年移動変動係数」が点線で、それぞれ図示されている（普通目盛）。

まず物価の変動係数をみると、京都、江戸ともに、ほぼ同じような変動パターンが観察され、両地とも、天保（1830～43年）中期、および18

図2-4 「5ヵ年移動変動係数」



50年代後半から60年代の変動係数が大きかったことがわかる。さらに細かく観察してみると、天保（1830～43年）中期は、江戸の物価変動が激しく、これは、この時期に、江戸の物価が、京都との対比で相対的に上昇したことの反映である。また幕末期になると、京都の物価変動がより激しくなっていて、これは、この期における京都の物価上昇が、江戸よりもいっそう激しかったことに起因するといつてよいであろう。

ところで、貨幣賃金の変動係数の推移は、両地で大きく異なっている。京都貨幣賃金の変動は、全期を通じて市場感応的で、なかでも、1820年代と、60年代には、その変動係数は、10～20パーセントの水準に達していた。ところが、江戸の場合は、物価（生産物価格）とは異なって、貨幣賃金（要素価格）の方はあまり動かなかつた。しかし、1850年代後半以降、徐々に江戸の日雇貨幣賃金も、市場感応的となり、ついに60年代

には、変動係数が、京都を凌駕することとなった。

図2-5下段は、京都、江戸消費者物価指数(B)の相関を図示したものである。点線はいわば「5ヵ年移動単純相関係数」とでも呼ぶべきもので、グラフ化にさいしては、たとえば、1818年から1822年の5年間の相関係数を、その中央年である1820年にドットするというふうな処理を、繰り返し行なっている。

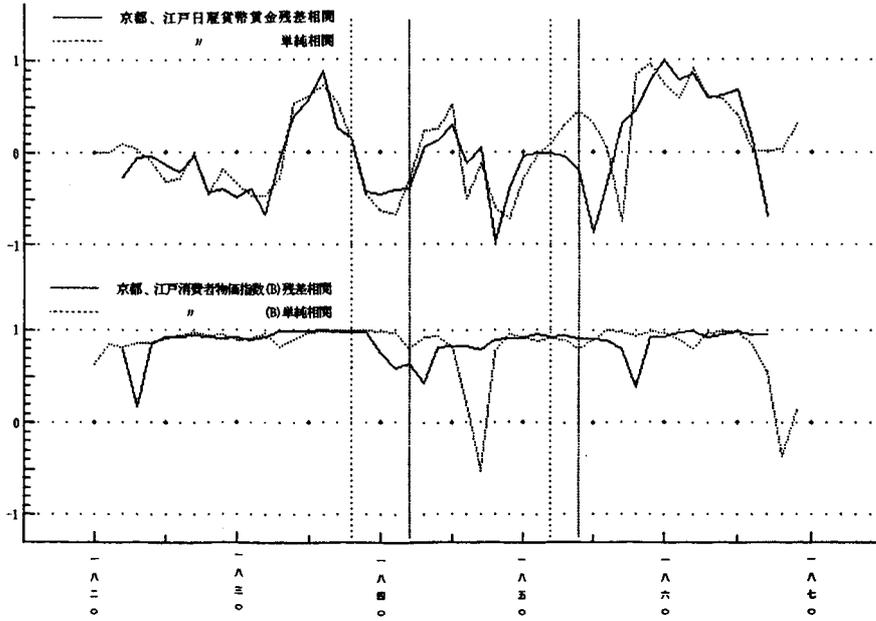
つぎに、実線はいわば「5ヵ年移動残差相関係数」とでも呼ぶべきものである。残差相関係数の計算過程はつぎの通りである。すなわち、京都、江戸系列のそれぞれについて、まず、各年値マイナス5ヵ年移動平均値（すなわち残差）を算出し、しかるのち、これら京都、江戸残差系列間で相関をとっている。グラフ化にさいしては、たとえば、1820年（移動平均系列はこの年から始まる）から1824年の5年間の残差相関係数を、その中央年である1822年にドットするというふうな処理を、繰り返し行なっている。

はじめの単純相関係数を持ちいると、京都、江戸系列がともに上昇趨勢、あるいは下降趨勢にあるような場合、短期的な相関を見だしにくくというようなことがありえよう。そこで、後者の残差相関係数を持ちいることにすれば、原系列の趨勢に左右されない短期的な相関を見きわめることが可能になると考えられる。が、本章では、念のため、とりあえず両方の相関係数を図示しておくこととした。

さて、下段には、京都、江戸消費者物価指数の相関が、上段には、京都、江戸日雇貨幣賃金の相関が、それぞれ図示されている。

一見して明らかのように、京都と江戸の消費者物価指数は、全期を通じて、ほぼ完全に相関しているといつてよいであろう（このことは、とりわけ残差相関の系列において著しい）。これは、生産物価格について

図2-5 「5ヶ年移動相関係数」



の、両市場のほぼ完全な連動を物語るものといってさしつかえないであろう。しかるに、要素価格（賃金）の場合は、1850年代前半までぐらいは、京都、江戸両市場で、ほとんど相関はみられない。ようやく、50年代後半から60年代前半にかけて、ある程度の相関を観察しうるにすぎないといえよう。したがって、要素価格については、文政期（1818～29年）以降になっても、いまだ両市場の連動はみられず、幕末の一時期になっはじめて、両市場が連動したと考えられる。

おわりに

ここでは、本章で得られた観察事実のおもなものについて、簡単に要約しておくこととしたい。

(1) 1820年代と60年代は、京都消費者物価が、江戸消費者物価よりも高い水準にあったが、逆に、1830、40、50年代は、江戸消費者物価のほうが高かった。

(2) 1830年代後半以降、1850年代前半にかけて、消費者物価指数の京都／江戸比は横ばいで推移したが、これは、京都米価の相対的上昇（対江戸）が、米以外の他の京都物価（おそらくは工産物）の相対的下落（対江戸）によって相殺された結果である。

(3) 全期を通じていえば、日雇貨幣賃金は、明らかに、（江戸との対比で）京都の方が高かった。

(4) 1860年代を別にすれば、日雇実質賃金水準も、全期を通じて、京都の方が高かった。

(5) 京都貨幣賃金の変動は、全期を通じて市場感応的であったが、江戸の場合は、物価（生産物価格）とは異なって、貨幣賃金（要素価格）の方はあまり動かなかった。しかし、1850年代後半以降、徐々に江戸の日雇貨幣賃金も、市場感応的となり、ついに60年代には、変動係数が、京都を凌駕した。

(6) 生産物価格について、両市場は、ほぼ完全に連動していたが、要素価格については、文政期（1818～29年）以降になっても、いまだ両市場の連動はみられず、幕末の一時期になってはじめて、両市場が連動した。

注

- 1) 序章でも述べたように、新保博氏は、近年、幕末期（1830～67年）における江戸と大阪の物価の比較を行ない、江戸と大阪における

物価変動のパターンや物価水準の比較を中心に考察を試み、いくつかの重要な観察事実を得ている。そして、これらの観察事実を幕末期の経済発展のなかに位置づけるという課題に対するひとつの接近を、下記リスト最後の論文において行なっている。前掲新保「徳川後期の物価水準(2)」、新保博「江戸後期の貨幣と物価に関する断章」『三田学会雑誌』73巻3号(1980年)、前掲同「江戸の物価変動, 1830-67年」、前掲同「幕末期における江戸の物価水準」、前掲同「幕末期における江戸と大阪の物価水準」、前掲同「江戸末期(文政～幕末・維新时期)における物価動向と経済発展」、前掲同「幕末期における江戸と大阪の物価」、前掲同「江戸後期における全国市場の構造」。なお、序章でも述べたように、賃金の地域差(上方と江戸)をあつかった研究は、管見によれば、前掲新保「江戸の物価変動, 1830-67年」、16～19ページのみである。もっともここで分析の対象とされたのは大工賃金である。

- 2) 1818(文政元)年の単年ベースにしたひとつの理由は、本研究3、4章のなかで物価系列を作成した際に、1818年＝100とした(せざるをえなかった)のに合わせて、両者を比較しようと考えたからである。しかし、1818(文政元)年は、文政改鑄の影響をうけて、大阪金相場が下落を開始した年で、これは1820(文政3)年まで継続する(前掲新保『近世の物価と経済発展』、171～173ページ)。したがって、本章の場合は、基準年は、1818(文政元)年の単年ベースよりは、金相場が、もうすこし安定していた年をえらぶか、あるいは、1818-22年＝100のようにした方がよかったであろう。が、今回は、この点を修正することはできなかった。
- 3) この(B)系列の作成にあたっては、新保博氏が、前掲「幕末期にお

ける江戸の物価水準」、3～7ページで行なった見事な処理に負うところが大きい。

- 4) 前章、図1-4、図1-5によれば、1820(文政3)年に、京都消費者物価指数(A)は谷となっている。図を掲げることはできなかったが、京都消費者物価指数(B)のばあいも同様である。
- 5) 前掲新保「江戸後期における全国市場の構造」、21ページ。氏の時期区分は、Ⅰ期が1830～43年、Ⅱ期が1844～57年、Ⅲ期が1858～67年である。もっとも同氏が比較の対象としたのは、本章とは異なって、江戸と大阪である。また、依拠した資料も同じではない。
- 6) 京都日雇貨幣賃金と、京都消費者物価指数相互の、趨勢的および循環的な相関については、前章、および本研究結章参照。

付表 2-1 (その1) 江戸

年次	白米			同 京都基準		餅米			同 京都基準		塩		
	春秋平均(1石二付銀匁)	指数 (1818年=100)	同5カ年移動平均	指数 (1818年京都=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数 (1818年=100)	同5カ年移動平均	指数 (1818年京都=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数 (1818年=100)	同5カ年移動平均
1713(正徳 3)	146.14	227.81		206.65							41.25	261.91	
14(4)													
15(5)													
16(享保 1)	162.12	252.72		229.24		173.17	216.46		248.92		58.01	368.32	
1818(文政 1)	64.15	100.00		90.71		80.00	100.00		114.99		15.75	100.00	
19(2)	57.05	88.93		80.67		74.01	92.51		106.38		15.65	99.37	
20(3)	58.18	90.69	99.10	82.26	89.89	75.00	93.75	97.25	107.81	111.83	15.70	99.68	97.21
1821(4)	67.38	105.03	101.66	95.27	92.21	80.00	100.00	97.01	114.99	111.56	14.45	91.75	96.63
22(5)	71.11	110.85	106.13	100.55	96.27	80.00	100.00	98.28	114.99	113.01	15.00	95.24	95.87
23(6)	72.35	112.78	111.47	102.31	101.11	79.04	98.80	99.03	113.61	113.87	15.30	97.14	95.43
24(7)	71.40	111.30	117.62	100.96	106.69	79.06	98.93	101.53	113.64	116.75	15.05	95.56	96.63
25(8)	75.30	117.38	116.20	106.48	105.40	78.00	97.50	100.53	112.12	115.60	15.35	97.46	96.70
1826(9)	87.10	135.78	116.80	123.16	105.95	90.00	112.50	100.28	129.37	115.31	15.40	97.78	96.51
27(10)	66.55	103.74	123.37	94.10	111.91	76.00	95.00	104.41	109.24	120.06	15.05	95.56	96.63
28(11)	74.30	115.82	127.26	105.06	115.44	78.04	97.55	106.91	112.18	122.94	15.15	96.19	96.51
29(12)	92.45	144.11	127.56	130.72	115.71	95.60	119.50	109.06	137.42	125.41	15.15	96.19	96.00
30(天保 1)	87.81	136.88	130.48	124.16	118.36	88.00	110.00	112.96	126.49	129.90	15.25	96.83	95.94
1831(2)	88.05	137.26	139.87	124.51	126.88	98.61	123.26	117.20	141.74	134.77	15.00	95.24	97.90
32(3)	75.93	118.36	151.81	107.36	137.71	91.59	114.49	127.16	131.65	146.23	15.00	95.24	98.98
33(4)	104.41	162.76	158.58	147.64	143.85	95.00	118.75	132.90	136.55	152.83	16.70	106.03	101.84
34(5)	130.75	203.82	179.90	184.88	163.19	135.45	169.31	139.47	194.70	160.38	16.00	101.59	105.27
35(6)	109.50	170.69	221.68	154.84	201.09	110.95	138.69	167.01	159.48	192.05	17.50	111.11	131.57
1836(7)	156.45	243.88	234.12	221.23	212.37	124.90	156.13	188.13	179.53	216.33	17.70	112.38	158.25
37(8)	209.93	327.24	230.91	296.84	209.46	201.74	252.18	198.29	289.98	228.01	35.71	226.73	176.72
38(9)	144.32	224.97	224.63	204.07	203.76	179.47	224.34	200.19	257.97	230.20	37.71	239.43	189.61
39(10)	120.46	187.77	203.77	170.33	184.84	176.08	220.10	201.60	253.10	231.82	30.55	193.94	207.79
40(11)	89.35	139.28	164.75	126.34	149.44	118.56	148.20	191.17	170.42	219.83	27.66	175.59	198.65
1841(12)	89.55	139.60	145.86	126.63	132.31	130.53	163.16	172.81	187.62	198.72	32.02	203.27	182.64
42(13)	84.75	132.11	138.52	119.84	125.65	160.02	200.03	159.79	230.01	183.75	28.52	181.05	179.56
43(14)	83.75	130.55	145.97	118.43	132.41	106.06	132.58	163.15	152.45	187.61	25.10	159.37	179.44
44(弘化 1)	96.90	151.05	154.87	137.02	140.48	124.00	155.00	167.40	178.24	192.49	28.12	178.51	174.85
45(2)	113.25	176.54	160.09	160.14	145.22	132.00	165.00	158.59	189.74	182.37	27.57	175.02	174.83

における個別商品価格の動向

味噌			同 京都基準		醤油			同 京都基準		西作			年 次
春秋平 均(10貫 匁二付 銀匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	指 数 (1818 年京都 =100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	春秋平 均(1石 二付銀 匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	指 数 (1818 年京都 =100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	春秋平 均(1石 二付銀 匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	
19.26	148.15		105.39		135.06	195.03		189.39		105.21	183.92		1713(正徳 3) 14(4) 15(5) 16(享保 1)
26.08	200.62		142.71		275.43	397.73		386.22		176.00	307.67		
13.00	100.00		71.14		69.25	100.00		97.10		57.21	100.00		1818(文政 1)
13.00	100.00		71.14		68.75	99.28		96.40		56.87	99.41		19(2)
12.75	98.08	98.85	69.77	70.31	68.45	98.84	99.99	95.98	97.10	56.92	99.50	99.24	20(3)
12.70	97.69	97.92	69.49	69.66	69.09	99.76	99.40	96.87	96.52	56.91	99.48	98.23	1821(4)
12.80	98.46	97.38	70.04	69.28	70.70	102.09	99.55	99.13	96.66	55.95	97.81	97.80	22(5)
12.40	95.38	97.15	67.85	69.11	67.20	97.04	99.67	94.23	96.78	54.30	94.92	97.36	23(6)
12.65	97.31	98.23	69.22	69.88	69.25	100.00	99.13	97.10	96.25	55.65	97.28	96.90	24(7)
12.60	96.92	98.62	68.95	70.15	68.88	99.46	98.84	96.58	95.98	55.65	97.28	96.80	25(8)
13.40	103.08	99.92	73.32	71.08	67.20	97.04	99.26	94.23	96.38	55.62	97.23	97.01	1826(9)
13.05	100.39	100.15	71.41	71.24	69.70	100.65	98.87	97.74	96.00	55.66	97.29	96.84	27(10)
13.25	101.92	100.92	72.50	71.79	68.65	99.13	99.39	96.26	96.51	54.91	95.99	96.75	28(11)
12.80	98.46	99.92	70.04	71.08	67.90	98.05	100.33	95.21	97.43	55.16	96.42	96.42	29(12)
13.10	100.77	99.85	71.68	71.03	70.69	102.07	100.92	99.12	98.00	55.40	96.84	96.12	30(天保 1)
12.75	98.08	101.15	69.77	71.96	70.46	101.75	102.37	98.80	99.40	54.66	95.54	96.23	1831(2)
13.00	100.00	104.92	71.14	74.64	71.75	103.61	104.15	100.61	101.13	54.82	95.82	98.64	32(3)
14.10	108.46	109.31	77.15	77.76	73.65	106.35	105.98	103.27	102.91	55.22	96.53	101.71	33(4)
15.25	117.31	119.31	83.45	84.87	74.07	106.95	108.85	103.86	105.69	62.04	108.45	105.65	34(5)
15.95	122.69	133.53	87.28	94.99	77.02	111.21	117.86	107.99	114.45	64.19	112.20	127.38	35(6)
19.25	148.08	147.17	105.34	104.69	80.40	116.10	128.62	112.74	124.89	65.92	115.24	149.33	1836(7)
22.25	171.12	157.17	121.72	111.80	102.96	148.68	137.85	144.37	133.85	116.97	204.48	168.84	37(8)
22.97	176.65	164.55	125.66	117.06	110.90	160.14	142.21	155.51	138.09	118.00	206.27	187.42	38(9)
21.75	167.31	165.63	119.02	117.82	106.02	153.09	146.67	148.66	142.42	117.86	206.02	206.06	39(10)
20.75	159.62	159.87	113.54	113.72	92.11	133.01	143.23	129.16	139.09	117.33	205.10	203.87	40(11)
19.95	153.46	152.23	109.17	108.29	95.86	138.42	138.31	134.41	134.30	119.23	208.42	195.90	1841(12)
18.50	142.31	146.46	101.23	104.19	91.07	131.50	135.04	127.69	131.13	110.71	193.53	187.84	42(13)
18.00	138.46	142.23	98.50	101.18	93.85	135.52	136.67	131.60	132.71	95.20	166.41	178.68	43(14)
18.00	138.46	139.23	98.50	99.04	94.70	136.75	137.38	132.79	133.40	94.80	165.72	170.21	44(弘化 1)
18.00	138.46	138.46	98.50	98.50	97.75	141.16	139.09	137.07	135.06	91.15	159.34	164.02	45(2)

付表 2-1 (その2) 江戸

年次	白米			同 京都基準		銚米			同 京都基準		塩		
	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	指数(1818年京都=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均	指数(1818年京都=100)	同5カ年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指数(1818年=100)	同5カ年移動平均
1846(弘化 3)	118.10	184.10	160.87	167.00	145.93	147.50	184.38	163.02	212.02	187.46	28.40	180.32	182.32
47(4)	101.50	158.22	161.53	143.52	146.52	124.80	156.00	164.30	179.39	188.93	28.50	180.95	187.89
48(嘉永 1)	86.25	134.45	167.22	121.96	151.68	123.78	154.73	163.83	177.92	188.39	31.00	196.83	198.60
49(2)	99.00	154.33	169.52	139.99	153.78	129.11	161.39	162.04	185.58	186.33	32.50	206.35	207.62
50(3)	131.50	204.99	168.82	185.95	153.14	130.13	162.66	164.12	187.05	188.72	36.00	228.57	215.24
1851(4)	125.50	195.64	178.57	177.46	161.98	140.33	175.41	167.44	201.71	192.54	35.50	225.40	220.64
52(5)	99.25	154.72	183.24	140.34	166.22	133.12	166.40	169.85	191.35	195.31	34.50	219.05	222.86
53(6)	117.50	183.16	175.29	166.15	159.01	137.06	171.33	172.32	197.01	198.16	35.25	223.81	220.00
54(安政 1)	114.00	177.71	167.81	161.20	152.22	138.76	173.45	175.69	199.45	202.03	34.25	217.46	218.73
55(2)	106.00	165.24	170.85	149.89	154.98	140.01	175.01	180.20	201.25	207.22	33.75	214.29	223.49
1856(3)	101.50	158.22	174.56	143.52	158.34	153.82	192.28	180.44	221.10	207.49	34.50	219.05	227.94
57(4)	109.00	169.91	182.20	154.13	165.27	151.16	188.95	180.75	217.28	207.85	38.25	242.86	230.16
58(5)	129.40	201.72	198.41	182.98	179.98	138.00	172.50	186.87	198.36	214.89	38.75	246.03	236.06
59(6)	138.50	215.90	227.41	195.84	206.28	140.00	175.00	198.67	201.24	228.45	36.00	228.57	248.13
60(万延 1)	158.00	246.30	238.63	223.42	216.46	164.50	205.63	205.13	236.45	235.88	38.40	243.81	256.70
1861(文久 1)	194.50	303.20	241.73	275.03	219.27	201.00	251.25	219.38	288.92	252.26	44.00	279.37	293.21
62(2)	145.00	226.03	246.41	205.03	223.52	177.00	221.25	232.63	254.42	267.50	45.00	285.71	330.35
63(3)	139.35	217.23	285.38	197.05	258.87	195.00	243.75	265.50	280.29	305.30	67.50	428.57	413.65
64(元治 1)	153.50	239.28	378.91	217.05	343.71	193.00	241.25	299.75	277.42	344.69	65.25	414.29	501.27
65(慶応 1)	283.00	441.15	496.29	400.17	450.18	296.00	370.00	404.00	425.47	464.57	104.00	660.32	597.14
1866(2)	494.50	770.85	587.86	699.24	533.24	338.00	422.50	508.75	485.84	585.02	113.00	717.46	657.33
67(3)	521.50	812.94	715.58	737.42	649.11	594.00	742.50	610.84	853.82	702.42	120.50	765.08	781.05
68(明治 1)	433.05	675.06	801.51	612.34	727.05	614.00	767.50	705.91	882.56	811.74	114.90	729.52	889.72
69(2)	563.19	877.92	792.79	796.36	719.14	601.35	751.69	770.61	864.38	886.14	162.68	1032.86	885.07
70(3)	558.61	870.79		789.89		676.28	845.35		972.09		189.58	1203.65	
1871(4)	466.53	727.25		659.69		596.80	746.00		857.84		109.34	694.22	

(出所) 三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』[増補改訂] (東京大学出版会、1989年)。

における個別商品価格の動向

味噌			同 京都基準		醤油			同 京都基準		西作			年 次
春秋平 均(10貫 匁二付 銀匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 移 動 平 均	指 数 (1818 年京都 =100)	同 5 カ 移 動 平 均	春秋平 均(1石 二付銀 匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 移 動 平 均	指 数 (1818 年京都 =100)	同 5 カ 移 動 平 均	春秋平 均(1石 二付銀 匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 移 動 平 均	
18.00	138.46	138.46	98.50	98.50	98.30	141.95	140.14	137.84	136.09	95.00	166.07	164.83	1846(弘化 3)
18.00	138.46	139.62	98.50	99.32	97.00	140.07	141.68	136.02	137.57	93.00	162.57	165.69	47(4)
18.00	138.46	144.23	98.50	102.60	97.50	140.79	143.77	136.72	139.61	97.50	170.44	173.15	48(嘉永 1)
18.75	144.23	148.85	102.60	105.88	100.00	144.40	146.14	140.22	141.91	97.25	170.00	179.44	49(2)
21.00	161.54	153.46	114.91	109.17	105.00	151.63	147.22	147.23	142.96	112.50	196.66	186.44	50(3)
21.00	161.54	158.85	114.91	113.00	106.50	153.79	149.13	149.34	144.81	113.00	197.54	191.85	1851(4)
21.00	161.54	162.31	114.91	115.46	100.75	145.49	150.24	141.28	145.89	113.00	197.54	197.75	52(5)
21.50	165.39	161.54	117.65	114.91	104.10	150.33	149.85	145.97	145.51	113.00	197.54	198.13	53(6)
21.00	161.54	160.77	114.91	114.36	103.85	149.96	149.27	145.62	144.95	114.10	199.46	198.30	54(安政 1)
20.50	157.69	160.77	112.18	114.36	103.65	149.68	150.64	145.34	146.28	113.60	198.58	198.65	55(2)
20.50	157.69	160.77	112.18	114.36	104.50	150.90	152.90	146.53	148.47	113.50	198.41	199.18	1856(3)
21.00	161.54	160.77	114.91	114.36	105.50	152.35	155.03	147.94	150.54	114.00	199.28	199.14	57(4)
21.50	165.39	167.69	117.65	119.29	111.90	161.59	159.18	156.91	154.57	114.50	200.16	203.13	58(5)
21.00	161.54	183.85	114.91	130.78	111.25	160.65	169.43	156.00	164.52	114.00	199.28	218.51	59(6)
25.00	192.31	199.23	136.80	141.72	118.00	170.40	181.13	165.46	175.88	125.00	218.51	239.84	60(万延 1)
31.00	238.46	212.31	169.63	151.03	140.00	202.17	199.17	196.31	193.41	157.50	275.33	260.29	1861(文久 1)
31.00	238.46	230.77	169.63	164.16	146.00	210.83	222.15	204.73	215.72	175.00	305.92	289.49	62(2)
30.00	230.77	268.46	164.16	190.97	174.39	251.82	259.69	244.53	252.17	173.00	302.42	335.29	63(3)
33.00	253.85	324.62	180.58	230.92	190.80	275.52	297.38	267.55	288.77	197.50	345.25	421.29	64(元治 1)
49.50	380.77	404.62	270.86	287.83	248.00	358.12	342.73	347.75	332.80	256.00	447.51	536.14	65(慶応 1)
67.50	519.23	476.92	369.36	339.26	270.50	390.61	383.25	379.30	372.15	403.50	705.36	704.48	1866(2)
83.00	638.46	553.02	454.17	393.39	303.00	437.55	446.60	424.88	433.67	503.50	880.17	845.50	67(3)
77.00	592.31	611.52	421.34	435.00	314.70	454.44	538.36	441.28	522.77	654.50	1144.13	986.52	68(明治 1)
82.46	634.31	654.30	451.22	465.44	410.14	592.26	597.17	575.11	579.88	600.84	1050.33	1059.92	69(2)
87.53	673.27		478.93		565.74	816.95		793.30		659.36	1152.63		70(3)
95.31	733.15		521.53		474.12	684.65		664.83		613.44	1072.35		1871(4)

付表 2-2 (その1) 江戸

年次	酢 同京都基準		酒			同 京都基準		煎茶			同 京都基準	
	指数 (1818 年京都 =100)	同5 年 カ 移 動 平 均	春秋平 均(1石 二付銀 匁)	指数 (18 18年= 100)	同5 年 カ 移 動 平 均	指 数 (1818 年京都 =100)	同5 年 カ 移 動 平 均	春秋平 均(1斤 二付銀 匁)	指 数 (18 18年= 100)	同5 年 カ 移 動 平 均	指 数 (1818 年京都 =100)	同5 年 カ 移 動 平 均
1713(正徳 3)	233.80		153.20	126.87		131.02		0.95	124.18		107.96	
14(4)												
15(5)												
16(享保 1)	391.11		328.36	271.92		280.83		1.00	130.72		113.64	
1818(文政 1)	127.12		120.76	100.00		103.28		0.77	100.00		86.93	
19(2)	126.38		118.50	98.13		101.35		0.77	100.00		86.93	
20(3)	126.49	126.16	118.01	97.72	100.15	100.92	103.43	0.75	98.04	99.35	85.23	86.36
1821(4)	126.47	124.87	122.58	101.51	100.65	104.83	103.95	0.76	99.35	100.26	86.36	87.16
22(5)	124.33	124.33	124.84	103.38	101.53	106.77	104.86	0.76	99.35	99.61	86.36	86.59
23(6)	120.67	123.76	123.80	102.52	103.20	105.88	106.58	0.80	104.58	98.56	90.91	85.68
24(7)	123.67	123.19	123.80	102.52	105.92	105.88	109.39	0.74	96.73	98.56	84.09	85.68
25(8)	123.67	123.06	128.10	106.08	107.26	109.56	110.77	0.71	92.81	98.04	80.68	85.23
1826(9)	123.60	123.33	139.00	115.11	109.64	118.88	113.23	0.76	99.35	96.47	86.36	83.86
27(10)	123.68	123.11	132.90	110.06	113.04	113.66	116.74	0.74	96.73	96.08	84.09	83.52
28(11)	122.02	123.00	138.15	114.41	115.43	118.15	119.21	0.74	96.73	96.99	84.09	84.32
29(12)	122.57	122.57	144.36	119.54	116.98	123.46	120.81	0.73	94.77	95.69	82.39	83.18
30(天保 1)	123.11	122.19	142.50	118.01	119.33	121.87	123.24	0.75	97.39	94.90	84.66	82.50
1831(2)	121.46	122.33	148.41	122.90	123.58	126.92	127.63	0.71	92.81	94.77	80.68	82.39
32(3)	121.81	125.39	147.10	121.82	130.34	125.81	134.61	0.71	92.81	95.82	80.68	83.30
33(4)	122.71	129.30	163.81	135.65	136.88	140.09	141.36	0.74	96.08	96.60	83.52	83.98
34(5)	137.87	134.30	185.17	153.34	143.85	158.36	148.56	0.77	100.00	99.74	86.93	86.70
35(6)	142.63	161.93	181.95	150.67	171.68	155.61	177.30	0.78	101.31	102.22	88.07	88.86
1836(7)	146.49	189.83	190.51	157.77	193.26	162.93	199.59	0.83	108.50	105.36	94.32	91.59
37(8)	259.93	214.63	315.11	260.95	199.45	269.50	205.98	0.81	105.23	106.80	91.48	92.84
38(9)	262.21	238.25	294.12	243.57	199.58	251.55	206.12	0.86	111.77	107.71	97.16	93.64
39(10)	261.90	261.94	222.52	184.27	197.60	190.31	204.07	0.82	107.19	107.58	93.18	93.52
40(11)	260.72	259.16	182.77	151.35	171.88	156.31	177.50	0.81	105.88	107.45	92.05	93.41
1841(12)	264.94	249.03	178.54	147.85	149.31	152.70	154.20	0.83	107.84	106.01	93.75	92.16
42(13)	246.02	238.78	159.79	132.33	142.72	136.66	147.39	0.80	104.58	105.49	90.91	91.70
43(14)	211.54	227.15	157.85	130.72	150.21	135.00	155.13	0.80	104.58	105.23	90.91	91.48
44(弘化 1)	210.67	216.38	182.75	151.34	156.91	156.30	162.05	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
45(2)	202.56	208.51	228.01	188.82	167.46	195.00	172.95	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91

における個別商品価格の動向 (つづき)

煙草			炭			薪			同 京都基準		水油			年 次
春秋平均(1斤二付銀匁)	指 数 (1818年=100)	同 5年移動平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指 数 (1818年=100)	同 5年移動平均	春秋平均(10貫匁二付銀匁)	指 数 (1818年=100)	同 5年移動平均	指 数 (1818年京都=100)	同 5年移動平均	春秋平均(1石二付銀匁)	指 数 (1818年=100)	同 5年移動平均	
2.50	208.33		10.92	220.83		3.79	189.50		134.40		641.05	252.88		1713(正徳 3) 14(4) 15(5) 16(享保 1)
3.50	291.67		16.64	336.50		4.67	233.50		165.60		517.93	204.31		
1.20	100.00		4.95	100.00		2.00	100.00		70.92		253.50	100.00		1818(文政 1)
1.20	100.00		4.96	100.20		2.00	100.00		70.92		247.16	97.50		19(2)
1.20	100.00	99.75	5.00	101.11	100.28	2.00	100.00	99.80	70.92	70.78	267.16	105.39	103.79	20(3)
1.18	98.33	99.75	5.00	101.11	100.55	2.00	100.00	98.60	70.92	69.93	272.50	107.49	103.95	1821(4)
1.21	100.42	99.00	4.90	98.99	100.28	1.98	99.00	97.35	70.21	69.04	275.21	108.56	105.29	22(5)
1.20	100.00	97.92	5.01	101.31	100.18	1.88	94.00	96.35	66.67	68.33	255.50	100.79	105.57	23(6)
1.16	96.25	98.25	4.89	98.89	99.98	1.88	93.75	95.15	66.49	67.48	264.20	104.22	108.26	24(7)
1.14	94.58	97.92	4.98	100.61	101.11	1.90	95.00	95.35	67.38	67.62	270.75	106.81	112.98	25(8)
1.20	100.00	97.67	4.95	100.19	101.86	1.88	94.00	96.00	66.67	68.09	306.52	120.92	119.68	1826(9)
1.19	98.75	98.67	5.18	104.65	103.34	2.00	100.00	97.00	70.92	68.79	335.01	132.15	125.09	27(10)
1.19	98.75	99.50	5.20	105.06	104.96	1.95	97.25	97.90	68.97	69.43	340.50	134.32	128.89	28(11)
1.22	101.25	99.33	5.26	106.27	108.03	1.98	98.75	99.35	70.04	70.46	332.68	131.23	130.35	29(12)
1.19	98.75	98.92	5.38	108.70	110.56	1.99	99.50	99.25	70.57	70.39	319.00	125.84	131.09	30(天保 1)
1.19	99.17	99.00	5.71	115.47	112.74	2.03	101.25	99.40	71.81	70.50	325.02	128.21	131.88	1831(2)
1.16	96.67	98.58	5.80	117.29	114.66	1.99	99.50	99.30	70.57	70.43	344.41	135.86	134.70	32(3)
1.19	99.17	99.58	5.74	115.98	117.09	1.96	98.00	99.20	69.50	70.35	350.52	138.27	140.93	33(4)
1.19	99.17	101.08	5.73	115.88	118.77	1.97	98.25	98.80	69.68	70.07	368.42	145.33	149.24	34(5)
1.25	103.75	103.75	5.98	120.83	122.25	1.98	99.00	98.70	70.21	70.00	397.96	156.98	160.71	35(6)
1.28	106.67	107.42	6.13	123.86	127.42	1.99	99.25	98.95	70.39	70.18	430.32	169.75	171.65	1836(7)
1.32	110.00	109.83	6.66	134.68	132.03	1.98	99.00	99.10	70.21	70.28	489.73	193.19	179.41	37(8)
1.41	117.50	111.58	7.02	141.86	136.12	1.99	99.25	99.40	70.39	70.50	489.21	192.98	186.80	38(9)
1.34	111.25	112.75	6.87	138.93	143.13	1.98	99.00	101.00	70.21	71.63	466.85	184.16	189.22	39(10)
1.35	112.50	112.42	6.99	141.25	144.29	2.01	100.50	101.10	71.28	71.70	491.58	193.92	183.13	40(11)
1.35	112.50	110.58	7.86	158.95	143.36	2.15	107.25	100.80	76.06	71.49	460.95	181.83	173.94	1841(12)
1.30	108.33	110.00	6.95	140.45	142.55	1.99	99.50	100.25	70.57	71.10	412.55	162.74	164.65	42(13)
1.30	108.33	109.17	6.79	137.21	141.27	1.96	97.75	100.15	69.33	71.03	372.75	147.04	155.77	43(14)
1.30	108.33	108.33	6.67	134.88	136.28	1.93	96.25	98.30	68.26	69.72	349.10	137.71	156.15	44(弘化 1)
1.30	108.33	108.33	6.67	134.88	135.17	2.00	100.00	98.10	70.92	69.57	379.00	149.51	164.72	45(2)

付表 2-2 (その2) 江戸

年次	酢 同京都基準		酒			同 京都基準		煎茶			同 京都基準	
	指数 (1818 年京都 =100)	同 5 カ年 移動 平均	春秋平 均(1石 二付銀 匁)	指数 (18 18年= 100)	同 5 カ年 移動 平均	指数 (1818 年京都 =100)	同 5 カ年 移動 平均	春秋平 均(1斤 二付銀 匁)	指数 (18 18年= 100)	同 5 カ年 移動 平均	指数 (1818 年京都 =100)	同 5 カ年 移動 平均
1846(弘化 3)	211.11	209.53	219.00	181.36	179.91	187.30	185.80	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
47(4)	206.67	210.62	223.50	185.09	188.57	191.15	194.74	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
48(嘉永 1)	216.67	220.11	233.00	192.95	193.45	199.27	199.79	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
49(2)	216.11	228.11	235.00	194.61	200.49	200.98	207.06	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
50(3)	250.00	237.00	257.50	213.24	205.38	220.23	212.10	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
1851(4)	251.11	243.89	261.50	216.55	209.02	223.65	215.87	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
52(5)	251.11	251.38	253.00	209.52	212.17	216.38	219.12	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
53(6)	251.11	251.87	255.00	211.17	211.25	218.09	218.17	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
54(安政 1)	253.56	252.09	254.00	210.34	209.85	217.23	216.72	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
55(2)	252.44	252.53	252.00	208.69	209.76	215.52	216.64	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
1856(3)	252.22	253.20	253.00	209.52	209.65	216.38	216.52	0.80	104.58	104.58	90.91	90.91
57(4)	253.33	253.16	252.50	209.10	210.39	215.95	217.29	0.80	104.58	105.88	90.91	92.05
58(5)	254.44	258.22	254.30	210.59	215.86	217.49	222.93	0.80	104.58	107.97	90.91	93.86
59(6)	253.33	277.78	258.50	214.07	225.80	221.08	233.19	0.85	111.11	110.59	96.59	96.14
60(万延 1)	277.78	304.89	285.00	236.02	237.97	243.75	245.76	0.88	115.03	118.43	100.00	102.96
1861(文久 1)	350.00	330.89	313.00	259.20	251.92	267.69	260.17	0.90	117.65	121.05	102.27	105.23
62(2)	388.89	368.00	326.00	269.97	268.89	278.81	277.70	1.10	143.79	125.62	125.00	109.21
63(3)	384.44	426.22	338.50	280.32	318.25	289.50	328.67	0.90	117.65	148.37	102.27	128.98
64(元治 1)	438.89	535.56	361.00	298.95	400.23	308.75	413.34	1.03	133.99	177.12	116.48	153.98
65(慶応 1)	568.89	681.56	583.00	482.80	505.40	498.61	521.96	1.75	228.76	215.69	198.86	187.50
1866(2)	896.67	895.56	808.00	669.12	616.87	691.04	637.08	2.00	261.44	270.98	227.27	235.57
67(3)	1118.89	1074.82	961.00	795.83	716.79	821.89	740.27	2.58	336.60	331.90	292.61	288.52
68(明治 1)	1454.44	1254.09	1011.50	837.65	784.12	865.08	809.80	3.02	394.12	376.08	342.61	326.93
69(2)	1335.20	1347.39	964.31	798.56	808.97	824.72	835.46	3.36	438.56	416.08	381.25	361.71
70(3)	1465.24		989.51	819.43		846.27		3.44	449.67		390.91	
1871(4)	1363.20		958.02	793.36		819.35		3.53	461.44		401.14	

(出所) 三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』[増補改訂] (東京大学出版会、1989年)。

における個別商品価格の動向 (つづき)

煙草			炭			薪			同 京都基準		水油			年 次
春秋平 均(1斤 二付銀 匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	春秋平 均(10貫 匁二付 銀匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	春秋平 均(10貫 匁二付 銀匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	指 数 (1818 年京都 =100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	春秋平 均(1石 二付銀 匁)	指 数 (18 18年= 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	
1.30	108.33	108.33	6.63	133.97	135.17	1.96	98.00	98.35	69.50	69.75	465.75	183.73	178.94	1846(弘化 3)
1.30	108.33	108.33	6.67	134.88	136.34	1.97	98.50	98.90	69.86	70.14	521.25	205.62	187.89	47(4)
1.30	108.33	109.17	6.79	137.21	137.55	1.98	99.00	99.05	70.21	70.25	553.00	218.15	189.74	48(嘉永 1)
1.30	108.33	110.00	6.96	140.75	139.43	1.98	99.00	100.20	70.21	71.06	462.50	182.45	187.63	49(2)
1.35	112.50	110.00	6.97	140.95	141.13	2.02	100.75	101.90	71.45	72.27	402.50	158.78	183.75	50(3)
1.35	112.50	110.83	7.09	143.38	142.37	2.08	103.75	102.95	73.58	73.01	439.00	173.18	177.71	1851(4)
1.30	108.33	111.67	7.09	143.38	142.89	2.14	107.00	103.85	75.89	73.65	472.00	186.19	178.11	52(5)
1.35	112.50	112.50	7.09	143.38	143.48	2.09	104.25	104.10	73.94	73.83	476.50	187.97	183.16	53(6)
1.35	112.50	113.33	7.09	143.38	144.79	2.07	103.50	104.05	73.40	73.79	467.50	184.42	185.90	54(安政 1)
1.40	116.67	115.83	7.12	143.88	147.46	2.04	102.00	103.45	72.34	73.37	466.50	184.02	185.94	55(2)
1.40	116.67	117.50	7.42	149.95	150.50	2.07	103.50	103.80	73.40	73.62	473.75	186.88	186.53	1856(3)
1.45	120.83	119.17	7.75	156.72	153.67	2.08	104.00	104.50	73.76	74.11	472.50	186.39	185.90	57(4)
1.45	120.83	120.83	7.84	158.54	157.01	2.12	106.00	106.40	75.18	75.46	484.00	190.93	189.31	58(5)
1.45	120.83	124.17	7.88	159.25	161.88	2.14	107.00	109.90	75.89	77.94	459.50	181.26	203.06	59(6)
1.50	125.00	130.83	7.94	160.57	170.01	2.23	111.50	113.50	79.08	80.50	509.80	201.11	215.01	60(万延 1)
1.60	133.33	137.50	8.62	174.32	189.53	2.42	121.00	120.70	85.82	85.60	648.00	255.62	229.73	1861(文久 1)
1.85	154.17	145.00	9.76	197.37	217.25	2.44	122.00	133.85	86.52	94.93	624.00	246.15	264.40	62(2)
1.85	154.17	164.17	12.67	256.12	279.21	2.84	142.00	162.20	100.71	115.04	670.50	264.50	299.92	63(3)
1.90	158.33	196.67	14.73	297.88	337.88	3.46	172.75	188.25	122.52	133.51	899.00	354.64	330.89	64(元治 1)
2.65	220.83	227.92	23.26	470.37	391.30	5.07	253.25	214.45	179.61	152.09	960.00	378.70	377.67	65(慶応 1)
3.55	295.83	258.75	23.13	467.64	432.21	5.03	251.25	234.05	178.19	165.99	1040.50	410.45	433.77	1866(2)
3.73	310.42	292.42	22.97	464.51	474.26	5.06	253.00	248.70	179.43	176.38	1217.00	480.08	509.79	67(3)
3.70	308.33	319.08	22.78	460.67	478.30	4.80	240.00	244.35	170.21	173.30	1381.50	544.97	573.57	68(明治 1)
3.92	326.67	334.08	25.13	508.09	478.97	4.92	246.00	237.00	174.47	168.09	1862.52	734.72	611.46	69(2)
4.25	354.17		24.26	490.60		4.63	231.50		164.18		1768.44	697.61		70(3)
4.45	370.83		23.29	470.98		4.29	214.50		152.13		1520.74	599.90		1871(4)

付表 2-3 (その1) 江戸における個別商品価格(つづき)と消費者物価指数の動向

年次	水油 同京都基準		虫鼠 火燭			同 京都基準		消費者物価指数(A)		消費者物価指数(B)	
	指数 (1818 年京都 =100)	同5 カ年 移動 平均	春秋平 均(100 匁二付 銀匁)	指数 (18 18年= 100)	同5 カ年 移動 平均	指数 (1818 年京都 =100)	同5 カ年 移動 平均	各年値 (18 18年= 100)	同5 カ年 移動 平均	各年値 (1818 年京都 =100)	同5 カ年 移動 平均
1713(正徳 3)	268.38		3.15	219.51		220.28		210.77		190.24	
14(4)											
15(5)											
16(享保 1)	216.83		4.42	308.01		309.09		262.50		239.90	
1818(文政 1)	106.13		1.44	100.00		100.35		100.00		94.13	
19(2)	103.47		1.42	98.95		99.30		93.86		88.24	
20(3)	111.85	110.15	1.41	98.26	99.09	98.60	99.44	94.94	99.33	89.33	93.59
1821(4)	114.08	110.32	1.42	98.95	99.72	99.30	100.07	102.32	100.52	96.71	94.66
22(5)	115.22	111.74	1.43	99.30	99.51	99.65	99.86	105.53	102.71	99.54	96.77
23(6)	106.97	112.05	1.48	103.14	99.51	103.50	99.86	105.96	105.32	99.50	99.22
24(7)	110.61	114.89	1.41	97.91	99.65	98.25	100.00	104.79	108.73	98.76	102.43
25(8)	113.35	119.90	1.41	98.26	99.65	98.60	100.00	107.97	108.26	101.62	102.05
1826(9)	128.33	127.02	1.43	99.65	99.65	100.00	100.00	119.42	108.98	112.73	102.88
27(10)	140.25	132.75	1.43	99.30	100.56	99.65	100.91	103.14	112.96	97.64	106.68
28(11)	142.55	136.79	1.48	103.14	101.46	103.50	101.82	109.60	115.53	103.66	109.15
29(12)	139.28	138.34	1.47	102.44	102.37	102.80	102.73	124.67	116.02	117.76	109.63
30(天保 1)	133.55	139.13	1.48	102.79	103.48	103.15	103.85	120.83	117.88	113.98	111.42
1831(2)	136.07	139.97	1.50	104.18	104.67	104.55	105.04	121.87	123.31	115.13	116.44
32(3)	144.19	142.96	1.51	104.88	107.39	105.25	107.76	112.43	130.68	106.55	123.66
33(4)	146.75	149.57	1.57	109.06	110.52	109.44	110.91	136.73	135.64	128.76	128.53
34(5)	154.24	158.39	1.67	116.03	113.73	116.43	114.13	161.56	148.44	153.86	140.66
35(6)	166.61	170.56	1.70	118.47	117.42	118.88	117.83	145.64	175.59	138.35	166.54
1836(7)	180.16	182.17	1.73	120.21	124.53	120.63	124.97	185.85	187.90	175.75	178.64
37(8)	205.03	190.41	1.77	123.35	140.28	123.78	140.77	248.19	190.70	235.98	181.87
38(9)	204.81	198.25	2.08	144.60	158.96	145.11	159.51	198.25	190.82	189.28	182.53
39(10)	195.45	200.81	2.80	194.77	174.84	195.46	175.46	175.55	183.30	170.01	175.73
40(11)	205.80	194.35	3.04	211.85	184.46	212.59	185.11	146.26	161.60	141.61	155.49
1841(12)	192.98	184.60	2.87	199.65	187.95	200.35	188.60	148.24	148.51	141.76	142.90
42(13)	172.72	174.74	2.46	171.43	181.05	172.03	181.68	139.71	142.40	134.80	136.41
43(14)	156.05	165.31	2.33	162.02	170.31	162.59	170.91	132.78	145.16	126.32	138.57
44(弘化 1)	146.15	165.72	2.30	160.28	160.14	160.84	160.70	145.02	148.68	137.55	141.93
45(2)	158.67	174.82	2.27	158.19	157.35	158.74	157.90	160.07	151.33	152.41	144.31

付表 2-3 (その2) 江戸における個別商品価格(つづき)と消費者物価指数の動向

年次	水油 同京都基準		虫虱火燭			同 京都基準		消費者物価指数(A)		消費者物価指数(B)	
	指数 (1818 年京都 =100)	同5 カ年 移動 平均	春秋平 均(100 匁二付 銀匁)	指数 (18 18年= 100)	同5 カ年 移動 平均	指数 (1818 年京都 =100)	同5 カ年 移動 平均	各年値 (18 18年= 100)	同5 カ年 移動 平均	各年値 (1818 年京都 =100)	同5 カ年 移動 平均
1846(弘化 3)	194.99	189.91	2.14	148.78	158.05	149.30	158.60	165.80	153.44	158.58	146.66
47(4)	218.22	199.41	2.26	157.49	158.68	158.04	159.23	152.97	155.03	146.69	148.31
48(嘉永 1)	231.52	201.37	2.38	165.51	161.81	166.08	162.38	143.35	159.40	138.08	152.25
49(2)	193.63	199.13	2.35	163.42	168.92	163.99	169.51	152.98	162.07	145.79	154.66
50(3)	168.51	195.01	2.50	173.87	173.94	174.48	174.55	181.90	163.04	172.13	155.61
1851(4)	183.79	188.60	2.65	184.32	177.00	184.97	177.62	179.15	168.96	170.62	161.00
52(5)	197.61	189.02	2.62	182.58	180.63	183.22	181.26	157.84	172.33	151.43	164.33
53(6)	199.49	194.38	2.60	180.84	182.02	181.47	182.66	172.96	168.60	165.05	161.19
54(安政 1)	195.72	197.29	2.61	181.53	180.84	182.17	181.47	169.78	164.99	162.43	157.98
55(2)	195.30	197.33	2.60	180.84	180.00	181.47	180.63	163.28	167.12	156.43	159.67
1856(3)	198.34	197.96	2.56	178.40	179.09	179.02	179.72	161.10	169.48	154.54	161.52
57(4)	197.82	197.29	2.56	178.40	179.23	179.02	179.86	168.50	173.79	159.89	165.22
58(5)	202.63	200.92	2.53	176.31	185.58	176.92	186.22	184.75	184.03	174.29	174.79
59(6)	192.37	215.51	2.62	182.23	200.07	182.87	200.77	191.32	203.45	180.94	193.42
60(万延 1)	213.43	228.19	3.05	212.54	206.90	213.29	207.62	214.50	214.09	204.27	203.97
1861(文久 1)	271.29	243.81	3.60	250.87	214.08	251.75	214.83	258.21	222.90	247.72	211.70
62(2)	261.24	280.61	3.05	212.54	222.58	213.29	223.36	221.69	234.99	212.66	222.93
63(3)	280.71	318.30	3.05	212.20	224.39	212.94	225.18	228.79	273.49	212.94	256.70
64(元治 1)	376.37	351.17	3.23	224.74	226.83	225.52	227.62	251.78	343.71	237.09	320.72
65(慶応 1)	401.91	400.82	3.18	221.60	263.07	222.38	263.99	406.95	434.82	373.10	408.04
1866(2)	435.61	460.35	3.78	263.07	306.90	263.99	307.97	609.34	514.11	567.80	488.79
67(3)	509.50	541.03	5.65	393.73	352.82	395.11	354.06	677.22	614.61	649.28	585.92
68(明治 1)	578.37	608.72	6.19	431.36	397.77	432.87	399.16	625.24	688.48	616.66	660.28
69(2)	779.75	648.93	6.52	454.36	435.19	455.94	436.71	754.31	700.10	722.74	677.89
70(3)	740.37		6.41	446.34		447.90		776.28		744.90	
1871(4)	636.67		6.46	450.17		451.75		667.44		655.87	

(出所) 三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』〔増補改訂〕(東京大学出版会、1989年)。

付表 2-4 (その1) 物価と賃金の動向-京都対江戸-

年次	京 都				江 戸						京都/江戸					
	消費者物価指数(B) (1818年=100)	同5ヵ年移動平均	日雇実質賃金指数(B)(1818年=100)		日雇賃金1人二付銀匁	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実質賃金指数(A)(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年京都=100)	実質賃金指数(B)(1818年京都=100)	5ヵ年移動平均	消費者物価指数(B)		日雇実質賃金指数(B)	
			5ヵ年移動平均	5ヵ年移動平均									5ヵ年移動平均	5ヵ年移動平均		
1713(正徳 3)	206.60		65.08		2.10		233.33	110.70		237.29	124.73		1.09		0.52	
14(4)																
15(5)																
1716(享保 1)					2.40		266.67	101.59		271.19	113.04					
17(2)																
18(3)																
19(4)																
20(5)																
1721(6)																
22(7)																
23(8)																
24(9)																
25(10)																
1726(11)																
27(12)																
28(13)																
29(14)																
30(15)																
1731(16)																
32(17)																
33(18)																
34(19)																
35(20)																
1736(元文 1)																
37(2)																
38(3)																
39(4)																
40(5)																
1741(寛保 1)	133.70		69.72													
42(2)	128.19		79.77													
43(3)	125.90	126.82	74.49	76.17												
44(延享 1)	124.18	126.14	79.62	77.06												
45(2)	122.12	125.45	77.26	75.50												
1746(3)	130.28	125.42	74.15	77.32												
47(4)	124.78	124.19	71.99	78.63												
48(寛延 1)	125.73	123.64	83.58	84.95												
49(2)	118.03	121.17	86.16	91.67												
50(3)	119.37	117.78	108.86	94.57												
1751(宝暦 1)	117.95	111.84	107.78	96.80												
52(2)	107.83	107.04	86.45	99.87												
53(3)	96.00	105.80	94.75	94.08												

付表 2-4 (その2) 物価と賃金の動向-京都対江戸-

年次	京 都				江 戸							京都/江戸				
	消費者物価指数(B) (1818年=100)	同5ヵ年移動平均	日雇実賃金指数(B)(1818年=100)	実賃金指数(5ヵ年移動平均)	日雇賃金1人1日平均	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実賃金指数(A)(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年京都=100)	実賃金指数(B)(1818年京都=100)	5ヵ年移動平均	消費者物価指数(B)	5ヵ年移動平均	日雇実賃金指数(B)	5ヵ年移動平均
1754(宝暦 4)	94.04	107.72	101.53	86.70												
55(5)	113.17	110.03	79.88	84.93												
1756(6)	127.55	113.58	70.87	82.07												
57(7)	119.39	116.82	77.61	78.47												
58(8)	113.77	114.70	80.45	80.12												
59(9)	110.23	108.58	83.54	84.60												
60(10)	102.58	103.50	88.12	88.31												
1761(11)	96.91		93.28													
62(12)	94.01		96.16													
63(13)																
64(明和 1)																
65(2)																
1766(3)																
67(4)																
68(5)																
69(6)																
70(7)																
1771(8)																
72(安永 1)																
73(2)																
74(3)																
75(4)																
1776(5)																
77(6)																
78(7)																
79(8)																
80(9)																
1781(天明 1)																
82(2)																
83(3)																
84(4)																
85(5)																
1786(6)																
87(7)																
88(8)																
89(寛政 1)																
90(2)																
1791(3)	104.81		88.40													
92(4)	123.27		84.33													
93(5)	123.85	115.15	82.11	85.49												
94(6)	109.24	118.47	85.33	82.89												

付表 2-4 (その3) 物価と賃金の動向-京都対江戸-

年次	京 都				江 戸							京都/江戸				
	消費者物価指数(B) (1818年=100)	同5ヵ年移動平均	日雇実賃金指数(B)(1818年=100)		日雇賃金1人2付銀匁	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実賃金指数(A)(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年京都=100)	実賃金指数(B)(1818年京都=100)	5ヵ年移動平均	消費者物価指数(B)		日雇実賃金指数(B)	
			5ヵ年移動平均	5ヵ年移動平均									5ヵ年移動平均	5ヵ年移動平均	5ヵ年移動平均	5ヵ年移動平均
1795(寛政 7)	114.59	117.53	87.26	81.65												
1796(8)	121.37	116.52	75.41	81.30												
97(9)	118.61	117.31	78.12	80.70												
98(10)	118.78	118.76	80.38	79.58												
99(11)	113.20	118.08	82.35	80.30												
1800(12)	121.82	116.72	81.63	81.05												
1801(享和 1)	117.98	114.60	79.01	81.68												
02(2)	111.79	111.00	81.87	90.97												
03(3)	108.23	105.96	83.52	92.42												
04(文化 1)	95.17	102.18	128.82	90.76												
05(2)	96.61	100.99	88.89	87.41												
1806(3)	99.10	102.42	70.69	84.12												
07(4)	105.83	105.98	65.13	76.06												
08(5)	115.39	106.91	67.08	77.93												
09(6)	112.98	108.08	88.51	82.85												
10(7)	101.23	107.03	98.23	89.70												
1811(8)	104.95	104.43	95.29	96.92												
12(9)	100.59	104.43	99.41	99.92												
13(10)	102.41	106.45	103.16	101.70												
14(11)	112.96	106.50	103.53	102.08												
15(12)	111.33	108.40	107.08	100.05												
1816(13)	105.22	107.92	97.19	99.42												
17(14)	110.08	103.89	89.31	100.13												
18(文政 1)	100.00	99.56	100.00	101.15	0.90		100.00	100.00		101.70	108.04		1.06		0.93	
19(2)	92.85	97.18	107.09	103.87	0.90		100.00	106.55		101.70	115.25		1.05		0.93	
20(3)	89.68	94.84	112.14	107.95	0.90	0.90	100.00	105.33	100.87	101.70	113.84	108.89	1.00	1.01	0.98	0.99
1821(4)	93.32	94.85	110.80	118.22	0.90	0.90	100.00	97.73	99.75	101.70	105.16	107.72	0.96	1.00	1.05	1.10
22(5)	98.37	97.21	109.70	119.80	0.90	0.90	100.00	94.76	97.63	101.70	102.17	105.38	0.99	1.00	1.07	1.14
23(6)	100.02	101.42	151.39	117.98	0.90	0.90	100.00	94.38	95.09	101.70	102.21	102.63	1.01	1.02	1.48	1.15
24(7)	104.67	106.28	114.97	116.96	0.91	0.90	100.56	95.96	92.29	102.26	103.55	99.64	1.06	1.04	1.11	1.17
25(8)	110.73	107.08	103.06	118.98	0.90	0.90	100.00	92.62	92.84	101.70	100.07	100.15	1.09	1.05	1.03	1.19
1826(9)	117.63	109.55	105.67	114.33	0.90	0.90	100.00	83.74	92.21	101.70	90.21	99.33	1.04	1.07	1.17	1.15
27(10)	102.34	114.33	119.79	108.39	0.91	0.90	100.56	97.49	89.06	102.26	104.73	95.90	1.05	1.07	1.14	1.13
28(11)	112.39	115.52	128.18	105.40	0.90	0.90	100.00	91.24	87.18	101.70	98.11	93.82	1.08	1.06	1.31	1.12
29(12)	128.57	116.77	85.25	100.69	0.90	0.90	100.00	80.21	86.84	101.70	86.36	93.45	1.09	1.06	0.99	1.07
30(天保 1)	116.69	119.16	88.12	95.81	0.91	0.90	100.56	83.22	85.13	102.26	89.72	91.59	1.02	1.07	0.98	1.04
1831(2)	123.88	123.31	82.09	85.88	0.90	0.90	100.00	82.05	81.59	101.70	88.33	87.85	1.08	1.06	0.93	0.98
32(3)	114.29	126.71	95.40	83.96	0.90	0.90	100.00	88.95	77.93	101.70	95.44	83.80	1.07	1.03	1.00	1.01
33(4)	133.10	127.56	78.53	83.90	0.91	0.90	100.56	73.55	75.02	102.26	79.42	80.56	1.03	1.00	0.99	1.05
34(5)	145.61	132.77	75.66	82.56	0.90	0.90	100.00	61.90	69.55	101.70	66.10	74.66	0.95	0.96	1.14	1.12
35(6)	120.94	149.22	87.82	74.63	0.90	0.91	100.00	68.66	59.91	101.70	73.51	64.28	0.87	0.91	1.19	1.18

付表 2-4 (その4) 物価と賃金の動向—京都対江戸—

年次	京 都					江 戸							京都/江戸			
	消費者物価指数(B) (1818年=100)	同5ヵ年移動平均	日雇実賃指数(B)(1818年=100)	日雇賃金		貨幣賃金指数(1818年=100)	実賃賃金指数(A)(1818年=100)	同5ヵ年移動平均	貨幣賃金指数(1818年=100)	実賃賃金指数(B)(1818年=100)	5ヵ年移動平均	消費者物価指数(B)	同5ヵ年移動平均	日雇実賃指数(B)	5ヵ年移動平均	
				1人	2人											
1836(天保 7)	149.89	154.01	75.38	72.60	0.92	0.91	101.67	54.70	55.35	103.39	58.83	59.21	0.85	0.87	1.28	1.23
37(8)	196.55	154.79	55.76	71.90	0.91	0.91	101.11	40.74	54.61	102.83	43.57	58.22	0.83	0.85	1.28	1.24
38(9)	157.05	154.94	68.35	72.72	0.91	0.91	100.56	50.72	54.71	102.26	54.03	58.04	0.83	0.85	1.27	1.25
39(10)	149.51	148.74	72.18	78.74	0.92	0.91	102.22	58.23	57.33	103.96	61.15	60.70	0.88	0.85	1.18	1.29
40(11)	121.68	133.31	91.93	88.03	0.91	0.91	101.11	69.13	63.42	102.83	72.61	66.99	0.86	0.86	1.27	1.31
1841(12)	118.90	124.88	105.49	92.06	0.91	0.91	100.56	67.83	68.50	102.26	72.14	72.46	0.84	0.87	1.46	1.27
42(13)	119.43	118.41	102.18	99.91	0.90	0.91	99.44	71.18	70.80	101.13	75.02	75.19	0.89	0.87	1.36	1.33
43(14)	114.89	118.75	88.52	102.76	0.91	0.91	101.11	76.15	69.82	102.83	81.40	74.38	0.91	0.86	1.09	1.39
44(弘化 1)	117.13	121.36	111.42	99.82	0.91	0.91	101.11	69.72	68.52	102.83	74.76	72.99	0.85	0.86	1.49	1.38
45(2)	123.42	123.99	106.20	96.69	0.93	0.92	102.78	64.21	67.57	104.52	68.58	72.08	0.81	0.86	1.55	1.35
1846(3)	131.91	128.06	90.80	94.11	0.92	0.92	101.67	61.32	66.76	103.39	65.20	71.02	0.83	0.88	1.39	1.33
47(4)	132.58	131.94	86.50	87.71	0.92	0.92	101.67	66.46	66.11	103.39	70.48	70.26	0.90	0.89	1.23	1.26
48(嘉永 1)	135.23	139.29	75.62	80.09	0.93	0.92	103.33	72.09	64.38	105.09	76.10	68.49	0.98	0.92	0.99	1.17
49(2)	136.57	145.81	79.43	76.83	0.92	0.92	101.67	66.46	63.41	103.39	70.92	67.50	0.94	0.94	1.12	1.14
50(3)	160.16	145.76	68.08	76.01	0.91	0.91	101.11	55.59	62.57	102.83	59.74	66.61	0.93	0.94	1.14	1.15
1851(4)	164.49	147.04	74.53	75.80	0.91	0.91	101.11	56.44	59.98	102.83	60.27	63.99	0.96	0.91	1.24	1.19
52(5)	132.37	148.74	82.37	75.65	0.89	0.91	98.33	62.30	58.73	100.00	66.04	62.60	0.87	0.90	1.25	1.21
53(6)	141.62	142.28	74.60	81.83	0.92	0.91	102.22	59.10	60.13	103.96	62.98	63.95	0.86	0.88	1.18	1.28
54(安政 1)	145.05	134.90	78.68	85.97	0.92	0.91	102.22	60.21	61.60	103.96	64.00	65.42	0.89	0.85	1.23	1.31
55(2)	127.85	136.64	98.98	86.63	0.92	0.92	102.22	62.60	61.47	103.96	66.45	65.43	0.82	0.86	1.49	1.32
1856(3)	127.58	142.28	95.21	86.15	0.93	0.93	102.78	63.80	60.78	104.52	67.63	64.83	0.83	0.88	1.41	1.33
57(4)	141.08	148.21	85.70	84.77	0.94	0.93	103.89	61.66	59.48	105.65	66.08	63.58	0.88	0.89	1.30	1.33
58(5)	169.83	159.93	72.19	79.89	0.93	0.93	102.78	55.63	56.80	104.52	59.97	60.80	0.97	0.91	1.20	1.31
59(6)	174.70	189.13	71.79	72.00	0.93	0.94	102.78	53.72	52.48	104.52	57.77	56.21	0.97	0.97	1.24	1.28
60(万延 1)	186.44	204.40	74.55	67.22	0.95	0.95	105.56	49.21	50.07	107.35	52.55	53.52	0.91	1.00	1.42	1.26
1861(文久 1)	273.61	221.15	55.75	63.35	0.98	0.96	108.89	42.17	48.32	110.73	44.70	51.77	1.10	1.04	1.25	1.22
62(2)	217.42	251.10	61.84	59.96	0.99	1.02	110.00	49.62	48.25	111.86	52.60	51.75	1.02	1.12	1.18	1.16
63(3)	253.57	319.57	52.81	50.86	0.97	1.10	107.22	46.86	45.78	109.04	51.21	49.41	1.19	1.22	1.03	1.02
64(元治 1)	324.45	480.42	54.85	42.48	1.21	1.17	134.44	53.40	42.27	136.72	57.67	45.85	1.37	1.38	0.95	0.88
65(慶応 1)	528.82	660.19	29.06	32.88	1.35	1.25	150.00	36.86	36.79	152.54	40.88	40.04	1.42	1.52	0.71	0.76
1866(2)	1077.83	744.00	13.84	27.25	1.35	1.42	150.00	24.62	34.00	152.54	26.87	36.58	1.90	1.50	0.52	0.70
67(3)	1116.28	846.16	13.87	21.39	1.36	1.46	150.56	22.23	27.38	153.11	23.58	29.36	1.72	1.46	0.59	0.75
68(明治 1)	672.62	901.41	24.61	19.97	1.85	1.57	205.56	32.88	25.52	209.04	33.90	27.02	1.09	1.39	0.73	0.75
69(2)	835.23	797.67	25.57	24.56	1.38	1.81	153.33	20.33	29.05	155.93	21.58	30.40	1.16	1.18	1.19	0.82
70(3)	805.06		21.97		1.93		213.89	27.55		217.51	29.20		1.08		0.75	
1871(4)	559.17		36.78		2.54		282.22	42.28		287.01	43.76		0.85		0.84	

(出所) 三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』[増補改訂] (東京大学出版会、1989年)。

付表 2-5 (その1) 物価と賃金の動向-京都対江戸-(つづき)

年次	名目米価		京都/江戸				5ヵ年移動変動係数				5ヵ年移動相関係数									
	京都 (5ヵ年移動平均)	江戸 (5ヵ年移動平均)	名目米価	同5ヵ年移動平均	日雇貨幣賃金	同5ヵ年移動平均	京都消費者物価指数B	江戸消費者物価指数B	京都日雇貨幣賃金	江戸日雇貨幣賃金	消費者物価指数(B)				日雇貨幣賃金					
											単純相関係数	京都残差	江戸残差	残差相関係数	単純相関係数	京都残差	江戸残差	残差相関係数		
1818(文政 1)			1.10		0.98															
19(2)			1.08		0.98															
20(3)	64.48	63.57	0.97	1.02	0.99	1.01	4.5	5.1	3.4	0.0	0.63	-5.16	-4.26		0.00	-0.02	0.00			
1821(4)	64.41	65.21	0.94	0.99	1.02	1.11	4.5	5.8	19.5	0.0	0.85	-1.53	2.05		0.00	-0.08	0.00			
22(5)	67.02	68.08	0.99	0.98	1.06	1.15	6.0	4.5	17.8	0.2	0.81	1.16	2.77	0.78	0.10	-0.08	-0.00	-0.28		
23(6)	71.45	71.51	0.97	1.00	1.49	1.17	6.5	1.8	15.9	0.2	0.85	-1.40	0.28	0.17	0.03	0.28	-0.00	-0.07		
24(7)	76.42	75.45	1.05	1.01	1.18	1.21	7.5	5.7	13.5	0.2	0.86	-1.61	-3.67	0.85	-0.11	-0.03	0.00	-0.04		
25(8)	76.85	74.54	1.04	1.03	1.12	1.24	6.6	6.0	11.4	0.3	0.90	3.66	-0.43	0.92	-0.32	-0.11	-0.00	-0.14		
1826(9)	79.00	74.93	1.01	1.06	1.22	1.23	5.6	5.8	9.0	0.3	0.94	8.07	9.85	0.92	-0.29	-0.01	-0.00	-0.21		
27(10)	84.73	79.14	1.09	1.07	1.20	1.21	8.5	7.8	10.8	0.2	0.97	-11.99	-9.04	0.94	-0.01	-0.00	0.00	-0.04		
28(11)	86.91	81.64	1.09	1.07	1.42	1.18	8.2	7.6	13.1	0.3	0.94	-3.13	-5.50	0.93	-0.46	0.21	-0.00	-0.45		
29(12)	88.71	81.83	1.12	1.08	1.08	1.14	8.7	7.8	15.2	0.3	0.95	11.79	8.13	0.91	-0.18	-0.06	-0.00	-0.40		
30(天保 1)	90.66	83.71	1.02	1.08	1.01	1.11	5.7	5.4	15.4	0.2	0.90	-2.47	2.56	0.92	-0.34	-0.09	0.00	-0.49		
1831(2)	95.29	89.73	1.10	1.06	1.00	1.04	6.4	6.9	3.4	0.3	0.91	0.57	-1.31	0.90	-0.47	-0.03	-0.00	-0.41		
32(3)	98.68	97.39	1.08	1.02	1.07	1.04	10.1	15.1	3.6	0.3	0.98	-12.42	-17.11	0.92	-0.48	0.03	-0.00	-0.67		
33(4)	98.51	101.73	1.00	0.98	1.02	1.04	9.5	14.6	3.2	0.2	0.81	5.54	0.23	0.99	-0.30	-0.02	0.00	-0.09		
34(5)	103.20	115.41	0.92	0.92	1.08	1.06	11.5	18.5	3.1	0.7	0.89	12.84	13.20	0.98	0.53	0.01	-0.00	0.38		
35(6)	122.43	142.21	0.81	0.87	1.04	1.06	19.3	25.6	3.1	0.7	0.97	-28.28	-28.19	0.99	0.60	-0.02	-0.01	0.55		
1836(7)	125.79	150.19	0.77	0.84	1.09	1.07	17.8	21.0	2.4	0.7	0.98	-4.12	-2.89	1.00	0.72	0.03	0.01	0.87		
37(8)	124.01	148.13	0.85	0.84	1.07	1.06	17.5	19.5	2.4	0.9	1.00	41.77	54.10	0.99	0.54	0.01	0.00	0.26		
38(9)	122.76	144.10	0.84	0.86	1.05	1.07	17.4	18.9	2.2	0.6	0.99	2.11	6.75	0.99	0.14	-0.02	-0.01	0.15		
39(10)	114.59	130.72	0.93	0.88	1.04	1.09	21.2	22.3	6.6	0.7	0.99	0.77	-5.71	0.98	-0.46	-0.04	0.01	-0.43		
40(11)	96.11	105.68	0.92	0.92	1.09	1.12	13.8	15.0	7.2	1.0	0.98	-11.63	-13.88	0.75	-0.63	-0.03	0.00	-0.47		
1841(12)	88.26	93.57	0.89	0.95	1.23	1.11	11.2	11.5	8.7	1.0	0.97	-5.98	-1.14	0.59	-0.67	0.10	-0.00	-0.41		
42(13)	82.62	88.86	1.02	0.93	1.21	1.16	2.2	4.7	9.7	0.7	0.80	1.02	-1.61	0.62	-0.30	0.03	-0.01	-0.40		
43(14)	84.56	93.64	0.98	0.91	0.99	1.19	2.7	6.9	9.8	1.2	0.92	-3.86	-12.24	0.43	0.23	-0.18	0.00	0.05		
44(弘化 1)	88.91	99.35	0.86	0.90	1.27	1.18	5.5	9.3	9.8	1.2	0.93	-4.22	-4.38	0.81	0.25	0.08	-0.00	0.12		
45(2)	90.93	102.70	0.81	0.89	1.25	1.16	6.6	8.8	10.2	0.7	0.82	-0.57	8.10	0.83	0.50	0.10	0.01	0.29		
1846(3)	94.53	103.20	0.86	0.93	1.16	1.15	5.9	6.2	10.0	0.9	0.21	3.86	11.92	0.83	-0.51	0.00	-0.00	-0.13		
47(4)	98.60	103.62	0.95	0.96	1.11	1.11	3.9	5.2	9.6	0.8	-0.52	0.64	-1.62	0.78	-0.12	-0.01	-0.01	0.04		

付表 2-5 (その2) 物価と賃金の動向-京都対江戸-(つづき)

年次	名目米価		京都/江戸				5カ年移動変動係数				5カ年移動相関係数							
	京都 (5カ年移動平均)	江戸 (5カ年移動平均)	名目米価	同5カ年移動平均	日雇貨幣賃金	同5カ年移動平均	京都消費者物価指数B	江戸消費者物価指数B	京都日雇貨幣賃金	江戸日雇貨幣賃金	消費者物価指数(B)				日雇貨幣賃金			
											単純相関係数	京都残差	江戸残差	残差相関係数	単純相関係数	京都残差	江戸残差	残差相関係数
1848(嘉永 1)	106.83	107.27	1.16	1.00	0.97	1.07	8.5	8.7	6.0	0.8	0.76	-4.06	-14.17	0.89	-0.59	-0.08	0.01	-0.97
49(2)	113.29	108.75	1.05	1.05	1.05	1.08	10.4	10.1	6.9	0.9	0.96	-9.23	-8.88	0.91	-0.72	-0.03	-0.00	-0.40
50(3)	113.37	108.30	1.01	1.05	1.06	1.07	10.5	9.7	6.8	1.8	0.92	14.39	16.52	0.91	-0.29	-0.01	0.00	-0.05
1851(4)	114.83	114.55	1.06	1.00	1.19	1.08	9.8	7.3	6.0	1.5	0.87	17.45	9.61	0.95	-0.05	0.10	0.00	-0.01
52(5)	116.34	117.55	0.97	0.99	1.09	1.09	9.0	5.0	5.9	1.6	0.91	-16.37	-12.90	0.92	0.09	-0.03	-0.02	-0.01
53(6)	107.82	112.45	0.91	0.96	1.02	1.12	10.0	4.6	7.7	1.7	0.88	-0.65	3.86	0.94	0.30	-0.09	0.01	-0.05
54(安政 1)	99.15	107.65	0.97	0.92	1.10	1.12	6.0	3.6	7.5	1.8	0.80	10.15	4.45	0.91	0.45	-0.01	0.01	-0.21
55(2)	101.30	109.60	0.86	0.92	1.22	1.13	6.1	2.7	6.9	0.7	0.89	-8.78	-3.24	0.90	0.31	0.08	-0.00	-0.88
1856(3)	107.91	111.98	0.89	0.96	1.16	1.16	12.1	4.8	3.7	0.7	0.99	-14.70	-6.97	0.90	0.05	0.00	0.00	-0.34
57(4)	113.71	116.88	0.98	0.96	1.14	1.18	15.3	7.1	2.0	0.6	0.99	-7.13	-5.33	0.80	-0.75	-0.02	0.01	0.31
58(5)	124.85	127.28	1.08	0.98	1.17	1.19	15.4	11.2	6.0	1.2	0.93	9.91	-0.49	0.38	0.84	-0.03	-0.01	0.45
59(6)	151.04	145.88	1.01	1.03	1.20	1.24	26.5	17.7	10.2	2.4	0.98	-14.43	-12.48	0.93	0.95	-0.06	-0.02	0.78
60(万延 1)	161.36	153.08	0.93	1.05	1.29	1.25	21.0	14.3	8.8	3.2	0.97	-17.96	0.29	0.92	0.73	0.04	-0.00	0.98
1861(文久 1)	168.84	155.07	1.14	1.09	1.38	1.26	19.2	11.3	7.3	2.7	0.89	52.46	36.01	0.97	0.59	0.14	0.02	0.78
62(2)	185.89	158.07	1.10	1.18	1.20	1.28	21.1	8.3	12.6	10.6	0.80	-33.68	-10.28	0.99	0.91	-0.12	-0.03	0.85
63(3)	236.86	183.07	1.27	1.28	1.23	1.22	38.6	26.0	12.0	15.7	0.97	-66.01	-43.76	0.93	0.61	-0.15	-0.13	0.58
64(元治 1)	379.34	243.07	1.47	1.43	1.30	1.14	73.9	47.8	12.0	16.0	0.99	-155.97	-83.63	0.96	0.57	0.25	0.04	0.62
65(慶応 1)	525.90	318.37	1.42	1.55	1.01	1.11	62.4	47.8	10.3	13.5	0.99	-131.37	-34.94	0.98	0.41	-0.00	0.10	0.68
1866(2)	582.08	377.11	1.89	1.51	0.98	1.02	46.4	36.2	7.2	17.3	0.85	333.83	79.01	0.95	0.01	-0.10	-0.07	0.14
67(3)	667.58	459.05	1.71	1.45	1.01	1.03	30.0	22.5	15.9	15.1	0.55	270.12	63.36	0.96	0.02	-0.11	-0.10	-0.69
68(明治 1)	715.47	514.17	1.06	1.39	0.79	0.99	21.0	11.1	14.9	18.4	-0.38	-228.78	-43.62		0.02	-0.06	0.28	
69(2)	603.56	508.58	1.16	1.18	1.37	0.94	26.3	7.9	13.9	26.8	0.13	37.56	44.85		0.30	0.27	-0.43	
70(3)			1.15		0.81													
1871(4)			0.80		0.72													

(出所) 三井文庫編「近世後期における主要物価の動態」〔増補改訂〕(東京大学出版会、1989年)。

第3章 生産物価格の変動と 反収および肥料価格の時系列

はじめに

本章は、のちの付論で行なった基礎作業の結果、ひとまず利用可能となった史料、播州加古郡野添村文書「御月見日記」（兵庫県加古郡播磨町役場所蔵）にもとづいて、二三の角度から、詳細な分析を試みたものである。

I節は、生産物価格（本章では米、大麦、綿）と要素価格（本章では干鰯）の変動を分析している。はたして、生産物価格と肥料価格は平行に動いたであろうか。そうでなかったとすれば、それはどうしてであろうか。

これまで、資料的な制約もあって、近世における農業生産量の変動が論じられることは少なかった。そこで、II節では、この重要な問題を、当野添村における反当収量データをもちいて、すこしばかり考えることとした。はじめは、農業生産量の、趨勢的および循環的変動を観察し、事実の発見につとめた。この場合、米、大麦、綿それぞれの生産量の変動は、同じような傾向をもったであろうか。異なるとすれば、それはどうしてであろうか。ついで、この変動は、生産物価格の変動、あるい

は貨幣市場における要因と、どのようにかかわっていたであろうか。

Ⅲ節の課題は、相対価格、とりわけ要素価格の生産物価格に対する相対価格を検討することである。すなわち、干鰯／米、干鰯／大麦、干鰯／綿のような要素価格／生産物価格比はどのように動いたであろうか。ついで、要素価格変動が農業生産にあたえた真の影響を分析するために、農業費用（干鰯の価格）／農業収入（米価×反当収量）という比を計算したが、はたしてこの比は、どのような動きを示したであろうか。これらはいずれも、生産物市場と要素市場を統一的にとり扱おうとする試みである。Ⅲ節は、従来あまり行なわれてこなかったこのような作業をつうじて、近世中後期における経済の構造変動を、多少なりとも明らかにすることを目的としている。

Ⅰ 生産物価格と要素価格の変動

図3-1は、生産物価格（米、大麦、綿）と要素価格（干鰯）の変動をグラフ化（半対数目盛）したものである。下段に米（石につき銀匁）、中段に大麦（石につき銀匁）、上段に綿（銀匁）¹⁾、そして最上段には干鰯（升につき銀匁）のそれぞれ、価格が図示されている（なお、干鰯の価格は、史料においては銀1匁につき升で表示されているが、グラフ化に際しては、これを、他の物価との比較に便利なように、升につき銀匁の表示に換算している）。ドットで示されているのが、それぞれの価格の各年値である。連年にわたってデータを知ることができる場合には、各ドットを実線をつないだが、欠年がある場合にはそうしなかった。

図3-1には5ヵ年移動平均による傾向線が描き込まれている。ただし、欠年がある場合には、あるいは、欠年が続く場合には、その両端の

各年値をもちいて、まず、欠年の各年値を直線補間によって推定し、そののち、5ヵ年移動平均をとった。したがって、ここに描き込まれた傾向線は、もとより便宜的なものであって、以下では、あくまでも、各年値のドットにもとづいて分析を進めることにしたい。

図3-2は、生産物価格（米、大麦、綿）と要素価格（干鰯）の変動係数²⁾（「5ヵ年移動変動係数」）をグラフ化（普通目盛）したものである。下段に米価、中段に大麦の価格、上段に綿の価格、そして最上段には干鰯の価格のそれぞれ、変動係数が図示されている。もとの価格データに欠年があるので、変動係数の場合は、いっそう、欠年がふえているが、多少は、分析の役に立つと考えたい。なお、図3-2においても、連年にわたって変動係数を知ることができる場合には、各ドットを実線でつないだ。

はじめに、米価の動きについて、観察することにした。図3-1から明らかのように、米価の近世中後期をつらぬく長期的な趨勢は、一方的な上昇であった。とりわけ、文政期（1818～29年）以降の上昇圧力の大きさには、顕著なものがあつたといえよう。

つぎに、循環的変動についてはどうであろうか。米価は、享保期（1716～35年）には低い水準にあつた（もっとも、1733（享保18）年の高水準は、いわゆる享保の飢饉によるものである）。元文期（1736～40年）から安永期（1772～80年）までは、元文期（1736～40年）の高い水準から、しだいに、米価が低落していく過程であると思われる。この間、宝暦（1751～63年）初期の低い水準が著しい。天明期（1781～88年）から文政（1818～29年）初期にかけても、米価は、高い水準から、しだいに、低落している（天明期（1781～88年）における米価の急上昇は、むろん天明の飢饉によるものである）。ついで文政期（1818～29年）以降幕末

図3-1 米、大麦、綿、干鰯の価格変動

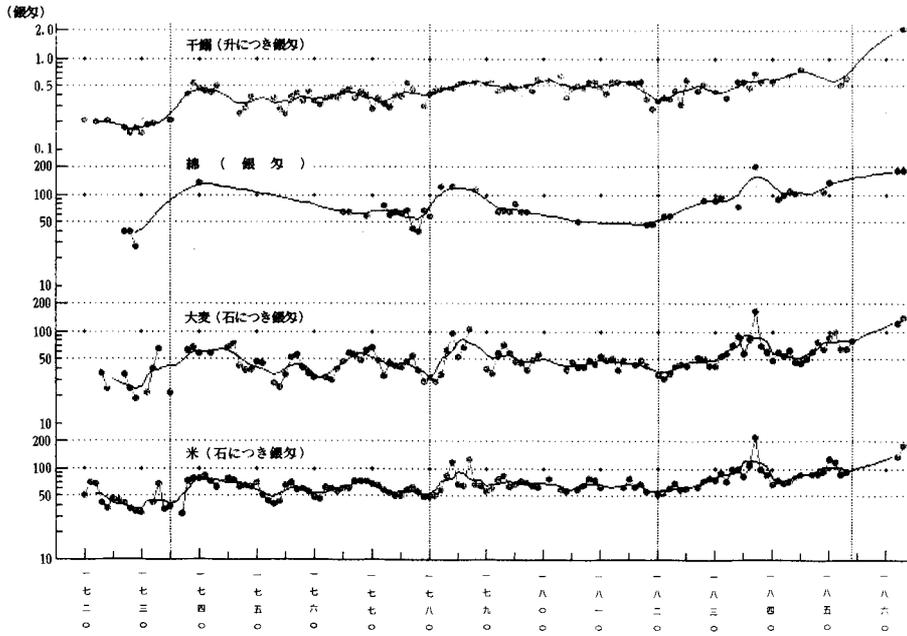
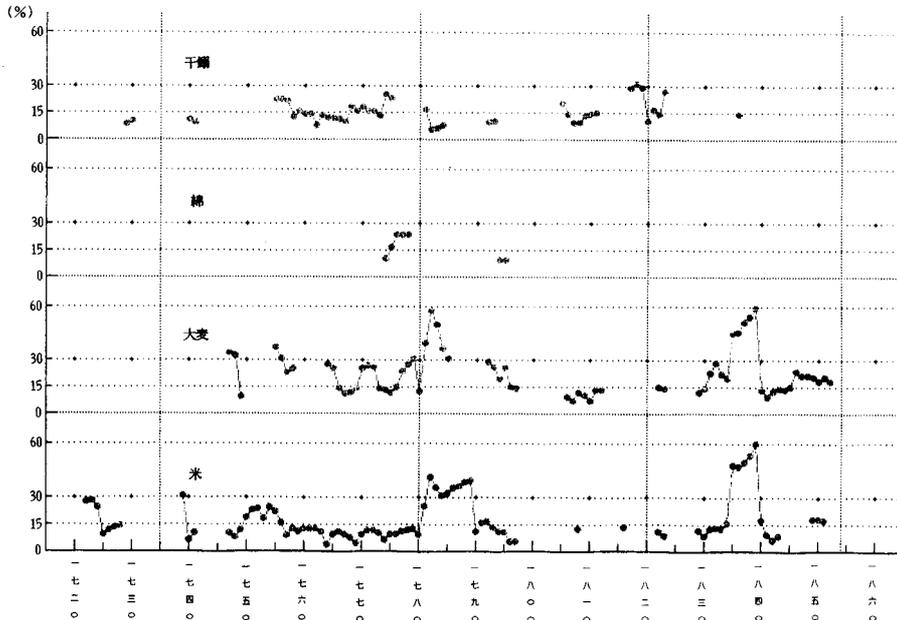


図3-2 米、大麦、綿、干鰯価格の「5カ年移動変動係数」



にかけては、米価は急速に上昇している（この間、天保（1830～43年）中期には天保の飢饉の影響が強く現れている）。

ここで、のちの分析に便利のように、移動平均による米価波動の谷に着目して、近世中後期について、一応の時期区分を行なうと、おおむね、つぎのとおりとなる。なお、*印のついている年は、その年の（峰や谷の）米価が、欠年の推定値を含む5ヵ年移動平均値である、ということを示している。

I期は、1735（享保20）年(*)の谷まで。

II期は、1735（享保20）年(*)の谷から、1780（安永9）年の谷まで。

さらに分割すれば、II-a期が、1735（享保20）年(*)の谷から、1740（元文5）年の峰をへて、1753（宝暦3）年の谷まで。II-b期が、1753（宝暦3）年の谷から、1769（明和6）年の峰をへて、1780（安永9）年の谷まで。

III期は、1780（安永9）年の谷から、1820（文政3）年(*)の谷まで。

さらに分割すれば、III-a期が、1780（安永9）年の谷から、1785（天明5）年の峰をへて、1805（文化2）年(*)の谷まで。III-b期が、1805（文化2）年(*)の谷から、1809（文化6）年(*)の峰をへて、1820（文政3）年(*)の谷まで。

IV期は、1820（文政3）年(*)の谷から、1854（安政元）年(*)の谷まで。

さらに分割すれば、IV-a期が、1820（文政3）年(*)の谷から、1836（天保7）年の峰をへて、1842（天保13）年の谷まで。

IV-b期が、1842（天保13）年の谷から、1852（嘉永5）年(*)の峰をへて、1854（安政元）年(*)の谷まで。

V期は、1854（安政元）年(*)の谷以降である。

うえに述べてきた、近世中後期における米価の動きと、それにもとづ

く時期区分は、こまかい点を別にすれば、これまでに指摘されてきたことと、ほとんど変わらないと言ってよいかと思う³⁾。

なお、これらの時期区分については、本章で掲げたすべてのグラフに区切りの線を入れておいた。

図3-2の米価変動係数に目を転じることとしよう。まず、I期(1735年まで)は、1720年代前半に、米価変動係数がやや大きい(20～30パーセント)。II期(1735～80年)は、元文期(1736～40年)と宝暦期(1751～63年)の前半に、変動係数がやや大きい(20～30パーセント)ほかは、おおむね安定的に推移している。III期(1780～1820年)は、天明期(1781～88年)に、変動が大きい(30～40パーセント)。IV期(1820～54年)は、天保(1830～43年)中期に、米価変動係数が、ひじょうに大きくなっている(50～60パーセント)。

つぎに、大麦の価格変動について、簡単に観察しておきたいと思う。大麦の価格の変動パターンは、享保期(1716～35年)以降幕末まで、米価のそれと、ほとんど同じであったと言ってさしつかえないと思われる。すなわち、図3-1から明らかなように、大麦の価格の場合も、近世中後期をつらぬく長期的な趨勢は、一方的な上昇であった。とりわけ、文政期(1818～29年)以降の上昇圧力の大きさには、顕著なものがあったといえよう。

循環的変動についてはどうであろうか。I期(1735年まで)は、比較的低い水準にあった。II期(1735～80年)は、初期の高い水準から、しだいに、大麦の価格が低落していく過程であると思われる。III期(1780～1820年)も、大麦の価格は、高い水準から、しだいに、低落している。ついでIV期(1820～54年)以降幕末にかけては、大麦の価格は急速に上昇している。

変動係数についてはどうであろうか。まず、Ⅱ期（1735～80年）は、宝暦期（1751～63年）の前半に、変動係数が大きい（30パーセント台）。Ⅲ期（1780～1820年）は、1780年代前半に、変動がひじょうに大きい（30～60パーセント）。Ⅳ期（1820～54年）は、天保（1830～43年）中期に、大麦の価格の変動係数が、ひじょうに大きくなっている（45～60パーセント）。

図3-2によれば、大麦の価格の変動係数は、近世中後期をつうじて、明らかに、米価の変動係数に比べて大きい。これは、大麦の場合には、価格を安定化させる仕組みが、米と比べて、あまり存在しなかったことを意味していると思われる。米の場合は、大阪の、先物取引をふくむ米価平準化機能⁴⁾が、当然、播州の米価変動にも影響をおよぼしたと考えられる。これに対して、大麦は、のちの付論で述べるように「当時農家の自家飯料として消費される部分が多く、商品としての出廻りが少なかった⁵⁾」とすれば、それだけ、大麦の価格に対する平準化機能は働かなかったと考えることができよう。

もっとも、つぎのような事情も考えられよう。すなわち、大麦は米の代替財で、越後屋の場合にみられるように、「米価高騰時に補助的に買い入れ⁶⁾」られる傾向があった。したがって、不作年には大麦の価格は大幅に上昇することとなり、このことが大麦の価格の変動係数を大きくしたといえよう。

つぎに、綿（実綿）の価格変動について、簡単に観察しておきたいと思う。綿の価格は、欠年が多く、観察には慎重を要するものの、（米、大麦の価格が、近世中後期をつうじて、趨勢的に上昇の傾向にあったのに対し）綿の価格は、19世紀初頭を境に、下降から上昇へと、趨勢的変化をとげたと考えてもよさそうである。

循環的変動についてはどうであろうか。こんどは、綿の価格の変動パターンは、享保期（1716～35年）以降幕末まで、（その上昇期と下降期が米、大麦の価格のそれと、ほぼ一致するという意味で）米、大麦の価格の変動パターンと、ほとんど同じであったと言ってさしつかえないと思われる。Ⅰ期（1735年まで）は、比較的低い水準にあった。Ⅱ期（1735～80年）は、初期のひじょうに高い水準から、しだいに、綿の価格が低落していく過程であると思われる。Ⅲ期（1780～1820年）も、綿の価格は、高い水準から、しだいに、低落している。ついで、Ⅳ期（1820～54年）以降、幕末にかけては、綿の価格は急速に上昇している。

つぎに、要素価格としての干鰯の価格変動について、観察を進めることにしたい。これまでみてきたように、生産物価格としての米、大麦、綿の価格は、ほぼ同じように動いた。しかし、干鰯の価格変動は、これらの場合とはまったく異なる。大まかに言って、干鰯価格は、18世紀中は、着実に上昇している。Ⅰ期（1735年まで）は、生産物価格同様、比較的低い水準にあった。Ⅱ期（1735～80年）初期の高い水準も生産物価格の場合と同じである。しかし、干鰯価格は、これ以降、18世紀中は、着実な上昇趨勢を示している。また、干鰯の場合には、米、大麦、綿の場合にみられた、天明期（1781～88年）における価格急騰の現象もみられない。

19世紀に入ると、干鰯価格は、生産物価格の場合と同様、はじめの約20年間（ほぼⅢ－b期（1805～20年）に該当）下落の傾向を示している。そして、1820（文政3）年の深い谷をへて、Ⅳ期（1820～54年）以降、幕末にかけては、これも生産物価格の場合と同様、急速に上昇している。しかし、干鰯の場合には、米、大麦、綿の場合にみられた、天保（1830～43年）中期における価格急騰の現象はみられない。

変動係数についてはどうであろうか。この場合にも、干鰯価格は、生産物価格とはまったく異なる様相を呈している。まず、Ⅱ期（1735～80年）は、安永期（1772～80年）に、干鰯価格の変動係数が、やや大きい（20パーセント台）が、同じ時期に、米、大麦のそれは小さかった（5～15パーセント）。Ⅲ期（1780～1820年）は、天明期（1781～88年）に、米、大麦の価格の変動係数がひじょうに大きい（30～60パーセント）のに対して、干鰯価格のそれはひじょうに小さかった（5～10パーセント）。さらに、1820年前後の時期には、干鰯価格の変動係数が、やや大きい（10～30パーセント）が、同じ時期に、米、大麦のそれは小さかった（10～15パーセント）。ついで、Ⅳ期（1820～54年）は、天保（1830～43年）中期に、米、大麦の価格の変動係数が、ひじょうに大きい（45～60パーセント）のに対して、干鰯価格のそれは小さかった（15パーセントぐらい）⁷⁾。

うえに述べてきたように、要素価格としての干鰯の価格変動は、生産物価格としての米、大麦、綿の価格変動とは、いちじるしく異なる様相を呈していた。そこで、この問題について、すこし考えてみることにしたい。

一般に、物価変動に影響をあたえる要因としては、供給側の条件を不変とすれば、まず、改鋳等による貨幣数量の変動、財政の収支⁸⁾、人口の変動といった需要側の要因が考えられる。しかし、これらの需要側の要因でもって、農産物価格と、肥料価格の長期的な変動パターンの相違を、説明することは、困難であると思われる。なぜなら、これらの要因で、農産物価格が上昇（下落）したとすれば、いずれは、肥料価格も上昇（下落）することになるとと思われるからである。というのも、肥料に対する需要は、農産物に対する需要がまずあって、そこから派生的に生ず

るという意味で、派生需要にほかならないからである。

したがって、うえに述べた農産物価格と、肥料価格の長期的な変動パターンの相違を説明するためには、物価変動に影響をあたえる供給側の要因（需要側の条件を不変としたときの）について考えなければならない。すなわち、農産物についていえば、豊凶変動、商品化率、農業技術、農業産出量の増減といった要因が考えられる。また、肥料についても同様の要因を考慮にいれなければならないであろう。

まず、豊凶変動の問題を考えてみることにしよう。うえにみたように、干鰯価格は、米、大麦、綿の価格とは異なって、天明（1781～88年）、天保期（1830～43年）に急騰するということはなかったし、この時期に、その変動係数も、米、大麦のそれに比べて小さかった。この事実は、つぎのように説明することができよう。まず、天明（1781～88年）、天保期（1830～43年）における連年の凶作は、米、大麦、綿の供給を減少させ、この時期における農産物価格の、激しい上下変動を伴う急騰をひきおこした。これに対して、干鰯は、この時期においても、安定的に供給されていたと考えよう。そうすれば、干鰯の価格が、農産物価格とは異なって、小さな上下変動を伴う、おだやかな上昇（おそらく需要側の要因で）にとどまったという事実を、容易に理解することができる。

つぎに、商品化率、農業技術の進歩、米の産出量の変動といった問題を考えてみることにしよう。さきに述べたように、干鰯価格は、世紀の変わり目までは、着実な上昇趨勢にあった。これに対して、米、大麦、綿の価格は、Ⅱ期（1735～80年）も、Ⅲ期（1780～1820年）も、初期の高い水準から、しだいに、低落している。このような、肥料価格と農産物価格の長期的な変動パターンの相違については、どのように考えればよいであろうか。

この時期には、元文の改鑄、南鐐二朱銀の発行による貨幣数量の増加があったにもかかわらず、農産物価格は着実な上昇趨勢をもたなかった。この理由として、ひとつには、農村への貨幣経済のいっそうの浸透によって、農産物の商品化が進み（商品化率が上昇し）、その結果、取引量の上昇率が、貨幣数量のそれを上回って、物価は、むしろ、下降の局面さえもつにいたったと思われる。もうひとつの理由として考えられるのは、農業産出量の増加である。農業技術の改善とともに、農産物の反当収量は増加し（後述）、このことが取引量のいっそうの上昇をもたらしたと思われる⁹⁾。

一方、干鰯の場合は、この時期に、全国的な生産量に、さほど変化がなく、また、農産物に比べて、当初から、商品化率が高く、その後もこの率があまり変化しなかったとすれば、そのとき、干鰯価格は、貨幣流通量の増加に伴って、着実に上昇することとなろう。ほぼ以上のような理由で、農産物価格と肥料価格の長期的な変動パターンの相違を、解釈してきたが、これは、あくまでも、推測をふくむ暫定的なものであることは言うまでもない。

II 反当収量の変動と物価

本節では、農産物反当収量の変動と、物価との関係について、若干述べておくこととしたい。

図3-3は、のちの付論で述べる米、大麦、綿それぞれの作況の評点の変動をグラフ化（普通目盛）したものである（下段に米、中段に大麦、上段に綿）。ドットで示されているのが、各年の米、大麦、綿の作況の評点である。この場合にも、連年にわたってデータが得られるときは、

各ドットを実線でつないだが、欠年がある場合にはそうしなかった。また、作況の評点のグラフ化の際にも傾向線を書き込んだが、この処理は、価格変動のグラフ（図3-1）の場合とまったく同じである。

図3-4は、近世中後期における農産物反当収量の変動を推計し、これをグラフ化したものである。下段に玄米（反につき石）、中段に大麦（反につき石）、上段に綿（反につき貫）の各反当収量の変動が図示されている（半対数目盛）。反当収量推計の手続きの大部分については、のちの付論で述べるとおりであるが、ここでは、多少の重複と新しい部分も含めて、より整理されたかたちで、簡単に述べておくこととしたい。

まず、玄米の場合について言えば、反当収量の記載がある年は、たとえば、「六俵方式石迄」（1784年）というふうに書かれている。そこで、1784（天明4）年の反当収量は、最高値2.4石（1俵＝0.4石）と最低値2石を単純平均して、2.2石とした。図3-4下段には、このようにして得られた各年の玄米の平均反当収量が、濃いドットで示されている。

史料には、反当収量とは別に、「豊年」、「不作」といった、作況にかんする評語の記載が、頻繁にみられる。そこで、米の作況を4段階に分けることにした。「大宝年」、「豊年」、「万作」といった評語が記されている場合は、作況の評点を「4」とした。以下同様にして、「中分」、「中年」のように書かれているときは、作況の評点「3」、「不作」、「あしく」のように書かれているときは、評点「2」、そして、「皆無」、「大不作」といった評語が記されている場合は「1」とした。

なおほかに、米の作況にかんする評語は記されていないが、反当収量は記載されている年が若干ある。そこで、これらについても、当該年近傍の年で（近傍の年でなくてはならない）、作況と反当収量の双方が記されている場合を参考にして、当該年の作況の評点を判断することとし

た。たとえば、1762（宝暦12）年（「中分」、2.2石）と、1773（安永2）年（「見かけよし」、2.2石）は、いずれも作況の評点3と判断しているので、両年には含まれた、1767（明和4）年（2.2石）は評点3とした。

さて、これだけの準備をしたうえで、反当収量の記載はないが、作況に関する評語は記されている年について、その反当収量を推計する作業を行なった。ひとつだけ例をあげると、1796（寛政8）年の米の作況は、「中年」（評点3）で、反当収量は2.3石であった。それが27年後の1823（文政6）年には、作況はやはり「中分」であるが、反当収量は3石に上昇している。そこで、この両年には含まれた評点3の年の反当収量については、両年の値を両端とする直線補間によって値を推定し、これを充てることとしたのである。

図3-4の下段には、いま述べたような計算を繰り返して得られた反当収量の推定値が、薄いドットで示されている。なお、連年にわたって反当収量を知ることができる場合には、（濃いドットであれ、薄いドットであれ）各ドットを実線でつないだが、欠年がある場合にはそうしなかった。

以上のような処理を行なっても、反当収量も、作況の評語も記されていない年については、依然として、米の反当収量を知ることができない。そこで、このような年は、あるいは、このような年が続く場合には、その両端のドットをもちいて、これらの年の反当収量を直線補間によって推定した。そして、最後に、5ヵ年移動平均をとって反当収量の系列を平滑化することとした。図3-4に描き込まれている傾向線は、このようにして得られたものである。

大麦の反当収量についても同様の処理を行なった。綿については、反当収量のデータが少ないので、史料記載の反当収量だけを濃いドットで

図 3 - 3 米、大麦、綿の作況の変動

(評点:「豊年」など:3、「中年」など:2、「不作」など:1、「大不作」など)

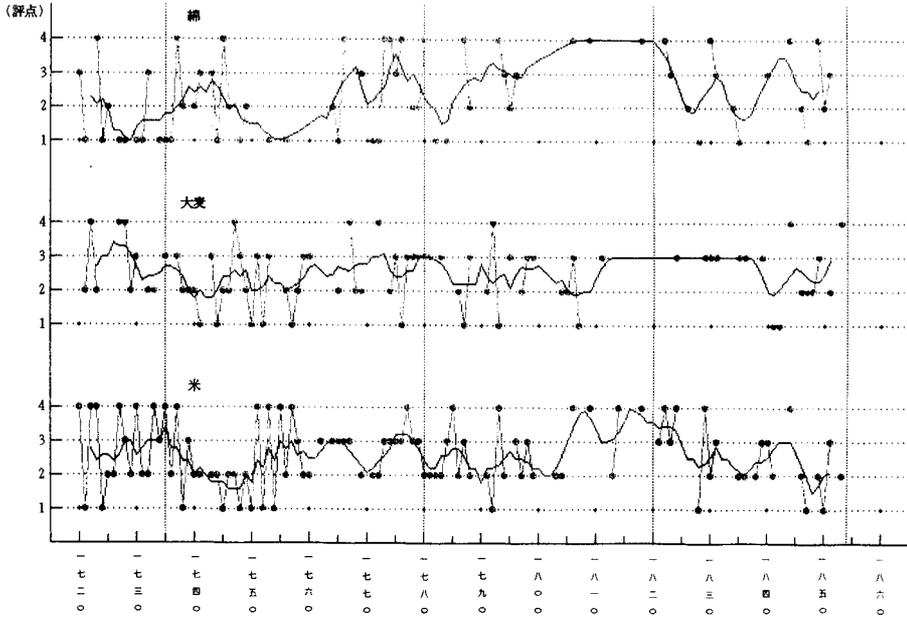
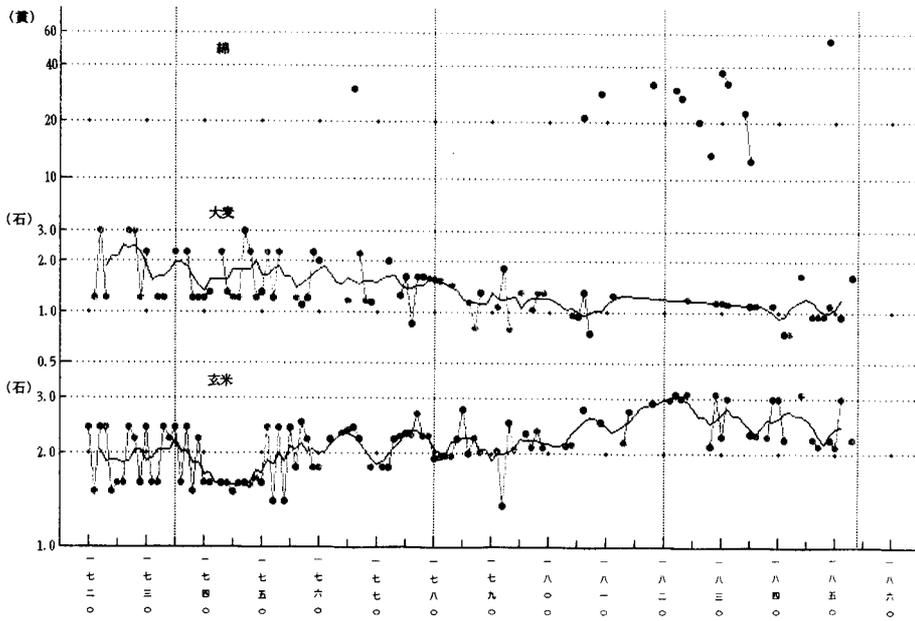


図 3 - 4 米、大麦、綿の反当収量の変動



示しておいた。しかし、ここで得られた米、大麦の反当収量についての傾向線は、いずれにせよ暫定的なものである。以下では、あくまでも、史料記載の反当収量（濃いドット）を中心に、分析を進めることとした。

さて、はじめに、図3-4下段にかきこまれた米の反当収量の系列を観察することとしよう。この系列の近世中後期をつうじての長期的な趨勢はどのようなものであったろうか。それは、傾向線によるかぎり、上昇の過程にあったとみてよいように思われる。すなわち、はじめ、おおむね二石以下の水準にとどまっていた米の反当収量は、しだいに二石の水準を上下するようになり、ついには二石の水準を大きく上回るようになったのである。

循環的変動についてはどうであろうか。まず、Ⅰ期（1735年まで）は、米価は、低い水準にあったが、反当収量のほうは、つぎの期に比べると高い水準にあったといえる。Ⅱ期（1735～80年）は、米価は、初期の高い水準から、しだいに、低落していく過程であると思われるが、反当収量のほうは、逆に、初期の低い水準から、しだいに、上昇していく過程であるとみることができる。Ⅲ期（1780～1820年）も、米価は、高い水準から、しだいに、低落しているが、反当収量のほうは、逆に、初期の低い水準から、しだいに、上昇している。ついでⅣ期（1820～54年）は、米価は急速に上昇しているが、反当収量は、逆に、下落している。

大麦についてはどうであろうか。大麦は、グラフから明らかなように、その反当収量は、近世中後期をつうじて、顕著な下落傾向を示している。Ⅰ期（1735年まで）は、大麦の価格は低い水準にあるが、反当収量は高い水準にあったようである。Ⅱ期（1735～80年）およびⅢ期（1780～1820年）については、大麦の価格は、いずれも初期の高い水準から、しだ

いに低落しているが、反当収量も低下の傾向と考えられる。Ⅳ期（1820～54年）は、大麦の価格は急速に上昇しているが、反当収量は、下落している。

綿は反当収量のデータが少ないので、米や大麦の場合と同様の分析を行なうことはできない。しかし、図3-3によって綿の作況の変動をみると、米の場合にみられたような、作況の良い（悪い）ときには、価格が安い（高い）といった収量と価格との逆相関を、ある程度観察することができる。すなわち、Ⅱ期（1735～80年）およびⅢ期（1780～1820年）に、綿の価格は、いずれも初期の高い水準から、しだいに低落しているが、作況は、逆に、初期の低い水準から、しだいに上昇している。また、Ⅳ期（1820～54年）になると、綿の価格は急速に上昇するが、作況は、低い水準にとどまったのである。

うえに述べたように、米の場合、反当収量が多い（少ない）ときには、価格が安い（高い）といった収量と価格とのあいだの逆相関を、ある程度明瞭に観察することができた。近世中後期において、耕地の拡大を無視してよいとすれば、当野添村反当収量の増加（減少）は、そのまま、当野添村米供給量の増加（減少）、さらには、もっと広範囲にわたる米供給量の増加（減少）と考えることが許されよう。また、当野添村米価の変動は、中央の米価変動（ひいては、中央の物価変動）と、基本的に変わるところはなかった。したがって、一般化すれば、米供給量の増加（減少）は、米価はもちろん、物価の下落（上昇）に対して、やはり、大きく影響していたとみななければならない。

米価変動（ひいては物価変動）を説明する要因として、改鑄等による貨幣数量の変動、財政の収支、人口の変動といった需要側の要因を無視することは無論できない。が、需要側の要因は、物価の下降局面の説明

に、やや難がある。また、商品化率の上昇のような（供給側の）要因も、逸することはできないであろう。しかし、この場合は、物価の上昇局面を説明することが難しい。これに対して、米の産出量の変動は、本章での分析結果にみるとおり、物価の上昇、下降の両局面を説明することができる。したがって、物価にあたる影響という点で、米の産出量の変動は、やはり重要なものではなかったかと思われる。

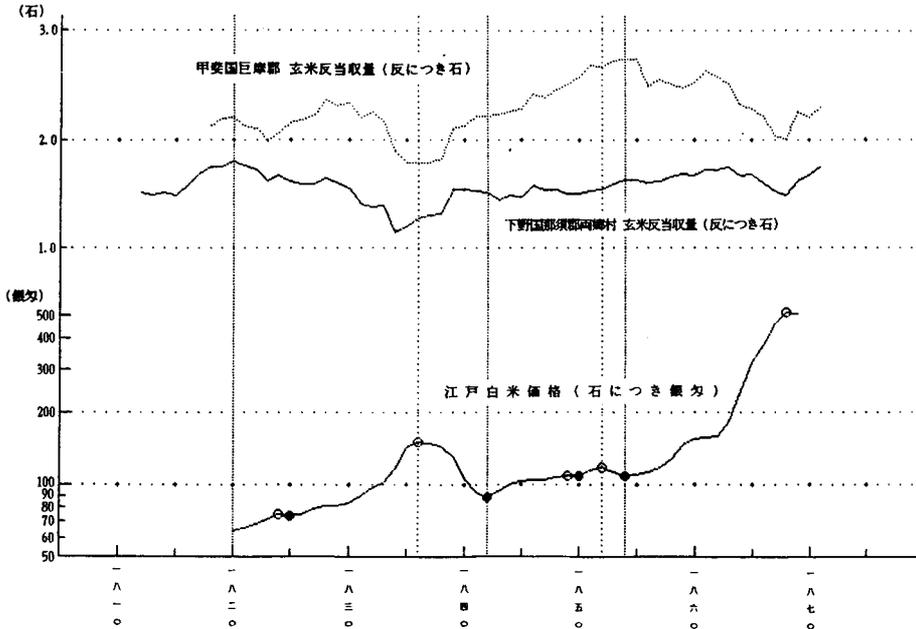
ところで、このような米の収量と米価（物価）との逆相関の現象は、他の地域においてもみられたであろうか。この問題を本格的に議論することはもとよりできないが、ここでは一例として、戦略的に重要と思われる関東地方の場合について、簡単な素描をあたえておきたいと思う。

図3-5はこの目的のために作成したものである。下段に図示されているのは、江戸における白米価格¹⁰⁾の系列（石につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛）である。グラフには、波動の峰（○）と谷（●）が描き込まれている。そこで、1820（文政3）年以降の時期について、波動の谷に着目することで、一応の時期区分を行なうと、それは、これまでもちいてきた時期区分に一致する。すなわち、IV-a期（1820(谷)～36(峰)～42年(谷)）、IV-b期（1842(谷)～52(峰)～54年(谷)）、V期（1854年(谷)～）である。なお、図3-5にはこの時期区分にもとづいて、峰および谷について区切りの線を入れておいた。

ついで上段に実線でかきこまれているのは、下野国那須郡両郷村における米の反当収量¹¹⁾（反につき石、5ヵ年移動平均）である。もうひとつの点線でかきこまれているグラフは、甲斐国巨摩郡における米の反当収量¹²⁾（反につき石、5ヵ年移動平均）である。

さて、図3-5の観察に移ると、まずIV-a期（1820～42年）は、米価の上昇局面および下降局面に対して、反当収量の方は、おおむね下降

図3-5 関東地方における米価と反当収量の変動(5ヵ年移動平均)



したのち上昇しているとみられるから、米価と収量は、ほぼ逆に相関したと考えてよいであろう（もっとも甲州の場合は、1820年代については上昇の傾向とみることもできよう）。

ついで、IV-b期（1842～54年）になると、米価の下降局面については、反当収量と逆に相関しているといえるかもしれないが、米価のゆるやかな上昇局面に対して、逆に反当収量がゆるやかに下降しているとはいえないようである。もっとも見方を変えて、1836（天保7）年の峰から1854（安政元）年の谷までを、米価のひとつの下降局面とみなしてよいとすれば、この場合には、反当収量の上昇局面がこれに対応していると考えてよいであろう。

V期（1854～）になると米価は急騰するが、反当収量の方は下落したと考えられる（野州については、1863（文久3）年ぐらいまで、反当収

量がやや上昇しているとみられるが、それでも文政期（1818～29年）の水準に達していない）。

以上みてきたように、関東地方においても関西におけると同様、短期循環的には、米の収量と米価とのあいだには、おおむね逆相関の現象がみられたと言っ¹³⁾てさしつかえないと思われる。

つぎに、米の反当収量の変動にかかわる二三の重要な論点について若干述べておくこととしたい。第一点は、米の反当収量が、文政（1818～29年）中期以降、天保（1830～43年）、弘化（1844～47年）、嘉永期（1848～53年）にかけて（ほぼIV期（1820～54年））、下降の趨勢にあるということである。2石の水準を下回ることにはな¹⁴⁾くなってはいるが、19世紀に入ってからの反当収量の著しい増加に比べれば、明らかに低い水準である。大麦についても、綿（図3-3）についても、ほぼ同様の傾向が観察されるから、農業生産は、文政（1818～29年）中期以降、何らかの理由で（天候の不順か、地力低下か、あるいは農村病弊のゆえか）、全般的に振るわなくなったと考えてよいであろう。

二つ目は、反当収量の変動と、賃金の変動との関係である。最近、新保博、斎藤修両氏は、「実質賃金の動きは農業生産性の推移によく対応していた¹⁴⁾」という新しい指摘を行なっている。この点については、のちに詳細な検討を試みる予定であるが、大ざっぱに言っ¹⁵⁾て、実質賃金も反当収量も物価とは逆の方向に動いたので、両氏の指摘は、明らかに成り立つものと思われる。

三つ目は、反当収量の変動と、「実質貨幣残高」との関係である。宮本又郎氏は、最近、明石茂生氏¹⁵⁾に倣って、「実質貨幣残高」を推計している¹⁶⁾。この点についても、のちに多少触れることにしたいと思うが、「実質貨幣残高」（すなわち実質産出量）は、反当収量と、ほぼパラレ

ルに動いているようである。したがって、二つ目の指摘と三つ目の指摘を合わせれば、反当収量、実質産出量、実質賃金の三者が、（いずれも物価とは逆に）ほぼ同じ方向に動いたということになる。

本節を終えるにあたって、大麦（水田の裏作）の反当収量と大麦の価格との関係について、すこし考えておくこととしたい。さきに述べたように、大麦の反当収量は、近世中後期をつうじて、顕著な下落傾向を示していた¹⁷⁾。しかし、大麦の場合は、当野添村反当収量の増加（減少）は、そのまま、当野添村大麦供給量の増加（減少）、さらには、もっと広範囲にわたる大麦供給量の増加（減少）であるとすることはできないであろう。時代が進むにつれて、二毛作率が上昇するといったことも考えられるからである¹⁸⁾。

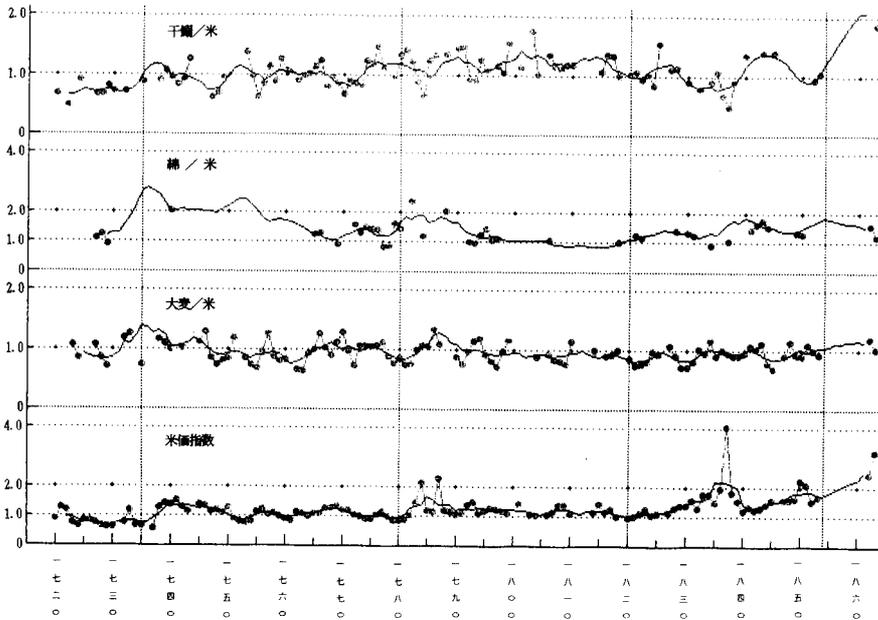
いずれにせよ、大麦の反当収量（あるいは大麦の産出量）と大麦の価格とを、直接、関係させることは難しいと思われる。（もっとも、I期（1735年まで）、II-a期（1735～53年まで）、天明期（1781～88年）などに、価格と収量の逆相関関係を認めることはできる。）さきに指摘したように、大麦の価格の変動パターンは、享保期（1716～35年）以降幕末まで、米価のそれと、ほとんど同じであった。そこで、大麦の需要面に目を転ずると、当時、大麦は明らかに米の代替財であったことが気がつく。したがって、大麦の価格は、おおむね米価に連動せざるをえなかったと考えることができよう。

III 相対価格の変動

— 要素価格／生産物価格比

本節の目的は、生産物（米、大麦、綿）と生産要素（肥料）の相対価

図3-6 米価指数と大麦、綿、干鰯の米に対する相対価格 (1818年=1.00)



格の変動について論じることである。しかし、この興味ある主題に入るまえに、まず、当野添村における、大麦、綿、干鰯の米に対する相対価格の変動をグラフ化し、簡単な検討をくわえることとしたい。

図3-6は、大麦、綿、干鰯の米に対する相対価格の変動をグラフ化したものである。相対価格の計算に際しては、まず、米、大麦、綿、干鰯それぞれの価格を、1818（文政元）年を基準年とする指数になおし、しかるのち比をとった。図3-6下段には米価指数（1818年=1.00）、中段には大麦／米（大麦の米に対する相対価格。1818年=1.00）、上段に綿／米、最上段に干鰯／米の系列がそれぞれ図示されている。ドットで示されているのが、それぞれの各年値である。連年にわたってデータを知ることができる場合には、各ドットを実線でつないだが、欠年がある場合にはそうしなかった。

図3-6にも5ヵ年移動平均による傾向線が描き込まれている。この傾向線の計算過程はつぎのとおりである。まず、米、大麦、綿、干鰯それぞれの価格の欠年を、直線補間によって推定し、連続した価格系列とした。つぎに、これら連続価格系列を、1818（文政元）年を基準年とする指数になおした。しかるのち、大麦、綿、干鰯の場合は、米に対する相対価格を計算し（米価指数の場合はそのまま）、最後に、5ヵ年移動平均をとって平滑化した。したがって、ここに描き込まれた傾向線は、もとより便宜的なものであって、以下では、あくまでも、各年値のドットにもとづいて分析を進めることにしたい。

まず、大麦の米に対する相対価格の変動について観察することとしよう。大麦の相対価格は、傾向線によるかぎり、趨勢的には、Ⅱ期（1735～80年）からⅢ期（1780～1820年）にかけて下降、Ⅳ期（1820～54年）以降幕末にかけてはやや上昇の傾向にあるといえよう。

さらに言えば、循環的には、大麦の相対価格の変動は、（上昇期と下降期がほぼ一致するという意味で）米、大麦、綿の価格変動に似ていた（もっとも、米、大麦の価格は、近世中後期をつうじて、趨勢的には、上昇の傾向にあったと言えるが）。すなわち、Ⅰ期（1735年まで）は、比較的低い水準にあった。Ⅱ期（1735～80年）は、初期の高い水準から、しだいに、大麦の相対価格が低落していく過程であると思われる。Ⅲ期（1780～1820年）も、大麦の相対価格は、高い水準から、しだいに、低落している。ついでⅣ期（1820～54年）以降幕末にかけては、大麦の相対価格はやや上昇している。

うえに述べた観察事実は、傾向線によるものであるが、傾向線には、多少、統計処理上のバイアスが入り込んでいる。さらには、さかのぼって、指数化後に、相対価格を計算していることから生ずるバイアスにも

注意しなければならない。そこで、各年値のドットと、さらには、（ここには掲げることができなかつたが）指数化以前の、すなわち、大麦の価格を直接米価で除した相対価格の系列をもちいて、上記観察事実に対して、すこし補足をしておくことにしたい。

Ⅲ期（1780～1820年）とⅣ期（1820～54年）以降幕末にかけては、各年値のドット、および指数化前の相対価格の系列によっても、さきの観察事実に変更を加える必要はないと思われる。しかし、Ⅱ期（1735～80年）における、大麦の米に対する相対価格の低下傾向は、明らかに誇張されている。むしろこの時期は、大麦の相対価格は、不変の傾向にあったと考えられる。

ところで、大麦の米に対する相対価格の変動が、循環的には、米や大麦そのものの価格変動と似ていたという点の解釈は、さほど難しくない。さきに観察したように、大麦の価格の変動係数は、近世中後期をつうじて、明らかに、米価の変動係数に比べて大きかった。したがって、米や大麦の価格上昇（下落）期には、大麦の価格は米価以上に上昇（下落）し、その結果、大麦の米に対する相対価格は、上昇（下落）したと考えられよう²⁰⁾。

つぎに、綿（実綿）の米に対する相対価格の変動について、簡単に観察しておきたいと思う。綿の相対価格は、欠年が多く、観察には慎重を要するものの、その変動パターンは、大麦の相対価格のそれと、享保期（1716～35年）以降幕末まで、ほとんど同じであったと言ってさしつかえないと思われる。すなわち、綿の相対価格は、傾向線によるかぎり、趨勢的には、ほぼⅡ期（1735～80年）から、Ⅲ期（1780～1820年）にかけて下降、その後、およそⅣ期（1820～54年）以降幕末にかけては、やや上昇の傾向にあったといえよう。

さらに言えば、循環的には、綿の相対価格の変動は、（上昇期と下降期がほぼ一致するという意味で）米、大麦、綿の価格変動に似ていた。すなわち、Ⅰ期（1735年まで）は、比較的低い水準にあった。Ⅱ期（1735～80年）は、おおむね、初期の高い水準から、しだいに、綿の相対価格が低落していく過程であると思われる。Ⅲ期（1780～1820年）も、おおむね、綿の相対価格は、高い水準から、しだいに、低落している。ついで、ほぼⅣ期（1820～54年）以降幕末にかけては、綿の相対価格はやや上昇している。

うえに述べた観察事実は、傾向線によるものであるが、大麦の相対価格変動の観察のさいに指摘したように、傾向線には、統計処理上のバイアスが、二重に入り込んでいる。したがって、綿の場合にも、大麦の場合と同様、たとえば、Ⅱ期（1735～80年）における、相対価格の低下傾向は、誇張されていると考えられる。

いまみたように、綿の米に対する相対価格の変動も、循環的には、米や大麦、綿そのものの価格変動と似ていた。この点についても、大麦の場合とほぼ同様の解釈が可能である。おそらく、綿の価格の変動係数は、近世中後期をつうじて、米価のそれよりも大きかったであろう^{2,1)}。したがって、米や大麦、綿の価格上昇（下落）期には、綿の価格は米価以上に上昇（下落）し、その結果、綿の米に対する相対価格は、上昇（下落）したと思われる。

がしかし、それだけではない。いま述べたように、綿の相対価格は、大麦の相対価格と同様、ほぼⅡ期（1735～80年）から、Ⅲ期（1780～1820年）にかけて下降、その後、およそⅣ期（1820～54年）以降幕末にかけては、やや上昇の傾向にあった。が、大麦の場合は、この点が、必ずしも判然としないのに比べ、綿の場合は、この傾向が顕著であった。す

なわち、綿の米に対する相対価格は、19世紀初頭を境目に、下降から上昇へと、趨勢的变化をとげたと言うことができよう。とは言え、19世紀における上昇圧力は小さかった。したがって、綿は、19世紀初頭にかけて不利化した（米との）交易条件を、その後、大きく回復することはできなかつたと考えられる。

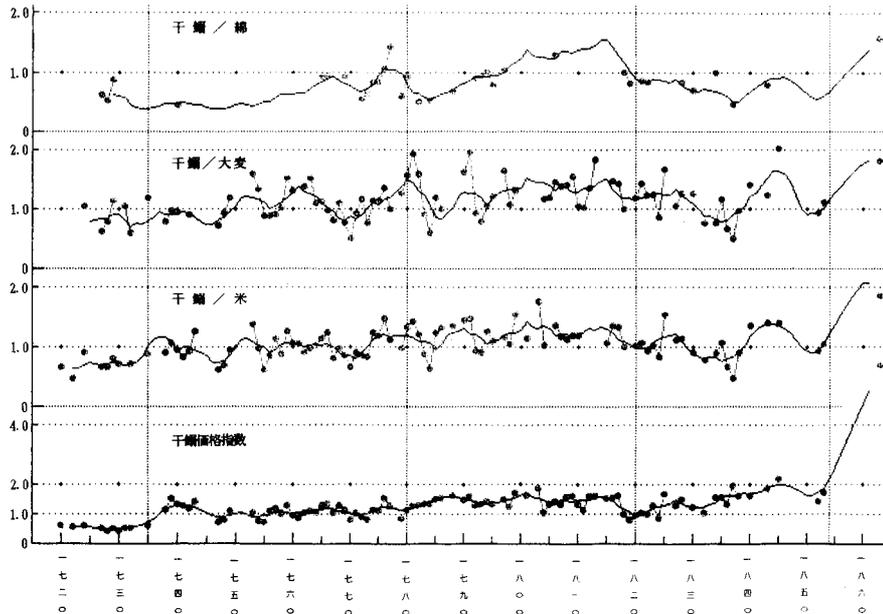
なお、山崎隆三氏は、大阪在方における、実綿の米に対する相対価格を計算している^{2,2)}。いまこの系列を、享保期（1716～35年）以降幕末の時期について、プロットしてみると、それは、本節で得られた傾向線にほぼ一致する。氏は、18世紀における畿内綿作農業繁栄の根拠を、この時期に、綿の価格が米価に対して相対的に高かったことに求めている。同時にまた、19世紀における畿内富農経営の困難化、摂河泉における大国訴を、18世紀に比べた場合の綿の交易条件の不利化に結び付けている^{2,3)}。

以上で、大麦と綿の相対価格の変動について検討したので、つぎは、干鰯の米に対する相対価格の変動を検討しなければならない。しかし、干鰯／米の系列を検討することは、すでに要素価格／生産物価格比の範疇を扱うことになる。そこで、干鰯／米、干鰯／大麦、干鰯／綿の三系列を、要素価格の生産物価格に対する相対価格と呼ぶことにして、つぎに、これらを一括して分析、検討することとしたい。

図3-7は、干鰯の米、大麦、綿に対する相対価格の変動をグラフ化したものである。計算の過程は、図3-6の場合とまったく同じである。図3-7下段には干鰯の価格指数（1818年＝1.00）、中段には干鰯／米（干鰯の米に対する相対価格。1818年＝1.00）、上段に干鰯／大麦、最上段に干鰯／綿の系列がそれぞれ図示されている。

まず、干鰯／米の系列を観察することからはじめよう。干鰯の米に対する相対価格は、18世紀中は、ほぼ着実な上昇傾向にあった。しかし、

図3-7 干鰯価格指数と干鰯の米、大麦、綿に対する相対価格 (1818年=1.00)



19世紀に入ると、天保（1830～43年）中期にかけて急落した。そして、以後幕末にかけては上昇の傾向にあったと考えられよう。干鰯価格そのものも、18世紀中は、着実に上昇している。その後、ほぼⅢ-b期（1805～20年）に下落の傾向を示し、Ⅳ期（1820～54年）以降、幕末にかけては、急速に上昇した。したがって、干鰯／米の系列に見られる天保（1830～43年）中期の落込みだけが、干鰯価格そのものの変動と唯一異なる動きであると考えられる。

つぎに、干鰯／大麦（干鰯の大麦に対する相対価格。1818年=1.00）の系列に目を転じると、この系列は、図からも明らかなように、干鰯／米の系列とほとんど同じ動きを示している。

さらに、干鰯／綿（干鰯の綿に対する相対価格。1818年=1.00）の系列に目を転じると、この系列は、米、大麦に対する場合とやや異なり、

19世紀に入ってもなお、文化（1804～17年）末期まで上昇傾向が持続している。しかも天明（1781～88年）中期から文化（1804～17年）末期にかけての上昇傾向が顕著であるといえよう。²⁴⁾

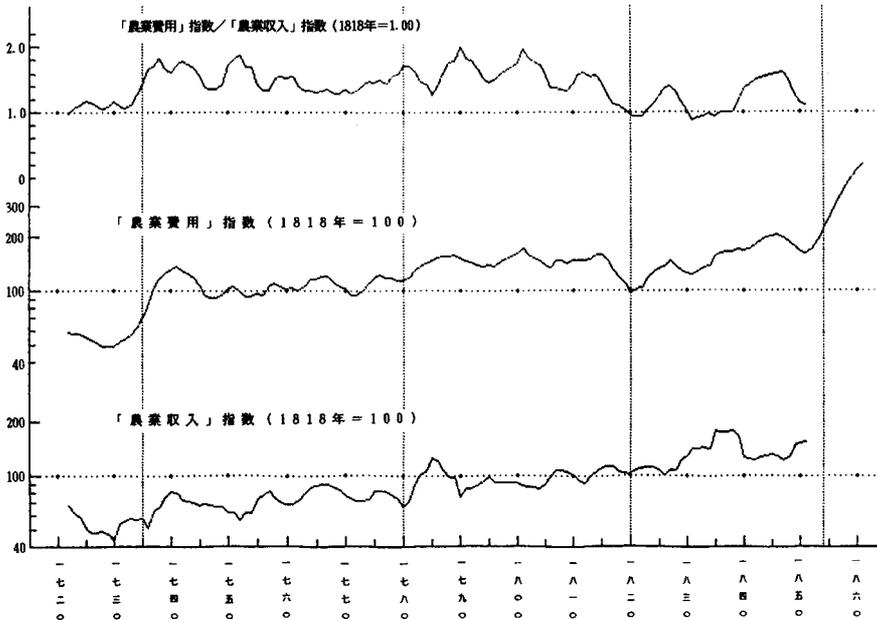
以上観察してきたように、（要素価格たる）干鰯の（生産物価格たる）米、大麦、綿に対する相対価格は、干鰯／綿の系列に一部やや特徴的な動きがみられた点を別にすれば、だいたい同じように動いた。²⁵⁾ いずれの系列も、趨勢的には、すなわち近世中後期を全体としてみれば、要素価格／生産物価格比は上昇の傾向にあったと考えてよいであろう。

ところでこのような要素価格／生産物価格比上昇の傾向は、一見、ミクロレベルでの農業経営、あるいはマクロレベルでの農業生産に対して、大きなダメージをあたえたのではないかと思われよう。たしかに、綿の場合は、さきにみたように、綿の米に対する相対価格が、ほぼⅡ期（1735～80年）から、Ⅲ期（1780～1820年）にかけて下降、その後、およそⅣ期（1820～54年）以降幕末にかけては、やや上昇したにすぎないから、干鰯の綿に対する相対価格は、米に対するそれと比べて、1820年ごろまでは、上昇傾向が顕著であった。その結果、当然、畿内富農経営の困難化といった問題も生じたであろう。

しかし、要素価格／生産物価格比上昇の傾向が、ただちに、マクロ的農業生産の拡大発展に対して大きな障害になったと言えるであろうか。と言うのも、たとえば、干鰯の相対価格が上昇していても（さらには実質賃金が上昇していても）、同時に米の反当収量が増大していれば、前者は、マクロ的農業生産の発展に対して、さほど大きな妨げにはならないという場合があるであろう。以下ではこのような問題について考えてみることにしたい。

図3－8は、この問題を考えるためのひとつの試みである。下段には

図3-8 「農業費用」の「農業収入」に対する相対的変動(5ヵ年移動平均)



「農業収入」の系列がグラフ化されている。もっとも、ここでいう農業収入とは、米価と反当収量の積である。米価は、欠年を直線補間によって推定し、連続価格系列としたものを持ちている。反当収量についても同様である。下段に描かれているグラフは、このようにして得られた米価と反当収量の積を、1818(文政元)年を基準年とする指数になおし(1818年=100)、しかるのち、5ヵ年移動平均をとって平滑化したものである(半対数目盛)。

中段には「農業費用」の系列がグラフ化されている。もっとも、ここでいう農業費用とは、干鰯価格指数(欠年を補間したのち、1818年=100として指数化し、さらに5ヵ年移動平均をとって平滑化したもの)である(半対数目盛)。本来なら、干鰯価格と干鰯の反当施肥量の積を持ちいるべきであるが、後者の長期にわたるデータは得られないので、一応、

施肥量は一定と考えることにした。

上段には両者の比、すなわち農業費用／農業収入比（1818年 = 1.00）の系列がグラフ化されている（5ヵ年移動平均）。

ところで、農業収入という場合には米価と反当収量の積以外にも、できることなら、大麦、綿それぞれの価格と収量の積等を加算しなければならないであろう。しかし大麦については反収データが少ないうえに、二毛作率の経年変化を知ることができない。綿にいたっては事情はさらに悪化する。そこでさしあたり、大麦、綿の場合は、収量についてあまり大きな変化はないか、あったとしてもウエイトが小さく、全体としてのマクロ的農業生産に対しては決定的な影響をあたえることはなかったと考えておくことにしたい。農業費用の場合にも、肥料だけでなく、賃金、農具等を考慮にいれなければならないであろう。しかし、干鰯は直接生産費全体の過半を占めるという例²⁶⁾も知られているから、とりあえずはこれを農業費用の代理変数と考えることができよう。

さて、下段の農業収入は、ほぼ直線的に（したがって指数関数的に）上昇している。ここでいう農業収入とは、米価と反当収量の積であった。米価も反当収量も、近世中後期をつうじて、趨勢的には上昇傾向にあったから、その積が上昇しているのは当然である。

むしろ、ここで注意しておきたいのは、積がほぼ直線的に上昇しているという点である。Ⅱ節で指摘したように、米の場合、反当収量が多い（少ない）ときには、価格が安い（高い）といった収量と価格とのあいだの逆相関を、ある程度明瞭に観察することができた。したがって、これらの積を作れば、上昇局面と下降局面がたがいに相殺されて、積すなわち農業収入は直線的に上昇することになるろう。このことは、いわゆる名目成長率が、近世中後期をつうじて、ほぼ一定であったという驚くべ

き結論を意味する。ちなみに、移動平均系列の開始年（1722年）と終了年（1851年）を両端とする年平均成長率を計算すると、それは、0.638パーセントであった。

問題は、上段に図示された農業費用（干鰯価格）／農業収入（米価×反当収量）比（1818年=1.00）の系列である。さきに述べたように、干鰯の米に対する相対価格は、18世紀中は、ほぼ着実な上昇傾向にあった。しかるに、農業費用／農業収入比は、一部の時期（享保(1716～35年)末期から元文期(1736～40年)にかけて、あるいは天明(1781～88年)、寛政期(1789～1800年))における上昇を別にすれば、むしろ不変の趨勢にあったと考えられよう。すなわち、18世紀をつうじて、干鰯価格は米価に対して相対的に上昇したが、同時に、反当収量の増加にともなって、農業収入も増加した。したがって、干鰯価格の相対的上昇は、マクロ的農業生産の拡大発展に対して、さほどの障害にはならなかったと解釈されよう。

19世紀に入ると、さきに述べたように、干鰯の米に対する相対価格は、天保（1830～43年）中期にかけて急落した。そして、以後幕末にかけては上昇の傾向にあったと考えられる。農業費用／農業収入比の系列もほぼ同様の傾向をたどった（1852年以降についてはわからないが）。したがって、19世紀に入ってから天保期（1830～43年）までは、マクロ的農業生産は、農業費用の相対的低下によって、これまでより有利になったと考えられよう。²⁷⁾

おわりに

ここでは、本章で得られた結論を、簡単に要約しておくこととしよう。

まず、生産物価格（米、大麦、綿）は、こまかい点を別にすれば、ほぼ似たような趨勢的および循環的変動を示した。しかし、要素価格（干鰯）の変動は、生産物価格のそれとは大きく異なった。これは、両者の供給側の事情、すなわち、短期的な豊凶変動（豊漁と不漁）、商品化率、農業技術（漁業技術）、農業産出量（漁獲量）のやや長期的な増減といったものが、双方で大きく異なったことを反映しているという解釈が行なわれた。

ついで、農業生産量変動の観察結果によれば、米の反当収量は、はじめ、おおむね2石以下の水準にとどまっていたのが、しだいに2石の水準を上下するようになり、ついには2石の水準を大きく上回ることとなった。しかも、循環的には、反当収量が多い（少ない）ときには、価格が安い（高い）といった収量と価格とのあいだの逆相関を、ある程度明瞭に観察することができた。しかし、大麦の反当収量は、近世中後期をつうじて、顕著な下落傾向を示した。また、価格との逆相関もほとんどなかった。これらの観察結果に対して、米の場合は、米供給量の増加（減少）が、米価はもちろん、物価の下落（上昇）に対して、やはり、大きく影響していたのではないかという解釈が、また大麦の場合には、当時、大麦は明らかに米の代替財であったから、大麦の価格は、おおむね米価に連動せざるをえなかったのではないかという解釈が、それぞれ行なわれた。

つぎに、相対価格、とりわけ要素価格の生産物価格に対する相対価格の変動が分析された。まず、要素価格／生産物価格比、すなわち干鰯／米、干鰯／大麦、干鰯／綿の価格比は、いずれの場合も、趨勢的には、すなわち近世中後期を全体としてみれば、上昇の傾向にあった。しかるに、農業費用／農業収入比は、18世紀中は、一部の時期を別にすれば、

むしろ不変の趨勢にあった。19世紀に入ると、この比は、天保（1830～43年）中期にかけて急落し、以後幕末にかけては、上昇の傾向にあった。

これらの事実にもとづいて、つぎのような解釈がおこなわれた。すなわち、18世紀をつうじて、干鰯価格は米価に対して相対的に上昇したが、同時に、反当収量の増加にともなって、農業収入も増加したので、干鰯価格の相対的上昇は、マクロ的農業生産の拡大発展に対して、さほどの障害にはならなかった。また、19世紀に入ってから天保期（1830～43年）までは、マクロ的農業生産は、農業費用の相対的低下によって、これまでより有利になった。

注

- 1) 本研究付論Ⅱ節参照。
- 2) 本研究1章1節参照。
- 3) 前掲新保『近世の物価と経済発展』、29～45ページ。
- 4) この点については、前掲宮本『近世日本の市場経済』、7章に詳しい。
- 5) 本研究付論Ⅱ節参照。
- 6) 前掲『近世後期における主要物価の動態』〔増補改訂〕、10ページ。
- 7) なお、近世中後期を、全体として眺めてみると、干鰯価格の変動係数は、米価のそれに比べて、小さかったとも言えないようである。米価は、天明（1781～88年）、天保期（1830～43年）のような激変期をのぞけば、その変動係数は、10パーセント前後であることも多いのに対して、干鰯価格の変動係数は、10～20パーセン

トぐらいのことが多かったからである。しかし、干鰯価格の変動係数は、大麦のそれ（10～30ぐらいのことが多い）に比べれば、小さかったといえよう。

- 8) これらの点については、前掲新保『近世の物価と経済発展』、54～84ページに詳しい。
- 9) この点については、前掲新保『近世の物価と経済発展』、58ページ、新保博・速水融・西川俊作『数量経済史入門 — 日本の前工業化社会 —』（日本評論社、1975年）、221～22ページの叙述に負うところが大きい。
- 10) 前掲『近世後期における主要物価の動態』〔増補改訂〕のうち第7表「江戸日用品小売物価表」収載の白米価格。これは、2章、図2-2においてグラフ化されているものと同じ系列である。ここで詳細な史料批判をおこなう余裕はないが、現時点で、もっとも信頼のおける江戸米価は、本白米価格データであるとして大過ないものと思われる。しかしこのデータは、1818（文政元）年以降についてしか利用することができない。
- 11) 前掲岸『関谷家稻刈覚帳の研究』、69～72ページ。ここでグラフ化したのは、同氏が不動田地4ヵ所の平均として算出したものである。4ヵ所とは、「家の前」、「梅木下」、「薄澤堀」、「日渡」と名付けられた不動田地（一反前後）で、それぞれおおむね上、中、下、下下田とみなしうるといふ。稻刈覚帳に記されているのは、田地毎の年々粃米収量であるが、同氏は、この不動田地4ヵ所の粃米収量の合計を、不動田地4ヵ所の面積（反）の合計で除して、さらに7分の4を乗じることで、粃米収量を玄米反当収量に換算している。なお年によって、3ヵ所平均になっている

場合がある。また、1849（嘉永2）年については、「薄澤堀」の収量しか記載がないので、筆者の判断で、これをこの年の反当収量とした。

- 12) 前掲佐藤『日本稲作の展開と構造』、5-1表 坪刈帳の平均一坪初収量（巻末折込）。ここには、43件の坪刈データが掲げられているが、本章では、長坂上条村、五町田村、小池村、浅尾村、白須村（いずれも現山梨県北巨摩郡）のデータを利用した。これら5ヵ村の坪刈データは、いずれも文政期（1818～29年）から明治期にかけて欠年なく利用できるからである。もっともこれらのデータは、坪当たり初収量であるから、まずこれを300倍して反当収量とし、さらに7分の4（さきの換算に倣った）を乗じることで、玄米反当収量に換算した。しかるのち、5ヵ村の反当収量を平均して、甲斐国巨摩郡反当収量としたものである。が、反当収量は過大に評価されていると考えられる。
- 13) もっとも、甲州巨摩郡反当収量は、天保の飢饉以降、1854（安政元）年ぐらいまでは、文政期（1818～29年）の水準をこえて、着実に増加している。（また、野州那須郡両郷村反当収量の場合も、同飢饉以降、1863（文久3）年ごろまでは、文政期（1818～29年）の水準には達しないものの、やや上昇している。）しかるに播州加古郡野添村反当収量の方は、IV期（1820～54年）は下落の趨勢であったから、関東地方の場合とは（とりわけ甲州の場合に比べると）、やや様子が異なっているといえよう。この点を解釈するためには、人口趨勢を考慮しなければならない。と言うのも、この時期において、近畿は人口が減少するが、関東地方は漸増しているからである。（関山直太郎『近世日本の人口構造 — 徳川時

代の人口調査と人口状態に関する研究 — 』（吉川弘文館、1958年）、141ページ）。

- 14) 前掲新保・斎藤「概説 一九世紀へ」、21ページ。
- 15) 前掲明石「近世後期経済における貨幣、物価、成長：1725-1856」。
- 16) 前掲宮本「物価とマクロ経済の変動」、76ページの図2-4。
- 17) のちの付論で述べるように、当野添村においては、綿は畑で作られていたから、たとえ綿作の進展があったとしても、大麦の生産とは競合しなかったと、一応は考えることができよう。したがって、大麦反当収量の下落は、何らか農業技術上の改善が進まなかったことを推測させるものであろう。
- 18) この点については、岡光夫「耕地改良と乾田牛馬耕 — 明治農法的前提 — 」（永原慶二他編『講座・日本技術の社会史 第1巻 農業・農産加工』（日本評論社、1983年）所収）、同『日本農業技術史 — 近世から近代へ — 』（ミネルヴァ書房、1988年）に詳しい。もっともこれらによっても、当播州、平野部における二毛作率を知ることはできない。
- 19) 指数化後の相対価格というのは、つまるところ、指数化前の相対価格に、基準年における米の麦に対する価格比（この場合でいえば、1より大きい）を乗じたものである。したがって、指数化後の相対価格の系列は、指数化前のそれに比べると、この場合でいえば（つまり1より大きいと）、勾配は、より急になる。たとえば、Ⅱ期（1735～80年）における、麦の米に対する相対価格の低下傾向は、いっそう大きくなっている。
- 20) Ⅳ期（1820～54年）以降幕末にかけて、大麦の相対価格はやや上昇しているが、その上昇の度合いは、この時期に、米や大麦その

ものの価格が急速に上昇したのに比べれば、ゆるやかであったと言えよう。しかも、大麦の相対価格の系列は、以前の時期に比べればかなり安定的に推移している。さらには、大麦の価格の変動係数は、以前の時期に比べれば、相対的にやや小さくなっている。たとえば、天保（1830～43年）中期において、米価の変動係数は、天明期（1781～88年）より大きい。大麦の価格のそれは、天明期（1781～88年）と変わらない。以上の点から、IV期（1820～54年）以降幕末にかけて、大麦の価格は米価に対して連動性を強めたと言えそうである。

- 21) 前掲山崎『近世物価史研究』、274～75ページ、283ページ。
- 22) 前掲山崎『近世物価史研究』、283～84ページ。
- 23) 前掲山崎『近世物価史研究』、363～65ページ。
- 24) なお、前掲岡『日本農業技術史』、176ページには、断片的ながら、1693（元禄6）年から、1867（慶応3）年にかけての実綿（前掲山崎『近世物価史研究』のデータ）と干鰯（『大阪編年史』、『大阪市史』、その他のデータ）の1693（元禄6）年を100とする価格指数が掲げられている。
- 25) なお、宮本又郎氏によれば、幕末期大阪、鯨ノ粕についてではあるが、魚肥の相対価格（対一般物価）は米の相対価格（同）とは逆相関の關係に、綿花（実綿と繰綿）の相対価格（同）とは正相関の關係にあったという（前掲「物価とマクロ経済の変動」、116ページ）。このことは、みかたをかえれば、米価と綿花価格とが同じ方向に動かなかつたということの意味するが、本節ではそのような指摘（相関）を確認することはできなかった。
- 26) 河内国若江郡新家村今西家の場合、1842（天保13）年には、直接

生産費全支出のうち63.1パーセントが肥料代（干鰯、銀1貫760匁と小便、銀460匁）であった（古島敏雄『日本農業史』（岩波書店、1956年）、351ページの第20表）。また、肥料（干鰯）代が、実綿収入の50パーセントをこえる例もいくつか知られている（前掲岡『日本農業技術史』、178ページの表9）。

- 27) なお、従来指摘されているように、幕末期になると、高騰した干鰯にかえて他の安価な肥料がもちいられるようになった（たとえば、前掲岡『日本農業技術史』、180～82ページ）。この点は、当野添村についても確認することができる。すなわち天保期（1830～43年）以降になると、干鰯以外に「とり（取り、とりのひ、佐伯とり、佐伯取り、とりの粉、取粉、いわしどり、鰯とりゆい、干鰯取り）」、「鯿（干かにしん取、干鰯之にしん取）」の価格が記載されていて、これらは干鰯に比べて経済的であったと考えられる。このことは、ここでの文脈に即して言えば、農業費用の相対的低下に貢献したということになる。

付表 3-1 (その1)

年次	米				大麦			
	価格 (石につ き銀匁)	5 カ 年 移 動 変 動 係 数	補 間 価 格 (石につ き銀匁)	同 5 カ 年 移 動 平 均	価 格 (石につ き銀匁)	5 カ 年 移 動 変 動 係 数	補 間 価 格 (石につ き銀匁)	同 5 カ 年 移 動 平 均
1720(享保 5)	50.00		50.00					
1721(6)	70.00		70.00					
22(7)	67.25	27.75	67.25	53.30				
23(8)	42.50	28.57	42.50	52.65	35.50		35.50	
24(9)	36.75	24.08	36.75	47.90	24.00		24.00	
25(10)	46.75	9.44	46.75	42.80			27.58	30.60
1726(11)	46.25	12.05	46.25	41.55			31.17	28.30
27(12)	41.75	13.65	41.75	41.10	34.75		34.75	27.28
28(13)	36.25	14.05	36.25	38.45	24.00		24.00	25.80
29(14)	34.50		34.50	36.80	18.88		18.88	23.86
30(15)	33.50		33.50	36.95			20.19	24.76
1731(16)			38.00	43.15	21.50		21.50	33.06
32(17)	42.50		42.50	43.40	39.25		39.25	37.99
33(18)	67.25		67.25	44.20	65.50		65.50	38.25
34(19)	35.75		35.75	43.57			43.50	41.05
35(20)	37.50		37.50	41.51	21.50		21.50	43.10
1736(元文 1)			34.85	42.26			35.50	42.70
37(2)	32.20		32.20	50.81			49.50	47.40
38(3)	71.00		71.00	58.66	63.50		63.50	54.80
39(4)	78.50	30.29	78.50	68.39	67.00		67.00	59.30
40(5)	76.75	6.52	76.75	76.45	58.50		58.50	60.90
1741(寛保 1)	83.50	10.57	83.50	74.75			58.00	60.37
42(2)	72.50		72.50	73.05	57.50		57.50	59.80
43(3)	62.50		62.50	73.20			60.83	61.60
44(延享 1)			70.00	71.50			64.17	64.90
45(2)	77.50		77.50	69.70	67.50		67.50	61.90
1746(3)	75.00		75.00	70.25	74.50		74.50	57.23
47(4)	63.50	10.42	63.50	68.60	42.50	33.65	42.50	52.10
48(寛延 1)	65.25	8.02	65.25	67.10	37.50	31.92	37.50	47.90
49(2)	61.75	11.96	61.75	62.10	38.50	9.83	38.50	42.20
50(3)	70.00	18.63	70.00	58.20	46.50		46.50	41.05
1751(宝暦 1)	50.00	22.66	50.00	53.45	46.00		46.00	39.05
52(2)	44.00	23.21	44.00	50.00			36.75	36.35
53(3)	41.50	18.34	41.50	48.75	27.50		27.50	33.95
54(4)	44.50	24.37	44.50	52.55	25.00		25.00	35.05
55(5)	63.75	21.67	63.75	55.55	34.50	36.81	34.50	39.10
1756(6)	69.00	15.41	69.00	59.40	51.50	30.76	51.50	41.80
57(7)	59.00	8.28	59.00	61.60	57.00	22.98	57.00	43.80
58(8)	60.75	12.34	60.75	58.70	41.00	25.05	41.00	43.20

米・大麦・綿・干鰯価格の動向

糸帛				干鰯				年次
価格 (銀 匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (銀 匁)	同5カ年 移動平均	価格 (升につ き銀匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (升につ き銀匁)	同5カ年 移動平均	
				0.21		0.21		1720(享保 5)
						0.21		1721(6)
				0.20		0.20	0.21	22(7)
						0.21	0.20	23(8)
				0.21		0.21	0.20	24(9)
						0.20	0.20	25(10)
						0.19	0.19	1726(11)
39.00		39.00		0.18		0.18	0.18	27(12)
39.00		39.00		0.16		0.16	0.17	28(13)
27.00		27.00	37.69	0.18	8.77	0.18	0.17	29(14)
		36.82	41.18	0.15	10.31	0.15	0.17	30(15)
		46.64	46.64	0.19		0.19	0.18	1731(16)
		56.45	56.45	0.19		0.19	0.19	32(17)
		66.27	66.27			0.20	0.20	33(18)
		76.09	76.09			0.20	0.22	34(19)
		85.91	85.91	0.21		0.21	0.25	35(20)
		95.73	95.73			0.28	0.29	1736(元文 1)
		105.55	105.55			0.34	0.36	37(2)
		115.36	115.36	0.41		0.41	0.41	38(3)
		125.18	122.65	0.54		0.54	0.44	39(4)
135.00		135.00	127.42	0.47	11.26	0.47	0.46	40(5)
		132.18	129.65	0.44	9.64	0.44	0.48	1741(寛保 1)
		129.36	129.36	0.43		0.43	0.45	42(2)
		126.54	126.54	0.50		0.50	0.44	43(3)
		123.72	123.72			0.44	0.41	44(延享 1)
		120.90	120.90			0.38	0.38	45(2)
		118.08	118.08			0.31	0.33	1746(3)
		115.26	115.26	0.25		0.25	0.32	47(4)
		112.44	112.44	0.29		0.29	0.32	48(寛延 1)
		109.62	109.62	0.38		0.38	0.33	49(2)
		106.80	106.80			0.37	0.35	50(3)
		103.98	103.98			0.37	0.37	1751(宝暦 1)
		101.16	101.16			0.37	0.35	52(2)
		98.34	98.34	0.36		0.36	0.33	53(3)
		95.52	95.52	0.27		0.27	0.33	54(4)
		92.70	92.70	0.25	21.79	0.25	0.34	55(5)
		89.88	89.88	0.38	21.69	0.38	0.33	1756(6)
		87.06	87.06	0.43	20.89	0.43	0.37	57(7)
		84.24	84.24	0.34	12.25	0.34	0.39	58(8)

付表 3-1 (その2)

年次	米				大麦			
	価格 (石につき き銀匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (石につき き銀匁)	同 5カ年 移動平均	価格 (石につき き銀匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (石につき き銀匁)	同 5カ年 移動平均
1759(宝暦 9)	55.50	11.35	55.50	54.20	35.00		35.00	39.25
60(10)	49.25	12.69	49.25	54.89	31.50		31.50	34.25
1761(11)	46.50	12.78	46.50	54.94			31.75	32.05
62(12)	62.45	12.78	62.45	55.09	32.00		32.00	33.05
63(13)	61.00	11.40	61.00	57.44	30.00		30.00	36.25
64(明和 1)	56.25	3.93	56.25	60.04	40.00	27.45	40.00	41.40
65(2)	61.00	9.27	61.00	61.85	47.50	24.83	47.50	46.20
1766(3)	59.50	10.92	59.50	63.85	57.50	14.12	57.50	50.00
67(4)	71.50	9.54	71.50	67.20	56.00	11.40	56.00	54.50
68(5)	71.00	7.94	71.00	68.45	49.00	11.42	49.00	58.30
69(6)	73.00	4.89	73.00	69.50	62.50	14.05	62.50	56.55
70(7)	67.25	9.09	67.25	66.70	66.50	25.48	66.50	51.95
1771(8)	64.75	11.77	64.75	63.40	48.75	26.55	48.75	51.15
72(安永 1)	57.50	11.74	57.50	58.95	33.00	26.13	33.00	47.10
73(2)	54.50	10.36	54.50	55.70	45.00	13.92	45.00	42.00
74(3)	50.75	6.22	50.75	54.30	42.25	13.32	42.25	41.80
75(4)	51.00	9.41	51.00	55.45	41.00	12.05	41.00	46.20
1776(5)	57.75	9.32	57.75	55.75	47.75	15.13	47.75	44.75
77(6)	63.25	10.63	63.25	55.25	55.00	23.91	55.00	42.00
78(7)	56.00	11.95	56.00	54.65	37.75	27.73	37.75	40.10
79(8)	48.25	12.30	48.25	53.10	28.50	30.73	28.50	36.25
80(9)	48.00	9.36	48.00	52.20	31.50	12.44	31.50	32.15
1781(天明 1)	50.00	25.15	50.00	57.40	28.50	39.10	28.50	37.15
82(2)	58.75	40.94	58.75	71.25	34.50	57.44	34.50	50.85
83(3)	82.00	35.45	82.00	74.90	62.75	49.25	62.75	55.15
84(4)	117.50	30.80	117.50	77.65	97.00	36.37	97.00	62.65
85(5)	66.25	32.22	66.25	91.40	53.00	30.57	53.00	77.25
1786(6)	63.75	35.60	63.75	88.30	66.00		66.00	81.65
87(7)	127.50	35.92	127.50	77.65	107.50		107.50	74.65
88(8)	66.50	38.41	66.50	75.80			84.75	71.90
89(寛政 1)	64.25	39.11	64.25	75.25			62.00	65.80
90(2)	57.00	10.71	57.00	64.85	39.25		39.25	55.75
1791(3)	61.00	15.71	61.00	68.10	35.50		35.50	53.30
92(4)	75.50	16.18	75.50	67.65	57.25	28.82	57.25	52.40
93(5)	82.75	13.43	82.75	69.55	72.50	25.66	72.50	53.85
94(6)	62.00	11.19	62.00	71.75	57.50	19.54	57.50	55.85
95(7)	66.50	11.08	66.50	70.40	46.50	26.09	46.50	51.90
1796(8)	72.00	5.57	72.00	66.95	45.50	15.22	45.50	47.15
97(9)	68.75	5.83	68.75	66.85	37.50	13.85	37.50	46.75

米・大麦・綿・干鰯価格の動向

綿				干鰯				年次
価格 (銀 匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (銀 匁)	同5カ年 移動平均	価格 (升につ き銀匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (升につ き銀匁)	同5カ年 移動平均	
		81.42	81.42	0.44	15.93	0.44	0.37	1759(宝暦 9)
		78.60	78.60	0.34	14.27	0.34	0.36	60(10)
		75.78	75.78	0.31	13.93	0.31	0.37	1761(11)
		72.96	72.96	0.36	7.86	0.36	0.35	62(12)
		70.14	70.14	0.38	13.16	0.38	0.37	63(13)
		67.32	67.98	0.36	11.99	0.36	0.40	64(明和 1)
64.50		64.50	65.89	0.44	11.63	0.44	0.40	65(2)
		65.00	63.86	0.47	11.26	0.47	0.42	1766(3)
65.00		62.50	61.90	0.37	9.10	0.37	0.42	67(4)
		60.00	61.83	0.44	18.38	0.44	0.39	68(5)
57.50		57.50	63.00	0.40	15.95	0.40	0.37	69(6)
		64.17	66.00	0.28	17.83	0.28	0.36	70(7)
		70.83	66.00	0.37	15.82	0.37	0.33	1771(8)
77.50		77.50	67.40	0.32	15.82	0.32	0.33	72(安永 1)
60.00		60.00	67.07	0.29	13.71	0.29	0.35	73(2)
64.50	10.22	64.50	66.40	0.40	25.55	0.40	0.39	74(3)
62.50	16.56	62.50	59.40	0.38	22.70	0.38	0.41	75(4)
		67.50	55.40	0.54		0.54	0.43	1776(5)
42.50	23.96	42.50	55.70	0.45		0.45	0.41	77(6)
40.00	23.60	40.00	54.95			0.38	0.42	78(7)
66.00		66.00	59.33	0.30		0.30	0.40	79(8)
58.75		58.75	74.83	0.41		0.41	0.40	80(9)
		89.38	90.83	0.45	16.67	0.45	0.42	1781(天明 1)
120.00		120.00	101.63	0.45	5.74	0.45	0.45	82(2)
		120.00	113.63	0.47	6.28	0.47	0.48	83(3)
120.00		120.00	119.25	0.48	7.80	0.48	0.49	84(4)
		118.75	118.50	0.53		0.53	0.51	85(5)
		117.50	117.50	0.54		0.54	0.53	1786(6)
		116.25	114.00			0.56	0.55	87(7)
115.00		115.00	108.25	0.57		0.57	0.55	88(8)
		102.50	100.25			0.55	0.55	89(寛政 1)
		90.00	90.00	0.53		0.53	0.53	90(2)
		77.50	80.45	0.57		0.57	0.51	1791(3)
65.00		65.00	72.95	0.44	9.61	0.44	0.50	92(4)
67.25		67.25	70.95	0.48	9.97	0.48	0.49	93(5)
65.00	9.54	65.00	68.45	0.50		0.50	0.47	94(6)
80.00	9.43	80.00	68.55	0.47		0.47	0.49	95(7)
		65.00	67.88			0.49	0.48	1796(8)
65.50		65.50	67.33	0.51		0.51	0.50	97(9)

付表 3-1 (その3)

年次	米				大麦			
	価格 (石につき き銀匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (石につき き銀匁)	同5カ年 移動平均	価格 (石につき き銀匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (石につき き銀匁)	同5カ年 移動平均
1798(寛政10)	65.50		65.50	67.55	48.75		48.75	47.87
99(11)	61.50		61.50	68.85	55.50		55.50	48.51
1800(12)			70.00	68.70			52.10	50.07
1801(享和 1)	78.50		78.50	67.10			48.70	48.70
02(2)			68.00	66.20			45.30	45.30
03(3)	57.50		57.50	63.70			41.90	44.28
04(文化 1)	57.00		57.00	59.60	38.50		38.50	42.84
05(2)			57.50	58.90	47.00		47.00	42.08
1806(3)	58.00		58.00	62.90	41.50	9.33	41.50	43.30
07(4)	64.50		64.50	66.60	41.50	6.79	41.50	44.50
08(5)	77.50	12.83	77.50	67.40	48.00	11.46	48.00	45.90
09(6)	75.50		75.50	68.15	44.50	9.90	44.50	47.20
10(7)	61.50		61.50	67.65	54.00	7.29	54.00	49.10
1811(8)			61.75	64.60	48.00	13.56	48.00	47.00
12(9)			62.00	62.00	51.00	13.04	51.00	47.85
13(10)			62.25	65.40	37.50		37.50	46.38
14(11)	62.50		62.50	65.65	48.75		48.75	45.68
15(12)	78.50		78.50	66.75			46.63	45.08
1816(13)	63.00	13.10	63.00	65.35	44.50		44.50	46.08
17(14)	67.50		67.50	63.63	48.00		48.00	44.03
18(文政 1)	55.25		55.25	58.43	42.50		42.50	41.60
19(2)			53.88	56.73			38.50	38.95
20(3)	52.50		52.50	55.23	34.50		34.50	36.35
1821(4)	54.50		54.50	57.88	31.25		31.25	36.45
22(5)	60.00	10.63	60.00	58.60	35.00	14.66	35.00	37.45
23(6)	68.50	8.67	68.50	60.10	43.00	14.29	43.00	39.05
24(7)	57.50		57.50	61.45	43.50		43.50	42.20
25(8)	60.00		60.00	61.95	42.50		42.50	45.50
1826(9)			61.25	62.75			47.00	47.00
27(10)	62.50		62.50	66.50	51.50		51.50	46.80
28(11)	72.50		72.50	69.60	50.50		50.50	46.70
29(12)	76.25	12.18	76.25	74.95	42.50	11.55	42.50	48.15
30(天保 1)	75.50	8.39	75.50	76.90	42.00	13.93	42.00	49.30
1831(2)	88.00	12.80	88.00	81.85	54.25	22.59	54.25	53.45
32(3)	72.25	13.71	72.25	86.05	57.25	28.30	57.25	62.60
33(4)	97.25	12.23	97.25	87.30	71.25	21.65	71.25	65.70
34(5)	97.25	15.67	97.25	91.40	88.25	20.06	88.25	71.55
35(6)	81.75	47.88	81.75	121.95	57.50	45.03	57.50	93.10
1836(7)	108.50	47.44	108.50	122.50	83.50	45.33	83.50	92.85

米・大麦・綿・干鰯価格の動向

綿				干鰯				年次
価格 (銀 匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (銀 匁)	同5カ年 移動平均	価格 (升につ き銀匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (升につ き銀匁)	同5カ年 移動平均	
		63.89	63.47	0.43		0.43	0.53	1798(寛政10)
		62.28	62.28	0.61		0.61	0.54	99(11)
		60.67	60.67			0.59	0.56	1800(12)
		59.06	59.06	0.57		0.57	0.60	1801(享和 1)
		57.44	57.44			0.61	0.56	02(2)
		55.83	55.83	0.65		0.65	0.53	03(3)
		54.22	54.22	0.37		0.37	0.52	04(文化 1)
		52.61	52.87	0.47	20.17	0.47	0.49	05(2)
51.00		51.00	51.77	0.50	14.23	0.50	0.47	1806(3)
		50.67	50.92	0.48	9.25	0.48	0.51	07(4)
		50.33	50.33	0.56	9.25	0.56	0.51	08(5)
		50.00	50.00	0.57	13.65	0.57	0.50	09(6)
		49.67	49.67	0.47	14.39	0.47	0.51	10(7)
		49.33	49.33	0.41	14.79	0.41	0.52	1811(8)
		49.00	49.00	0.57		0.57	0.51	12(9)
		48.67	48.67	0.57		0.57	0.53	13(10)
		48.33	48.33			0.56	0.56	14(11)
		48.00	48.00	0.54		0.54	0.56	15(12)
		47.67	47.67	0.54		0.54	0.51	1816(13)
		47.33	47.30	0.57	28.75	0.57	0.46	17(14)
47.00		47.00	48.10	0.35	31.26	0.35	0.42	18(文政 1)
46.50		46.50	50.07	0.28	28.89	0.28	0.38	19(2)
		52.00	52.10	0.34	10.13	0.34	0.34	20(3)
57.50		57.50	55.10	0.37	16.39	0.37	0.36	1821(4)
57.50		57.50	59.10	0.36	13.99	0.36	0.36	22(5)
		62.00	62.90	0.44	26.41	0.44	0.41	23(6)
		66.50	66.50	0.31		0.31	0.44	24(7)
		71.00	71.00	0.59		0.59	0.46	25(8)
		75.50	75.50			0.52	0.48	1826(9)
		80.00	79.10	0.44		0.44	0.51	27(10)
84.50		84.50	81.80	0.53		0.53	0.48	28(11)
		84.50	85.55			0.48	0.46	29(12)
84.50		84.50	87.12	0.43		0.43	0.44	30(天保 1)
94.25		94.25	86.50			0.40	0.43	1831(2)
		87.83	84.60	0.36		0.36	0.44	32(3)
		81.42	91.03			0.46	0.47	33(4)
75.00		75.00	103.85	0.56		0.56	0.48	34(5)
		116.67	126.28	0.56		0.56	0.55	35(6)
		158.33	144.50	0.47	14.13	0.47	0.57	1836(7)

付表 3-1 (その4)

年次	米				大麦			
	価格 (石につき き銀匁)	5 カ年 移動変 動係数	補間価格 (石につき き銀匁)	同 5 カ年 移動平均	価格 (石につき き銀匁)	5 カ年 移動変 動係数	補間価格 (石につき き銀匁)	同 5 カ年 移動平均
1837(天保 8)	225.00	49.71	225.00	120.05	165.00	51.24	165.00	87.20
38(9)	100.00	53.51	100.00	116.90	70.00	54.15	70.00	85.45
39(10)	85.00	59.76	85.00	109.85	60.00	59.06	60.00	80.75
40(11)	66.00	17.54	66.00	78.80	48.75	13.29	48.75	58.75
1841(12)	73.25	9.73	73.25	73.30	60.00	9.76	60.00	57.35
42(13)	69.75	6.65	69.75	72.10	55.00	12.37	55.00	54.85
43(14)	72.50	8.39	72.50	76.05	63.00	13.92	63.00	54.25
44(弘化 1)	79.00		79.00	78.60	47.50	13.29	47.50	52.25
45(2)	85.75		85.75	81.90	45.75	14.56	45.75	53.25
1846(3)			86.00	84.75	50.00	23.26	50.00	56.10
47(4)	86.25		86.25	87.15	60.00	20.97	60.00	59.60
48(嘉永 1)	86.75		86.75	95.00	77.25	21.09	77.25	67.70
49(2)	91.00	18.04	91.00	101.05	65.00	20.22	65.00	77.40
50(3)	125.00	18.22	125.00	100.90	86.25	18.16	86.25	78.50
1851(4)	116.25	17.30	116.25	101.80	98.50	20.41	98.50	76.05
52(5)	85.50		85.50	102.82	65.50	18.02	65.50	79.05
53(6)	91.25		91.25	98.02	65.00		65.00	78.89
54(安政 1)			96.11	95.93	80.00		80.00	77.38
55(2)			100.97	100.97			85.47	83.56
1856(3)			105.83	105.83			90.94	90.94
57(4)			110.69	110.69			96.41	96.41
58(5)			115.56	115.56			101.88	101.88
59(6)			120.42	120.42			107.34	107.34
60(万延 1)			125.28	125.28			112.81	112.81
1861(文久 1)			130.14	137.67			118.28	120.44
62(2)	135.00		135.00		123.75		123.75	
63(3)	177.50		177.50		140.00		140.00	
64(元治 1)								
65(慶応 1)								
1866(2)								
67(3)								

(出所)「御月見日記」(兵庫県加古郡播磨町役場所蔵)。

米・大麦・綿・干鰯価格の動向

糸帛				干鰯				年次
価格 (銀 匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (銀 匁)	同5カ年 移動平均	価格 (升につ き銀匁)	5カ年 移動変 動係数	補間価格 (升につ き銀匁)	同5カ年 移動平均	
200.00		200.00	158.50	0.69		0.69	0.57	1837(天保 8)
		172.50	158.67	0.57		0.57	0.57	38(9)
		145.00	145.00			0.57	0.60	39(10)
		117.50	124.50	0.57		0.57	0.59	40(11)
90.00		90.00	112.00			0.60	0.60	1841(12)
97.50		97.50	103.50			0.62	0.63	42(13)
110.00		110.00	100.60	0.65		0.65	0.67	43(14)
102.50		102.50	103.30			0.71	0.69	44(弘化 1)
		103.00	104.60	0.77		0.77	0.71	45(2)
		103.50	103.50			0.73	0.71	1846(3)
		104.00	104.00			0.69	0.69	47(4)
		104.50	110.40			0.65	0.65	48(嘉永 1)
105.00		105.00	117.45			0.62	0.62	49(2)
135.00		135.00	125.15			0.58	0.58	50(3)
		138.75	133.50			0.54	0.57	1851(4)
		142.50	142.50	0.50		0.50	0.60	52(5)
		146.25	146.25	0.61		0.61	0.66	53(6)
		150.00	150.00			0.76	0.76	54(安政 1)
		153.75	153.75			0.91	0.91	55(2)
		157.50	157.50			1.06	1.06	1856(3)
		161.25	161.25			1.21	1.21	57(4)
		165.00	165.00			1.36	1.36	58(5)
		168.75	168.75			1.51	1.51	59(6)
		172.50	172.50			1.66	1.66	60(万延 1)
		176.25	175.50			1.81	1.81	1861(文久 1)
180.00		180.00				1.96		62(2)
180.00		180.00		2.11		2.11		63(3)
								64(元治 1)
								65(慶応 1)
								1866(2)
								67(3)

付表 3-2 (その1) 米・大麦・綿の作況と反当収量の動向

年次	米						大麦						綿					
	作況 評点	同 補間	同 5年 移動 平均	反収 (反に つき 石)	同 推定 反収	同 補間	同 5年 移動 平均	作況 評点	同 補間	同 5年 移動 平均	反収 (反に つき 石)	同 推定 反収	同 補間	同 5年 移動 平均	作況 評点	同 補間	同 5年 移動 平均	反収 (反に つき 貫)
1720(享保 5)	4	4.00			2.40	2.40								3	3.00			
1721(6)	1	1.00			1.50	1.50		2	2.00			1.20	1.20	1	1.00			
22(7)	4	4.00	2.80		2.40	2.40	2.04	4	4.00			3.00	3.00			2.50	2.30	
23(8)	4	4.00	2.40		2.40	2.40	1.88	2	2.00	2.70		1.20	1.20	1.83	4	4.00	2.10	
24(9)	1	1.00	2.60		1.50	1.50	1.90		2.50	3.00			1.65	2.10	1	1.00	2.20	
25(10)	2	2.00	2.60		1.60	1.60	1.90		3.00	3.00			2.10	2.10	2	2.00	1.90	
1726(11)	2	2.00	2.40		1.60	1.60	1.86		3.50	3.40			2.55	2.46		1.50	1.30	
27(12)	4	4.00	2.60		2.40	2.40	1.88	4	4.00	3.30		3.00	3.00	2.37	1	1.00	1.30	
28(13)	3	3.00	3.00		2.20	2.20	2.04	4	4.00	3.30		3.00	3.00	2.40	1	1.00	1.10	
29(14)	2	2.00	3.00	1.60	1.60	1.60	2.04	2	2.00	3.10		1.20	1.20	2.24		1.00	1.00	
30(15)	4	4.00	2.60		2.40	2.40	1.88	3	3.00	2.70		2.25	2.25	1.88	1	1.00	1.40	
1731(16)	2	2.00	2.80		1.60	1.60	1.92		2.50	2.30			1.73	1.52	1	1.00	1.60	
32(17)	2	2.00	3.00		1.60	1.60	2.04	2	2.00	2.40		1.20	1.20	1.62	3	3.00	1.60	
33(18)	4	4.00	3.00		2.40	2.40	2.04	2	2.00	2.40		1.20	1.20	1.62		2.00	1.60	
34(19)	3	3.00	3.00		2.20	2.20	2.04		2.50	2.50			1.73	1.73	1	1.00	1.60	
35(20)	4	4.00	3.40		2.40	2.40	2.20	3	3.00	2.70		2.25	2.25	1.94	1	1.00	1.80	
1736(元文 1)	2	2.00	2.80		1.60	1.60	2.02		3.00	2.70			2.25	1.94	1	1.00	1.80	
37(2)	4	4.00	2.80		2.40	2.40	2.02	3	3.00	2.60		2.25	2.25	1.83	4	4.00	2.00	
38(3)	1	1.00	2.40		1.50	1.50	1.86	2	2.00	2.40		1.20	1.20	1.62	2	2.00	2.20	
39(4)	3	3.00	2.40		2.20	2.20	1.86	2	2.00	2.00		1.20	1.20	1.43		2.00	2.60	
40(5)	2	2.00	2.00		1.60	1.60	1.70	2	2.00	1.80		1.20	1.20	1.34	2	2.00	2.40	
1741(寛保 1)	2	2.00	2.20		1.60	1.60	1.72	1	1.00	2.00		1.30	1.30	1.55	3	3.00	2.60	
42(2)		2.00	2.00			1.60	1.60		2.00	1.80			1.78	1.57		3.00	2.40	
43(3)	2	2.00	1.80	1.60	1.60	1.60	1.58	3	3.00	1.80		2.25	2.25	1.57	3	3.00	2.80	
44(延享 1)	2	2.00	1.80		1.60	1.60	1.58	1	1.00	2.00		1.30	1.30	1.55	1	1.00	2.60	
45(2)	1	1.00	1.80	1.50	1.50	1.50	1.58	2	2.00	2.40		1.20	1.20	1.79	4	4.00	2.30	
1746(3)	2	2.00	1.60		1.60	1.60	1.57	2	2.00	2.40		1.20	1.20	1.79	2	2.00	1.90	
47(4)	2	2.00	1.60	1.60	1.60	1.60	1.58	4	4.00	2.60	3.00	3.00	3.00	1.77		1.50	2.10	
48(寛延 1)	1	1.00	1.60		1.56	1.56	1.60	3	3.00	2.40		2.25	2.25	1.79	1	1.00	1.65	
49(2)	2	2.00	2.00		1.64	1.64	1.76	2	2.00	2.60		1.20	1.20	2.00	2	2.00	1.55	
50(3)	1	1.00	1.80	1.60	1.60	1.60	1.72	1	1.00	2.00	1.30	1.30	1.30	1.64		1.75	1.50	
1751(宝暦 1)	4	4.00	2.40		2.40	2.40	1.89	3	3.00	2.00		2.25	2.25	1.64		1.50	1.50	
52(2)	1	1.00	2.20	1.40	1.40	1.40	1.84	1	1.00	2.13	1.20	1.20	1.20	1.78		1.25	1.30	
53(3)	4	4.00	2.80		2.40	2.40	2.00	3	3.00	2.40		2.25	2.25	1.83	1	1.00	1.15	
54(4)	1	1.00	2.40	1.40	1.40	1.40	1.88		2.67	2.20			1.90	1.62		1.00	1.05	
55(5)	4	4.00	3.00	2.40	2.40	2.40	2.10		2.33	2.20			1.55	1.60		1.00	1.03	
1756(6)	2	2.00	2.80	1.80	1.80	1.80	2.06	2	2.00	2.00		1.20	1.20	1.39	1	1.00	1.08	
57(7)	4	4.00	3.00	2.50	2.50	2.50	2.14	1	1.00	2.07	1.10	1.10	1.10	1.46		1.13	1.15	
58(8)	3	3.00	2.60		2.20	2.20	2.02	2	2.00	2.20	1.20	1.20	1.20	1.55		1.25	1.25	

付表 3-2 (その2) 米・大麦・綿の作況と反当収量の動向

年次	米							大麦							綿			
	作況 評点	同 補間	同 5年 移動 平均	反収 (反に つき 石)	同 推定 反収	同 補間	同 5年 移動 平均	作況 評点	同 補間	同 5年 移動 平均	反収 (反に つき 石)	同 推定 反収	同 補間	同 5年 移動 平均	作況 評点	同 補間	同 5年 移動 平均	反収 (反に つき 石)
1759(宝暦 9)	2	2.00	2.70		1.80	1.80	2.06	3	3.00	2.36	2.25	2.25	2.25	1.68		1.38	1.38	
60(10)	2	2.00	2.50		1.80	1.80	2.00	3	3.00	2.68	2.00	2.00	2.00	1.79		1.50	1.50	
1761(11)		2.50	2.50			2.00	2.01		2.80	2.76			1.83	1.85		1.63	1.63	
62(12)	3	3.00	2.70	2.20	2.20	2.20	2.11		2.60	2.60			1.67	1.67		1.75	1.75	
63(13)		3.00	2.90			2.25	2.22		2.40	2.40			1.50	1.50		1.88	1.65	
64(明和 1)	3	3.00	3.00		2.30	2.30	2.30		2.20	2.44			1.33	1.47	2	2.00	2.13	
65(2)	3	3.00	3.00		2.35	2.35	2.30	2	2.00	2.72		1.17	1.17	1.58	1	1.00	2.51	
1766(3)	3	3.00	2.90	2.40	2.40	2.40	2.25		3.00	2.64			1.68	1.51	4	4.00	2.80	30.00
67(4)	3	3.00	2.70	2.20	2.20	2.20	2.15	4	4.00	2.60		2.20	2.20	1.47		3.67	3.00	
68(5)		2.50	2.50			2.00	2.04	2	2.00	2.73		1.15	1.15	1.52		3.33	3.20	
69(6)	2	2.00	2.30		1.80	1.80	1.92	2	2.00	2.80	1.15	1.15	1.15	1.53	3	3.00	2.60	
70(7)		2.00	2.10			1.80	1.84		2.67	2.80			1.43	1.49		2.00	2.07	
1771(8)	2	2.00	2.20		1.80	1.80	1.88		3.33	3.00			1.72	1.59	1	1.00	2.20	
72(安永 1)	2	2.00	2.40	1.80	1.80	1.80	1.97	4	4.00	3.00	2.00	2.00	2.00	1.61	1	1.00	2.40	
73(2)	3	3.00	2.60	2.20	2.20	2.20	2.07		3.00	3.07			1.63	1.64	4	4.00	2.60	
74(3)	3	3.00	2.80		2.25	2.25	2.17	2	2.00	2.60	1.25	1.25	1.25	1.47	4	4.00	3.20	
75(4)	3	3.00	3.20	2.30	2.30	2.30	2.34	3	3.00	2.40	1.60	1.60	1.60	1.39	3	3.00	3.60	
1776(5)	3	3.00	3.20		2.29	2.29	2.36	1	1.00	2.40	0.85	0.85	0.85	1.38	4	4.00	3.20	
77(6)	4	4.00	3.20		2.68	2.68	2.36	3	3.00	2.60		1.60	1.60	1.44		3.00	2.80	
78(7)	3	3.00	3.00		2.27	2.27	2.28	3	3.00	2.60	1.60	1.60	1.60	1.43	2	2.00	3.00	
79(8)	3	3.00	2.80		2.26	2.26	2.21	3	3.00	3.00		1.57	1.57	1.56	2	2.00	2.70	
80(9)	2	2.00	2.40		1.91	1.91	2.06	3	3.00	3.00		1.54	1.54	1.54	4	4.00	2.30	
1781(天明 1)	2	2.00	2.20		1.93	1.93	2.00	3	3.00	3.00		1.51	1.51	1.51		2.50	2.10	
82(2)	2	2.00	2.20		1.94	1.94	1.99		3.00	2.93			1.48	1.46	1	1.00	1.90	
83(3)	2	2.00	2.60		1.96	1.96	2.16	3	3.00	2.80		1.45	1.45	1.40		1.00	1.50	
84(4)	3	3.00	2.60	2.20	2.20	2.20	2.17		2.67	2.60			1.34	1.33	1	1.00	1.60	
85(5)	4	4.00	2.80	2.75	2.75	2.75	2.23		2.33	2.20			1.24	1.20		2.00	2.20	
1786(6)	2	2.00	2.80	2.00	2.00	2.00	2.24	2	2.00	2.20		1.13	1.13	1.17		3.00	2.40	
87(7)	3	3.00	2.60		2.23	2.23	2.20	1	1.00	2.20		0.81	0.81	1.14	4	4.00	2.68	
88(8)	2	2.00	2.20		2.01	2.01	2.06	3	3.00	2.20	1.30	1.30	1.30	1.13	2	2.00	2.84	
89(寛政 1)		2.00	2.20			2.02	2.06		2.67	2.20			1.23	1.12		2.40	2.88	
90(2)		2.00	1.80			2.02	1.89		2.33	2.80			1.16	1.31		2.80	2.80	
1791(3)	2	2.00	2.20		2.03	2.03	1.98	2	2.00	2.40		1.09	1.09	1.21		3.20	3.20	
92(4)	1	1.00	2.20	1.35	1.35	1.35	1.99	4	4.00	2.27	1.80	1.80	1.80	1.18		3.60	3.32	
93(5)	4	4.00	2.30	2.50	2.50	2.50	2.02	1	1.00	2.40		0.80	0.80	1.21	4	4.00	3.16	
94(6)	2	2.00	2.50		2.05	2.05	2.07		2.00	2.50			1.05	1.22	3	3.00	3.12	
95(7)		2.50	2.70			2.17	2.22	3	3.00	2.10		1.30	1.30	1.07	2	2.00	3.02	
1796(8)	3	3.00	2.50	2.30	2.30	2.30	2.19		2.50	2.50			1.16	1.17	3	3.00	2.86	
97(9)	2	2.00	2.50		2.07	2.07	2.19	2	2.00	2.70		1.03	1.03	1.22		3.10	2.92	

付表 3-2 (その3) 米・大麦・綿の作況と反当収量の動向

年次	米						大麦						綿					
	作況 評点	同 補間	同 5 年 移動 平均	反収 (反に つき 石)	同 推定 反収	同 補間	同 5 年 移動 平均	作況 評点	同 補間	同 5 年 移動 平均	反収 (反に つき 石)	同 推定 反収	同 補間	同 5 年 移動 平均	作況 評点	同 補間	同 5 年 移動 平均	反収 (反に つき 貫)
1798(寛政10)	3	3.00	2.40		2.35	2.35	2.18	3	3.00	2.66		1.30	1.30	1.20		3.20	3.20	
99(11)	2	2.00	2.20		2.08	2.08	2.14	3	3.00	2.68		1.30	1.30	1.20		3.30	3.30	
1800(12)		2.00	2.20			2.09	2.14		2.80	2.76			1.23	1.22		3.40	3.40	
1801(享和 1)		2.00	2.00			2.09	2.09		2.60	2.60			1.16	1.16		3.50	3.50	
02(2)		2.00	2.00			2.10	2.10		2.40	2.40			1.10	1.10		3.60	3.60	
03(3)	2	2.00	2.20		2.10	2.10	2.17		2.20	2.24			1.03	1.04		3.70	3.70	
04(文化 1)	2	2.00	2.60		2.11	2.11	2.30	2	2.00	2.32		0.96	0.96	1.07		3.80	3.80	
05(2)		3.00	3.00			2.43	2.41	2	2.00	2.04	0.95	0.95	0.95	1.00		3.90	3.88	
1806(3)	4	4.00	3.40	2.75	2.75	2.75	2.51	3	3.00	1.90	1.30	1.30	1.30	0.97	4	4.00	3.94	21.00
07(4)		4.00	3.80			2.67	2.59	1	1.00	1.90	0.75	0.75	0.75	0.98		4.00	3.98	
08(5)		4.00	3.90			2.58	2.58		1.50	2.00			0.88	1.01		4.00	4.00	
09(6)	4	4.00	3.70	2.50	2.50	2.50	2.50		2.00	2.00			1.01	1.01	4	4.00	4.00	28.50
10(7)		3.50	3.40			2.42	2.42		2.50	2.40			1.14	1.11		4.00	4.00	
1811(8)		3.00	3.00			2.33	2.33	3	3.00	2.70		1.27	1.27	1.18		4.00	4.00	
12(9)		2.50	3.00			2.25	2.38		3.00	2.90			1.26	1.23		4.00	4.00	
13(10)	2	2.00	3.10		2.17	2.17	2.45		3.00	3.00			1.25	1.25		4.00	4.00	
14(11)	4	4.00	3.30		2.72	2.72	2.54		3.00	3.00			1.24	1.24		4.00	4.00	
15(12)		4.00	3.60			2.77	2.66		3.00	3.00			1.24	1.24		4.00	4.00	
1816(13)		4.00	4.00			2.81	2.81		3.00	3.00			1.23	1.23		4.00	4.00	
17(14)		4.00	3.93			2.86	2.85		3.00	3.00			1.22	1.22		4.00	4.00	
18(文政 1)	4	4.00	3.80	2.90	2.90	2.90	2.88		3.00	3.00			1.22	1.22	4	4.00	4.00	32.00
19(2)		3.67	3.60			2.92	2.91		3.00	3.00			1.21	1.21		4.00	4.00	
20(3)		3.33	3.60			2.93	2.96		3.00	3.00			1.20	1.20		4.00	4.00	
1821(4)	3	3.00	3.40		2.95	2.95	2.98		3.00	3.00			1.20	1.20		4.00	3.80	
22(5)	4	4.00	3.47	3.10	3.10	3.10	3.02		3.00	3.00			1.19	1.19	4	4.00	3.53	30.00
23(6)	3	3.00	3.45	3.00	3.00	3.00	3.00		3.00	3.00			1.18	1.18	3	3.00	3.20	27.00
24(7)	4	4.00	3.35		3.10	3.10	2.93	3	3.00	3.00		1.18	1.18	1.18		2.67	2.80	
25(8)		3.25	2.90			2.85	2.78		3.00	3.00			1.17	1.17		2.33	2.30	
1826(9)		2.50	2.50			2.60	2.60		3.00	3.00			1.16	1.16	2	2.00	1.90	20.00
27(10)		1.75	2.50			2.35	2.60		3.00	3.00			1.16	1.16		1.50	1.87	
28(11)	1	1.00	2.25	2.10	2.10	2.10	2.48		3.00	3.00			1.15	1.15	1	1.00	2.20	13.50
29(12)	4	4.00	2.35		3.10	3.10	2.56	3	3.00	3.00		1.14	1.14	1.14		2.50	2.40	
30(天保 1)	2	2.00	2.55		2.27	2.27	2.66	3	3.00	3.00		1.13	1.13	1.13	4	4.00	2.63	37.00
1831(2)	3	3.00	2.85		3.00	3.00	2.77	3	3.00	3.00		1.13	1.13	1.13	3	3.00	2.90	32.50
32(3)		2.75	2.50			2.83	2.64		3.00	3.00			1.12	1.12		2.67	2.80	
33(4)		2.50	2.50			2.65	2.65		3.00	3.00			1.11	1.11		2.33	2.20	
34(5)		2.25	2.30			2.48	2.51		3.00	3.00			1.11	1.11	2	2.00	1.88	22.50
35(6)	2	2.00	2.15	2.30	2.30	2.30	2.40	3	3.00	3.00	1.10	1.10	1.10	1.10	1	1.00	1.71	12.50
1836(7)	2	2.00	2.05		2.28	2.28	2.32	3	3.00	3.00		1.10	1.10	1.10		1.40	1.68	

付表 3-2 (その4) 米・大麦・綿の作況と反当収量の動向

年次	米						大麦						綿					
	作況 評点	同 補間	同 5年 移動 平均	反収 (反に つき 石)	同 推定 反収	同 補間	同 5年 移動 平均	作況 評点	同 補間	同 5年 移動 平均	反収 (反に つき 石)	同 推定 反収	同 補間	同 5年 移動 平均	作況 評点	同 補間	同 5年 移動 平均	反収 (反に つき 石)
1837(天保 8)		2.00	2.20			2.27	2.42	3.00	3.00				1.10	1.10		1.80	1.80	
38(9)	2	2.00	2.40		2.25	2.25	2.56	3.00	2.80				1.10	1.07		2.20	2.20	
39(10)	3	3.00	2.40		3.00	3.00	2.54	3	3.00	2.40		1.10	1.10	1.00		2.60	2.57	
40(11)	3	3.00	2.53		3.00	3.00	2.59		2.00	2.00			0.93	0.93	3	3.00	2.91	
1841(12)	2	2.00	2.80	2.20	2.20	2.20	2.70	1	1.00	1.90	0.75	0.75	0.75	0.94		3.25	3.22	
42(13)		2.67	3.00			2.50	2.72	1	1.00	2.10		0.75	0.75	1.05		3.50	3.50	
43(14)		3.33	3.00			2.80	2.65		2.50	2.30			1.19	1.12		3.75	3.50	
44(弘化 1)	4	4.00	3.00		3.10	3.10	2.65	4	4.00	2.50		1.63	1.63	1.16	4	4.00	3.25	
45(2)		3.00	2.67			2.65	2.57		3.00	2.70			1.29	1.20		3.00	2.75	
1846(3)	2	2.00	2.30		2.20	2.20	2.44	2	2.00	2.60		0.95	0.95	1.15	2	2.00	2.50	
47(4)	1	1.00	1.90		2.10	2.10	2.26	2	2.00	2.40		0.95	0.95	1.05	1	1.00	2.50	
48(嘉永 1)		1.50	1.50			2.15	2.15	2	2.00	2.30		0.95	0.95	1.00		2.50	2.30	
49(2)	2	2.00	1.70	2.20	2.20	2.20	2.31	3	3.00	2.30		1.10	1.10	1.00	4	4.00	2.50	55.00
50(3)	1	1.00	2.00		2.10	2.10	2.41		2.50	2.50			1.03	1.06	2	2.00		
1851(4)	3	3.00	2.10		3.00	3.00	2.42	2	2.00	2.90	0.95	0.95	0.95	1.19	3	3.00		
52(5)		2.50				2.60			3.00				1.28					
53(6)	2	2.00			2.20	2.20		4	4.00		1.60	1.60	1.60					
54(安政 1)																		
55(2)																		
1856(3)																		
57(4)																		
58(5)																		
59(6)																		
60(万延 1)																		
1861(文久 1)																		
62(2)																		
63(3)																		
64(元治 1)																		
65(慶応 1)																		
1866(2)																		
67(3)																		

(出所)「御月見日記」(兵庫県加古郡播磨町役場所蔵)。なお、作況評点および推定反収については本文参照。

付表 3-3 (その1) 関東地方における米価と反当収量の動向

年次	米 価	米の反当収量 (反につき石)								
	江戸白米価格 (石につき銀 匁) 5カ年 移動平均	野州 那須郡 両郷 村	同 5カ年 移動平 均	甲州 巨摩郡 長坂上 条村	同 五町田 村	同 小池 村	同 浅尾 村	同 白須 村	甲州 巨摩郡 平均 反収	同 5カ年 移動平 均
1810(文化 7)		1.56				1.89	2.57			
1811(8)		1.44				1.89	2.64			
12(9)		1.63	1.51			1.94	2.54			
13(10)		1.48	1.49		2.45	1.68	2.64	2.42		
14(11)		1.44	1.51		2.14	2.19	2.50			
15(12)		1.45	1.49		2.50	2.09	2.49	2.25		
1816(13)		1.54	1.58	1.58	2.21	1.73	1.87	2.25	1.93	
17(14)		1.52	1.68	2.11	1.73	1.77	1.85	2.31	1.95	
18(文政 1)		1.95	1.74	2.11	2.45	2.14	2.66	2.79	2.43	2.13
19(2)		1.93	1.75	1.70	2.23	2.19	2.14	3.02	2.26	2.19
20(3)	63.6	1.77	1.80	1.70	2.25	1.78	2.02	2.59	2.07	2.20
1821(4)	65.2	1.58	1.76	1.85	1.32	2.61	2.71	2.85	2.27	2.13
22(5)	68.1	1.76	1.72	1.53	1.71	1.68	2.23	2.71	1.97	2.10
23(6)	71.5	1.77	1.61	1.94	2.45	1.73	2.07	2.28	2.09	1.98
24(7)	75.5	1.72	1.67	2.02	2.23	1.49	2.19	2.55	2.10	2.07
25(8)	74.5	1.24	1.62	1.23	1.47	1.37	1.58	1.73	1.48	2.15
1826(9)	74.9	1.84	1.59	2.45	2.57	2.74	2.98	2.67	2.68	2.18
27(10)	79.1	1.54	1.59	1.99	2.28	2.26	2.38	3.14	2.41	2.23
28(11)	81.6	1.63	1.65	1.94	2.40	2.35	2.35	2.16	2.24	2.37
29(12)	81.8	1.72	1.60	2.16	2.16	2.33	2.38	2.74	2.36	2.31
30(天保 1)	83.7	1.50	1.56	1.68	1.99	2.37	2.16	2.54	2.15	2.33
1831(2)	89.7	1.60	1.41	1.70	2.54	2.14	2.78	2.90	2.41	2.20
32(3)	97.4	1.33	1.39	2.02	2.74	2.35	2.45	2.97	2.51	2.25
33(4)	101.7	0.88	1.40	1.23	1.17	1.73	1.87	1.99	1.60	2.17
34(5)	115.4	1.62	1.15	2.38	2.16	2.86	2.73	2.83	2.59	1.89
35(6)	142.2	1.56	1.20	1.42	1.53	1.53	2.28	1.89	1.73	1.79
1836(7)	150.2	0.35	1.27	0.89	1.01	1.05	0.98	1.08	1.00	1.79
37(8)	148.1	1.58	1.30	1.95	1.95	1.90	2.28	2.14	2.05	1.79
38(9)	144.1	1.25	1.32	1.58	1.78	1.68	0.98	1.82	1.57	1.82
39(10)	130.7	1.75	1.54	2.37	2.57	2.52	2.59	2.90	2.59	2.10
40(11)	105.7	1.66	1.54	1.65	1.85	1.68	1.97	2.45	1.92	2.13
1841(12)	93.6	1.47	1.52	2.21	2.49	1.59	2.59	2.91	2.36	2.22
42(13)	88.9	1.55	1.51	1.53	2.35	2.11	2.67	2.37	2.20	2.21
43(14)	93.6	1.17	1.44	1.71	1.87	1.92	2.37	2.16	2.01	2.23
44(弘化 1)	99.4	1.72	1.49	2.38	2.85	2.11	2.71	2.81	2.57	2.26

付表 3-3 (その2) 関東地方における米価と反当収量の動向

年次	米 価	米の反当収量 (反につき石)								
	江戸白米価格 (石につき銀 匁) 5カ年 移動平均	野州 那須郡 両郷 村	同 5カ年 移動平 均	甲州 巨摩郡 長坂上 条村	同 五町田 村	同 小池 村	同 浅尾 村	同 白須 村	甲州 巨摩郡 平均 反収	同 5カ年 移動平 均
1845(弘化 2)	102.7	1.30	1.48	1.85	2.09	1.75	2.13	2.11	1.99	2.28
1846(3)	103.2	1.70	1.58	2.26	2.98	2.07	2.73	2.67	2.54	2.43
47(4)	103.6	1.49	1.54	1.90	2.50	2.47	2.38	2.33	2.32	2.38
48(嘉永 1)	107.3	1.71	1.54	2.45	3.05	2.45	2.95	2.66	2.71	2.47
49(2)	108.8	1.52	1.49	1.80	2.33	2.42	2.62	2.61	2.36	2.52
50(3)	108.3	1.30	1.51	3.19	1.99	2.28	2.04	2.54	2.41	2.58
1851(4)	114.6	1.45	1.52	2.19	2.79	3.36	2.73	2.97	2.81	2.68
52(5)	117.6	1.55	1.54	2.49	2.97	2.25	2.47	2.90	2.61	2.67
53(6)	112.5	1.78	1.60	2.90	3.74	3.33	3.03	3.15	3.23	2.73
54(安政 1)	107.7	1.64	1.62	2.09	2.21	1.95	2.47	2.74	2.29	2.74
55(2)	109.6	1.56	1.63	2.64	3.19	2.21	2.61	2.91	2.71	2.74
1856(3)	112.0	1.59	1.60	2.43	3.46	2.93	3.00	2.54	2.87	2.50
57(4)	116.9	1.58	1.62	1.97	3.43	2.19	2.61	2.69	2.58	2.56
58(5)	127.3	1.64	1.66	1.92	2.38	1.85	2.09	1.90	2.03	2.52
59(6)	145.9	1.71	1.69	2.21	3.14	2.31	2.45	2.97	2.62	2.48
60(万延 1)	153.1	1.77	1.67	2.19	2.76	2.37	2.45	2.81	2.52	2.53
1861(文久 1)	155.1	1.74	1.72	2.37	2.69	2.83	2.64	2.85	2.67	2.63
62(2)	158.1	1.50	1.72	2.31	3.67	2.62	2.66	2.85	2.82	2.58
63(3)	183.1	1.86	1.75	2.11	3.14	2.47	2.66	2.33	2.54	2.52
64(元治 1)	243.1	1.71	1.67	2.26	2.64	1.83	2.59	2.47	2.36	2.32
65(慶応 1)	318.4	1.92	1.68	2.26	2.64	1.71	2.43	1.97	2.20	2.28
1866(2)	377.1	1.37	1.61	1.47	1.61	1.70	2.11	1.59	1.70	2.22
67(3)	459.0	1.55	1.53	2.18	2.98	2.23	3.02	2.61	2.60	2.03
68(明治 1)	514.2	1.50	1.49	2.14	2.57	1.82	2.30	2.28	2.22	2.01
69(2)	508.6	1.31	1.62	1.53	1.42	1.13	1.53	1.53	1.43	2.25
70(3)		1.72	1.67	1.97	2.07	1.58	2.45	2.49	2.11	2.21
1871(4)		2.00	1.75	2.95	2.88	2.49	2.98	3.21	2.90	2.30
72(5)		1.81		2.43	2.66	2.16	2.47	2.13	2.37	
73(6)		1.90		2.69	2.42	2.38	2.74	3.19	2.68	

(出所) 三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』[増補改訂] (東京大学出版会、1989年)、岸英次『関谷家稻刈覚帳の研究 — 一農家における文化七年以降の水田生産力の変遷 — 』(農林省農業総合研究所、1947年)、佐藤常雄『日本稲作の展開と構造 — 坪刈帳の史的分析 — 』(吉川弘文館、1987年)。

付表 3-4 (その1)

年次	価格指数 (1818年=1.00)												米に対する相対価格 (1818年=1.)					
	米			大麦			綿			干鰯			大麦/米			綿/米		
	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均
1720(享保 5)	0.90	0.90								0.60	0.60							
1721(6)	1.27	1.27									0.59							
22(7)	1.22	1.22	0.96							0.57	0.57	0.59						
23(8)	0.77	0.77	0.95	0.84	0.84						0.59	0.58	1.09	1.09				
24(9)	0.67	0.67	0.87	0.56	0.56					0.60	0.60	0.57	0.85	0.85				
25(10)	0.85	0.85	0.77		0.65	0.72					0.57	0.56		0.77	0.93			
1726(11)	0.84	0.84	0.75		0.73	0.67					0.54	0.53		0.88	0.89			
27(12)	0.76	0.76	0.74	0.82	0.82	0.64	0.83	0.83		0.51	0.51	0.51	1.08	1.08	0.86	1.10	1.10	
28(13)	0.66	0.66	0.70	0.56	0.56	0.61	0.83	0.83		0.44	0.44	0.49	0.86	0.86	0.86	1.26	1.26	
29(14)	0.62	0.62	0.67	0.44	0.44	0.56	0.57	0.57	0.80	0.50	0.50	0.49	0.71	0.71	0.83	0.92	0.92	
30(15)	0.61	0.61	0.67		0.48	0.58				0.78	0.88	0.44	0.44	0.49		0.78	0.86	1.29
1731(16)		0.69	0.78	0.51	0.51	0.78				0.99	0.99	0.53	0.53	0.52		0.74	0.94	1.44
32(17)	0.77	0.77	0.79	0.92	0.92	0.89				1.20	1.20	0.55	0.55	0.53	1.20	1.20	1.11	1.56
33(18)	1.22	1.22	0.80	1.54	1.54	0.90				1.41	1.41	0.57	0.57	0.57	1.27	1.27	1.11	1.16
34(19)	0.65	0.65	0.79		1.02	0.97				1.62	1.62		0.58	0.62		1.58	1.22	2.50
35(20)	0.68	0.68	0.75	0.51	0.51	1.01				1.83	1.83	0.60	0.60	0.70	0.75	0.75	1.38	2.69
1736(元文 1)		0.63	0.76		0.84	1.00				2.04	2.04		0.79	0.82		1.32	1.36	3.23
37(2)	0.58	0.58	0.92		1.16	1.12				2.25	2.25		0.98	1.01		2.00	1.27	3.85
38(3)	1.29	1.29	1.06	1.49	1.49	1.29				2.45	2.45	1.16	1.16	1.16	1.16	1.16	1.32	1.91
39(4)	1.42	1.42	1.24	1.58	1.58	1.40				2.66	2.61	1.54	1.54	1.25	1.11	1.11	1.23	1.87
40(5)	1.39	1.39	1.38	1.38	1.38	1.43	2.87	2.87	2.71	1.33	1.33	1.30	0.99	0.99	1.04	2.07	2.07	
1741(寛保 1)	1.51	1.51	1.35		1.36	1.42				2.81	2.76	1.27	1.27	1.35		0.90	1.06	1.86
42(2)	1.31	1.31	1.32	1.35	1.35	1.41				2.75	2.75	1.21	1.21	1.30	1.03	1.03	1.08	2.10
43(3)	1.13	1.13	1.32		1.43	1.45				2.69	2.69	1.43	1.43	1.24		1.27	1.10	2.38
44(延享 1)		1.27	1.29		1.51	1.53				2.63	2.63		1.25	1.17		1.19	1.18	2.08
45(2)	1.40	1.40	1.26	1.59	1.59	1.46				2.57	2.57		1.07	1.07	1.13	1.13	1.15	1.83
1746(3)	1.36	1.36	1.27	1.75	1.75	1.35				2.51	2.51		0.89	0.95	1.29	1.29	1.05	1.85
47(4)	1.15	1.15	1.24	1.00	1.00	1.23				2.45	2.45	0.71	0.71	0.91	0.87	0.87	0.97	2.13
48(寛延 1)	1.18	1.18	1.21	0.88	0.88	1.13				2.39	2.39	0.81	0.81	0.91	0.75	0.75	0.92	2.03
49(2)	1.12	1.12	1.12	0.91	0.91	0.99				2.33	2.33	1.08	1.08	0.94	0.81	0.81	0.90	2.09
50(3)	1.27	1.27	1.05	1.09	1.09	0.97				2.27	2.27		1.07	1.01	0.86	0.86	0.94	1.79
1751(宝暦 1)	0.90	0.90	0.97	1.08	1.08	0.92				2.21	2.21		1.06	1.06	1.20	1.20	0.96	2.44
52(2)	0.80	0.80	0.90		0.86	0.86				2.15	2.15		1.05	1.00		1.09	0.95	2.70
53(3)	0.75	0.75	0.88	0.65	0.65	0.80				2.09	2.09	1.04	1.04	0.93	0.86	0.86	0.92	2.79
54(4)	0.81	0.81	0.95	0.59	0.59	0.82				2.03	2.03	0.78	0.78	0.93	0.73	0.73	0.87	2.52
55(5)	1.15	1.15	1.01	0.81	0.81	0.92				1.97	1.97	0.71	0.71	0.96	0.70	0.70	0.90	1.71
1756(6)	1.25	1.25	1.08	1.21	1.21	0.98				1.91	1.91	1.08	1.08	0.95	0.97	0.97	0.91	1.53
57(7)	1.07	1.07	1.11	1.34	1.34	1.03				1.85	1.85	1.21	1.21	1.05	1.26	1.26	0.93	1.73
58(8)	1.10	1.10	1.06	0.96	0.96	1.02				1.79	1.79	0.98	0.98	1.10	0.88	0.88	0.95	1.63

相 対 価 格 の 動 向

00)	要素価格/生産物価格比 (1818年=1.00)											農業費用/農業収入比						年 次
	干鰯/米			干鰯/大麦			干鰯/綿			農業収入			農業費用		費用/収入			
	同5 カ 年 移 動 平 均	各 年 値	補 間	同5 カ 年 移 動 平 均	各 年 値	補 間	同5 カ 年 移 動 平 均	各 年 値	補 間	同5 カ 年 移 動 平 均	米 価 × 反 収 (銀 匁)	同 指 数 (18 18 年 = 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	干 鰯 価 格 指 数 (1818 年 = 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	指 数 (18 18 年 = 1.00)	同5 カ 年 移 動 平 均	
	0.66	0.66								120.0	74.9		60.0		0.80		1720(享保5)	
		0.46								105.0	65.5		58.5		0.89		1721(6)	
	0.47	0.47	0.65							161.4	100.7	67.8	57.0	58.8	0.57	0.98	22(7)	
		0.76	0.65		0.70					102.0	63.7	62.2	58.5	58.2	0.92	1.07	23(8)	
	0.90	0.90	0.69	1.06	1.06					55.1	34.4	58.3	60.0	57.3	1.74	1.12	24(9)	
		0.67	0.73		0.88	0.80				74.8	46.7	50.7	57.0	56.1	1.22	1.17	25(10)	
		0.64	0.71		0.74	0.82				74.0	46.2	47.9	53.9	53.2	1.17	1.17	1726(11)	
	0.67	0.67	0.69	0.62	0.62	0.83	0.61	0.61		100.2	62.5	47.9	50.9	51.3	0.81	1.11	27(12)	
	0.67	0.67	0.70	0.78	0.78	0.84	0.53	0.53		79.8	49.8	48.6	44.2	48.7	0.89	1.04	28(13)	
1.20	0.81	0.81	0.73	1.14	1.14	0.90	0.88	0.88	0.62	55.2	34.5	47.0	50.4	48.5	1.46	1.09	29(14)	
1.30	0.72	0.72	0.74		0.92	0.90		0.56	0.59	80.4	50.2	43.0	43.8	49.3	0.87	1.18	30(15)	
		0.77	0.70	1.05	1.05	0.81		0.54	0.57	60.8	37.9	53.2	53.3	51.8	1.40	1.12	1731(16)	
1.59	0.71	0.71	0.72	0.59	0.59	0.70		0.46	0.46	68.0	42.4	56.1	54.8	53.3	1.29	1.06	32(17)	
1.87		0.46	0.75		0.37	0.75		0.40	0.42	161.4	100.7	57.3	56.5	56.6	0.56	1.10	33(18)	
2.23		0.90	0.84		0.57	0.73		0.36	0.39	78.7	49.1	56.6	58.3	61.7	1.19	1.27	34(19)	
2.69	0.88	0.88	1.03	1.19	1.19	0.78		0.33	0.38	90.0	56.2	57.8	60.0	70.2	1.07	1.42	35(20)	
		1.25	1.12		0.94	0.86		0.39	0.40	55.8	34.8	51.0	78.8	82.2	2.26	1.66	1736(元文1)	
2.71		1.67	1.16		0.84	0.94		0.43	0.44	77.3	48.2	62.7	97.6	101.3	2.02	1.71	37(2)	
2.59	0.91	0.91	1.17	0.78	0.78	0.90		0.47	0.47	106.5	66.5	66.8	116.3	115.9	1.75	1.84	38(3)	
2.31	1.08	1.08	1.09	0.98	0.98	0.90		0.58	0.48	172.7	107.8	76.5	154.1	125.4	1.43	1.69	39(4)	
1.96	0.95	0.95	0.94	0.96	0.96	0.91	0.46	0.46	0.48	122.8	76.6	81.3	132.6	130.2	1.73	1.62	40(5)	
	0.84	0.84	1.01		0.93	0.95		0.45	0.49	133.6	83.4	80.5	126.7	135.4	1.52	1.73	1741(寛保1)	
2.10	0.92	0.92	0.99	0.90	0.90	0.92		0.44	0.47	116.0	72.4	72.9	121.3	129.5	1.68	1.80	42(2)	
2.05	1.26	1.26	0.95		1.00	0.86		0.53	0.46	100.0	62.4	72.1	142.5	124.4	2.28	1.75	43(3)	
2.05		0.98	0.92		0.83	0.78		0.47	0.44	112.0	69.9	70.4	124.7	116.9	1.78	1.68	44(延享1)	
2.06		0.76	0.86		0.67	0.74		0.42	0.41	116.3	72.6	68.6	106.9	106.9	1.47	1.57	45(2)	
	0.66	0.74		0.51	0.73			0.35	0.37	120.0	74.9	68.9	89.1	94.7	1.19	1.37	1746(3)	
1.99	0.62	0.62	0.74	0.71	0.71	0.80		0.29	0.37	101.6	63.4	67.6	71.3	91.2	1.12	1.35	47(4)	
1.98	0.69	0.69	0.75	0.92	0.92	0.86		0.34	0.38	101.8	63.5	67.0	81.4	91.2	1.28	1.36	48(寛延1)	
2.10	0.96	0.96	0.86	1.19	1.19	0.95		0.46	0.41	101.5	63.4	67.0	107.5	94.5	1.70	1.41	49(2)	
2.21		0.84	0.99		0.97	1.05		0.47	0.45	112.0	69.9	62.0	106.6	101.2	1.52	1.73	50(3)	
	1.17	1.13		0.98	1.19			0.48	0.48	120.0	74.9	61.8	105.6	105.6	1.41	1.80	1751(宝暦1)	
2.45		1.31	1.13		1.21	1.22		0.49	0.46	61.6	38.4	56.9	104.6	99.7	2.72	1.87	52(2)	
2.43	1.38	1.38	1.09	1.60	1.60	1.20		0.50	0.44	99.6	62.2	62.0	103.6	92.6	1.67	1.71	53(3)	
2.25	0.97	0.97	1.03	1.33	1.33	1.18		0.38	0.46	62.3	38.9	62.5	78.1	93.0	2.01	1.71	54(4)	
2.06	0.62	0.62	0.99	0.88	0.88	1.12		0.36	0.49	153.0	95.5	73.2	71.3	96.4	0.75	1.43	55(5)	
	0.86	0.86	0.90	0.89	0.89	1.00		0.56	0.50	124.2	77.5	77.5	107.5	95.3	1.39	1.33	1756(6)	
1.67	1.14	1.14	0.95	0.90	0.90	1.05		0.65	0.57	147.5	92.1	82.2	121.3	105.0	1.32	1.33	57(7)	
1.70	0.89	0.89	1.05	1.02	1.02	1.13		0.55	0.61	133.7	83.4	74.1	98.3	110.1	1.18	1.53	58(8)	

付表 3-4 (その2)

年次	価格指数 (1818年=1.00)												米に対する相対価格 (1818年=1.)						
	米			大麦			綿			干鰯			大麦/米			綿/米			
	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	同5カ年移動平均	
1759(宝暦 9)	1.00	1.00	0.98	0.82	0.82	0.92				1.73	1.73	1.27	1.27	1.06	0.82	0.82	0.93		1.72
60(10)	0.89	0.89	0.99	0.74	0.74	0.81				1.67	1.67	0.97	0.97	1.03	0.83	0.83	0.82		1.88
1761(11)	0.84	0.84	0.99		0.75	0.75				1.61	1.61	0.88	0.88	1.04		0.89	0.77		1.92
62(12)	1.13	1.13	1.00	0.75	0.75	0.78				1.55	1.55	1.04	1.04	1.00	0.67	0.67	0.79		1.37
63(13)	1.10	1.10	1.04	0.71	0.71	0.85				1.49	1.49	1.08	1.08	1.06	0.64	0.64	0.83		1.35
64(明和 1)	1.02	1.02	1.09	0.94	0.94	0.97				1.43	1.45	1.04	1.04	1.15	0.92	0.92	0.90		1.41
65(2)	1.10	1.10	1.12	1.12	1.12	1.09	1.37	1.37	1.40	1.27	1.27	1.15	1.15	1.01	1.01	0.97	1.24	1.24	1.24
1766(3)	1.08	1.08	1.16	1.35	1.35	1.18	1.38	1.38	1.36	1.33	1.33	1.19	1.26	1.26	1.02	1.02	1.02	1.28	1.28
67(4)	1.29	1.29	1.22	1.32	1.32	1.28				1.33	1.32	1.06	1.06	1.21	1.02	1.02	1.06		1.03
68(5)	1.29	1.29	1.24	1.15	1.15	1.37				1.28	1.32	1.27	1.27	1.12	0.90	0.90	1.11		0.99
69(6)	1.32	1.32	1.26	1.47	1.47	1.33	1.22	1.22	1.34	1.14	1.14	1.06	1.11	1.11	1.06	0.93	0.93	0.93	0.93
70(7)	1.22	1.22	1.21	1.56	1.56	1.22				1.37	1.40	0.80	0.80	1.03	1.29	1.29	1.00		1.12
1771(8)	1.17	1.17	1.15	1.15	1.15	1.20				1.51	1.40	1.06	1.06	0.94	0.98	0.98	1.04		1.29
72(安永 1)	1.04	1.04	1.07	0.78	0.78	1.11	1.65	1.65	1.43	0.90	0.90	0.94	0.75	0.75	1.03	1.03	1.58	1.58	1.58
73(2)	0.99	0.99	1.01	1.06	1.06	0.99	1.28	1.28	1.43	0.81	0.81	1.00	1.07	1.07	0.99	0.99	1.29	1.29	1.29
74(3)	0.92	0.92	0.98	0.99	0.99	0.98	1.37	1.37	1.41	1.14	1.14	1.10	1.08	1.08	1.00	1.49	1.49	1.49	1.49
75(4)	0.92	0.92	1.00	0.96	0.96	1.09	1.33	1.33	1.26	1.10	1.10	1.18	1.05	1.05	1.08	1.44	1.44	1.44	1.44
1776(5)	1.05	1.05	1.01	1.12	1.12	1.05	1.44	1.44	1.18	1.54	1.54	1.23	1.07	1.07	1.04	1.37	1.37	1.37	1.37
77(6)	1.14	1.14	1.00	1.29	1.29	0.99	0.90	0.90	1.19	1.30	1.30	1.17	1.13	1.13	0.98	0.79	0.79	0.79	0.79
78(7)	1.01	1.01	0.99	0.89	0.89	0.94	0.85	0.85	1.17		1.07	1.18	0.88	0.88	0.94	0.84	0.84	0.84	0.84
79(8)	0.87	0.87	0.96	0.67	0.67	0.85	1.40	1.40	1.26	0.85	0.85	1.14	0.77	0.77	0.87	1.61	1.61	1.61	1.61
80(9)	0.87	0.87	0.94	0.74	0.74	0.76	1.25	1.25	1.59	1.16	1.16	1.14	0.85	0.85	0.80	1.44	1.44	1.44	1.44
1781(天明 1)	0.90	0.90	1.04	0.67	0.67	0.87				1.90	1.93	1.30	1.30	1.19	0.74	0.74	0.82		2.10
82(2)	1.06	1.06	1.29	0.81	0.81	1.20	2.55	2.55	2.16	1.30	1.30	1.29	0.76	0.76	0.89	2.40	2.40	2.40	2.40
83(3)	1.48	1.48	1.36	1.48	1.48	1.30				2.55	2.42	1.33	1.33	1.35	0.99	0.99	0.92		1.72
84(4)	2.13	2.13	1.41	2.28	2.28	1.47	2.55	2.55	2.54	1.36	1.36	1.40	1.07	1.07	1.04	1.20	1.20	1.20	1.20
85(5)	1.20	1.20	1.65	1.25	1.25	1.82				2.53	2.52	1.50	1.50	1.46	1.04	1.04	1.11		2.11
1786(6)	1.15	1.15	1.60	1.55	1.55	1.92				2.50	2.50	1.54	1.54	1.52	1.35	1.35	1.24		2.17
87(7)	2.31	2.31	1.41	2.53	2.53	1.76				2.47	2.43		1.58	1.56	1.10	1.10	1.28		1.07
88(8)	1.20	1.20	1.37		1.99	1.69	2.45	2.45	2.30	1.63	1.63	1.56		1.66	1.25	2.03	2.03	2.03	2.03
89(寛政 1)	1.16	1.16	1.36		1.46	1.55				2.18	2.13		1.56	1.58	1.25	1.13			1.88
90(2)	1.03	1.03	1.17	0.92	0.92	1.31				1.91	1.91	1.50	1.50	1.52	0.90	0.90	1.11		1.86
1791(3)	1.10	1.10	1.23	0.84	0.84	1.25				1.65	1.71	1.63	1.63	1.46	0.76	0.76	1.01		1.49
92(4)	1.37	1.37	1.22	1.35	1.35	1.23	1.38	1.38	1.55	1.27	1.27	1.44	0.99	0.99	1.00	1.01	1.01	1.01	1.01
93(5)	1.50	1.50	1.26	1.71	1.71	1.27	1.43	1.43	1.51	1.36	1.36	1.40	1.14	1.14	1.00	0.96	0.96	0.96	0.96
94(6)	1.12	1.12	1.30	1.35	1.35	1.31	1.38	1.38	1.46	1.43	1.43	1.35	1.21	1.21	1.01	1.23	1.23	1.23	1.23
95(7)	1.20	1.20	1.27	1.09	1.09	1.22	1.70	1.70	1.46	1.33	1.33	1.39	0.91	0.91	0.96	1.41	1.41	1.41	1.41
1796(8)	1.30	1.30	1.21	1.07	1.07	1.11	1.38	1.38	1.44		1.39	1.37	0.82	0.82	0.92	1.06	1.06	1.06	1.06
97(9)	1.24	1.24	1.21	0.88	0.88	1.10	1.39	1.39	1.43	1.46	1.46	1.43	0.71	0.71	0.92	1.12	1.12	1.12	1.12

相 対 価 格 の 動 向

00)	要素価格／生産物価格比 (1818年=1.00)											農業費用／農業収入比						年 次
	干 籾 / 米			干 籾 / 大 麦			干 籾 / 綿			農 業 収 入			農 業 費 用		費 用 / 収 入			
	同 5 カ 年 移 動 平 均	各 年 値	補 間	同 5 カ 年 移 動 平 均	各 年 値	補 間	同 5 カ 年 移 動 平 均	各 年 値	補 間	同 5 カ 年 移 動 平 均	米 価 × 反 収 (銀 匁)	同 指 数 (18 18 年 = 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	干 籾 価 格 指 数 (1818 年 = 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	指 数 (18 18 年 = 1.00)	同 5 カ 年 移 動 平 均	
1.78	1.26	1.26	1.08	1.54	1.54	1.19		0.73	0.61	99.9	62.3	70.2	126.7	106.1	2.03	1.56	1759(宝暦 9)	
1.70	1.08	1.08	1.04	1.30	1.30	1.28		0.58	0.61	88.7	55.3	69.0	96.6	102.6	1.75	1.54	60(10)	
1.65	1.04	1.04	1.06		1.17	1.38		0.54	0.65	93.0	58.0	69.4	87.7	104.4	1.51	1.55	1761(11)	
1.58	0.92	0.92	1.01	1.38	1.38	1.30		0.67	0.65	137.4	85.7	73.1	103.6	99.8	1.21	1.40	62(12)	
1.46	0.97	0.97	1.02	1.52	1.52	1.26		0.72	0.72	137.3	85.7	79.9	107.5	105.8	1.26	1.33	63(13)	
1.33	1.02	1.02	1.06	1.10	1.10	1.22		0.72	0.80	129.4	80.7	86.1	103.6	114.8	1.28	1.33	64(明和 1)	
1.26	1.15	1.15	1.04	1.13	1.13	1.11	0.92	0.92	0.82	143.4	89.5	88.6	126.7	115.2	1.42	1.30	65(2)	
1.19	1.23	1.23	1.04	0.98	0.98	1.02	0.96	0.96	0.88	142.8	89.1	89.2	132.6	119.0	1.49	1.34	1766(3)	
1.09	0.82	0.82	1.01	0.80	0.80	0.96		0.79	0.92	157.3	98.2	89.5	105.6	121.1	1.08	1.36	67(4)	
1.07	0.99	0.99	0.91	1.10	1.10	0.83		0.99	0.85	142.0	88.6	86.7	126.7	111.8	1.43	1.29	68(5)	
1.07	0.86	0.86	0.84	0.78	0.78	0.82	0.93	0.93	0.80	131.4	82.0	83.4	114.0	106.4	1.39	1.28	69(6)	
1.18	0.66	0.66	0.86	0.51	0.51	0.89		0.59	0.75	121.1	75.6	76.7	80.3	103.4	1.06	1.35	70(7)	
1.24	0.90	0.90	0.82	0.92	0.92	0.83		0.70	0.68	116.6	72.7	73.9	105.6	94.3	1.45	1.28	1771(8)	
1.36	0.87	0.87	0.90	1.17	1.17	0.90	0.55	0.55	0.66	103.5	64.6	71.8	90.5	94.3	1.40	1.32	72(安永 1)	
1.42	0.83	0.83	1.00	0.77	0.77	1.03	0.64	0.64	0.71	119.9	74.8	71.3	81.4	100.2	1.09	1.41	73(2)	
1.44	1.24	1.24	1.12	1.15	1.15	1.12	0.83	0.83	0.78	114.2	71.3	73.3	114.0	109.9	1.60	1.49	74(3)	
1.28	1.19	1.19	1.17	1.14	1.14	1.08	0.82	0.82	0.96	117.3	73.2	81.5	109.6	117.7	1.50	1.46	75(4)	
1.19	1.47	1.47	1.22	1.37	1.37	1.17	1.07	1.07	1.08	132.2	82.5	82.4	154.1	122.9	1.87	1.51	1776(5)	
1.21	1.13	1.13	1.17	1.00	1.00	1.20	1.43	1.43	1.04	169.4	105.7	81.7	129.5	117.1	1.23	1.44	77(6)	
1.21		1.06	1.20		1.21	1.28		1.26	1.06	126.9	79.2	78.5	107.3	118.5	1.35	1.55	78(7)	
1.36	0.97	0.97	1.19	1.27	1.27	1.40	0.61	0.61	0.98	108.8	67.9	74.1	85.1	113.6	1.25	1.60	79(8)	
1.68	1.34	1.34	1.20	1.57	1.57	1.51	0.93	0.93	0.80	91.9	57.3	67.2	116.3	113.6	2.03	1.72	80(9)	
1.85	1.43	1.43	1.17	1.93	1.93	1.45		0.68	0.65	96.4	60.2	71.4	129.5	118.6	2.15	1.72	1781(天明 1)	
1.77	1.22	1.22	1.10	1.60	1.60	1.32	0.51	0.51	0.63	114.1	71.2	90.1	129.5	128.7	1.82	1.63	82(2)	
1.91	0.89	0.89	1.09	0.90	0.90	1.24		0.52	0.57	160.5	100.2	101.3	132.6	135.5	1.32	1.49	83(3)	
1.92	0.64	0.64	1.07	0.59	0.59	1.06	0.53	0.53	0.55	258.5	161.3	105.2	135.7	140.4	0.84	1.45	84(4)	
1.65	1.25	1.25	0.96	1.20	1.20	0.86		0.59	0.58	182.2	113.7	126.4	150.0	146.2	1.32	1.26	85(5)	
1.72	1.34	1.34	1.05	0.99	0.99	0.85		0.62	0.61	127.5	79.6	123.0	154.1	152.2	1.94	1.39	1786(6)	
1.85		0.69	1.19		0.63	0.94		0.64	0.65	283.7	177.1	107.0	158.5	156.4	0.89	1.61	87(7)	
1.80	1.35	1.35	1.23		0.82	1.03	0.67	0.67	0.68	133.8	83.5	98.6	162.9	156.4	1.95	1.76	88(8)	
1.67		1.35	1.26		1.07	1.22		0.72	0.76	129.7	80.9	98.2	156.4	158.1	1.93	1.79	89(寛政 1)	
1.65	1.45	1.45	1.31	1.62	1.62	1.28		0.78	0.81	115.4	72.0	75.5	150.0	151.8	2.08	2.01	90(2)	
1.44	1.48	1.48	1.22	1.95	1.95	1.28		0.99	0.87	123.9	77.3	84.6	162.9	146.3	2.11	1.83	1791(3)	
1.31	0.93	0.93	1.21	0.94	0.94	1.27	0.92	0.92	0.93	101.9	63.6	84.3	126.7	143.5	1.99	1.81	92(4)	
1.22	0.91	0.91	1.14	0.80	0.80	1.19	0.95	0.95	0.93	206.9	129.1	87.9	135.7	140.1	1.05	1.68	93(5)	
1.14	1.27	1.27	1.05	1.05	1.05	1.06	1.03	1.03	0.94	127.0	79.3	93.1	142.5	135.4	1.80	1.53	94(6)	
1.16	1.10	1.10	1.10	1.21	1.21	1.20	0.78	0.78	0.96	144.6	90.3	98.1	132.6	139.3	1.47	1.46	95(7)	
1.19		1.07	1.13		1.30	1.26		1.01	0.96	165.6	103.4	91.5	139.4	136.9	1.35	1.51	1796(8)	
1.19	1.17	1.17	1.19	1.66	1.66	1.31	1.05	1.05	1.01	142.1	88.7	91.7	146.2	142.9	1.65	1.58	97(9)	

付表 3-4 (その3)

年次	価格指数 (1818年=1.00)												米に対する相対価格 (1818年=1.)					
	米			大麦			綿			干鰯			大麦/米		綿/米			
	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	同5カ年移動平均	各年値	補間	
1798(寛政10)	1.19	1.19	1.22	1.15	1.15	1.13			1.36	1.35	1.24	1.24	1.50	0.97	0.97	0.93		1.15
99(11)	1.11	1.11	1.25	1.31	1.31	1.14			1.33	1.33	1.73	1.73	1.55	1.17	1.17	0.92		1.19
1800(12)		1.27	1.24		1.23	1.18			1.29	1.29		1.68	1.60		0.97	0.96		1.02
1801(享和 1)	1.42	1.42	1.21		1.15	1.15			1.26	1.26	1.63	1.63	1.72		0.81	0.95		0.88
02(2)		1.23	1.20		1.07	1.07			1.22	1.22		1.73	1.59		0.87	0.89		0.99
03(3)	1.04	1.04	1.15		0.99	1.04			1.19	1.19	1.84	1.84	1.52		0.95	0.91		1.14
04(文化 1)	1.03	1.03	1.08	0.91	0.91	1.01			1.15	1.15	1.06	1.06	1.48	0.88	0.88	0.94		1.12
05(2)		1.04	1.07	1.11	1.11	0.99			1.12	1.12	1.33	1.33	1.40		1.06	0.93		1.08
1806(3)	1.05	1.05	1.14	0.98	0.98	1.02	1.09		1.09	1.10	1.43	1.43	1.35	0.93	0.93	0.90	1.03	1.03
07(4)	1.17	1.17	1.21	0.98	0.98	1.05			1.08	1.08	1.36	1.36	1.46	0.84	0.84	0.88		0.92
08(5)	1.40	1.40	1.22	1.13	1.13	1.08			1.07	1.07	1.58	1.58	1.46	0.81	0.81	0.90		0.76
09(6)	1.37	1.37	1.23	1.05	1.05	1.11			1.06	1.06	1.63	1.63	1.41	0.77	0.77	0.91		0.78
10(7)	1.11	1.11	1.22	1.27	1.27	1.16			1.06	1.06	1.33	1.33	1.47	1.14	1.14	0.96		0.95
1811(8)		1.12	1.17	1.13	1.13	1.11			1.05	1.05	1.16	1.16	1.47		1.01	0.95		0.94
12(9)		1.12	1.12	1.20	1.20	1.13			1.04	1.04	1.63	1.63	1.47		1.07	1.00		0.93
13(10)		1.13	1.18	0.88	0.88	1.09			1.04	1.04	1.63	1.63	1.51		0.78	0.93		0.92
14(11)	1.13	1.13	1.19	1.15	1.15	1.07			1.03	1.03		1.58	1.58	1.01	1.01	0.91		0.91
15(12)	1.42	1.42	1.21		1.10	1.06			1.02	1.02	1.54	1.54	1.58		0.77	0.88		0.72
1816(13)	1.14	1.14	1.18	1.05	1.05	1.08			1.01	1.01	1.54	1.54	1.46	0.92	0.92	0.93		0.89
17(14)	1.22	1.22	1.15	1.13	1.13	1.04			1.01	1.01	1.63	1.63	1.30	0.92	0.92	0.91		0.82
18(文政 1)	1.00	1.00	1.06	1.00	1.00	0.98	1.00		1.00	1.02	1.00	1.00	1.19	1.00	1.00	0.93	1.00	1.00
19(2)		0.98	1.03		0.91	0.92	0.99		0.99	1.07	0.80	0.80	1.09		0.93	0.89		1.01
20(3)	0.95	0.95	1.00	0.81	0.81	0.86			1.11	1.11	0.97	0.97	0.97	0.85	0.85	0.86		1.16
1821(4)	0.99	0.99	1.05	0.74	0.74	0.86	1.22		1.22	1.17	1.06	1.06	1.02	0.75	0.75	0.82	1.24	1.24
22(5)	1.09	1.09	1.06	0.82	0.82	0.88	1.22		1.22	1.26	1.02	1.02	1.04	0.76	0.76	0.83	1.13	1.13
23(6)	1.24	1.24	1.09	1.01	1.01	0.92			1.32	1.34	1.27	1.27	1.18	0.82	0.82	0.84		1.06
24(7)	1.04	1.04	1.11	1.02	1.02	0.99			1.41	1.41	0.88	0.88	1.26	0.98	0.98	0.90		1.36
25(8)	1.09	1.09	1.12	1.00	1.00	1.07			1.51	1.51	1.68	1.68	1.31	0.92	0.92	0.96		1.39
1826(9)		1.11	1.14		1.11	1.11			1.61	1.61		1.47	1.36		1.00	0.98		1.45
27(10)	1.13	1.13	1.20	1.21	1.21	1.10			1.70	1.68	1.27	1.27	1.46	1.07	1.07	0.92		1.50
28(11)	1.31	1.31	1.26	1.19	1.19	1.10	1.80		1.80	1.74	1.50	1.50	1.37	0.91	0.91	0.88	1.37	1.37
29(12)	1.38	1.38	1.36	1.00	1.00	1.13			1.80	1.82		1.37	1.30	0.72	0.72	0.85		1.30
30(天保 1)	1.37	1.37	1.39	0.99	0.99	1.16	1.80		1.80	1.85	1.24	1.24	1.26	0.72	0.72	0.84	1.32	1.32
1831(2)	1.59	1.59	1.48	1.28	1.28	1.26	2.01		2.01	1.84		1.14	1.22	0.80	0.80	0.85	1.26	1.26
32(3)	1.31	1.31	1.56	1.35	1.35	1.47			1.87	1.80	1.04	1.04	1.26	1.03	1.03	0.94		1.43
33(4)	1.76	1.76	1.58	1.68	1.68	1.55			1.73	1.94		1.31	1.33	0.95	0.95	0.98		0.98
34(5)	1.76	1.76	1.65	2.08	2.08	1.68	1.60		1.60	2.21	1.58	1.58	1.37	1.18	1.18	1.02	0.91	0.91
35(6)	1.48	1.48	2.21	1.35	1.35	2.19			2.48	2.69	1.58	1.58	1.55	0.91	0.91	1.00		1.68
1836(7)	1.96	1.96	2.22	1.96	1.96	2.18			3.37	3.07	1.33	1.33	1.62	1.00	1.00	0.99		1.72

相 対 価 格 の 動 向

00)	要素価格/生産物価格比 (1818年=1.00)									農業費用/農業収入比							年 次
	干鰯/米			干鰯/大麦			干鰯/綿			農業収入			農業費用		費用/収入		
	同5 カ 年 移 動 平 均	各 年 値	補 間	同5 カ 年 移 動 平 均	各 年 値	補 間	同5 カ 年 移 動 平 均	各 年 値	補 間	同5 カ 年 移 動 平 均	米価× 反収 (銀 匁)	同指数 (18 18年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	干鰯価 格指数 (1818年 =100)	同5 カ 年 移 動 平 均	指数 (18 18年= 1.00)	
1.11	1.05	1.05	1.23	1.08	1.08	1.35		0.91	1.11	154.0	96.1	91.8	123.9	150.0	1.29	1.66	1798(寛政10)
1.07	1.55	1.55	1.25	1.32	1.32	1.37		1.30	1.17	127.9	79.8	91.7	172.7	154.7	2.16	1.71	99(11)
1.05		1.32	1.30		1.37	1.36		1.30	1.25	146.0	91.1	91.7	167.8	160.1	1.84	1.77	1800(12)
1.05	1.15	1.15	1.44		1.42	1.52		1.30	1.37	164.2	102.5	87.6	162.9	172.1	1.59	2.00	1801(享和 1)
1.03		1.41	1.33		1.63	1.49		1.42	1.30	142.7	89.0	86.6	173.4	158.7	1.95	1.84	02(2)
1.04	1.77	1.77	1.32		1.87	1.46		1.55	1.27	121.0	75.5	85.9	183.9	151.6	2.44	1.78	03(3)
1.07	1.02	1.02	1.37	1.17	1.17	1.46		0.91	1.28	120.3	75.1	85.3	105.6	147.6	1.41	1.75	04(文化 1)
1.06		1.27	1.32	1.20	1.20	1.42		1.18	1.24	139.7	87.2	88.9	132.6	140.0	1.52	1.61	05(2)
0.98	1.36	1.36	1.19	1.46	1.46	1.32	1.31	1.23	159.5	99.5	98.8	142.5	134.9	1.43	1.38	1806(3)	
0.91	1.16	1.16	1.22	1.39	1.39	1.40		1.26	1.35	172.0	107.3	107.4	135.7	146.4	1.26	1.37	07(4)
0.89	1.13	1.13	1.21	1.40	1.40	1.37		1.48	1.37	200.2	125.0	108.5	158.3	146.4	1.27	1.35	08(5)
0.87	1.19	1.19	1.14	1.56	1.56	1.28		1.53	1.33	188.8	117.8	106.6	162.9	141.2	1.38	1.33	09(6)
0.87	1.19	1.19	1.20	1.04	1.04	1.28		1.25	1.39	148.6	92.7	102.5	132.6	146.6	1.43	1.45	10(7)
0.90		1.04	1.26	1.03	1.03	1.37		1.11	1.41	144.0	89.9	94.3	116.3	147.5	1.29	1.58	1811(8)
0.93		1.45	1.31	1.36	1.36	1.33		1.56	1.41	139.4	87.0	92.0	162.9	146.6	1.87	1.60	12(9)
0.88		1.45	1.28	1.85	1.85	1.40		1.57	1.46	134.8	84.1	100.6	162.9	150.9	1.94	1.55	13(10)
0.87		1.40	1.35		1.38	1.49		1.54	1.54	170.1	106.2	104.7	158.5	158.5	1.49	1.57	14(11)
0.85	1.08	1.08	1.32		1.40	1.51		1.51	1.55	217.2	135.5	111.3	154.1	158.5	1.14	1.46	15(12)
0.87	1.35	1.35	1.23	1.47	1.47	1.34		1.52	1.44	177.1	110.5	114.5	154.1	145.9	1.39	1.28	1816(13)
0.89	1.33	1.33	1.12	1.44	1.44	1.24		1.62	1.29	192.8	120.3	112.9	162.9	130.3	1.35	1.14	17(14)
0.98	1.00	1.00	1.10	1.00	1.00	1.20	1.00	1.00	1.16	160.2	100.0	105.0	100.0	118.8	1.00	1.11	18(文政 1)
1.05		0.82	1.05		0.89	1.19	0.81	0.81	1.03	157.1	98.1	102.9	80.3	109.1	0.82	1.05	19(2)
1.11	1.02	1.02	0.97	1.19	1.19	1.15		0.87	0.88	153.9	96.1	102.1	96.6	96.8	1.01	0.95	20(3)
1.12	1.07	1.07	0.97	1.44	1.44	1.20	0.86	0.86	0.87	160.7	100.3	107.8	105.6	102.2	1.05	0.95	1821(4)
1.19	0.94	0.94	0.98	1.24	1.24	1.19	0.83	0.83	0.83	186.0	116.1	110.4	101.8	103.7	0.88	0.94	22(5)
1.24	1.02	1.02	1.08	1.25	1.25	1.29		0.96	0.88	205.5	128.3	112.5	126.7	117.9	0.99	1.06	23(6)
1.28	0.84	0.84	1.13	0.86	0.86	1.27		0.62	0.89	178.3	111.3	112.3	87.7	126.2	0.79	1.14	24(7)
1.35	1.54	1.54	1.17	1.68	1.68	1.23		1.11	0.87	171.0	106.7	107.5	167.6	131.2	1.57	1.24	25(8)
1.41		1.33	1.20		1.33	1.23		0.92	0.84	159.3	99.4	100.8	147.2	135.8	1.48	1.36	1826(9)
1.40	1.12	1.12	1.23	1.05	1.05	1.34		0.74	0.87	146.9	91.7	108.1	126.7	145.7	1.38	1.39	27(10)
1.39	1.14	1.14	1.10	1.26	1.26	1.25	0.83	0.83	0.79	152.3	95.0	108.1	150.0	136.9	1.58	1.31	28(11)
1.35		0.99	0.98		1.37	1.16		0.76	0.72	236.4	147.5	121.2	137.0	130.3	0.93	1.15	29(12)
1.34	0.91	0.91	0.91	1.25	1.25	1.11	0.69	0.69	0.68	171.3	106.9	128.3	123.9	125.7	1.16	1.03	30(天保 1)
1.26		0.71	0.83		0.89	1.01		0.57	0.67	264.0	164.8	141.5	113.8	121.9	0.69	0.88	1831(2)
1.18	0.79	0.79	0.81	0.77	0.77	0.89		0.55	0.71	204.1	127.4	142.0	103.6	126.1	0.81	0.91	32(3)
1.25		0.74	0.84		0.78	0.87		0.76	0.70	257.7	160.8	144.1	131.0	133.0	0.81	0.94	33(4)
1.34	0.90	0.90	0.84	0.76	0.76	0.83	0.99	0.99	0.67	240.7	150.2	142.1	158.3	136.8	1.05	0.98	34(5)
1.27	1.07	1.07	0.77	1.17	1.17	0.78		0.64	0.65	188.0	117.4	180.3	158.3	155.4	1.35	0.94	35(6)
1.47	0.68	0.68	0.81	0.67	0.67	0.82		0.39	0.59	247.7	154.6	176.2	132.6	161.7	0.86	1.01	1836(7)

付表 3-4 (その4)

年次	価格指数 (1818年=1.00)												米に対する相対価格 (1818年=1.)					
	米			大麦			綿			干鰯			大麦/米			綿/米		
	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均	各年値	補間	同5年移動平均
1837(天保 8)	4.07	4.07	2.17	3.88	3.88	2.05	4.26	4.26	3.37	1.97	1.97	1.63	0.95	0.95	0.94	1.04	1.04	
38(9)	1.81	1.81	2.12	1.65	1.65	2.01		3.67	3.38	1.63	1.63	1.64	0.91	0.91	0.95		2.03	
39(10)	1.54	1.54	1.99	1.41	1.41	1.90		3.09	3.09		1.63	1.71	0.92	0.92	0.96		2.01	
40(11)	1.19	1.19	1.43	1.15	1.15	1.38		2.50	2.65	1.63	1.63	1.67	0.96	0.96	0.98		2.09	
1841(12)	1.33	1.33	1.33	1.41	1.41	1.35	1.91	1.91	2.38		1.70	1.71	1.06	1.06	1.02	1.44	1.44	
42(13)	1.26	1.26	1.30	1.29	1.29	1.29	2.07	2.07	2.20		1.77	1.79	1.03	1.03	0.99	1.64	1.64	
43(14)	1.31	1.31	1.38	1.48	1.48	1.28	2.34	2.34	2.14	1.84	1.84	1.90	1.13	1.13	0.94	1.78	1.78	
44(弘化 1)	1.43	1.43	1.42	1.12	1.12	1.23	2.18	2.18	2.20		2.02	1.98	0.78	0.78	0.88	1.53	1.53	
45(2)	1.55	1.55	1.48	1.08	1.08	1.25		2.19	2.23	2.19	2.19	2.02	0.69	0.69	0.85		1.41	
1846(3)		1.56	1.53	1.18	1.18	1.32		2.20	2.20		2.08	2.03		0.76	0.86		1.41	
47(4)	1.56	1.56	1.58	1.41	1.41	1.40		2.21	2.21		1.97	1.97	0.90	0.90	0.89		1.42	
48(嘉永 1)	1.57	1.57	1.72	1.82	1.82	1.59		2.22	2.35		1.86	1.86	1.16	1.16	0.93		1.42	
49(2)	1.65	1.65	1.83	1.53	1.53	1.82	2.23	2.23	2.50		1.75	1.75	0.93	0.93	1.00	1.36	1.36	
50(3)	2.26	2.26	1.83	2.03	2.03	1.85	2.87	2.87	2.66		1.64	1.64	0.90	0.90	1.02	1.27	1.27	
1851(4)	2.10	2.10	1.84	2.32	2.32	1.79		2.95	2.84		1.53	1.62	1.10	1.10	0.97		1.40	
52(5)	1.55	1.55	1.86	1.54	1.54	1.86		3.03	3.03	1.43	1.43	1.70	1.00	1.00	1.00		1.96	
53(6)	1.65	1.65	1.77	1.53	1.53	1.86		3.11	3.11	1.73	1.73	1.88	0.93	0.93	1.04		1.88	
54(安政 1)		1.74	1.74	1.88	1.88	1.82		3.19	3.19		2.15	2.18		1.08	1.04		1.83	
55(2)		1.83	1.83		2.01	1.97		3.27	3.27		2.58	2.58		1.10	1.07		1.79	
1856(3)		1.92	1.92		2.14	2.14		3.35	3.35		3.01	3.01		1.12	1.12		1.75	
57(4)		2.00	2.00		2.27	2.27		3.43	3.43		3.44	3.44		1.13	1.13		1.71	
58(5)		2.09	2.09		2.40	2.40		3.51	3.51		3.86	3.86		1.15	1.14		1.68	
59(6)		2.18	2.18		2.53	2.53		3.59	3.59		4.29	4.29		1.16	1.16		1.65	
60(万延 1)		2.27	2.27		2.65	2.65		3.67	3.67		4.72	4.72		1.17	1.17		1.62	
1861(文久 1)		2.36	2.49		2.78	2.83		3.75	3.73		5.15	5.15		1.18	1.15		1.59	
62(2)	2.44	2.44		2.91	2.91		3.83	3.83			5.57		1.19	1.19		1.57	1.57	
63(3)	3.21	3.21		3.29	3.29		3.83	3.83		6.00	6.00		1.03	1.03		1.19	1.19	
64(元治 1)																		
65(慶応 1)																		
1866(2)																		
67(3)																		

(出所)「御月見日記」(兵庫県加古郡播磨町役場所蔵)。

相 对 価 格 の 動 向

00)	要素価格/生産物価格比 (1818年=1.00)									農業費用/農業収入比						年 次			
	干鰯/米			干鰯/大麦			干鰯/綿			農業収入			農業費用				費用/収入		
	同5 カ 年 移 動 平 均	各年 値	補 間	同5 カ 年 移 動 平 均	各年 値	補 間	同5 カ 年 移 動 平 均	各年 値	補 間	同5 カ 年 移 動 平 均	米価× 反収 (銀 匁)	同指数 (18 18年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	干鰯価 格指数 (1818年 =100)	同5 カ 年 移 動 平 均		指数 (18 18年= 1.00)	同5 カ 年 移 動 平 均	
1.69	0.48	0.48	0.84	0.51	0.51	0.90	0.46	0.46	0.49	510.0	318.3	178.0	196.6	162.6	0.62	1.00	1837(天保 8)		
1.78	0.90	0.90	0.90	0.99	0.99	0.95		0.44	0.50	225.0	140.4	179.2	162.9	163.5	1.16	1.00	38(9)		
1.72		1.06	1.02		1.15	1.05		0.53	0.59	255.0	159.2	168.4	162.9	171.0	1.02	1.16	39(10)		
1.84	1.36	1.36	1.20	1.42	1.42	1.23		0.65	0.67	198.0	123.6	126.5	162.9	167.1	1.32	1.36	40(11)		
1.79		1.28	1.30		1.20	1.28		0.89	0.74	161.2	100.6	123.8	169.9	171.3	1.69	1.42	1841(12)		
1.70		1.40	1.37		1.37	1.41		0.85	0.82	174.4	108.8	122.5	176.9	179.0	1.63	1.48	42(13)		
1.56	1.40	1.40	1.38	1.24	1.24	1.53	0.79	0.79	0.89	203.0	126.7	126.2	183.9	190.3	1.45	1.53	43(14)		
1.56		1.41	1.39		1.80	1.64		0.92	0.90	244.9	152.8	129.7	201.6	198.0	1.32	1.54	44(弘化 1)		
1.51	1.41	1.41	1.37	2.04	2.04	1.65		1.00	0.91	227.2	141.8	130.5	219.2	202.0	1.55	1.56	45(2)		
1.44		1.34	1.32		1.77	1.61		0.95	0.92	189.2	118.1	128.4	208.3	202.5	1.76	1.59	1846(3)		
1.40		1.26	1.25		1.40	1.48		0.89	0.89	181.1	113.0	122.9	197.3	197.3	1.75	1.61	47(4)		
1.37		1.19	1.12		1.03	1.23		0.84	0.81	186.5	116.4	127.3	186.3	186.3	1.60	1.50	48(嘉永 1)		
1.37		1.06	0.99		1.15	1.01		0.79	0.72	200.2	124.9	147.2	175.4	175.4	1.40	1.29	49(2)		
1.48		0.73	0.93		0.81	0.91		0.57	0.64	262.5	163.8	152.3	164.4	164.4	1.00	1.15	50(3)		
1.57		0.73	0.90		0.66	0.93		0.52	0.58	348.8	217.7	154.1	153.5	161.7	0.71	1.10	1851(4)		
1.67	0.92	0.92	0.93	0.92	0.92	0.93		0.47	0.56	222.3	138.7		142.5	169.7	1.03		52(5)		
1.77	1.05	1.05	1.07	1.13	1.13	1.03		0.56	0.60	200.8	125.3		172.7	188.5	1.38		53(6)		
1.84		1.24	1.24		1.14	1.18		0.68	0.68				215.5	218.0			54(安政 1)		
1.79		1.41	1.40		1.28	1.30		0.79	0.78				258.2	258.2			55(2)		
1.75		1.57	1.56		1.41	1.39		0.90	0.89				300.9	300.9			1856(3)		
1.72		1.72	1.70		1.51	1.50		1.00	1.00				343.6	343.6			57(4)		
1.68		1.85	1.84		1.61	1.60		1.10	1.10				386.4	386.4			58(5)		
1.65		1.97	1.96		1.70	1.69		1.20	1.19				429.1	429.1			59(6)		
1.62		2.08	2.07		1.78	1.77		1.29	1.28				471.8	471.8			60(万延 1)		
1.52		2.18	2.08		1.85	1.81		1.37	1.37				514.5	514.5			1861(文久 1)		
		2.28			1.91			1.46					557.3				62(2)		
	1.87	1.87		1.82	1.82		1.57	1.57					600.0				63(3)		
																	64(元治 1)		
																	65(慶応 1)		
																	1866(2)		
																	67(3)		

第4章 物価の地域差と米価・豊凶循環

はじめに

われわれは、前章で、近世中後期播州加古郡野添村における物価、生産データをもちいて若干の考察を行なった。本章はこれを受け、さらに二三の重要な問題について検討したものである。

I 節は中央との対比において物価の地域差を論じている。地方物価は中央物価と同じように動いたであろうか。そうでないとすれば、地方物価の動向は、どのような特徴をもっていたであろうか。これらの点は、米や綿といった商品ごとに異なるところがあったであろうか。本節は、このような比較検討をおこなうことで、中央と地方における価格決定機構の相違、ひいては経済構造の相違、およびその解消の過程といった問題を、多少なりとも明らかにすることを目的としている。

II 節は、反収の趨勢的上昇と、その趨勢線の上に展開される豊凶サイクルの問題を扱っている。豊凶サイクルが、年貢減免ひいては年貢収量とどの程度の相関をもったか、あるいは豊凶サイクルと米価サイクルとの相関はどの程度でのものであったか¹⁾といった問題が検討される。

1 物価の地域差

— 中央との対比において

本節の目的は、中央との対比において、物価の地域差の問題を論じることであるが、そのまえに、本章でもちいた野添米価について、地域差とのかかわりで、若干の補足をしておきたいと思う。

当野添村近辺における既存の米価系列としては、岩橋勝氏が整理された「播州米価代表値」がある²⁾。これは主として、播州加古郡福里村の石代値段に拠ったものである。福里村は、野添村の隣村と言ってもよいほどの至近距離にあるから、ぜひここで、両米価を比較検討しておくことが必要であろう。

野添米価と福里米価を比較検討するために、（ここではグラフを掲げることではできなかったが）両米価の傾向線、変動係数、野添／福里比等の計算を行なった。その結果、つぎのような点が明らかになった。まず、両米価は、趨勢的には、ほとんど平行に動いていた。また水準差もほとんどなかった。野添米価が売買値段で、福里米価が石代値段であったという違いはあるが、当然、両者は連動していた。

しかし、短期変動をみると、売買値段と石代値段との違いは明確なものになる。すなわち、米価の上昇、下落とも、売買値段である野添米価の方が、石代値段である福里米価よりも、上昇率、下落率ともに大きかったことが一目瞭然である。むろん、変動係数も、野添米価の方が、福里米価よりも大きかった。このことは、とりわけ、天明、天保の飢饉年において顕著であった。

すなわち石代値段のような換算米価は、実勢米価と比べて趨勢的には平行であっても、短期的には変動幅が小さくおさえられていたとい

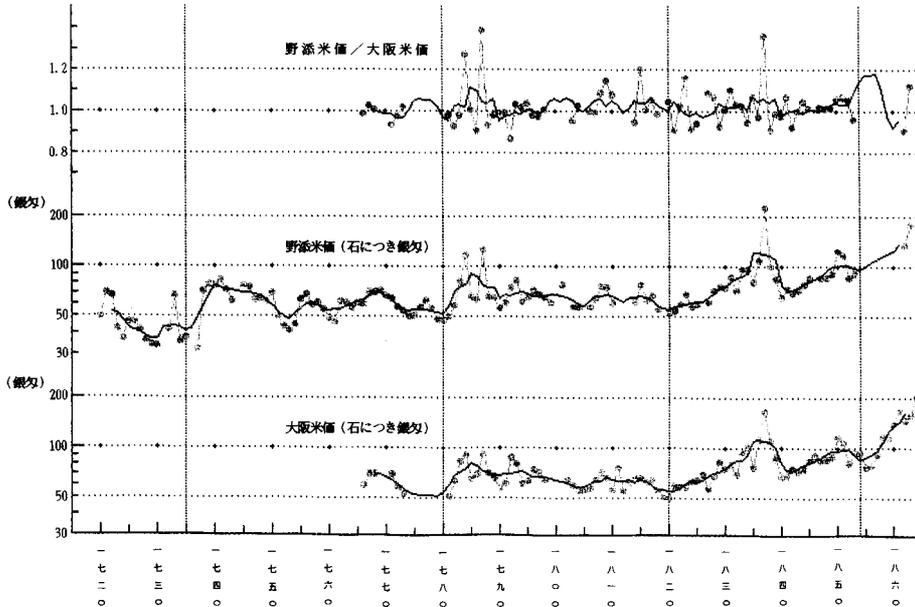
うことがいえる。この点は、のちの章でみるように福井藩における切米値段の変動についても明瞭に確認することができる³⁾。

つぎに、当野添村米価の変動を、大阪米価のそれと比較検討することとしよう。図4-1は、この目的のために作成されたものである。下段には、大阪米価⁴⁾(石につき銀匁)、中段には野添米価(石につき銀匁)が図示されている(半対数目盛)。そして、上段には、野添米価/大阪米価比の系列がグラフ化されている(普通目盛)。ドットで示されているのが、それぞれの価格の各年値である。連年にわたってデータを知ることができる場合には、各ドットを実線でつないだが、欠年がある場合にはそうしなかった。

また、図4-1には5ヵ年移動平均による傾向線が描き込まれている。ただし、下段の大阪米価および中段の野添米価の場合についていえば、欠年がある場合には、あるいは、欠年が続く場合には、その両端の各年値をもちいて、まず、欠年の各年値を直線補間によって推定し、そののち、5ヵ年移動平均をとった。上段の野添米価/大阪米価比の場合は、まず、いま述べたように、野添米価、大阪米価それぞれの価格の欠年を、直線補間によって推定し、連続した価格系列とした。つぎに、これら連続価格系列をもちいて、野添米価/大阪米価比を計算し、最後に、5ヵ年移動平均をとって平滑化した。したがって、ここに描き込まれた傾向線は、もとより便宜的なものであって、以下では、あくまでも、各年値のドットにもとづいて分析を進めることにしたい。

縦軸に平行な区切りの点線は、当野添村における、移動平均による米価波動の谷に着目して、近世中後期について、一応の時期区分を行なったものである。すなわち、

図4-1 野添米価の大阪米価に対する相対価格



I 期は、1735（享保20）年の谷まで。

II 期は、1735（享保20）年の谷から、1780（安永9）年の谷まで。

III 期は、1780（安永9）年の谷から、1820（文政3）年の谷まで。

IV 期は、1820（文政3）年の谷から、1854（安政元）年の谷まで。

V 期は、1854（安政元）年の谷以降の時期である。

なお、この時期区分は前章のものとまったく同じである。また本章で掲げたすべてのグラフに、この区切りの線が描き込まれている。

図4-1の観察に移ると、まず、野添米価は、対象とした期間をつうじて、大阪米価に比べ、およそ5パーセント程度、ほぼ恒常的に高い水準にあったことがわかる⁵⁾。もっとも、この期をつうじて、野添米価/大阪米価比が上昇傾向にあったというようなことは認めることができない⁶⁾。なお、野添米価は、短期的には、天明（1781～88年）および天保期

(1830～43年)に、大阪米価に比べて、激しく騰貴している。

ところで、(ここではグラフを掲げることはできなかったが)大阪米価についても変動係数を計算し、野添米価およびさきの福里米価のそれと、同一グラフ上で比較検討したところ、つぎのような観察結果を得た。変動係数の動きを、近世中後期全体としてみれば、もっとも大きいのは野添米価で、福里米価がこれにつぎ、大阪米価のそれはもっとも小さかった。しかし、天明(1781～88年)、天保(1830～43年)、幕末の時期においては、これが、野添(幕末期は変動係数のデータが得られない)、大阪、福里というふう順位が入れ替わって、大阪米価の変動がやや激しくなっているのである。

ここではこの事実の解釈にかえて、さしあたりつぎの二点を指摘しておくこととしたい。まず、大阪米価の安定性は、先物取引をふくむ米価平準化機能⁷⁾に帰せられる面が大きいであろう。したがって、近世中後期を全体としてみた場合、大阪米価の変動係数が、もっとも小さかったというのも、うなずけるところである。しかるに、天明(1781～88年)、天保(1830～43年)の飢饉年や幕末動乱の時期には、大阪の米価平準化機能が一時的に麻痺して、その結果大阪米価は、野添米価(売買値段)ほどではないにしても、福里米価(石代値段)よりは、激しく変動することになったと考えられよう。

もうひとつは福里米価についてである。さきにも述べたように、福里米価(石代値段)の価格水準は、近世中後期をつうじて、野添米価のそれとほとんど変わるところはなかった。変動係数についても、全体としてみれば、野添米価(売買値段)ほどではないにせよ、大阪米価よりは大きかった。したがって、福里米価(石代値段)は、比較的、実勢を反映していたと考えてよいであろう。もっとも、天明(1781～88年)天保

(1830～43年)期には、大阪米価よりも変動係数が小さくなっていて、この点に(大阪における米価平準化機能の麻痺ということと同時に)石代値段としての性格(つまり政策的介入)が顕現していると思われる⁸⁾。

さて、こんどは、当野添村の綿の価格変動を大阪のそれと比較検討することとしよう。図4-2は、この目的のために作成されたものである。ところで、野添村における綿の価格というのは実綿価格であるから、比較のためには、大阪の場合も実綿価格の系列が望ましいところであるが、いまの段階では、これを入手することができない。そこでやむをえず大阪実綿価格にかえて、大阪繰綿価格⁹⁾の系列を利用するほかはなかった。グラフ化にさいしても、それぞれの価格を指数化し(1818年=100)、相対的な上昇、下降のみを観察することとした。

図4-2下段には、大阪繰綿価格指数、中段には野添実綿価格指数が図示されている(半対数目盛)。そして、上段には、野添実綿価格指数/大阪繰綿価格指数比(1818年=1.00)の系列がグラフ化されている(普通目盛)。

図4-2にも5ヵ年移動平均による傾向線が描き込まれている。このうち上段の、野添実綿価格指数/大阪繰綿価格指数比の傾向線の計算過程はつぎのとおりである。まず、野添実綿価格、大阪繰綿価格それぞれの価格の欠年を、直線補間によって推定し、連続した価格系列とした。つぎに、これら連続価格系列を、1818(文政元)年を基準年とする指数になおした。しかるのち、野添実綿価格指数/大阪繰綿価格指数比(1818年=1.00)を計算し、最後に、5ヵ年移動平均をとって平滑化した。この点を別にすれば、これら上、中、下段3系列の計算過程、グラフ化にさいしての約束ごとは、図4-1の場合とまったく同じである。

図4-2 野添実綿価格の大阪繰綿価格に対する相対価格

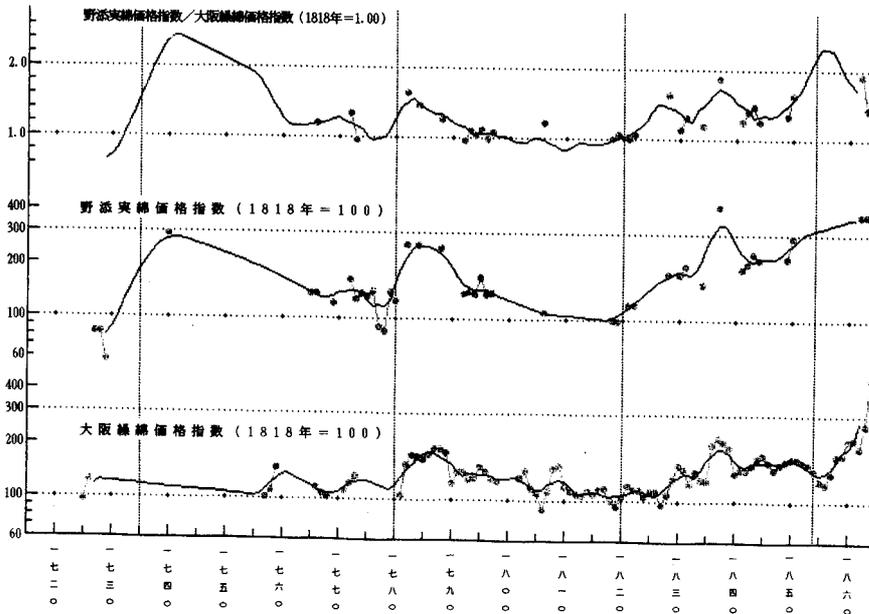


図4-2の観察に移ると、まず、野添実綿価格と大阪繰綿価格は、データの少ないⅠ期（1735年まで）およびⅡ期（1735～1780年）を別とすれば、全期をつうじて、ほぼ平行に動いたことが明らかである。もっとも野添実綿価格は大阪繰綿価格に比べて変動は激しかった。

このように両者は平行に動いたのであるが、比をとってみると、すなわち、野添実綿価格／大阪繰綿価格比の系列には、注目すべき結果が顕れる。この比は、全体としては、化政期（1804～29年）を境目として、下降から上昇へと、趨勢的变化をとげているのである。さらに詳しく観察すれば、（データの少ないⅠ、Ⅱ期を別として）Ⅲ期（1780～1820年）は、初期の高い水準から、しだいに、野添実綿価格／大阪繰綿価格比が、低落していく過程であると思われる。ついでⅣ期（1820～1854年）以降幕末にかけては、この比は急速に上昇している。この点は、

野添実綿価格および大阪繰綿価格の動向、さらには、野添米価や大阪米価の動向とも軌を一にしている。

この野添実綿価格／大阪繰綿価格比の変動が、循環的には、実綿や繰綿そのものの価格変動と似ていたという点については、ひとつには、つぎのようなことが考えられる。すなわち、野添実綿価格の変動は、全期をつうじて、明らかに、大阪繰綿価格の変動に比べて大きかった。したがって、野添実綿や大阪繰綿の価格上昇（下落）期には、野添実綿価格は大阪繰綿価格以上に上昇（下落）し、その結果、野添実綿価格／大阪繰綿価格比は、上昇（下落）したと考えられよう。

がしかし、それだけではない。野添実綿の大阪繰綿に対する相対価格は、化政期（1804～29年）を境目に、明らかに、下降から上昇へと趨勢的变化をとげているのである。かつて新保博氏によって、大阪在方（摂津国武庫郡農村）実綿価格（指数）が大阪（市中）繰綿価格（指数）に対して、化政期（1804～29年）以降は、相対的に値が高くなったという指摘がなされたことがある¹⁰⁾。同様の指摘は山崎隆三氏によってもおこなわれている¹¹⁾。

そして、この点を解釈する試みとして、農民側の要求が具体化したものとしての流通機構の変化の問題がとりあげられた。すなわち、大阪市場を通さずに、江戸市場はじめ綿の価格が高い地域に、在方から綿を直売するという方法が認められ、その結果、（在方における綿の需要が増加し）大阪在方における綿の価格は、大阪よりも高くなったとされている。

当野添実綿価格が大阪繰綿価格に対して、やはり、化政期（1804～29年）以降、相対的に値を上げていったのは、いまみたような事情と無関係ではなかったと思われる。もっとも、大阪在方実綿価格は、大阪繰綿

価格に対して、化政期（1804～29年）を基準として、以後およそ50パーセントまでの上昇であるが、当野添実綿価格は、大阪繰綿価格に対して、同じく化政期（1804～29年）を基準とした場合、以後幕末にかけて、およそ100パーセントぐらゐも上昇している。したがって、野添実綿価格の場合には、相対的上昇を説明する何か別個の要因が推察されるところである。

II 反収上昇趨勢と米価・豊凶循環

(1) 年貢減免のクロノロジイ

まず最初に、史料「御月見日記」に記載のある年貢減免、ないしはそれに準ずると思われる事項を拾い上げることとしたい。「準ずる」と言うのは、一例を挙げれば、史料に「見分」をお願いしたと書かれているだけで、実際に減免が行なわれたのかどうか、わからないような場合についても、取りあえずこれを拾い上げることとしたからである。

この結果、1720（享保5）年から幕末にかけて、都合25件（年）の減免関連の事項を抽出することができた。以下はそのリスト（年代順）であるが、句読点は筆者がつけたものであり、また括弧内は筆者の注である。

1721（享保6）年の条に、

「二百十日＝當ル日から大風吹、稻毛いたミ、なた筋ついほう。御年貢大分ひけ申候」。

1729（享保14）年の条に、

「此年殊之外悪年^{わる}＝而候。水十分。八月十九日大風、九月十四日大水

小じけ、其後又大水、稲毛中て、おくて大いたみ。米壹反＝付三俵方
上も五俵迄。但シ米ハ引わり之様＝而、御藏手形三拾四五匁方段々下
り廿六七匁迄＝成り申候」。

1731（享保16）年の条に、

「五月根付水沢山＝而、稲作、綿作見事＝出来候得共、八月大雨、七日
八日ふりつゝき、夫方三十日計、天氣悪敷事、近代＝無之候。早稲方、
中稲、後稲までも殊之外不作。綿くさり申候、少もとれ不申候。此年
春法仕、式分之加免ヲ被仰付候。百姓難儀仕候」。

1744（延享元）年の条に、

「綿稲兩作共、二百三十日＝當り、大風＝而、早稲上毛、中稲中毛、晚
稲皆無成。それ故御春法御願申、晚稲高三百三石＝、御被下米百五拾
八石壹斗五升六合、又出無へ拾四石六升被下置、惣喜悅無限」。

1748（寛延元）年の条に、

「九月三日夜明方、四日の四ツ過迄、殊外大風にて、中稲、遅稲は、
猶以大痛。二百三十四五日當り候へ共、稲五七日も遅く、白穂になり、
御春法御願申候へ共、春法してあまり有ば、免を上てとると被仰候ゆ
へ、得春法請不申。灘邊は春法仕候に、免一分二分入日程も不被下」。

1749（寛延2）年の条に、

「稲毛も^{うわ}上やけにてあしく、六月廿六日大雨風にて姫路より奥郡迄大
水＝而、大川筋、田地、在所、大分なかれ潰申候。夥敷、人などもそ
んじ、御殿様方ながれ所へ、先式千表御米を被下置、有難頂戴仕候と
也。同七月廿四日、殿様酒井雅樂守様御入部被遊、水入之田地相應＝
御免許被下置、御勘定相逐申候」。

1754（宝暦4）年の条に、

「秋作壹反＝付三表より四俵位。但し御見分、御春法御願申処、野添

村五拾石余御用捨御座候」。

1759（宝暦9）年の条に、

「根付水なし。水かへ根付仕候。當村山代、上代根付相殘一作畑ニ相成申候。たんへ 天氣宛、夏分昼夜水かへ生、ほりへ さらへ仕候。夏作少も取不申ニ、二子、二見、西岡、中尾大分いたミ有之候。當村ニも少々いたミ、五町程も相見へ申候。井水よく上り、井かゝりハ水沢山。上代一作畑壱町、夏分水不足。上代いたミ有之候ニ付、御見分御願申上、但九町余御用捨米三拾貳石被下」。

1760（宝暦10）年の条に、

「段々春中天氣よく、植付水不足。上代の端シはし、水廻り能キ場所根付無之、かへ根付仕候。其外上代一作畑拾町、且又遅植。御見分御同地拾三町余。兩作共御見分御願申上、御用捨米三拾四石三斗被下。但、一作畑大難義仕候」。

1766（明和3）年の条に、

「五月根付水沢山。度、照り強ク末ニ而水不足。上溝其外、蓮池、北池、堀々土手付旱魃。城代、鹿川代、御見分御願申上候處、御代官様御當被遊、如何分ニも御上ニ仰られ候通ニしたかい、御なけき申上候へは、御すくい米として、御上より上代九町四反九畝壱歩ニ、貳拾壱石被下置、百姓悦申候。豊年米六表方段々有ル」。

1769（明和6）年の条に、

「夏分少日照リニて、貳百十日當り、中大風いたし、出穂當り、白穂出来、上代切御見分御願申候所、御公儀様方投免被 仰付、貳拾壱石被下、御見分外村々御拝借被下置。但し歩なし」。

1771（明和8）年の条に、

「種つけ水無之、上方方潰淵下、ふけ田ヲ苗代に御願申尊御座候。そ

れより段々日照り續キ、上田百五拾石、一作畑。それより池掛り式番草よりかへ生、下代井掛り淵共ニ養兼申、池掛、井掛り共、御年貢御上納義難致、惣百性、庄屋殿相詰申、御見分御願申上候処、池掛り下代江御見分田江、三拾五石被下置。殊外之年柄ニ御座候故、惣免少し宛順申候。上代一作畑は、御年貢御免被下候。畑作式町計、大豆相そたち候へ共、此義御見分有之候へ共、同事ニ御免ニ被 仰付、難有奉存候。本畑、新畑^(ママ)江へも少々宛御用捨御座候。新畑、本畑の義、作方皆無同前御座候。百姓難義ニそんし候」。

1772（安永元）年の条に、

「水沢山、稲作殊外見事。綿其外作方大豊年御座候處、八月十二方廿日夜ふりつゝき、式百廿五日當り大風、稲毛諸事作、惣皆無いたし、百性殊外こんきういたし、御上様江作方御見分御願申上候処、御公様ニも御領分一躰事ニ御座候へは、御もつとも被思召候へ共、何分場所御ねきり被成、大痛分御見分被 仰付、拾三町余御見分成被下、御米五拾八石被下。本畑古新江御米御用捨有之候」。

1780（安永9）年の条に、

「六月上旬雨有り。夫方長早ニて早魃。上代、下代、川西共所々大痛ニて御地頭様へ御願申。御見分請申、御引石被下置候。七八十日計、早リ申候。近年之早魃ニ御座候」。

1784（天明4）年の条に、

「夏分日てり、五十日てり、水不底ニ付、上之代御見分願申候」。

1786（天明6）年の条に、

「稲作殊之外不作。御見分御願申上、田方へ六十石、畑方へ廿石、御引石被下置候。取実四俵方五俵六俵迄。直段段々高直七拾匁方段々冬分、姫路手形九十四匁位。極月末、切手、銀百匁ニ相成、明ル未春正

二月百拾五匁位。此邊ハ格別不作と申事も無御座候へ共、關東大不作ニ而、江戸へ米積申ニ付、右之百拾五匁杯と申相場ニ相成候」。

1794（寛政6）年の条に、

「根付水沢山ニ而、末水之時大日照リニて大かんはつ。上代御見分ニ相成、御米三拾六石被下、大難義いたし、御未進ニ差こまり難澁仕候」。

1799（寛政11）年の条に、

「野添村ハ、上之代川東ハ、池水落切り、後チ堀々さらゑ水行キ届きし故、格別之事もなく候得共、川西ハ、ヨホドノいたみも有り。城代、鹿川代、川西ハ御見分御願イ申上、御引石申請ル」。

1804（文化元）年の条に、

「稲花あしく候ゆへ、御願上、少々御下し米被下候」。

1806（文化3）年の条に、

「五月稲ね付時、水沢山ニ御座候共、其後、殊之外長てりニ而、凡七八拾日てりツ、き、池かゞり日やけニ御座候得共、新井掛り之分をくふり仕候而、井水沢山御座候故、万作仕候。當村上代、長々水かへ仕候而、稲作御見分御願申上候所、少々御用捨御座候。然共、下代万作仕候、壺反ニ付式石式三斗方三石式三斗迄」。

1814（文化11）年の条に、

「段々なつ分ニ相成、殊外大ひやけニて、道上不殘一作畑ニ御座候。當村上田ハ不殘一作也。御見物御願申候所、當上田へ御米式百五石下シおかれ、しかし新井ハ水隨分沢山ニて萬作仕候」。

1836（天保7）年の条に、

「諸事三ぞうばひに御座候。麥米高直に付、村方難儀人多ク出来、御上様へ願出、御拝借銀三貫匁余下り、御米も少々下り、未進銀も凡拾貫匁程御座候。其内四貫匁度々により、残り六貫匁程は四方無御座候」。

1850（嘉永3）年の条に、

「惣作難儀由ニ付（前年の事項）、正月十七日五人組寄合致、御上様へ難義由ニ付願書差上御事相談相成處、古宮大庄屋、村役人中クカヘニ付差ひかゑ、其後村一統役人中方、願書差出し候を相持候也」。

1851（嘉永4）年の条に、

「去ル戌年（前年）五月せつ方七日目節、池々天氣つゝきニて水かたし。うえ付時分方大あめニて水沢山ニ相成、わせ類かいだ付みなしニ相成、當季あれ御斷ノ上、米貳拾三四石下る」。

1853（嘉永6）年の条に、

「新米ハ不作いたし、内がりハ、いこ法出す。御殿様へ願、御神様方、凡三百石余被下、それ付けん役いたし、段々六月廿七八日ころ方水かへいたし、是方九月迄、諸々方ぼ堀ぼ致、井戸を法り、川筋ハみな川を堀り、池を堀り、其々こま入いろへ新井ゆ水い不申相成、末ニ而ハゆ水とり候得共、上々ニ而がやけ、下ハ下ゆふ。いねけ願上、當あれ拾六丁毛取願、三拾五六丁あれ、米百六拾石毛取、米百貳拾五石余下、わた願下、米拾貳石、末ニ而又分き米たね米として三拾六石被下、相ノ、凡三百三拾石余」。

ところで、当姫路藩領、野添村における年貢賦課の動向および実態を明らかにするためには、多くの村方史料や領主史料を検討することが必要であろう。が、筆者にはいま、無論その準備はないし、また、年貢賦課の問題を明らかにすることが本節の主要な目的でもない。したがってここでは、この問題について、必要な範囲でごく簡単に触れておくこととしたい。

播磨町編『岩光¹²⁾』には、つぎのような『野添村明細帳』からの引用が

載せられている。すなわち「一、御検見の儀、榑原式部太輔様二者、平均免ニ被為仰付候。松平大和守様御代二者、田畑町毎ニ坪検見ニ被為成候節も御座候。其後、平均免ニ被為仰付候」。

姫路藩主、榑原¹³⁾氏の治世は、1704（宝永元）年から1741（寛保元）年まで¹⁴⁾である。したがって始期はともかく、1741（寛保元）年ぐら¹⁵⁾いまでは定免であったということになる。また藩主松平（越前）¹⁶⁾氏治世は、1741（寛保元）年から1749（寛延2）年までの短い期間であったが、この間は検見（有毛検見）によったことがわかる。ついで1749（寛延2）年、酒井¹⁷⁾氏入封後はふたたび定免に移行した¹⁸⁾。

もっとも、酒井氏入封後幕末まで定免制が維持されたかどうかはわからない。たとえば幕領においてではあるが、明和（1764～71年）、安永（1772～80年）、天明（1781～88年）の頃には、多くの村々が定免から検見取へ移行しているという実情もあるからである¹⁹⁾。

さて、（まことに不十分とのそしりは免れないが）当野添村における年貢収取の形態をごく簡単に概観した。ところが、定免→有毛検見→定免という変化は、さきに引用した「御月見日記」年貢減免関連の条々からは、この点をあまりうかがい知ることにはできないように思われる。そこでこんどは見方を変えて、逆に史料の側から、すなわち1720（享保5）年から幕末にかけての都合25件（年）の減免関連事項を検討することで、年貢賦課の問題について、若干の事実を指摘しておくこととしたい。

まず最初に、もっとも典型的な年貢減免のパターンはどのようなものであったかという、それは「稲作殊之外不作。御見分御願申上、田方へ六十石、畑方へ廿石、御引石被下置候」（1786（天明6）年の条）の

ように、「御見分御願」→「御引石」の場合である。これは数え方にもよるが、たとえば25件中約半数、12件に達する。²⁰⁾

つぎに目につくのは、「ついほう」あるいは「^{ついはう}春法」という用語である。この用語がもちいられている条は全部で5件あり、年代順に1721（享保6）年、1731（享保16）年、1744（延享元）年、1748（寛延元）年、1754（宝暦4）年の各条である。そして最後の1754（宝暦4）年条には、「秋作^二反付三表より四俵位。但し御見分、御春法御願申処、野添村五拾石余御用捨御座候」とあって、年次的に「春法」という用語がもちいられているもっとも遅い事例をなしていると同時に、さきの（減免にかかわる）「御見分」という用語の初出にもなっている。先述のように、播磨町編『岩光』によれば、松平氏治世（1741（寛保元）年～1749（寛延2）年）には「田畑町毎^二坪検見^二被為成候節も御座候」であったから、この「春法」の意味は、（時期的にみて）有毛検見すなわち坪刈による実収調査のことであったと考えるとよいであろう。²¹⁾

そうだとすれば、「御見分」、「御春法」が併記されている1754（宝暦4）年、およびその後の「御見分御願」→「御引石」12件は、（時期的にみても）まず定免下の減免と考えるとまちがいないのではなかろうか。というのも、これらの条には、坪刈のような綿密な実収調査が行なわれたという記述は、一切ないからである。

さらにはこの定免下の減免も、化政期（1804～29年）以降の時期になると、1804（文化元）年条に、「御願上、少々御下し米被下候」というふうに「御見分」の語を欠く例もみられるようになる。²²⁾ また、1851（嘉永4）年条（ただし1850（嘉永3）年の事項）には、「わせ類かいだ付みなし^二相成、當季あれ御断ノ上、米式拾三四石下る」とあって、おそらく見分を省略し、あっさり減免している。さらに1853（嘉永6）年条

には、「御殿様へ願、御神様方、凡三百石余被下」とあり、やはり見分は行なわれなかったと考えてよいであろう。すなわち、幕末におよんで「御見分」は、まったく形骸化したかのごとくである。²³⁾

(2) 反収と年貢と米価

図4-3下段は、当野添村、近世中後期における玄米（反につき石）反当収量の変動を推計し、これをグラフ化したものである（半対数目盛）。史料の整理と加工の詳細については、前章およびのちの付論で詳しく述べたので、ここでは繰り返さない。

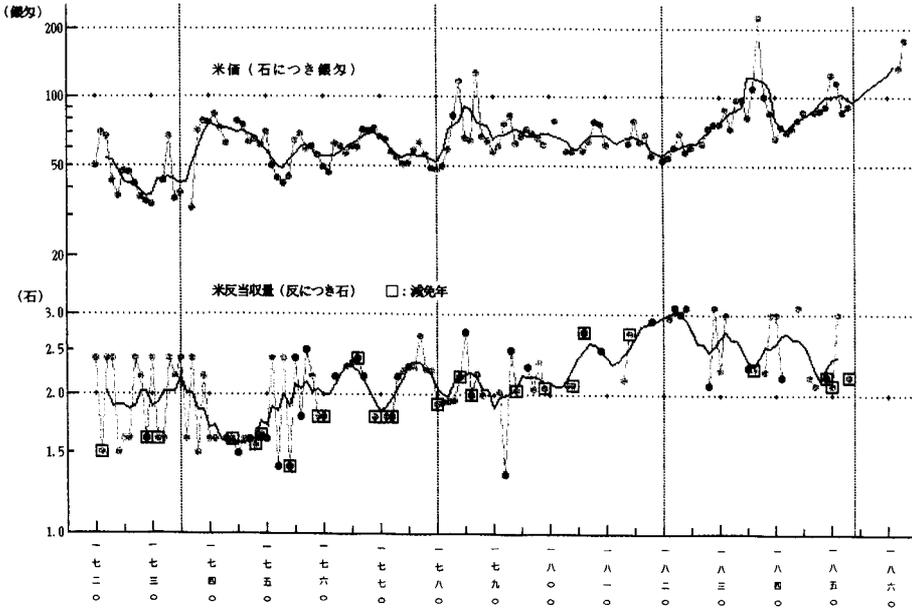
まず濃いドットは、各年の玄米平均反当収量を表わしており、また薄いドットは、各年反当収量の推定値を示している。連年にわたって反当収量を知ることができる場合には、（濃いドットであれ、薄いドットであれ）各ドットを実線でつないだが、欠年がある場合にはそうしなかった。また、図4-3下段に描き込まれている傾向線は、これら反当収量の系列を平滑化したものである。

さて、今回新たに、25個の（前項で検討した）年貢減免関連年の反当収量ドットを、□（四角）で囲んだ。こうすることで、年貢減免関連の年を、グラフ上で一覧することができると同時に、その年の反当収量の多寡を、（他の年との比較で）視角的にとらえうることとなる。

つぎに、図4-3上段は、当野添村における米価（石につき銀匁）の変動をグラフ化（半対数目盛）したものである（図4-1中段の再掲）。

図4-3の二つの系列を仔細に眺めてみると、循環的にみて、米の反当収量が多い（少ない）ときには、価格が安い（高い）といった収量と価格とのあいだの逆相関を、ある程度明瞭に観察することができる。しかしこの重要な観察結果については前章で詳論したので、ここでは繰り返

図4-3 米反当収量と米価の変動



返さない。

さて、本論に入って、図4-3下段のグラフからはどのような事実が観察されるであろうか。一見して明らかなように、一般的に言えば、年貢減免が行なわれた年の反当収量は、当然のことながら、大きく落ち込んでいるようである。もっとも、近世中後期をつうじての平均反収の上昇にともない、減免年の反収も、1.5石から2石をすこし上回る水準にまで上昇していて、これはまことに興味深い事実であると思われる。

いまみたように、減免はおおむね凶作年に行なわれるが、もうすこし詳しく観察してみるといくつかの例外が生じる。列举してみると、1766（明和3）年、1784（天明4）年、1806（文化3）年、1814（文化11）年の4例である。1766（明和3）年条には、「上代九町四反九畝壹歩ニ、貳拾壹石 被下置、百性悦申候。豊年米六表方段々有ル」とあって、減

免が行なわれたにもかかわらず豊作となっている。

1784（天明4）年条には、「御見分願申候」とあるが、減免になったかどうかについては記述がない（ならなかったのであろうか）。1806（文化3）年の場合は、「當村上代、長々水かへ仕候^而、稲作御見分願申上候所、少々御用捨御座候。然共、下代万作仕候、壺反^二付式石式三斗^方三石式三斗迄」とあって、およそ凶作年とみることはできないであろう。同様に、1814（文化11）年条には「當村上田ハ不殘一作也。御見物御願申候所、當上田へ御米式百五石下シおかれ、しかし新井ハ水随分沢山^二て萬作仕候」とあり、この年も凶作年と考えるには無理がある²⁴⁾う。

例外はあるとしても、年貢減免は、ほぼ凶作年に限られるわけであるが、この逆、凶作年には減免が行なわれるかという点、これは反例をあげるのが容易で、むしろ枚挙にいとまがないと言ってよいであろう。また、豊作年の場合に、年貢が加免されたかといえ、そのような例は、全史料中1件も見あたらない。したがって、図式的に言えば、領主側からみて、（定免制実施以降）減免がなかった年の取米にはあまり変化がなかったとすれば、凶作のときにだけ年貢収量が減少するということになろう。年貢総収量は、相当数の凶作年を知らせてはくれるが、豊作年を反映することはできず、まして平均反収の上昇を表わすことはできないと考えられよう。

以上のことから、年貢総収量の系列を豊凶指標（とりわけ反収上昇趨勢線上に展開される豊凶サイクルの指標）としてもちいる場合には十分注意しなければならないことがわかる。古島氏の有名なグラフ²⁵⁾によっても、植村氏の播州農村²⁶⁾の場合でも、あるいは宮本氏が紹介した熊本藩の例²⁷⁾によっても、（もちろん、それぞれの筆者は、年貢総収量や年貢率が、

直接米の生産量の変動を反映しているなどと言っているわけではないが）これらがこの期における農業生産力上昇の動態的發展を、十全に表現しているということにはならないであろう。

むしろ、図4-3にみられるように、豊凶サイクルは、（もし反収時系列^{2,8)}が得られない場合には）これとは逆に相関する米価サイクルのうちに読みとった方がよいのではないかと思われる。この点は、古島氏も（中期循環的というよりはもっと短期的な場合についてはあるが）『三貨図彙』を引用して述べている^{2,9)}、また、岩橋氏もみずからの研究をもとに述べているとおりで^{3,0)}ある。

おわりに

ここでは本章で明らかになったところを、簡単に要約しておくこととしたい。I節では、物価の地域差の問題が若干とり扱われた。それによると、当野添村米価は、対象とした期間をつうじて、大阪米価に比べ、およそ5パーセント程度、ほぼ恒常的に高い水準にあった。また、野添実綿価格／大阪繰綿価格比の系列は、化政期（1804～29年）を境目として、下降から上昇へと、趨勢的変化をとげていた。

II節(1)では、藩領野添村においても、有毛検見→定免という変化がみられ、しかも、定免下の減免も、化政期（1804～29年）以降になると「御見分」が省略されるなど、近世中後期をつうじて「農民収奪」の度は弱まったとみられることが明らかにされた。

II節(2)では、反収上昇趨勢線上に展開される豊凶サイクルの問題が取り上げられた。減免年の反収も、1.5石から2石をすこし上回る水準にまで上昇していた。そして最後に、豊凶サイクルは、年貢総収量とは直接

関係せず、米価サイクルと逆に相関していたという指摘が行なわれた。

注

- 1) これまで、生産、年貢賦課、物価といった問題を趨勢と循環という視点から、ある程度統一的に議論するという試みは、あまり行なわれて来なかったのではないだろうか。たとえば、豊凶サイクルが議論されても、その際反収の趨勢的上昇といった問題は、必ずしも明示的に述べられていなかったのではないだろうか。
- 2) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、283～288ページ。
- 3) 本研究7章Ⅱ、Ⅲ節参照。
- 4) 大阪における米価は、前掲『近世後期における主要物價の動態』のなかに収録されているものに依拠した。すなわち、「第1部享和2年より明治4年に至る大阪主要商品相場表」と「第2部(1)享保10年10月より寛政10年2月に至る大阪主要商品相場表」とである。米価は種々の銘柄のものが記載されているが、もっとも欠年の少ないデータを得たいという観点から、肥後米の価格を採用した。なお、資料には、各年について、たとえば月毎のように、いくつかの米価があたえられている場合が多いわけであるが、これらは適宜平均して、最終的には各年にひとつの米価というふうにとまとめることとした。
- 5) この点は、岩橋勝氏によってすでに確認されている。前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、381、382ページの図7-3。
- 6) というのも、地方米価は、大阪米価に対して、しだいに値を上げてきたという事実が、これまでに(筆者も含めて)しばしば指摘

されているからである。たとえば、新保博「江戸後期における物価の地域差 — 近世物価史へのひとつの接近として — 」『国民経済雑誌』139巻5号（1979年）、8ページ。本研究7章Ⅱ節など参照。

- 7) この点については、前掲宮本『近世日本の市場経済』、7章に詳しい。
- 8) 本研究7章Ⅱ、Ⅲ節で、越前勝山米価（売買値段）、福井米価（切米値段）、大阪米価の三者についてほぼ同様の問題を考える予定である。
- 9) データの出所および加工の方法は、本節の注4)に同じ。
- 10) 新保博「江戸後期の物価・賃銀」（前掲『数量経済史入門』所収）、229～231ページ。
- 11) 前掲山崎『近世物価史研究』、283、360ページ。
- 12) 播磨町野添土地区画整理事業完工誌編集委員会編『岩光』（播磨町野添土地区画整理組合、1984年）、91ページ。なお、野添村は古くは^{いわみつ}岩光村（石光村）と呼ばれていたという。同、6ページ。
- 13) 榊原式部太輔の名は、「御月見日記」1722（享保7）年の条にみえる。
- 14) 以下治世の期間は、児玉幸多・小西四郎・竹内理三監修『日本史総覧Ⅳ 近世一』（新人物往来社、1984年）、288ページに拠る。
- 15) 大石慎三郎氏によれば、「定免法は享保三年頃から色々と準備され、何等かの理由で直ちには実行に移されず、享保七年以降に実施の運びにな」ったという（同『享保改革の経済政策 — 第一部 享保改革の農村政策 — 』（御茶の水書房、1961年）、132ページ）。また、辻達也氏も、「定免制の施行は享保三年の頃から準備され、

同七年頃から漸次実施されていったものと考えられる」と述べている（同『享保改革の研究』（創文社、1963年）、166ページ）。

- 16) 松平大和守の名は、「御月見日記」1747（延享4）年の条にみえる。
- 17) 本文に引用した「御月見日記」1749（寛延2）年の条には、「殿様酒井雅樂守様御入部被遊」とある。
- 18) 古島敏雄氏によれば、「農民収奪の画期」第2期は、1737（元文2）年から1764（明和元）年までであるが、この間は、有毛検見期の前半10年と、定免制一般施行の令された1749（寛延2）年以降に分けることができるという。これは幕領における年貢賦課総額および賦課率の動向から区分されたものである（前掲古島『近世経済史の基礎過程』、331ページ）。が、当姫路藩領、野添村の場合にあっても、この時期を中心とした、定免→有毛検見→定免という変化は、さきの幕領における変化と、ほぼ軌を一にしていたということができよう。なお、この時期の勘定奉行神尾若狭守春央の一行は、周知のとおり、1744（延享元）年西日本を巡見したが、11月13日には、当野添村の隣村二子村（当時幕領）に姿をみせ、きびしい年貢増徴を行なっている（播磨町町史編集委員会編『阿閉の里（町制施行20周年記念誌）』（播磨町、1982年）、141、182～184ページ）。
- 19) 前掲『近世経済史の基礎過程』、348ページ。
- 20) 列挙すれば、1759（宝暦9）年、1760（宝暦10）年、1766（明和3）年、1769（明和6）年、1771（明和8）年、1772（安永元）年、1780（安永9）年、1786（天明6）年、1794（寛政6）年（ただしこの年は、「御願」とは書かれていない）、1799（寛政

- 11) 年、1806（文化3）年、1814（文化11）年（ただしこの年は、「御見分」ではなくて「御見物」と書かれている）である。
- 21) この5件について、もうすこし詳しく調べてみることにしよう。まず、1721（享保6）年条には「なた筋ついほう。御年貢大分ひけ申候」とあるが、これは時期的にみて、あるいは畝引検見であったかもしれない。また「なた筋（灘筋）」というのが浜辺の村を指すのであれば、これは野添村の事例とは言えないが、ここではとりあえず数え上げることとした。1731（享保16）年条には、「此年春法仕、式分之加免ヲ被仰付候」とあり、実収調査の結果、不作にもかかわらず増徴になったことがわかる。なおこの年、全史料中唯一、坪刈の粃米収量が記録されている。1744（延享元）年条には、春法を願い出て減免になったと記されている。また「惣喜悦無限」とあり、減免は、この頃としては珍しい例であったと考えられる。なお、願い出るといふのはこの年が初出である。ついで1748（寛延元）年条には、「御春法御願申候へ共、春法してあまり有ば、免を上てとると被仰候ゆへ、得春法請不申」とあって、実収調査をして、もし収穫が多ければ年貢増徴をすと言われ、調査を受けるのを断念したというわけで、この時期の苛斂誅求ぶりがうかがわれる。また、1754（宝暦4）年条には、さきにみたように「御見分」、「御春法」が併記されているので、時期的にみて、あるいは定免下の減免を表わしているのではないかと推測される。なおこのほかに、1736（元文元）年条に「米見分方すくなし」という記述があり、この年にも実収調査が行なわれたことがわかる。
- 22) 注20) で指摘したように、1814（文化11）年条には、「御見分」

ではなくて「御見物」と記されているが、これはたんなる誤記であろうか、それとももはや「見分」ではなくて「見物」だと言うのであろうか。なお、（減免にかかわる）「御見分」ないしは「御見物」という用語は、この年がもっとも遅い使用例で、以後、使われなくなる。

- 23) 全25件中、残る5件についても簡単に述べておくこととしたい。1729（享保14）年、1749（寛延2）年は、詳しいことはわからないが、とにかく減免は行なわれたと考えられる。また、1784（天明4）年、1850（嘉永3）年（ただし1849（嘉永2）年の事項）は、願いは行なわれたようであるが、減免になったかどうかについては記述がない。さらには、1836（天保7）年は、難儀人対策として「御米も少々下」ったが、この年はまた不作でもあった。
- 24) 付論でも述べるように、上代^{かみだい}（また、上田井、上ハ代、かミ田、上田、上之代とも）とは、山代、高松、宮裏、鹿ノ川などの小字を指し、池掛かり田ゆえ干ばつに悩まされること多く、ときには田植えができないことがあり、かわりに雑穀、綿などを植えるいわゆる一作畑となることがあった。これに対して^{しもだい}下代は、中筋、大西、田中、川端などを言い、新井^{しんゆ}（近世初期に開削された農業用水路）の恵みゆえ、井掛かり田となり、300余年にわたって日やけ知らずであったという（前掲『岩光』、80、90、95ページなど）。もっとも干ばつに不作なしとも言われるように、干ばつは、冷夏、風水害などと比較して、決定的な凶作にはならないと考えられ、田植えができない場合でも、転作収入を考慮すれば、あまり悲観的な状況ではなかったと言えるのではなかろうか（前掲『近世経済史の基礎過程』、345ページなど参照）。

- 25) 前掲古島「商品流通の発展と領主経済」、78～79ページ。第2・1図
享保1－天保12年幕府直轄領の年貢収納総額（米換算）・収納
率と大坂卸売米価格の変遷。前掲同『近世経済史の基礎過程』、
266～267ページ。
- 26) 前掲『近世農村における市場経済の展開』、151～158ページ。同
氏は、播州農村（加東郡中番村）における小作人年貢納入量を、
豊凶指標として利用し、寛政期（1789～1800年）以降明治までに、
25年3周期の豊凶サイクルを見いだしている。これを本章図4－
3（加古郡野添村）と比較してみると、同氏の第1周期下降局面
（1800（寛政12）年～1814（文化11）年）は、図4－3では上昇
局面となっている。また同氏の第3周期上昇局面（1839（天保10）
年～1858（安政5）年）は、図4－3では（途中までしかないが）
下降している。ところが、同氏算出の年貢納入量合計（同氏はこ
れも豊凶状態を示す指標であるとしている）の方をみると、他の
局面は小作人年貢納入量と平行であるが、さきの2局面につ
いては、そうとも言えないようである。そして、図4－3の系列
は、この2局面については、むしろ年貢納入量合計の動きの方
に近いと考えられる、ということは、結局図4－3の系列は年貢納
入量合計の動きと、ほぼ同様の動きを示したとってよいのでは
なかろうか。
- 27) 前掲宮本「物価とマクロ経済の変動」、75ページの図2－2。な
お出所は、細川藩政史研究会編『熊本藩年表稿』（1974年）。
- 28) 良好な反収時系列はなかなか得がたい。が、下記の文献には貴重
なデータが収められている。前掲岸『関谷家稻刈覚帳の研究』、
69～72ページ。前掲今井・八木『封建社会の農村構造』、105ペー

ジ。前掲山崎『地主制成立期の農業構造』、152ページ。前掲同「江戸後期における農村経済の発展と農民層分解」、338ページ、第8・1表。前掲佐藤『日本稲作の展開と構造』、5-1表 坪刈帳の平均一坪初収量（巻末折込）。

29) 前掲『近世経済史の基礎過程』、270～271ページ。

30) 岩橋勝「書評 — 植村正治著『近世農村における市場経済の展開』」『社会経済史学』53巻5号（1987年）、92～93ページ。また、前掲同『近世日本物価史の研究』、437ページ。岩橋氏の言うところは、注26)で述べた植村氏による収穫の第1周期下降局面（1800（寛政12）年～1814（文化11）年）が、実は収穫の下落ではなくて、逆に米価の趨勢的低落に反映されているように、収穫は連年の豊作によって上昇していたというのである。

付表 4-1 (その1) 物価の地域差

年次	大阪米価			野添米価 /大阪米価			大阪繰綿価格				野添実綿 価格指数			野添実綿価格指数 /大阪繰綿価格指数		
	価格 (石につき 銀匁)	同 補間	同 5ヵ年 移動 平均	各年 値	同 補間	同 5ヵ年 移動 平均	価格 (貫につき 銀匁)	同指数 (1818 年=100)	同 補間	同 5ヵ年 移動 平均	指数 (1818 年=100)	同 補間	同 5ヵ年 移動 平均	各年 値(18 18年=1.00)	同 補間	同 5ヵ年 移動 平均
1720(享保 5)																
1721(6)																
22(7)																
23(8)																
24(9)																
25(10)							17.2	96.4	96.4							
1726(11)							22.2	124.3	124.3							
27(12)									123.5	117.8	83.0	83.0			0.67	
28(13)									122.8	122.8	83.0	83.0			0.68	
29(14)									122.1	122.1	57.4	57.4	80.2		0.47	0.66
30(15)									121.4	121.4		78.3	87.6		0.65	0.72
1731(16)									120.7	120.7		99.2	99.2		0.82	0.82
32(17)									119.9	119.9		120.1	120.1		1.00	1.00
33(18)									119.2	119.2		141.0	141.0		1.18	1.18
34(19)									118.5	118.5		161.9	161.9		1.37	1.37
35(20)									117.8	117.8		182.8	182.8		1.55	1.55
1736(元文 1)									117.1	117.1		203.7	203.7		1.74	1.74
37(2)									116.4	116.4		224.6	224.6		1.93	1.93
38(3)									115.6	115.6		245.5	245.5		2.12	2.13
39(4)									114.9	114.9		266.3	261.0		2.32	2.27
40(5)									114.2	114.2	287.2	287.2	271.1		2.52	2.37
1741(寛保 1)									113.5	113.5		281.2	275.9		2.48	2.43
42(2)									112.8	112.8		275.2	275.2		2.44	2.44
43(3)									112.0	112.0		269.2	269.2		2.40	2.40
44(延享 1)									111.3	111.3		263.2	263.2		2.36	2.36
45(2)									110.6	110.6		257.2	257.2		2.33	2.33
1746(3)									109.9	109.9		251.2	251.2		2.29	2.29
47(4)									109.2	109.2		245.2	245.2		2.25	2.25
48(寛延 1)									108.5	108.5		239.2	239.2		2.21	2.21
49(2)									107.7	107.7		233.2	233.2		2.16	2.16
50(3)									107.0	107.0		227.2	227.2		2.12	2.12
1751(宝暦 1)									106.3	106.3		221.2	221.2		2.08	2.08
52(2)									105.6	105.6		215.2	215.2		2.04	2.04
53(3)									104.9	104.9		209.2	209.2		2.00	1.99
54(4)									104.1	104.1		203.2	203.2		1.95	1.95
55(5)									103.4	103.4		197.2	197.2		1.91	1.91
1756(6)									102.7	104.7		191.2	191.2		1.86	1.83
57(7)							18.2	102.0	102.0	113.2		185.2	185.2		1.82	1.68
58(8)							19.9	111.4	111.4	120.9		179.2	179.2		1.61	1.53

付表 4-1 (その2) 物価の地域差

年次	大阪 米価			野添米価 /大阪米価			大阪 繰上価格				野添実綿 価格指数			野添実綿価格指数 /大阪繰上価格指数		
	価格 (石につき 銀匁)	同 補間	同 5ヵ年 移動平均	各年 値	同 補間	同 5ヵ年 移動平均	価格 (實につき 銀匁)	同指数 (1818 年=100)	同 補間	同 5ヵ年 移動平均	指数 (1818 年=100)	同 補間	同 5ヵ年 移動平均	各年 値(18 年=1.00)	同 補間	同 5ヵ年 移動平均
1759(宝暦 9)							26.2	146.5	146.5	127.9		173.2	173.2		1.18	1.39
60(10)									142.1	134.2		167.2	167.2		1.18	1.26
1761(11)									137.7	137.7		161.2	161.2		1.17	1.17
62(12)									133.3	133.3		155.2	155.2		1.16	1.16
63(13)									128.9	128.9		149.2	149.2		1.16	1.16
64(明和 1)									124.5	124.5		143.2	144.6		1.15	1.16
65(2)									120.0	119.5	137.2	137.2	140.2		1.14	1.18
1766(3)	60.1	60.1		0.99	0.99		20.7	115.6	115.6	114.0	138.3	138.3	135.9	1.20	1.20	1.19
67(4)	69.7	69.7		1.03	1.03		19.4	108.3	108.3	110.1		133.0	131.7		1.23	1.20
68(5)	70.4	70.4	68.0	1.01	1.01	1.01	18.2	101.7	101.7	107.7		127.7	131.6		1.26	1.22
69(6)		70.0	69.8		1.04	1.00			104.8	106.8	122.3	122.3	134.0		1.17	1.25
70(7)		69.6	67.7		0.97	0.99			108.0	109.6		136.5	140.4		1.26	1.28
1771(8)	69.2	69.2	64.3	0.94	0.94	0.99	19.9	111.2	111.2	115.9		150.7	140.4		1.36	1.22
72(安永 1)	59.2	59.2	60.9	0.97	0.97	0.97	21.9	122.5	122.5	120.9	164.9	164.9	143.4	1.35	1.35	1.20
73(2)	53.6	53.6	57.6	1.02	1.02	0.97	23.8	133.1	133.1	124.6	127.7	127.7	142.7	0.96	0.96	1.15
74(3)		53.2	54.3		0.95	1.00			129.8	127.0	137.2	137.2	141.3		1.06	1.12
75(4)		52.9	52.9		0.96	1.05			126.5	126.5	133.0	133.0	126.4		1.05	1.00
1776(5)		52.6	52.6		1.10	1.06			123.2	123.2	143.6	143.6	117.9		1.17	0.95
77(6)		52.3	52.3		1.21	1.06			119.8	119.8	90.4	90.4	118.5		0.75	0.99
78(7)		52.0	52.0		1.08	1.05			116.5	116.5	85.1	85.1	116.9		0.73	1.01
79(8)		51.7	51.7		0.93	1.03			113.2	113.2	140.4	140.4	126.2		1.24	1.13
80(9)		51.4	53.9		0.93	0.97			109.8	120.5	125.0	125.0	159.2		1.14	1.31
1781(天明 1)	51.1	51.1	60.2	0.98	0.98	0.95	19.0	106.5	106.5	132.7		190.2	193.2		1.79	1.45
82(2)	63.5	63.5	68.3	0.93	0.93	1.02	28.0	156.4	156.4	145.0	255.3	255.3	216.2	1.63	1.63	1.49
83(3)	83.7	83.7	71.2	0.98	0.98	1.03	31.7	177.5	177.5	156.4		255.3	241.8		1.44	1.57
84(4)	92.2	92.2	75.1	1.28	1.28	1.02	31.3	174.7	174.7	171.2	255.3	255.3	253.7	1.46	1.46	1.49
85(5)	65.7	65.7	80.7	1.01	1.01	1.11	29.9	166.9	166.9	178.5		252.7	252.1		1.51	1.42
1786(6)	70.3	70.3	78.2	0.91	0.91	1.10	32.3	180.4	180.4	181.5		250.0	250.0		1.39	1.38
87(7)	91.8	91.8	72.9	1.39	1.39	1.04	34.5	192.8	192.8	183.0		247.3	242.6		1.28	1.33
88(8)	71.2	71.2	71.2	0.93	0.93	1.04	34.5	192.8	192.8	174.4	244.7	244.7	230.3	1.27	1.27	1.34
89(寛政 1)	65.4	65.4	69.5	0.98	0.98	1.06	32.5	181.8	181.8	167.0		218.1	213.3		1.20	1.29
90(2)	57.5	57.5	68.5	0.99	0.99	0.95	22.2	124.3	124.3	157.3		191.5	191.5		1.54	1.22
1791(3)	61.6	61.6	70.3	0.99	0.99	0.97	25.6	143.4	143.4	144.8		164.9	171.2		1.15	1.19
92(4)	87.1	87.1	69.4	0.87	0.87	0.98	25.8	144.3	144.3	135.0	138.3	138.3	155.2	0.96	0.96	1.16
93(5)	80.1	80.1	70.7	1.03	1.03	0.99	23.3	130.0	130.0	140.8	143.1	143.1	151.0	1.10	1.10	1.07
94(6)	60.9	60.9	73.1	1.02	1.02	0.99	23.8	133.1	133.1	140.4	138.3	138.3	145.6	1.04	1.04	1.04
95(7)	64.0	64.0	69.8	1.04	1.04	1.01	27.4	153.2	153.2	137.6	170.2	170.2	145.9	1.11	1.11	1.06
1796(8)	73.5	73.5	66.8	0.98	0.98	1.00	25.3	141.6	141.6	137.0	138.3	138.3	144.4	0.98	0.98	1.05
97(9)	70.5	70.5	67.6	0.98	0.98	0.99	23.3	130.0	130.0	136.1	139.4	139.4	143.3	1.07	1.07	1.05

付表 4-1 (その3) 物価の地域差

年次	大阪米価			野添米価 /大阪米価			大阪繰綿価格				野添実綿 価格指数			野添実綿価格指数 /大阪繰綿価格指数		
	価格 (石につき 銀匁)	同 補間	同 5カ年 移動 平均	各年 値	同 補間	同 5カ年 移動 平均	価格 (實につき 銀匁)	同指数 (1818 年=100)	同 補間	同 5カ年 移動 平均	指数 (1818 年=100)	同 補間	同 5カ年 移動 平均	各年 値(18 18年=1.00)	同 補間	同 5カ年 移動 平均
1798(寛政10)	65.0	65.0	67.8	1.01	1.01	1.00	22.7	127.1	127.1	131.5		135.9	135.0		1.07	1.03
99(11)		64.9	66.0		0.95	1.04			128.6	129.5		132.5	132.5		1.03	1.02
1800(12)		64.9	64.9		1.08	1.06			130.2	130.2		129.1	129.1		0.99	0.99
1801(享和1)		64.8	63.9		1.21	1.05			131.7	133.6		125.7	125.7		0.95	0.94
02(2)	64.7	64.7	62.0		1.05	1.06	23.8	133.3	133.3	131.4		122.2	122.2		0.92	0.93
03(3)	60.3	60.3	60.2	0.95	0.95	1.06	25.7	143.9	143.9	127.1		118.8	118.8		0.83	0.94
04(文化1)	55.5	55.5	58.8	1.03	1.03	1.01	21.0	117.6	117.6	118.6		115.4	115.4		0.98	0.99
05(2)	55.5	55.5	58.8		1.04	1.00	19.4	108.8	108.8	114.5		111.9	112.5		1.03	1.00
1806(3)	57.9	57.9	61.0	1.00	1.00	1.03	16.0	89.6	89.6	115.9	108.5	108.5	110.1	1.21	1.21	0.98
07(4)	64.8	64.8	63.0	1.00	1.00	1.05	20.1	112.4	112.4	123.3		107.8	108.3		0.96	0.92
08(5)	71.2	71.2	63.3	1.09	1.09	1.06	27.1	151.3	151.3	125.3		107.1	107.1		0.71	0.89
09(6)	65.9	65.9	66.8	1.15	1.15	1.03	27.6	154.4	154.4	129.9		106.4	106.4		0.69	0.84
10(7)	57.0	57.0	65.0	1.08	1.08	1.05	21.3	119.0	119.0	129.3		105.7	105.7		0.89	0.83
1811(8)	75.3	75.3	63.2		0.82	1.03	20.1	112.4	112.4	120.4		105.0	105.0		0.93	0.89
12(9)	55.5	55.5	63.2		1.12	0.99	19.6	109.4	109.4	112.0		104.3	104.3		0.95	0.93
13(10)	62.4	62.4	64.9		1.00	1.02	19.1	106.7	106.7	110.2		103.5	103.5		0.97	0.94
14(11)	66.0	66.0	62.4	0.95	0.95	1.05	20.1	112.5	112.5	110.9		102.8	102.8		0.91	0.93
15(12)	65.6	65.6	64.1	1.20	1.20	1.04	19.7	110.2	110.2	112.3		102.1	102.1		0.93	0.91
1816(13)	62.7	62.7	62.8	1.01	1.01	1.04	20.7	115.8	115.8	111.0		101.4	101.4		0.88	0.92
17(14)	63.9	63.9	59.6	1.06	1.06	1.06	20.8	116.5	116.5	107.1		100.7	100.6		0.86	0.95
18(文政1)	56.0	56.0	56.6	0.99	0.99	1.03	17.9	100.0	100.0	105.8	100.0	100.0	102.3	1.00	1.00	0.97
19(2)	50.1	50.1	56.0		1.07	1.01	16.6	93.0	93.0	107.2	98.9	98.9	106.5	1.06	1.06	1.00
20(3)	50.1	50.1	54.9	1.05	1.05	1.01	18.6	103.8	103.8	107.1		110.6	110.9		1.07	1.04
1821(4)	60.0	60.0	55.5	0.91	0.91	1.04	21.9	122.7	122.7	110.1	122.3	122.3	117.2	1.00	1.00	1.07
22(5)	58.5	58.5	58.1	1.03	1.03	1.01	20.8	116.2	116.2	112.7	122.3	122.3	125.7	1.05	1.05	1.12
23(6)	59.0	59.0	60.9	1.16	1.16	0.99	20.5	114.7	114.7	114.7		131.9	133.8		1.15	1.17
24(7)	63.1	63.1	62.9	0.91	0.91	0.98	19.0	106.0	106.0	112.7		141.5	141.5		1.33	1.26
25(8)	64.0	64.0	62.7	0.94	0.94	0.99	20.3	113.6	113.6	108.8		151.1	151.1		1.33	1.40
1826(9)	70.1	70.1	64.6		0.87	0.97	20.2	112.8	112.8	107.6		160.6	160.6		1.42	1.50
27(10)	57.5	57.5	68.4	1.09	1.09	0.98	17.3	96.7	96.7	113.1		170.2	168.3		1.76	1.50
28(11)	68.1	68.1	70.6	1.06	1.06	0.99	19.5	109.1	109.1	122.0	179.8	179.8	174.0	1.65	1.65	1.46
29(12)	82.2	82.2	72.5	0.93	0.93	1.04	23.8	133.1	133.1	129.7		179.8	182.0		1.35	1.44
30(天保1)	75.0	75.0	75.1	1.01	1.01	1.03	28.3	158.4	158.4	135.8	179.8	179.8	185.4	1.14	1.14	1.39
1831(2)	80.0	80.0	80.3	1.10	1.10	1.02	27.1	151.3	151.3	143.5	200.5	200.5	184.0	1.33	1.33	1.29
32(3)	70.1	70.1	84.4	1.03	1.03	1.02	22.7	126.9	126.9	143.4		186.9	180.0		1.47	1.26
33(4)	94.4	94.4	84.8	1.03	1.03	1.03	26.4	147.8	147.8	138.0		173.2	193.7		1.17	1.41
34(5)	102.7	102.7	91.2	0.95	0.95	1.01	23.7	132.5	132.5	149.3	159.6	159.6	221.0	1.20	1.20	1.47
35(6)	76.8	76.8	110.3	1.06	1.06	1.07	23.6	131.7	131.7	169.0		248.2	268.7		1.88	1.55
1836(7)	111.8	111.8	113.4	0.97	0.97	1.05	37.2	207.7	207.7	182.3		336.9	307.4		1.62	1.66

付表 4-1 (その4) 物価の地域差

年次	大阪米価			野添米価 / 大阪米価			大阪繰綿価格				野添実綿価格指数			野添実綿価格指数 / 大阪繰綿価格指数		
	価格 (石につき銀匁)	同補間	同5カ年移動平均	各年値	同補間	同5カ年移動平均	価格 (實につき銀匁)	同指数 (1818年=100)	同補間	同5カ年移動平均	指数 (1818年=100)	同補間	同5カ年移動平均	各年値 (1818年=1.00)	同補間	同5カ年移動平均
1837(天保 8)	165.5	165.5	110.1	1.36	1.36	1.06	40.3	225.2	225.2	195.4	425.5	425.5	337.2	1.89	1.89	1.73
38(9)	110.3	110.3	108.2	0.91	0.91	1.04	38.3	214.2	214.2	197.5		367.0	337.6		1.71	1.71
39(10)	86.0	86.0	99.6	0.99	0.99	1.06	35.4	197.9	197.9	186.1		308.5	308.5		1.56	1.64
40(11)	67.6	67.6	81.6	0.98	0.98	0.97	25.4	142.2	142.2	170.8		250.0	264.9		1.76	1.54
1841(12)	68.5	68.5	74.0	1.07	1.07	0.99	27.0	151.1	151.1	159.7	191.5	191.5	238.3	1.27	1.27	1.49
42(13)	75.6	75.6	72.0	0.92	0.92	1.00	26.6	148.8	148.8	154.6	207.4	207.4	220.2	1.39	1.39	1.43
43(14)	72.4	72.4	75.4	1.00	1.00	1.01	28.4	158.7	158.7	161.8	234.0	234.0	214.0	1.47	1.47	1.33
44(弘化 1)	75.7	75.7	79.8	1.04	1.04	0.99	30.8	172.1	172.1	164.3	218.1	218.1	219.8	1.27	1.27	1.34
45(2)	84.6	84.6	81.6	1.01	1.01	1.01	31.9	178.5	178.5	164.3		219.1	222.6		1.23	1.36
1846(3)	90.7	90.7	84.2		0.95	1.01	29.2	163.4	163.4	164.9		220.2	220.2		1.35	1.34
47(4)	84.4	84.4	87.0	1.02	1.02	1.00	26.7	149.1	149.1	164.0		221.3	221.3		1.48	1.35
48(嘉永 1)	85.7	85.7	93.7	1.01	1.01	1.01	28.9	161.7	161.7	163.2		222.3	234.9		1.38	1.44
49(2)	89.8	89.8	97.4	1.01	1.01	1.03	30.0	167.5	167.5	165.4	223.4	223.4	249.9	1.33	1.33	1.51
50(3)	118.1	118.1	96.8	1.06	1.06	1.04	31.2	174.5	174.5	168.8	287.2	287.2	266.3	1.65	1.65	1.57
1851(4)	109.2	109.2	98.6	1.06	1.06	1.03	31.1	174.1	174.1	168.7		295.2	284.0		1.70	1.69
52(5)	81.1	81.1	99.4	1.05	1.05	1.03	29.7	166.3	166.3	165.5		303.2	303.2		1.82	1.84
53(6)	94.8	94.8	91.3	0.96	0.96	1.08	28.8	161.3	161.3	156.4		311.2	311.2		1.93	2.02
54(安政 1)	93.8	93.8	85.0		1.03	1.14	27.0	151.1	151.1	147.0		319.1	319.1		2.11	2.21
55(2)	77.5	77.5	87.0		1.30	1.17	23.1	129.4	129.4	142.4		327.1	327.1		2.53	2.32
1856(3)	77.8	77.8	91.7		1.36	1.18	22.7	127.0	127.0	145.8		335.1	335.1		2.64	2.33
57(4)	91.3	91.3	95.8		1.21	1.18	25.6	143.2	143.2	152.4		343.1	343.1		2.40	2.30
58(5)	118.0	118.0	108.1		0.98	1.10	31.9	178.2	178.2	170.6		351.1	351.1		1.97	2.12
59(6)	114.3	114.3	126.4		1.05	0.98	32.9	184.1	184.1	189.3		359.0	359.0		1.95	1.94
60(万延 1)	139.3	139.3	137.8		0.90	0.92	39.4	220.3	220.3	200.7		367.0	367.0		1.67	1.84
1861(文久 1)	169.1	169.1	145.9		0.77	0.95	39.5	220.7	220.7	218.0		375.0	373.4		1.70	1.73
62(2)	148.4	148.4	162.8	0.91	0.91		35.8	200.3	200.3	275.8	383.0	383.0		1.91	1.91	
63(3)	158.3	158.3	205.4	1.12	1.12		47.3	264.7	264.7	358.1	383.0	383.0		1.45	1.45	
64(元治 1)	198.9	198.9	379.9				84.6	473.2	473.2	508.7						
65(慶応 1)	352.2	352.2	538.9				112.9	631.6	631.6	742.0						
1866(2)	1041.7	1041.7					174.2	973.9	973.9							
67(3)	943.5	943.5					244.4	1366.6	1366.6							

(出所) 三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物価の動態』(日本学術振興会、1952年)、「御月見日記」(兵庫県加古郡播磨町役場所蔵)。

付 論 地方における物価と生産の新データ

— 播州加古郡野添村文書「御月見日記」について —

はじめに

本付論は、播州加古郡野添村（現兵庫県加古郡播磨町）に伝えられた「御月見日記」¹⁾と題する地方の物価と生産の史料を紹介し、ついで、これを利用可能なかたちに整えて、近世中後期における、新しい、地方物価、生産データを提供することを目的としている。また同時に、その整理、加工の過程で生ずるさまざまな問題点についても、若干の議論を行った。

物価史研究の進展とともに、新しい、長期にわたる物価史料の必要性が叫ばれながら、その収集の成果は、はかばかしいとは言えないであろう。²⁾本付論は、この面での不足をいささかなりと補おうとするものである。

Ⅰ 史料「御月見日記」について

本付論で紹介する史料は、「御月見日記」と題する播州加古郡野添村（現兵庫県加古郡播磨町）の文書である。史料の発見当時、「朝日新聞」

神戸版に、簡単な紹介記事³⁾が載せられた。また、筆者は地元在住の播磨町教育委員会教育長、藤原年春氏のご厚意により、史料を閲覧する機会を得、史料にかかわる説明を聞くことができた。いまこれらを総合すると、史料発見の経緯はつぎのようなものである。

すなわち、播磨町野添地区の区画整理事業史をまとめようと資料を集めていたところ、同地区の川端公民館にあった。みかん箱大の木の収納箱に入っており、「大事なものだから」と引き継がれていたという。この川端という地名については、『阿閉の里』⁴⁾につぎのような説明がある。すなわち、「慶長播磨国絵図」（天理図書館蔵）には川端村の名があがっているが、1646（正保3）年「播磨国高辻郷帳」にはこの名をみないので、川端村は、慶長から正保の間に、野添村に繰り入れられたものと考えられる。

また、播州加古郡野添村は、現在兵庫県加古郡播磨町の一部で、JR土山駅周辺（南方）に位置する。江戸時代は姫路藩に属し、1849（嘉永2）年で、村高961石7斗3升4合、人口913人という⁵⁾。史料に明らかなように、商品作物の栽培が盛んな農村で、日照りに悩まされることが多かったようである。現在もなお、ため池が数多く存在する。

「御月見日記」は、和とし3冊合計250ページぐらいの史料である。史料に記載のある期間は、1720（享保5）年から、1897（明治30）年までであるが、このうち、本付論で紹介したのは、近世中後期にかんするものである。

史料の筆者については、明治期に「本庄屋事 佐伯久吉」という署名がみられるが⁶⁾、筆跡が、時代を下るにつれて何度も変化していることからしても、当時の村役人が代々書き綴ったとみてさしつかえないであろう。したがって、当史料は、時期を隔てて書かれたものではなく、あくまで

も当時の現実の記述と考えられ、信憑性の高いものとみなしてよいであろう。

また「御月見日記」冒頭には、「一、昔より毎年正月十五日之朝、月の入所_ニ而、其年世の中、善悪あるひハ洪水、大風、又日てりなど、ためし候を書しるし置不申候。一、享保五年庚子より、改、書しるす者也。」（句読点筆者、以下同じ）と記されていて、記録の動機が、毎年1月15日の朝、満月の入る場所を見定めて、その年の吉凶を占うという、一種の「月占い」にあったことがわかる。

史料は私的な年代記の体裁をとっており⁷⁾、その内容は、物価、農産物の反収を中心に村の生活全般におよんでいる。試みに列挙すれば、つぎのようなものである。

月の入りはどの方角か。天候、農事、作況。地震、雷、火事、大風、洪水。灌漑用水の多少、灌漑の方法、水論。架橋、普請、池普請。新興の住宅地、水車の始まり。年貢の加免、減免。一揆、打ちこわし。疫病、家畜の病気。外国人の往来、難破船。処罰、処刑。高野参り、伊勢参り、札所参り、おかげ参り。宗教的行事、迷信。角力、芸能。村内外の出来事、諸国の見聞。藩主の国替、入部、仁政、冠婚葬祭。銀札発行、貨幣改鑄。

さて、「御月見日記」は、享保期（1716～35年）からの物価データを知ることができ、従来の物価史料に比して、相当長期にわたっており、重要なものと思われる。さらに、これまでの史料は、中央に片寄っていて、地方の物価史料のまとまったものは、ほとんど知られていないから、「御月見日記」は、その点でも重要な史料と言えよう。

物価は、生産物価格としての米、麦、綿、要素価格としての干鰯につ

いて、かなりの程度、連年にわたって知ることができる。しかもこれらのデータは、当農村における実際の売買値段⁸⁾、相場、ないしは平均的な価格であると考えられる。わけても、干鰯価格の連続的の時系列史料が得られたことは、これまでの物価史研究に照らして、貴重であると思われる⁹⁾。物価は、米、麦、綿、干鰯以外にも、断片的ではあるが、小麦、蕎麦、大豆、空豆、菜種、胡麻、糠、青物、塩、木綿、油等の価格を知ることができる。さらには、これも断片的ながら、米、麦、綿、大豆の作況および反当収量を知ることができる。とくに米の反当収量は、ある程度、長期連続的に記載がある。なおほかに、金相場、銭相場、姫路札相場についても、一部データを知ることができる。

ところで、「御月見日記」は、地方の物価史料としては、今後これだけのものを入手するのは難しいのではないかと思えるほど充実したものであると考えられる反面、明らかにいくつかの問題点を含んでいる。

まず、欠年が多いこと、さらに、価格が、各年同一時点のものであるとは言えないことである。しかも記載のしかたは入り組んでおり、記載された価格が、はたしてどの年の価格かを特定することが難しいという場合がしばしばであった。また、価格は幅をもって示されていることが多く、代表値を求める際には、その中間をとらざるを得なかった。

II 整理と加工

本節では、物価史料「御月見日記」の整理と加工について述べることにする。

(1) 米、麦、綿、干鰯の価格

まず、米、麦、綿、干鰯価格の、各年の代表値の計算については、必ずしも一貫性を保つことはできなかった。干鰯¹⁰⁾のように、各年にひとつしか価格が記載されていない場合は、それをもってその年の価格とした。また、米、麦、綿の場合のように、いくつかの価格が記載されている年については、まず、可能なかぎり、収穫期以前の価格と以後の価格、それぞれの代表値を求めた（この場合、価格が幅をもって示されているときには、最高価格と最低価格を平均した）。しかるのち、これら収穫期以前の価格と以後のそれとの平均価格をもって、その年の価格とした。

米は、1石につき銀匁の表示であると思われるが、史料にみるかぎり1石につきという表現はみられない。しかし、この野添米価を、岩橋勝氏が推計した播州米価¹¹⁾（1石につき銀匁）と比較してみても、その水準に大差はないので、さしあたり、野添米価は、石当たりで表示されているものと考えてさしつかえないであろう。

麦も同様に、史料にみるかぎり1石につきという表現はみられない。しかも、ここでいう麦が、大麦である（と思われるが¹²⁾）のか、他の麦であるのかもわからない。しかし、小麦ではないと思われるのは、つぎの理由による。すなわち史料「御月見日記」の、1822（文政5）年、1827（文政10）年、1834（天保5）年、1849（嘉永2）年の条には、麦と小麦の価格が併記されている。

麦の価格については、これまで、長期連続的なデータは、ほとんど知られていない。わずかに、『近世後期における主要物價の動態¹³⁾』に、1781（天明元）年以降の（若干の大麦と）小麦の価格が収載されているほか、『近世大阪の物価と利子¹⁴⁾』に、幕末期について、大麦、小麦の価格が一部記載されている。また、『近世物価史研究¹⁵⁾』には、麦の価格についての既存の断片的データが、いくつか、取り上げられている。麦（大

表)の価格について、既存のデータが少ない理由は、つぎのように考えられる。『近世後期における主要物價の動態』に付された解題には、「殊に大麦の(価格データの)記載が少ないのは、当時農家の自家飯料として消費される部分が多く、商品としての出廻りが少なかつたことを示すのであろうか^{1,6)}」と記されている。また、『近世大阪の物價と利子』のなかにも、「当地(大阪)ニハ大麦ノミ久シク專業トスルモノナク百方搜索シテ漸ク調査ノ法ヲ案シ飴商牧野直二郎カ年々二季ニ買入レタル帳簿ニ就テ此表ヲ製ス^{1,7)}」という記述がみられる。したがって、大麦の商品化率は小さく、取引は少なかったことが推測され、このために、長期連続的なデータはあまり残らないということになる^{1,8)}。

綿は、「御月見日記」、1827(文政10)年の条に、唯一「わたの実、壹貫目=付八十五匁より九拾匁迄」という表現がなされているので、一応、(綿は実綿であるとして)その価格は1貫目当たりで表示されているものと考え^{1,9)}こともできよう。しかし、これを、通常の実綿の売買単位である「1本」すなわち40斤(斤には1斤＝300目の「分銅目」と1斤＝220目の「平野目」とがある^{2,0)})当たりの価格に換算すると、分銅目の場合で12倍($0.3 \times 40 \div 1$)、平野目の場合で8.8倍($0.22 \times 40 \div 1$)になり、これでは当野添村の実綿価格はあまりにも高くなりすぎる。

そこで、1827(文政10)年条の「わたの実、壹貫目=付八十五匁より九拾匁迄」というのは、実綿ではなく綿実の貫当たり価格が、唯一例外的に記されたものと解釈した方がよさそうである。そうだとすると、当野添村の綿は、やはり実綿であったと考えてよいであろう。というのも史料に、「綿も壹反=付凡式拾四五貫方四拾貫迄吹、段々綿相場も五拾目方段々下直=相成、四拾壹式匁迄^{2,1)}」、あるいは「綿も式拾貫方四十四五貫はかりふき、直段七十式三匁方八拾四五匁迄之相場^{2,2)}」のような記述が

みられるからである。そして実綿の売買単位は、史料記載の実綿価格の水準と、既存の実綿価格データとのあいだにさほどの乖離がないことからしても「1本」ではなかったかと推測しておきたい。

なお、綿の価格については、これまでに、いくつかの時系列データが知られている。前掲山崎『近世物価史研究』には、「大坂市中の繰綿価格」（前掲『近世後期における主要物價の動態』、前掲『近世大阪の物価と利子』収載のデータ）、江戸、尾張丹羽郡の繰綿価格、西摂等「大坂在方」、尾張丹羽郡、同中嶋郡、土佐土佐郡の、いずれも実綿価格が取り上げられている^{2,3)}。

干鰯は、一般に、綿栽培の肥料として用いられたといわれるが、史料にみるかぎり、この点についての記述はない。むしろ、「麥はた肥干か」、「麥上肥干か」といった表現が数多くみられ、また「稻こへ干鰯切粉」といった表現もみられる。また干鰯の値段は、たとえば、「干か粉當り壹匁二付」何升何合というふうに記載されている場合があるので、銀1匁につき升の表示であると考えられる^{2,4)}。

以上述べてきたように、米、麦、綿、干鰯の価格は、売買単位が、必ずしも明確に表示されているとは言えない。このことは、物価を他の地域と比較する際に、とりわけ、支障となるものである。しかし、このような場合には、価格を指数化するなどして、できるだけ、この問題を回避することとし、売買単位に、あまり拘泥しないようにした。

(2) 米、麦、綿の反当収量

つぎに、米、麦、綿の反当収量の系列について、二三述べておくこととしたい。

本付論では、米の反当収量を「反につき石」のかたちで表示している

が、史料「御月見日記」においては、「反につき石」と「反につき俵」の表示が混用されている。（たとえば、「六俵方式石迄」²⁵⁾（1784年）といった表現もみられる）。そこで1俵 = 0.4石として、俵から石へ換算することとし、米の反当収量を「反につき石」のかたちに統一した。したがって、さきの1784（天明4）年の反当収量は、最高値2.4石と最低値2石を単純平均して、2.2石とした。

史料には、明治期に「改正反別、壹反歩 = 付、半稻米式石六斗平シ・・²⁶⁾」という表現がみられる。したがって当地における江戸期の1歩（坪）は、明治以降の1歩（坪）（6尺平方）と異なり、6尺3寸平方であったかもしれない。そうだとすれば、当地における江戸期の1歩 / 明治以降の1歩 = $6.3^2 / 6^2 = 1.1025$ であるから、当地における江戸期の1反（300歩）は、明治以降の1反（300歩）に対して、面積は、およそ1割増しということになる。かりに当地における江戸期の反当収量が2石だったとしても、1歩 = 6尺平方の場合に換算すれば、 $2 / 1.1025 \approx 1.814$ 石に減少する。江戸期には、地域によって6尺平方であったり、6尺3寸平方であったりしたから、反当収量の地域比較を行なうような場合には、この点に注意することが必要であろう。なお、本付論では史料記載のままの反当収量を用いている。

米の反当収量を考える際に、もうひとつ注意すべき点は、米というのが、杮米か玄米かという問題である。そこで、本付論で得られた反当収量が、あるいは杮米収量ではないかという疑問についてすこし考えておきたい。史料「御月見日記」には、享保期（1716～35年）につきのような記述がある（下線筆者）。「稲作一毛ノ上、杮坪 = 付壹升三合五勺方壹升式合迄。中毛ノ上、坪 = 八合五勺方九合五勺。下ノ毛、八合方四合五勺迄」²⁷⁾。いま、最高値と最低値を平均することで、上田、中田、下田

ごとの坪当たり収量を計算し、さらにこの3者を平均したうえ、反当たり収量に換算すると、それは2.8石となる。しかしこの年は、「稻菫揚之節、稻青ミ付ニ付、見掛ヶ見事ニ候得共、取実無之」、「殊之外不作」と記されている。（享保期（1716～35年）の不作の水準は、1.6石ぐらいであると考えられるから、^{2,8)} 粳米収量は、一応およそ7～8割増しであったことになる）。すなわち、粳米収量は、「殊之外不作」でも、2.8石もあるわけで、本付論で得られた反当収量の系列（たとえば享保期（1716～35年）における不作の水準は1.6石ぐらい）が、粳米収量であるとはどう考えていられないのである。さらに、明治期の史料には、「玄米壹石ニ付四円貳拾錢ヨリ五円貳拾五錢位迄之昂低ヲ視ルベシ^{2,9)}」といった表現があるので、当野添村の米の反当収量という場合の米は、玄米であったと結論しておきたい。^{3,0)}

麦の反当収量の場合も、史料「御月見日記」においては、「反につき石」と「反につき俵」の表示が混用されている。（たとえば、「反ニ付七斗方四俵迄^{3,1)}」、「壹反ニ付三俵より貳石迄^{3,2)}」といった表現もみられる）。そこで、麦の反当収量も1俵＝0.4石として、俵から石へ換算することとし、「反につき石」のかたちに統一した。

綿の収量は、史料に、たとえば、「壹反ニ付十七八貫方四十貫迄取^{3,3)}」、「畑反ニ付五六拾貫迄^{3,4)}」のように記されているから、反当収量は、「反につき貫」で表示されていることになる。

(3) 米、麦、綿の作況

さてつぎに、史料から拾い上げた、米、麦、綿の作況にかんする評語（たとえば、「豊年」、「不作」のような）についても、二三説明をしておきたいと思う。

まず、米についてであるが、米の作況を4段階に分けることにした。「大宝年」、「豊年」、「万作」といった評語が記されている場合は、作況の評点を「4」^{3.5)}とした。以下同様にして、「中分」、「中年」のように書かれているときは、作況の評点「3」^{3.6)}、「不作」、「あしく」のように書かれているときは、評点「2」^{3.7)}、そして、「皆無」、「大不作」といった評語が記されている場合は「1」^{3.8)}とした。

なおほかに、作況にかんする評語は記されていないが、反当収量は記載されている年が若干ある。そこで、これらについても、当該年近傍の年で（近傍の年でなくてはならない）、作況と反当収量の双方が記されている場合を参考にして、当該年の作況の評点を判断することとした。たとえば、1762（宝暦12）年（中分、2.2石）と、1773（安永2）年（見かけよし、2.2石）は、いずれも作況の評点3と判断しているので、両年には含まれた、1767（明和4）年（2.2石）は評点3^{3.9)}とした。

定性的な評語を、数量化することについて、問題がないはずはないが、いまこの点は措くとして、ここでは、別の問題を指摘しておきたいと思う。史料には、「稲毛見事＝出来申……、七月方稲毛＝雲霞^{うんか}と申虫出来……、虫入申候^{4.0)}」、「稲毛見事＝候へ共大不作＝而^{4.1)}」といった記述がみられ、稲毛の善し悪しと、収穫の多寡に、食い違いもあったことが知られる。しかし、さきの作況の評点作成の際には、これらを便宜的に同一視した。というのは、うえにみるように、食い違いがある場合は、明記されることが多いのではないかと判断したからである。

麦についても同様の整理を行なった^{4.2)}。綿についても同様である^{4.3)}。このような作況の評点作成の作業を行なったのは、近世中後期における、農産物の豊凶変動、あるいは豊凶サイクル^{4.4)}を知りたいというのがひとつの目的である。それともうひとつは、農産物反当収量のできるだけ正確な

長期時系列を推計したいということがあった。ひとつだけ例をあげると、1796（寛政8）年の米の作況は、「中年」（評点3）で、反当収量は2.3石であった。それが27年後の1823（文政6）年には、作況はやはり「中分」であるが、反当収量は3石に上昇している。そこで、この兩年にはさまれた評点3の年の反当収量については、兩年の値を両端とする直線補間によって値を推定し、これを充てることが考えられよう。このような計算を繰り返して、農産物反当収量の長期時系列を推計することができたのである。

おわりに

さて、以上のような整理と加工をへて得られた、米、麦、綿、干鰯の価格、および、米、麦、綿の反当収量と作況の評語は、本付論末付表に一括して掲げておいた。

ところで、当野添村において、米、麦、綿といった農作物は水田（田方）、畑（畑方）のいずれで耕作されたであろうか、また、干鰯の施肥はどの作物に対して行なわれたであろうか。この問題は時期によっても異なっただけであろうし、また、この問題の解明は、史料「御月見日記」だけに拠ったのでは無理があると思われる。が、とりあえず、「御月見日記」の記述を中心に、この点について簡単な素描をあたえておくこととしたい。

まず米は無論、水田で作られた。そして肥料については、さきにも述べたように、例外的とはいえ「稲こへ干鰯切粉⁴⁵⁾」といった表現もみられるから、干鰯は、稲作に対しても投入されたことがわかる。また、のちに述べるように、干鰯は、水田裏作の麦に対して頻繁に投入されたから、

この結果、水田の地力が上昇し、干鰯は、間接的ではあるが稲作の肥料としても効果があったと考えることができよう。

ついで麦は、水田の裏作として作られた（水田二毛作）。この点は史料に「稲作跡麥蒔日(ママ)和り要敷、麥蒔七八歩跡、御同地荒田致、麥蒔後よりふりつゝき、初谷一圓いたし不申⁴⁶⁾」、「此年七月時分より日でりつゝき、又麥まきも三歩計りまきて、残りあら田也⁴⁷⁾」などという記述があるので、まず間違いのないところであると思われる。

もっとも、史料には見あたらないが、麦は水田だけでなく畑でも作られたという可能性も考えられる。しかし、のちにみるように、畑（畑方）では綿が作られたので、麦も畑（畑方）で作られたと仮定すると（畑二毛作）、綿の播種は、麦の収穫時期である5月以降ということになって、これは緊急の転作のような場合はともかく、一般的にはむつかしかったのではないだろうか。もっとも、麦を畑の裏作として作り、表作としては綿以外の作物を作るといったことも考えられないわけではないが、基本的にはやはり、麦はほぼ水田の裏作であったとしてよいと思われる。

なお、麦作に対しては、頻繁に干鰯を投入した。まず麦蒔きの際に元肥⁴⁹⁾として投入し、通常、年が明けて新しく干鰯が入ると、こんどは「上肥⁵⁰⁾」、すなわち追肥として干鰯を投入したのである。

綿は普通、畑で作られた。この点は史料に「畑木綿夏物不足⁵¹⁾」、「わた作はんけ、新畑わたむし入なし⁵²⁾」、「綿大豊年。川へノ畑貳拾貫方四拾貫迄、六拾目位⁵³⁾」などとありである。しかし当野添村^{かみだい}上代では、しばしば旱魃による水不足のために、田植えができないことがあり、緊急に田に、綿や雑穀を植え、いわゆる「一作畑」としたことがあった。したがって例外的とはいえ、水田に綿を植えたことがあったのである。たとえば史料には「田地根付ヶ時分、水無敷。山之代、鹿川代、根付ヶ

式丁余不成。大豆作、綿作仕付ヶ、然共殊之外、虫多ッ入、一節取実なく、綿作春うへかれ有。是ハ春さむきから成か、惣たい畑作大悪年也⁵⁴⁾」のような記述がみられる。

ところで干鰯は、綿作の肥料としてもちいられたと言われるが、史料に拠るかぎり畑（畑方）に干鰯が投入されたという事実を確定することはできない。が、やはり畑にも干鰯が投入されたと考えるのが自然であろう。また、早魃年における田方綿作の場合は、間接的とはいえ干鰯は、（麦作だけでなく）綿作に対しても効果があったと考えるべきであろう。

というわけで、さきに肥料価格と生産物価格との相対価格を検討した際には、一応、干鰯／米、干鰯／麦、干鰯／綿、いずれの相対価格についても検討の対象としたのである。

注

- 1) 「御月見日記」（兵庫県加古郡播磨町役場所蔵）。
- 2) 岩橋勝氏は、大略つぎのように述べている。「これまでもっとも良質な物価史料とされてきたのは、前掲『近世後期における主要物価の動態』であるが、長期連続してデータの得られるのは、享和以降である。ついで、前掲『近世大阪の物価と利子』収載のデータであるが、これは主に天保以降に限定される。しかも両者は、ともに上方のデータである。良質の物価データ（同一の史料源から得られた、しかも現実に市場で売買された価格データ）を、他の地域に求めるとなれば、新しい史料の発掘は、その必要性がますます叫ばれながら、ほとんどない。このように、今日の近世物価史研究の第一の問題点は、データ史料の収集と整備が研究者の

なんびとからも叫ばれながら、かならずしも作業がスムーズに進んでいないという一事であり、そのためには、（断片的かつ個別データを有効に利用できる方法の確立と）なによりもまず史料収集という地道な作業に、大勢が立ち向かう努力が要請される」。前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、25～26ページ。

- 3) 「朝日新聞／神戸版」、1983年4月16日。
- 4) 前掲『阿閑の里』、137～138ページ。
- 5) 前掲『阿閑の里』、151ページの表16、「古宮・新野辺組 畝高・諸運上・小物成控 — 嘉永2年 — 」による。なお、原史料は「大歳家文書」である。
- 6) 「御月見日記」、1897（明治30）年の条に、「本庄屋事 佐伯久吉」とある。
- 7) 「御月見日記」は、物価、反収、出来事等を、毎年1回記録しているが、内容の詳細さ（とくに数字）からみて、なにかもとになった帳簿類の存在が考えられる。
- 8) 山崎隆三氏はつぎのように述べている。「物価史料として最良のものは、商人・農民等の実際の売買記録で、各商品の単価で記されているもの、または売買の数量と価額から単価が計算できるものである。これは取引の実態をそのまま粉飾なく示しているものであるので、最も信頼しうるものであろう」。前掲山崎『近世物価史研究』、37ページ。
- 9) たとえば、山崎隆三氏は、随所で、要素価格（肥料、賃金）の連続的時系列史料を検討することの重要性について述べている。前掲山崎『近世物価史研究』、i ページ。前掲原田・宮本編著『歴史のなかの物価』、15～16ページ、86ページ。なお、干鰯価格は

幕末期について、前掲『近世大阪の物価と利子』に一部記載がある。さらに、もっと長期にわたる史料として、鶴岡実枝子「近世近江地方の魚肥流入事情」『史料館研究紀要』3号（1970年）が存在する。しかし、これら公刊データとの比較検討は、別の機会に譲りたい。

- 10) 干鰯の場合、例外的に、各年に複数の価格が記載されていることがあり、その場合は平均価格をとった。
- 11) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、283～288ページ。
- 12) 史料によると、麦は、（「小麦」を別にすれば）「麦」あるいは「麦安」と表記されていて、この両者は同一の麦を指しているものと思われる。「麦安」は（したがって「麦」も）あるいは裸麦を指しているのかも知れないが、その場合でも裸麦は大麦にはちががなく、結論として、麦は大麦であることにした。
- 13) 前掲『近世後期における主要物價の動態』。
- 14) 前掲『近世大阪の物価と利子』。
- 15) 前掲山崎『近世物価史研究』。
- 16) 前掲『近世後期における主要物價の動態』、2ページ。
- 17) 前掲『近世大阪の物価と利子』、107ページ。
- 18) なお、当野添村の麦価格（麦は大麦で、石につき銀匁と推測した場合の）を、前掲『近世後期における主要物價の動態』、および前掲『近世大阪の物価と利子』収載の大麦の価格（石につき銀匁）と比較してみると、野添村の麦価格のほうが、かなり高いようである。しかし、本付論ではこの点については触れない。
- 19) 前掲『岩光』、99ページにはそのような解釈が示されている。
- 20) この点については、前掲山崎『近世物価史研究』、276ページの記

- 述を参照した。
- 21) 「御月見日記」、1819（文政2）年条。ただし1818（文政元）年の事項。
- 22) 「御月見日記」、1832（天保3）年条。ただし1831（天保2）年の事項。
- 23) 前掲山崎『近世物価史研究』、2章2節。
- 24) 「御月見日記」、1720（享保5）年の条には「干鰯粉新銀ニ四升七八合ツ、ニ當り申候」、1742（寛保2）年の条には「干鰯粉壹匁貳升五六合」、1743（寛保3）年の条には「干鰯粉壹匁壹升七合方貳升迄」、1825（文政8）年の条には「干か粉當り、壹匁ニ付壹升四五合方貳升迄」、1828（文政11）年の条には「干か粉當り壹匁ニ付壹升三四合方貳升迄」と記されている。なお、これらの年について、うえに書き上げた干鰯価格の最高値と最低値の平均をとるだけでは、かならずしも本付論末付表の数字とは一致しない。
- 25) 「御月見日記」、1784（天明4）年条。
- 26) 「御月見日記」、1885（明治18）年条。
- 27) 「御月見日記」、1731（享保16）年条。
- 28) 「御月見日記」、1729（享保14）年の条には、「此年殊之外わる悪年ニ而候。水十分。八月十九日大風、九月十四日大水小じけ、其後又大水、稻毛中て、おくて大いたみ。米壹反ニ付三俵方上も五俵迄。但シ米ハ引わり之様ニ而、御藏手形三拾四五匁方段々下り廿六七匁迄ニ成り申候」とあり、反当収量は1.6石で、不作と判断される。あるいは、もうすこし下って、1745（延享2）年の反当収量は、1.5石で、この年は「大不作」と記されている。

- 29) 「御月見日記」、1885（明治18）年条。
- 30) なお、近畿地方における既存の反当収量のデータとしては、上瓦林村岡本家のもの（前掲今井・八木『封建社会の農村構造』、105ページ）、および、西昆陽村氏田家のもの（前掲山崎『地主制成立期の農業構造』、152ページ）が、知られている。前掲新保・斎藤「概説 一九世紀へ」、20ページには、これらのデータがグラフ化されている。
- 31) 「御月見日記」、1769（明和6）年条。
- 32) 「御月見日記」、1778（安永7）年条。
- 33) 「御月見日記」、1809（文化6）年条。
- 34) 「御月見日記」、1849（嘉永2）年条。
- 35) 作況の評点を「4」とした場合の評語を列举すれば、つぎの通りである。大宝（寶）年、豊年、万（萬）作、十分余、十（拾）分、よく九分、よし（よく、よき）、稲毛よし（よく、よろしく、宜敷）。
- 36) 作況の評点を「3」とした場合の評語を列举すれば、つぎの通りである。中分、中年、中作、中分方上、八九合、八ふん、見かけよし、稲毛中分、稲毛相應。なお、「御月見日記」、1739（元文4）年の条には、「七八月之頃、稲作殊之外見事。（中略）其後二百十日時分、中風いたし、大分稲作ニあたり、迷惑仕候」とあるが、とりあえずこの年の作況の評点は3とした。また、1766（明和3）年の条には、「五月根付水沢山。度、照り強ク末ニ而水不足。上溝其外、蓮池、北池、堀々土手付旱魃。城代、鹿川代、御見分御願申上候處、御代官様御當被遊、如何分ニも御上ニ仰られ候通ニしたかい、御なけき申上候へは、御すくい米として、御上

より上代九町四反九畝壹歩ニ、貳拾壹石 被下置、百姓悦申候。
 豊年米六表方段々有ル」とあって、「豊年」とは言うものの、旱魃による減免が行なわれており、反当収量も近傍年における豊作の水準に比して、とくに多いとも考えられないので、いちおうこの年の評点は3とした。

- 37) 作況の評点を「2」とした場合の評語を列挙すれば、つぎの通りである。不作（ふさく）、殊之外不作、七八分、七八分作、七分（歩）位、取り少々、取りすくなく、すくなし（すくなく）、あしく、殊外悪敷、いたミ、虫入、晩稲皆無、白穂、殊外之年柄、ひやけ、殊外大びやけ、大かんはつ、上やけ米、稲毛大いたみ、稲毛虫さし、稲花あしく。なお、1760（宝暦10）年は、「御見分御願申上、御用捨米三拾四石三斗被下」とあり、また、1780（安永9）年には、「旱魃。上代、下代、川西共所々大痛ニて御地頭様へ御願申。御見分請申、御引石被下置候」などと書かれているので、これらはいずれも作況の評点を2とした。
- 38) 作況の評点を「1」とした場合の評語を列挙すれば、つぎの通りである。皆無、大不作、白穂（一揆）、上やけ、大風五六度、大風稲毛いたミ、もみをち。
- 39) 評点3は、1767（明和4）年、1775（安永4）年、1784（天明4）年。評点2は、1772（安永元）年、1835（天保6）年。評点1は、1754（宝暦4）年である。
- 40) 「御月見日記」、1732（享保17）年条。
- 41) 「御月見日記」、1745（延享2）年条。
- 42) 作況の評点を4とした評語は、「大宝年、ほねん、万作、十分、殊外よく、よし（よく）」、3は、「中分（中ぶん）、中年、中

作、中之作、中取、八九合、取実有、見事＝相見へ、不作＝少よし、かり麥なかれ」、2は、「不作、殊外不作、殊外の不作、七分、七分之作、六分作、取実すくなく、あし（あしく）、殊外悪敷、悪敷、麦毛悪敷、かり麥なくし」、1は、「大不作、半作、半け、四歩作、式分半方三分」である。なおほかに、作況にかんする評語は記されていないが、反当収量は記載されている年が若干ある。そこで、これらについても、当該年近傍の年で（近傍の年でなくてはならない）、作況と反当収量の双方が記されている場合を参考にして、当該年の作況の評点を判断することとした。その結果は、評点4が、1772（安永元）年、評点3が、1760（宝暦10）年、1788（天明8）年、1835（天保6）年、評点2が、1769（明和6）年、評点1は、1807（文化4）年である。「取実無敷」という評語は3回でてくる。1774（安永3）年には、「麥作実入よろしく見へ、取実無敷、反＝壹石方壹石四五斗迄」（代表値1.25石）、1791（寛政3）年には「麥実入時分天氣あしく、新麥取実無敷」、1792（寛政4）年には、「麥取実無敷四俵方五俵迄」（代表値1.8石）と書かれている。が、史料自体がかならずしも整合的であるとは思えないので、ここでは反当収量その他を斟酌して、1774（安永3）年のものは評点2、1791（寛政3）年のものは評点2、1792（寛政4）年のそれは評点4とした。

- 43) 作況の評点を4とした評語は、「大豊年（大ほうねん）、大豊歳、豊年、法年、萬作、十分余、十分、よく九分、よし、能」、3は、「中分、中年、中作」、2は、「不作、不足、中分不作之方、七八分、あしく、悪敷」、1は、「皆無、大不作、大悪年、はんけ、虫入半毛、不作四分位、三分之作、くさり」である。なおほかに、

作況にかんする評語は記されていないが、反当収量は記載されている年が若干ある。これらについても、当該年の作況の評点を判断すると、評点4は、1830（天保元）年、評点3は、1823（文政6）年、1831（天保2）年、評点2は、1826（文政9）年、1834（天保5）年、評点1は、1835（天保6）年である。

- 44) さきに述べたように、植村正治氏は、播州農村（加東郡中番村）における小作人年貢納入量を、豊凶指標として利用し、寛政期（1789～1800年）以降明治までに、25年3周期の豊凶サイクルを見いだしている。前掲植村『近世農村における市場経済の展開』、151～158ページ。
- 45) 「御月見日記」、1722（享保7）年条。
- 46) 「御月見日記」、1772（³明和⁹）年条。
- 47) 「御月見日記」、1842（天保13）年条。
- 48) 麦はいずれにせよ冬作である。史料には「申ノ五月麥作よし」（1728（享保13）年条）、「五月麥作よく候」（1735（享保20）年条）、「五月新麥貳拾五匁方段々と」（1754（宝暦4）年条）などと記されている。
- 49) 史料には、「麥蒔干鰯粉」、「はたほしか」、「麥ノはだこへ干鰯粉」、「はた肥」、「麥肌肥干か」などと記されている。
- 50) 史料には、「干か粉上こへ」、「麥上肥干か」、「麥上ごへほしか粉」、「麥上肥」、「麥上こゑ」などと記されている。
- 51) 「御月見日記」、1725（享保10）年条。
- 52) 「御月見日記」、1728（享保13）年条。
- 53) 「御月見日記」、1766（明和3）年条。
- 54) 「御月見日記」、1727（享保12）年条。なお、さきにも述べたよ

32字×25行＝800字

うに、^{かろだい}上代とは、山代、高松、宮裏、鹿ノ川などの小字を指す。
(前掲『岩光』、95ページ)。

付表 (その1) 米、麦、綿の価格、収量、作況および干鰯価格

年次	米			麦			糸綿			干鰯
	価格 石につき き銀 ¹⁾	収量 反につき き石 ²⁾	作況	価格 石につき き銀 ³⁾	収量 反につき き石 ⁴⁾	作況	価格 銀 ⁵⁾	収量 反につき き貫 ⁶⁾	作況	価格 銀1匁 につき ⁷⁾
1720(享保 5)	50		稲毛よし						中分	4.75
1721(6)	70		大風稲毛いたミ			麦毛悪敷			皆無	5
22(7)	67.25		豊年			よ悪敷			よし無	4.75
23(8)	42.5		稲毛よし	35.5					皆不	4.75
24(9)	36.75		皆無	24						
25(10)	46.75		稲毛虫さし							
1726(11)	46.25		上やけ米							
27(12)	41.75		大宝年	34.75		大宝年	39		大悪年	5.6
28(13)	36.25		八ふん	24		よし	39		大はん	6.45
29(14)	34.5	1.6	稲毛大いたみ	18.875		悪敷	27			5.65
30(15)	33.5		稲毛よく			中分			皆無	6.5
1731(16)			殊之外不作	21.5					くさり	5.35
32(17)	42.5		虫入	39.25		取実すくなく			中分	5.2
33(18)	67.25		よ	65.5		あしく			皆無	4.75
34(19)	35.75		稲毛中分			かり麥なかれ			皆皆	4.75
35(20)	37.5		稲毛よろしく	21.5						
1736(元文 1)			すくなし						皆無	
37(2)	32.2		よし			中分			皆よ	2.45
38(3)	71		大作	63.5		悪七			悪敷	1.85
39(4)	78.5		七歩位	58.5		悪七	135		悪敷	2.15
40(5)	76.75									
1741(寛保 1)	83.5		七分位			半け			中分	2.25
42(2)	72.5			57.5						2.35
43(3)	62.5	1.6	すくなく			取味有			中分	2
44(延享 1)			晩稲皆無			取大悪			皆無	
45(2)	77.5	1.5	大作	67.5					能	
1746(3)	75		七八分	74.5		殊外悪敷			七八分	
47(4)	63.5	1.6	殊外悪	42.5	3	殊外よく				4
48(寛延 1)	65.25		白穂	37.5		中分			虫入半毛	3.5
49(2)	61.75		あしく	38.5		あしく			不作	2.65
50(3)	70	1.6	大作	46.5	1.3	大作				
1751(宝暦 1)	50		よし	46		不作二少よし				
52(2)	44	1.4	上やけ		1.2	大作				
53(3)	41.5		十分	27.5		中分			皆無	2.75
54(4)	44.5	1.4		25						3.65
55(5)	63.75	2.4	豊年	34.5						4
1756(6)	69	1.8	不作	51.5		不作			不作四分位	2.65
57(7)	59	2.5	豊年	57	1.1	大作				2.35
58(8)	60.75		中分	41	1.2	不作				2.9

付表 (その2) 米、麦、綿の価格、収量、作況および干鰯価格

年次	米			麦			綿			干鰯
	価格 石につ き銀 ¹⁾	収量 反につ き石 ²⁾	作況	価格 石につ き銀 ³⁾	収量 反につ き石 ⁴⁾	作況	価格 銀 ⁵⁾	収量 反につ き ⁶⁾	作況	価格 銀1匁 につき ⁷⁾
1759(宝暦 9)	55.5		いたミ	35	2.25	中分				2.25
60(10)	49.25			31.5	2					2.95
1761(11)	46.5									3.25
62(12)	62.45	2.2	中分	32						2.75
63(13)	61			30						2.65
64(明和 1)	56.25		稲毛相應	40				中分不作之方		2.75
65(2)	61		稲毛中分	47.5		不作	64.5	大不作		2.25
1766(3)	59.5	2.4	豊年	57.5			65	30 大豊年		2.15
67(4)	71.5	2.2		56		十分				2.7
68(5)	71			49		かり麥なクし				2.25
69(6)	73		白穂	62.5	1.15		57.5	中		2.5
70(7)	67.25			66.5						3.55
1771(8)	64.75		殊外之年柄	48.75					皆無	2.7
72(安永 1)	57.5	1.8		33	2		77.5		皆無	3.15
73(2)	54.5	2.2	見かけよし	45			60		皆大豊	3.5
74(3)	50.75		中分	42.25	1.25	取実無數	64.5		大ほうねん	2.5
75(4)	51	2.3		41	1.6	中分	62.5		中	2.6
1776(5)	57.75		中分	47.75	0.85	大不作	67.5		豊年	1.85
77(6)	63.25		稲毛宜敷	55		中之作	42.5			2.2
78(7)	56		中分	37.75	1.6	見事二相見へ	40		不作	
79(8)	48.25		中分方上	28.5		中分	66		あしく	3.35
80(9)	48			31.5		中	58.75		豊	2.45
1781(天明 1)	50		取みすくなく	28.5		中				2.2
82(2)	58.75		あしく	34.5			120		皆無	2.2
83(3)	82		あしく	62.75		中分				2.15
84(4)	117.5	2.2		97			120		三分之作	2.1
85(5)	66.25	2.75	豊年	53						1.9
1786(6)	63.75	2	殊之外不作	66		不作				1.85
87(7)	127.5		中分	107.5		式分半方三分			豊年	
88(8)	66.5		七分位		1.3		115		豊不	1.75
89(寛政 1)	64.25									
90(2)	57			39.25						1.9
1791(3)	61		不作	35.5		取実無數				1.75
92(4)	75.5	1.35	大風五六度	57.25	1.8	取実無數	65			2.25
93(5)	82.75	2.5	豊年	72.5		大不作	67.25		豊年	2.1
94(6)	62		大かんはつ	57.5			65		中	2
95(7)	66.5			46.5		中	80		不作	2.15
1796(8)	72	2.3	中	45.5			65		中	
97(9)	68.75		七八分作	37.5		七分之作	65.5			1.95

付表 (その3) 米、麦、綿の価格、収量、作況および干鰯価格

年次	米			麦			綿			干鰯
	価格 石につき 銀匁 ¹⁾	収量 反につき 石 ²⁾	作況	価格 石につき 銀匁 ³⁾	収量 反につき 石 ⁴⁾	作況	価格 銀匁 ⁵⁾	収量 反につき 石 ⁶⁾	作況	価格 銀1匁 につき ⁷⁾
1798(寛政10)	65.5		八 九 合	48.75		八 九 合				2.3
99(11)	61.5		ひ や け	55.5		中 ぶ ん				1.65
1800(12)										
1801(享和 1)	78.5									1.75
02(2)										
03(3)	57.5		殊外大びやけ			殊外の不作				1.55
04(文化 1)	57		稲花あしく	38.5		殊外不作				2.7
05(2)				47	0.95	殊外不作				2.15
1806(3)	58	2.75	万 作	41.5	1.3	中 年	51	21	法 年	2
07(4)	64.5			41.5	0.75					2.1
08(5)	77.5			48						1.8
09(6)	75.5	2.5	よ き	44.5				28.5	豊 年	1.75
10(7)	61.5			54						2.15
1811(8)				48		中 年				2.45
12(9)				51						1.75
13(10)			取み少々	37.5						1.75
14(11)	62.5		萬 作	48.75						
15(12)	78.5									1.85
1816(13)	63			44.5						1.85
17(14)	67.5			48						1.75
18(文政 1)	55.25	2.9	よ く 九 分	42.5			47	32	よ く 九 分	2.85
19(2)							46.5			3.55
20(3)	52.5			34.5						2.95
1821(4)	54.5		中 年	31.25			57.5			2.7
22(5)	60	3.1	十 分 余	35			57.5	30	十 分 余	2.8
23(6)	68.5	3	中 分	43				27		2.25
24(7)	57.5		拾 分	43.5		中 分				3.25
25(8)	60			42.5						1.7
1826(9)								20		
27(10)	62.5			51.5						2.25
28(11)	72.5	2.1	大 不 作	50.5			84.5	13.5	大 不 作	1.9
29(12)	76.25		大 不 賣 年	42.5		中 分				
30(天保 1)	75.5		不 作	42		中 分	84.5	37		2.3
1831(2)	88		中 年	54.25		中 年	94.2	32.5		
32(3)	72.25			57.25						2.75
33(4)	97.25			71.25						
34(5)	97.25			88.25			75	22.5		1.8
35(6)	81.75	2.3		57.5	1.1			12.5		1.8
1836(7)	108.5		不 作	83.5		中 年				2.15

付表 (その4) 米、麦、綿の価格、収量、作況および干鰯価格

年次	米			麦			糸綿			干鰯
	価格 石につき 銀匁 ¹⁾	収量 反につき ²⁾ 石	作況	価格 石につき ³⁾ 銀匁	収量 反につき ⁴⁾ 石	作況	価格 銀匁 ⁵⁾	収量 反につき ⁶⁾ 石	作況	価格 銀1匁 ⁷⁾ につき升
1837(天保 8)	225			165			200			1.45
38(9)	100		ふ さ く	70						1.75
39(10)	85		中 作	60		中 作				
40(11)	66		中 作	48.75					中 作	1.75
1841(12)	73.25	2.2	不 作	60	0.75	半 作	90			
42(13)	69.75			55		四 歩 作	97.5			
43(14)	72.5			63			110			1.55
44(弘化 1)	79		十 分	47.5		ほ ね ん	102.5		十 分	
45(2)	85.75			45.75						1.3
1846(3)			不 作	50		六 分 作			不 作	
47(4)	86.25		大 不 作	60		六 あ 不 中 作			大 不 作	
48(嘉永 1)	86.75			77.25						
49(2)	91	2.2	不 作	65		中 取	105	55	萬 作	
50(3)	125		も み を ち	86.25			135		萬 不 作	
1851(4)	116.25		中 年	98.5	0.95	不 作			中 年	
52(5)	85.5			65.5						2
53(6)	91.25		不 作	65	1.6	万 作				1.65
54(安政 1)				80						
55(2)										
1856(3)										
57(4)										
58(5)										
59(6)										
60(万延 1)										
1861(文久 1)										
62(2)	135			123.75			180			
63(3)	177.5			140			180			0.475
64(元治 1)										
65(慶応 1)										
1866(2)										
67(3)										

注 1) 「石につき銀匁」であると推測される。本文参照。

2) 米は玄米。なお、「反につき俵」で表示されている場合は、1俵=0.4石で換算して、「反につき石」の表示に改めた。本文参照。

3) 麦は大麥で、「石につき銀匁」と推測。本文参照。

4) 「反につき俵」で表示されている場合は、1俵=0.4石で換算して、「反につき石」の表示に改めた。本文参照。

5) 実綿「1本(40斤)につき銀匁」であると推測される。本文参照。

6) 本文参照。

7) たとえば、史料 1825(文政8)年の条には「干か粉當り、巻匁=付巻升四五合方式升迄」と記されている。本文参照。

(出所)「御月見日記」(兵庫県加古郡播磨町役場所蔵)。

付 録 史料「御月見日記」全文

はじめに

ここで、本研究でもちいた史料「御月見日記」の全文を掲げておくこととしたい。もっとも史料「御月見日記」は、すでに播磨町野添土地地区画整理事業完工誌編集委員会編『御月見日記』として活字化されている¹⁾。が、この完工誌編集委員会編『御月見日記』は、当時僅少数が印刷に付され関係方面に配られたもののようで、いまではこれを入手するのが困難になっていると思われる。そこで本付録において、史料「御月見日記」全文を再度活字化して、広く利用に供することとしたい。

今回解説活字化するに際しては、無論完工誌編集委員会編『御月見日記』を大いに参考にさせていただいた。委員会編『御月見日記』は実に丹念に解説されていて、筆者ごときは学ぶところまことに大なるものがあった。しかし、誤読あるいは印刷の誤植と思われるものなど、問題がまったく無いというわけでもなかった。そこで、今回一層の正確を期するよう努めたが、それでもなお誤読あるいは誤植等が忍び込んでいるのではないかと恐れている。大方のご教示を乞うしだいである。

凡 例

- 1 できるだけ原本の体裁に従うことを原則とした。
- 2 原本中の旧漢字、異体字、略字等は、原則としてそのままとした。
- 3 明らかに誤字と思われるものについても修正しなかった。また誤字を含め、一般に原本の文字が疑わしい場合は「(ママ)」とした。
- 4 仮名遣いは原本のままとし、片仮名は(「ミ」なども含め)そのままもちいた。変体仮名は原則として平仮名に改めたが、「𪛗」、「𪛘」などはそのままにした。
- 5 欠損、摩滅の部分および判読不能の文字は、□□□のように示したが、必ずしも字数に対応させることはできなかった。
- 6 読みやすくするために適宜句読点をほどこした。文が長いときは、言い切りになっていない場合(連用形)でも句点「。」をつけた。
- 7 見やすいように、原則として各年ごとに空白行を挿入し、また(初出の)年に網かけをした。
- 8 欄外に記されているものについては、原則として当該年の末尾に字下げをして書くこととした。

注

- 1) 播磨町野添土地区画整理事業完工誌編集委員会編『御月見日記』
(播磨町野添土地区画整理組合、1984年3月) [非売品]。

「御月見日記」全文

一、昔より毎年正月十五日之朝、月の入所ニ而、其年世の中、善悪あるひハ洪水、大風、又日てりなど、ためし候を書しるし置不申候。

一、享保五年庚子より、改、書しるす者也。

同子正月十五日朝、月の入処ハ、蓮華寺林之内門□通。併、其夜雨ふり候故、入処しかと見へ不申候。□水有之候故、稲根付心安いたし候。それより六月中旬より日てり出し、七月廿七八日ニ雨少ふり、それより次第ニふりつき申候。夏物悪敷、稲毛よし。木綿中分、米直段新銀ニ而五拾目。新米方其暮迄高下なし。干鰯粉新銀ニ四升七八合ツ、ニ當り申候。

一、同子年夏、日てり故、樋ノ口より本庄さかいまでかへ、どて十五ヶ処、堀、昼夜ニかへ生ケ申候。其外村中堀々昼夜かへ申候。

一、享保六年丑正月十五日朝、月の入所蓮華寺森ノ北、五六間計へ入申候。正月四日北風吹、みつとの亥、大歳の夜しつかニて北風、節分も、十五日も同前。正月十九日四ツ時分、戌亥ノ方、大キに一ツなり申候。二月より日てり、麥毛悪敷、根付水不足。それよりふりつき、水多し。閏七月十日、但し、二百十日ニ當ル日から大風吹、稲毛いたミ、なた筋ついほう。御年貢大分ひけ申候。木綿皆無、但、關東、四國、中國大洪水。米段々高直、新銀ニ七拾目仕候。但、上銀也。

一、享保七^(ママ)辛寅年正月十五日朝、月ノ入蓮花寺森之北はずれ。前、十四日方雨ふり、月しかとハ見へ不申候。

一、同年節分ハ前之極月十九日北風吹、大歳ハ地嵐ニ而しつか也。正月十四日小雨ふり、同二月西にかミなりなり時雨、それより日てり、同廿六日ニ雨ふり、麥作ために大分よく、世上之人悦申候。然共段々賣買高直にて、世間大分ニつまり申候。米直段八拾五匁くらい。

同五月根付水沢山ニあり、夏分も細々雨ふり水十分。夏作よし。稲毛中分、但、天下豊年。賣買新米五拾貳三匁方四拾六七匁。年内ハ五拾匁くらい。稲こへ干鰯切粉、五升平し。麥蒔干鰯粉五升。但、蒔ばた上こへ共平し。

一、同寅ノ歳豊年故、御殿様へ為御悦、三步米指上ケ可申と願申所ニ、御悦被遊、壹歩半差上ケ申様ニ被仰付、則指上申候。江戸御悦之御沙汰有之由。

榊原式部太輔様御哥ニ、

國富るしるしの見へて民の子か

はこふ貢の數もあまれる

ためしにハはこふ貢のいやまして

たもてる國そ久しかるべし

皆高野山もんしゆ

無量壽院

一、享保八年癸卯正月十五日朝、月入所蓮華寺森より森たけ北ニ入時分ハ、東しらミ、節分ハ大廿日也。地嵐ニ而長閑也。元日少東風吹、二日ニ少雨ふり、七日夜大雪ふり、それ方二月十一日迄天氣悪敷、上こへふりすて。

一、正月方賣買段々直段二月中旬、米四拾貳三匁也。麥安三拾五六匁、干鰯下直。麥作悪敷、根付水有。夏分も水沢山、稲毛よし、木綿よし。

一、享保九年甲辰正月十五日朝、月入所新野邊觀音堂森。但、蓮花寺森北へ森壱ツ半程へ入。但、月之入時、日月にらミ、相壱間程＝而入。月之いり明き也。但、大歳ノ夜雨ふり、夜八ツ、西＝雷なり、南光り、少地震。元日東風吹。去ル八月ひかん時分方雨ふらず。小雨少々ふり、辰二月十四日＝雨ふり、うるひたらず。

賣買米三拾五六匁、麥安廿四匁、大豆卅目くらい。干か粉四升五合より五升くらい。

同辰春日てり、根付なく、野添村上代根付不仕。二子、二見、明石郡、加古郡道上同前。夏分てり通し、大豆、蕎麥仕付申候へ共、やけ申。田畑不殘皆無。百年以来不覺大日てり＝而御座候。併井懸りハ、水沢山＝有之候。

冬分米卅八匁、春分五十匁。

一、享保十年巳正月十五日朝、月入処蓮花寺森真中。月之入おそく、出日と向入申候。正月朔日晚、雨少ふり、それ方ひかん迄、雨不降候、少ツ、時雨ハあり。ひかん之内雪ふり申候。

一、四月、五月ふり續、五月水沢山。六月土用方八月迄日てり、畑木綿夏物不足、稲毛虫さし、大形日本國同前。

米四十三四匁、春五十式匁。

一、享保十一年午正月十五日朝、月入所蓮花寺森之北はずれ。入時分夜明ヶ、正月十四日夜雨。同十五日四ツ時分、瀬戸方南海大かミなり。二月、三月、四月時分之雨有。少水すくなく、五月ね付之時分雨降上田井ね付有。五月中＝雨降、上代ね付あり。六七月、八月大キ日てり。早セ

かり後ニ水かへ申候。あつき、そば少も無之、米賣買秋三拾七八匁、四拾貳三匁、せつき四匁。右八月せつ中、雨無之、九拾五日日てり、上やけ米、世中あしく。

一、享保十二年正月十四日夜、十五日朝、月入處蓮花寺林方又森だけ北、入時分夜之内東明り前。同正月朔日、少じしん有、四つ時分。又、正月天氣よし、同正月麥こやしよし。閏正月十日方度々雨ふり、三十日麥ノ中へ不入。二月、米ねたん四十五匁、干か粉五升後六升方貳合。四月麥はざかい迄、麥安直段三拾七匁、高下無之。新麥作実のり時分、天氣能、麥大宝年也。田地根付ヶ時分、水無數。山之代、鹿川代、根付ヶ貳丁余不成。大豆作、綿作仕付ヶ、然共殊之外、虫多ク入、一節取実なく、綿作春うへかれ有。是ハ春さむきから成か、惣たい畑作大悪年也。六月どやうの前に、長雨降し故か、いね作大宝年也。新米三拾七八匁、夫方少之間ハ、冬分四拾匁くらい。御勘定御手形四拾貳匁七分ニ村分定、ひめし相場四拾貳匁位、十二月廿日頃迄仕ル。夫方春掛ヶ而、物相は安ク、木綿三拾八匁方四拾匁位迄。但シ冬分かんやわらかにて、麥かぶ大キク、八月、日てり。村々御林之やぶ百姓面々ニ、新かいに仰被付候。御殿様御入部被成、若殿様代也。

一、享保十三年申ノ正月十四日夜、十五日朝、月入處蓮花寺林方北ニ入。入時分東あかり、雲なく明らか成事めつらし也。大曆南風吹キ、大雨降、朔日朝四つニはれル。二日方三日大西風、雪降殊之外さむく、冬分ニ無之かんし様也。本庄村、二見村はま邊しやく大分寄きしニ成ル。夫方二月十九日のとか成ル。干か粉上こへ六升四五合ニ當ル。米三拾七匁位、麥安貳拾七匁位。未ノ暮ニは、延ひ候而三拾貳三匁ニ而相手なく、春ニ至貳拾

四五匁＝而よくさはけ、申ノ五月麥作よし、ねたん新麥安廿一匁。秋いね作八ふんノよの中。わた作はんげ、新畑わたむし入なし。新米三拾貳匁。江戸大水＝而、九十月米高く三拾九匁八匁まで成、しほ高く、冬分古米多ク三拾六匁＝下ヶ、麥貳拾三四匁下り、又酉ノはる段々下り。

一、享保十四年^(ママ)乙酉 正月十五日、月入所新野邊くわんおん林高ミ、入時分東明り＝はやく、くもりなし＝入。麥、米段々下り、麥安廿壹匁五分、米三拾四匁五分、干か粉五升五合方七八合。麥作悪敷候へ共、段々春末、麥安十七八匁下り、出来麥直段同前。五月根付水不足＝候へ共、段々夕雨仕、水沢山＝罷成候。六月廿一日四ツ時分方七ツ時迄、大夕雨、水三寸四五分、又ハ四寸四五分迄ふり申候。其時大^{がミなり}雷り四つ半時方八つ時迄、方々へ大分あまり、凡、此あたり廿四五所＝而候。又七月三日ノ夜、八つ時方七つ過迄、又大がミなり、當村へも前後十所計落、其方所々方々、御祈祷色々仕候。此年四月十七日、長崎方ざうと申けもの大還を通り、御公方上り申候由。此年殊之外^{わる}悪年＝而候。水十分。八月十九日大風、九月十四日大水小じけ、其後又大水、稲毛中で、おくて大いたみ。米壹反＝付三俵方上も五俵迄。但シ米ハ引わり之様＝而、御藏手形三拾四五匁方段々下り廿六七匁迄＝成り申候。麥安拾八九匁方廿匁くらい。綿貳拾五六匁、廿八九匁迄。此年ノ麥蒔如何成方＝も、干鰯肥少も入不申候。皆々すまき仕候。

一、享保十五戌ノ歳正月十五日、月入所蓮花寺ノ森ま中程。入時分東じらみ方少おそく御座候。正月二日、三日大雪。其方日和よく、正月末、二月十日頃迄、時々雨ふり、干鰯六七升位ィ。ひかん方天氣よく、麥作中分。五月迄天氣つゝき、節入大雨ふり、根付水沢山。それ方七十日て

りつゝき、上代水かへ。七月廿四日ニ大洪水ニ而、一夜ノ間ニ、雨水風呂ニ一はい、ふり申候と承候。大水、明石郡森田村家つふれ大風ニ而、又八月大水。此年八九月方、霜月極月迄、日本國人、不殘風ヲ引、又不殘はしか仕候。稲毛よく、夏物、木綿皆無。新米三拾三四匁、段々下直ニ罷成、御藏米手形式拾三四匁迄ニ罷成申候。世上殊之外指詰り申候。此春小竹^(ママ)ニ十年子出来、野小竹迄うせはて申候。

享保十六年正月十五日ノ朝、月ノ入所蓮花寺森ノ南方三分。月入時分、東しらミ入、天氣よく、かけくもりなし。正月三ヶ日天氣のとかにて、それ方又大西吹、ねはん迄殊之外さむく、此年、川原ニ板ばしかけ申候。干鰯粉四升七八合方六升迄。姫路御手形、冬分ハ廿四五匁いたし、春ニ成り段々さがり拾七匁くらひ成り申候。是ハ平米と拾匁もやすく候。此義手形多ク御藏米出入なく故也。麥安廿方二三匁仕候。五月根付水沢山ニ而、稲作、綿作見事ニ出来候得共、八月大雨、七日八日ふりつゝき、夫方三十日計、天氣悪敷事、近代ニ無之候。早稲方、中稲、後稲までも殊之外不作。綿くさり申候、少もとれ不申候。此年春法仕、式分之加免ヲ被仰付候。百姓難儀仕候。御手形三拾式三匁方廿六匁迄。冬中大西ニ而大坂上り舟、霜月指入方、下り舟無御座候。明ル正月朔日、二日ニ、下り日和御座候。正月朔日天氣よく、二日大雪壹尺余りふり、麥安三拾日方三拾三四匁位、干鰯六升方四升四五合。右秋洪水ニ付、川筋堤いたミ、御普請御願申上、杭はと石垣出来仕候。稲作一毛ノ上、初坪ニ付壹升三合五匁方壹升貳合迄。中毛ノ上、坪ニ八合五匁方九合五匁。下ノ毛、八合方四合五匁迄。しかしなから稲苜揚之節、稲青ミ付ニ付、見掛ヶ見事ニ候得共、取実無之、上ハ代ニうんかと言ふ稲ニ病付クぬか掛たる様成物也。

享保十七年正月十五日、月ノ入所蓮花寺森ノ門の高松入。かゝり雲少かゝり申候。冬分^方正月中雨堅々、二月入と雨ふり申候。三月、四月雨ふりつゝき、よき麥ほと取実すくなく、出来麥^方段々高値、三拾目^方夏分三拾四五匁仕候。春分五郎池、蓮池、をろしか池普請仕、植水沢山、稲毛見事ニ出来申、夏作見事候へ共、七月^方日てり仕、大豆皆無、綿中分。七月^方稲毛ニ雲霞^{うんか}と申虫出来、九州ハ、畝草、山ノ木の葉までもかれ申、稲一本も実のり不申候由。當國明石郡三万石も虫入申候。新米四拾貳三匁^方段々高値ニ罷成、九十月、霜月、極月御手形八拾目位イ。麥安六拾三匁、正月中頃七拾七八匁位。米、八九拾目、百目迄。冬分^方日てりつゝき、麥、日かんまで、はへ兼申候。

享保十八年丑ノ正月十五日、月の入所宮西、ふるこまん中。入時分、明六ツはれやか成、入きわ。去冬^方日本國大きゝんにて、うへ人あまたあり。殿様^方御見分被遊、壺人ニ米三匁つゝ被下、御奉公様御留りニ而、かゆを被下候。御まはり之村々壺人ニ壺分宛被下、それゆへ、ねはん齋えんりよ仕、夕食ニ仕候。諸國ニ小豆、大豆、そは、天^方ふり申候と言ふらし申候。又、かん野常光寺ニ松ノ木^方三つ出申と言ふらし申候。

丑ノ三月十一日ニ大かミなり、又、四月せつ之日、ひやうふり、かけ目壺貳匁位^方七八匁迄有。麥ニ殊外當り申候。麥作あしく、出来麥五拾三四匁仕申候。それ^方段々下直ニ罷成り申候。稲秋同國よく、米四拾四五匁^方段々下直ニ成り申候。寅ノ正月十五日、月ノ入所、宮西、^(ママ)ふりこ中所へ御入被成候。水沢山、風ふかす、稲毛中分、綿作皆無。賣買ハ、米三拾七匁八匁^方四拾目迄。新米三拾五匁壺匁迄。春ニ成、麥貳拾壺貳匁ニ成申候。干鰯四升五合^方五升迄。此年大師九百年忌、高野參候。

享保廿年

卯ノ正月十五日、月の入所蓮花寺森ノま中。正月早々方二月中比迄、雨段々ふりつゝき、麥肥、こやし共、少もなり不申候。正月二日五つ時、ぢしんゆり申候。水沢山、五月麥作よく候。五月大水ニ而かり麥大分なかれ、明石郡別而池々つふれ、田地苗代なかれ、爰元ニも、苗ノあまりをあつめ置申候。夏分水沢山、稲毛よろしく、新米廿七八匁と申候へ共、三拾貳三匁仕候。十月十日ノ月入時分、夜ル大き成にじたち申候。それ方賣買殊之外上り、四五日之内、四拾貳三匁ニ成申候。綿皆無、そばニ虫出来、後ニハ、木迄喰仕舞候。此歳御そくい。霜月十一日、錢八拾一文ノ遣、俄ニ六拾四文ニ成、右之錢、御そくいニ付高直ニ成申候。御公儀様、米直段相究被成、三拾貳三匁之時、四拾二匁被仰付候。段々年内、四拾八匁迄被仰付候。寒内春迄氷なく、あたゝか也。三、四月犬やまいはやり、此病イ犬ニ喰付レ人は、是非其年中死申候。

享保廿一年たつ正月十五日、月入所蓮花寺之門と、ふることの間。よこ雲引候へ共、入方明らか成ル。水沢山、米見分方すくなし。綿皆無。夏物水ニ而不作。銀中銀ニなり、六月十五日方中銀遣ニ被為仰付候へ共、段々相延、極月ニ少々取遣り御座候。御手形三拾四匁。此年六月ニ年号改り元文、中銀ニ文ノ字を被為打候。秋末方冬中雨堅ク候。あけのとしまで日和堅ク。

元文二年巳ノ正月十五日の朝、月の入所蓮花寺森ノま中。東しらみ、正月十日比より西大星方下南ニけむり星出、正月廿四五日比迄見へ申候。春早々方度々大雪ふり、麥作中分、水沢山、稲作よし、綿作よし。七月

＝牛ノやまい、いつくまでもはやり候へ共別条なく、天氣なみよく、米廿九匁四五分方三拾目、節季四五匁と申候。麥蒔以後ハ天氣悪しく、其後又よき天氣之時分、霜月廿日過方閏霜月中比迄、大朝やけ、又宵やけ甚敷、火事かと申様＝きやうてん仕候。其後大雨ふりつゝき、麥うい谷もかき不申候て、すくに干鯛谷かき申候。

元文三年正月十五日、月の入、蓮花寺門の前、雪ふりしかと相見へ不申候。水沢山＝麥作悪敷、夏ばく悪敷、麥四拾四五匁方段々高直＝成、綿作悪敷、稲作大不作。新米五拾四五匁方段々、冬分八拾七八匁、干鯛弐升四五合、御手形九拾四五匁方百目ノ上仕候。此霜月中旬、だいじやうゑと申て、天子、日本國中大小之神祇御祭有之候。此間あたゝかにて、寒之内近年之大寒仕候。麥安八拾三匁仕候。

元文四年正月十五日之朝、月ノ入所、蓮花寺森ノ北はつれ、入時少早し、少ま内。麥上肥干か壺升七八合方弐升。日和まんよく、麥こやしよく仕、春分賣買少下直＝成申候。米八拾目位、麥七拾弐三匁位イ。麥作七分、出来麥七拾弐匁方段々下直罷成、土用干仕候而も五拾壺弐匁仕候。五月方水沢山、夏少日でり、上ハやけいたし候へども、其後たんへ降次水有之候。新米八拾三四匁位方たんへ下り七拾匁位。御藏手形八拾五六匁位。冬分雨降續、麥こやし一圓不仕候。春分干鯛入申候時＝、天氣よく、不殘こやし見事＝仕候。寒中日和あたゝかにて、西ノ風吹不申候。大晦之夜半前、神雷仕候。正月朔日殊之外あたゝかに有之候。それより余寒殊之外いたし申候。

元文四年七八月之頃、稲作殊之外見事。世上悦いさミ、當村＝も村中いわひに、御日待いたし、大寺＝て、おとり仕候。其後二百十日時分、

中風いたし、大分稲作ニあたり、迷惑仕候。

元文五年正月十四日、月之入所、蓮花寺森ノ北三間程、明六ツニ入ル。まへ少シ被成御入り、春、日でり。二月朔日四つ半ちしん仕候。又夜五ツ時ちしんいたし申候。麥上ごへほしか粉壹升八九合より後たんへ下直罷成、貳升五合迄に罷成候。二月中頃、米七拾三四匁、麥六拾五六匁位。冬分方日和段々悪敷、麥しやうやく不仕。ほしかうい谷ニ入草大分ニ出来、それゆへ麥作悪敷、出来麥五拾匁方二三匁位仕申候。五月水沢山ニ有、根付時分ニいたし候。六月十日ニ大雨ふり、洪水仕申候。又七月晦日方大雨ふり、かミなりなり大洪水いたし、後ノ七月朔日ニ川筋所々きれ、田畑痛、難義致シ、八月四日方六日迄大雨ふり、洪水仕申候。御普請大分御座候。稲作七歩位なり。木綿悪敷、米八拾匁方段々高直ニなり、手形九拾四五匁位仕申候。木綿百三四拾匁仕申候。酉ノ、

一、正月十四日、月ノ入所、蓮花寺森之真中、御入様、清天ニ而心よく悦申候。麥上ごへ干か粉、貳升方貳升五合迄ニ當り申候。春分賣買段々高直ニ成り、世上ニ難義致し申者、有之候。其後天氣能、麥こやし見事に仕、下草大分能候へとも、実入時分雨降、麥ミ入あしく、麥半けニて、大分百姓難義仕候。五月根付水中分、末ニて少、水すくなく、稲作七分位。木わた中分。新米八拾三四匁方段々下直罷成、春分六拾五六匁迄ニ罷成候。麥安五拾七八匁。ほしか粉上ごへ貳升五合方七分^(ママ)。はたほしか貳升位仕候。酉ノ三月方寛保元年ト罷成、其節上方かちまと申所ニて、づく錢吹出し、錢段々下直ニ罷成拾五匁三四分迄ニ大坂相場仕候而、五拾七八文方六拾文一文迄遣申候。右、つく錢之義、世上悪敷事ニ申立、相止り、酉ノ冬分錢氣少し、つよく五拾七文、春分又右、かちまにて右之

づくくづ吹、相願申、くつ吹仕候により、春分錢安く罷成申候。一、御殿様此節大分御おこり被成候故、寛保元年十二月御國替被為 仰付来ル。寛保二年戌ノ三月、御國替有之候。一、江戸しまはら高尾ト申大夫、御請出シ被成、夫故、御國替有りと申。殿様御酒呑、一度ニ三升も御呑被成ト申ス。

一、寛保二年戌正月十四日、月之入所、別府ノ森ニ入。蓮花寺方北四間程ニ御入被為成付、御入様晴天。入時大方日之出ニ御入被為成候。水中分。宝年ニ有可有御座候と百性悦申候。

一、戌正月廿八日夜より戌方ニ當り、ほうき星出申候ト世上ニ申候。春分水沢山。干鰯粉壺匁貳升五六合。出来麥五拾五匁方六拾匁致、米、春分六拾四五匁方五月方次第ニ高直、八月時分八拾匁成申候。江戸大水但シ七月也。町之内三四日も通路なく船ニ有食事かよひしと申也。五月朔日、日しよく、十分しはらく、やみの夜のことくに成申候。むかし此来なく事と諸人申候。

【押紙】

一、亥之春分干鰯粉壺匁壺升七合方貳升迄。

一、癸寛保三年亥正月十四日、月之入処、別府宝蔵寺森之内。入時分日出方のちに御入、ほう年ニ有可有御座候と百性悦申候。麥作出来方も取味有。麥上肥ハ貳升貳三合方貳升位、五月肥干鰯桶目三匁方三匁四五分迄。植水方沢山ニ稻作見事ニ、取実各別ニすくなく、壺反ニ付三俵方五俵迄。貳百卅日ニ當、大風吹、綿作中分。麥米相場、米出来新米五拾五六匁方節季ニ成り七拾目位。

寛保四年子正月十四日の月、雨氣_{ニ而}相見へ不申。其前後ノ夜ノ月、蓮花寺ノ森前也。寒内方雨度々ふりつゝき、麥上肥ひかん前_ニふりすて_ニ仕候。麥作大不作。水十分。草稻すぐれて見事_{ニ而}、諸人よろこひ、綿稻兩作共、二百三十日_ニ當り、大風_{ニ而}、早稻上毛、中稻中毛、晩稻皆無成。それ故御春法御願申、晩稻高三百三石_ニ、御被下米百五拾八石壺斗五升六合、又出無へ拾四石六升被下置、惣喜悦無限。其上大悪米、御取被遊被下、千萬_ニてかきりなく候、悦申候。此年勅使御通り被遊、拜ミ申候。

丑年方ほうき星出来、正月三日四日迄。其後ハあかつき_ニ出ルと申候。

延享二年丑ノ正月十五日朝、月ハくもりて不見。其前後見合、蓮花寺森ノ北_ニあたり^(ママ)不申候。ねはん迄ひより能、麥作悪敷、水沢山。土用ごくねつ、雨ふりつゝき、すゞしく候て、稻毛見事_ニ候へ共大不作_{ニ而}、壺反_ニ、三表半方四表迄。綿作能、麥蒔天氣能、其方冬中日和あしく、賣買高直、麥六拾七八匁、米七拾七八匁。

延享三年寅ノ正月十四日ノ夜、月の入所蓮花寺森ノ北壺間程。夜ノ内少霞有。春日てり仕、麥のしやうがいたしかたく、實入時分雨ふり、殊外麥作悪敷、麥七拾四五匁くらひ仕申候。米八拾三四匁九拾匁くらい仕申候。夏日てり仕、夏はく悪敷、米相應_ニ有。八月廿四日_ニ大風吹申候。稻作七八分之世中、木わた同前。新米五十七八匁方七十匁くらい。菜、世間殊外之不作_{ニ而}難義仕申候。

延享四年卯正月十五日、月の入所蓮花寺森之内、しかと見へ不申候。

松平大和守様、銀子百五匁被置下し、下百性壺人＝壺匁ツ、割當テ、明
 る卯ノ春、其人々＝被下、切＝被為仰付、御禮＝庄屋參申候。卯ノ三月方、
 日てり候へ共、春之末＝而ふり次、殊外麥作よく、六表方八九表迄。出
 来麥四拾貳三匁位イ仕申候。夏分日てりにて、根付はんけしやう迄＝植
 申。實入殊外悪敷、三表方五表迄。新米六十三四匁位仕申候。麥ノはだ
 こへ干鰯粉、三升方四升五合くらい＝當ル。上肥冬買ハ五升位、辰ノ春
 買ハ三升方四升迄＝當ル。麥段々悪敷三十七八匁、米七拾目位仕申候。

辰ノ正月十五日夜、月の入所別府宝蔵寺北はつれ＝入。御月入きわ清天
 ＝御座候。卯之暮＝御殿様へ、為組内御献上米七石六斗、日役＝而姫路へ
 三斗持＝而持參申候。但し、大廻り御やめ被成候＝付差上ケ申候。麥さか
 立はやく、朝鮮人来朝、四月十九日、此灘を通り、見物船數多出しに、
 二子村の見物船、朝鮮舟に吹寄られ、すでに船の下に敷れんとせしに、
 對馬様御役人衆仰＝而、唐人共、二子村の大背子共七八人程、唐の船へ
 引揚乗せて棹にて見物船をつき出し、又、本の見物船に乗せ申候。天氣
 能、大分の見物。唐人共、小弓彈、調拍子、笙、箏、篳篥、太鼓、打樂を仕
 候。又、見物の船にも、三味線彈衆も有。朝鮮人に物書いて貰申者多、
 饅頭、羊羹共貰申候。灘邊は漕船の水主、船人大分かゝり、去ぬる極月
 方、室津へ相詰、迷惑仕候。御大名方には夥敷、御物入にて、別而當御
 領内には、御用金見附高＝かゝり難儀仕候。扱、麥作は中分、各別
 に熟早く、四月の節の内に、苧仕舞。五月節入と田植出し、根付ケ水沢
 山ニ、夏中一度も夕雨なく、盆前方水払底に成、末に至り殊外旱魃、方
 々雨願、水論多く、稻作見事＝而綿虫入半毛。八月＝入、年号寛延＝改ル。
 少々雨降、八月末に段々雨天＝成、九月三日夜明方、四日の四ツ過迄、
 殊外大風にて、中稻、遅稻は、猶以大痛。二百三十四五日當り候へ共、

稲五七日も遅く、白穂になり、御春法御願申候へ共、春法してあまり有ば、免を上てとると被仰候ゆへ、得春法請不申。灘邊は春法仕候に、免一分二分入目程も不被下。麥蒔日和よく、冬中雨なし。御年貢悪米納り、霜月十五日、殿様御相□、十六日俄ニ御大病。十七日御他界被遊、就夫御國替ニ相究、御勘定難成、段々相延を願候へ共、叶ぬ故、西郡惣百性、極月ニ至て、市川へ數多人々、白穂の稲を筵に包て、相詰申。それゆへ御勘定五月延に被仰付候。大晦日成、百性引申候中ニ、徒黨人御詮儀被成しに、徒黨は此稲にて候と申候へとも、其内五人被搦捕、扱又、西条大庄屋取沙汰段々とあしく。

新米六十匁方壹匁、巳ノ春ル六十式匁。

寛延二年巳ノ正月十五日朝、月の入所曇りて、しかと見えす候へ共、前後見合て、蓮花寺森の内、少北に當。冬の内より、西条組大庄屋を、百性方御公儀へ貰申候に、それは如何にと仰有ければ、御領分中の本田、新田共に、免を御上被成候様ニ申上て、それ故免上り候て、御褒美に山新田を被下、威勢にほこりし故、七年以来、疎、妬、歎其恨ニ而御座候と申上ければ、もろふて何とするそと御尋有しに、つめりころすと申、それ故役目被召上、明ル正月方々に札を立て西条大庄屋家をつぶす、是に出ぬ村は、其村から先つふすと言札を立て、十六日の八ツ時方早鐘をつき、法螺貝を吹、數万人寄かけ、村中へ鋸、鉄、鐮、かけやを出せ、出さぬと此家からつふすと、早、戸障子めぐゆへ、村中をちすくみ、面々に道具を出して遣し、家々に食をたけ、米のなき者には、大庄屋の米を式俵三俵ツ、取て来てをり、其元などが、そんにはさせぬ、皆大庄屋が、麥、米、田地を遣る程にと申て、それ方國兼の柴屋へは、酒を持て来い、持て来ぬと、其家をつぶしに行、と言やれば、大分酒を持参り、

其折節、西条組寄合有しに、四五人ずつと来、草鞋わらぢを履はきながら座敷へ上りしに、是は何事ぞといへければ、何事とは言葉あらく、大庄屋は衣ころもを着て、頭巾かづき、坊主に出だち逃にけり。弟、刀抜て打かゝるを、十七八の前髪じつていにて、刀を打落し、石にてたゝき、鋸のこぎりのこたくにして、疊にて弟を、をさへ、ふミ付へ、先己か家からつふすとて、大勢寄かけ、ミしんにくたき、それ方おも屋、門、家、藏残らすつふし、諸道具、着類共引さき打くだき、其後西郡大庄屋、高砂大庄屋、塩屋甚兵衛をつふし、天ヶ原屋藏役人市三郎、同長四郎、藏番又七、普請源兵衛、加茂屋塩問屋喜三右衛門、高砂二而五軒也。御領内二而廿四五軒潰し申候。犬飼組大庄屋潰し候時は、御郡代、御代官大勢引つれ、加勢に入せ給ひしに、三々手負、鎗を取られ、ふミ折られ、切折られ、馬方引落されて、あたま打くだかれ、逃てもどり、ほうへの仕合役目被召上候と也。正月十六日方二月三日迄二、日數十八日之内二、家數五拾貳軒つふす。此外四五軒も有。古宮組、中村組には、壹軒もつふし不申候。是は大庄屋殿さばき方よき故也。又、組の庄屋中惣百性かためよく、神妙成故、其内、明右方御侍衆、天満餘力衆、夥數、御越被成、靜しづかに成申候。扱、姫路米屋孫九郎、高砂市三郎、長四郎、又七、源兵追放被成候と也。取沙汰風聞様々あれとも、有まし書注者也。其後段々十人廿人宛、圍人殊之外夥數、右大庄屋、小庄屋、役かかりの者共、御めし被成、御全儀被遊候へ共、御慈非二而午ノ二月迄の内、何事もなく、皆々御かへし被成て、しづかに相成申候。扱又、巳ノ歳麥作あしく、水沢山二候へ共、夏中夕雨なく、畑作不作なり。稻毛も上うわやけにてあしく、六月廿六日大雨風にて姫路より奥郡迄大水二而、大川筋、田地、在所、大分なかれ潰申候。夥數、人などもそんじ、御殿様方ながれ所へ、先貳千表御米を被下置、有難頂戴仕候と也。同七月廿四日、殿様酒井雅樂守様

御入部被遊、水入之田地相應ニ御免許被下置、御勘定相逐申候。賣買下直、干鰯貳升五合七八合位。霜月指入少し寒し。寒之内暖にて餘寒もなく、直に暖氣相成申候。

麥安三十五六匁、はさかい四十壺貳匁。巳ノ新米六十一貳匁、午ノ夏七拾目位。

一、寛延三年午ノ正月十五、四日の夜、宵方空曇り、月の入所ハ見へず、前後の月見合、大形は蓮花寺の森の内成へし。正月年越之夜地震、又十四日の夜同、世なをし世なをりといわい、彼岸まで暖なり。春中雨しけく、麥の上肥も干鰯ふりすてに仕候。彼岸より殊之外さむく、北風吹申候。麥作大不作、反ニ付壺石方上々麥四表也。出来麥安四十壺貳匁、こなし濟等、干入らず段々高直四十五匁六匁方五十一貳匁。干入ニ而も直段同前也。

五月根付水沢山、六月指入迄大雨重し。其方日照ニ而、五月十五日雨ふり、其方段、照つゝき、末ニ而水大切堀々さらへ、所々水論等有之候。上やけ故か、秋大不作、壺反ニ三俵方四俵五表迄也。九月廿三日家つぶし、とうどり鹿谷前の庄、滑甚兵衛、市河ニ而はりつけ。野谷久左衛門半の内ニ而病死仕候を、是も同罪に行れ、其外うちくび流罪有之。西条大庄屋、鹿谷前庄大庄屋追放、跡はけつしやう被成候。

寛延四年正月十五日之朝

一、寛延四年未ノ正月十四日之月入所くもり、しかと見へ不申候。入所寺ノ門之内成へしト云。麥作不作ニ少よし。出来麥五拾貳匁仕候而、水沢山ニして秋作よし。米直段四拾七八匁仕、麥も次第ニ下り、四拾匁位方三四匁いたし申候。米も少々宛上り、五拾貳三匁罷成候。米作三十年此

かたノ秋作よしと申候。此年四月廿五日、暮六つ方夜八つ迄、越後高田大地震。一ッ高田屋數六千余、内四千余潰れ、地より出火、七ヶ所より焼出、死人壹万六千余。一ッ今町家數六百軒余、内四軒残り、人數不知。一ッ下名立山貫ヶ出、壺丁計海へゆり出し、家壺軒も不殘潰れ、人數四百八拾四人死ス。殘_ニ男六人、女壹人、馬一疋、此者海よりあかり申候。一ッ有馬川家數六千軒、山貫ヶ出、壺軒も残らず潰れ、人馬残らず死ス。跡は入海と成。一ッむしやう宿廿軒潰れ、一ッ江の津右同斷。一ッ高田時の鐘、行衛相知不申。此鐘は、越後様御時代之鐘、三十六里余聞へ申鐘_ニ御座候。右之鐘其夜行衛不知、つりかねの龍頭方きれ落申候。此年姫路雅樂守様、御家老衆三人、御生害^{がい}。七月十日之事也。又西本庄百性、京都大門方殿様へ御書^{しよ}をつけ、其御とかめ_ニ大分迷惑仕候。其外野寺^{きやうどう}騒働、又、清水新田、六分一山公事、何かやかましき事どもあまた御座候。冬分ひでり、麥の株出来不申候。春迄雨氣なく、少しつゝ雪降はかり也。寒ノ内暖にて、春分_ニ成、殊之外餘寒きびしく候。

寶曆二年申ノ正月十四日夜、五日之朝、月の入所夜より曇、とくと相見不申。大形ふるこ、宮西にもかゝり可申と也。彼岸までひでり、草麥不出来也。刀田山御開帳之内、長雨ふり芝居に座をかき申候。天神様八百五十年忌有り。京北野天神様_ニハ、万燈を貳拾五万燈ともると也。曾ね、二見相應_ニ御法事有り。古向福勝寺に^(ママ)江湖有り。法花經講尺有、講師余川ノ和尚。麥大不作、壺反_ニ貳俵三俵四俵迄也。五月根付水堅く候へ共、能大雨降り、一夜之間_ニ水一分流に入て、能き旬植。夏中水沢山_ニ候へ共、末_ニ殊之外日でり、所々雨願仕候へ共、降繼なく、併かへ生養い候へ共、上やけ_ニ米壺反_ニ三四俵位_ニなれとも、余潤有世中_ニ賣買下直、新米四捨五六匁方四匁、又貳三匁。寒氣稠^{まじ}しく、雨かたく、池之

水少も溜らず。漬め普請、樋伏替。寒の内雪ふり、二十年以来寒也。此年宮北に相場始る。もめん綿、倍の上に成、女奉公人、男もすくなし。

一、寶曆三年酉ノ正月十五日朝、月の入所蓮華寺門の北はづれ、入時明かた夜の内はれやか^ニ而、近年にすくれ。此年百町場新開に家建はじまる。明石の殿様、關東鶴ヶ岡八幡宮御普請。干鰯式升五合^方七八合三升迄。新井堰所、國兼より水盛、則、野添水番。但し麥作中分、春、米四捨壹式匁より五匁位仕候。麥安三十匁より段々下り、廿五六匁まで。春、日照^ニて池々水不足、根付相延、植付五月中二三日後まで仕候。但し、かミ田式百石余、畑作^ニ被 仰付、植付ノ後より、段々降りツ、き、水沢山、稲作十分。新米三捨八匁より四捨壹式匁まで。綿作皆無。日本國^{はしか}瘡痘殊之外はやり、人數多死ス。六分一村、山公事。大公儀より御見分、萩原富士郎様、御出被遊、車道兩側御茶屋、兩御領より御建^{たて}被成、福里寺御本陣相成、御見分之節、争論有之候。極月押詰、御歸り被成、明正月、當村役人其外近村役人、御召被成、何か近村堺目、具^ニ御尋被遊候へとも、未、何之被 仰付も無御座。冬寒之内雨しけく、正月、二月日^でり、麥肥し得と仕舞申候。春分^{はうそ}瘡はやり、蓮華寺觀音堂造立、大工鹿川庄右衛門頭梁也。二月末^{たち}比建、去秋分東圓寺、圓滿寺^{たい}退院後、本寺被仰仕候。

一、甲寶曆四年戌正月十五日夜、月入所蓮花寺森の北はづれ入ル。夜七ツ時清月^ニて御座候。然者干か粉當三升六七合。春分雨ふり申、五月根付沢山、六月上旬より日照仕候。段々かへいけいたし、堀々さらへ、普請被下置候。七月中旬^ニ雨ふり、悦^ヒ申候。秋作壹反^ニ付三表より四俵位。但し御見分、御春法御願申處、野添村五拾石余御用捨御座候。但し米相

場、新米四拾四匁五匁、段々春分五拾五匁位仕候。但し五月新麥貳拾五匁方段々と、春分三拾四五匁位仕候。

新曆出申候。天恩母裙月徳吉日改り、ひかん三日七日進ミ。

一、乙寶曆五年亥正月十五日、月入所蓮花寺森北、雲かゝり相見へ不申候へ共、凡相計印処ニ候。然ハ、干鰯粉當三升位。根付水すくなく、末ニ至たんへ水有、豊年也。米反ニ五表方七俵迄。北國、西國余不作也。新米六拾目方たんへ高直成、七八拾五匁迄ニ相成候。八月、印南野宮に觀進能大はやり。麥蒔之干鰯好イ物三升五合、悪敷物五升迄ニも當り。十二月十日頃、刀田山大富寄銀拾貫目餘、日暮て夜ニ入、突し者銀受取ると言、明日渡ヌと言論有し内ニ、富にくらをしたと言、喧嘩に相成、大騒働ニ而常心院の寺、半つふしニいたし、備方證文引さき、疊きりさき、寺方鍵ニ而人ヲつきころたと言たれ共、死にもせず、深手負也。又富のやくら方脇指ニ而つきしとも言イ、寺の座敷血に成ル由。又さやばしりてけか共言イ富わや成。又寺に番人を頼、寺方出ル者を、一兩人たゝきふせ、三人目は門のくゝり戸ニてうけ寺の前成堀へ、番人をなけこミ、富ハ入ぞん、寺ハめがれぞんニ成申候。此年九月廿二日、中野村菓子屋弥平次姫取ニ、村の衆若き者あばれ、見世の戸打くだき候所、内方鍵ニ而人ヲつきし、鍵の柄をにきりしに、又うしろより何でやらあたまをきり、其上手のゆびをかみきり、其所ニ而せつじ仕、それより大き成出入ニ相成、翌年の四月に、是もつかれぞん、めがれぞんニ而相濟。

此年の春、當村伊勢參有。其跡ニ而當村、大沢村、森安村、明石との西國竹生嶋の船、三月十七日難風にて、諸國乘人、船人共、以上七拾人相果、大騒働。當村瓜生平七妻、かの川惣兵衛妻、瓜生の喜兵衛の娘、西ノ喜右衛門孫娘、メ五人、大沢孫兵衛、同村吉兵衛相果、就夫、村役人

遠慮被 仰付、難儀被致候。

又此年、大沢＝狐あはれ、毎夜けわしくなく。五月に大沢の愛岩構のかけ物、愛宕山大権現と書字、燈明＝而やけたれ共、文字ハ残り、地紙はかりやけ、是何人の筆ともしれず、昔よりある也。天台宗か眞言宗かの筆かはけ字なり。それゆへ表具仕り、村の調法と成有。此九月朔日、大沢庄屋火事定而其知らせかと申たる事也。此年大豊年也。此年大沢庄屋門の大戸、大どうまい風にて吹めぐ。それより段々家さかへ、はんじやうするなり。世話言、焼きぼこり吹付ほと、よろしくと申吉相也。

寶曆六年子ノ月入處、蓮花寺森北へ少はつれ、入時明方雲かゝり、相見へ不申候。干鰯式升三合方六七合。新麥不作、新五拾匁式三匁迄。稲こへ高直切三升くらい。作方不作反四表五表迄也。北國、西國、東國、余國何れもよし。新米七拾目方少下、六拾式三匁、又高直＝成、七拾五六匁迄。水根付方たんたん相續十分。綿不作、四分位也。此近年所々押入強盜はやり、此春北在家村、松野一學様の御内室さま、不審成病氣。能々氣を附て見るに、狐の様相見、段々全儀仕候へハ、刀田山のお吉狐なりと言、それより色々様々として、ものかす。後には一命もあやうく相見へ、迷惑＝思召候て、御公儀迄も御注進あり。いのり祈祷ハあるとあられぬ事申つくし、後には吉祥大明神といわい、それよりのき申候。其様子ハ筆にも言葉にもつくしかたく、昔の信田狐にもまさる様成事、それ故、粗、注すものなり。其後信心有申候諸方の諸願成就し、大善神とあかめたてまつる。有時一學様へ押入強盜来り所＝、此明神の御加護にて、強盜共恐を成し逃かへり、其時脇指一腰取しに、それも後にはさきより持參仕、それより猶々諸人信心弥増し、古今まれなる事共なり。依之、粗、注スものなり。此霜月、宮北火事、同大晦日又火事有。今

^(ママ)
年難邊大分の破損船あり。ぬれ米下直也。

宝曆七年丑ノ月入所、蓮花寺森之内。よく雲はれ明ニ入。入時早ク明迄ニ少間有。水中分、豊年ニ而可有御座と悦申候。子ノ麥作悪敷故、直段高直六拾三四匁五匁迄仕候。干鰯粉貳升三四合也。此三月三日方當村大寺九輪鑄替有。此年きゝん、御公儀様へ無食御願申上、今年ねはん齋の酒相止む。念佛も朝齋前ニ成。此正月朔日朝雪ふり、それより折々大雪。二月雨しけく三月中旬迄雨つゝき、麥作大不作、壺反ニ付六斗方壺石六斗迄。出来麥五拾目位。五月方水沢山、根付段々天水有。秋豊年、壺反ニ付貳石方三石迄。直段新米六拾貳三匁、段々下直五拾五六匁それ、霜月方暮、春分迄高直ニ罷成、六拾貳三匁位仕候。

亥ノ年迄年貢庄兵衛預り分。

一、七匁五分。

此銀齋中繪代ニ出し相濟申候。

寅ノ年迄年貢庄兵衛預り分。

一、九匁

此銀齋中繪代ニ出し相濟申候。

寅ノ年貢。

一、五升

内貳升五合分庄兵衛預り。

此代壺匁六分、右九匁ノ内へ込ミ濟。

残り

式升五合太郎兵衛預り分。

代壹匁六分也。

覺

一、寛保貳年戌之年、庵開地新田ニ仕申候。戌、亥、子、丑、此年貢六斗

四升也。但シ八拾目かへ也。代五拾壹匁、此銀涅槃尊代銀ニ七兵衛殿方へ相渡し相濟申候。

一、寅之年年貢。

壹斗六升。内、五升地藏堂へ年貢ニ付、壹斗壹升涅槃田へ渡ル筈也。

庵開地年貢割方

一、長六拾九間、年貢壹斗六升。但し壹間ニ付貳合三勺貳才つゝ。

内、三拾貳間貳尺、嘉兵衛作り、此年貢七升四合九勺。

拾三間三尺、八兵衛作り、此年貢三升壹合貳勺。

貳拾三間貳尺、庄兵衛作り、此年貢五升四合壹勺。

ノ壹斗六升也。

是通帳面ハ六番と申事御座候。

寶曆八年

御月見日記

紙數貳拾五枚

寅正月

一、寶曆八年寅正月十五日朝、月ノ入処蓮花寺門ノほとり。入時夜之内其夜曇有、しかと見へ不申候。正月十七日夜より十八日迄大雪降、それより雨ふりツ、き、二月之中迄雨しけく、干鰯粉貳升三合三升迄。何分雨しけく故ふりすてにいたし、麥肥仕不申候。麥不作、反壺石貳斗上々也。新麥四拾四五匁、賣人なし。春分ニハ六七拾匁も直段可仕と存候所、西國、中國大分麥作よく、麥賣登し、段々安く、春末三十七八匁方四拾目迄ニ賣つふし申候。五月根付水沢山、夏分よきほと水有候而、稲作中分、新米五拾五匁位、たんたん高直、押詰五拾七八匁方六拾目二三匁位仕候。麥蒔天氣よく、はた肥三升方五合仕候。たんたん天氣よく、麥こやしよく仕候。麥作中分、反ニ貳石方貳石四五斗御座候。

一、寶曆九年卯ノ正月、月之入所蓮花寺^(ママ)盛の北はつれ。其夜、夜半時分方雲かゝり、御入所しかと相知不申候。たん〜天氣よく、麥上肥貳升方貳升五合。新麥反ニ貳石四五斗、新相場三拾五匁位、買人なし。たんたん天氣つゝき故、五月水すくなく、池ニ貳三合有。根付水なし。水かへ根付仕候。當村山代、上代根付相殘一作畑ニ相成申候。たん〜天氣宛、夏分昼夜水かへ生、ほり〜さらへ仕候。夏作少も取不申ニ、二子、二見、西岡、中尾大分いたミ有之候。當村ニも少々いたミ、五町程も相見へ申候。井水よく上り、井かゝりハ水沢山。上代一作畑壺町、夏分水不足。上代いたミ有之候ニ付、御見分御願申上、但九町余御用捨米三拾貳石被下。新米五拾五六匁、段々下直、盆前四拾八匁。

一、宝曆十年辰正月十五日朝、月入所蓮花寺森の南少しかゝり。少し雲

かゝり有。但し、日の出、月入給ふ。麥上肥干か式升七合^方三升壹式合。新麥反＝付式石位。相場三拾目^方式三匁。段々春中天氣よく、植付水不足。上代の端シはし、水廻り能キ場所根付無之、かへ根付仕候。其外上代一作畑拾町、且又遅植。御見分御同地拾三町余。兩作共御見分御願申上、御用捨米三拾四石三斗被下。但、一作畑大難義仕候。大豆反＝六斗^方壹石六斗迄。大豆直段三拾目^方二三匁。村御手形六拾目。新米五拾二三匁^方暮＝四拾八匁。明巳正二月四拾六七匁。

一、宝曆十一年巳正月十五日朝、月入所蓮花寺森の北はつれ、但、雲かゝり、しかと入所知れ不申候。正月中天氣よく、二月雨しけく、麥上肥干か三升^方四五合迄。

一、宝曆十二年午ノ正月、月之入所、新野邊觀音當^(ママ)之森ニ入。月早ク入、少シ夜有。春中雨少々有候へ共、何分池水不足。大池など其外末々池々、五月根付時分、少も水なし。野添上代四百石一作畑。惣而道上不殘一作畑。蓮池かゝり、五月中池水五六合ニ而根付仕。それより夏中、少小雨有之候へ共、八月迄かへ生仕、堀々急御普請御願申、難義ニ至極仕候。井水かゝりハ、水沢山御座候へ共、根付相延申故、米五表^方六表迄、中分也。新米御手形五拾五匁七匁^方、段々相場高直罷成、七拾五匁位。平米節季六拾式匁四五分。未正月六拾五匁^方六七匁。麥新式拾四五匁^方高直四拾目。麥上肥式升七八合。午ノ冬寒氣殊之外ニ御座候。魚油なども不足。蒔かれ申、油高直致申候。九月一日^方大雨度々、殊九月ニ、一夜之間、大雨ニ而有之。大池^方末々満水致、右壺夜間に、川江少々水おり。

一、宝曆拾三年未正月十四日、月の入所別府宝蔵寺之森南、式三間計江

入。少し夜有。殊外入きわ清靜ニ而、少し薄まへ有之候。麥上肥、貳升五合方七八合迄。正月天氣能、二月ニ入、大雨度々、右之池之水之へりも満水仕。近年、新井ハ満水仕候。除水池掛江盜取、大分池かゝり助ケ申。未ノ二月、新井願主、^(ママ)字里傳兵衛様、百年忌相當、郷中方、古宮願満寺ニ而御法事御座候。古宮村ニ此年水車初ル。新麥三拾目方たんへ高直。申ノ春四拾匁方四拾六七匁位仕候。新米五拾貳三匁位方たんへ高直。押詰、五拾七八匁方六拾目。春分、六拾二三匁。

宝曆十四申年、月入所蓮花寺様、森ノ北はつれ、宝蔵寺様、北はつれニ而、月入早ク、夜明迄ハ、半時も候と見へ、雲かゝり見へ不申。春分雨ふり候。乍去、麥こやし相應ニ仕候。干か粉貳升方貳升三合仕。未ノ七八月時分ニ買し干か、貳升八九合方三升四五合も御さ候、たんたん高直。五月中頃明和元年改ル。麥新三拾六七匁位、たんへ高ク。^(ママ)直付水沢山。新米五拾目位、たんへ高直。御手形六拾四五匁位。御手形切手せりニ而、たんへ押詰高ク七拾目位仕候。水沢山ニ有之。稲毛相應ニ御座候。木わた中分、不作之方ニ御座候。

一、明和貳年酉正月、月入所蓮花寺森北、はれま内被成、しかと入所見へ不申候。干か貳升貳三合、新麥不作、麥四十七八匁仕候、たんへ高直。根付水沢山。大水出申候。稲毛中分、新米五拾五六匁方、たんへ高直、六拾五匁方七匁仕舞。御手形七拾四五匁、たんへ安ク七拾貳三匁仕舞。畑物大悪年、大豆反ニ壹斗五升方貳斗。夏物あしく、木わた大不作。わた六拾四五匁方春ニ七十匁仕候。大坂越年米貳百五十万と申。大坂相場たんへ、戌年春下直、五拾七八匁位仕候へ共、當地さのミ直段替義も無之六拾四五匁、春分仕候。冬分内天氣かたく、後、春分たん

一、雨天。麥こやしいたし兼申候。明和貳年水沢山。

一、明和三年、月入所森ノ中程ハ、雨降知レ不申候。春雨たひへ、麥こやし遅者ハ、ふりすてニ仕候。干か香貳升位壹貳合。麥相場、たんへ高直ニ而五拾七八匁、麥仕候。米直段六拾三四匁と申候。大としノ夜あらく北風吹、正月九日大雪ふり、たんへ雪多く、たひへ大雪降ル。ひめし御手形、米七拾三四匁方八拾五匁迄仕候。此年之事ふれ參候而申事ニ而、當年も角清と申候。午寅方ほし出申故、諸人ゑき病はやる。五月根付水沢山。度、照り強ク末ニ而水不足。上溝其外、蓮池、北池、堀々土手付旱魃。城代、鹿川代、御見分御願申上候處、御代官様御當被遊、如何分ニも御上ニ仰られ候通ニしたかい、御なけき申上候へは、御すくい米として、御上より上代九町四反九畝壹歩ニ、貳拾壹石 被下置、百姓悦申候。豐年米六表方段々有ル。新米五拾八匁九匁其方十夜時分方、段々下直罷成五拾貳三匁。綿大豐年。川へノ畑貳拾貫方四拾貫迄、六拾目位。

明和四年亥正月十四日夜、月入所蓮花寺森ノ北。月入りより日出、少し夜有候。正二月ひより能、麥十分。干か粉三升四合、春分貳升方壹貳合。麥相場、春分五拾貳三匁方たんへ六拾目位。米五十九匁、七月時分八拾三四匁位。大豆五十目位。此年米壹反ニ付四俵方七俵迄。

一、明和五年子ノ正月十四日夜、入所、宮西、古小中入可申候。清天少し夜有候。正二月たひへふり可申候。干か貳升方五合迄。此年たんへ五月大雨ふり、かり麥なくし可申候。米相場、六十四五匁方たんへ七十七八匁迄。新麥四十五匁方五十貳三匁迄。

一、明和六年丑正月十四日夜、入所、宮西、古小中。入所しかと相見不申候。春分、たんへと雨ふり、麥こやし出来不申候。春分、米相場七十五六匁位。麥安たんへと六十式三匁位。此年、麥安反ニ付七斗方四俵迄。春分方五月、根付水沢山。夏分少日照リニて、式百十日當り、中大風いたし、出穂當り、白穂出来、上代切御見分御願申候所、御公儀様方投免被仰付、式拾壺石被下、御見分外村々御拝借被下置。但し歩なし。新米六拾八匁方七拾式三匁。寅ノ春分七十目位。綿作中年、五拾五匁方六拾目位。麥はた肥干か式升五合位、上こへ同事。

此年當村圓滿寺其遠ヶ年宗門の公事ニ付、御公儀様方御吟味之上、しまりへ御入被成候様ニ嘶し御座候。就夫ニ右、寺割高壺石ニ付四分六厘余掛り申候。

右圓滿寺入籠ニ相究り、檀中籠まかなひ、壺ヶ月ニ六拾目ふじ見舞入用掛り申候。

一、明和七年寅正月十四日、月入所蓮花寺門へ御入被成候。入時分東あかり晴天。麥上肥時分方、たんへ雨ふりつゝき水沢山。米七拾目、麥安六拾六七匁位。新米六拾四五匁方春分六拾五六匁位、麥安五十五匁位。麥うわ肥、冬分粉當三升五六合方段々高直、春分式升五六合。七月廿八日夜四ツより、寅ノ方ニ當り、火事之様ニ少やけ、初メ戌亥方へやけ通り、又東卯辰方迄やけかへり、其やけ筋去。後光やけ、惣空やけ渡り、むかしよりかく有は、雨無御座候様ニ、古人被申候。

寅年曆ニ日しよく輪之事、むかし唐土かんのかうそ、八百年後曆違有之候。天のうんかうをかにかへ、彌々違有り。新しく曆改り、其後相違無之様ニ御座候處、右北方大やけ定而日照りのすいそう、諸人難言斷申候。

明和八年卯正月十四日、月入所ふるこ森の南はつれ。但し晴天月入て夜少し有。干か粉當三升式升四五合位。去冬方ねはん迄日照り、池之水少しも無御座候。種つけ水無之、上方方潰淵下、ふけ田ヲ苗代に御願申尊御座候。それより段々日照り續キ、上田百五拾石、一作畑。それより池掛り式番草よりかへ生、下代井掛り淵共ニ養兼申、池掛、井掛り共、御年貢御上納義難致、惣百性、庄屋殿相詰申、御見分御願申上候処、池掛り下代江御見分田江、三拾五石被下置。殊外之年柄ニ御座候故、惣免少し宛順申候。上代一作畑は、御年貢御免被下候。畑作式町計、大豆相そたち候へ共、此義御見分有之候へ共、同事ニ御免ニ被 仰付、難有奉存候。本畑、新畑（ママ）も少々宛御用捨御座候。新畑、本畑の義、作方皆無同前御座候。百姓難義ニそんし候。出来麥四十五匁、段々下直四十匁より、年貢三拾八匁九匁位。新米六十式三匁、十二月前六十六匁位。麥肌肥干か三升三合、上肥三升位。

同明和八卯四月廿六七日方、大坂御かけ参りと申て、伊勢参致、家内不殘参もあり。五人内三人参ルもあり。それより段々諸國共ニ参り、諸方ニてせんきやう有之。ミナへ 錢不持してまかり、あちらへハ御はらいがふりたい、こゝへハふりたいと、いろへ 其外御はらい計ニあらず、いろへ ふり、諸人ふしきと申て、諸國八分ハ参宮いたし、不思義ハ眼前ニありと申候。六十年前ニ、ケ様成事ありと申候。

明和九年辰正月、御ふれ有り、安永元年ニ十一月替り。

一、十四日月入所、蓮花寺門内。月入と日の出と同事ニ御座候。但し、殊外晴天。少し宛、雨御座候へ共、池々たまり水無之、氣毒ニ申候。麥安三拾式三匁。新米六拾一匁位方段々下直ニ罷成、節季五十四五匁。麥

上肥干か粉右＝有。水沢山、稲作殊外見事。綿其外作方大豊年御座候處、八月十二方廿日夜ふりつゝき、式百廿五日當り大風、稲毛諸事作、惣皆無いたし、百姓殊外こんきういたし、御上様江作方御見分御願申上候處、御公様＝も御領分一躰事＝御座候へは、御もつとも被思召候へ共、何分場所御ねきり被成、大痛分御見分被 仰付、拾三町余御見分成被下、御米五拾八石被下。本畑古新江御米御用捨有之候。折節御見分御願折から御殿様御遠行＝付、御見分もひま取、百姓難義いたし候。稲作跡麥蒔日和り(ママ)要敷、麥蒔七八歩跡、御同地荒田致、麥蒔後よりふりつゝき、初谷一圓いたし不申。米壺反、晩稻三表方早稻六表迄。麥安反式石、三十一式匁四五匁位。木綿七拾七八匁。

一、安永貳年正月十四日、月入所昼七ツ時分方雲掛出来、入處相見江不申。凡蓮花寺門前。正月方段々ふりつゝき、麥上肥いたし兼申。上肥粉當り三升方四升迄。水たくさん、稲作よし。見かけ程＝ほど有物なし、五表より六俵まで。わた大豊歳、上ハかた共＝十ふん＝取申候。惣して、はたものるいよし。大豆ハかく別之豊歳仕ル。わた六拾目方春分六拾四五匁迄。米そうは五拾四五匁方段々春分五拾目くらい。麥そうは出来麥四拾目くらい、段々高直＝而、霜月時分五拾目、それより下直＝相成、春分四拾三匁迄。此年なつ夏分、惣日本ねつ病はやり、おゝく人そんし、然共野添＝ハ別而別条なく候。此年江戸大火事＝付、塩段々高直、壺升＝付廿四文までいたし申候。次＝錢そうは四文錢出申候と云ふらし、午ノ春分＝壺匁＝八拾壺文迄通用仕候。

安永三歳甲午正月十四日、月之入所蓮花寺森ノまん中方少シ南四分計。清天＝而月入て少シ間あり。前ノ年十月時分より、雨度々ふりつ

ゝき、麥しやうやく出来不申候。二月二日夜かミなり大西風吹、それより雨しけく、上肥ふりすて＝致申候。麥作実入よろしく見へ、取実無數、反＝壺石方壺石四五斗迄。直段四拾匁より四十四五匁、段々下直＝、午暮三十八九匁位。米作中分、綿大ほうねん。大かせハ忒度吹、格別かい＝なり不申候。稲作晚稲＝當り、そはハ皆無＝相成り申候。米直段五十四五匁方段々下直＝相成り、午暮四十八匁位五十匁迄。干鰯粉忒升方三升迄。此年方百手頭氏頭足洗仕候。尤、直段先方ハ格別下直＝致、壺人前金子百疋＝相定、東圓寺世話被致候。買座廿四五人出来申候。尤、百手氏頭是家付＝相成り申候。

安永四乙未年、月入所、十四日夜半時分方雪ふり、大雪＝て、月見へ不申候。凡森の中程位と申事＝候。麥まきより天氣能、ほしかたにまで随分せうやく仕候。

麥作中分。実入前、雨つゝき＝て、壺石忒斗方忒石迄。新麥三十七八匁方、秋四十四五匁、暮三十八九匁位。二月頃四十五六匁位。稲作、土用中くもり、土用後天氣よろしく、稲作忒石方忒石五六斗迄。米相庭、新米五十三四匁方、段々下直＝相成り、十二月四十八九匁、閏十二月五十忒三匁、春＝相成り五十七八匁位。綿作中分、直段六十忒三匁位。段々下直＝相成り、春相庭六十七八匁位。干鰯粉當り忒升四合方七合八合迄。上ハこへ同事。麥まきより天氣あしく、麥せうやく二月頃迄＝不致。尤、手廻しよき人、壺ト町もせうやく致候。春＝相成り風はやり、しかし大病な人も無御座候。

安永五年丙申正月十四日、

月入所くもり入所しれす。凡蓮花寺之森ノ北はつれ位と申事＝御座候。

春雨續_二て、麥大不作。反_二三斗_方 壹石三四斗迄。出来麥四拾_方 五、段々高直五拾_方 六、極月_方 春_二至六拾_方 七位。水沢山、稲作中分。新米五拾五六_方 七、式三_方 四。夫_方 十月中旬_方 高直_二て六拾_方 三、十二月三四_方 五、春_二成六拾_方 六、七迄。綿作、たはこ豊年成り。干鰯粉當り壹升五六_方 七、式升_方 式合位迄。麥まき天氣能、冬分_二しやうやく仕廻、春干鰯たにまで隨分日和まんよく、二月迄ハ麥作見事_二相見得申候。

一、安永六年酉正月十四日、月入所蓮花寺林ま中。月入_而少明方まへ有り。春分順氣能數、麥作中之作。麥上肥_二式升_方 式合位、干か粉當り。五月根仕_方 次第_二しゆんきよく水沢山。稲毛宜數、新米六拾三_方 四、それより下直_二罷成、戌春迄同し、五拾七_方 八位。綿四拾五_方 六、四拾_方 七位。新麥五拾_方 六位より、戌春分四拾_方 三、式三_方 四いたし申候。

一、安永七年戌正月十四日、月入所雨ふり、凡入所蓮花寺森北はつれと相見へ申候。干か高直_二而麥肌肥不入、上こへも大かた不入。村々に六七人も上こへ少々宛入。麥作見事_二相見へ申候。錢相場殊外下直_二罷成、戌ノ春正二月壹_方 二、九十三文遣申候。小商人株屋筋殊外めいわくいたし申候。麥壹反_二付三俵より_方 式石迄。出来麥三拾_方 四、五拾五六_方 七迄。五月_方 雨ふり續キ、夏分土用共雨天_二候へとも、秋作中年_二御座候。米相庭五十_方 六、高直六十_方 七位。又々下直、亥春五十_方 六、式三_方 四位_二御座候。綿不作四十_方 五、段々亥春七十四五_方 六迄_二相成候。

安永八_二亥年。

一、入所蓮花寺森の中北。

戌冬殊之外暖_二て、麥せうやく隨分致、干鰯粉當り上もの_二て三升_方 式三

合より四五合。戌十二月十二日、高畑村と西谷村と間ニて、旅人をころし、風呂敷包取、其場ニて、西谷村若者右盗人をとらへ、其後大坂御役人御出被成、右盗人大坂へ被引、明亥春、高畑村三昧ニて獄門ニ掛り申候。亥春雨ふり、麥出来立よろしく、春中天氣能、麥中分。出来麥廿七八匁方三十匁迄。夏分雨ふり、水沢山。大豆豊年、綿あしく、稲作中分方上。新米直段四十七八匁、段々下直四十式三匁位。餅米はしり七拾匁方六十四五匁迄。綿直段五十七八匁方春分七十匁迄。無量壽院上段之間へ、十月廿五日夜、雷落、棟方西ノのき迄瓦すり大痛ニ。則其年、院家様死去。但高野山ニて、明子年二月朔日、後住院被遊候。大晦日夜、北嵐吹、明らか也。

一、子正月十五日、月入所新野邊觀音堂。但蓮花寺森式つ程北へ入。干鰯粉當り式升七八合方式升壹式合迄。麥作中年、綿豊年。綿四十五匁方五拾匁位迄。麥安三拾匁方廿式三匁迄。稻毛植付水沢山。六月上旬雨有り。夫方長旱ニて早魃。上代、下代、川西共所々大痛ニて御地頭様へ御願申。御見分請申、御引石被下置候。七八十日計、早リ申候。近年之早魃ニ御座候。新米四十八匁方段々下直ニ、丑春四十五六匁位ニ御座候。

當年方藪ニちねこと申やまい付、小竹、大竹とも、かれ申候。

夫方段々高直ニ成り申候。

安永十_辛丑年正月十四日、月入所新野邊、住吉の森内、少シ夜有まへあり。麥上こへ式升方式升四合迄。四月上旬方段々雨ふりつき、麥中年。出来麥式拾七匁方三拾匁迄。水たく山。稻毛草稻時分、隨分よろしく、取みすくなく、米相場新米五拾四五匁。寅春五拾七八匁仕候。錢相場段々下直、丁百文ニ通用ニ而銀歩四文迄御座候。麥はたこゑ右同斷。

天明二年寅正月十四日、月入処一切相見へす候。凡蓮花寺門と相見へ申候。麥上こゑ式升方式升四合迄御座候。天氣能、麥しやうやく能仕候。出来麥三拾四五匁位。水沢山。夏分ふり續、稲作あしく、土用中天氣あしく、秋＝相成り、大風式三度吹、綿皆無、何によらず六分位作。段々高直＝相成り、綿百式拾匁位。新米六拾目方、段々高直＝相成り、卯正月十五六日頃、八拾六七匁迄。麥卯正月＝、七拾匁位迄。麥まきより雨重り、此ころ川原へ大水出、旬おくれ、正月中せうやく出来不申、二月指入＝干か入申候。

大坂加之嶋屋久右衛門、正米多く買ぬ、段々高直＝成、卯月中頃＝米八拾五六匁位。是故かし久つぶし申候。是より二月中頃＝麥七拾五六匁成り申候。

寅春分錢通用、丁百六文迄遣り申候。卯正月＝九拾文遣。

天明三卯正月十五日、月入所雨天＝て見へス。麥上こゑ式升四五合より壹升八九合迄。順氣宜敷、麥毛中分。出来麥五拾五六匁より段々高直＝相成、水沢山、夏分ふりつゝき、稲作あしく、新米七拾七八匁より段々高直＝相成、御手形八拾式三匁より九拾壹式匁迄。辰正月＝、正米百拾五六匁迄、麥安九拾四五匁迄。卯七月四日五日ころより、地ひゝき、家々戸しやうじなり、皆々ふしぎ致候＝、しなのしなの國あさ山大やけ＝而およそ廿里四方つふれ申候。村數三拾七村、人かす拾万人うせ申候。

一、天明四歳辰正月十五日、月入所新野邊、住吉林内。天氣頓、日出少まへ。二月ひがん時＝大雪ふり四五寸積り、米相場段々高直＝相成百式拾匁迄。麥高直百目。干鰯粉當り壹升七八合位、式升四五合迄。夏分日

てり、五十日てり、水不底＝付、上之代御見分願申候。米上六俵方貳石迄作＝御座候。綿不作、三分之作＝御座候。百目方百貳十匁、段々百四十匁迄。

天明五乙巳年、月入所雨天＝而見へ不申。正月方日てり＝而米相場七拾匁位、麥六十貳三匁位。麥上こへ粉當り壺升六七合方貳升迄。正月四日大雪ふり申候。五月稻植付水不底＝て、上之代拾丁計、大豆作＝而、植付後水かたく、土用前方土用天氣よく、七月十二日大風＝て、早稻少し痛、しかし土用てり込よく、取実多ク貳石方三石四五斗迄。豊年と申事＝御座候。米直段次第二下直＝相成り、霜月、極月六十貳三匁位。春＝相成り五十七八匁位。麥安四十三四匁位。干鰯粉當り壺升六七合方貳升壺貳合迄。八月、九月雨天＝て、麥まき少し延行。麥まきかゝり天氣よく、冬分雨かたく雪少しふり、春＝相成り雨かたく御座候。

天明六丙午年正月十四日、月入所蓮花寺門＝て、少しまへ御座候。春雨しけく、麥不作＝而、出来麥四拾匁位。干鰯粉當り壺升七合位方貳升迄。夏＝成、土用中雨ふり、盆前＝成、麥直段五十五匁方六十匁位。稻作殊之外不作。御見分御願申上、田方へ六十石、畑方へ廿石、御引石被下置候。取実四俵方五俵六俵迄。直段段々高直七拾匁方段々冬分、姫路手形九十四匁位。極月末、切手、銀百匁＝相成、明ル未春正二月百拾五匁位。此邊ハ格別不作と申事も無御座候へ共、關東大不作＝而、江戸へ米積申＝付、右之百拾五匁杯と申相場＝相成候。麥安高直、九十壺貳匁迄。冬分方春＝至り賣買高く中分方下、難儀仕候。

天明七丁未年正月十四日、月の入所、閑の宮西はづれ。天氣能、麥せう

やく随分致、出来立能御座候所、三月中旬方雨度々ふり、四月中旬方雨ふり續、五月迄雨續ニて、麥出来能候所、長雨ニて実入殊之外あしく、米直段次第高直ニ成、四月末ニ、米百三拾匁四拾匁位、麥も百匁位。五月新麥、取実式分半方三分迄、出来相庭百拾五匁位。米次第ニ上り、六七月之間百七八拾匁位。八月ニ新米ニ成、百三拾五匁位。五月方も雨しけく水沢山ニ御座候へ共、雨ふり時よく、夏もの類、綿、大豆、小豆、ひえ、相躰夏もの何ニよらず豊年。米ハ中年と申事。他國ハ豊年と申事ニ御座候。新米百三十五匁方段々下直、十月時分六拾五匁位迄下ケ、夫より冬高直ニ相成り、極月ニ九拾匁位、春ニ相成り、少しつゝ下直ニ御座候。麥不作之儀ハ、是迄覚不申事と申候。百姓飯米之儀ハ、六月時分方切レ申ものも御座候。段々七月時分八月迄、七八分通りも飯米切レ、米ニて暮申候。麥持候もの百人ニ三四人程、大かた米世帯ニ御座候。

八九年前方、方々ニ竹ニちねこ付出し、當年迄ニ大かた藪かれ申候。是大不作本也。

麥まきより雨天續ニて麥こやしおくれ申、二月迄こやし致、草多ク御座候。干鰯粉當り壺升六合方式升迄。

此紙ハ、出開地市兵衛當番之時足し申候。

一、當申年正月廿九日より二月二日迄、京都大火、八九歩もやけ申候。殊之外大火、むかしより不覚大火と申事ニ御座候。内裏様も御てん不殘やけ、當今様方々と御こしニて、にけ被遊候と申事ニ御座候。

天明八戊申年正月十四日、月の入所蓮花寺門南はつれ。雨天續、麥こやし出来かね、草多ク壺反ニ壺石方四俵迄。干鰯粉當り壺升五六合方式升迄。五月水沢山、稲有付よし。然ル所段々ふり續、土用前方土用入後も

雨多ク、秋ニ成候而、日和能ク、秋作七分位ニ而、新米七拾壺式匁位。段々下直ニ而冬分六拾壺式匁迄下ケ、又々酉春ニ成少し上ケ、六拾八九匁位ニ成申候。綿作不作ニて、出来立九拾匁方段々高直成ル、百四拾匁位ニ成り申候。十月方天氣よく、麥まき随分日和よし。麥せうやく冬中ニ致申候。酉ノ春ニ成、干鰯谷雨ふり延行相成り申候。

たぬまとのもの守と申老中、殊之外公方様御意よく、思ふまゝニ成候ニ付、むほんの心さし出来、何角買メいたし高直成り。然ル所、天せいと悪事あらハレ、たぬま知行取上ケられ候而、三州さハラと申所ニ新城つき有之候へ共、知行取上ケられ申候。夫方又々、松平越中様と申御老中様御願ニ付、御勤被遊候。殊之外めい所ニて、日本國中悦申候。随分百姓を御いたわり被成、賣買高直成を御いたわり被成、大坂酒屋中、日本國中酒屋作来りニ、三步ならて成不申由被仰付、賣買も少し下り申候。此越中守様と申候十一万石之大名なれとも、貴賤ニ得と御心付あり、天せいたれ言ともなく、大神宮様とまで名付申候也。

天明九己酉年正月十四日、月の入所蓮花寺森の北はつれ。

寛政二年戊ノ正月十四日、月入所蓮花寺門より、ふるこの間江入ルと見へ、雲かゝり茂り^(マツ)しかと見へ不申。麥作うい谷ひよりつゝき、随分こやしいたし申。干鰯粉當り壺升八合方式升なり。米相場酉ノ暮方六拾匁。麥五拾匁方四十八九匁位、新麥式拾五匁方三拾四匁くらい。稲うへ付水たいかい、それ方六七月、日てりニてなん致申候。新米相場五拾四匁方亥春相場藏米四拾八匁くらい。

寛政三歳正月十四日、月入處くもり有り、相見へ不申候。麥こやし随分

致、干鰯粉當り壺升五合方式升迄。米相場六拾四五匁位、麥三拾七八匁、四十匁位。麥実入時分天氣あしく、新麥取実無數。出来麥三拾式三匁位、段々高直。秋作不作、新米五拾七八匁方段々高直、子春七拾七八匁、八拾四五匁迄。麥六拾七八匁。

寛政四年正月十四日、月入所蓮花寺森北はつれ。麥こやし隨分致、干鰯粉當り式升方式升五合迄。米相場七拾式三匁位。麥取実無數四俵方五俵迄。出来麥四拾七匁位、段々高直＝相成り、秋作よろしく出来立候處、大風五六度ふき、七八斗方式石迄。諸國不作、尤、關東筋豐作と申し、東國米積廻り申候。新米七拾式三匁方段々高直＝相成り、丑正月＝成候而百式匁位迄。麥八拾五匁迄。綿新七拾四五匁方下直相成り五十五六匁位迄下り、丑正月＝又々高直＝七拾匁位。

寛政五癸丑正月十四日、月の入所蓮花寺門江御入被成、隨分青月＝而少シまへ有。麥うい谷かゝさす、一向雨天＝而春の麥こやし出来不申候。草多ク麥大不作。新麥五十五六匁位、六拾匁、段々高直＝而、九十月時分六拾五匁位迄。水沢山＝而夏分天氣まんよく、稲作豐年、式石方三石位迄。新米七拾壺式匁方段々下直＝而、十月時分五十五六匁位。春＝相成り六拾壺式匁位、麥六拾匁位。冬方天氣順よく、麥うい谷かき、春干鰯谷もかき、干鰯壺升七八合方式升四五合迄。綿豐年＝而新五十四五匁方段々高直、七拾五匁位。跡々下直＝而六拾五匁方七拾匁迄。

一、當丑年、川原石橋近村勸化仕候而かけ申候。此年方東中野村三味道下へ廻り、石橋通ス筈＝相究申候。尤、石橋入用之内へ、東中野方金式兩奉加仕候。

一、寛政六^甲寅年正月十四日夜、月の入所蓮花寺森北はつれ、少し下＝雲あり。麥こやし能致、干鰯粉當式升位。新麥五拾匁それより少々高直成六拾匁、節季＝又下直五拾匁成ル。根付水沢山＝而、末水之時大日照り＝て大かんはつ。上代御見分＝相成、御米三拾六石被下、大難義いたし、御未進＝差こまり難澁仕候。但し、新米六拾式三匁より段々下直相成、卯ノ正二月五拾八九匁位。ワた作中年、新七十匁、六拾匁より少々高直相成、大豆作不作、六拾匁方七拾匁迄。

一、寛政七^乙卯年正月十四日夜、月の入所蓮花寺門之内少シかすみ申。種乃番屋、此年川端中方立申候。但シ藁持集セ賣佛、其代銀＝而、右番屋の入用＝仕候。麥作中年、新麥四拾匁くらい。それ方段々高直成、五拾三匁。干鰯粉當式升方式升三合。新米六拾四匁方、段々高直相成八拾匁迄。御手形九拾匁迄。八月廿九日、大雨、大水、國々御座候。此年冬分方米相場次第高直八拾四五匁迄。然シ此年大坂越年致候米、式百四万有米御座候処、右之相場高直之由、諾商人ふしきに申。夫故書記置申候。又わた不作申候、新綿七拾匁方九拾匁迄。

寛政八年^丙辰正月、月入処くもり候而、見へ不申候。凡蓮花寺森北はつれと思ひ候。正月一日方雨しげく、麥しやうやくおくれ、やうへひがらん迄＝干鰯入申候。新麥直段三拾八九匁、段々高直相成、冬分五拾式三匁迄仕候。稲うへ付水重分＝而、うへ付仕候。段々なつ分長てり＝而水かたく、少々水かへ仕候。米、綿中年。米式石方式石五六斗迄あり。新米直段六拾六七匁方七拾七八匁迄仕候。村手がた八拾六匁定。然ル所、米直段下直相成、巳正月＝は米七拾式三匁相成。綿直段、出来綿七拾匁、それより六拾匁迄＝相成、又々春分＝は六拾五六匁仕候。

寛政九_丁巳年正月十四日、月入所くもり見へ不申。凡蓮花寺森之内ニ相見へ申候。麥しやうやく重分ニ仕候。當春干か直段壺升六七合_方式升式三合迄、粉當り仕候。新麥七分之作、直段三拾七八_方、明正月ニ五拾七八_方相成申候。巳ノ夏分大日てり、新井溝大程ミたうし、車八丁立、昼夜かへ申候。稲毛七八分作。米直段七拾_方段々下直ニ相成、六拾_方迄。夫_方明春分_方、又右七拾_方相成申候。秋冬共長てり、麥しやうやく隨分能仕候。干鰯粉當り壺升七八合_方式升式三合迄。

寛政拾年^(ママ)戊午 正月十四日、月入処蓮花寺森内と相見へ申候。但シ雲かゝりしれ不申候。干かこう當り式升_方式升五六合直段仕候、こやしよく渡候。そ^(ママ)より天氣つゞき候得共、ね付水沢山ニ御座候。麥作之義、八九合之よの中。麥安直段四拾_方くらへ。春分雨度々ふり、そうをニ御座候。麥安も七八_方、段々直段高直ニ成り、春ニ成り五拾五六_方仕候。一、京大佛堂大かミなりニ出火仕候。八月時分出火仕候。新米出来たち八九合、直段七拾_方段々下直ニ相成り、十一月時分五拾式三_方くらへ仕候。未年春ニ相成候所、六拾_方ニ相成、午ノ年冬雨度々ふり申候。麥こやし仕不申候。又未の春天氣つゞき、麥こやし十分ニ仕候。

御は日

寛政十一年未ノ正月十四日、月入所蓮花寺森ノ北はつれて、新野邊之くわんのん堂へ入申候。

未ノ正月中は、晴天廿五日、雨天四日有り。同二月中、晴天十八日、雨天十二日有り。川端地藏堂、先年ヨリ當未ノ二月迄ハ、屋根藁葺ニ有しを、當二月ニ瓦葺ニ仕かヘル。三月中、晴天廿日、雨天十日有り。三月

五日雨天、昼七ツ時ニじしん有しかども、十二日迄ニ何さやさわりし事もなし。アクル六日昼七ツ時方大風雨、七日朝迄ツよく吹ク。^{クネ}種まき廿三日方廿四日迄。四月中、晴天廿一日、雨天九日有り。此月ニ土田山鶴林寺ニ開帳有ル。

五月中、晴天廿四日、雨天五日有り。同月十六日雨天、稻植付ケ之節ハ水多し。田植、十三四日方十五六日迄ニ植ル。十七日さのぼり麥作中ぶん。同月廿四日八ツ時じしん有ル。又廿七日昼五ツ時ニじしん、東方ゆる。六月中、晴天廿八日、雨天一日。尤、廿六日、廿七日兩日ニ少し之間ばら〜あめふり候得共、直ニひよりニ成ル。十九日昼九ツ前ニ、いぬいニ而、かみなりなりしがとも、雨ハふらす。いよ〜長旱故、をい〜水かへ始りしと也。七月中、晴天卅日、雨天ハなし。尤、廿四日昼九ツ前ニ、すこし間あめふる。是ハ京都神泉寺様、御祈祷之徳か。いよ〜長旱故、所々ニ雨清有しかとも、一向印もなく、當村氏宮ニ而角力致ス時ハ、ふしきニ雨ふる事是迄多し。依之、新井郷中方頼ミありて、氏宮ニ而為雨請之、角力有りしか共、至極之ひやけにや。少シくもりしばかりニ而、雨ハふらす、御地頭様ニ而ハ、或ハ惣社廣峯山所々ニ而、雨請御祈祷も多く有しかとも、一向印もなく、京都神泉寺御祈祷之火申請、組中村々池堤ニ而、炬ニ右之火ヲウツし雨請有ル。此徳か七月廿四日、少シ之間ばら〜雨メふる。八月中、晴天廿三日、雨天六日有ル。扱テ段々長旱故、平檜川井水、一向ニ下り不申。^{ステニ}既、八月四日、郷賀井、新井當番ハ不及申ニ、郷中庄屋、組頭、人足大勢^{ゼイ}召ツれ、平檜川へ參り、川堀^{ホリ}有しが、人々之取沙汰ニ、郷賀井方新井、井みぞ之口ヲせき申と取沙汰致候故、新井郷ニハ大キニ心懸りいたし居候處ニ、四日昼五ツ過方空くもり、四ツ前^{マエ}方雨ふり申ゆへ、人氣もやわらき、取沙汰のミニ而、郷賀井、新井諸役人、人足等まで、九ツ過迄ニ不殘引取、目出度納りし事、誠ニ

是迄之雨請へ、壺度ニきゝ申候やと一笑ヲなし、皆人歸へり候。難有キ事とも也。弥々雨ツよくふり、四日夜どふへ雨ふり、アクル五日ハ晴天ニ成ル。則、八月四日ハ式百十日ニ當ル。同月十六日方雨ふり、十七日夜通しふり、十八日大風雨。此日、川端中、日待おがむ。此日待ハ、七月頃方所々ニ、りひやうはやりしゆへ。しかし川端之内ニハリひやうハ不參。扱、十八日夜大風雨、十九日雨天、北ゴチ大風大雨、十九日夜四ツ過方雨もよわく成り、風も西へまわし、同九ツ過方雨風共吹やみ、晴天ニ成ル。此風ハ時節^{ジキツ}おそく故、稻へハ格別之さわりもなし。尤、晩稻へハだいふんさわる。同月廿一日方ひがんに當ル。新米はしり五拾貳三匁ぐらい、古米五拾八匁ぐらい。誠ニ當年之ひやけハ、六拾年以前、午ノ年之ひやけ此かたと申事也。五月十六日ニ大雨ふり候而方、八月四日迄ハ雨ふらす。尤、右日數之内ニ少シツ、の雨ハふり候得共、あめといふあめハふらす、新井郷之内、長砂、古大内、西脇村、其外村々も穂^ホニ出ざる稻多し。野添村ハ、上之代川東ハ、池水落切り、後ヲ堀々さらゑ水行キ届きし故、格別之事もなく候得共、川西ハ、ヨホドノいたみも有り。城代、鹿川代、川西ハ御見分御願イ申上、御引石申請ル。

八月十二日、御地頭様御祝儀ニ付、御領中有家江壺軒前ニ御米五合ツ、被下置、難有キ事也。

御領中寺社方へハ、壺々寺へ御米壺升ツ、被下置ル。九月中、晴天廿六日、雨天四日有り。十月中、晴天廿三日、雨天六日有り。十一月中、晴天廿四日、雨天五日有り。いよいよ相場も高直ニ相成り、十一月中比ニハ、新米七拾貳匁ぐらい、ひめじ御手形八拾五六匁、正米十一月廿日比方七拾三四匁、餅米七十九匁方八拾壺貳匁ぐらい迄。十二月中、晴天廿四日、雨天六日有り。大晦日之夜晴天、殊外暖氣よろしき年くれなり。干しが粉當り壺升六七合ぐらい。

寛政十二_庚申年正月十四日、月入處新野邊村、住吉ノ森り北はすれ。晴天_ニ而そらよくさへわたり、月入給へて直_ニ夜明ル。

寛政拾三年酉ノ正月十四日よ、月入所蓮花寺森ノ森だけ北へ入ル。麥上ごへ壺升七八合ぐらい、米七十八九匁。本寺_ニくわんぢやうあり。

享和二戌年正月十四日よ、月入所蓮花寺森_方森だけ北へ入ル。入時分、日ノ出まへ_ニ入ル。享和元年九月廿日_ニあめふり、是_方日でり_ニ而、戌二月十五日迄あめふらず、少しハ時雨仕候。

享和三年亥正月、月入所蓮花寺森北はすれ。新米五拾匁ぐらい_方六拾四五匁迄也。干か壺升五六合當り。殊外大びやけ。

享和四年子正月十五日、月入所新野邊南はずれ、御入被遊。水多分_ニ而御座候所、式百十日_前七日、大氣_ニ風吹、八月迄_ニ三度吹也。ほしか粉當り式升四五合より三升迄。稻花あしく候ゆへ、御願上、少々御下し米被下候。誠當年ハ、六十壺年めの子年_ト申事_ニ而御座候。京都_方宇座八幡宮様_江、御ちくし様御立被遊、下場_ニ而見拜仕候。又々此年、殊外の麥不作_ニ而御座候。麥安三拾八九匁_方春_ニ成四拾八九匁ぐらい迄。又新米のはしり五拾壺式匁より六拾式三匁ぐらい迄仕候。又此年_ニ三月十八日_ニ文化元年_ト年号かわり申候。猶又此年、殿様の御母子様、御病死被遊候故、九月の祭礼十月八日_ニ相成申候。御下中祭礼相延申候。

文化貳年丑正月十五日、月入所蓮花寺門の南はづれ御入被成申候。水沢

山ニ而御座候。干か粉當式升方式升式三合迄當り。麥作ニさばい多入、それゆへ殊外麥不作、壺反ニ付七八斗方壺石壺式斗之作仕候。出来麥直段三拾八九匁方四拾式三匁仕候。其後段々高直ニ相成、五拾式三匁迄仕候。天もん少々ちかい大風分有之候而、大公様方そくりう御役人様方、濱筋、御間地御入被遊、御通り被成候。扱又此年、三木法田、法海寺ニ而、別正小三郎、式百五拾年忌ニ而御座候。

文化三年寅正月十四日よ、月之入所、くもかゝり候故、蓮花寺凡門之南はつれ、御入被成候由ニ相見申候。干かこう當り壺升七八合方式升式三合迄ニ當り申候。麥作も中年、壺石方壺石五六斗迄之作仕候。麥直段四拾匁方四拾式三匁位仕候。然ル所、五月稲ね付時、水沢山ニ御座候共、其後、殊之外長てりニ而、凡七八拾日てりツ、き、池かゞり日やけニ御座候得共、新井掛り之分をくふり仕候而、井水沢山御座候故、万作仕候。當村上代、長々水かへ仕候而、稲作御見分御願申上候所、少々御用捨御座候。然共、下代万作仕候、壺反ニ付式石式三斗方三石式三斗迄。新米直段六拾四匁方段々下直ニ相成、五拾式三匁引下ケ申候。又候、十一月中旬方高直ニ相成候所、御買米天りやうへ被仰付候ニ付、段々高直ニ相成、卯ノ正月ニは六拾四五匁程仕候。綿作法年仕候、壺反ニ付拾七八貫方廿四五貫迄取見御座候。直段五拾四五匁方四拾七八匁迄引下ケ。麥こやし十分ニ仕候。

當寅正月上旬ニ、三日三夜江戸大火ニ御座候故、相場少々高直御座候。やけ所、凡六七歩計。

文化四丁卯年正月十四夜、月之入所蓮花寺森北はづれ、壺間口森へ掛り、御入被遊候。然ハ、干かこう當り壺升七八合方式升四五合迄當り申候。

春分ハ天氣よく、麥こやしよく致。池々水壺合方五合迄、五月廿八日迄天氣。しかし新麥三拾七八匁より四拾五六匁迄。五月より段雨ふり、一作畑之こへ、しよやく一向出来不申。壺反ニ付五六斗方壺石迄取。

此年ぬす人、はりこの尾と申、頭下之七拾五人召とられ、いよの國方此海道通り申候。其のち大坂御番所ニて何之咄しもなし。

文化五年辰正月十五日、月入所蓮花寺森内へ御入被成、東しらみニて御座候。甚大氣よく春成、米相場七拾七八匁、麥安四拾八匁くらい。干か粉當り、上物壺升六七合方式升迄。祭礼頭此年方養子の子方相勤ニ定申候。

此年高野山大火ニて御座候。本寺純一法印様御寺、不殘やけ申候。二月六日七ツ時也。

文化六年巳正月十四日夜、月入所蓮花寺方森北御入被成、おかみ御座候。甚大氣宜敷春成、米相場七拾五六匁、麥相場四拾四五匁迄。干か粉當り上物、壺升五合方式升迄。三月中旬方雨ふらず、五月五日、六日雨ふり、池之樋ぬき、八日ぬき、田うへ致し、夏日やけニ御座候。五月十六日方上みぞ水かへ、八月四日迄致。綿豊年、壺反ニ付十七八貫方四十貫迄取。下米よき式石方三石迄取。

文化七年午正月十四日、月入所蓮花寺。くもり日方ニ而、およそ森中方少し南方御入被遊候とをもひ、甚大氣宜敷春成、米相場六拾壺式匁、麥相場五拾三匁方五匁迄、干か當り上物、壺升三四合方三升迄。

文化八年未正月十四日、月入所蓮花寺森北はつれ、清月御座候。干粉當り

式升四五合、米手形六拾貳匁五分。麥安四拾八匁くらい、中年申事＝御座候。

文化九申正月十四日、月入所蓮花寺門北少し西、入被成候。少し前被成、しかとしれかたく候。干か粉當り上物、壹升七八合くらい。米御手形五拾八匁、麥安五拾壹匁迄仕候。

文化十酉正月十四日、月入所蓮花寺森内少し北はつれ。甚清月＝御入被成候。殊外之ひやけと申候得共、下田ひやけハ致不申。樋口かゝり、ねつけ少々延引相成、申方うへ付仕候。なつふん＝相成、水かへも不致、宜敷様＝存候得共、取み少々、壹反＝付四斗ぬけと申候。出来麥安三拾七八匁より、春分成五拾五六匁、米御手形七拾貳匁五分。干か粉當り上こへ上物、壹升七八合迄。此年、本寺本堂上屋ね足共、十二月迄出来仕候。當九月上旬＝姫路市川＝て、ごく文三人有之。六拾五年ふりのせいはいと申方＝候。江戸方、米や店廿五軒も家つふし仕候。それつき西御番所様、御江戸へ急御めし＝御つれ成候。

文化十一戌正月十四日、月入所、十四日夜う天＝て、入所少もしれかたく候。春分＝相成、正月廿八九日方二月中おりへあめふり申候得共、道上ハ、未、種つけ水も無御座候。段々なつ分＝相成、殊外大ひやけ＝て、道上不殘一作畑＝御座候。當村上田ハ不殘一作也。御見物御願申候所、當上田へ御米貳百五石下シおかれ、しかし新井ハ水隨分沢山＝て萬作仕候。新米六拾貳三匁方段々高直之物成、藏御手形六拾七八匁迄。平米春分＝相成七拾八九匁迄。此年本寺本どう屋なかへ有之候。新麥三拾五六匁方段々高直＝成四拾八九匁迄。

文化十二亥年正月十四日、月入所明ヶ方ニくもり先後見合、蓮花寺森中ほど御入被成候。春分ニ相成、天氣はなはたあしき、麥こやし一角出来不申。二月ニ相成、天氣よく段々こやし仕候。干か粉當り上物壱升七八合、あしき物貳升迄。此年姫路市川ニて、二月初午日、三人うちくひ有之候。戌年十一月下旬ニ下場ニて、干かとみとなどらへとみ仕候。其とがニよりにて、會元、西二見ニ壱人、明石壱人、やど土山ニ壱人大坂引れ入らう仕候。三人なから今ニ御免無御座候。とみくすう少々ニ御座候所、ふゆ内ニ御めし有て、申わけニてかゝり申候。道上池々水三四合つゝ出来申候。

東圓寺代々住職之控。

法印勢順、寛文六年五月廿九日寂。

阿闍梨覺壽、延宝九酉七月入院、元禄四未閏八月十六日寂。是ハ本寺無量壽院一代文雅法印弟子也。

大法師勢仁深清、延宝三卯年五月廿二日寂ス。

心王院俊雄、元文四未年正月十日寂。當地之産也。

阿闍利覺隆、元文五年入院歟、相分り兼申候。

阿闍利湛龍、寛延三年入院同斷。

仁王院泰觀、宝曆十二午年入院、安永ニ至リ西二見村威徳院轉住、彼寺ニ而寂。右泰觀弟子惠龍高幢房、安永二巳年七月十四日寂。當村河端孫兵衛子也。

阿闍梨俊乘、享保十四酉年二月十五日寂₂ス。伊豫之國産ニ而、後、薬社持宝院₁ニ而、是ハ四代目之处書落ス故、此所ニ記ス。

辨泰教順房、安永三午年入院。大西彌一兵衛子。今ハ絶家。

宝山觀善房、安永六酉年入院。明道本染房、天明二寅年二月九日入院。融應圓鏡房、天明八申六月入院。寛政十二年、西本庄村蓮花寺江轉住。同年、普善郷明房入院。享和三亥三月廿三日寂ス。俗生當村山之代嘉兵衛弟。等觀了吽房、享和四子八月入院。文化六巳年攝州久安寺へ轉住。龍章成憲房、文化九申年三月入院。同十一年退去。右先住相分り候迄相記。間々相知不申候。

富雄龍光、文化十三子年二月十二日入院。是迄西二見村宝積坊住職之内、伏見御香宮社僧、大養院兼住之所、右兩院共相退轉住有之候。生國淡州津名郡廣石中村、持明寺弟子、同國同郡入野村庄屋、片山嘉一郎舎弟也。

文化十三子年正月十四日、月入所蓮花寺森内、しかとしれかたく。新米五拾三匁くらい、段々高直ニ相成七拾貳三匁迄。姫路御手かた八拾貳三匁くらい。春成少々下直ニ相成六拾六七匁くらい。麥安新麥三拾五匁、段々高直ニ相成五拾三四匁迄。干か粉當り上物壺升七八合方貳升迄。此年本寺ニて三月四日方四月四日迄くわんしう御座候。東圓寺住寺、亥年十一月いんか被成候。八月より十一月迄、あめふりつゝき候。

十一月より天氣つゝき、麥こやし仕候。

文化十四丑年正月十五日、月入所宝蔵寺森内、北はずれ御入。隨分清月也。麥安春分ニ成、少々下直ニ相成五拾四五匁方當月ニハ四拾四五匁くらい。米六拾七八匁くらい。天氣正月方隨分よろしく、干か粉當り壺升五六合方貳升迄。麥こやし不殘仕候。采出麥安三拾七八匁方段々高直ニ相成り、十二月時分五拾四匁迄。此年、とうしん船ふきがされ、上方なた方はまちよりニ仕候時ニ、惣見參り申候。此年八月時分ニハ、しひやうしやうかんはやり、貳歩なりとせしよへ壺人也。

文化十五年寅□正月、月入所新野邊村中ほと、四ツど北はすれ＝御入被成候。少し前被成候。

一、去冬麥まき少し天氣まん＝て、はやく候而、ふゆの間あしきと申候得共、春分＝よろしき相見へ候得共、しかし上こへ時分ハ、うてんつゝき候て、ふしうやく＝御座候。干か粉當り、上物貳升七八合方三升迄。右麥安末＝五拾五六匁くらい。わた段々下直＝相成四十七八匁、上物五拾匁迄。米段々下直＝相成り五拾七八匁くらい仕候。此年おらんだ人、江戸へけんしやう物持參仕候。海道へ見物＝參り申候。七拾壹年めと申事＝候。

一、抑、當村涅槃講之草創を尋るに、寛永二十癸未年之事なり。それより當文化十五戊寅年迄、百七十六年＝成也。又、當村地藏堂之草創をたつぬるに大同元年之事なり。夫方當年まで、凡千十餘年＝成也。此兩様共、或老人之所望に依而、粗是を記ス者也。

一、當寅ノ二月、雨多々ふり申候。同月彼岸に氷はり、又少々雪ふり申候。彼岸中日ハ涅槃と同日ニて御座候。近年＝ハ稀なる寒にて有之候。

文政二己卯正月十四日、月入所蓮花寺之北、凡新野邊之梅谷藏邊間、御入被成候。隨分清月也。去年八九月方、新米五拾五六匁方段々下直＝相成、十月、十一月時分、五拾壹貳匁方五拾目迄相成、御手形も六拾三匁三分方段々高直＝相成、六拾七八匁＝相成。一、麥安も冬分ハ、四拾六七匁方段々下直＝相成、四拾貳三匁方、又三十八九匁相場。麥冬しやうやくも、春分＝相成、皆正月末迄＝いたし、干鯛粉當貳升七八合方四升三四合迄當。段々麥米もどうじ也。一、津山富はい會成、去年十月ハ、札之より四万八千五百貳拾七枚迄。十一月十五日ハ、拾壹万八千九百八

拾枚也。皆諸國方津山ニ立入被成候上、大坂御番所様方、諸國之すいびなり。又、十二月五日、富御座候迄。御取手十二月朔日方三日迄＝、西之宮方一谷迄＝富行、凡五百人くゝりて大坂へ引、又、長池方姫路西手野村迄＝、凡三百人程取、其上札又銀子迄、御取揚被成、凡札代三百六拾貫目也。札之高凡六万成。皆取揚被成而、其外五貫匁宛之ぐわりやう也。去年五月廿五六日上付也。晦日大雨也。六月三日＝雨少々ふり、四日方天氣方日てり也。皆水かへ也。七月十二日夜雨ふりかゝり、十三日朝迄ふり、凡三寸五六分ふり、稻綿よく九分之秋作也。壺反＝付米凡六俵方八俵半迄也。又、綿も壺反＝付凡貳拾四五貫方四拾貫迄吹、段々綿相場も五拾目方段々下直＝相成、四拾壺貳匁迄。又卯二月時分、四拾五匁方七八匁迄相場也。去年九月、大豆四拾壺貳匁方四拾七八匁迄相場。卯正月方初相場ハ五拾目位。小豆四拾七八匁方五拾八九匁相場也。又、春分＝而ハ六拾目方三四匁也。大角豆三拾四五匁方四拾五六匁相場也。又春分もとうじ也。空豆貳拾五六匁方三拾四五匁迄相成、蕎麥拾七八匁方三拾目迄也。ごうま七拾目方七拾七八匁也。種五拾壺貳匁方段々高直＝相成七拾目迄。

文政三辰正月十五日、月入所蓮花寺門南はずれ。春分淀てあめふりつゝき、五月新麥三拾四五匁。干か粉當り三升四五合方上物貳升四五合迄。五月根付水□□……□□とうよ間あつさもなし□□……□□。新米五拾貳三匁、姫路御手形五拾四五匁くらい。當年十二月＝銀札出来有之候。

文政四巳正月十五日、月入所蓮花寺門北はずれ。清月＝御入被成、天氣つゝき、麥こやし隨分出来仕候。干か粉當り三升方上物貳升四五合迄仕候。米春相場五拾貳三匁、麥三拾匁くらい。しかし麥＝ハ、げんじ申む

し付申候。

文政五年正月十四日之月入所ハ、新野へ森北はずれ、御入被成候所、去年五月水かたし、池水おち式合ほと殘。上田一作、但六月少々雨ふり、七月雨かたし。堀々さら江、七月中水かへ仕候所、宮之うら井戸水なし。七月末ニ雨ふり、新井水あかり、秋作中年ニ御座候。村相場六拾七匁五分、米五拾六匁五分、もち米六拾八匁方段々下り、十一月六十匁相成、十二月五十七八匁まで下り、閏正月方米も段々上り、六十五六匁相成。麥安去年ハ三十式三匁方午正月方三拾七八匁方四十匁相成。干か小當り式升三四合方三升まで。綿作相場銀六十式三匁方、段々十二月方五十七八匁方五十式三匁相成、春分方五拾五六匁。小麥三拾匁方三十式三匁相成、銀札義ハ去ル辰年方始り御仕立可被成候。去ル巳年春分見ならへとして、壺軒前ニ銀札壺匁五分ツ、下され、忝受納仕候。尚村々庄屋、組頭は御城内江御めし被成、むし物銀札壺匁ツ、御下され、忝受納仕候。

文政五年年二月十五日。

十月方天氣宜敷、麥こやし、しやうやくよし。閏正月方少々小雨度々ふり候得共、何分ニ雨かたし。

文政六年正月十四日夜靜ニ而、十五朝くもりて月の入知す。先午ノ春米五拾四五匁位方、麥三拾目位。わた六拾目、干鰯の粉三升式三合當。壺反ニ付米六表方七八九俵半迄。わた式拾貫方四十貫迄。當村ニ於十分余之年也。此年伊勢講田始り、扱又、姫路御殿様、侍從職之御位ニ御成被遊、領分中大祝致、亦公方様方御姫様御入被遊、殿様極悦被遊、領分一度御賀ノ為ト申して、家別身分相應之御悦献上致、御殿様方御悦の御酒料為壺人前ニ男四十八匁札、女三分、小供式分ツ、被下有度納受致。又、

午十二月、丹後宮津領分、家つふし_ニ而大そとう。役家大家貳拾四五けんつふし、金銀もうす_江入レ、はたきめぎ、絹物も切捨、やきすて_ニ致事の大そとう也。

文政六年二月

文政七年申正月十四日夜靜_ニ而、十五日朝、月の入所ハ、蓮花寺森北はつれ_ニ入也。未の春_方あめかたし。外_ニハふり候へ共、たまる程事も無之、五月七八日頃_ニ半日計りふり候而、段々天氣つゝき、池_ニ有水もなく也、うゑ付_ヶ仕舞ハ、六七八月迄水かへやむ事ゑす。八月七八日頃_ニふり、上代、二子代、二見代、道上明石郡、一向穂_ニ出す、諸國上下共大日てり。當村中分之年なり。米六表_方八俵半九俵、わた十四五貫_方四拾貫迄。大豆、小豆此外夏物一向なし。米六拾四匁_方七十貳三匁迄。麥安三十四五匁_方五十壹貳匁迄。干鯛壹升八九合_方貳升六七合迄當り。扱亦、當年五月紀州和加山領分_ニ大日てり_ニ付而、家つふし_ニ而大そとう有。又、此年姫路御殿様、將々職の御位_ニ御成被遊而、當六月_ニ御城入被遊目度事也。同年十一月京都本願寺火事、大門の金あミかゝり人、七人もやけ死。十二月廿八日_方申年元日迄、昼夜四日之間、江戸大火事、大名屋敷三十屋敷計り凡やけ揚、三里四方同たひへやけ、町家屋敷數々、明石殿様上屋敷、下屋敷兩方乍やけ、是非なく歸國被遊、二月十七日_ニ御城入被成。同年二月朔日四ツ時_ニ、大地震昼夜_ニ七八度も入ルなり。それ_方段々あめふりつゝき、此春地震度々の事也。

文政七年二月未十四日、月入所前被成

先後見合、蓮花寺森内御入被成、水中合、麥作中分、麥安三拾七八匁_方段々高直五拾目迄。いね作拾分。干か粉當り三升_方三升四五合迄。新米五拾七匁_方春分_ニ六拾五六匁。御手形七拾三匁、平米段々下直_ニ相成五

拾七八匁くらい仕候。

文政八酉年正月十四日、月入所、よいよりくもり、しかとしれ不申候得共、前後日見合、蓮花寺森内也と申候。前年八月より、天氣まんよろしく、あきハ申不及、ふゆじうハ天氣よく、麥まきこやし拾分仕候。干か粉當り、壺匁ニ付壺升四五合方式升迄。式朱銀新ふき出来被成候ゆへ、古式朱當二月切、通用不仕候、御ふれ被成候。又々、此年壺朱銀出来、式朱半分之通用仕候。米相場銀五拾四五匁、麥安ハ四拾式三匁くらい、新麥。

文政十年亥正月十五日夜、月の入所蓮花寺之北はつれニ入也。又、相場之義、米六拾式三匁位、麥札の五拾目より式三匁位。綿六貫より六貫式三百匁。干弱^(ママ)之粉當り式升式三合。たね百拾五匁位、油五匁式分より三四分迄。小麥六拾式三匁、わたの実、壺貫目ニ付八十五匁より九拾匁迄。且又、文政九年の五月廿一日ニ大風吹、うゑ田大キニいたみ、又、六月六日大風ふき、わた一向かれてなし。又、式度三度とわたをうゑ、又、段々日てりつゝき、うゑたるわたも、そたつもあり、そたたぬもあり、豆ニうゑる人も有。綿壺反ニ付、拾貫目より三拾貫迄取。又、所ニよる也。此年當村樋之口ニ而、十月ニしばい仕候。又、此春大坂かいふぼりニ而、ひんくニ暮ス物は有。元想應^(ママ)ニ暮シ居たる人ニ御座候得共、女房元ハげい子致たる者。同春此男ひへ病ニ而四國へ行、△

△女房ハくわいたいニ御座候。るす中ニ三子ヲ生ミ、三人供男子。隣方かけ方町内へ届ケ、會所方御番所へ相届ケ、御役人様見分被成、御上方麥さす三貫匁。尤、三つ被下、乳母三人付ケ、町内方相應ニせんべつ。誠ニ夢の如、世見ニまれ成事ニ候と、よろこひ候所、同ふゆ、ほそニ而

壱人相はて、殘貳人ト成申事ニ御座候。

文政十一子年、月入所蓮花寺森内御入被遊、ふゆ分かん迄ハ麥まき、後より天氣よろしく候得共、かんニ入度々あめふり、麥こやし一角出来不申。春分ニなり、天氣あしく候而、ひかんニすきニ干か入申候。干か粉當り壱匁ニ付壱升三四合方貳升迄。米六拾壱貳匁、麥安五拾壱匁くらい。わた六拾四五匁程。ふゆ合ニハ百五匁。段々下直ニ相成九拾目くらい。此年、本庄川石はし、土山川石はし出来仕候。

一、文政十二年丑春正月十五日、月入所^(ママ)花蓮寺門凡。文政十一子年、天氣段々つき候得ハ、五月中時分方段々雨ふり、當キあれも少し御座候へは、大方ニう付致候。五月中時分方八月十日時分迄ふりつゝき、いねにうんか付、綿もくさり大不作也。もちわせ四俵半ばかり、おくてが五俵半方六俵迄。綿壱反ニ付七八貫方廿貫迄。當春、麥四拾貳匁三匁位、七拾貳三匁方四五匁迄。干か小當貳升方貳升五合迄。新麥四拾貳三匁位、新米八拾三四匁、村手形九十九匁。

一、丑年春時分天氣つゝき、春麥五拾四五匁位。五月麥中分、ねたん三拾七匁八匁位。池々水六合位、樋ぬき三日のび、其上水のび不申候付、下田方樋參り、其夜方大雨ふり、植付はじんに致、諸國共大寶年ニ而、新米七拾五匁、おいへ下直ニ相成、十一月時分ニハ六拾七八匁位。村相場八拾匁、五月中、廿一日同廿四日大風ニ而、

一、文政十三年ハきり壱本も無、はけしをニ當り□□□□□仕候。其方段々天氣ニ而おもひの外そたちよく、壱反付貳拾四五貫方五拾貫迄。文政十二年春、麥安四拾匁位方五拾目迄。米相場ハ、八拾四五匁方七拾八九匁迄仕候。文政十一子六月朔日ニ、姫路殿様京都へ御參代被遊、百萬

石之御角敷_ニ而藏兵千七百人余、姫路御屋敷之大身衆捌_ニて、御小しらい_ニ而御供被遊、首よく御勤被遊、□□之_ニ而女ハ三分、男ハ五分つゝ被下、忝受納、此入用銀凡十八万兩と申事。

段々御首尾よく、□督之御位_ニ御成被遊。

一、文政十三年寅正月十五日、御月の入所^(ママ)花蓮寺門北はすれ、晴月_ニ而日出御入被成。正月、二月ハ天氣よく、麥書やく仕候。干か小當り式升四五合_方三升迄。春米銀_ニ而六拾七八匁、麥安四拾匁_方七八匁位仕候。

一、天保二年卯正月十四日夜、月の入所、古小西北はすれ入。文政十三年二月末_方、何^(ママ)満國^(ママ)_方おかけ初り、當國ハ、三月_方閏三月の初_方廿日迄_ニ、おい〜參、筆_ニも^(ママ)つく^(ママ)かたく、村々_ニいろ〜せいたひいたし、せんきゆう籠いたし、當村せいたひ七麥様_ニも、一日せいたひ、又村_ニも出合_ニ而せいたひ仕候。京、大坂、伊勢道も、おい〜_ニせいたひ有。閏三月十九日夜、内宮様大火_ニ而、万社、氏橋、保町家迄やけ申候。本社はかり残り、神事ハ村々へおはらふり、又金平白平箱はらひ、いろ〜ふる。是ハふしき也。又、下方正二月_方おかけ參、おひ〜參申候。文政十三年五月_方、麥安、作ハ中年也。麥相場四拾匁位。大あめふりつゝき、加古川ハ三日も泊り大水也。川筋おひ〜きれ申候。麥相場ハ段々高直_ニ相成、又ふりこゑハ壺升六合_方式升五合位迄。米作合儀ハ、不作_ニ相成、相場之儀、七十七八匁位_方九拾目迄。又手形ハ八十式三匁_方九十五匁迄調。春分ハ米ハ百目位、麥ハ五十式三匁位也。又、作綿七十四五匁_方段々高直_ニ相成、十二月時分、銀札九十四五匁_方、土佐綿ハ百五匁迄。おい〜正二月迄、なみ綿百捨匁、又ハ土佐綿ハ百式拾匁位迄。去年六月時分_方、京都_ニ而たび〜大しん也。二條之城之角藏こけ申候。

其れニ付、宮様御いんきやう被成、其れ付極月十六日ニ年^(ママ)合改、天保元年と也。

天保三年

御月見日記

紙數六拾枚

辰二月

一、天保三年辰正月十四日夜、月の入所、蓮花寺森南はずれ御入被成候所、干鰯粉當り貳升五合方貳升七八合迄。麥米之相場、去年麥相場銀札之五拾貳三匁位方、新米七拾貳三匁位方八拾匁迄。綿も貳拾貫方四十四五貫はかりふき、直段七十貳三匁方八拾四五匁迄之相場。又、姫路手形八拾匁方九拾貳三匁迄。又、麥ハ段々高直ニ相成、極月時分ニ而ハ、銀札之六拾匁位方、當春分ニ而ハ六拾貳三匁迄相成、米は六拾七八位方七拾貳三匁迄。去年二月廿五日方あめふり、四月十日時分迄ふり申候。四月十五六日方天氣相成、五月之田植もおくれ、五月中旬後ニ田植致し、麥も中年也。又、米も中年也。五月差入方、おかけおとり村々ニみなはやり、村々に百匁、貳百目位方壹貫目迄入レ、村中ヶたわいなく御座候。十一月末迄はやり、去年三月廿八日、伊勢講參致、其あとよりにきわいに、いろへ村中ヶおさわき。又、三月方氏神に、やね替致、同六月晦日上せん宮致刻、其日小犬ヲ、酒造、そうめんや連中、立合ニ而上ル。又、燈ハ大坂住宿人々方上ル。氏神も政は致、去年麥まきもおくれ、十一月末方迄まき、麥之ういたにもかき不申。當春ひかん時分迄、ういだにもかき不申、干鰯たにもかゝず、麥も段々高直ニ御座候。

一、天保四巳年正月十四日夜、月の入所は、蓮花寺森南はすれ御入被成候。去年干鰯粉當三升位方壹升五六合ハとり。七月六日方廿日迄、月天様御入被成時、青色ニ相成、ふしき也事。閏十一月十三日夜、濱田四郎三郎方火見セ、四十五六軒やけ。辰年十二月時分ハ、平米七拾四五匁位方、巳正月時分出ハ、八十四五匁位也。辰十二月時分ハ、麥相場五拾貳匁位方、段々高直ニ相成、春分出ハ六十匁方七十匁迄ニ相成、新麥五拾貳三匁位方段々高直相成、十一月時分出ハ百三匁迄ニ相成、新米九拾匁位方百三拾匁迄。九月七八日時分方、奥三草木なし。段々家つふし初り、明樂寺村十五六軒つふし、北野木屋つふし、段々大門三軒つふし、瀧野村、古瀬古川やど村、敷所村、小野小田市場、市場宝山、國包村、三樋村、かんき村大庄屋つふし、志方もおひへつふし、大野大庄屋新宅貳軒つふし、寺家町大忠角中大野屋三つふし、是ニ付かんき村大庄屋様、國包村をつふし時みて、姫路江かき付、おひへ役人衆中御出廻し被成、家つふし出合、おひへたゝかひ、りやうともけが人有之。高砂へ御役様御出はり也。姫路御手形百三拾匁位相成候。村相場ハ百三拾四匁定、段々高直ニ相成候。平米百三拾匁位迄ニ相成候。麥安儀ハ、巳年七八月時分ハ、五拾八九匁位方、十一月時分出ハ、段々高直ニ相成て百目迄ニ相成。

一、天保五午年正月十五日朝之月之入所ハ、新野邊之さんまへ北はすれ江御入被成、晴天御座候間、干か粉當とりハ、壹升壹貳合、尤干か壹升六七合方貳升迄當ル。麥百匁方段々下直ニ相成、二月時分ハ同じ、三月四月も同じ、五月時分ハ、九拾匁方八拾四五匁、段々七拾匁方六拾三四匁。小麥ハ、五拾三四匁方段々高直ニ御座候。六月時分ハ、八拾匁位方、七月時分ハ、六拾四五匁、段々高直ニ相成、八拾四五匁位方九拾匁迄。

正月時分ハ、米百四拾匁位方百三拾匁迄。段々下直＝相成、九拾四五匁方百匁迄。新米八拾四五匁位方酒造三部一定、又ハ段々下直＝相成、又ハ七拾匁迄下直＝相成、酒作次第相成。綿ハ壹反付貳拾貫方貳拾五貫迄。八拾匁方七拾匁迄。

一、天保六年末正月十五日朝之月入所ハ、新の邊梅谷こなし納所御入被成候。去年十月六日雨ふり、段々日天氣＝相成、干鰯粉當とりハ、壹升壹貳合、尤ほしか壹升六七合方貳升迄當ル。

四月朔日方段々雨ふり、五月七日大水出也。五月十七日又大水出、又廿二日大水出、川邊南保四五軒ハ水入。五反田四五流、川筋ハ不申きれ申候。二月時分ハ米麥相場ハ段々高直相成、米ハ、八拾匁位方九拾匁迄。又、麥ハ作麥五拾匁位方段々高直相成、九月時分ハ米相場ハ段々高直相成、平米ハ七拾七八匁方八拾匁位。姫路御手形九拾匁方九拾壹貳匁迄。當春ハ同し。麥ハ六拾匁方六拾四五匁位也。鹿川庄五郎悴、富藏と申者、五七年前＝出髮詰仕候。なぐさミ＝而小鳥類い、あ平りかい候而おる所、極月七日夜、鳥ぬすみと參り候而、おかけ、あしあらひ田二三町目＝而、ぬすみと申者たゝきくり、はしり戻り、鄰りぬきおどろき入、安右衛門、太右衛門、勘右衛門三人參り、相聞之上、役所ひ人番所兩所江參り、役所方兵藏と申人、早々かひ法せいと申被遣、野中＝而ハ、かひ法もいきど＝候而、川はた＝而つれ戻り、かい法仕候得共、世上叶相果候。姫路御鎌師御出被成、二三日御金見被成、鄰保余親見御尋被成、則、富藏極月十一日方小谷ろへ入。當春二月五日迄ろへ入、鄰保ハ表＝姫路行、今未相濟不申候所、村預ケ＝而相戻。天保六末年四月＝圓滿寺川原＝而池作。すなわち作人庄屋七兵衛様作也。池ハ天保池と。極月十七日、若殿様御城入被成、御殿様御祝＝御酒料被下奉候。男壹匁女三分、男子十六才迄

壺匁、女子三分、男子十五才下ハ貳分、女子十五才貳分。

天保七申年正月十五日夜同時拜、月入所ハ新野邊さんまへ御入被成候。干か粉當、取り壺升方壺合迄當。尤ぼしか粉當りハ、貳升方貳升貳三合當。

去年ハ綿ハ五六貫方貳拾貫迄。米ハ四俵半方七俵迄。麥ハ貳俵方三俵半迄。麥米相場、二三月比方米八拾四五匁方九拾匁迄。麥相場七拾匁くらひ。春末方大雨ふりつゞき、六月六日比大水出、まへ山西へ切レ、東中野、川端家中江入。又、下も順そひ西へ切レ、野添分二町あれ、宮北分、東本庄分壺町、高川原になり、萬兵衛まへ橋まへ年にをち、直ス。又、申年にをち。申年、麥中年に御座候。八月秋、米不作ニ而追々高直ニ相成、米直段新米百拾匁方、十二月比は百五拾匁迄に相成追々上ル。麥相場、新麥五拾四匁方追々上り、八月時分は九拾匁くらひ。十、十一、十二月時分は百三拾匁方百四拾匁迄。小豆、大豆、小豆は百五拾匁程、大豆は百貳拾匁、そらそば百拾匁、諸事三ぞうばひに御座候。麥米高直に付、村方難儀人多ク出来、御上様へ願出、御拜借銀三貫匁余下り、御米も少々下り、未進銀も凡拾貫匁程御座候。其内四貫匁度々により、残り六貫匁程は四方無御座候。

一、天保八酉年正月十五日朝、月入所は雨天ニ而相知レ不申。干しか直段、いわしどり四拾匁くらひ、尤干しか粉當り壺升四五合程。米追々上ル、百七拾匁程成、麥百四拾匁程ニ成、諸事高直ニ御座候。村方難儀人追々多出来、講之何に不寄けんやくいたし、百々頭は米寄せ不致、しる、そいらやきもの、このもの三品上ヶぜんニ而しくろだけ常躰、ねはん講は米壺升ニみぞしる上ヶぜんニ而すます。御上様方固米三部壺下り、難儀人江

遣ス。極難人は御上様方御見分有。巻人まへに、米巻合五勺宛下ル。村方そうおうの衆方五匁方三拾匁迄出し、凡合、式百五拾匁程ニ成、難儀人江遣ス。庄屋藤野七兵衛殿方米三拾俵程、難儀人江無利ニ而かし付ル。酉年二月十九日比方、大坂ニおゐて、大そうど大火しつらひ、此儀も、諸事高直ニ付、よりき大塩父子初メ、同役凡六七人程、同しんも三四人程、同腹ニ而、大坂小之池、みつひ、岩き、やけうちにしたし、天満中よりき町残ぶ、ほり川方東、惣やけ。上町方船場、南ハ本町迄、西ハせんたんの木迄、北ハ大川迄、凡家數三万軒計りやけ申候。又右大塩の勢ハ、凡又三百人計り、南無妙法蓮花經のはたヲ立、天照皇大神宮、八幡大菩薩、春日大明神ののほりを立、ぬきみのやりヲ脇々ニ持、大つゞを式丁引、うしろはちまきニ而、悉しよう速。みな一陣立テニ而打たテ打まくり、右船場、淡路町ニ而たゝかひ、右之先勢四五人も打れ、是切行江しれず。其時御番所方江戸へ早打參り、大そとう。尼ヶ崎、きしのわた、高つき、よど、大坂へをひ一相つめ、其外陣屋一、藏屋敷みな一用意為罷出、其時江戸方姫路へ早打ニ而、加勢ヲ申付被、早速一番テニ高広様大勢ニテ御出立被成、其外追々二番テ三番テ四番テ御立被成、凡陣勢ハ、三千余計り。明石、兵庫、西ノ宮迄相つめられ、大坂も相しずまり、其時、御番所方御相談有而、國元へ入城被成候。右そうどう相濟、其後三月四五月時分迄、段々高直ニ相成、米式百八十匁位。麥百八十目方式百目位。綿式百目、大豆式百目、小豆百五六十目、そば百五十目、そら豆百四十目。其外萬事安き物なし。ねはりつき、ぬか迄も壺升ニ付六七十文位致候。また京、大坂、江戸ニ而ハ、白米壺升ニ付壺朱つゝ。其外國々津々迄大ききんニ而干死ス。成物をうし。先あら一此外筆ニもつくしかたき者也。

天保九戌年正月十五日朝、月入所ハ、蓮花寺門の通り。然共下ニ而雲か
 ㇿり相しれス。ほしか粉當壺升七八合、鯛とりゆい三拾四五匁位。五月
 前方ふりつゝき、上池々うてみはね、新池きれ、一松之西きれ、上はし
 西詰きれ、川原之ことく、下石はしおれ、東へきれる。水き原本庄田迄
 三四町ほと川のことくニ相成、さそくふしん仕候。秋作ふさくニ而も相場
 下直相成、米百目内外、麥七拾匁位。是方おいへ相成、

天保十亥年正月十五日朝、月入所ハ、蓮花寺森南はすれ、御入被成候而、
 水たくさんニ而兩作共中作ニ而、米八九拾匁位、麥六十目位。寒分ニハお
 いへ下直相成、

宮西、古こ新加へ成。

天保十一子年、月の入所、蓮花寺森前御入被成、春相場、米六拾三四匁
 位、麥五拾匁位。五月時分ニ而てんき宜敷、いね、綿中作ニ而、相場新麥
 五拾五匁位方おいへ下直、四拾匁位ニ而、新米八拾匁方おいへ下直ニ
 而五拾七八匁位。村相場六拾九匁。干しか相場粉當壺升七八合位、とり
 るひ三拾匁方六七匁位。是の年、野口本堂やける。

天保十二丑年、正月十五日朝日、月入所蓮花寺森四五町北はすれ御入被
 成、寒方正月末てんき宜敷、閏正月方二月上しゆ迄ふりつゝき、干しか
 たにかき不申。麥半作、壺反ニ付三四斗方三俵迄。米五拾八匁方六拾四
 五匁。秋作うんかニ而不作、壺反ニ付四俵方七俵迄。追々上直ニ成、米八
 拾五匁位、麥六拾目位、綿八拾五匁方九拾四五匁迄。先丑十一二月時分
 迄之事也。

此年、東圓寺立かわり、大工同料、庄右衛門、伊兵衛。

天保十三年寅正月十五日朝、月入所ハ青ミニ而、蓮花寺森の内御入成候。先ハ丑年九十月のころ方天氣あしく、麥まき少計、九月ニ相濟所ニ、十二月迄まき、段々ふりつき、寅二月中分時分ニあうしうやくでけかね、此時分、米九拾目、麥六拾貳三匁位迄。綿百目位段々下り、麥四歩作也。然ハ此年、大公儀様方大けんやくニ而、又六月方諸商賣かふつふれ、是ニ付萬ノ物大下りニ而、七月米六十匁位、麥四十五匁位、綿七八十匁位、万事大下り。又八月ニ壹米つふれ、九月ノ時分方又段々上り、米六拾四五匁位、麥五十匁位、綿百拾匁位。此年七月時分より日でりつゝき、又麥まきも三歩計りまきて、残りあら田也。

天保十四年卯春正月十五日朝、月の入所ハ、蓮花寺北下ニ而少雲かゝりなり。先ハ、米七拾貳三匁位、麥六十三匁位、綿百十匁位、大豆七十匁位、干か壹升五六合位、とりの粉壹升壹貳合位、もめん七匁より七匁五六分、然ハ此所書記ス。當二月三四日比より、ふしき成ル圖の通成雲出。申ノ方方辰の方ニ向テ出也。色ハうすあかく成。さゝらの如成雲なり。段々うすく成候而二月廿七八日比ニきゑうせ候。誠ニふしき成雲ゆへ、大坂御番所方此雲義申出候。志是有候ハ、御ほうひ被下と申事ニ候。世界之人々殘勢之相共申、病氣はやり相共申事。此年、長崎そうとう有。大坂大塩そうとう同前ノそうとうなり。乍然天保七申年、此年大水ニ而、石橋をチ橋なし、八年ノ間はしなしニ而御座候所、又此年舟板ニ而橋かけ仕候。此代銀五百目余入なり。尤、上ノ橋供。



此年、明石殿様貳百石加そう致。

天保十五年辰正月十五日朝、月入所ハ、蓮花寺門の通り御入^(ママ)成被候。然ハ、干鰯の直段佐伯とり貳拾七八匁位、宇ハ干か拾貫ニ付貳拾壹貳匁位、干かす五俵駄三拾目位。米相場寒分より八拾匁位、麥五拾匁位。綿九拾匁より百拾五匁位、粉當りニ而上下有。大豆七拾匁位、小豆同直位。其外紙毛綿いろ一高直なり。然なから天保十三正月ニりうきう人來り、同年十五年正月ニおらんた人來り、此年五月作ほねん。八月米綿共十分ニ而、麥相場五拾匁位方四拾匁迄也。米相場八拾貳三匁方七拾三匁なる。此年江戸東御本丸大火、姫路御殿様、江戸ニ而十月二日病し被成、明る正月十三日迄御ゑんりやう。此十二月上じん弘化元年也。

弘化三年乙巳年正月十五日朝、月入所蓮花寺森南はすれ御入被成、二月麥相場五十匁方四拾匁、三拾八匁、三拾五匁位、八拾匁方七拾八匁位。五月出麥三拾四匁。米八拾匁位方、出け米九拾匁方九拾貳三匁。姫路札百拾五匁、綿粉當貳匁六七分方三匁、粉三匁壹貳分迄、又貳匁六七分迄下。干鰯粉當壹升方壹升六合。九月廿三日方十一月十六日、晴天雨ふり不申。これ方おい一ふり申候。

一、弘化三年丙午年正月十五日、月御入所蓮花寺森内北端入被成、此年五月作麥六分作。水たくさんに而、大風、大あめ、大水出、麥相場五拾匁位。又、七月七日大風、大水ニ而、兵庫ニ而大船、小船ニ而數百七八拾はそん致、又、七月十七日夜方十八日迄大風ニ而、惣作方不作仕候。此年當村本寺得上年也。あめふり宛々き、四月二日朝大あられふり、兵庫も麥たねか無ニ相成、おひ一麥米高直成。此年、姫路御殿様、江戸ニ而御養ニ相成、明年五月、御入歸城。

弘化四未年正月十五日、月御入所ハ蓮花寺門入成。麥春相場六拾目、米九拾目位。麥作あしし。五月、水たくさんニ而、七月廿一日大風ニ而、此日貳百十日ニ而、もち、中てるひ、少々あたり、いね作、綿作大不作。麥相場六拾匁位。新米八拾貳三匁位。村方江御殿様御酒料下。

弘化五申年正月十五日、月御入所、古小へ御入成。正月方麥相場七拾四五匁位、米九拾匁位、二月方の相場。三月十八日方信州をくじしんゆり、七□□様迄しんわれ□□、皆上城迄ほいり、人ハ數しれず死、凡三十日之間ゆらり候。三月四日方あめふりつゝき、五月ハ麥不作ニ而、段々相場高直候。五月六日あられふり、四五匁位ふり、おいへ相場高直御座候。米相場八拾五匁位方九拾匁位方せり相場すはり、八月時分ハ八拾貳三匁位方十二月時分九拾匁位。麥相場八拾五匁方七拾五匁位相成、春時分八拾匁位方。嘉永二年酉年正月十四日、月御入所、蓮花寺森中御入被成、正月十六日方米相場九拾貳三匁位、又麥相場八拾五匁位。五月作中取ニ而四拾五匁方五拾目。右は麥相場也。伯米取粉當り壺升恰好、相場三拾七八匁也。干粕五俵駄三拾五匁恰好。五月有作、麥作、種作中作ニ而新種百拾匁恰好。土用極日、日でりニ而、諸市大作ニ而不儀ニ付、八月有米諸國不作。米五俵方六俵迄也。新米相場七拾四五匁恰好方上り百四五匁まで。綿作萬作ニ而畑反ニ付五六拾貫迄。綿相場九拾匁方百貳拾目迄。尤、中國筋大風、三ヶ國あれ、米なし、綿なし。阿波、讃岐大水ニ而大不作。小麥新相場五拾四五匁方八拾目迄相成、酒、素麵不人氣也。

庚嘉永三戌歳

正月拾五日朝、月入處蓮花寺森中程當候也。惣作難儀由ニ付、正月十七日五人組寄合致、御上様へ難儀由ニ付願書差上御事相談相成處、古宮大

庄屋、村役人中クカヘニ付差ひかゑ、其後村一統役人中方、願書差出し候を相持候也。二月五日方九日迄、江戸大火事、明石屋敷方數知らず火事ニ而屋敷やけ、四拾六大名也。正月初相場、米百三四匁、晦日ハ百六七匁ニも相成候也。麥初相場、七拾五六匁、二月中旬ニ而は六拾九匁より七拾目ニ相成候也。種初場、百拾匁それより二月中旬ニ而は百目恰好ニも相成候也。初相場、大豆九拾貳三匁方二月中旬ニ而は百三四匁ニも相成也。綿初相場、百拾八九匁方、二月中旬ニ而は百貳拾壹貳匁ニも相成候也。大坂堂嶋金初相場、六拾壹匁方、二月中旬ニ而六拾貳匁迄相成候也。春分錢相場初、拾匁方八匁方八匁五分方、二月中旬ニ而は九匁壹分迄ニ相成候也。右有相場あらまし分ひかゑ置候也。

辛嘉永四亥年

正月十五日朝、月入方雨天ニて入所不わから。十六日朝、蓮花寺森南江三四間はつれへ入。去ル戌年五月せつ方七日目節、池々天氣つゝきニて水かたし。うえ付時分方大あめニて水沢山ニ相成、わせ類かいだ付みなしニ相成、當季あれ御斷ノ上、米貳拾三四石下る。中て、をくても、七月廿一日大風、八月中比すき大風、九月二日馬時、大風ニてもみをち、わた作不作ニ相成、米相場、新米百三拾目くらい。わた相場百五拾目くらい。麥七月比ニ七拾目ニ相成、それ方諸色追々高直ニ成、村相場百六拾二匁、極月方明正月比、米百六拾目、麥百三拾目ニ迄も成、諸事高直ニ付、村方難儀人追々出来候。村方そうをふの衆方、銀札八匁方貳拾五匁迄出し、合貳百貳拾目計寄、難儀人壹人ニ付、貳匁五分つゝ遣し、藤野鹿一郎殿方白米壹石八斗計り出し、右人々江、壹人ニ付貳升つゝ遣し、難儀人數百四十人計。三月時分ハ、米相場百五拾匁位、麥相場ハ百貳拾匁方百拾四五匁迄相成、麥不作付、追高直ニ而、壹反ニ付七八斗方上壹石

式斗迄。追々高直相成、綿ハ中年ニ而、米作ハ中年ニ而、大坂方御奉役様方代百匁位米屋居付買ノする事義、きびしきゆひ付。是より追相場下直ニ相成、極月時分米八拾匁方七拾五匁迄致、麥相場七拾五匁方賣次第追々下直ニ相成、嘉永五子正月時分方相場追々下直ニ候。

亥十一月村相場九拾貳匁、手形百壺貳匁、なたね相場百貳拾匁位。

嘉永五年子正月十五日朝、月入所ハ、新野邊くわんとう江御被成、去年十一月上中方二月十日時分迄、晴天氣宛、甚寒きひしき。初相場、高砂藏成米八拾五六匁位、麥六拾五匁六匁位、大豆九拾匁位、なたね百貳拾匁位、佐伯とり三拾匁位、尤ほしか粉貳升位。當年正月十三日夜、東二見村大火、六拾軒火。同二月二日夜四ツ時方、大坂北久太郎町さかい筋方し火ニ而、東堀南はくろ町、凡三千世し火。

嘉永六年丑正月十四日朝、月入所ハ新野邊梅谷藏南はすれ御入被成、少しみへかし。物相場八拾五匁位方九拾匁、麥六拾匁位方七拾匁相也。米段々八拾五匁六匁迄すわり、二月三日方追雨ふり宛き、三月中時分迄ふり、四月せつ方天氣相成、五月十八日大雨迄ふり不申。甚播方ニ迄こまり、段々田植いたし、それきりふり不申。八月廿貳三日ころ迄少シあみふり、新米相場八拾匁方九拾匁位、それ方百拾匁位。麥相場六拾匁方七拾匁位。佐伯取り三拾五方六匁、尤ほしか粉當壺升六七合迄當り。五月麥作ハ万作致し、三俵方五俵迄取り、新米ハ不作いたし、内がりハ、いこ法出す。御殿様へ願、御神様方、凡三百石余被下、それ付けん役いたし、段々六月廿七八日ころ方水かへいたし、是方九月迄、諸々方ぼ堀ぼ致、井戸を法り、川筋ハみな川を堀り、池を堀り、其々こま入いろへ新井ゆ水い不申相成、末ニ而ハゆ水とり候得共、上々ニ而がやけ、下ハ下

ゆふ。いねけ願上、當あれ拾六丁毛取願、三拾五六丁あれ、米百六拾石毛取、米百貳拾五石余下、わた願下、米拾貳石、末ニ而又分き米たね米として三拾六石被下、相メ、凡三百三拾石余。當年八月時分、とう人船、江戸貳船、長崎へ貳船。諸國大名殿、江戸表江相詰、軍取り致シ、壹度國へかいり、十二月方又あめりか船七船きたり。

嘉永七寅年正月十五朝、月入所新野邊村中^(ママ)ぼど方御入被成候。去年十一月方あめふりつすき、麥書法不申致、二月節迄致さす。干鯛取り四拾四五匁方五拾匁迄、干かなし。姫路成米百貳拾五匁、麥八拾匁位。たね百四拾匁位、油代六匁位、大豆百貳拾匁位、小豆百貳拾匁位。

安政二年卯年方、万延元年申年迄、六ケ年之間年代記なし。

安政三辰年

一、唐人船江戸、横濱ニ而唐人屋敷一万間もたて、又奥州松まへ、箱田でもこうゑき致し、其時之天下之御大老、近江國彦根井伊かもん守様也。其ころゑきが、追々にさかへ、日本國諸しき大高直ニ相成候ゆへ、

万延元年申年

一、とう人江戸ニ而こうゑきニ付、近江國彦根井伊かもん之守様、三月三日、天下様へとうじやう節、其日大雪ニ而、乗り物のり、桜之御門前ニ而、水戸之ろう人十七人、あめしよどくニ而忍び出、御かごみかけ、つきころし、首打切、水戸様方うらみあつて、井伊かもん守様ころされぞん也。此そうどう出来ありしニ而御座候。

文久元年酉年

一、古宮組大庄屋あがり、野添へ大庄屋渡り、此年七月也。

文久貳年壬戌年

正月十五日朝、月入處ハ蓮花寺森北はづれ御入被成。春分米相場百五拾目位。麥相場百四十匁位、段々麥出来方百貳十五匁位。八月比ニハ米百貳十匁、麥七十五匁位也。干鰯之にしん取五十六匁位。村相場百九十八匁年貢取引也。金相場、十月すへ方八十八匁位迄あがり、油壺升ニ付拾壺匁、木綿拾壺匁。冬分麥百四拾目位、綿百八十匁、小豆貳百目、大豆貳百拾匁。諸しき大高直ニ而御座候、安物一ツもなし。

文久三癸亥年

一、正月十五日朝、月入所蓮花寺門まへへ御入被成。米初相場百九十五匁位、麥百四拾匁、綿百八十匁、金初相場上、八拾五六匁也。追々諸しき大高直相成候ニ付、下々困入、干か、にしん取八十匁位も相成、粉あたり四合七八才也。

一、正月十日比、姫路神屋丁紅屋旦那、手形米買こみ致、百性ニ高直ニ相賣申ニ付、米も買しめ、麥他賣致し候。諸人なか違うらみよつて、御家中五百石、四百五十石位、御方足かる共、四人ノ蓮首打、野里はか所ニかしよかき致、ごく物どせん之致方也、跡ハきられぞん也。それ方米追々下直ニ相成、米百六七拾匁位迄下り、

一、諸大名之御姫様國々へ御引取相成、其節百性へ、人足十五才方五拾才迄かゝり唐人打取、御手あてニ而日本國の諸大名めし、大そうどうなり。

一、京都九条様一家老也、去戌十月比、長州之さむらへニ首切れ、四条

之はし之上ニ而さらされ、かしやう書ハ、こうゑきニ付、凡拾万兩まいない取、段々たくみ之次第悪しゆへ、ころされぞんニ相成候。

一、薩磨^(ママ)、長門外々國之方、京都へ御つめ被成、又々大阪南みどへハ、一ツはし御殿様御入あり。又北之みとへハ、唐津御殿様御入あり。天下様、京都二条城御入あると取さた也。

一、姫路様お下中之古赤金、古しん中すゞ寄八百貫位、大ヅ、二丁御ゆひ被成、唐人船一そう四五年跡も到来、又此度も三千國位唐人船御造り被成、唐人打取御手あて之事ハ、中々筆ニ而もつくしかたし。あらへニ而御座候。

一、明治十二年ニ至テ地價算出相調濟、地位改正ニテ貢租地價之貳分五厘宛上納。尤、明治九年百分三値。地祖十年方百分貳部五厘上納御座候。十二年旧正月十四日、月蓮花寺中ニ入ル。

一、明治十三年、
正月十四日朝、月ノ入所は雨天ニテ相別不申候也。

一、明治十四年

一、明治十五年

一、明治十六年

一、明治十七年
正月十五日、月、

一、明治十八年春分ヨリ不順續キニテ、作物諸事不都合年柄、麥作并ニ雜作共、生育宜シカラズ。收穫ニ至リテハ凶作。麥、小麥類は通常之四割ヲ減ジ、尚雜種共減量ナリ。故ニ平年之六歩通りヨリ収量ハ得ス。稻植付は、用水充分ニテ、通常之如ク、旧曆之五月中ニ播種ス。然ル處不順ニテ、螟蟲之障害ヲ視ル事甚シキ。尚大陽曆七月一日ニ午前八時ヨリ北風大雨ニテ、午前第十時ヨリ洪水トナリ、非常之風雨災ヲ受ケ一事困難ナリ。田地何れも湖水ノ如ク、翌二日ヨリ天氣にナリ、其後日和打續キ、氣候順ヲ得テ、作物追々發育シ、尚々日重テ用水は充分ナルヲ以テ繁茂セリ。出穂モ何之障害ナク豐作ノ景況視ルヘシ。收穫ニ至リテハ、改正反別、壹反歩ニ付、半稻米貳石六斗平シ、中稻貳石八斗平シ、晚稻平均收穫三石ヨリ下リモノナシ。棉ハ壹反歩ニ五拾貫、上等四拾貫迄。下等畑ニテ貳拾五貫之収量ヲ得ル。幸豐年柄ナリ。干鰯鯡粕拾貫ニ付、金壹円貳拾錢ヨリ壹円五拾錢迄ノ昂低。穀物都テ伸縮并ニ諸式共同シ。玄米壹石ニ付四円貳拾錢ヨリ五円貳拾五錢位迄之昂低ヲ視ルベシ。加古郡警察署、高砂本町ニ新築スル。同年ニ本署ヨリ寺家町分署ニ傳話器ヲ引ク。此春ヨリ郡内諸方ニ赤貧民員多シ。依テ物貫イニ固却スル。然共當最寄ニ於、赤貧人は多分ナシ。何分近來之不順災害打續キ、豐年トハ雖モ、人民之貧弊不少、萬事ニ障害ヲウケ困難多シ。

兵庫縣下播磨國加古郡野添村何々

兵庫縣令 内海忠勝殿

加古郡長 赤堀威殿

本庄村外六ヶ村戸長役場兼

戸長坂田習太郎殿

明治十八年旧正月十四日夜、月ノ入蓮花寺。

明治二十二年、八月秋一反＝付上等が二石八斗、中等が二石二斗、下等が一石八斗まで。十月頃より雨澤山降り、米は追々上り、明治二十三年之正月には、米八円七八十錢、麥六円、小麥三円五十錢。二月中頃には八円二三十錢＝也。二十三年之正月十四日よ之月入所蓮花寺森北はなれ入也。

明治廿五年正月十四日夜、月ノ入所は雲掛り、タシカ＝相別り不申候へ共、蓮花寺門前ト相心得候也。

明次廿四年春分ヨリ順季不宜數カラ候へ共、先、麥作平年御座候間、旧曆五月稻作植付比、少々火焼＝御座候へ共、後＝至り水拾分有之候處、カボチャモ少々出来、不順＝候得共カブモ素當＝出来候處、七月上旬比＝大風吹き候へ共、雨添ヒシ故、稻ニハ先、忒割減ジ相心得候間、又候八月上旬大風吹汐上ケ、作物類壺向咄＝相不申、半作壺反＝付上等忒石ヨリ以下壺石マデ御座候。尚又キシ端汐入＝成申分壺合無御座候。安上四五斗迄有之共、綿作ハ壺反＝付七八貫目ヨリ以下壺貫目迄御座候也。六月時分干か鱒粕拾貫＝付忒円五六拾錢ナリ。段々下直ニ相成、旧曆十一月比ニハ忒円忒三拾錢＝相成リ、米相場、

大風＝付、人家壺ケ村＝忒三軒宛タヲレ甚ダ難義致シ候也。又々別府、池田新田ドテ打キレ候へ共、早速取掛り四五月比迄デニ直し、中々大素＝御座候也。其年九月比＝大ジシンゆり、近村ニ於テハ言分無御座候へ共、尾張ヘン＝人家タヲレ、地モハレ、人民の死シたる事、中々咄しモいたされ不申。其比ヨリ又ゆり〰〰〰〰〰〰〰〰〰候也。先ハあら〰以上。

一、明^(ママ)次廿六年、正月十四日よ之月入蓮花寺森南^(ママ)巳なれ入り也。

明治三十年二月十四日朝、月之入所蓮花寺森北はづれ入也。

明治廿七年八月頃^方日清談判致し、其^方廿八歳ニ至り、一時は繁シク仕、始メ之談判は、朝鮮牙山ニテ日本之古子^(ママ)が大鳥桂介、魯西亞之古子が「ウルーヲ氏、朝鮮古子一人、亞米利加ニ一人、英吉利ニ一人、各古氏が談決致不ニテ、日本古氏之言語ヲ以テ日清戦争致し、第一師團始メテ朝鮮牙山ヲ落シ、其^方平壤ヲ落下シ、其時、二師團兵之内ニ原田重吉氏ト云者ハ、同所ニテ鉄門ヲ開化シ、其^方有名ヲ仕、其後手柄仕候哉。其^方支那エ渡り、遼東半島ヲ戦ヒ、旅順ヲ戦ヒ、其^方渤海ヲ戦ヒ、其迄は所々之旅師ヲ戦ヒ、筆ニモ尽シ難ク故、其^方支那之季ヲ引ツレ、英國之古氏、日本之馬關定約ニ来り、其時日本ニテは、總理内各^(ママ)は伊藤博文氏也。外務大臣は病氣ニ付、内各之辨談ニテ平和ニ相成候。其時季ガ舟陸之節、田六之助はピーストルニテ季之顔眼下ヲ、其故定約期限五週間モ延期仕、後日之罪金ハ支那金ニテ二億テール也。日本之金ニシテは二億万円也。其故廿九年之春は、大阪地方ニテは人氣宜ク、其^方船乗又は戦争ニ付、人は總テ、

本庄屋事

hon jiyo ya koto

佐伯久吉

sai ki kiu kichi

第5章 近世後期における米価の地域差

— 越前勝山と大阪 —

はじめに

本章は、越前勝山の米価変動を、大阪におけるそれとの対比で論じたものである。近世における全国各地の米価変動については、岩橋勝氏による精力的な資料調査と周到な分析結果が存在するわけであるが、同氏の『近世日本物価史の研究』¹⁾に見る限り、北陸地方の米価についての検討は、今後の課題として残されているように思われる。北陸地方の産米が全国的米穀市場における需給に対して大きな重要性を持っていたことを思えば、われわれとしても、北陸地方の米価変動を等閑視することはできないであろう。したがって本章は、従来あまり知られていない越前の米価変動について紹介することがひとつの目的である²⁾。

物価の地域差の問題については、山崎隆三氏の問題提起³⁾以来、かなりの研究成果がおおやけにされている⁴⁾。本章もまたその延長線上にあるといえよう。越前勝山という地方市場における米価変動と、大阪という中央市場におけるそれとを比較することによって、以下のような問題を明確にする手がかりとしたいというのが、われわれのねらいである。すなわち、中央と地方における米価決定過程の相違、需要側に影響を与える

人口や貨幣的要因が両地間でどのように異なるかという問題、また供給側に影響を与える自然災害、社会的変動や輸送コストの動き等の両地間における差異、ひいては両地間における経済発展の相違の問題等である。

ところで物価史研究は、史料上の制約もあって、米価史に片寄る傾向がみられるわけであるが、このことに対しては、周知のごとく、長谷川彰氏による鋭い批判がなされている。氏によれば、「物価の地域比較を検討する際に、その米価の地域比較についての研究が重要な手掛りとなることは言うまでもないが、米はあくまでも近世においては特別な地位にあった商品であるということ意識しておかねばならないのである。したがって、われわれが、物価の地域比較を問題にする場合、米価の地域比較と合わせて、他の商品について、その価格の比較を行わねばならないのである。特に、徳川時代における経済発展の地域構造を物価の地域差から展望しようとする場合、米以外の商品についての物価の動向を検討することが、重要となってくると言えよう⁵⁾」。これは、まことに正しい指摘であって、本章のような研究がこの意味で明らかに限界をもっていることを認めざるをえない。

1 資料と加工

本節の目的は、依拠した資料とその統計的処理について説明することである。越前勝山の米価は、福井県勝山市鹿谷町東遅羽口に在住の竹内修氏方に伝えられた「米価一覧表」に拠るものである。この資料が発見された当時、「福井新聞」に紹介記事が掲載されたことがあり⁶⁾、それと、資料採訪の際にお聞きしたことを総合すると、おおむねつぎのようことが言えよう。「米価一覧表」は、もともと、竹内修氏の母方の実家

（勝山市鹿谷町）に伝えられたもので、修氏の曾祖父にあたる人が、大正時代に家に残されていた史料をもとにして作成したという。同家は、代々多少の田畑を有する地主であり、そこで生産された余剰米は米商人その他に売買された。その売買価格を帳簿に記したものが大正時代までは伝えられていたという。

物価史研究における生産物価格としての米の価格を扱う場合には、それがどのような種類の米価であるのかを吟味することが必要である。すなわち実際に売買されたときの価格であるのか、あるいは、その地域で成立していた相場なのか、また、切米値段のような一種の換算米価であるのかというような問題についての吟味が必要であろう。さらには、都市における米価であるか、農村における米価であるのかという区別、小売価格であるか、卸売価格であるのかという問題、また、米価が年内のどの時期のものであったか、米の品質はどうであったかというような問題が検討されなければならない。しかし、本章でもちいた「米価一覧表」については、資料の性格が先に述べたようなものであるから、詳しいことはほとんどわからない。したがって、ここでは、いちおう、実際に売買された米価であろうということだけを指摘するにとどめたい。⁷⁾

さて、「米価一覧表」には、1781（天明元）年から1922（大正11）年までの142年間にわたり、1年ごとの米1石あたりの価格が記されている。本章で検討の対象としたのは、このうち江戸後期にかんする部分である。「米価一覧表」には「註」として「天明、天保ノ頃ハ五斗入俵ニシテ代價何貫何百文ナルヲ以テ当時ノ壺貫ヲ現貨拾銭百文ヲ壺銭ト換算シタリ」とあるから、江戸時代の何貫何百文を、1貫を10銭、100文を1銭に換算してあることがわかる。たとえば、1781（天明元）年は、「米一石代金四拾参銭」とあるが、実際は4貫300文であったことが知られる（ある

いは1俵2貫150文であったことが知られる)。また貫文表示がとられていることから、当時、越前勝山における米穀取引が錢建であったことがわかる。岩橋氏による全国各地の米価表⁸⁾をみても、関西は銀建、関東は金建の表示であるから、越前勝山の錢建というのは珍しいケースである。ちなみに、福井においては、切米値段の資料が存在するが⁹⁾、それはもちろん銀建である。三貨通用に関するこれらの問題は、そのこと自体興味のあることであるが、今この問題に立ち入る余裕はない。

つぎに、大阪における米価は、三井文庫編『近世後期における主要物價の動態¹⁰⁾』のなかに収録されているものに依拠した。すなわち、「第1部享和2年より明治4年に至る大阪主要商品相場表」と「第2部(1)享保10年10月より寛政10年2月に至る大阪主要商品相場表」とである。米価は種々の銘柄のものが記載されているが、もっとも欠年の少ないデータを得たいという観点から、肥後米の価格を採用することにした。期間は、越前勝山の場合に準じて、1781(天明元)年以降幕末までとしたが、この期間中に限っても肥後米には、二三の欠年が生じている。すなわち1799(寛政11)年、1800(寛政12)年、1801(享和元)年の3ヵ年である。ところで、『大日本貨幣史第六卷¹¹⁾』には、この3ヵ年について幸いにも肥後米のデータが与えられているので、これをもってさきの欠年分を推計することとした。なお、これら資料には各年について例えば月毎のように、いくつかの米価が与えられている場合が多いわけであるが、これは適宜平均して最終的には各年にひとつの米価というふうにとめることとした。この結果例えば1781(天明元)年の大阪米価は肥後米1石につき銀51.1匁というように表示される。もちろん銀建であることはいうまでもない。

さて、加工の方法について簡単に述べておきたい。まず、勝山米価、

大阪米価ともに、1781（天明元）年から1785（天明5）年までの年毎の米価の単純平均を100とし、これをもちいて年々の米価を指数化し、各年値とした。これは図5-1において中段に勝山のものを、下段に大阪のものを示しておいた。両者とも趨勢線に絡みつく形の変動の激しい折れ線グラフがそれである（半対数グラフ）。つぎに趨勢線を求めるために、勝山米価、大阪米価ともに、上記各年値の5ヵ年移動平均値を算出し、これを図5-1の中段に勝山のもの、下段に大阪のものというように、比較的変動の少ない折れ線グラフとして示してある（半対数グラフ）。

本章では、実際の米価水準が、勝山と大阪でどのように異なるかということの問題の外においた。なぜならば、勝山米価が錢建表示であり、大阪米価が銀建表示であるために直接の比較を許さないからである。かりに、勝山における錢相場（たとえば錢1貫文が銀何匁にあたるかというような）がわかれば、それをもちいて勝山米価を錢建表示から銀建表示に換算することもできよう。しかし、もちろんそのような資料はみあたらない。そこで大阪における錢相場をもちいて換算することも考えられるけれども、この場合には勝山と大阪で錢相場が異なるかもしれないという疑念が生じる。あれやこれやで、われわれとしては、とりあえずは、勝山米価と大阪米価との相対的変動だけを問題とせざるをえないのである。

ちなみに、1781（天明元）年における大阪錢相場は、新保博氏がまとめたものによれば、^{1,2)} 錢1貫文につき銀9.75匁であるから、先に述べた勝山錢建米価1石あたり4貫300文は銀建に換算して1石あたり41.925匁となる。これも先に述べた1781（天明元）年における大阪銀建米価は、1石あたり銀51.1匁であるから、1781（天明元）年についていえば、勝山米価は大阪米価に対して、一応は、82%ぐらいの水準であったということこ

とになる。

さて、本題にもどって、つぎの系列は勝山／大阪比である。これは勝山米価の各年指数を大阪米価の各年指数で除したものである（単位1）。勝山／大阪比についても、各年値とその5ヵ年移動平均値とを計算し、図5-1の上段にグラフ化した。

図5-2のグラフは、大阪米価と勝山米価の変動係数¹³⁾である。先にも述べたように、変動係数はいくつかの変量について、標準偏差が平均の何パーセントにあたるかという形で定式化される。グラフ化に際しては、1781年から1785年の5年間の変動係数を1783年にドットするというふうに、いわば「5ヵ年移動変動係数」とでも呼べるような形で処理されている。本章で変動係数をもちいたのは、このタームを変動の激しさを表わす目安にしようというにすぎない。

つぎに、図5-3には、下段に大阪米価各年値（図5-1下段各年値の再掲）、中段に勝山米価各年値（図5-1中段各年値の再掲）、上段に、後に述べる予定の大阪米価各年値（ただし年末相場、1781-85=100）の各グラフが描かれている（半対数目盛）。

また、図5-4のグラフ上段には、先の勝山／大阪比の各年値について「5ヵ年移動変動係数」を算出したものが描かれている。また下段のグラフは、図5-1上段のグラフの再掲である。

最後に図5-5は、図5-2同様、「5ヵ年移動変動係数」をグラフ化したものである。この場合も大阪米価については、後に述べる予定の各年値（年末相場）がもちいられている。

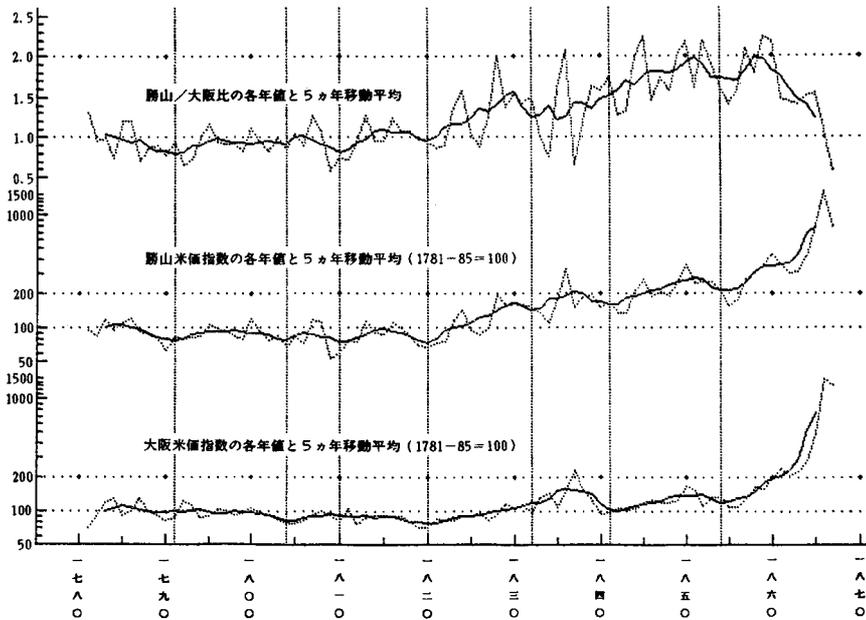
II ファクト・ファインディングス

本節の課題は、前節で得られた図5-1から図5-4について、どのような事実が観察されるかという点を論ずることである。

まず、図5-1中段に描かれた勝山米価の5ヵ年移動平均値と各年値について観察される事実について考察しよう。一見して明らかなことは、1820（文政3）年を境として、二つの異なる期間に分けて考えることができるということである。（以下では断りのないかぎり、主として5ヵ年移動平均による趨勢線について検討することとする。）すなわち、1820（文政3）年以前は、勝山米価は、趨勢として不変ないしはやや下降とみなされるのに対し、1820（文政3）年以降になると、それは明確な上昇趨勢をもつからである。先にも述べたように、かつて新保博氏は、大阪における一般物価水準の波動の分析から、1820（文政3）年を転換点として指摘したことがあったが¹⁴⁾、このことは、勝山米価の趨勢線からも読みとれることがわかる。

1820（文政3）年以前の勝山米価の趨勢線からは、全体として不変ないしはやや下降の傾向を読みとることができるが、仔細に観察すれば、およそ四つぐらいのサイクルが発生していることがわかる。谷をサイクルの始まりと考えることにすれば、第1周期が天明（1781～88年）初期から1791（寛政3）年、第2周期が、1791（寛政3）年から1804（文化元）年、第3周期が1804（文化元）年から1810（文化7）年、第4周期が1810（文化7）年から1820（文政3）年までである。このうち第2周期と第3周期のピークは明瞭とはいいがたいが、第1周期および第4周期のピーク、すなわち、1785（天明5）年と1815（文化12）年は、明らかに、1820（文政3）年以前の期間にあっては、高い米価水準であったといえよう。とりわけ1785（天明5）年を中心とする天明期（1781～88年）の高水準が顕著であったことを指摘しておかなければならない。

図5-1 勝山と大阪の米価



1820（文政3）年以降の勝山米価が、傾向的には着実な上昇トレンドをもつことは先に述べたとおりである。しかし、さらに詳しく観察してみると、1820（文政3）年以降についても、およそ3周期半の循環的変動をみてとることができよう。すなわち、谷をサイクルの始まりとみなすことにすれば、第1周期は1820（文政3）年から1832（天保3）年、第2周期は1832（天保3）年から1841（天保12）年、第3周期は1841（天保12）年から1854（安政元）年、第4周期は1854（安政元）年以降ということになる。またピークは第1周期が1830（天保元）年、第2周期が1837（天保8）年、第3周期が1851（嘉永4）年である。

なお、これらの時期区分については、本章で掲げたすべてのグラフに区切りの線を入れておいた。

ここで注目すべきことは、三つのピーク（1830年、1837年、1851年）

が時代を下るにつれて次第に高い水準となってゆくこと、同じことが四つの谷（1820年、1832年、1841年、1854年）についてもいえることである¹⁵⁾。

また、一つの循環において上昇局面と下降局面の期間の長さを比較してみると、上昇局面の期間は長く、下降局面の期間は短かいということが明らかである。すなわち各循環ごとに山と谷の位置が次第に高くなってゆくことと、上昇局面は長く下降局面は短かいということとの二つの事実が、傾向としての着実な上昇トレンドの内容をなしているとも言えよう。

つぎに図5-1下段に描かれた大阪米価の5ヵ年移動平均値と各年値について観察される事実を考察しよう。この際必要に応じて、勝山における米価変動との比較対照についても触れることとしたい。まず全体としての傾向は、勝山の場合と変らないことが明らかである。いかに江戸後期といえども、勝山の米価が大阪のそれと独立に変動することはあり得ないことであった。勝山におけると同様に、大阪の場合にも、1820（文政3）年を境として、趨勢的な変動のパターンを明確に区別することができよう。すなわち1820（文政3）年以前は、大阪米価はわずかながら下降趨勢を示しており、1820（文政3）年以降になると、かなりはっきりとした上昇趨勢を示すようになる。しかし、勝山の米価変動を大阪との対比で観察するならば、1820（文政3）年以前は、大阪のわずかな下降趨勢に対して、勝山のそれは下降趨勢がやや弱かったと言えようし、1820（文政3）年以降になると、勝山の米価は大阪よりも一層明瞭な上昇トレンドを示したとすることができる。

1820（文政3）年以前の大阪米価の趨勢は、いま述べたようにわずかながら下降の傾向を示しているわけであるが、さらに観察をすすめれば、

不明瞭ながら、およそ二つぐらいのサイクルをみてとることができる。谷をサイクルの始まりと考えることにすれば第1周期は天明（1781～88年）初期から1804（文化元）年、第2周期は1804（文化元）年から1820（文政3）年までとなる。勝山における第1周期と第2周期が大阪における第1周期に統合され、勝山における第3周期と第4周期が大阪における第2周期にまとめられる形となるので、1820（文政3）年以前の大阪米価は勝山との対比で言えば、振動が少なかったと言えるであろう。なお1820（文政3）年以前の大阪米価の趨勢については、天明期（1781～88年）の高水準が顕著であったことを指摘しておきたい。

1820（文政3）年以降の大阪米価は、先に述べたようになんかなり明瞭な上昇趨勢を示すわけであるが、さらに観察をすすめれば、およそ2周期半の循環的変動を認めることができる。谷をサイクルの始まりと考えれば、第1周期は1820（文政3）年から1842（天保13）年、第2周期は1842（天保13）年から1854（安政元）年、第3周期は1854（安政元）年以降ということになる。これを勝山との対比で見れば、勝山における第1周期と第2周期が、大阪においては第1周期に統合されており、勝山の第3周期と第4周期が大阪における第2周期と第3周期にそれぞれ符合していることがわかる。したがって、1820（文政3）年以前と同様に、1820（文政3）年以降においても大阪米価の循環的変動は勝山のそれと比較すれば、振動が少なかったといえよう。

さらに、1820（文政3）年以降の大阪米価の変動については、勝山のそれと比較したときに、いくつかの顕著な差異を認めることができる。全体的に言えることは、勝山米価の趨勢線の方が、大阪米価の趨勢線に較べて上昇の度合いが大きいということである。1820（文政3）年には勝山、大阪ともに、趨勢値は指数75前後であったのが、勝山においては、

早くも1837（天保8）年には指数200を超え、その後も趨勢値は着実な上昇を示したのに対し、大阪においては趨勢値が指数200を超えるのは、ようやく1861（文久元）年になってからであった。すなわち1820（文政3）年以降においては、米価の上昇圧力という点では、勝山は大阪をはるかに凌いでいたということができよう。さらに細かくみれば、勝山と大阪における米価の上昇圧力の差異は時期によっても異なっていたということがわかる。まず天保（1830～43年）中期のピークに関していえば、勝山米価の上昇圧力はさほどではなかったが、大阪米価の上昇圧力は、幕末期を除けば、天明（1781～88年）期以降もっとも大きかったといえよう。しかるに大阪米価の第2周期（1842～54年）は上昇圧力が小さく、この時期の勝山米価（勝山の場合は第3周期）の高騰ぶりと好対照をなしているのである。ついで安政期（1854～59年）以降になると（大阪においては第3周期、勝山においては第4周期）こんどは大阪米価が上げ足を速め、勝山米価は遅れをとることとなった。このように勝山と大阪における米価の上昇圧力の差異は、各局面によって異なったものとなっていたのである。

つぎに、図5-1上段に描かれた勝山／大阪比の5ヵ年移動平均値と各年値について分析をすすめよう。ここでも特にことわりのない限り、主として趨勢線について検討することとしたい。勝山／大阪比の場合にも、勝山米価、大阪米価の趨勢線と同様に、1820（文政3）年を画期として二つの部分に分けて考察するのが便利である。すなわち1820（文政3）年以前の期間においては、勝山／大阪比は不変ないしはわずかな上昇の傾向が観察され、1820（文政3）年以降の期間においては、それが、一部の期間を例外として着実な上昇トレンドを示しているからである。

まず1820（文政3）年以前の期間については、勝山／大阪比は、いま

述べたように、不変ないしはわずかな上昇趨勢を示すわけであるが、さらに細かく観察すれば、勝山／大阪比は、おおむね勝山の高米価期に高く、勝山の低米価期に低く出ていることがわかる。すなわち、勝山／大阪比の趨勢線は勝山米価の趨勢線と同じような動きを示しており、この結果、勝山米価の動きが勝山／大阪比の動きを規定していることが理解される。

1820（文政3）年以降の期間については、勝山／大阪比は、先に述べたように、一部の期間を例外として着実な上昇トレンドを示している。勝山米価も大阪米価も1820（文政3）年以降は明確な上昇趨勢をもっていたわけであるから、勝山／大阪比の上昇トレンドの意味するところは、勝山の米価上昇圧力が大阪のそれと比べて、はるかに大きかったことの帰結である、ということになる。1820（文政3）年における勝山／大阪比の趨勢値は0.96であるが、これが30年後の嘉永期（1848～53年）になると倍増した。たとえば1852（嘉永5）年为例にとると、この年勝山／大阪比の各年値は2.20である。原資料にもどってみると、1852（嘉永5）年の勝山米価は、錢建1石あたり11貫550文であり、これを前に述べた新保博氏作成の錢相場表¹⁶⁾をもちいて銀建に換算すると1石あたり銀111.804匁となる。この年の大阪米価は、1石あたり銀81.1匁であったから、このような換算をいちおう認めれば、勝山米価は大阪米価の38%増しとなり、勝山米価は絶対水準においても大阪米価をはるかに凌いでいたということになる。

1820（文政3）年以降の勝山／大阪比の系列を時期別に観察してみると、つぎのような事実が明らかとなる。勝山米価の第1周期は1820（文政3）年から1832（天保3）年までであるが、この時期には勝山／大阪比の趨勢も同様の動きを示した。すなわち勝山米価が上昇（下降）する

ときには、勝山／大阪比も上昇（下降）したので、この意味で勝山米価の変動は勝山／大阪比の変動を規定していたといえよう。勝山米価の第2周期は、1832（天保3）年から1841（天保12）年までであるが、この時期の前半、すなわち1836（天保7）年を中心とする時期には、勝山／大阪比の上昇趨勢はかなり弱められることとなる。これは、前にみたように、大阪米価が天保（1830～43年）中期になると、天明期（1781～88年）以後もっとも高い水準にまで急上昇するのに対して、勝山米価の方は、趨勢としては、上昇圧力が小さかったことにより、勝山／大阪比もまた上昇趨勢が弱められることとなったのである。したがって、勝山米価の第2周期にあたるこの時期においては、勝山／大阪比の動向を規定したのは、大阪米価であるという点で、特徴的な時期であるといえよう。しかるに、この時期の後半から勝山米価の第3周期、すなわち1841（天保12）年から1854（安政元）年の時期にかけては、勝山／大阪比は顕著な上昇趨勢をもった。それは、先述のような銀建への換算が許されれば、絶対水準においても、勝山米価が大阪米価を上回るほどのものだったのである。勝山米価の第3周期にあたる時期（大阪米価においては第2周期）についても、勝山米価が上昇（下降）するときには、勝山／大阪比も上昇（下降）するという傾向を認めることができるので、この意味で勝山／大阪比の動向を規定したのは勝山米価の動向であったといえる。しかしこの時期については、前にも述べたように、勝山米価は着実に上昇しているのに対して、大阪米価の上昇圧力が、1820（文政3）年以降の期間のうちでは、きわめてゆるやかなものであったという点を指摘しておきたい。さて勝山米価の第4周期にあたるのは、1854（安政元）年以降であるが、この時期における勝山／大阪比の動きは、天明期（1781～88年）以降のどの時期においても見られなかったようなものと

なっている。すなわちこの時期において勝山／大阪比は、明瞭な下降趨勢をもち、慶応期（1865～67年）になると、天明朝（1781～88年）や文政期（1818～29年）の水準にさえ接近し、いわば振出しにもどるという観を呈することとなった。この時期においては、勝山米価も大阪米価も顕著な上昇趨勢を示していたのであるが、大阪米価の上昇率の方が、勝山米価の上昇率よりもはるかに大きかったことが、勝山／大阪比の下降という形に帰結したといえることができる¹⁷⁾。けれどもこの時期における勝山／大阪比の下降趨勢については、にわかには断定しがたい理由がある。すなわち、天明朝（1781～88年）以降安定していた大阪錢相場が安政（1854～59年）開港以降の時期になると、銀に対して急激な錢高傾向となるからである¹⁸⁾。すなわち勝山錢建米価を大阪錢相場をもちいて銀建に換算することを許せば、勝山米価の上昇率はもう少し大きくなり、その結果、勝山／大阪比の下降趨勢が修正されることになるかもしれないからである。しかしこの問題については、次節で考慮することとしたい。

以上で勝山／大阪比の5ヵ年移動平均値と各年値についての検討を終えた。ここで得られた結果はつぎのように要約される。

観察事実〔1〕

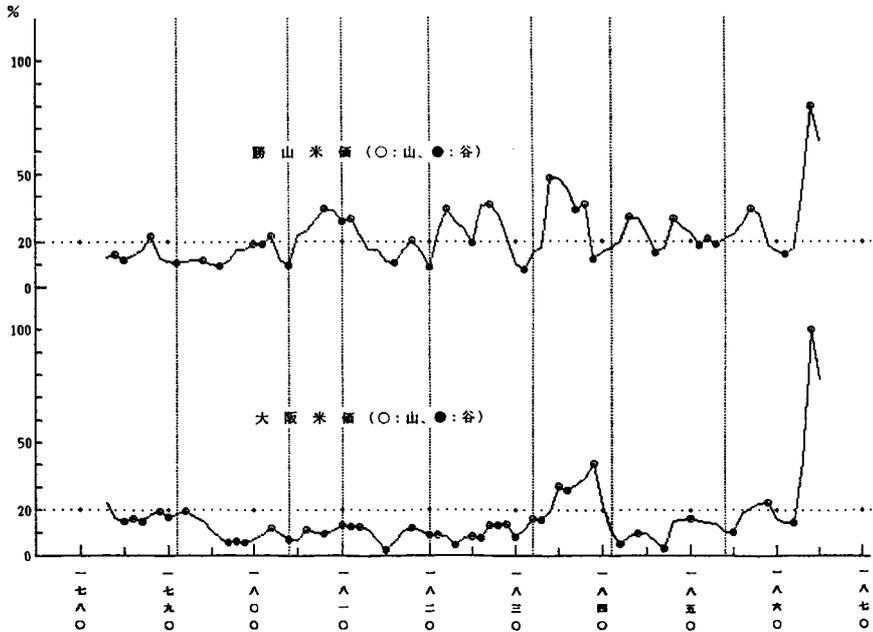
1820（文政3）年以前においては、勝山／大阪比の動向は、趨勢としては不変ないしはわずかな上昇の傾向をもった。勝山／大阪比の循環的変動は、勝山米価の循環的変動に規定されていたとみることができる。1820（文政3）年以降になると、勝山／大阪比の動向は、天保期（1830～43年）前半を例外とし、安政期（1854～59年）以降を別にすれば、明確な上昇趨勢をもった。循環的変動は勝山米価のそれに規定されている面と同時に、天保期（1830～43年）前半、安政期（1854～59年）以降のように異質の局面をも含んでいた。

なお、地方米価の中央米価に対する比率の趨勢に関するファインディングとしては、新保博氏による大津米価の大阪米価に対する比率に関するものが存在する。氏によれば、「大阪と大津の期間平均米価指数による大津／大阪価格比は、1755－80年の96.1から1781－1800年の95.5へとわずかに、下降したのち、1801－27年の98.4、1840－59年の100.7へと、明白な上昇トレンドをしめしている¹⁹⁾」という。この事実を勝山／大阪比の上昇と比較すれば、大津／大阪価格比の上昇は、わずかなものであるといえようが、文政期（1818～29年）以降、地方米価が中央米価に対して上昇の度合を大きくしたという点では、同一の事実を示しているものと考えられる。

さて続いて、図5－2に示された米価変動係数について検討することとしよう。なお図5－2のグラフには、波動の山（○）と谷（●）が描き込まれている。

勝山米価の変動係数と大阪米価の変動係数とを比較して最初に気付くことは、全体的にみて、勝山の変動係数は大阪の変動係数よりもはるかに大きいということである。大阪の場合には、変動係数が20パーセント・ラインを超えることは少ないが、勝山の場合には、20パーセント以下であることの方が少ない。1820（文政3）年以前の時期についてさらに詳しく観察してみると、まず天明期（1781～88年）の変動係数に着目する必要がある。天明期（1781～88年）においては、いま述べた全体的な傾向とは逆に、大阪の変動係数の方が、勝山の変動係数よりも高い水準にあることが観察される。天明期（1781～88年）においては、大阪の変動係数は1820（文政3）年以前の期間のうちではもっとも高い水準にあるのに対し、勝山の変動係数は、1820（文政3）年以前の期間のうち

図5-2 米価「5ヵ年移動変動係数」



では、もっとも低い部類の水準に属するのである。つぎに文化期（1804～17年）に目を転じると、この時期に、大阪の変動係数は低い水準で推移するのに対し、勝山のそれは、1820（文政3）年以前の期間のうちでは、もっとも高い水準で推移することが認められる。これは全体的な傾向と矛盾する事柄ではないけれども、いちじるしく目につく事実であるといえよう。なお、変動係数の動向については、あまり明瞭とはいいがたいけれども、つぎのような事実を指摘しうるかもしれない。ひとつは、米価上昇期には、変動係数も大きくなり、米価下落期には変動係数も小さくなるという傾向である。もうひとつは、勝山米価の変動係数が大阪米価のそれを先導する傾向が認められはしないかということである。とくに、勝山における1788（天明8）年のピーク、1796（寛政8）年の谷、1808（文化5）年のピークなどが、大阪における変動係数の動向の先触

れとなっているように思われる。

つぎに、1820（文政3）年以降の時期について、勝山米価の変動係数と大阪米価の変動係数とを対比しながら、観察を続けることとしたい。まず、文政期（1818～29年）において、勝山の変動係数はかなり高い水準にあるのにたいし、大阪のそれは低い水準で推移することが注目される。このことは、文化期（1804～17年）にも認められた傾向であるから、まとめて言えば、化政期（1804～29年）においては、勝山米価の変動係数は、大阪米価のそれに比べて著しく高い水準にあったといえよう。つぎに天保期（1830～43年）に目を転じると、大阪米価の変動係数が、文久期（1861～63年）以降を除く他の時期に比べて、きわめて高い水準にあるのが印象的である。勝山米価のそれも、いちおうは高い水準にあるけれども、化政期（1804～29年）の水準を大きく上回るものではないから、この時期の特徴としては、大阪米価の変動が激しかったことを指摘しておくべきであろう。また、天保期（1830～43年）におけるもうひとつの特徴は、勝山米価の変動係数が、大阪米価のそれを先導する傾向が明瞭に認められるということである。すなわち勝山における1834（天保5）年のピークは大阪における1839（天保10）年のピークに先立ち、勝山における1839（天保10）年の谷は大阪における1842（天保13）年の谷に先立っているのである。さて、天保（1830～43年）末期から弘化（1844～47年）、嘉永（1848～53年）、安政（1854～59年）、万延（1860年）の時期になると、勝山、大阪ともにその変動係数は、比較的低い水準で推移する。しかしこの時期には、勝山、大阪ともにその変動係数におよそ三つのサイクルが生じているから、そのピークと谷に着目すると、やはり勝山が大阪を先導している傾向がみられる。ついで文久期（1861～63年）以降の時期になると、大阪米価の変動係数が大きく上昇する。勝

山の上昇も大きい、大阪の上昇は、それをもはるかに上回る²⁰⁾。しかも、タイム・ラグは見られなくなるから、この時期は、他のどの時期にもみられないような異質の局面であるということができよう。なお1820（文政3）年以降の時期についても、米価上昇期には変動係数も大きくなり、米価下落期には変動係数も小さくなるという傾向が、ほぼ認められるという事実をつけ加えておこう。

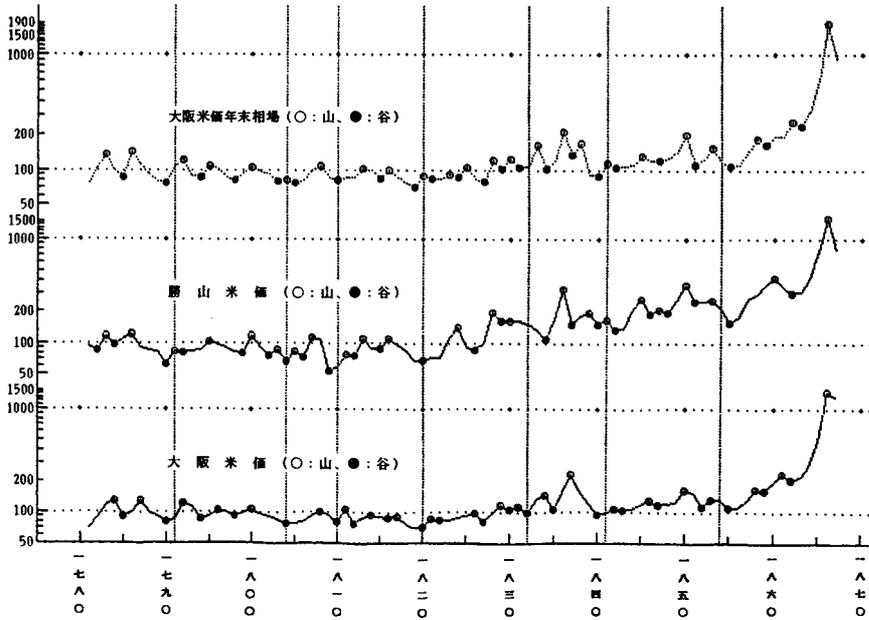
勝山米価と大阪米価の変動係数に関する検討に対しても、つぎのような要約を付しておきたい。

観察事実〔2〕

勝山米価の変動係数と、大阪米価の変動係数を比較すると、全般的な傾向としては、勝山米価の変動係数の方がはるかに大きい。また勝山米価の変動が激しくなると、ある時間間隔をおいて大阪米価の変動も激しくなるといふ意味で、勝山米価は大阪米価にたいして先導的な役割を果していたといえる²¹⁾。さらに詳しく観察すれば、天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）、文久期（1861～63年）以降の時期については、絶対的ないしは相対的に、大阪米価の変動の激しさが勝山のそれを上回ることが明らかとなる（なお天明（1781～88年）、天保期（1830～43年）においては上に述べた先導性がみられるけれども、文久期（1861～63年）以降の時期においてはこれを観察することができない）。しかるに、化政期（1804～29年）においては勝山における米価変動の激しさが顕著であった。

これまでの検討は、おおむね勝山米価と大阪米価の趨勢線に関するものであった。ついでわれわれは、図5-3をもちいて、勝山米価と大阪米価の各年値に関する興味ある分析に歩を進めたいと思う。すなわち、

図5-3 勝山と大阪の各年米価指数 (1781-85=100)



勝山米価の各年値（中段）と大阪米価の各年値（下段）とを対比させながら仔細に観察すると、勝山米価のピークと大阪米価のピーク、勝山米価の谷と大阪米価の谷との間に、多くの場合、1年（まれに2年）ずつの遅れをみてとることができるのである。以下、考察の対象とした全期間にわたって、このタイム・ラグを列挙するとつぎのとおりとなる。なお図5-3のグラフにも、波動の山（○）と谷（●）が描き込まれている。

山と谷の 区 別	勝 山 米 価	大 阪 米 価
山	1783（天明3）年	1784（天明4）年
谷	1784（天明4）年	1785（天明5）年

山	1786（天明6）年	1787（天明7）年
山	1791（寛政3）年	1792（寛政4）年
谷	1792（寛政4）年	1794（寛政6）年
山	1795（寛政7）年	1796（寛政8）年
山	1807（文化4）年	1808（文化5）年
谷	1809（文化6）年	1810（文化7）年
山	1813（文化10）年	1814（文化11）年
谷	1815（文化12）年	1816（文化13）年
山	1816（文化13）年	1817（文化14）年
山	1824（文政7）年	1826（文政9）年
谷	1826（文政9）年	1827（文政10）年
山	1828（文政11）年	1829（文政12）年
谷	1829（文政12）年	1830（天保元）年
山	1830（天保元）年	1831（天保2）年
谷	1834（天保5）年	1835（天保6）年
山	1836（天保7）年	1837（天保8）年
山	1841（天保12）年	1842（天保13）年
谷	1842（天保13）年	1843（天保14）年
山	1845（弘化2）年	1846（弘化3）年
谷	1846（弘化3）年	1847（弘化4）年
谷	1851（嘉永4）年	1852（嘉永5）年
山	1860（万延元）年	1861（文久元）年

これだけ多くのタイム・ラグを観察できるということ自体、勝山米価と大阪米価とが密接に関係していたということ物語る。さらに細かく

みれば、タイム・ラグは全部で24回観察されるが、そのうち約58パーセントにあたる14回が山であることは、米価下落よりも米価高騰の方が強い影響を与えるということができよう。また、時期別にみれば、天明期（1781～88年）における明瞭なタイム・ラグが印象的である。勝山米価の各年値を1年ずつ遅らせるならば、それが、そのまま大阪米価の各年値になると言ってもよいぐらいである。また、天保（1830～43年）中期においても明らかに勝山米価が大阪米価を先導していることが看取される。しかし、これとは対照的に、幕末期になると、このようなタイム・ラグはあまり観察することができないのである。

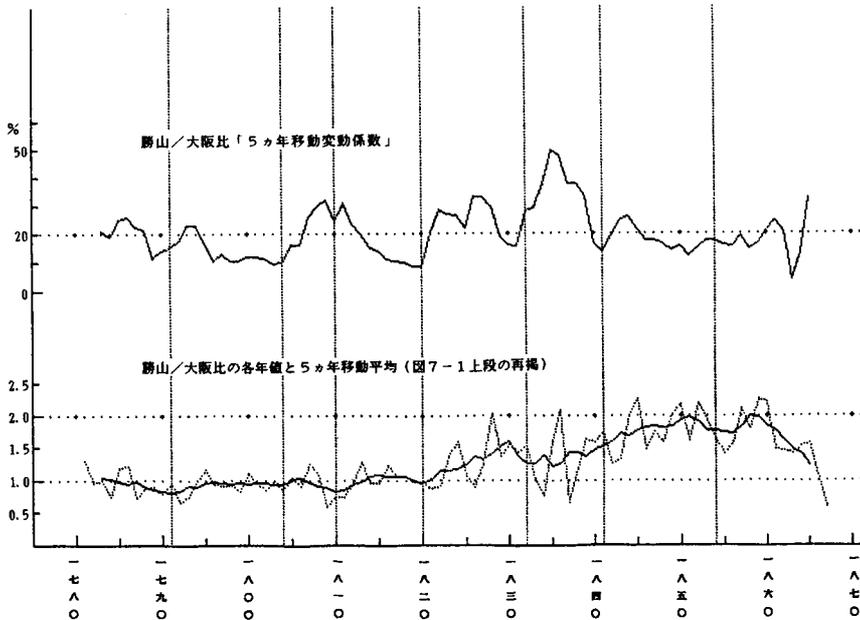
さて、ここで得られたファクト・ファインディングをつぎのように要約しておくこととする。

観察事実〔3〕

勝山米価の各年値と大阪米価の各年値とを対比すれば、勝山米価のピークと大阪米価のピーク、勝山米価の谷と大阪米価の谷とが、多くの場合1年ずつの時間的遅れを伴っている。すなわち勝山米価が大阪米価を先導していることが明らかである。時期別にみれば、天明期（1781～88年）と天保期（1830～43年）にこの傾向が顕著であり、幕末期になるとこの傾向はほぼ消滅する^{2,2)}。

つぎに図5-4に描かれた勝山／大阪比変動係数について、簡単な検討をつけ加えておこう。まず、勝山／大阪比変動係数の全体的な動向は、勝山米価の変動係数の動向に近似していることが認められる。これは偶然ではない。なぜならば、先に確認したように、勝山米価の上昇（下落）は、勝山／大阪比の上昇（下落）に帰結することが多かったわけであるから、勝山米価が激しく変動するときには、勝山／大阪比も激しく変動

図5-4 勝山／大阪比「5ヵ年移動変動係数」



することになり、勝山米価が安定的であるときには、勝山／大阪比も安定的となるからである。

時期的にもうすこし詳しく観察してみると、まず天明期（1781～88年）においては、勝山／大阪比の変動係数はかなり高い水準にある。この原因として考えられるのは、先に指摘した、タイム・ラグ、すなわち勝山米価が大阪米価を先導しているという事実であろう。寛政期（1789～1800年）に変動係数がすこし大きくなるのは、この時期に、大阪米価が激しく変動したからである。文化期（1804～17年）に、勝山／大阪比の変動係数は大きくなるが、これは文化（1804～17年）中期における勝山米価の大きな変動が影響していよう。文政期（1818～29年）においても変動係数は大きくなっているが、これも文政（1818～29年）中期における勝山米価の激しい変動が影響していると思われる。天保（1830～43年）

中期になると、変動係数は全期間をつうじてもっとも大きくなる。原因としては、先に指摘したタイム・ラグすなわち勝山米価が大阪米価を先導しているという事実が考えられよう。天保（1830～43年）末期以降の時期については、変動係数の安定化傾向が観察される。これは、勝山／大阪比が安定していたこと、ひいては、勝山米価と大阪米価が平行に動き、しかもあまり明確なタイム・ラグをもたなかったことの反映であると言ってよからう。

Ⅲ 解釈にかえて

本節の目的は、前節で観察された三つの事実について、その解釈の可能性を論ずることである。まず最初に、観察事実〔1〕、すなわち、勝山／大阪比の系列が1820（文政3）年以降になると天保期（1830～43年）前半、安政期（1854～59年）以降の時期を除外すれば、明確な上昇趨勢をもったということについて考察しよう。

はじめに、幕末における大阪銭相場の高騰が、勝山／大阪比の系列にあたえる影響について検討しておこう。結論を先に言えば、大阪銭相場の高騰を考慮すると勝山／大阪比は安政期（1854～59年）以降も高い水準にあり、弘化期（1844～47年）以降は趨勢的にほぼ不変の傾向であったということが出来る。すなわち、前に述べた安政期（1854～59年）以降の勝山／大阪比の下降趨勢は、勝山における銭建米価を、高騰した大阪銭相場をもちいて銀建に換算するということを許すことによって、勝山米価の上昇がさらに大きくなり、結果として勝山／大阪比も上方に修正されることになるのである。^{2,3)}

さて文政期（1818～29年）以降の、勝山米価の相対的上昇ないしは大

阪米価の相対的下落を説明するための変数として、まず勝山と大阪における人口趨勢をとりあげることとしよう。勝山（勝山三町）における人口は『勝山市史』^{2.4)}によれば、1804（文化元）年に3,018人で、1858（安政5）年には4,031人となっている。この間、飢饉による犠牲者の多かった天保期（1830～43年）を除けば着実な上昇趨勢を示していたことが明らかである。とくに天保（1830～43年）末期から安政（1854～59年）末期にかけての人口増加が著しい。1804（文化元）年から1858（安政5）年までの54年間ににおける人口の年平均成長率は、0.54パーセントと計算されるのにたいし、1840（天保11）年から1858（安政5）年までの18年間にかぎって人口の年平均成長率を計算しなおしてみると、それは1.48パーセントとなる。明治以降100年の全国人口の年平均成長率でさえ、約1.13パーセントであったから、^{2.5)}1.48パーセントという数字は相当大的な人口の成長を示しているといえよう。つぎに大阪の人口趨勢に目を転じると、大阪三郷の人口は、18世紀後半以降一貫した減少傾向をとっており、勝山の人口が急増に転じた天保（1830～43年）末期以降幕末にいたるまで明白な下降趨勢をもっていたことが知られる。^{2.6)}このことは、梅村又次氏の研究によれば、^{2.7)}この時期における人口趨勢は、北陸地方においては上昇趨勢をもち、近畿地方においては下降趨勢をもったという結論にまで普遍化されることになるのである。すなわち、上に述べたような事情が、1820（文政3）年以降の、なかんずく天保（1830～43年）末期以降幕末にかけての勝山／大阪比の上昇趨勢と高位安定の傾向をもたらしたと推論されるのである。より具体的には、勝山米価の第3周期（1841～54年）における着実な上昇トレンドと、大阪米価の第2周期（1842～54年）における上昇趨勢の弱さの直接の原因が、上に述べたような両地の事情に依るのではないかと考えられるのである。

勝山／大阪比の文政期（1818～29年）以降の傾向的上昇を説明するためには、さらにいくつかの他の要因が考慮されなければならない。ひとつは貨幣的要因である。勝山藩では大量の藩札が発行されており、19世紀以降になると、藩内における通用は、ほぼ藩札をもちいておこなわれた。しかも藩財政の不安定を反映していたのか、一般に勝山藩札は福井藩札の約半分の価値しかなく、また勝山米は福井米より高値であったという^{2,8)}。このような事情が、勝山米価の相対的上昇とどのようにかかわるのかという問題が残されることとなる。人口的要因や貨幣的要因は主として需要側に影響を与えることとなるけれども、勝山／大阪比の傾向的上昇を説明するためには、供給側に影響を与える要因についても検討しなければならない。たとえば輸送費用の問題がある。すなわち文政期（1818～29年）以降、とくに日本海沿岸地方において、漸減的な輸送コストの低減が見られたとするならば、従来は輸送コストのウエイトが大きかったために生じていた北国米の現地価格と大阪米価との乖離が、輸送コストのウエイトが小さくなることによって縮小されるということが起りえよう。この問題は、いわゆる一物一価の法則が、しだいに貫徹してくる過程の検証^{3,0)}という、より包摂的な問題へとつらなっていく。また以下のような問題も、勝山／大阪比の上昇趨勢と密接な関係を有するものと思われる。すなわち林玲子氏の研究によれば、化政期（1804～29年）から天保（1830～43年）末期にかけての蔵米の大阪廻着量は著しく減少しているという^{3,1)}。北国米の廻着量もまた減少しているとするれば、このことは、たとえば勝山／大阪比の上昇趨勢の結果であると解釈することもできよう。蔵米の大阪廻着量の減少、大阪米価の相対的下落は、大阪の経済的地位の低下、地方における顕著な産業発展と無関係ではないと考えられるのである。これまでに指摘した問題およびその他の問題ははず

れも大きな重要性をもっている。しかしこれらの問題を、ここで全面的に展開することは明らかに不可能である。われわれのファクト・ファインディングスがこれらの問題を提起しているというにすぎない。

さて観察事実〔2〕、すなわち、全般的な傾向としては、勝山米価の変動係数が大阪米価の変動係数よりもはるかに大きいこと、しかし時期別に観察すれば、天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）、文久期（1861～63年）以降の時期については、絶対的ないしは相対的に、大阪米価の変動の激しさが、勝山米価のそれを上回ること、また化政期（1804～29年）においては勝山における米価変動の激しさが顕著であること、これらの事実について検討することとしよう。勝山における米価変動が、大阪におけるそれよりも激しいことの基本的な要因は、大阪の側にあることが明らかである。宮本又郎氏が指摘するように、大阪堂島における帳合米取引が米価平準化機能をはたしていたからである^{3.2)}。しかし宮本氏が同時に指摘するように、この米価平準化機能がどの程度発揮されていたかは時期別に異なったものとなっていたのである。天明期（1781～88年）には帳合米取引の諸機能に多少の動揺が見られたという。このことによって、大阪米価の変動係数は勝山米価のそれを上回ることになったと解釈される。化政期（1804～29年）になると、再び堂島は米価平準化機能を回復した。このことが、大阪と比較したときに、化政期（1804～29年）勝山の米価変動が顕著であったことの説明となっていよう。しかし、化政期（1804～29年）の勝山においては凶作、洪水等の災害が続発したことが知られるので、勝山の側にも米価変動を激しくさせる要因が存在したといえる^{3.3)}。ついで1834（天保5）年以降の時期になると、米価平準化機能は明らかに弱められた。このことが大阪米価の変動係数を勝山米価のそれと比較したときに、相対的に大きくしている原因であると

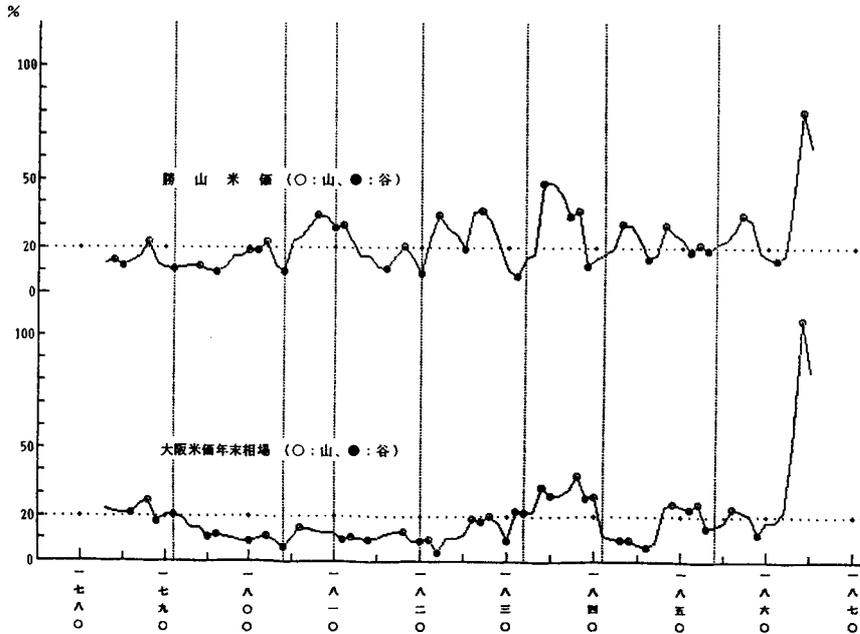
いえよう。先に述べたように、天保期（1830～43年）における大阪米価の騰貴は、勝山／大阪比の着実な上昇趨勢を一時停止させるほどのものであったが、このことは大阪における米価平準化機能の弱体化を如実に物語るものといえよう。文久期（1861～63年）以降についても、帳合米取引の諸機能が弱められたことが大阪の米価変動を激しくしたということがいちおうは言えそうである。したがって、要約的に言えば、天明（1781～88年）、天保（1830～43年）の飢饉、幕末の動乱のように社会的不安の高まる時には、先物取引を含む大阪の米価調節機構は、麻痺したと考えられよう。

つぎに観察事実〔3〕、すなわち、勝山米価の各年値と大阪米価の各年値とを対比したときに、そのピークと谷が多くの場合1年ずつの時間的遅れを伴っていたこと、つまり、勝山米価が大阪米価を先導していたという事実について考察してみよう。宮本又郎氏の研究によれば、西国米（ここでは肥後米）と北国米（ここでは勝山米）とでは大阪廻着期が異なる。すなわち西国米は収穫の年の10～12月を大阪廻着期とし、北国米は収穫の翌年の3～5月を大阪廻着期とする。また西国米は大阪総廻米高約200万石の4分の3ぐらにあたるのにたいし、北国米は総廻米高の4分の1程度であったという^{3,4)}。このことから推してつぎのようなことが言えるかもしれない。すなわち、ある年に勝山において、米価がピークないしは谷になったとしても、北国米は年内に大阪に登せられることはないので大阪米価にさほどの影響を与えない。しかし翌年になると、北国米が大阪に廻着し、^{3,5)}たとえ総廻米高の4分の1程度であるとはいえ、米の需給の非弾力性のために、大阪米価に大きな影響を与えることとなる。この説明は、われわれのファインディングが天明期と天保期の、しかもピークのときに顕著であったことを考慮すれば、いっそう説得的で

あるように思われる。というのは、天明、天保の飢饉の際には、西国米よりも北国米が強く影響を受けたと考えられるからである。

ところで勝山米価が大阪米価に先だって変動するという事実の背後には、もうすこし単純な理由が存在する。1836（天保7）年の勝山米価のピークと1837（天保8）年の大阪米価のピークとの間に生じたラグを例にとって説明しよう。勝山米価の場合は、それが1836（天保7）年の何月のものであるかは、もとの資料に依るかぎり判明しない。しかるに大阪米価の場合には、1837（天保8）年の価格というのは、実際は12ヵ月（正確には2.1、2.29、4.1、5.1、6.1、7.1、8.1、9.1、10.1、11.1、12.1、12.25の12回）の平均価格である。そこで月別の価格をみると、天保飢饉による大阪米価の高騰がもっとも著しかったのは、1836（天保7）年の秋から1837（天保8）年の夏の終りにかけてであって、1837（天保8）年の秋になるとさしもの高騰も沈静していることがわかる。すなわち、かりに勝山米価を秋の収穫後から翌年1月までの米価であるとみなせば、勝山米価のピークと大阪米価のピークとの間にはラグはなかったということになる。敷衍すれば勝山米価もまた1836（天保7）年の秋から1837（天保8）年の夏の終りにかけて高騰していたのではなかろうかということが推測される³⁶⁾。そこで、勝山米価を秋の収穫後から翌年1月までの米価であると仮定すれば、比較の対象とした大阪米価についても同じ時期の米価が必要となる。幸いにして、この目的のためには、岩橋勝氏が作成した「大阪堂島の正味1石当り年末相場の代表値」という系列が存在する³⁷⁾（図5－3上段）。したがって、これをもちいて前に指摘した24回のタイム・ラグを再検討してみると、実に約6割にあたる14回のタイム・ラグが消去されてしまう。とりわけ天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）のものは1784（天明4）年の谷（勝山米価）を唯

図5-5 米価「5ヵ年移動変動係数」



一の例外として、すべて消去されてしまうことが判明する。

このようなわけで、依然として残っている10回のタイム・ラグの問題を別にすれば、勝山米価の大阪米価にたいする先導性という問題は、否定的に解決されることになりそうである。さらには、前に述べた変動係数のラグの問題、すなわち1820（文政3）年以前の時期についていえば、勝山における1788（天明8）年のピーク、1796（寛政8）年の谷、1808（文化5）年のピークなどが、大阪における変動係数の動向の先触れとなっているかに見えたのも、図5-5（山(○)と谷(●)）によればそのような事実を観察することはできないと考えられる。1820（文政3）年以降の時期についても、勝山における1834（天保5）年のピークは大阪における1839（天保10）年のピークに先立ち、勝山における1839（天保10）年の谷は大阪における1842（天保13）年の谷に先立っているという

指摘が行なわれたが、図5-5をみる限りそのような先導性を観察することはできない。また、天保（1830～43年）末期から弘化（1844～47年）、嘉永（1848～53年）、安政（1854～59年）、万延（1860年）の時期に勝山、大阪ともにその変動係数にはおよそ三つのサイクルが生じていて、そのピークと谷に着目すると、勝山が大阪を先導している傾向が観察されたが、図5-5によればそのような傾向をみてとることはできないといえよう。

おわりに

ここでは、本章で明らかになった事実について簡単に要約することとしたい。

（1）1820（文政3）年以前においては、勝山／大阪比の動向は、趨勢としては不変ないしはわずかな上昇の傾向をもった。勝山／大阪比の循環的変動は、勝山米価の循環的変動に規定されていたとみることができる。1820（文政3）年以降になると、勝山／大阪比の動向は、天保期（1830～43年）前半を例外とし、安政期（1854～59年）以降を別にすれば、明確な上昇趨勢をもった。循環的変動は勝山米価のそれに規定されている面と同時に、天保期（1830～43年）前半、安政期（1854～59年）以降のように異質の局面をも含んでいた。

（2）勝山米価の変動係数と、大阪米価の変動係数を比較すると、全般的な傾向としては、勝山米価の変動係数の方がはるかに大きかった。しかし時期別に観察すれば、天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）、文久期（1861～63年）以降の時期については、絶対的ないしは相対的に、大阪米価の変動の激しさが勝山のそれを上回った。また、化政期（1804

～29年）においては勝山における米価変動の激しさが顕著であった。

注

- 1) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』。
- 2) 越前の米価変動については、吉田叡「近世末期の福井に於ける米価変動について」『福井県地域史研究』2号（1971年）がある。しかし、この論稿についての詳細な検討は、7章以下にゆずりたい。
- 3) 前掲山崎「近世後期における農産物価格の動向」、110ページ。
- 4) 前掲新保「徳川後期の物価水準(2)」（1973年）、前掲同「江戸後期の物価・賃銀」（前掲『数量経済史入門』（1975年）所収）、前掲同「江戸後期における物価の地域差」（1979年）、前掲同「江戸後期の貨幣と物価に関する断章」（1980年6月）、前掲同「江戸の物価変動，1830－67年」（1980年12月）、前掲同「幕末期における江戸の物価水準」（1982年5月）、前掲同「幕末期における江戸と大阪の物価水準」（1982年6月）、前掲同「江戸末期（文政～幕末・維新时期）における物価動向と経済発展」（前掲原田・宮本編著『歴史のなかの物価』（1985年）所収）、前掲同「幕末期における江戸と大阪の物価」（1986年）、前掲同「江戸後期における全国市場の構造」（1989年）。長谷川彰「近世中期物価の地域比較についての一考察 — 特産物の成立と関連して — 」桃山学院大学『経済経営論集』17巻2号（1975年）、同「幕末期における醤油価格の動向」桃山学院大学『経済経営論集』20巻3号（1979年）、同「幕末期における物価変動の地域比較 — 特産物と中央市場 — 」桃山学院大学『経済経営論集』21巻2・3号（1979年）（以上3稿は、

- のちに前掲同『近世特産物流通史論』に所収)。前掲岩橋「近代移行期名古屋物価の動き；1830～79年」など。
- 5) 前掲長谷川「近世中期物価の地域比較についての一考察」、83ページ。前掲同『近世特産物流通史論』、135ページ。
 - 6) 「福井新聞」、1974年10月31日。
 - 7) 勝山市教育委員会編『勝山の歴史』（1970年）によれば、「四ヶ谷（鹿谷）は東、西、南の三方を山に囲まれ、北部は九頭竜川で区ぎられた孤立地帯である。しかし古くから峠を利用して、山をへだてた隣村と密接につながっていた」（167ページ）し、「こうした交通によって大野との関係が親密であった」（168ページ）という。さらに、勝山藩においては、「津出し米は鶴島で舟につみ、曳船によって三国に至る。または鳴鹿まで馬で運び、ここから舟に積むなどの方法がとられた」（53ページ）とあるから、当然、舟運、陸路による交通をもちいて福井とも密接な関係にあったことが想像される。
 - 8) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、460～465ページ。
 - 9) 「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額區別調」（松平文庫、福井県立図書館蔵）。
 - 10) 前掲『近世後期における主要物價の動態』。
 - 11) 大蔵省編『大日本貨幣史』6巻（1877年および1878年）。
 - 12) 新保博「錢相場の変動，1736～88年 — 一つの数量的接近 — 」『国民経済雑誌』133巻6号（1976年）、4ページ。
 - 13) 容易にわかるように、変動係数は、実際の米価について計算した場合と、指数化したものについて計算した場合とで、その値は変化しない。

- 14) 前掲新保「徳川後期の物価水準(1)」、39ページ。
- 15) 前掲拙稿「徳川後期における生産物価格の変動」42ページにおいて、類似の傾向を指摘したことがあった。
- 16) 前掲新保「銭相場の変動, 1736～88年」、5ページ。
- 17) 勝山米価(指数)を x 、大阪米価(指数)を y とすれば、勝山／大阪比は x/y となる。これを時間(t)で微分すれば

$$\left(\frac{x}{y}\right) = \left(\frac{x}{y}\right) \cdot \left(\frac{\dot{x}}{x} - \frac{\dot{y}}{y}\right)$$
 となるから($\dot{x} = dx/dt$ 等とする) $\dot{x}/x \gtrless \dot{y}/y$ におうじて、 $\left(\frac{x}{y}\right) \gtrless 0$ である。すなわち本文のことが言える。
- 18) 前掲新保「銭相場の変動, 1736～88年」、4～5ページ。
- 19) 前掲新保「江戸後期における物価の地域差」、8ページ。
- 20) 前に述べた銭相場の高騰という問題を考慮に入れると、勝山の変動係数は、修正を迫られることになるかもしれない。
- 21) このことは、後述の観察事実〔3〕と必ずしも独立ではない。
- 22) このファインディングは浦長瀬隆氏(名古屋学院大学)の指摘に負うところが大きい。記して感謝の意を表明したい。
- 23) 後に述べる勝山米価の大阪米価に対する先導性の問題が、勝山／大阪比の系列に対しても微妙な影響を与えている可能性があるけれども、趨勢的な観察においては無視しうるほどのものと考えてさしつかえなからう。
- 24) 勝山市『勝山市史』1巻(1974年)、954ページ。
- 25) 江見康一・塩野谷祐一編『日本経済論 — 経済成長100年の分析 — 』(有斐閣、1973年)、55ページ。
- 26) 『大阪市史』2巻(1914年)、546ページ、758～759ページ。
- 27) 梅村又次「徳川時代の人口と経済」(前掲『数量経済史論集1 日

- 本経済の発展』所収)、7～8ページ。
- 28) 前掲『勝山市史』、966～968ページ、975～976ページ。前掲『勝山の歴史』、154～155ページ、233ページ。
- 29) 梅村又次「17～19世紀における日本海海運の発展」(前掲『数量経済史論集2 近代移行期の日本経済』所収)。この論文において、輸送コスト低減の問題が間接的に読みとれるように思われる。
- 30) 一物一価の法則の成立に関しては、川浦康次『幕藩体制解体期の経済構造』(1965年)、242～244ページ参照。
- 31) 林玲子「近世中後期の商業」(豊田武・児玉幸多編『流通史I(体系日本史叢書13)』(山川出版社、1969年)所収)、226ページ。
- 32) 宮本又郎「近世後期大阪における米価変動と米穀取引機構 — 正米価格と帳合米価格の動き — 」『経済研究』26巻4号(1975年)(のちに、前掲同『近世日本の市場経済』に所収)。
- 33) 前掲『勝山の歴史』、227～235ページ。
- 34) 宮本又郎「近世中後期の大阪における領主米流通 — 諸藩大阪登米高の検討 — 」『国民経済雑誌』125巻6号(1972年)(のちに、前掲同『近世日本の市場経済』に所収)、68～70ページ。同「近世大阪蔵屋敷における払米仕法」『神戸大学経済学研究年報』19(1972年)(のちに、前掲同『近世日本の市場経済』に所収)、196～197ページ。
- 35) 勝山藩自体は小藩であったから、大阪に蔵屋敷を構えるということとはなかった。したがって領主米は、米宿を営む米商人と大阪商人の手を経て換金されたという(前掲『勝山市史』、958～959ページ)。
- 36) このことは、前掲『勝山市史』、994～996ページの記述から部分

32字 × 25行 = 800字

的にたしかめることができる。

- 37) 岩橋勝「徳川期諸地方米価の長期的時系列史料」『松山商大論集』
29巻6号（1979年）、134～139ページ。

付表 5-1 (その1) 越前勝山と大阪の米価動向

年次	勝山米価				大阪米価				大阪米価 年末相場			勝山/大阪比			銭1貫 文につき 銀匁
	(石につき 貫匁)	指数 (1781 -85= 100)	同5 カ年 移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	(石につき 銀匁)	指数 (1781 -85= 100)	同5 カ年 移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	(石につき 銀匁)	指数 (1781 -85= 100)	5カ年 移動 変動 係数	指 数	同5 カ年 移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	
1781(天明 1)	4.300	93.1			51.1	71.7			52.9	76.4		1.30			9.75
82(2)	3.900	84.5			63.5	89.1			72.2	104.2		0.95			9.47
83(3)	5.400	116.9	100.0	13.2	83.7	117.5	100.0	23.2	94.2	136.0	23.0	1.00	1.03	21.2	9.62
84(4)	4.410	95.5	105.2	14.1	92.2	129.4	105.4	16.5	68.3	98.6	21.7	0.74	1.02	19.1	9.72
85(5)	5.080	110.0	106.5	11.9	65.7	92.2	113.3	15.1	58.7	84.8	21.0	1.19	0.97	24.8	9.75
1786(6)	5.500	119.1	100.4	13.6	70.3	98.7	109.8	16.3	97.6	140.9	21.0	1.21	0.94	25.8	9.60
87(7)	4.200	90.9	97.8	16.3	91.8	128.9	102.3	15.0	76.9	111.0	24.9	0.71	0.97	22.5	9.21
88(8)	4.000	86.6	88.4	22.8	71.2	99.9	100.0	17.8	63.5	91.7	27.2	0.87	0.89	21.4	9.76
89(寛政 1)	3.800	82.3	81.1	13.1	65.4	91.8	97.6	19.3	54.3	78.4	17.2	0.90	0.84	11.5	9.66
90(2)	2.920	63.2	78.9	11.5	57.5	80.7	96.2	16.8	52.4	75.7	20.4	0.78	0.83	13.9	9.55
1791(3)	3.800	82.3	78.0	10.7	61.6	86.5	98.7	18.0	73.6	106.3	20.8	0.95	0.80	15.0	9.65
92(4)	3.700	80.1	78.6	11.1	87.1	122.3	97.5	19.1	84.1	121.4	19.3	0.66	0.82	17.5	9.52
93(5)	3.800	82.3	86.8	11.6	80.1	112.4	99.3	17.0	60.6	87.5	14.8	0.73	0.90	22.9	9.54
94(6)	3.920	84.9	89.6	11.6	60.9	85.5	102.6	14.9	59.1	85.3	14.7	0.99	0.90	22.9	9.71
95(7)	4.830	104.6	91.8	9.8	64.0	89.8	98.0	10.9	73.6	106.3	10.5	1.16	0.95	16.4	9.65
1796(8)	4.440	96.1	92.0	9.4	73.5	103.2	93.7	7.7	70.7	102.1	11.8	0.93	0.98	10.7	9.55
97(9)	4.200	90.9	90.9	11.1	70.5	99.0	95.7	5.7	60.1	86.8	10.8	0.92	0.95	13.2	9.45
98(10)	3.850	83.4	93.5	16.1	65.0	91.2	99.1	6.2	56.7	81.9	10.0	0.91	0.94	10.7	9.47
99(11)	3.660	79.3	92.7	16.2	68.0	95.5	97.8	5.8	65.4	94.4	9.0	0.83	0.94	10.6	9.00
1800(12)	5.440	117.8	89.8	18.7	76.0	106.7	96.2	6.7	71.6	103.4	8.5	1.10	0.93	12.0	9.42
1801(享和 1)	4.260	92.2	90.0	18.5	69.0	96.9	94.9	8.6	65.9	95.1	9.9	0.95	0.94	12.1	9.42
02(2)	3.520	76.2	87.4	22.4	64.7	90.8	91.4	12.1	62.3	90.0	11.2	0.84	0.95	11.6	9.35
03(3)	3.900	84.5	80.2	12.1	60.3	84.6	85.6	9.7	54.3	78.4	9.2	1.00	0.94	9.7	9.35
04(文化 1)	3.060	66.3	76.4	9.3	55.5	77.9	82.5	6.6	56.7	81.9	6.2	0.85	0.93	9.9	9.18
05(2)	3.770	81.6	84.2	22.2	55.5	77.9	82.5	6.6	53.3	77.0	10.4	1.05	1.01	15.9	8.88
1806(3)	3.400	73.6	89.0	24.3	57.9	81.3	85.6	11.3	56.7	81.9	15.1	0.91	1.03	15.8	9.01
07(4)	5.320	115.2	86.5	29.3	64.8	91.0	88.5	10.1	68.3	98.6	14.4	1.27	0.98	26.2	9.10
08(5)	5.000	108.3	82.1	34.3	71.2	99.9	88.9	9.3	75.5	109.0	13.2	1.08	0.92	29.5	9.31
09(6)	2.480	53.7	82.8	33.7	65.9	92.5	93.8	10.4	59.8	86.3	12.4	0.58	0.88	32.2	9.28
10(7)	2.750	59.5	74.6	28.5	57.0	80.0	91.2	13.3	56.3	81.3	12.3	0.74	0.82	24.3	9.31
1811(8)	3.560	77.1	75.1	29.8	75.3	105.7	88.7	12.6	59.1	85.3	9.5	0.73	0.86	31.1	9.25
12(9)	3.430	74.3	82.0	23.4	55.5	77.9	88.8	12.6	59.7	86.2	10.3	0.95	0.93	23.5	9.27
13(10)	5.130	111.1	87.6	16.5	62.4	87.6	91.2	11.0	71.3	102.9	9.8	1.27	0.97	19.8	9.24
14(11)	4.060	87.9	93.9	16.5	66.0	92.6	87.6	6.7	68.4	98.8	9.3	0.95	1.07	15.3	9.08

付表 5-1 (その2) 越前勝山と大阪の米価動向

年次	勝山米価				大阪米価				大阪米価 年末相場			勝山/大阪比			銭1貫につき銀匁
	(石につき貫匁)	指数(1781-85=100)	同5ヵ年移動平均	5ヵ年移動変動係数	(石につき銀匁)	指数(1781-85=100)	同5ヵ年移動平均	5ヵ年移動変動係数	(石につき銀匁)	指数(1781-85=100)	5ヵ年移動変動係数	指数	同5ヵ年移動平均	5ヵ年移動変動係数	
1815(文化12)	4.050	87.7	98.2	11.3	65.6	92.1	90.0	2.6	57.6	83.2	9.7	0.95	1.09	13.8	9.05
1816(13)	5.000	108.3	92.8	10.4	62.7	88.0	88.2	6.4	68.4	98.8	11.6	1.23	1.05	10.9	9.02
17(14)	4.430	95.9	89.0	16.4	63.9	89.7	83.7	10.8	58.6	84.6	13.1	1.07	1.06	10.3	8.96
18(文政 1)	3.890	84.2	85.0	20.6	56.0	78.6	79.4	11.7	52.4	75.7	13.2	1.07	1.06	10.0	8.96
19(2)	3.180	68.9	77.9	15.5	50.1	70.3	78.6	10.9	48.7	70.3	8.6	0.98	0.99	8.7	8.86
20(3)	3.120	67.6	73.5	8.9	50.1	70.3	77.1	8.5	60.3	87.1	8.5	0.96	0.96	8.3	8.95
1821(4)	3.360	72.8	79.4	24.5	60.0	84.2	78.0	9.0	57.2	82.6	9.5	0.86	1.02	20.3	8.94
22(5)	3.420	74.1	93.8	34.2	58.5	82.1	81.6	8.3	58.3	84.2	3.9	0.90	1.14	28.5	8.89
23(6)	5.260	113.9	99.3	28.8	59.0	82.8	85.5	4.1	63.3	91.4	10.2	1.38	1.16	27.1	9.02
24(7)	6.490	140.5	102.1	25.4	63.1	88.6	88.3	7.4	59.7	86.2	10.2	1.59	1.16	26.7	9.21
25(8)	4.400	95.3	107.5	19.5	64.0	89.8	88.1	7.9	72.8	105.1	11.3	1.06	1.23	22.2	10.11
1826(9)	4.000	86.6	123.2	35.5	70.1	98.4	90.6	7.6	57.0	82.3	18.8	0.88	1.36	33.0	9.52
27(10)	4.680	101.3	126.7	36.4	57.5	80.7	96.0	13.3	55.1	79.6	17.6	1.26	1.32	32.8	9.56
28(11)	8.880	192.3	139.9	31.7	68.1	95.6	99.1	12.9	84.0	121.3	20.3	2.01	1.41	29.3	9.42
29(12)	7.300	158.1	154.7	21.3	82.2	115.4	101.9	13.8	69.8	100.8	16.7	1.37	1.52	19.2	9.21
30(天保 1)	7.440	161.1	164.4	9.9	75.0	105.3	105.4	8.1	84.9	122.6	9.2	1.53	1.57	16.1	9.39
1831(2)	7.420	160.7	152.8	7.4	80.0	112.3	112.8	11.4	71.8	103.7	22.2	1.43	1.37	15.4	9.39
32(3)	6.920	149.8	143.0	15.3	70.1	98.4	118.5	16.2	73.9	106.7	22.0	1.52	1.25	27.8	9.30
33(4)	6.200	134.3	145.4	17.1	94.4	132.5	119.0	15.8	114.2	164.9	22.0	1.01	1.27	28.8	9.24
34(5)	5.040	109.1	178.7	48.2	102.7	144.2	128.0	19.2	70.8	102.2	33.0	0.76	1.40	37.3	9.12
35(6)	8.000	173.2	179.0	48.1	76.8	107.8	154.7	30.4	84.2	121.6	29.2	1.61	1.22	49.7	9.21
1836(7)	15.100	327.0	188.8	43.6	111.8	156.9	159.2	28.5	147.0	212.2	29.3	2.08	1.26	47.6	8.91
37(8)	6.980	151.1	206.3	33.7	165.5	232.3	154.5	31.3	93.4	134.9	31.9	0.65	1.43	37.7	9.00
38(9)	8.470	183.4	201.8	36.1	110.3	154.8	151.9	34.1	116.3	167.9	38.1	1.18	1.43	37.7	8.86
39(10)	9.090	196.8	169.7	12.0	86.0	120.7	139.8	40.9	63.0	91.0	28.1	1.63	1.36	32.9	8.87
40(11)	6.950	150.5	166.3	15.1	67.6	94.9	114.5	21.6	60.6	87.5	28.8	1.59	1.48	16.3	9.08
1841(12)	7.700	166.7	156.6	16.7	68.5	96.2	103.9	10.0	77.9	112.5	11.0	1.73	1.51	13.5	9.11
42(13)	6.190	134.0	159.6	20.2	75.6	106.1	101.0	5.3	72.5	104.7	9.8	1.26	1.58	19.0	9.35
43(14)	6.230	134.9	182.8	30.9	72.4	101.6	105.8	7.9	75.5	109.0	9.2	1.33	1.71	24.6	10.00
44(弘化 1)	9.790	212.0	186.8	29.8	75.7	106.3	112.0	9.5	77.5	111.9	9.4	2.00	1.66	26.2	10.00
45(2)	12.300	266.3	201.3	23.5	84.6	118.8	114.5	9.1	91.4	132.0	7.5	2.24	1.75	21.3	10.00
1846(3)	8.630	186.9	212.5	15.0	90.7	127.3	118.2	6.4	83.6	120.7	6.2	1.47	1.81	17.3	10.00
47(4)	9.520	206.2	220.9	16.6	84.4	118.5	122.2	3.4	82.3	118.8	8.0	1.74	1.81	17.4	10.00

付表 5-1 (その3) 越前勝山と大阪の米価動向

年次	勝山米価				大阪米価				大阪米価 年末相場			勝山/大阪比			銭1貫 文につき 銀 匁
	(石につき 貫 匁)	指数 (1781 -85= 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	5カ年 移 動 変 動 係 数	(石につき 銀 匁)	指数 (1781 -85= 100)	同 5 カ 年 移 動 平 均	5カ年 移 動 変 動 係 数	(石につき 銀 匁)	指数 (1781 -85= 100)	5カ年 移 動 変 動 係 数	指 数	同 5 カ 年 移 動 平 均	5カ年 移 動 変 動 係 数	
1848(嘉永 1)	8.830	191.2	239.7	30.3	85.7	120.3	131.6	14.8	87.1	125.8	23.9	1.59	1.80	16.3	10.00
49(2)	11.720	253.8	251.8	26.3	89.8	126.1	136.8	15.7	100.0	144.4	25.3	2.01	1.83	14.1	10.00
50(3)	16.650	360.5	260.6	23.6	118.1	165.8	135.9	16.5	138.5	200.0	24.6	2.17	1.92	15.5	9.15
1851(4)	11.420	247.3	273.0	17.9	109.2	153.3	138.4	15.1	77.6	112.0	23.1	1.61	1.98	12.0	9.55
52(5)	11.550	250.1	265.1	21.0	81.1	113.8	139.5	14.5	86.0	124.2	25.9	2.20	1.90	14.9	9.68
53(6)	11.700	253.4	223.6	19.0	94.8	133.1	128.1	13.8	107.5	155.2	15.3	1.90	1.75	17.5	9.83
54(安政 1)	9.890	214.2	208.9	21.5	93.8	131.7	119.3	10.1	80.9	116.8	15.4	1.63	1.75	17.7	9.98
55(2)	7.070	153.1	212.6	23.4	77.5	108.8	122.2	10.0	74.8	108.0	17.3	1.41	1.73	15.9	10.33
1856(3)	8.020	173.7	221.2	27.5	77.8	109.2	128.7	18.0	77.1	111.3	23.7	1.59	1.70	15.3	10.45
57(4)	12.420	268.9	250.7	34.6	91.3	128.2	134.4	20.3	102.8	148.4	22.7	2.10	1.83	19.1	10.66
58(5)	13.680	296.2	306.1	31.6	118.0	165.6	151.8	22.2	126.0	181.9	20.4	1.79	1.99	14.4	10.71
59(6)	16.690	361.4	341.8	18.3	114.3	160.4	177.4	23.2	113.3	163.6	11.8	2.25	1.96	16.5	10.65
60(万延 1)	19.860	430.1	348.1	15.6	139.3	195.5	193.5	16.4	135.4	195.5	17.6	2.20	1.83	20.9	11.27
1861(文久 1)	16.260	352.1	351.4	14.5	169.1	237.4	204.8	14.3	136.3	196.8	17.7	1.48	1.76	24.4	11.49
62(2)	13.890	300.8	363.5	16.6	148.4	208.3	228.5	14.2	177.8	256.7	21.7	1.44	1.61	20.7	12.03
63(3)	14.430	312.5	431.6	45.2	158.3	222.2	288.3	41.0	165.0	238.2	51.0	1.41	1.48	4.0	12.83
64(元治 1)	19.490	422.0	679.7	80.1	198.9	279.2	533.3	99.7	223.8	323.1	106.6	1.51	1.40	13.2	13.84
65(慶応 1)	35.580	770.5	777.2	64.6	352.2	494.4	756.5	78.3	422.3	609.7	84.6	1.56	1.23	32.5	15.11
1866(2)	73.560	1592.9			1041.7	1462.2			1326.9	1915.8		1.09			14.23
67(3)	36.400	788.2			943.5	1324.4			638.1	921.3		0.60			14.11

(出所)「米価一覧表」(竹内修氏[福井県勝山市鹿谷町東遅羽口]所蔵)、三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物価の動向』(日本学術振興会、1952年)、大蔵省編『大日本貨幣史』6巻(1877年および1878年)、岩橋勝「徳川期諸地方米価の長期的時系列史料」『松山商大論集』29巻6号(1979年)、新保博「銭相場の変動、1789-1867年 — 一つの数量的接近 —」『国民経済雑誌』137巻1号(1978年)。

第6章 移行期における米価変動と地域差

— 勝山と大阪 1781～1915年 —

はじめに

本章は、移行期における米価変動とその地域差について考察しようとしたものである。

移行期を物価史からみた研究は少なく¹⁾、また江戸時代における物価の地域差についての研究も、多いとはいえない²⁾。したがって、移行期における米価変動とその地域差について考察することは、きわめて重要であると考えられる。

なお、本章においても、越前勝山米価を素材としているが、次章で明らかにするとおり、近世後期においては、勝山米価は福井米価とほぼ連動していた。したがって、明治以降については、両米価の乖離はいっそう小さかったとかりに考えてよいとすれば、本章における分析結果は、勝山米価を福井米価と読み替えても、ほぼそのまま成り立つと言ってさしつかえないであろう。

Ⅰ 資料と加工

本節の課題は、もちいた資料とその加工について説明することである。前章でも述べたとおり、勝山の米価は、福井県勝山市鹿谷町東遅羽口に在住の竹内修氏方に伝えられた「米価一覧表」に拠るものである。この「米価一覧表」には、1781（天明元）年から1922（大正11）年までの142年間にわたり、1年ごとの米1石あたりの価格が記されている。もっとも、「米価一覧表」には「註」として「天明、天保ノ頃ハ五斗入俵ニシテ代價何貫何百文ナルヲ以テ当時ノ壹貫ヲ現貨拾錢百文ヲ壹錢ト換算シタリ」とあるから、江戸時代については、米価何貫何百文を、1貫を10錢、100文を1錢に換算してあることがわかる。

この換算は、当時の勝山における実勢を示すものと解釈し、本章においては、これをそのままもちいることとした。ちなみに、新保博氏作成の錢相場表³⁾によれば、1867（慶応3）年における大阪金相場は、1両につき銀139.31匁で、また同錢相場は錢1貫文につき銀14.11匁であるから、大阪においては、江戸期の1貫は明治期の $(14.11 / 139.31) \times 100 \approx 10.128$ 錢と換算され、勝山における1貫＝10錢という換算とほぼ符合することとなる。

なお、勝山米価資料の性格その他については、前章において述べたところであるから、ここでは触れないこととする。また、江戸期における勝山米価の実数については、貫文表示にもどしたうえで、前章末付表のなかに収めたので、本章においては、すべて円錢表示の勝山米価の実数を章末付表のなかに収めることとした。

つぎに、大阪における米価は、斎藤修氏作成の大阪卸売物価指数⁴⁾に依拠した。氏の米価推計は、一部欠年を含んではいるが、1757（宝暦7）年から1915（大正4）年までのじつに159年間にわたるものである。この推計では、江戸期と明治大正期をリンクさせるために、明治大正期の米

価はすべて銀目建に統一されている。⁵⁾

さて、加工の方法について簡単に述べておきたい。まず、勝山米価については、1781（天明元）年から1785（天明5）年までの年毎の米価の単純平均を100とし、これをもちいて年々の米価を指数化し、各年値とした。つぎに、勝山米価の傾向線を求めるために、上記各年値の5ヵ年移動平均を算出し、これを図6-1中段にグラフ化している（半対数グラフ）。なお各年値は、傾向線に絡みつく形の変動の激しい折れ線グラフとして描かれている（以下同様）。

大阪米価の場合は、本章でもちいた斎藤系列は、各年値が1874-76＝100とする指数であたえられており、実数は示されていない。そこで、1781（天明元）年から1785（天明5）年までの年毎の米価指数の単純平均を100として、これをもちいて、あらためて年々の米価を指数化し各年値とした。ついで、大阪米価の傾向線を求めるために、やはり、上記各年値の5ヵ年移動平均値を算出し、これを図6-1下段にグラフ化している（半対数グラフ）。

つぎの系列は、勝山／大阪比である。これは勝山米価の各年指数を大阪米価の各年指数で除したものである（単位1）。勝山／大阪比についても、傾向線を求めるために5ヵ年移動平均値を算出し、図6-1の上段にグラフ化した。

図6-2は、「5ヵ年移動変動係数」をグラフ化したものである。グラフ下段に大阪米価の「5ヵ年移動変動係数」、中段に勝山米価のそれ、そして上段には勝山／大阪比のそれが示されている。

つぎに、図6-3は、勝山米価変動と大阪の米価変動との相関をグラフ化したものである。下段は「5ヵ年移動単純相関係数」⁶⁾とでも呼ぶべきもので、また上段は「5ヵ年移動残差相関係数」とでも呼ぶべきもの

である。いずれの場合も点線は「5ヵ年移動相関係数」をあらわしており、実線は（平滑化の目的で）「5ヵ年移動相関係数」のさらに5ヵ年移動平均をとったものをあらわしている。なお「5ヵ年移動相関係数」についての技術的な説明は、すでに本研究2章で行なっているのでここでは繰り返さない。

II ファクト・ファインディングス

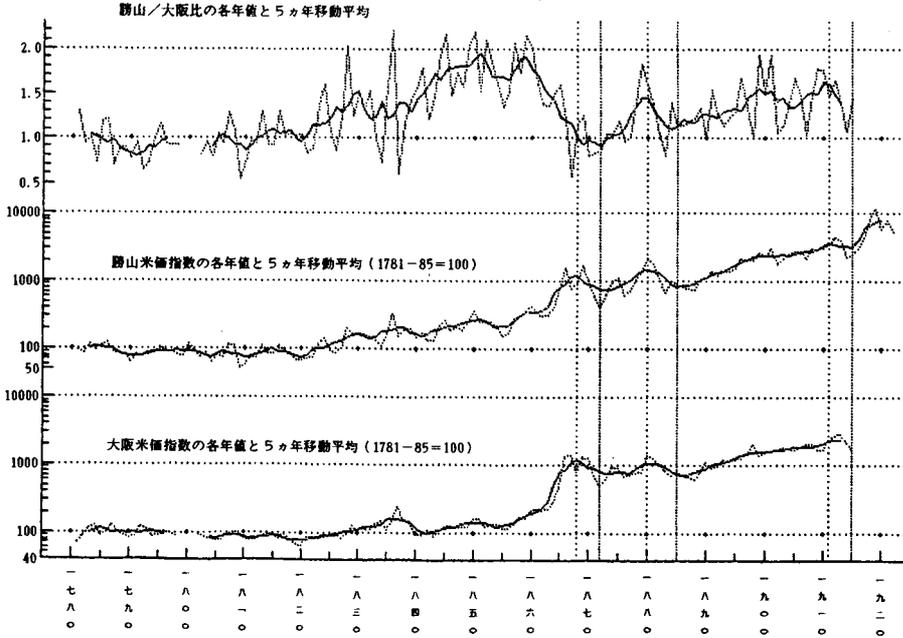
本節の課題は、前節で得られた図6-1から図6-3までの結果について、事実の観察を行なうことである。まず、図6-1中段に描かれた勝山米価の5ヵ年移動平均値の系列について考察することとしよう。江戸時代における勝山米価変動の趨勢と循環については、すでに前章で検討しているので、本章では考察の範囲を、主として明治大正期に限定することとしたい。

1868（明治元）年ごろにピークに達した勝山米価は、以後、下降局面にはいり、1872（明治5）年ごろには谷をむかえる。その後米価は上昇し、1880（明治13）年ごろにふたたびピークに達したのち、1885（明治18）年ごろの谷に向かって下降する。米価は、この谷を脱してからは、25～30年におよぶ長期の上昇局面にはいり、1911（明治44）年ごろにピークに達する。その後、1915（大正4）年ごろに浅い谷を経験するが、以後は、1920（大正9）年ごろまで顕著な上昇を示している。

なお、これらの時期区分については、本章で掲げたグラフ（図6-1、6-2、6-3、6-5）に区切りの線を入れておいた。

ここで注目すべきことは、4つのピーク（1868年、1880年、1911年、1920年）が時代を下るにつれてしだいに高くなってゆくこと、同じこと

図6-1 勝山と大阪の米価



が3つの谷（1872年、1885年、1915年）についてもいえることであろう。したがって、明治期から大正期にかけて、勝山の米価変動は、グラフからも観察されるとおり、趨勢的に着実な上昇傾向をもったと考えられよう。

観察事実〔1〕

明治期から大正期にかけて勝山の米価は、趨勢的には着実な上昇傾向をもち、また、循環的にはいくつかの周期的変動を示した。

つぎに図6-1下段に描かれた大阪米価の5ヵ年移動平均値の系列について考察することとしよう。本章では、大阪についても考察の範囲を、主として明治大正期に限定することとしたい。

1868（明治元）年ごろにピークに達した大阪米価は、以後、下降局面にはいり、1874（明治7）年ごろには谷をむかえる。その後米価は上昇

し、1881（明治14）年ごろにふたたびピークに達したのち、1886（明治19）年ごろの谷に向かって下降する。しかし、米価はこの谷を脱してからは、25～30年におよぶ長期の上昇局面にはいつている。

ここで注目すべきことは、2つのピーク（1868年と1881年）を比べてみると、後者の方がやや水準が低く、同じことが2つの谷（1874年と1886年）についてもいえることであろう。したがって、明治期から大正期にかけての大阪の米価変動は、1868（明治元）年ごろから1886（明治19）年ごろまでは、やや下降の趨勢をもち、1886（明治19）年ごろ以降は着実な上昇趨勢をもったと考えられる。

観察事実〔2〕

明治期から大正期にかけての大阪の米価は、趨勢的には、1886（明治19）年ごろまではやや下降の傾向、1886（明治19）年ごろ以降は着実な上昇傾向をもち、また循環的にはいくつかの周期的変動を示した。

ところで、これまでの観察事実にもとづいて、勝山と大阪の米価変動を比較してみるとつぎのことがいえよう。

観察事実〔3〕

明治期から大正期にかけて勝山と大阪の米価変動は、趨勢的にはつぎのとおりである。すなわち、1885（明治18）年ごろまでは、勝山米価は上昇、大阪米価はやや下降しており、異なった様相を示すが、1885（明治18）年以降になると、両者とも着実な上昇傾向をもっている。また、循環的には、各周期の山と谷の日付はほぼ一致している。

つぎに、図6-1上段に描かれた勝山／大阪比の5ヵ年移動平均値について考察することとしよう。本章では、勝山／大阪比についても考察

の範囲を、主として明治大正期に限定することとしたい。

さきに述べたように、勝山米価および大阪米価はいずれも1781-1785＝100として指数化されたものである。しかも江戸期と明治大正期をリンクさせるために、勝山米価については、1貫＝10銭という比率で貫文表示から円銭表示に換算されており、また大阪米価の場合は、銀100目＝金1両＝1円という比率をもちいて銀目建への換算が行なわれている。したがって、本章における勝山／大阪比の系列はいくつかの点で問題を含むことになるが、これについては次節で触れることとし、本節では、とりあえず事実の観察に専念することとしよう。

さて、勝山／大阪比移動平均の系列は、1868（明治元）年に1.00となり、これは天明期（1781～88年）の水準に等しいから、ほぼ1世紀を経て、いわば振出しにもどるといふ観を呈することとなった。この系列は、以後わずかに下降し、1872（明治5）年ごろには谷をむかえる。その後勝山／大阪比は上昇し、1880（明治13）年ごろにピークに達したのち、1884（明治17）年ごろの谷に向かって下降する。勝山／大阪比は、この谷を脱してからは、1899（明治32）年ごろから1905（明治38）年ごろにかけて、一時期、低下するが、基本的には、25～30年におよぶ長期の上昇局面にはいり、1910（明治43）年ごろにピークに達する。しかしその後1910（明治43）年ごろから、1913（大正2）年ごろにかけては下降の傾向を示している。

勝山／大阪比は、うえに述べたようないくつかの周期的変動を示している。しかし、明治期をつうじて全体として眺めれば、3つのピーク（1880年、1899年、1910年）が時代をくだるにつれてしだいに高くなってゆくこと、また同じことが4つの谷（1872年、1884年、1905年、1913年）についてもいえるから、趨勢的には、グラフからも観察されるとお

り、着実に上昇していったと考えてさしつかえないであろう。

観察事実〔4〕

勝山／大阪比は、明治期から大正期にかけて、趨勢的には着実な上昇傾向をもち、また循環的にはいくつかの周期的変動を示した。

ところで、勝山／大阪比の明治大正期における趨勢の上昇は、同時期における勝山米価の上昇率が大阪米価のそれを上回っていたことの帰結であることは明らかである。しかし、勝山／大阪比の循環的変動についてはどうであろうか。一般に、勝山／大阪比の上昇期（1872～80年、1884～99年、1905～10年）には、勝山米価および大阪米価も上昇しているので、勝山／大阪比の上昇は、勝山米価の上昇率が大阪米価のそれを上回っていたからにほかならない。また、勝山／大阪比の下落期（1868～72年、1880～84年、1899～1905年、1910～13年）には、前2者のように、勝山米価および大阪米価ともに下落している場合と、後2者のように、勝山米価は横ばいないしはやや下落しているのに、大阪米価は上昇している場合とがある。したがって勝山／大阪比の下落は、世紀の変わり目ぐらいまでは、勝山米価の下落率が大阪米価のそれを上回ったからだといえようが、20世紀にはいってからは、少し様相が異なって大阪米価の上昇にも着目すべきであると思われる。

観察事実〔5〕

明治期から大正期にかけて、趨勢的にみれば、勝山米価の上昇率は大阪米価のそれを上回っていた。循環的にみれば、勝山／大阪比の上昇期において、勝山米価の上昇率は大阪米価の上昇率を上回っていた。また勝山／大阪比の下落期については、世紀の変わり目ぐらいまでは、勝山米価の下落率が大阪米価の下落率を上回っていたが、20世紀にはいると、少し様相が異なった。とはいえ総じて、勝山／

大阪比の循環的変動を規定したのは勝山米価であったといつてさしつかえないであろう。

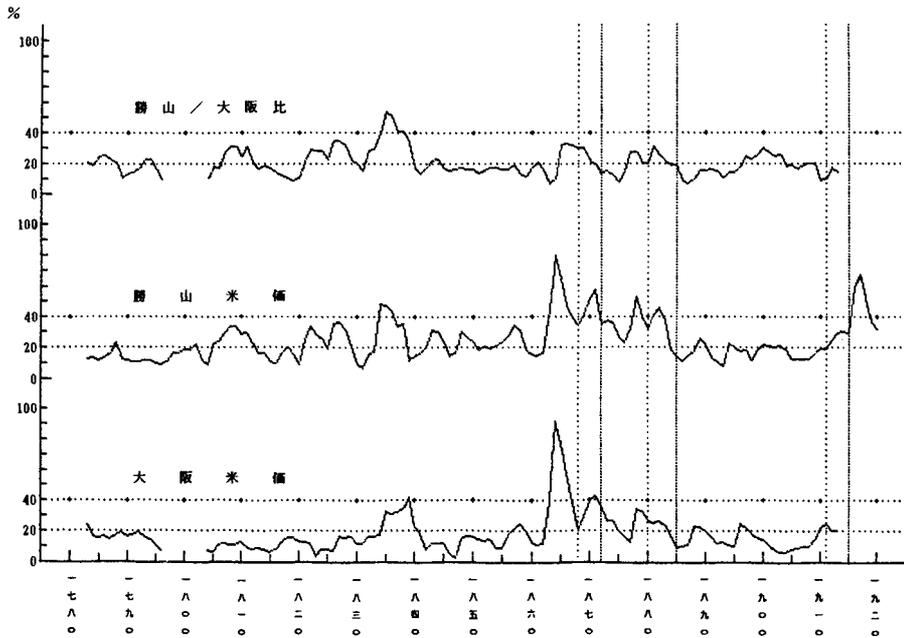
さて引続いて図6-2に描かれた「5ヵ年移動変動係数」について事実の観察を行なうこととしよう。本章では、変動係数についても考察の範囲を、主として明治大正期に限定することとしたい。まず、勝山米価の変動係数（図6-2中段）についてみると、1868（明治元）年ごろから1885（明治18）年ごろにかけて、その値は40パーセント前後に達しており、この期に勝山米価は激しく変動していたことがわかる。しかし、1885（明治18）年ごろから1911（明治44）年ごろにかけては、変動係数の値は、10～20パーセントラインに落ち着いており、この期をつうじて勝山米価はすこぶる安定的に推移したということができよう。しかるに、1911（明治44）年ごろから1920（大正9）年ごろにかけては、ふたたび変動係数の値は大きくなっており、とりわけ1917（大正6）年を中央年とする5年間の変動係数は66.5パーセントに達していて、この値は明治大正期をつうじてもっとも大きいものとなっている。

つぎに大阪米価の変動係数（図6-2下段）についてみると、1868（明治元）年ごろから1885（明治18）年ごろにかけて、その値は30パーセント前後に達しており、この期に大阪米価は激しく変動していたことがわかる。しかし、1885（明治18）年ごろから1913（大正2）年ごろにかけては、変動係数の値は、5～20パーセントラインに落ち着いており、この期をつうじて、大阪米価はすこぶる安定的に推移したということができよう。

観察事実〔6〕

勝山、大阪両米価ともに、1868（明治元）～85（明治18）年ごろの

図6-2 「5ヵ年移動変動係数」



期間については、激しく変動した。しかるに1885（明治18）年ごろから1911（明治44）年ごろの期間には、両米価はすこぶる安定的に推移した。その後、1911（明治44）年～20（大正9）年ごろにかけては、勝山においてみられるように、米価はふたたび激しく変動した。

ところで勝山、大阪両米価の変動パターンを相互に比較してみるとどのようなことが言えるであろうか。まず、明治大正期をつうじて、勝山米価の変動係数は、大阪のそれよりもかなり大きいことが特徴的である。そのことはとりわけ、1868（明治元）～85（明治18）年の時期について著しい。これは、勝山米価の上昇（下落）率が大阪米価の上昇（下落）率をおおむね上回っていたというさきの観察事実〔5〕とよく符合する。

観察事実〔7〕

明治大正期をつうじて、勝山米価の変動係数は、大阪のそれよりもかなり大きいことが特徴的である。そのことは、とりわけ1868（明治元）～85（明治18）年の時期について顕著である。

また、勝山、大阪両米価の「5ヵ年移動変動係数」をみると、それらは、明治大正期においては（前代との比較で）波動としての類似性を著しく高めていることが明らかである。さらに、図6-2上段に描かれた勝山／大阪比の「5ヵ年移動変動係数」についても、明治大正期においては（前代との比較で）、その値がやや小さくなっていることが観察される。

観察事実〔8〕

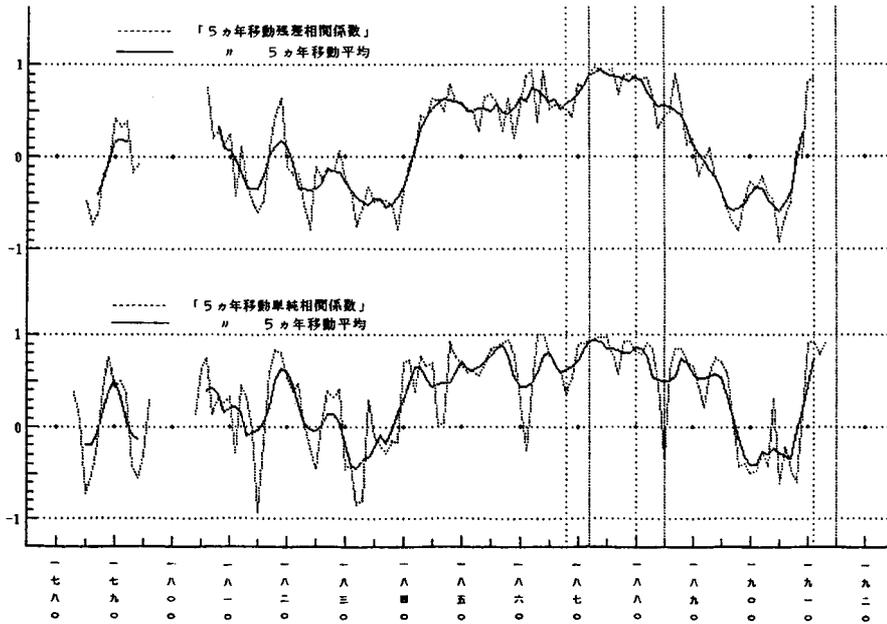
明治大正期において勝山、大阪両米価の「5ヵ年移動変動係数」は、これらを波動として眺めたとき、その類似性を著しく高めている。また、明治大正期には、勝山／大阪比の「5ヵ年移動変動係数」も、その値がやや小さくなっている。

うえに述べたように、明治大正期において、勝山、大阪両米価の変動パターンは類似性を高めた。図6-3のグラフは、このことをさらに別の角度から検討するために用意したものである。

図6-3は、先に述べたように勝山米価変動と大阪米価変動との相関をグラフ化したものである。下段は「5ヵ年移動単純相関係数」とでも呼ぶべきもので、また上段は「5ヵ年移動残差相関係数」とでも呼ぶべきものである。いずれの場合も点線は「5ヵ年移動相関係数」をあらわしており、実線は（平滑化の目的で）「5ヵ年移動相関係数」のさらに5ヵ年移動平均をとったものをあらわしている。

さてグラフの観察に移ると、まず1830年代ぐらまでは、両米価の

図6-3 勝山米価と大阪米価の「5ヵ年移動相関係数」



「5ヵ年移動相関係数」は小さい。とりわけ、1830年代には負の相関の方へとかなり大きく振れている。しかるに1840年代すなわち天保（1830～43年）末期および弘化期（1844～47年）以降、1880年代にかけては、両米価の「5ヵ年移動相関係数」はかなり大きなものとなっている。⁷⁾

その後、両米価は、1890年代からしばらく負の相関の方へと振れているが、1910年代（明治43～大正8年）になると、ふたたび相関の度合を強めていることがわかる。

さきの図6-2に描かれた「5ヵ年移動変動係数」のグラフにおいても、天保（1830～43年）末期以降、両米価の（変動係数の）波動は類似性を高めていた。しかるにほぼ明治30年代（1897～1906）においては両米価の変動パターンは、一時期、異なったものとなっている。また勝山／大阪比の「5ヵ年移動変動係数」のグラフをみても、天保（1830～43

年)末期以降、変動は穏やかなものとなっている。したがって図6-2および図6-3は、両米価が天保(1830～43年)末期以降、相関ないしは連動の度合を強めていたという点で相互に矛盾のないものであると思われる。

観察事実〔9〕

勝山および大阪の米価変動は、天保(1830～43年)末期以降、(明治30年代(1897～1906)を例外として)相関ないしは連動の度合を強めた。

Ⅲ 解釈にかえて

本節では、前節で観察された事実〔1〕～〔9〕についてさらに考察をすすめることとしたい。まず、勝山および大阪の個々の米価にかんする観察事実〔1〕～〔3〕から始めることとしよう。

本章でもちいた大阪米価は、斎藤修氏作成の大阪卸売物価指数に依拠したものであるが、前章でもちいた大阪米価は、それとは別の系列であった⁸⁾。しかし、斎藤系列も前章でもちいた系列もほとんど異なるところはなかった。したがって、前章における江戸時代についての検討は、斎藤系列をもちいたとしてもなんら変更を要するものではないと思われる。

さて、観察事実〔3〕によれば、1885(明治18)年ごろまでは、勝山米価はやや上昇、大阪米価はやや下降しており、異なった様相を示すが、1885(明治18)年以降になると両者とも着実な上昇傾向をもっている。大阪米価は江戸時代の天明(1781～88年)、天保(1830～43年)、幕末期において、勝山米価を凌ぐ高騰をみせており、幕末期におけるそれはとりわけ顕著である。したがって大阪米価が、明治20(1887)年ごろに

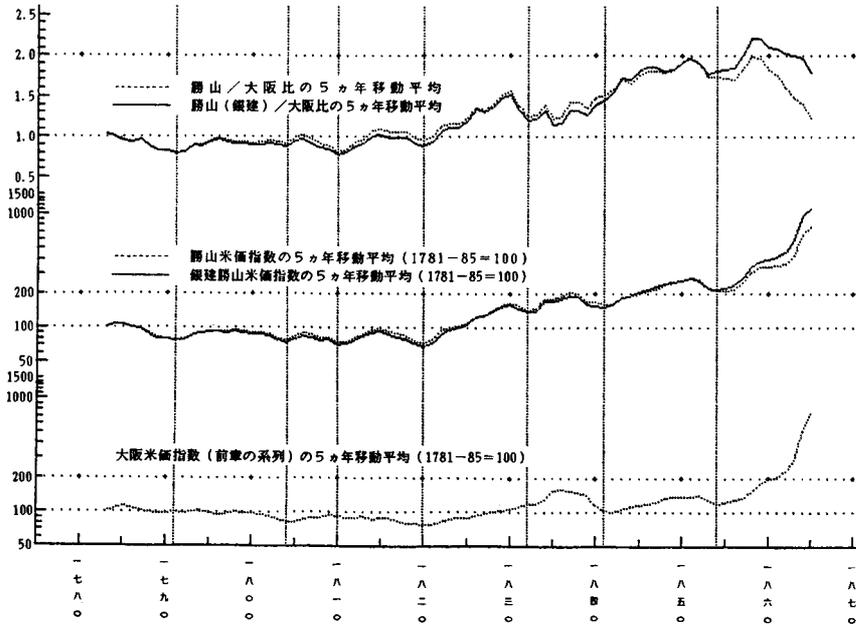
かけてやや下降の趨勢を示すのは、幕末期における急騰の調節過程であるかもしれない。

大川グループによれば、明治維新から松方デフレーション（1881（明治14）～1885（明治18）年）の終りまでの期間は、江戸期から近代への過渡期であり、その後、近代経済成長が本格的にスタートしたことになるが、われわれの米価系列もまた、このことと無関係ではないと考えられよう。

つぎに、観察事実〔4〕、〔5〕、すなわち明治大正期に、勝山／大阪比が趨勢的に上昇したということについて考えてみよう。さきに述べたように、勝山米価および大阪米価は、いずれも1781－1785＝100として指数化されたものである。しかも江戸期と明治大正期をリンクさせるために、勝山米価については、1貫＝10銭という比率で貫文表示から円銭表示に換算されており、また大阪米価の場合は、銀100目＝金1両＝1円という比率をもちいて銀目建への換算が行なわれている。したがって、本章における勝山／大阪比の系列は、いくつかの点で問題を含んでいる。

ひとつは、江戸期において勝山米価が銭建で表示され、大阪米価が銀建で表示されていることにかかわる。大阪における銭相場が勝山における銭相場に等しいという保証はもとよりないが、われわれは、便宜的に、さきに述べた新保博氏作成の大阪銭相場表をもちいて、銭建勝山米価を銀建に換算することを試みた。かくして得られた銀建勝山米価にもとづいて、勝山／大阪比を再計算してみると、1842（天保13）年ごろまでは、やや低めに修正されるが、1843（天保14）年以降はやや高めに修正され、とりわけ幕末期においては、かなり高めに修正されることが明らかとなった（図6－4¹⁰⁾）。しかし、それでもなお幕末期における勝山／大阪比の下降傾向は依然として残されている。

図6-4 銀建換算勝山米価と大阪米価



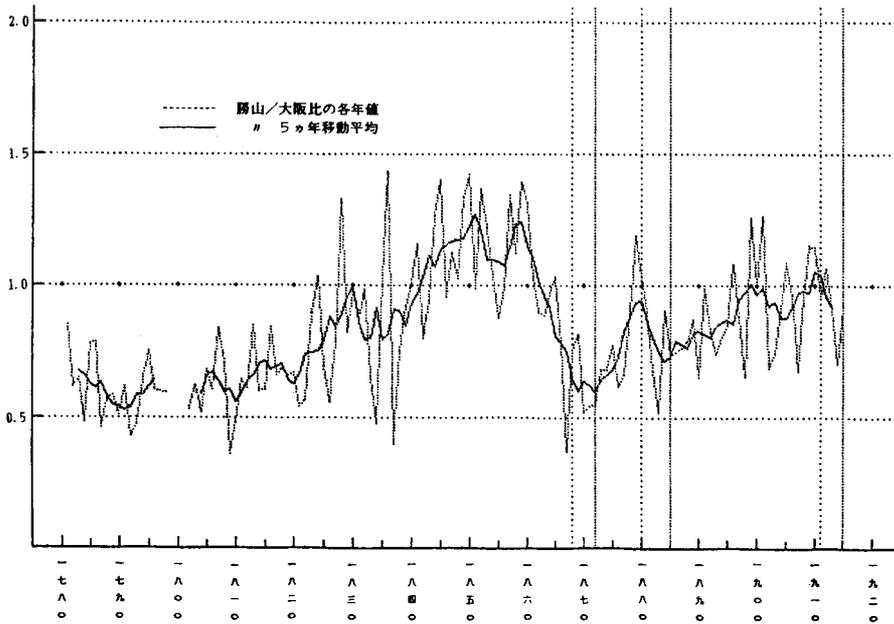
江戸期におけるもうひとつの問題は、勝山／大阪比の文政（1818～29年）前期以降の顕著な上昇趨勢にかんするものである。次章で明らかにするとおり、江戸期において、勝山米価は福井米価とほぼほぼ同様の動きを示した。したがって福井／大阪比もまた文政（1818～29年）前期以降になると顕著な上昇趨勢を示している。しかし、断片的な資料によれば、天保（1830～43年）末期以降、福井金相場（金1両につき銀匁）は、大阪金相場以上に高騰している¹¹⁾ので、銀（目）建福井米価は、その分、大阪米価より高くでていると考えられる。以上のことから、勝山／大阪比の文政（1818～29年）前期以降の上昇趨勢は、大いに疑問があるといえそうである。しかし、この種の三貨交換比率の地域差が物価の地域差とどのようにかかわっていたかという問題は、8章において検討することとして、本章ではこれ以上立ち入らないこととしよう。

さて、勝山／大阪比は、1820（文政3）年以前においては、趨勢としては不変ないしはわずかな上昇の傾向をもった。しかし、1820年以降になると、勝山／大阪比の動向は、天保期（1830～43年）前半を例外とし、安政期（1854～59年）以降を別にすれば、明確な上昇趨勢をもった。そして、明治にはいって、ふたたび天明期（1781～88年）の水準にもどったのち、大正期にかけて趨勢的には着実な上昇傾向をもったといえる。

また、循環的にみれば、おおむね、勝山／大阪比の上昇（下落）期において勝山米価の上昇（下落）率は大阪米価の上昇（下落）率を上回っていた。しかし、このことは、明治大正期においては明らかに例外と思われるものは少ないが、江戸期においては顕著な例外が存在する。すなわち、天明、天保の飢饉、幕末の動乱のように社会的不安の高まるときには、大阪米価は勝山米価を凌ぐ高騰をみせており、幕末期におけるそれはとりわけ顕著である。したがって、この天明、天保、幕末期においては、米価上昇期であるにもかかわらず、勝山／大阪比は低下傾向を示しているのである。

ところで、明治大正期に勝山／大阪比が趨勢的に上昇したということは、実際の米価（米価の絶対水準）も勝山の方が大阪よりも高くなったということの意味するであろうか。この問題を考えるためには、両米価の貨幣単位を統一しなければならない。勝山米価は、江戸時代と明治大正期をリンクさせるために、1貫＝10銭という比率で、貫文表示から円銭表示に換算されている。したがって、明治大正期については、ほぼ実米価を表わしている。大阪米価は、各年値が $1874 - 76 = 100$ とする指数であたえられており、実数は示されていない。そこで、これをまず実数にもどし、¹²⁾全系列を銀目建にしてから、銀100目＝1円の比率で、円建に換算した。したがって、明治大正期についてはほぼ実米価を表わすことに

図6-5 実米価の勝山 / 大阪比



なる。

図6-5に描かれたグラフは、このようにして得られた両米価（円建）をもちいて、あらためて勝山 / 大阪比の各年値を計算し、しかるのち5年移動平均をとったものである。江戸時代については、これまでに指摘したように、貨幣単位の相違、三貨交換比率の地域差、江戸期と明治期のリンク等¹³⁾、困難な問題がいくつかあるので、このグラフをもちいて勝山大阪両米価の絶対水準について議論することは差し控えたいと思う。そこで、1868（明治元）年以降の実米価にかんする勝山 / 大阪比のグラフを観察すると、明治期から大正期にかけて、明らかに、均衡値1に向かって減衰振動を繰り返しながら収束しており、1910年代（明治43～大正8年）初期には、両米価水準はほぼ等しくなったと考えられる。

つぎに観察事実〔6〕、〔7〕、〔8〕、〔9〕、すなわち勝山大阪両米

価の連動および相関の問題について検討することとしよう。まず観察事実〔6〕によると、両米価ともに、1868（明治元）～85（明治18）年ごろの期間については変動が激しく、変動係数は江戸時代よりも大きかった。しかるに1885（明治18）年ごろから1911（明治44）年ごろの期間になると、両米価はすこぶる安定的に推移した。また観察事実〔7〕によると、明治大正期をつうじて、勝山米価の変動係数は大阪のそれよりもかなり大きく、とりわけ1868（明治元）～85（明治18）年の期間について顕著である。

このように、1885（明治18）年ごろをさかいに、勝山と大阪の変動係数が小さくなり、同時にその差も縮小しているのは、1885（明治18）年ごろが、物価構造、地域構造の点からみてひとつの変り目であることを示唆していよう。さきに述べたように、明治維新から松方デフレーションの終りまでの期間は、江戸期から近代への過渡期であり、その後、近代経済成長が本格的にスタートしたことになるが、われわれの米価系列もまた、このことと無関係ではないと考えられよう。¹⁴⁾

また、明治大正期と同じく、前章でみたように江戸期においても勝山米価の変動係数は、大阪のそれよりもかなり大きい。しかし、江戸期においては、天明（1781～88年）、天保（1830～43年）の飢饉、幕末の動乱のように社会的不安の高まるときには、絶対的ないしは相対的に、大阪米価の変動係数が勝山のそれを上回る。明治大正期にはいるとこのような逆転現象はみられないから、米価構造の点からみて、明治初年は、やはりひとつの変り目であったと考えられよう。

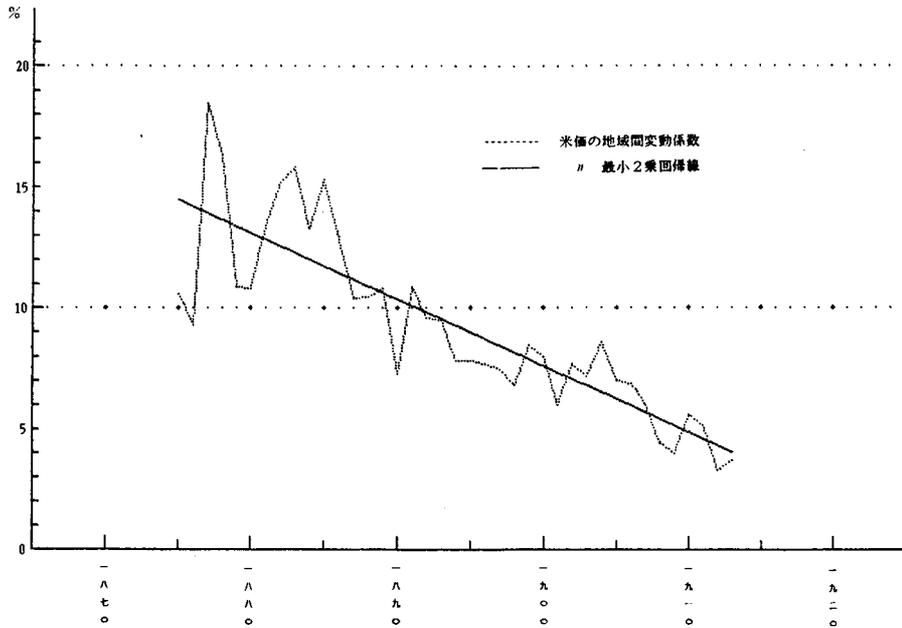
観察事実〔8〕、〔9〕によれば、勝山、大阪両米価の「5ヵ年移動変動係数」、勝山／大阪比の「5ヵ年移動変動係数」、および両米価の「5ヵ年移動相関係数」の点からみて、勝山および大阪の米価変動は、

天保（1830～43年）末期以降、明治30年代（1897～1906）を例外として、相関ないしは連動の度合を強めていることが明らかとなった。明治30年代（1897～1906）は、全国的にみても、米類生産量の変動がかなり大きかったが、福井県においては、この時期に、出水等の災害が頻発し、米生産量の変動はすこぶる大きかった。¹⁵⁾ すなわち、このことは、この時期における勝山大阪両米価の相関ないしは連動の度合が低下したことと無関係ではなかったと考えられよう。¹⁷⁾

ところで、明治以降について地域間の米価相関ないしは米価連動の問題を取り扱ったものとして、すでに、岩橋勝¹⁸⁾氏および小岩信竹¹⁹⁾氏による研究が存在する。岩橋氏によれば、徳川期における隔地間米価の実質変化率の格差は、明治期に比べれば、必ずしも顕著な縮小化がみられたとすることはできないけれども、幕末に向かって安定化がみられ、とりわけ明治維新にいたる10数年の時期もさほど大きく乱れることはなかった。したがって明治期に連続する市場構造ないし価格形成システムが成立していたとみることができ、結局、日清戦争後に、全国ほぼ一体の米市場が実現するにいたったという。本章における勝山、大阪両米価の「5ヵ年移動変動係数」、勝山／大阪比の「5ヵ年移動変動係数」、勝山／大阪比の「5ヵ年移動相関係数」のいずれの点からみても、幕末維新期の相関ないしは連動の度合は高いから、この点については、岩橋氏の観察と一致すると考えてさしつかえないであろう。

小岩氏は、1875（明治8）年から1913（大正2）年までの期間について、全国都道府県のデータをもちいて、年毎の米価の地域間変動係数を計算している。²⁰⁾ これをグラフ上にドットし、回帰線²¹⁾を引くと、それは急勾配で下降し、しかも、各年値の回帰線からの乖離は、年とともに小さくなってゆく（図6-6）。したがって明治以降大正期にかけて、米価

図6-6 米価の地域間変動係数



の地域間格差は急速に縮小し、しかも価格構造が安定化していったことがわかる。さきに述べたように、1868（明治元）年以降の実米価にかんする勝山／大阪比のグラフを観察すると、明治期から大正期にかけて、明らかに均衡値1に向かって減衰振動を繰り返しながら収束しており、1910年代（明治43～大正8年）初期には両米価水準はほぼ等しくなったと考えられる。このことと、さきの小岩氏の結果とは、本質的には異なるかもしれないが、一脈相通ずるものがあるといってさしつかえないであろう。

おわりに

ここでは、移行期における米価変動と地域差について、本章で明らか

になったダイナミズムを、時代を追って通観しておくこととしよう。

(1) まず、天保(1830～43年)末期をさかいとして、勝山、大阪両米価は、相関ないし連動の度合を高めた。

(2) 明治初年をさかいとして、勝山米価の上昇(下落)率が、大阪米価の上昇(下落)率を上回ることによって、勝山／大阪比が上昇(下落)するというパターンがおおむね定着した。またこのころをさかいとして大阪の「5ヵ年移動変動係数」が勝山のそれを上回るという逆転現象はみられなくなった。江戸後期においては、天明、天保、幕末期が顕著な例外をなしていた。

(3) 1885(明治18)年ごろをさかいとして、勝山大阪両米価は着実に上昇した。またこのころをさかいとして、勝山と大阪の「5ヵ年移動変動係数」は小さくなり、同時にその差も縮小した。明治初年から1885(明治18)年ごろまでは、異なった様相を示していたから、この時期は過渡的な調節過程であったと考えられる。

(4) 1910年代(明治43～大正8年)初期になると、明治初年以降差をつめていた勝山大阪両米価の絶対水準が、ついに一致し、地域的な価格差が解消することとなった。

注

- 1) ここでは、新保博「幕末期・明治期の価格構造 — 国際的要因とそれへの対応の問題を中心として —」『社会経済史学』33巻1号(1967年)、および斎藤修「大阪卸売物価指数 1757-1915年」『三田学会雑誌』68巻10号(1975年)をあげておきたい。
- 2) これについては、前掲原田・宮本編著『歴史のなかの物価』の第

- 5章において、宮本又郎氏がすぐれた展望をあたえている。
- 3) 新保博「錢相場の変動, 1789-1867年 — 一つの数量的接近 —」
『国民経済雑誌』137巻1号(1978年)、20ページ。前掲同『近世の物価と経済発展』、173ページ。
- 4) 前掲斎藤「大阪卸売物価指数 1757-1915年」、67ページ。
- 5) 前掲斎藤「大阪卸売物価指数 1757-1915年」、68～70ページの記述によれば、氏が依拠した資料はつぎのとおりである。すなわちⅠ期(1757～83年)とⅡ期(1781～1852年)は、三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』(1952年)、Ⅲ期(1850～79年)は「大阪物価沿革表」(宮本又次編『近世大阪の物価と利子』(1963年)所収)、Ⅳ期(1877～91年)は「貨幣制度調査会報告」(大内兵衛・土屋喬雄編『明治前期財政経済史料集成』12巻(1932年)所収)、Ⅴ期(1889～1902年)は『大阪府統計書』(各年度)、Ⅵ期(1900～15年)は商工省調「大阪市卸売物価指数」(朝日新聞社編(1930年)所収)である。なお、Ⅲ期(1850～79年)に銀目建への換算が行なわれており、それは、金一両＝銀百目、一両＝一円である。
- 6) このような統計量をもちいたのは、変動係数の場合と同様、相関係数についても、期間の区切り方についての恣意性をなくし、また変量の順序交換可能性から生じる問題をなるべく小さくしようと考えたからである。なお、本章では、米価指数について相関係数を算出しているが、容易にわかるように、指数化以前の米価であっても相関係数の大きさは変化しない。
- 7) 前章の分析結果にみるとおり、勝山米価は年末の価格であると考えられる。したがって勝山、大阪両米価の相関をとる場合には、

大阪米価についても年末の価格が望ましいであろう。ところが本章でもちいた大阪米価は、斎藤修氏作成の大阪卸売物価指数に依拠しており、これはおそらく年平均価格であると思われる。幸い江戸期の大阪米価については、前章でも用いた岩橋勝氏作成の「大阪堂島の正味1石当り年末相場の代表値」という系列が存在する。そこで江戸期について、岩橋氏作成の年末相場をもちいて勝山、大阪両米価の相関を再計算した。その結果1830年代以前についても、両米価にはある程度の正の相関が観察されたが、しかし本章におけるファインディングに修正を迫るほどのものではなかった。

- 8) 江戸時代の米価については、両者とも、主として前掲『近世後期における主要物價の動態』に依拠しているが、斎藤系列は、1850（嘉永3）年以降前掲「大阪物価沿革表」に拠っており、また前章でもちいた系列は、一部、前掲『大日本貨幣史』6巻に依拠している。
- 9) たとえば、大川一司・速水佑次郎編『日本経済の長期分析——成長・構造・波動——』（1973年）、1ページ。大川一司他『長期経済統計——国民所得』（1974年）、15ページなど。
- 10) 図6-4作成のためにもちいた大阪米価は、斎藤系列ではなく前章でもちいた系列である。なお、グラフに入れた区切りの線は、前章同様江戸期について移動平均による勝山米価波動の谷に着目して時期区分を行なったものである。
- 11) 前掲「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額區別調」。
- 12) 前掲『近世後期における主要物價の動態』、62ページより1782（天明2）年の米価（56.9+70.0）／2（1石につき銀匁）を取り

出し、これと、1782年における斎藤系列の各年指数、10.4との比をもとにして、全系列を実数にもどした。

- 13) 斎藤系列においては明治以降の米価が銀目建に換算されているが、前掲新保『近世の物価と経済発展』、280～281ページにおいては、逆に、金相場をもちいて、江戸期の銀目価格が両建に換算されている。
- 14) 前掲新保「幕末期・明治期の価格構造」、24～25ページによれば、「……明治20年代を境にして価格構造の性格が変わっている……。……明治20年代以降価格構造が安定するとともに、徳川期の価格構造とはまったく異質な価格構造があらわれるにいたったのである」。
- 15) 梅村又次他『長期経済統計 — 農林業』（1966年）、166ページ。また、山口三十四『日本経済の成長会計分析 — 人口、農業、経済発展 —』（1982年）、4ページの1-1図（1）、277ページ付表2。
- 16) 福井県『福井県史』第3冊（1922年）、503～505ページ。
- 17) 前掲『福井県史』、201～202ページ。
- 18) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、8章5節。
- 19) 小岩信竹「明治期における米価及び他商品価格の地域間連動性について」『（弘前大学）経済研究』4号（1981年）。
- 20) 小岩氏の論考は、前掲原田・宮本編著『歴史のなかの物価』、165～166ページ等に、宮本又郎氏によって紹介されている。本章ではこれを参照した。
- 21) 最小2乗回帰線の方程式は、 X ：年、 Y ：変動係数（%）としたとき、 $Y = -0.274858X + 529.835$ である。

付表 6-1 (その1) 勝山と大阪の米価動向 1781~1922

年次	勝山米価				同銀建換算			大阪米価			
	(石につき円銭) 円 銭	指数 (1781-85=100)	同5年 カ移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	(石につき銀匁)	指数 (1781-85=100)	同5年 カ移動 平均	(石につき円銭) 円 銭	指数 (1781-85=100)	同5年 カ移動 平均	5カ年 移動 変動 係数
1781(天明 1)	0.430	93.1			41.9	93.9		0.506	71.3		
82(2)	0.390	84.5			36.9	82.7		0.635	89.3		
83(3)	0.540	116.9	100.0	13.2	51.9	116.4	100.0	0.836	117.7	100.0	23.4
84(4)	0.441	95.5	105.2	14.1	42.9	96.0	104.9	0.921	129.7	105.5	16.6
85(5)	0.508	110.0	106.5	11.9	49.5	111.0	105.7	0.653	91.9	113.4	15.3
1786(6)	0.550	119.1	100.4	13.6	52.8	118.3	99.9	0.702	98.8	109.8	16.4
87(7)	0.420	90.9	97.8	16.3	38.7	86.7	97.1	0.915	128.9	102.2	15.0
88(8)	0.400	86.6	88.4	22.8	39.0	87.5	87.4	0.708	99.7	100.0	17.8
89(寛政 1)	0.380	82.3	81.1	13.1	36.7	82.2	80.2	0.653	91.9	97.6	19.3
90(2)	0.292	63.2	78.9	11.5	27.9	62.5	78.6	0.573	80.8	96.2	16.6
1791(3)	0.380	82.3	78.0	10.7	36.7	82.1	77.4	0.616	86.8	98.8	17.9
92(4)	0.370	80.1	78.6	11.1	35.2	78.9	78.0	0.866	122.0	97.4	19.0
93(5)	0.380	82.3	86.8	11.6	36.3	81.2	86.4	0.799	112.5	99.3	16.9
94(6)	0.392	84.9	89.6	11.6	38.1	85.3	89.0	0.604	85.1	102.6	14.9
95(7)	0.483	104.6	91.8	9.8	46.6	104.4	91.0	0.641	90.2	97.9	11.0
1796(8)	0.444	96.1	92.0	9.4	42.4	95.0	91.0	0.732	103.1	93.6	7.7
97(9)	0.420	90.9	90.9	11.1	39.7	88.9	88.8	0.702	98.8		
98(10)	0.385	83.4	93.5	16.1	36.5	81.7	90.8	0.647	91.1		
99(11)	0.366	79.3	92.7	16.2	32.9	73.8	89.8				
1800(12)	0.544	117.8	89.8	18.7	51.2	114.8	86.8				
1801(享和 1)	0.426	92.2	90.0	18.5	40.1	89.9	86.8				
02(2)	0.352	76.2	87.4	22.4	32.9	73.7	84.6	0.665	93.6		
03(3)	0.390	84.5	80.2	12.1	36.5	81.7	76.6	0.628	88.5		
04(文化 1)	0.306	66.3	76.4	9.3	28.1	62.9	72.4	0.592	83.3	84.5	7.7
05(2)	0.377	81.6	84.2	22.2	33.5	75.0	79.3	0.555	78.2	83.7	6.2
1806(3)	0.340	73.6	89.0	24.3	30.6	68.6	83.9	0.561	79.0	86.1	10.7
07(4)	0.532	115.2	86.5	29.3	48.4	108.4	81.6	0.635	89.3	89.0	11.6
08(5)	0.500	108.3	82.1	34.3	46.6	104.3	78.1	0.714	100.5	89.5	10.9
09(6)	0.248	53.7	82.8	33.7	23.0	51.6	79.1	0.696	97.9	89.3	11.2
10(7)	0.275	59.5	74.6	28.5	25.6	57.4	71.6	0.573	80.8	87.3	12.6
1811(8)	0.356	77.1	75.1	29.8	32.9	73.8	72.0	0.555	78.2	84.2	9.7
12(9)	0.343	74.3	82.0	23.4	31.8	71.2	78.2	0.561	79.0	83.7	8.4
13(10)	0.513	111.1	87.6	16.5	47.4	106.2	83.2	0.604	85.1	86.4	9.5
14(11)	0.406	87.9	93.9	16.5	36.9	82.6	88.6	0.677	95.4	87.5	8.2
15(12)	0.405	87.7	98.2	11.3	36.7	82.1	92.2	0.671	94.5	90.5	6.5
1816(13)	0.500	108.3	92.8	10.4	45.1	101.0	86.5	0.592	83.3	89.5	8.2
17(14)	0.443	95.9	89.0	16.4	39.7	88.9	82.6	0.671	94.5	84.0	13.3
18(文政 1)	0.389	84.2	85.0	20.6	34.9	78.1	78.7	0.567	79.9	78.2	15.2
19(2)	0.318	68.9	77.9	15.5	28.2	63.1	72.0	0.482	67.9	79.0	15.8

付表 6-1 (その2) 勝山と大阪の米価動向 1781~1922

年次	勝山米価				同銀建換算			大阪米価			
	(石につき円錢) 円 錢	指数 (1781 -85= 100)	同5 カ年 移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	(石につき銀匁)	指数 (1781 -85= 100)	同5 カ年 移動 平均	(石につき円錢) 円 錢	指数 (1781 -85= 100)	同5 カ年 移動 平均	5カ年 移動 変動 係数
1820(文政 3)	0.312	67.6	73.5	8.9	27.9	62.6	67.8	0.464	65.3	77.1	13.1
1821(4)	0.336	72.8	79.4	24.5	30.0	67.3	73.5	0.622	87.6	77.7	13.3
22(5)	0.342	74.1	93.8	34.2	30.4	68.1	87.6	0.604	85.1	81.8	11.6
23(6)	0.526	113.9	99.3	28.8	47.4	106.3	95.0	0.586	82.5	86.6	3.2
24(7)	0.649	140.5	102.1	25.4	59.8	133.9	98.6	0.628	88.5	89.3	8.1
25(8)	0.440	95.3	107.5	19.5	44.5	99.7	105.1	0.635	89.3	89.0	8.5
1826(9)	0.400	86.6	123.2	35.5	38.1	85.3	121.3	0.720	101.4	91.4	7.5
27(10)	0.468	101.3	126.7	36.4	44.7	100.2	124.6	0.592	83.3	98.8	16.5
28(11)	0.888	192.3	139.9	31.7	83.6	187.4	136.0	0.671	94.5	102.4	15.3
29(12)	0.730	158.1	154.7	21.3	67.2	150.6	150.2	0.891	125.4	106.2	16.5
30(天保 1)	0.744	161.1	164.4	9.9	69.9	156.5	158.9	0.763	107.4	109.3	12.2
1831(2)	0.742	160.7	152.8	7.4	69.7	156.1	147.1	0.854	120.3	117.0	11.8
32(3)	0.692	149.8	143.0	15.3	64.4	144.2	137.6	0.702	98.8	121.8	16.6
33(4)	0.620	134.3	145.4	17.1	57.3	128.3	139.3	0.946	133.2	122.3	16.2
34(5)	0.504	109.1	178.7	48.2	46.0	103.0	168.4	1.062	149.5	128.0	17.9
35(6)	0.800	173.2	179.0	48.1	73.7	165.1	167.7	0.781	110.0	157.7	33.4
1836(7)	1.510	327.0	188.8	43.6	134.5	301.4	175.6	1.055	148.6	162.5	31.3
37(8)	0.698	151.1	206.3	33.7	62.8	140.7	191.2	1.757	247.4	160.3	32.3
38(9)	0.847	183.4	201.8	36.1	75.0	168.1	186.4	1.116	157.2	157.7	35.0
39(10)	0.909	196.8	169.7	12.0	80.6	180.6	157.6	0.982	138.3	146.7	42.6
40(11)	0.695	150.5	166.3	15.1	63.1	141.4	155.4	0.689	97.1	119.1	23.2
1841(12)	0.770	166.7	156.6	16.7	70.1	157.1	149.7	0.665	93.6	106.2	18.0
42(13)	0.619	134.0	159.6	20.2	57.9	129.7	157.4	0.775	109.1	100.3	8.1
43(14)	0.623	134.9	182.8	30.9	62.3	139.6	184.2	0.659	92.8	105.7	12.2
44(弘化 1)	0.979	212.0	186.8	29.8	97.9	219.3	191.5	0.775	109.1	112.4	12.2
45(2)	1.230	266.3	201.3	23.5	123.0	275.5	208.2	0.879	123.7	114.4	12.1
1846(3)	0.863	186.9	212.5	15.0	86.3	193.3	219.8	0.903	127.1	120.1	5.7
47(4)	0.952	206.2	220.9	16.6	95.2	213.3	228.5	0.848	119.4	123.0	2.4
48(嘉永 1)	0.883	191.2	239.7	30.3	88.3	197.8	241.6	0.860	121.1	131.3	14.5
49(2)	1.172	253.8	251.8	26.3	117.2	262.5	251.8	0.879	123.7	138.3	16.8
50(3)	1.665	360.5	260.6	23.6	152.3	341.3	259.3	1.171	164.9	138.3	16.8
1851(4)	1.142	247.3	273.0	17.9	109.1	244.3	271.2	1.153	162.4	141.2	15.1
52(5)	1.155	250.1	265.1	21.0	111.8	250.5	263.0	0.848	119.4	143.5	13.6
53(6)	1.170	253.4	223.6	19.0	115.0	257.6	227.4	0.964	135.7	133.2	14.3
54(安政 1)	0.989	214.2	208.9	21.5	98.7	221.1	216.1	0.958	134.9	123.4	9.1
55(2)	0.707	153.1	212.6	23.4	73.0	163.6	225.3	0.805	113.4	125.6	9.0
1856(3)	0.802	173.7	221.2	27.5	83.8	187.7	239.5	0.805	113.4	132.6	17.8
57(4)	1.242	268.9	250.7	34.6	132.4	296.6	274.9	0.927	130.6	139.5	20.6

付表 6-1 (その3) 勝山と大阪の米価動向 1781~1922

年次	勝山米価				同銀建換算			大阪米価			
	(石につき円 錢) 円 錢	指数 (1781 -85= 100)	同5年 カ年 移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	(石に つき銀 匁)	指数 (1781 -85= 100)	同5年 カ年 移動 平均	(石に つき円 錢) 円 錢	指数 (1781 -85= 100)	同5年 カ年 移動 平均	5カ年 移動 変動 係数
1858(安政 5)	1.368	296.2	306.1	31.6	146.5	328.2	342.4	1.214	171.0	159.6	24.6
59(6)	1.669	361.4	341.8	18.3	177.7	398.2	388.6	1.202	169.2	181.3	20.5
60(万延 1)	1.986	430.1	348.1	15.6	223.8	501.4	404.1	1.519	213.9	198.8	13.3
1861(文久 1)	1.626	352.1	351.4	14.5	186.8	418.5	421.4	1.574	221.6	210.5	11.3
62(2)	1.389	300.8	363.5	16.6	167.1	374.3	462.6	1.550	218.2	233.0	12.0
63(3)	1.443	312.5	431.6	45.2	185.1	414.7	603.2	1.629	229.4	287.3	39.6
64(元治 1)	1.949	422.0	679.7	80.1	269.7	604.3	988.5	2.001	281.8	506.5	92.0
65(慶応 1)	3.558	770.5	777.2	64.6	537.6	1204.3	1143.8	3.447	485.4	740.9	76.7
1866(2)	7.356	1592.9	897.9	47.8	1046.8	2344.9		9.359	1317.9	852.7	57.7
67(3)	3.640	788.2	1154.4	39.5	513.6	1150.5		9.871	1390.0	1067.4	38.2
68(明治 1)	4.230	916.0	1202.5	34.6				5.601	788.7	1224.4	20.2
69(2)	7.870	1704.2	1004.8	41.8				9.621	1354.8	1105.5	29.2
70(3)	4.670	1011.3	933.7	52.4				9.023	1270.6	930.8	39.1
1871(4)	2.790	604.2	880.5	57.5				5.137	723.4	896.9	43.2
72(5)	2.000	433.1	742.3	34.9				3.667	516.3	820.1	37.0
73(6)	3.000	649.6	762.2	37.7				4.399	619.4	752.7	26.1
74(7)	4.680	1013.4	768.7	36.9				6.894	970.8	742.6	26.9
75(8)	5.130	1110.9	827.6	26.5				6.632	933.8	781.8	20.4
1876(9)	2.940	636.6	905.6	23.1				4.777	672.7	807.2	16.8
77(10)	3.360	727.6	988.7	32.1				5.058	712.2	769.4	13.1
78(11)	4.800	1039.4	1208.3	52.9				5.302	746.6	861.2	34.8
79(12)	6.600	1429.2	1436.1	40.8				5.552	781.8	984.4	33.3
80(13)	10.200	2208.8	1515.8	31.9				9.890	1392.6	1058.1	27.5
1881(14)	8.200	1775.7	1443.1	40.8				9.151	1288.7	1078.4	24.7
82(15)	5.200	1126.0	1356.4	45.9				7.675	1080.8	1065.1	26.8
83(16)	3.120	675.6	1101.8	37.3				6.022	847.9	952.8	24.1
84(17)	4.600	996.1	914.7	18.5				5.082	715.6	841.8	17.3
85(18)	4.320	935.5	849.7	14.6				5.900	830.8	762.7	9.5
1886(19)	3.880	840.2	867.9	11.0				5.210	733.7	719.2	10.2
87(20)	3.700	801.2	885.2	14.4				4.869	685.6	737.6	11.3
88(21)	3.540	766.6	919.0	17.6				4.478	630.6	791.6	23.3
89(22)	5.000	1082.7	1036.8	25.9				5.735	807.6	830.8	22.9
90(23)	5.100	1104.4	1123.4	21.6				7.815	1100.5	888.7	20.1
1891(24)	6.600	1429.2	1256.0	13.4				6.601	929.6	1013.1	16.8
92(25)	5.700	1234.3	1327.9	11.4				6.925	975.1	1084.2	12.3
93(26)	6.600	1429.2	1423.1	8.7				8.895	1252.6	1105.7	13.1
94(27)	6.660	1442.2	1570.4	22.6				8.261	1163.2	1180.2	10.7
95(28)	7.300	1580.8	1730.6	20.0				8.578	1207.9	1286.1	10.3

付表 6-1 (その4) 勝山と大阪の米価動向 1781~1922

年次	勝山米価				同銀建換算			大阪米価			
	(石につき円錢) 円 銭	指数 (1781 -85=100)	同5 カ年 移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	(石につき銀匁)	指数 (1781 -85=100)	同5 カ年 移動 平均	(石につき円錢) 円 銭	指数 (1781 -85=100)	同5 カ年 移動 平均	5カ年 移動 変動 係数
1896(明治29)	10.000	2165.4	1856.2	17.4				9.249	1302.4	1444.3	24.9
97(30)	9.400	2035.5	2104.8	18.7				10.683	1504.3	1490.2	22.0
98(31)	9.500	2057.2	2260.7	11.9				14.514	2043.8	1557.9	18.5
99(32)	12.400	2685.1	2447.0	18.4				9.890	1392.6	1617.9	15.5
1900(33)	10.900	2360.3	2395.0	21.6				10.982	1546.4	1652.6	14.7
1901(34)	14.300	3096.6	2416.6	20.8				11.378	1602.2	1621.8	11.3
02(35)	8.200	1775.7	2382.0	20.4				11.915	1677.8	1705.5	8.4
03(36)	10.000	2165.4	2472.9	21.1				13.422	1890.0	1733.7	6.6
04(37)	11.600	2511.9	2421.0	18.7				12.861	1811.0	1797.3	6.2
05(38)	13.000	2815.1	2498.9	13.2				11.982	1687.3	1880.1	7.9
1906(39)	13.100	2836.7	2672.2	12.7				13.636	1920.1	1914.4	8.9
07(40)	10.000	2165.4	2767.4	12.6				14.856	2091.9	1889.7	10.4
08(41)	14.000	3031.6	2810.7	13.1				14.642	2061.9	1895.7	9.9
09(42)	13.800	2988.3	2936.3	16.1				11.982	1687.3	1986.4	14.4
10(43)	14.000	3031.6	3412.7	19.4				12.196	1717.4	2123.9	21.7
1911(44)	16.000	3464.7	3629.3	18.9				16.857	2373.7	2295.7	25.2
12(大正 1)	21.000	4547.4	3495.0	25.2				19.737	2779.2	2386.1	20.4
13(2)	19.000	4114.3	3386.8	28.9				20.743	2921.0	2392.3	19.9
14(3)	10.700	2317.0	3304.5	29.9				15.191	2139.2		
15(4)	11.500	2490.3	3282.8	29.1				12.416	1748.3		
1916(5)	14.100	3053.3	4105.7	59.7							
17(6)	20.500	4439.2	6048.1	66.5							
18(7)	38.000	8228.7	6762.7	52.0							
19(8)	55.550	12029.0	7754.4	36.7							
20(9)	28.000	6063.2	7949.3	32.5							
1921(10)	37.000	8012.1									
22(11)	25.000	5413.6									

(出所) 「米価一覧表」(竹内修氏〔福井県勝山市鹿谷町東遅羽口〕所蔵)、新保博「銭相場の変動, 1789-1867年 — 一つの数量的接近 —」『国民経済雑誌』137巻1号(1978年)、斎藤修「大阪卸売物価指数 1757-1915年」『三田学会雑誌』68巻10号(1975年)。

付表 6-2 (その1) 勝山米価と大阪米価の比および相関

年次	勝山/大阪比			同銀建		同円建		「5カ年移動相関係数」						米価の地域間変動係数	
	指数	同5カ年移動平均	5カ年移動変動係数	指数	同5カ年移動平均	指数	同5カ年移動平均	5カ年移動単純相関係数	同5カ年移動平均	勝山残差	大阪残差	5カ年移動残差相関係数	同5カ年移動平均	地域間変動係数	最小2乗回帰値
1781(天明 1)	1.31			1.31		0.85									
82(2)	0.95			0.93		0.61									
83(3)	0.99	1.04	21.5	0.99	1.03	0.65	0.67	0.36		16.9	17.7				
84(4)	0.74	1.02	19.2	0.74	1.01	0.48	0.66	0.08		-9.7	24.2				
85(5)	1.20	0.97	24.9	1.20	0.96	0.78	0.63	-0.72	-0.20	3.5	-21.5	-0.49			
1786(6)	1.21	0.94	25.9	1.20	0.94	0.78	0.61	-0.52	-0.19	18.7	-11.0	-0.75			
87(7)	0.71	0.97	22.5	0.67	0.97	0.46	0.63	-0.20	-0.06	-6.8	26.6	-0.63	-0.42		
88(8)	0.87	0.89	21.4	0.88	0.88	0.57	0.58	0.40	0.17	-1.8	-0.3	-0.19	-0.24		
89(寛政 1)	0.90	0.84	11.4	0.90	0.83	0.58	0.55	0.75	0.38	1.2	-5.7	-0.04	-0.03		
90(2)	0.78	0.83	13.7	0.77	0.83	0.51	0.54	0.44	0.49	-15.7	-15.5	0.41	0.18		
1791(3)	0.95	0.80	14.8	0.95	0.80	0.62	0.52	0.50	0.32	4.2	-12.0	0.32	0.18		
92(4)	0.66	0.82	17.6	0.65	0.82	0.43	0.54	0.36	0.06	1.6	24.6	0.38	0.17		
93(5)	0.73	0.90	22.7	0.72	0.90	0.48	0.58	-0.43	-0.09	-4.5	13.2	-0.17			
94(6)	1.00	0.90	22.7	1.00	0.89	0.65	0.58	-0.56	-0.13	-4.7	-17.5	-0.08			
95(7)	1.16	0.95	16.3	1.16	0.94	0.75	0.62	-0.33		12.8	-7.7				
1796(8)	0.93	0.99	10.4	0.92	0.97	0.61	0.64	0.29		4.2	9.5				
97(9)	0.92			0.90	0.93	0.60									
98(10)	0.92			0.90	0.91	0.60									
99(11)				0.77	0.91										
1800(12)				1.08	0.90										
1801(享和 1)				0.93	0.91										
02(2)	0.81			0.81	0.92	0.53									
03(3)	0.95			0.97	0.90	0.62									
04(文化 1)	0.80	0.91	11.4	0.81	0.88	0.52	0.59	0.13		-10.2	-1.2				
05(2)	1.04	1.00	18.3	0.96	0.95	0.68	0.65	0.64		-2.6	-5.5				
1806(3)	0.93	1.03	17.8	0.84	0.97	0.61	0.67	0.75	0.39	-15.4	-7.0	0.76			
07(4)	1.29	0.98	27.9	1.19	0.92	0.84	0.64	0.14	0.42	28.7	0.3	0.19			
08(5)	1.08	0.92	31.5	1.04	0.87	0.70	0.60	0.30	0.36	26.2	11.0	0.29	0.33		
09(6)	0.55	0.93	31.3	0.56	0.84	0.36	0.60	0.27	0.15	-29.1	8.6	0.14	0.09		
10(7)	0.74	0.86	24.8	0.72	0.79	0.48	0.56	0.32	0.21	-15.0	-6.5	0.24	0.07		
1811(8)	0.99	0.90	31.5	0.70	0.82	0.64	0.59	-0.30	0.21	1.9	-6.0	-0.43	-0.05		
12(9)	0.94	0.98	21.1	0.91	0.89	0.61	0.64	0.44	0.15	-7.7	-4.6	0.10	-0.18		
13(10)	1.31	1.02	16.1	1.21	0.92	0.85	0.66	0.33	-0.11	23.5	-1.4	-0.30	-0.34		
14(11)	0.92	1.08	18.9	0.89	1.01	0.60	0.70	-0.06	-0.08	-5.9	7.9	-0.49	-0.36		
15(12)	0.93	1.09	17.7	0.89	1.03	0.60	0.71	-0.94	-0.05	-10.5	4.0	-0.60	-0.36		
1816(13)	1.30	1.04	14.7	1.15	0.98	0.84	0.68	-0.18	0.05	15.5	-6.2	-0.49	-0.21		
17(14)	1.02	1.06	13.2	0.99	0.98	0.66	0.69	0.60	0.22	6.9	10.5	0.10	0.02		
18(文政 1)	1.05	1.08	11.2	0.99	0.98	0.69	0.70	0.82	0.51	-0.7	1.7	0.45	0.11		
19(2)	1.01	0.99	9.2	0.90	0.91	0.66	0.64	0.80	0.63	-9.0	-11.2	0.62	0.17		

付表 6-2 (その2) 勝山米価と大阪米価の比および相関

年次	勝山/大阪比			同 銀建		同 円建		「5ヵ年移動相関係数」						米価の地域間変動係数	
	指数	同5ヵ年移動平均	5ヵ年移動変動係数	指数	同5ヵ年移動平均	指数	同5ヵ年移動平均	5ヵ年移動単純相関係数	同5ヵ年移動平均	勝山残差	大阪残差	5ヵ年移動残差相関係数	同5ヵ年移動平均	地域間変動係数	最小2乗回帰値
1820(文政 3)	1.03	0.96	10.7	0.89	0.88	0.67	0.62	0.53	0.60	-5.9	-11.9	-0.11	0.12		
1821(4)	0.83	1.03	21.2	0.80	0.94	0.54	0.67	0.39	0.45	-6.7	10.0	-0.20	-0.08		
22(5)	0.87	1.14	29.0	0.83	1.06	0.57	0.74	0.47	0.24	-19.7	3.3	-0.19	-0.36		
23(6)	1.38	1.15	28.7	1.28	1.11	0.90	0.75	0.06	0.04	14.6	-4.1	-0.50	-0.36		
24(7)	1.59	1.15	28.0	1.51	1.12	1.03	0.75	-0.24	-0.03	38.5	-0.9	-0.79	-0.37		
25(8)	1.07	1.22	23.1	1.11	1.20	0.69	0.79	-0.45	-0.05	-12.3	0.3	-0.10	-0.36		
1826(9)	0.85	1.35	34.5	0.87	1.34	0.56	0.88	0.03	0.01	-36.6	10.0	-0.25	-0.29		
27(10)	1.22	1.29	34.8	1.24	1.30	0.79	0.84	0.38	0.14	-25.4	-15.5	-0.16	-0.12		
28(11)	2.03	1.37	31.8	1.96	1.37	1.32	0.89	0.32	0.14	52.4	-7.9	-0.16	-0.15		
29(12)	1.26	1.47	22.7	1.31	1.48	0.82	0.96	0.41	0.05	3.4	19.2	0.06	-0.17		
30(天保 1)	1.50	1.53	19.8	1.49	1.52	0.98	0.99	-0.46	-0.19	-3.3	-1.9	-0.24	-0.29		
1831(2)	1.34	1.32	15.7	1.39	1.32	0.87	0.86	-0.41	-0.42	7.9	3.3	-0.37	-0.37		
32(3)	1.52	1.22	28.0	1.47	1.20	0.99	0.79	-0.84	-0.44	6.8	-23.0	-0.75	-0.45		
33(4)	1.01	1.23	29.0	0.97	1.21	0.66	0.80	-0.81	-0.37	-11.2	10.8	-0.55	-0.50		
34(5)	0.73	1.41	40.3	0.71	1.32	0.47	0.91	0.29	-0.33	-69.6	21.5	-0.33	-0.52		
35(6)	1.58	1.22	53.9	1.53	1.15	1.02	0.80	-0.10	-0.22	-5.7	-47.8	-0.49	-0.46		
1836(7)	2.20	1.26	51.8	1.92	1.17	1.43	0.82	-0.19	-0.09	138.2	-13.9	-0.47	-0.46		
37(8)	0.61	1.40	41.6	0.61	1.33	0.40	0.91	-0.30	-0.18	-55.2	87.1	-0.47	-0.55		
38(9)	1.17	1.39	41.6	1.09	1.32	0.76	0.90	-0.15	-0.02	-18.4	-0.5	-0.54	-0.53		
39(10)	1.42	1.31	34.3	1.50	1.26	0.93	0.85	-0.17	0.16	27.1	-8.4	-0.78	-0.45		
40(11)	1.55	1.43	17.4	1.49	1.39	1.01	0.93	0.68	0.29	-15.8	-22.0	-0.36	-0.34		
1841(12)	1.78	1.49	13.5	1.63	1.44	1.16	0.97	0.72	0.48	10.1	-12.5	-0.08	-0.14		
42(13)	1.23	1.59	17.5	1.22	1.56	0.80	1.03	0.38	0.64	-25.6	8.8	0.06	0.10		
43(14)	1.45	1.71	21.7	1.37	1.72	0.95	1.11	0.78	0.65	-47.9	-12.9	0.44	0.29		
44(弘化 1)	1.94	1.65	23.2	2.06	1.70	1.26	1.07	0.66	0.50	25.2	-3.3	0.42	0.43		
45(2)	2.15	1.75	17.3	2.32	1.82	1.40	1.14	0.69	0.44	65.1	9.3	0.63	0.52		
1846(3)	1.47	1.77	15.6	1.52	1.87	0.96	1.15	0.00	0.46	-25.6	7.0	0.61	0.59		
47(4)	1.73	1.80	16.5	1.80	1.87	1.12	1.17	0.05	0.48	-14.7	-3.6	0.49	0.62		
48(嘉永 1)	1.58	1.80	17.0	1.64	1.82	1.03	1.17	0.92	0.48	-48.5	-10.1	0.79	0.61		
49(2)	2.05	1.81	16.1	2.08	1.84	1.33	1.18	0.76	0.60	2.0	-14.6	0.60	0.59		
50(3)	2.19	1.89	16.5	2.06	1.92	1.42	1.23	0.67	0.71	100.0	26.6	0.57	0.59		
1851(4)	1.52	1.94	13.5	1.59	1.97	0.99	1.26	0.59	0.63	-25.7	21.1	0.52	0.49		
52(5)	2.09	1.85	15.9	2.20	1.89	1.36	1.20	0.60	0.62	-15.0	-24.1	0.48	0.50		
53(6)	1.87	1.68	17.5	1.94	1.78	1.21	1.10	0.55	0.65	29.8	2.6	0.27	0.52		
54(安政 1)	1.59	1.69	17.4	1.68	1.81	1.03	1.10	0.68	0.71	5.3	11.5	0.64	0.53		
55(2)	1.35	1.68	16.8	1.50	1.83	0.88	1.09	0.85	0.77	-59.5	-12.2	0.68	0.49		
1856(3)	1.53	1.65	16.1	1.72	1.84	1.00	1.07	0.87	0.85	-47.6	-19.2	0.58	0.56		
57(4)	2.06	1.76	19.1	2.31	2.00	1.34	1.15	0.91	0.87	18.3	-8.9	0.28	0.47		

付表 6-2 (その3) 勝山米価と大阪米価の比および相関

年次	勝山/大阪比			同 銀建		同 円建		「5ヵ年移動相関係数」						相関係数	
	指数	同5ヵ年移動平均	5ヵ年移動変動係数	指数	同5ヵ年移動平均	指数	同5ヵ年移動平均	同5ヵ年移動平均	同5ヵ年移動平均	勝山残差	大阪残差	5ヵ年移動残差相関係数	同5ヵ年移動平均	地域間変動係数	最小2乗回帰値
1858(安政 5)	1.73	1.89	13.4	1.98	2.21	1.13	1.23	0.95	0.75	-9.8	11.3	0.63	0.46		
59(6)	2.14	1.91	12.3	2.48	2.22	1.39	1.24	0.78	0.53	19.7	-12.0	0.20	0.52		
60(万延 1)	2.01	1.77	17.4	2.56	2.12	1.31	1.15	0.26	0.43	81.9	15.1	0.59	0.65		
1861(文久 1)	1.59	1.70	21.2	1.76	2.09	1.03	1.10	-0.26	0.44	0.7	11.2	0.88	0.59		
62(2)	1.98	1.57	16.9	1.80	2.03	0.90	1.02	0.42	0.48	-62.7	-14.8	0.93	0.74		
63(3)	1.36	1.48	7.4	1.87	2.01	0.89	0.96	0.99	0.58	-119.1	-57.9	0.37	0.72		
64(元治 1)	1.50	1.41	10.2	2.16	1.97	0.97	0.91	0.99	0.77	-257.7	-224.7	0.92	0.66		
65(慶応 1)	1.59	1.24	32.5	2.44	1.79	1.03	0.81	0.77	0.81	-6.8	-255.5	0.50	0.58		
1866(2)	1.21	1.20	33.2	1.60		0.79	0.78	0.69	0.68	695.0	465.1	0.56	0.61		
67(3)	0.57	1.16	31.9	0.87		0.37	0.75	0.59	0.59	-366.1	322.7	0.56	0.51		
68(明治 1)	1.16	1.00	30.3			0.76	0.65	0.36	0.61	-286.5	-435.7	0.51	0.57		
69(2)	1.26	0.92	30.6			0.82	0.60	0.54	0.66	699.4	249.3	0.43	0.61		
70(3)	0.80	0.98	22.0			0.52	0.64	0.89	0.72	77.5	339.9	0.78	0.68		
1871(4)	0.84	0.96	20.5			0.54	0.62	0.90	0.84	-276.3	-173.5	0.77	0.77		
72(5)	0.84	0.91	13.5			0.55	0.59	0.92	0.93	-309.2	-303.8	0.90	0.88		
73(6)	1.05	0.99	15.4			0.68	0.64	0.95	0.94	-112.6	-133.3	0.97	0.90		
74(7)	1.04	1.01	12.9			0.68	0.66	0.98	0.92	244.7	228.2	0.96	0.94		
75(8)	1.19	1.05	8.4			0.77	0.68	0.96	0.85	283.2	152.1	0.91	0.89	10.6	14.5
1876(9)	0.95	1.12	15.8			0.62	0.73	0.78	0.84	-268.9	-134.5	0.95	0.88	9.3	14.2
77(10)	1.02	1.28	27.7			0.66	0.83	0.57	0.83	-261.2	-57.2	0.68	0.86	18.5	13.9
78(11)	1.39	1.35	27.5			0.91	0.88	0.93	0.80	-168.9	-114.6	0.88	0.85	16.3	13.7
79(12)	1.83	1.44	20.6			1.19	0.94	0.92	0.80	-6.9	-202.6	0.89	0.82	10.9	13.4
80(13)	1.59	1.45	20.1			1.03	0.94	0.81	0.87	692.9	334.5	0.84	0.86	10.8	13.1
1881(14)	1.38	1.33	31.2			0.90	0.86	0.78	0.85	332.6	210.3	0.82	0.81	13.4	12.8
82(15)	1.04	1.24	25.4			0.68	0.81	0.90	0.76	-230.4	15.6	0.85	0.70	15.2	12.6
83(16)	0.80	1.15	21.7			0.52	0.75	0.85	0.53	-426.2	-104.8	0.66	0.61	15.8	12.3
84(17)	1.39	1.10	19.5			0.91	0.72	0.47	0.51	81.4	-126.1	0.30	0.55	13.3	12.0
85(18)	1.13	1.13	18.9			0.73	0.73	-0.33	0.49	85.8	68.0	0.43	0.55	15.3	11.7
1886(19)	1.15	1.21	8.9			0.74	0.79	0.64	0.49	-27.7	14.4	0.48	0.53	12.8	11.5
87(20)	1.17	1.20	7.2			0.76	0.78	0.84	0.54	-84.0	-52.1	0.89	0.50	10.4	11.2
88(21)	1.22	1.17	10.4			0.79	0.76	0.85	0.74	-152.4	-161.0	0.56	0.45	10.5	10.9
89(22)	1.34	1.25	15.9			0.87	0.81	0.71	0.70	45.9	-23.2	0.12	0.31	10.8	10.6
90(23)	1.00	1.27	15.2			0.65	0.83	0.66	0.57	-19.1	211.9	0.19	0.12	7.3	10.4
1891(24)	1.54	1.26	16.1			1.00	0.82	0.44	0.52	173.2	-83.5	-0.21	0.03	10.9	10.1
92(25)	1.27	1.24	15.9			0.82	0.80	0.21	0.53	-93.5	-109.1	-0.05	-0.05	9.6	9.8
93(26)	1.14	1.30	11.3			0.74	0.84	0.58	0.54	6.1	146.9	0.09	-0.16	9.5	9.5
94(27)	1.24	1.32	15.1			0.81	0.86	0.75	0.57	-128.2	-17.0	-0.25	-0.23	7.8	9.3
95(28)	1.31	1.34	14.7			0.85	0.87	0.71	0.55	-149.9	-78.2	-0.38	-0.36	7.8	9.0

付表 6-2 (その4) 勝山米価と大阪米価の比および相関

年次	勝山/大阪比			同 銀建		同 円建		「5ヵ年移動相関係数」						米価の地域間変動係数	
	指数	同5ヵ年移動平均	5ヵ年移動変動係数	指数	同5ヵ年移動平均	指数	同5ヵ年移動平均	5ヵ年移動単純相関係数	同5ヵ年移動平均	勝山残差	大阪残差	5ヵ年移動残差相関係数	同5ヵ年移動平均	地域間変動係数	最小2乗回帰値
1896(明治29)	1.66	1.31	18.0			1.08	0.85	0.58	0.34	309.2	-141.9	-0.57	-0.54	7.7	8.7
97(30)	1.35	1.45	24.3			0.88	0.94	0.10	0.11	-69.3	14.1	-0.72	-0.59	7.5	8.4
98(31)	1.01	1.50	23.1			0.65	0.97	-0.43	-0.13	-203.6	485.9	-0.80	-0.57	6.8	8.2
99(32)	1.93	1.55	25.5			1.25	1.01	-0.39	-0.34	238.2	-225.3	-0.48	-0.52	8.5	7.9
1900(33)	1.53	1.49	30.2			0.99	0.97	-0.51	-0.42	-34.6	-106.2	-0.28	-0.42	8.0	7.6
1901(34)	1.93	1.52	27.4			1.26	0.99	-0.47	-0.42	680.0	-19.6	-0.35	-0.34	6.0	7.3
02(35)	1.06	1.41	24.6			0.69	0.92	-0.29	-0.28	-606.3	-27.7	-0.21	-0.35	7.7	7.1
03(36)	1.15	1.44	25.3			0.75	0.94	-0.43	-0.30	-307.5	156.4	-0.40	-0.48	7.2	6.8
04(37)	1.39	1.35	18.4			0.90	0.88	0.31	-0.25	91.0	13.8	-0.49	-0.54	8.6	6.5
05(38)	1.67	1.34	19.0			1.08	0.87	-0.62	-0.29	316.2	-192.8	-0.92	-0.59	7.0	6.2
1906(39)	1.48	1.41	16.5			0.96	0.92	-0.23	-0.32	164.6	5.7	-0.66	-0.50	6.9	6.0
07(40)	1.04	1.48	19.0			0.67	0.97	-0.47	-0.35	-602.0	202.2	-0.49	-0.41	6.0	5.7
08(41)	1.47	1.50	20.0			0.96	0.98	-0.60	-0.04	220.9	166.2	0.05	-0.06	4.4	5.4
09(42)	1.77	1.50	20.1			1.15	0.98	0.16	0.19	52.0	-299.1	-0.01	0.24	4.0	5.1
10(43)	1.77	1.62	9.4			1.15	1.05	0.91	0.44	-381.1	-406.5	0.80		5.6	4.9
1911(44)	1.46	1.61	10.5			0.95	1.05	0.93	0.74	-164.6	78.0	0.85		5.2	4.6
12(大正1)	1.64	1.47	17.6			1.06	0.96	0.79		1052.4	393.1			3.3	4.3
13(2)	1.41	1.40	14.3			0.92	0.91	0.90		727.6	528.7			3.7	4.0
14(3)	1.08					0.70									
15(4)	1.42					0.93									
1916(5)															
17(6)															
18(7)															
19(8)															
20(9)															
1921(10)															
22(11)															

(出所) 「米価一覧表」(竹内修氏[福井県勝山市鹿谷町東遅羽口]所蔵)、斎藤修「大阪卸売物価指数 1757-1915年」

『三田学会雑誌』68巻10号(1975年)、新保博「銭相場の変動, 1789-1867年 — 一つの数量的接近 —」『国民経済雑誌』137巻1号(1978年)、三井文庫(中井信彦)編「近世後期における主要物価の動向」(日本学術振興会、1952年)、大蔵省編「大日本貨幣史」6巻(1877年および1878年)、小岩信竹「明治期における米価及び他商品価格の地域間連動性について」『(弘前大学)経済研究』4号(1981年)。

第7章 近世後期越前における 米価の地域差（その1）

はじめに

5章と6章では、越前勝山と大阪の米価資料を素材として、近世から近代にかけての米価の地域差とその解消の過程について若干の考察を行った。地域差の考察を目的としたので、勝山米価を大阪米価と比較対照させながら検討をすすめたのであるが、もちろん勝山米価だけをもって越前米価の代表であるとみなすことはできないであろう。勝山は九頭竜川に沿う福井の後背地であり、経済的にも両地は密接に関係していたことを思えば、はたして福井の米価変動はどのようなであったのかということがつぎの関心事となろう。本章は、主としては、この問題に答えようとする試みである。

1 資料と加工

越前勝山の米価は、福井県勝山市鹿谷町東遅羽口に在住の竹内修氏方に伝えられた「米価一覧表」に拠るものである。資料の性格その他については、5章および6章で述べたところであるから、ここではつぎの点

だけを指摘するにとどめたい。すなわち勝山米価は、実際に取引された際の売買価格であり、また貫文表示がとられているところからみて錢建であったということである。

福井米価は「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額區別調」¹⁾に依拠している。この資料は「松平文庫」に収められてはいるが、資料の性格は定かでなく、おそらくは明治にはいつてから松平家ゆかりの人が、なんらか原資料から抽出して覚書としたものようである。資料は「宝暦十二年以降毎年二月十六日十二月十六日切米直段、但壹俵〔四斗五升六合〕の直段なり以下皆同じ」のような書出しで始まり、以下年々の米価を掲げている。切米直段とあるからには、当時の相場を反映していたとはいえ、一種の換算米価であって、これをもって実勢米価であるとすることはできないであろう。資料には、1762（宝暦12）年以降幕末までの切米直段が掲げられているが、残念ながら1838（天保9）年から1841（天保12）年までの4年間にわたる欠年が存在する。なお米価は銀匁表示であるからむろん銀建である²⁾。

つぎに大阪における米価は、三井文庫編『近世後期における主要物價の動態』³⁾のなかに収録されているものに依拠した。大阪の場合についても資料の性格その他については5章で述べたところであるから、ここでは、大阪米価が銀建表示の相場であることを指摘するにとどめたい。なお、福井、大阪いずれの場合も年々の米価は春暮ごとの表示であったり月毎表示であったり、また年によっては最高価格と最低価格が表示されている場合もあり、さまざまであるが、ここでは比較を容易にするために、いずれの年についても単一の米価となるよう適宜平均することとした。

さて加工の方法について簡単に述べておきたい。まず勝山米価、福井

米価、大阪米価ともに1781（天明元）年から1785（天明5）年までの年毎の米価の単純平均を100とし、これをもちいて年々の米価を指数化し、各年値とした。これは図7-1 Aの中段と下段に勝山と福井の米価が、図7-1 Bの中段と下段に福井と大阪の米価が、図7-1 Cの中段と下段に勝山と大阪の米価がそれぞれ図示されている。三者とも趨勢線に絡みつく形の変動の激しい折れ線グラフ（点線）がそれである（半対数グラフ）。つぎに趨勢線を求めるために、勝山米価、福井米価、大阪米価ともに上記各年値の5ヵ年移動平均値を算出し、これを図7-1 Aの中段と下段に勝山と福井のもの、図7-1 Bの中段と下段に福井と大阪のもの、図7-1 Cの中段と下段に勝山と大阪のものというように、比較的変動の少ない折れ線グラフ（実線）として図示してある（半対数グラフ）。

本章においても5章（および6章）同様、勝山米価、福井米価、大阪米価三者相互の相対的変動だけを問題としたのであるが、ちなみに三者米価の1781（天明元）年における絶対水準に触れておくとつぎのとおりである。この年勝山米価は、錢建1石あたり4貫300文であるが、いまこれを便宜的にこの年の大阪錢相場⁴⁾錢1貫文につき銀9.75匁をもちいて銀建に換算すると1石あたり41.925匁となる。またこの年福井米価は0.456石あたり銀建22.275匁であるから、1石あたりに換算するとおよそ48.849匁となる。さらに大阪米価は銀建51.1匁であるから、大阪米価を基準にすると福井米価は大阪米価のおよそ95.6%、勝山米価は大阪米価のおよそ82.0%となり、米価の絶対水準は大阪、福井、勝山の順に高かったと一応はいえそうである。

さて本題にもどって、つぎの系列は勝山／福井比、福井／大阪比、勝山／大阪比である。勝山／福井比を例にとっていえば、これは勝山米価

の各年指数を福井米価の各年指数で除したものである（単位1）。勝山／福井比等の相対価格についても、各年値とその5ヵ年移動平均値とを計算し、図7-1 A上段には勝山／福井比を、図7-1 B上段には福井／大阪比を、図7-1 C上段には勝山／大阪比をグラフ化してある。

（なお、勝山／福井比と勝山／大阪比のグラフには、幕末期に修正5ヵ年移動平均値の系列が描き込まれているが、この点については後述する）。

図7-2のグラフは、勝山米価、福井米価、大阪米価それぞれの「5ヵ年移動変動係数」である。

最後に、図7-3のグラフには、勝山／福井比、福井／大阪比、勝山／大阪比それぞれの各年値について「5ヵ年移動変動係数」を算出したものが描かれている。

II ファクト・ファインディングス

本節の課題は、前節で得られた図7-1 Aから図7-3までの結果について、どのような事実が観察されるかということについて論ずることである。

まず図7-1 Bにみられる福井米価と大阪米価相互の関係、図7-1 Cにみられる勝山米価と大阪米価相互の関係について検討すると、おおむねつぎのような事実が観察される。

観察事実〔1〕

越前米価（福井米価と勝山米価）は全期をつうじて大阪米価と類似の波動を描いている。さらに詳しく観察すると、文政（1818～29年）前期以前においては、いずれの米価も、天明期（1781～88年）の高水準を別とすれば、不変ないしはやや下降の趨勢にある。けれども、

図7-1A 勝山と福井の米価

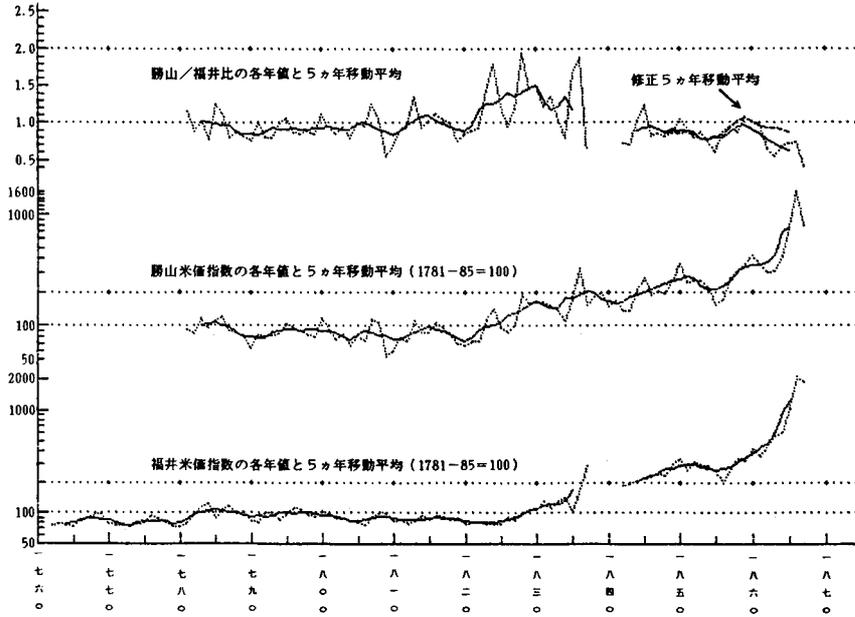


図7-1B 福井と大阪の米価

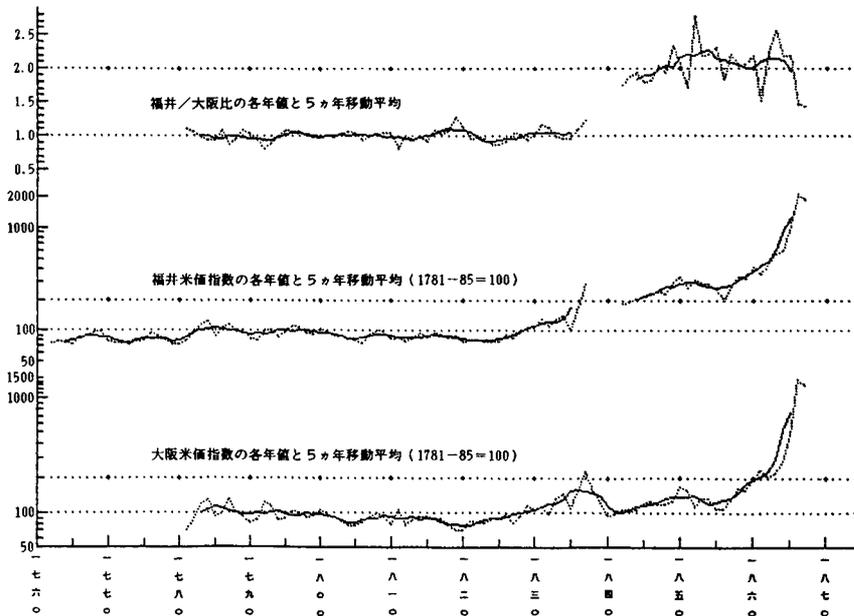
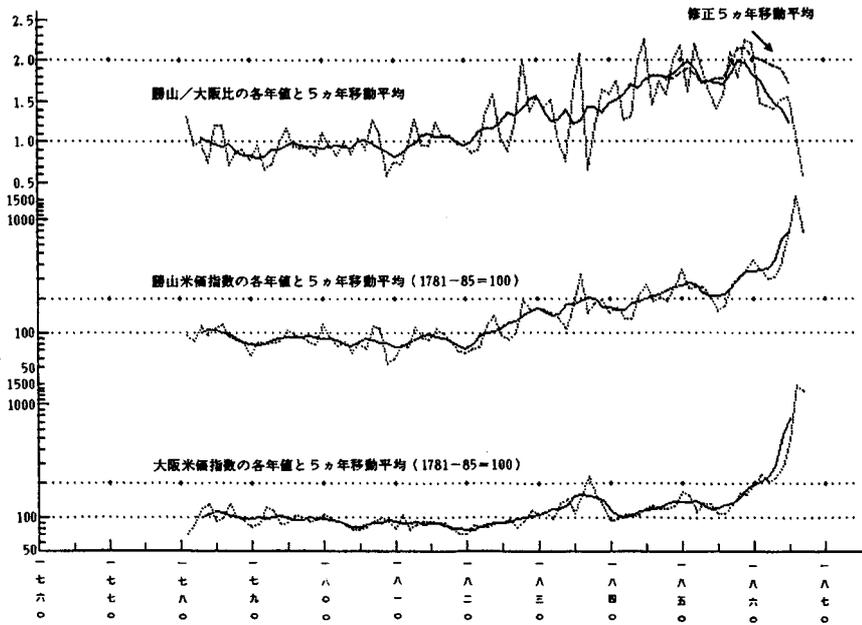


図7-1C 勝山と大阪の米価



文政前期以降になるといずれの米価も上昇傾向が顕著となっているから、米価の変動においては文政前期が転換点であったといえることができる。

観察事実〔2〕

文政（1818～29年）前期以前については、越前米価（福井米価と勝山米価）と大阪米価は基本的には同じような動向を示しているが、文政前期以降になると越前米価は大阪米価に比べて上昇圧力が顕著となる。しかし、天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）前半および幕末最後の10年等の時期においては、大阪米価の上昇圧力が目につく。

つぎに図7-1Bにおける福井/大阪比、図7-1Cにおける勝山/大阪比の系列を検討してみるとつぎのような事実が観察されよう。以下

では福井／大阪比と勝山／大阪比を両者まとめて越前／大阪比と呼ぶことにする。

観察事実〔3〕

越前／大阪比は文政（1818～29年）前期以前については不変（ないしはわずかな上昇）の趨勢と考えられるが、文政前期以降になると顕著な上昇趨勢を示す。しかし天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）前半および幕末期等の時期においては、越前／大阪比にやや下降の傾向がみられる。なおこれらの事実は、さきの観察事実〔2〕に異なる表現をあたえたものといえよう。

ところで図7-1Aに描かれている勝山／福井比の系列と図7-1Cに描かれている勝山／大阪比の系列においては、幕末期に修正5ヵ年移動平均値の系列が点線で描き込まれている。これは勝山米価の錢建表示を銀建表示に換算することによって得られたものである。新保博氏作成の錢相場表によれば、天明期（1781～88年）以降安定していた大阪錢相場は安政（1854～59年）開港以降の時期になると銀に対して急激な錢高傾向となっている⁵⁾。したがって安政開港以降の時期においては錢建の勝山米価は銀建の福井米価および大阪米価に対してかなりの過小評価となっていることが考えられる。そこでわれわれは、大阪錢相場をもちいて幕末期における錢建の勝山米価を銀建に換算することによって、勝山／福井比、勝山／大阪比の両者をより実勢に近づけるべく修正5ヵ年移動平均値の系列を作成したのである⁶⁾。もっとも大阪における錢相場が勝山における錢相場に等しいという保証はないから、ここでの補正はあくまでも便宜的なものであるといえよう。この結果得られた観察事実はつぎのように要約される。

観察事実〔4〕

幕末期における銭高銀安傾向を考慮にいと勝山／福井比、勝山／大阪比の低下傾向はかなり上向きに修正される。しかしそれでもなお、幕末期における勝山／大阪比の下降傾向は依然として残される。

さきに述べたように越前／大阪比は文政（1818～29年）前期以降になると顕著な上昇趨勢を示した。1820（文政3）年における勝山／大阪比の趨勢値は0.96であるが、これが30年後の嘉永期（1848～53年）になると倍増した。たとえば1852（嘉永5）年为例にとると、この年勝山／大阪比の趨勢値は1.90である。原資料にもどってみると、1852（嘉永5）年の勝山米価は銭建1石あたり11貫550文であり、これを新保博氏作成の銭相場表⁷⁾をもちいて銀建に換算すると1石あたり銀111.804匁となる。この年の大阪米価は、1石あたり銀81.1匁であったから、勝山米価は大阪米価のおよそ38%増しとなる。また、1824（文政7）年における福井／大阪比の趨勢値は0.92であるが、これが1852（嘉永5）年になると2.19に上昇した。この年福井米価は、0.456石あたり銀建88匁であるから1石あたりに換算するとおよそ192.98匁となり、これはじつに大阪米価のおよそ138%増しとなる。したがってこの年、米価の絶対水準は、福井、勝山、大阪の順に高かったと一応はいえそうである。

さてつぎに図7-1Aに描かれた勝山と福井の米価変動について検討することとしよう。文政（1818～29年）前期以前においては（勝山と福井双方の米価データが得られる時期について）、両者とも4つの周期的変動を示していると考えられ、山と谷の時点もおおむね一致するといえよう。勝山、福井とも天明期（1781～88年）の高水準が顕著で（福井の方が上昇圧力は大きいと思われる）、しいていえば、その後は勝山米価は趨勢不変（ないしはやや下降）、福井米価はやや下降の趨勢と思われ

るが、しかし両者で著しい差はないと考えられる。文政前期以降においても、勝山と福井の米価は顕著な上昇趨勢を示しながら類似の波動を描いており、山と谷の時点もおおむね一致する。しかし文政期（1818～29年）から天保期（1830～43年）にかけては勝山の米価上昇圧力が目立ち、安政期（1854～59年）以降は福井の上昇圧力が目につく点が指摘されよう。さらに勝山／福井比の系列に目を転じると、うえに述べたことから察せられるように、文政前期以前の時期については、天明期（1781～88年）の低下傾向を別にすればほぼ不変（ないしはやや上昇）の趨勢と考えられる。しかし文政前期以降の時期になると、文政期（1818～29年）から天保期（1830～43年）にかけての上昇傾向と幕末期の低下傾向が印象的であるといえよう。さきに述べたとおり、幕末期における錢高銀安傾向を考慮にいれると、幕末期における勝山／福井比はかなり上向きに修正されるのであるが、それでもなお依然として幕末期の下降趨勢は残されていると考えられる。

観察事実〔5〕

勝山米価と福井米価はおおむね類似の変動を示すが、細かく観察すれば文政期（1818～29年）から天保期（1830～43年）にかけては勝山米価の上昇圧力が目立ち、天明期（1781～88年）および幕末最後の10年においては福井米価の上昇圧力が目につくといえる。勝山／福井比の系列については、基本的には不変の趨勢と考えられるが、文政期から天保期までの上昇傾向と天明期および幕末期における低下傾向が指摘される。

以上で図7-1A、図7-1B、図7-1Cにかんする検討を終え、ついで図7-2に示された変動係数の検討に移ることとしよう。まず最初に気づくことは、勝山、福井、大阪の三者で変動係数の大きさには明

図7-2 「5ヵ年移動変動係数」-その1-

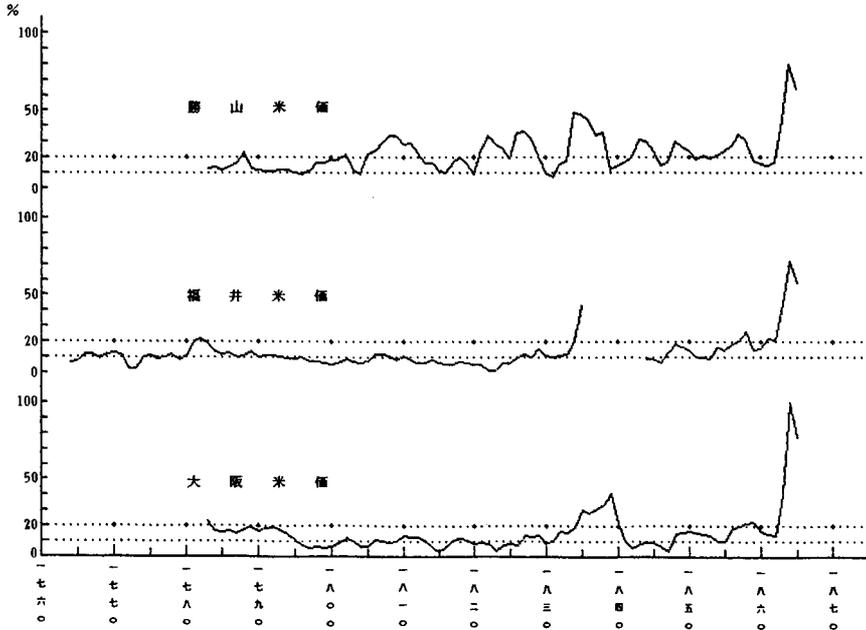
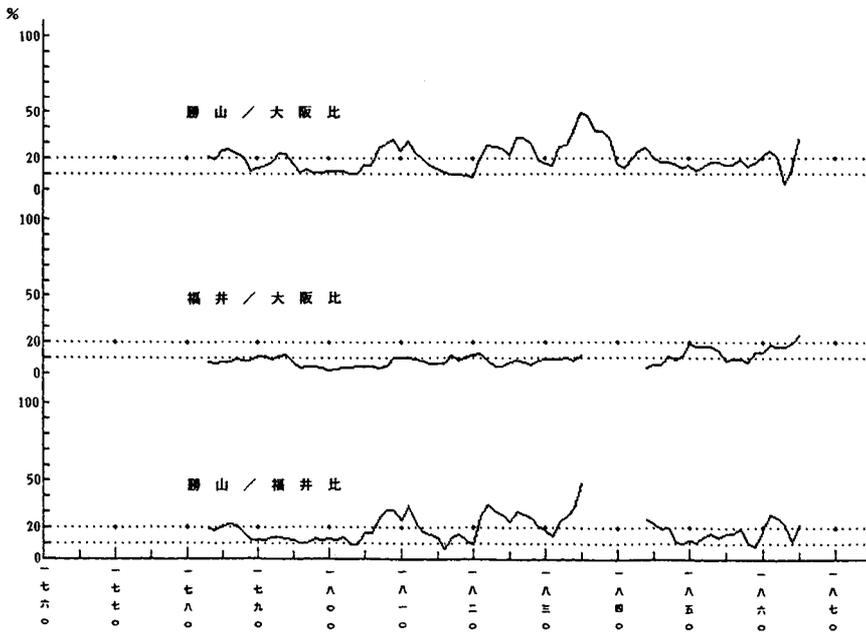


図7-3 「5ヵ年移動変動係数」-その2-



らかに相違があるということである。勝山における米価変動係数は20%ラインを超えることが多いのに対し、大阪における米価変動係数は20%ラインを超えないことの方が多いのである。福井のそれにいたっては、10%ラインを中心として上下に微動しているのがふつうであるといえよう。したがって全体的に観察すれば、勝山の変動係数をもっとも大きく、大阪がこれにつき、福井のそれはもっとも小さいということが指摘されよう。つぎに勝山、福井、大阪三者の変動係数を波動として眺めてみると、三者ともある程度の類似性を示しながら推移していることが観察される。けれども寛政期（1789～1800年）、化政期（1804～29年）においては、福井、大阪両者の類似性に対し、勝山における特異性が印象的であるといえよう。また天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）、幕末の時期については、大阪の変動係数をもっとも大きく、勝山がこれにつき、福井のそれはもっとも小さいということができよう。（ただし福井の場合は天保期におけるデータを欠く）。

観察事実〔6〕

全般的にあって、勝山の変動係数をもっとも大きく、大阪がこれにつき、福井のそれはもっとも小さい。しかるに天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）、幕末については大阪の米価変動係数をもっとも大きく、勝山がこれにつき、福井のそれはもっとも小さいのである。

観察事実〔7〕

米価変動係数を波動としてみれば、勝山、福井、大阪の三者にある程度の類似性を観察することができるけれども、寛政期（1789～1800年）から化政期（1804～29年）にかけては勝山の特異性が目につく。

最後に図7-3に示されたグラフについて簡単な検討をつけ加えておきたい。一見して明らかなように中段に描かれた福井／大阪比の「5ヵ年移動変動係数」の系列は10%水準を上下しており、ほぼ安定的であったと考えられる。これに対して、勝山／大阪比および勝山／福井比の「5ヵ年移動変動係数」の系列は、かなり大幅な動きを示しており、また波動としては類似の傾向にあるのが特徴的といえよう。

観察事実〔8〕

福井／大阪比の変動は安定的で、勝山／大阪比、勝山／福井比の変動パターンは類似の傾向を示している。

III 解釈にかえて

本節の課題は、前節で観察されたいくつかの事実について、その解釈の可能性を検討することである。観察事実〔1〕についていえば、先にも述べたように、かつて新保博氏が大阪における一般物価水準の波動の分析から、1820（文政3）年を「転換点」として指摘したことがあったが、このことは越前米価の趨勢線からもほぼ読みとれることがわかる。文政（1818～29年）前期以降の米価の上昇傾向にかんしては、改鑄等の貨幣的要因ないしは財政支出の観点からすでにかんがりの解釈が試みられている。このこと自体、重要な問題ではあるが、本章の性質上、ここではこれ以上言及することを避けたい。

つぎに観察事実〔2〕〔3〕〔4〕、なかんずく、天保期（1830～43年）前半および幕末期を除外すれば、文政（1818～29年）前期以降については越前／大阪比が明確な上昇趨勢をもった⁹⁾ということについて考察をすすめよう。まず、さきにも述べたように、地方米価の中央米価に対する

比率の趨勢に関するファインディングとしては、新保博氏による大津米価の大阪米価に対する比率に関するものが存在する。氏によれば、「大阪と大津の期間平均米価指数による大津／大阪価格比は、1755－80年の96.1から1781－1800年の95.5へとわずかに、下降したのち、1801－27年の98.4、1840－59年の100.7へと明白な上昇トレンドをしめしている

』¹⁰⁾という。この事実を越前／大阪比の上昇と比較すれば、大津／大阪価格比の上昇は、わずかなものであるといえようが、文政期以降、地方米価が中央米価に対して上昇の度合を大きくしたという点では、同一の事実を示しているものと考えられる。

さて文政（1818～29年）前期以降における越前／大阪比の上昇趨勢を説明するために、はじめに需要側の要因として越前および大阪における人口趨勢を取り上げることとしたい。5章においては、この時期における勝山／大阪比の上昇趨勢を説明するために、大略つぎのような議論がなされた。つまり、勝山における人口は、文政前期以降において、飢饉による犠牲者の多かった天保期（1830～43年）を除けば着実な上昇趨勢を示しており、とりわけ1840（天保11）年から1858（安政5）年までの18年間における人口の年平均成長率は、1.48%という急成長ぶりであったのに対し、大阪の人口はこの時期において一貫した減少傾向をとっており、勝山の人口が急増に転じた天保（1830～43年）末期以降幕末にいたるまで明白な下降趨勢をもっていたのである。このことが文政前期以降のとりわけ天保末期以降幕末にかけての勝山／大阪比の上昇趨勢と高位安定の傾向をもたらしたと推論されたのである。

本章ではうえに述べたことを敷衍するために、越前における人口変動について若干触れてみることにしたい。越前における人口変動を論じた代表的文献は、佐久高士『近世農村の数的研究』である。佐久氏は1675

（延宝3）年以降、1871（明治4）年までの期間を4期に分けて越前農村の人口動態を観察し、以下に述べるような結論を得ている。すなわち1675（延宝3）年から1720（享保5）年までの46年間を第1期とし、この時期においては、人口増加の傾向がうかがえるとしている。ついで1721（享保6）年から1743（寛保3）年までの23年間を第2期とし、この時期は人口の停滞期であったと述べている。つぎの第3期は1744（延享元）年から1845（弘化2）年までの102年間におよんでいるが、この時期においては、越前農村の人口は停滞というより増加といった方が実状に近かろうという。最後の第4期は1846（弘化3）年から1871（明治4）年までの26年間を指しているが、この時期においても明瞭に人口増加の傾向がうかがえると述べている。^{1,1)}

ちなみに越前国一国の人口は、江戸幕府の人口調査によれば^{1,2)}、1822（文政5）年に375,572人であったものが、1872（明治5）年（別データ）には461,032人に増加している。幕府人口調査の問題点については、いっさい触れないこととして、単純にこの間の年平均成長率を計算してみるとほぼ0.41%となり、やや増加の傾向といえよう。しかし、1846（弘化3）年から1872（明治5）年の時期に限れば人口は353,674人から461,032人に増加しており、この間の年平均成長率はほぼ1.01%となり、これは近代における日本の人口成長率に近くなる。

以上述べたところから米価の越前／大阪比の趨勢的上昇が始まる文政（1818～29年）前期以降の時期について、飢饉による犠牲者の多かった天保期（1830～43年）を除けば、越前における人口が着実な上昇趨勢を示していたことが明らかである。したがってこの事実が大阪人口の減少傾向と相俟って越前／大阪比を上昇させたと考えることができよう。^{1,3)}

つぎに文政期（1818～29年）以降における越前／大阪比の上昇趨勢を

説明するためには貨幣的要因が考慮されなければならない。5章で指摘したように、勝山藩においては大量に藩札が発行され、19世紀以降になると藩内における通用はほぼ藩札をもちいて行なわれた。また福井藩においても19世紀以降になると藩札の流通はすこぶる盛んであったとい¹⁴⁾う。したがって、かりに越前米価が藩札建、大阪米価が正銀建であるとすれば、越前／大阪比は上昇する公算が大きいと思われる。もっとも越前米価がやはり正銀建ないしは正銭建ての表示であったとしても、藩札が大量に発行されたために、越前における金相場が大阪におけるそれよりも高くなって（すなわち越前における銀安金高）、このことが越前／大阪比の上昇をもたらしたという解釈も可能である。しかしながら、われわれは、この点を実証する段階には達していない。これらの検討は次章にゆずりたいと思う。

越前米価の相対的上昇を説明するためには、供給側の要因についても検討しなければならない。たとえば5章でも述べたように、輸送コストの低減が、北国米の現地価格と大阪米価との乖離を縮小させたと考えることもできる。また化政期（1804～29年）から天保（1830～43年）末期にかけて、蔵米の大阪廻着量はいちじるしく減少するが、このことのいくぶんかは、越前米価の相対的上昇の結果であると解釈することもできよう。蔵米の大阪廻着量の減少、大阪米価の相対的下落は、大阪の経済的地位の低下、地方における顕著な産業発展と無関係ではないと考えられるのである。

つぎに観察事実〔5〕〔7〕、すなわち勝山米価の変動を福井米価のそれと対比させながら観察してみると、文政期（1818～29年）から天保期（1830～43年）にかけては勝山米価の上昇圧力が目立ち、寛政期（1789～1800年）から化政期（1804～29年）にかけて変動係数のパターンも特

異性を示しているのに対し、天明期（1781～88年）および幕末最後の10年においては福井米価の上昇圧力が目につくという事実についてすこし触れておくこととしよう。第1に、5章でも述べたように化政期（1804～29年）の勝山においては凶作、洪水等の災害が連続したことが知られるので、このことが、前者すなわち勝山米価の相対的上昇と変動パターンの特異性をもたらしたと思われる。第2に、勝山藩では大量の藩札が発行されており、19世紀以降になると藩内における通用はほぼ藩札をもちいて行なわれた。しかも藩財政の不安定を反映していたのか、一般に勝山藩札は福井藩札の約半分の価値しかなく、勝山米は福井米より高値であったという^{1.5)}。このような事情が勝山米価の相対的上昇にかかわったと解釈されよう。第3に、福井米価（切米値段）は相場を反映していたとはいえ、政策的に決定される面をもっており、天明の飢饉、幕末の動乱のように社会的不安の高まるときには実勢よりも高く決定される傾向があったのではないかと推測される^{1.6)}。また切米値段が政策的に決定されるという点を一応別としても、都市における米価は農村におけるそれよりも、うえに述べた社会的不安の高まるときには上昇の度合を大きくすると考えてよいであろう。したがってこのようなことが、後者すなわち福井米価の相対的上昇に影響をあたえたものと思われる。

さて最後に観察事実〔6〕、すなわち米価変動係数は、全般的には大きい方から勝山、大阪、福井の順となっているのに対し、天明、天保、幕末期には、大きい方から大阪、勝山、福井の順であったということについて検討することとしたい。5章でも述べたように、全般的に勝山における米価変動が大阪におけるそれよりも激しいことの基本的な要因は、大阪の側にあつて、大阪堂島における帳合米取引が米価平準化機能をはたしていたという事実^{1.7)}に求められる。しかし、天明、天保の飢饉、幕末

の動乱のように社会的不安が高まるときには、先物取引を含む大阪の米価調節機構は麻痺したと考えられ、このことが、観察事実〔3〕で指摘したように、越前／大阪比の下降をもたらし、さらに勝山と大阪における米価変動係数のパターンを逆転させてしまったといえよう。福井の米価変動係数は全期をつうじてもっとも小さいといえるが、この事実に対しては、福井米価が切米値段であって実際の売買値段ではないということが大きく影響していると思われる。切米値段の決定にあたっては米価の上下変動をできるだけ小さくすることが目標にされたであろうが、この点で大阪の米価調節機能よりもいっそう強力であったといえよう。また、さきに述べたように、天明の飢饉、幕末の動乱のように社会的不安の高まるときには、実勢よりも高く決定される傾向にあったと思われるから、切米値段による米価調節機能はきわだって巧妙に機能していたということが出来る。近世における換算米価については、たとえば岩橋勝氏によって江戸の張紙値段と実際の米価との関係が吟味されてはいるが^{1,8)}、換算米価についての本格的な検討は今後の課題として残されているように思われる。

おわりに

ここでは、本章で明らかになった事実について簡単に要約することとしたい。

(1) 越前米価（福井米価と勝山米価）は全期をつうじて大阪米価と類似の波動を描いている。さらに詳しく観察すると、文政（1818～29年）前期以前においては、いずれの米価も、天明期（1781～88年）の高水準を別とすれば、不変ないしはやや下降の趨勢にある。けれども、文政前

期以降になるといずれの米価も上昇傾向が顕著となっているから、米価の変動においては文政前期が転換点であったといえる。

(2) 米価の越前／大阪比は、文政(1818～29年)前期以前については不変(ないしはわずかな上昇)の趨勢と考えられるが、文政前期以降になると顕著な上昇趨勢を示す。しかし天明期(1781～88年)、天保期(1830～43年)前半および幕末期等の時期においては、越前／大阪比にやや下降の傾向がみられる。

(3) 勝山米価と福井米価はおおむね類似の変動を示すが、細かく観察すれば文政期(1818～29年)から天保期(1830～43年)にかけては勝山米価の上昇圧力が目立ち、天明期(1781～88年)および幕末最後の10年においては福井米価の上昇圧力が目につくといえる。勝山／福井比の系列については、基本的には不変の趨勢と考えられるが、文政期から天保期までの上昇傾向と天明期および幕末期における低下傾向が指摘される。

(4) 米価変動係数は、全般的には大きい方から勝山、大阪、福井の順となっているのに対し、天明、天保、幕末期には、大きい方から大阪、勝山、福井の順であった。また、米価変動係数を波動としてみれば、勝山、福井、大阪の三者にある程度の類似性を観察することができるけれども、寛政期(1789～1800年)から化政期(1804～29年)にかけては勝山の特異性が目についた。

注

- 1) 前掲「福井藩禄高中諸給人物額公私諸費惣額區別調」。
- 2) この資料をもちいた研究としては、前掲吉田「近世末期の福井に於ける米価変動について」が存在する。吉田氏によれば、福井藩

における切米は「毎年春（2月16日）、暮（12月16日）の2回、原則として春は3分の1、暮は3分の2ずつ支給された」（47ページ）という。なお吉田氏の論稿においては1772（安永元）年以降1867（慶応3）年までの米価がもちいられている。本章においては宝暦、明和期のものも利用することとし、吉田氏の論稿において明らかに誤植と思われる米価データについては正しておいた。

- 3) 前掲『近世後期における主要物價の動態』。
- 4) 前掲新保「錢相場の変動, 1736～88年」、4ページ。
- 5) 同上、4～5ページ。
- 6) 実際の数値計算においては近似的に処理したので、修正5ヵ年移動平均値の系列もほぼ3%程度の過小評価になっていると思われるが、グラフに描いてしまえば、いずれにせよ目でみて識別できるほどの違いは生じない。
- 7) 前掲新保「錢相場の変動, 1736～88年」、5ページ。
- 8) 前掲新保「徳川後期の物価水準(1)」、39ページ。
- 9) この時期の越前／大阪比の顕著な上昇傾向の原因を、依拠した資料の性格に求めることが考えられる。すなわちこの時期における大阪米価が、正米相場ではなくて米切手相場であるとすれば、この時期における大量の米切手発行残高が、米切手相場すなわち大阪米価を低く抑えていたのではないだろうかという推測が成り立つのである。もっとも大阪における正米相場と米切手相場との乖離が、本章で述べた越前／大阪比の動向に対し大きな修正を迫るほどのものであったとは思われない。たとえば本文で引用した（後述）大津／大阪価格比の系列（大阪米価については同一の資料に依拠）をみても、大阪米価が大幅に実勢より低く出ていると

は考えにくいからである。ともあれ、大阪米価資料についての吟味は今後の課題として残されている。

- 10) 前掲新保「江戸後期における物価の地域差」、8ページ。
- 11) 佐久高士『近世農村の数的研究 — 越前国宗門人別御改帳の分析総合 —』（1975年）、3～16ページ。
- 12) 前掲関山『近世日本の人口構造』、138ページ。
- 13) なお、越前の人口をアツかった近年のすぐれた論稿として、松浦昭「越前国における出生率と幼年比率」『（神戸商科大学）商大論集』42巻2号（1990年）をあげておきたい。氏は、幼年比率維持仮説の観点から、佐久高士編『越前国宗門人別御改帳（全6巻）』（1967～72年）のデータに統計解析を施し、越前国の幼年比率および出生率が、徳川後期以降、地域差（越前内の）や形態別差異（農村、山村、漁村といった）を伴いながらも、大局的には似通った動きを示していたことを指摘している。さらには幼年比率について、移行期におけるデータリンクを試み、スムーズな接続結果を得ている。
- 14) 福井県『福井県史』第2冊（1921年）、37～39ページ、230～234ページ、709～710ページ。
- 15) 前掲『勝山の歴史』、227～235ページ。
- 16) 前掲『勝山市史』、966～968ページ、975～976ページ。前掲『勝山の歴史』、154～155ページ、233ページ。
- 17) このことは、前掲吉田「近世末期の福井に於ける米価変動について」、51ページの記述から部分的に確かめることができる。
- 18) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、167～187ページ。

付表 7-1 (その1) 福井米価と諸系列の動向

年次	福井米価 (切米値段)				勝山/福井比				福井/大阪比				勝山/大阪比		
	1俵(4斗5升6合)につき銀匁			指数 (1781 -85= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	5カ 年 移 動 変 動 係 数	指 数	同5 カ 年 移 動 平 均	5カ 年 移 動 変 動 係 数	修 正 5カ 年 移 動 平 均	指 数	同5 カ 年 移 動 平 均		5カ 年 移 動 変 動 係 数	修 正 5カ 年 移 動 平 均
	2月	12月	平均												
1762(宝暦12)	21.25	20.2	20.7	74.7											
63(13)	20.2	23.8	22.0	79.3											
64(明和 1)	22.3	20.4	21.4	76.9	77.6	6.2									
65(2)	20.1	20	20.1	72.2	80.2	7.7									
1766(3)	25.2	21.9	23.6	84.8	83.7	11.5									
67(4)	22.8	25.8	24.3	87.5	87.9	11.9									
68(5)	26.8	27	26.9	96.9	89.1	9.5									
69(6)	28.1	26.4	27.3	98.2	87.3	11.8									
70(7)	21.7	21.55	21.6	77.9	85.5	12.9									
1771(8)	21.1	21.15	21.1	76.1	80.8	12.3									
72(安永 1)	19.25	24.3	21.8	78.4	76.6	2.6									
73(2)	20.7	20	20.4	73.3	76.9	3.1									
74(3)	19.9	22.9	21.4	77.1	80.5	9.9									
75(4)	22.9	21.2	22.1	79.4	82.7	10.6									
1776(5)	24.5	27.75	26.1	94.1	84.0	8.7									
77(6)	28.7	20.9	24.8	89.3	83.1	10.3									
78(7)	20.35	24.1	22.2	80.1	82.0	11.5									
79(8)	21.1	19.15	20.1	72.5	79.2	8.4									
80(9)	17.1	24	20.6	74.0	80.3	10.9									
1781(天明 1)	21.95	22.6	22.3	80.2	87.2	20.2	1.16				1.12				
82(2)	23.7	28.8	26.3	94.6	97.3	21.8	0.89				1.06				
83(3)	29.1	34.45	31.8	114.5	100.0	18.2	1.02	1.02	19.1	0.97	1.01	7.5			
84(4)	40.2	28.2	34.2	123.2	105.3	13.7	0.78	1.01	18.6	0.95	1.00	6.2			
85(5)	26.8	21.8	24.3	87.5	109.2	12.3	1.26	0.99	20.9	0.95	0.97	7.2			
1786(6)	21.35	37.8	29.6	106.5	105.8	13.3	1.12	0.97	21.9	1.08	0.97	7.2			
87(7)	35.9	27.65	31.8	114.5	101.3	10.0	0.79	0.98	20.8	0.89	1.00	8.9			
88(8)	27.6	26.35	27.0	97.2	100.5	11.4	0.89	0.88	16.5	0.97	1.01	8.4			
89(寛政 1)	26.35	29.55	28.0	100.7	95.4	14.2	0.82	0.85	11.8	1.10	0.99	8.3			
90(2)	26.15	20.25	23.2	83.6	92.6	10.1	0.76	0.86	11.7	1.04	0.97	10.8			
1791(3)	17.15	28	22.6	81.3	93.6	10.9	1.01	0.84	11.9	0.94	0.96	11.3			
92(4)	27.75	27.85	27.8	100.1	90.6	10.8	0.80	0.87	13.6	0.82	0.94	9.0			
93(5)	29.45	27.25	28.4	102.1	93.4	9.9	0.81	0.94	13.3	0.91	0.95	10.6			
94(6)	25.35	22.25	23.8	85.7	99.3	9.1	0.99	0.91	13.1	1.00	0.98	11.6			
95(7)	23.75	30.55	27.2	97.8	100.5	9.5	1.07	0.92	11.8	1.09	1.03	7.3			
1796(8)	29.55	31.9	30.7	110.7	98.8	10.0	0.87	0.94	9.8	1.07	1.05	3.4			
97(9)	29.4	29.4	29.4	105.9	100.2	7.8	0.86	0.91	10.1	1.07	1.05	4.4			
98(10)	25	27	26.0	93.7	101.5	7.7	0.89	0.92	12.9	1.03	1.02	4.7			
99(11)	26.9	24.75	25.8	93.0	98.6	6.1	0.85	0.94	12.4	0.97	1.01	4.0			
1800(12)	27.5	30.3	28.9	104.1	95.3	5.9	1.13	0.94	12.4	0.98	0.99	2.2			

付表 7-1 (その2) 福井米価と諸系列の動向

年次	福井米価 (切米値段)				勝山/福井比				福井/大阪比				福井/大阪比		
	1俵(4斗5升6合)の銀匁			指数 (1781 -85= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	5カ 年 移 動 変 動 係 数	指数	同5 カ 年 移 動 平 均	5カ 年 移 動 変 動 係 数	修正 5カ 年 移 動 平 均	指数	同5 カ 年 移 動 平 均		5カ 年 移 動 変 動 係 数	修正 5カ 年 移 動 平 均
	2月	12月	平均												
1801(享和 1)	29	24.6	26.8	96.5	94.2	6.9	0.96	0.95	12.0		1.00	0.99	2.8		
02(2)	23.6	25.9	24.8	89.2	92.2	8.9	0.85	0.94	13.6		0.98	1.01	4.0		
03(3)	25.4	23.51	24.5	88.1	87.6	6.9	0.96	0.91	9.5		1.04	1.03	3.4		
04(文化 1)	23.1	23.1	23.1	83.2	83.6	6.2	0.80	0.92	9.5		1.07	1.01	5.0		
05(2)	22.7	22.2	22.5	80.9	84.2	7.2	1.01	0.99	16.4		1.04	1.02	4.6		
1806(3)	20.8	21.8	21.3	76.7	87.0	11.7	0.96	1.01	16.2		0.94	1.02	4.5		
07(4)	21.1	30.1	25.6	92.2	89.8	12.0	1.25	0.97	26.5		1.01	1.01	4.1		
08(5)	29.3	27.4	28.4	102.1	90.5	11.2	1.06	0.91	30.7		1.02	1.02	4.4		
09(6)	29	25	27.0	97.3	92.5	8.0	0.55	0.89	31.0		1.05	0.99	10.0		
10(7)	24.5	22.3	23.4	84.3	89.7	10.9	0.71	0.83	24.3		1.05	0.99	9.9		
1811(8)	22.3	25.7	24.0	86.5	85.7	8.3	0.89	0.89	33.7		0.82	0.97	10.1		
12(9)	23.1	20.3	21.7	78.2	85.0	6.6	0.95	0.97	24.2		1.00	0.97	9.5		
13(10)	20	25.8	22.9	82.5	85.2	6.6	1.35	1.03	17.7		0.94	0.94	8.2		
14(11)	26.6	25.3	26.0	93.5	87.0	8.5	0.94	1.08	15.6		1.01	0.99	6.4		
15(12)	23.6	23.8	23.7	85.4	89.8	6.3	1.03	1.10	14.1		0.93	1.00	6.5		
1816(13)	23	30.1	26.6	95.6	90.3	5.4	1.13	1.03	6.9		1.09	1.03	6.3		
17(14)	27.9	23.3	25.6	92.2	89.6	5.1	1.04	0.99	13.7		1.03	1.08	11.8		
18(文政 1)	25.6	21.5	23.6	84.8	88.3	7.5	0.99	0.96	15.2		1.08	1.12	8.5		
19(2)	21.9	28	25.0	89.9	85.4	6.7	0.77	0.91	12.0		1.28	1.09	10.8		
20(3)	21	22.7	21.9	78.7	82.9	5.4	0.86	0.89	9.5		1.12	1.08	11.8		
1821(4)	22.4	22.7	22.6	81.2	81.8	5.7	0.90	0.98	27.2		0.96	1.06	13.3		
22(5)	22.3	22.1	22.2	80.0	79.5	1.4	0.93	1.18	35.1		0.97	0.98	8.7		
23(6)	22.8	21.1	22.0	79.1	79.5	1.4	1.44	1.25	29.9		0.95	0.93	5.0		
24(7)	20.8	22.8	21.8	78.5	81.5	6.7	1.79	1.26	28.6		0.89	0.92	4.6		
25(8)	21	22.7	21.9	78.7	82.4	6.7	1.21	1.32	24.0		0.88	0.94	7.4		
1826(9)	28.5	22.1	25.3	91.1	86.3	9.9	0.95	1.42	30.2		0.93	0.95	8.5		
27(10)	22	25	23.5	84.7	92.1	12.4	1.20	1.36	28.1		1.05	0.96	7.6		
28(11)	25.3	29.3	27.3	98.3	97.8	10.3	1.96	1.41	26.6		1.03	0.99	5.8		
29(12)	32.4	27.4	29.9	107.7	105.8	16.0	1.47	1.47	20.7		0.93	1.04	8.1		
30(天保 1)	22.3	37.3	29.8	107.3	111.2	10.9	1.50	1.50	18.5		1.02	1.06	8.9		
1831(2)	39.4	33.4	36.4	131.1	117.6	10.3	1.23	1.31	14.6		1.17	1.05	9.5		
32(3)	30.7	31.1	30.9	111.3	123.5	10.8	1.35	1.18	23.4		1.13	1.05	8.9		
33(4)	30.3	42.05	36.2	130.3	122.8	11.8	1.03	1.21	27.3		0.98	1.04	9.8		
34(5)	43.85	32.5	38.2	137.5	131.2	20.8	0.79	1.35	33.3		0.95	1.03	8.2		
35(6)	25.6	31.9	28.8	103.6	166.6	43.5	1.67	1.18	49.0		0.96	1.05	11.8		
1836(7)	33	63.3	48.2	173.5			1.89				1.11				
37(8)	80.05		80.1	288.4			0.52				1.24				
38(9)															
39(10)															

付表 7-1 (その3) 福井米価と諸系列の動向

年次	福井米価 (切米値段)				勝山/福井比				福井/大阪比				勝山/大阪比		
	1俵(4斗5升6合)の銀匁			指数 (1781 -85= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	5カ 年 移 動 変 動 係 数	指数	同5 カ 年 移 動 平 均	5カ 年 移 動 変 動 係 数	修 正 5カ 年 移 動 平 均	指 数	同5 カ 年 移 動 平 均		5カ 年 移 動 変 動 係 数	修 正 5カ 年 移 動 平 均
	2月	12月	平均												
1840(天保11)															
1841(12)															
42(13)	49~54.5	51.8	186.4				0.72				1.76				
43(14)	53	53.0	190.9				0.71				1.88				
44(弘化 1)	54~60	57.0	205.3	205.5	8.7	1.03	0.90	25.6			1.93	1.84	3.8		
45(2)	51~68	59.5	214.3	216.5	9.2	1.24	0.93	22.7			1.80	1.89	5.1		
1846(3)	64	64.0	230.5	225.1	6.6	0.81	0.95	19.6			1.81	1.91	5.2		
47(4)	67	67.0	241.4	243.2	12.7	0.85	0.92	20.0			2.04	1.99	11.1		
48(嘉永 1)	65	65.0	234.2	268.7	18.1	0.82	0.88	11.4	0.86	1.95	2.04	9.6	1.76		
49(2)	82	82.0	295.4	275.2	16.1	0.86	0.90	10.5	0.88	2.34	2.02	11.2	1.77		
50(3)	95	95.0	342.2	290.3	14.7	1.05	0.89	12.0	0.86	2.06	2.17	18.9	1.85		
1851(4)	73	73.0	263.0	301.9	9.8	0.94	0.90	11.1	0.87	1.72	2.22	17.6	1.91		
52(5)	88	88.0	317.0	301.2	9.9	0.79	0.88	14.4	0.84	2.78	2.19	17.6	1.83		
53(6)	81	81.0	291.8	283.1	9.1	0.87	0.79	16.2	0.78	2.19	2.25	17.0	1.72		
54(安政 1)	81	81.0	291.8	270.5	16.9	0.73	0.77	14.1	0.78	2.22	2.27	15.1	1.75		
55(2)	70	70.0	252.2	263.7	14.9	0.61	0.81	16.8	0.83	2.32	2.15	8.7	1.77		
1856(3)	55.5	55.5	199.9	273.1	18.8	0.87	0.81	16.9	0.84	1.83	2.12	9.0	1.78		
57(4)	78.5	78.5	282.8	281.0	20.5	0.95	0.88	20.0	0.93	2.21	2.09	8.8	1.93		
58(5)	94	94.0	338.6	315.9	26.3	0.87	0.96	9.8	1.03	2.04	2.07	7.2	2.14		
59(6)	92	92.0	331.4	348.3	15.1	1.09	0.98	8.1	1.07	2.07	2.00	13.8	2.15		
60(万延 1)	118.5	118.5	426.9	385.4	15.5	1.01	0.92	18.8	1.02	2.18	2.01	14.2	2.05		
1861(文久 1)	100.5	100.5	362.0	431.9	21.9	0.97	0.85	28.3	0.98	1.53	2.12	18.0	2.02		
62(2)	130	130.0	468.3	488.1	21.1	0.64	0.77	26.7	0.94	2.25	2.14	17.7	1.96		
63(3)	158.5	158.5	571.0	618.9	44.6	0.55	0.71	22.2	0.92	2.57	2.14	17.7	1.94		
64(元治 1)	170	170.0	612.4	976.9	71.4	0.69	0.67	11.4	0.91	2.19	2.13	18.9	1.91		
65(慶応 1)	300	300.0	1080.7	1265.1	57.9	0.71	0.62	22.2	0.87	2.19	1.97	25.1	1.73		
1866(2)	597.5	597.5	2152.4			0.74				1.47					
67(3)	530	530.0	1909.2			0.41				1.44					

(出所)「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額區別調」(松平文庫、福井県立図書館蔵)、「米価一覧表」(竹内修氏[福井県勝山市鹿谷町東遅羽口]所蔵)、三井文庫(中井信彦)編「近世後期における主要物価の動向」(日本学術振興会、1952年)、大蔵省編『大日本貨幣史』6巻(1877年および1878年)、新保博「銭相場の変動、1789-1867年 — 一つの数量的接近 —」『国民経済雑誌』137巻1号(1978年)。

第8章 近世後期越前における 米価の地域差（その2）

はじめに

前章においては、福井と勝山の米価変動を取り上げ、越前米価としての共通性を論ずる一方で、越前における米価の地域差についても考察を行なった。また、越前米価を大阪米価と対比させることで、中央と地方における米価の地域差について検討した。ファインディングスの一つだけあげれば、越前米価指数の大阪米価指数に対する比率、すなわち、越前／大阪比は、文政（1818～29年）前期以前については、不変（ないしはわずかな上昇）の趨勢とみなされるが、文政前期以降になると顕著な上昇趨勢を示した。したがって、文政前期以降、越前米価は大阪米価に比べて相対的に高くなったのである¹⁾。

ところで、これらの考察の過程で、今後深められるべき二三の問題があることが痛感された。一つは三貨交換比率の地域差と物価の地域差との関係である。銀建て米価と銭建て米価を比較しようとおもえば、当地の銭相場（銭1貫につき銀匁のような）を必要とする。また、たとえ銀建て米価同士の比較であっても、いずれかが藩札建てであるような場合も考えられる。したがって、三貨交換比率の地域差の問題は、物価の地

域差を考える場合に、ゆるがせにできない問題である。

もう一つの問題は、米価の種類、すなわち、実際の売買価格であるのか、あるいは、張紙値段のような換算米価であるのかといった問題である。もし張紙値段が、相場を参考にして決められていたとしても、それが、つねに相場よりも高く設定されていたのであれば、米価の地域差を考える場合には、ぜひとも配慮が必要であろう。

本章は、うえに述べたような、重要ではあるが、これまであまり顧みられることの少なかった問題について、二三の考察を行なうことを目的としている。

1 福井における実勢米価と換算米価

本節では、福井における実勢米価と換算米価について検討をおこなう。

福井における換算米価は、「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額区別調」²⁾に依拠している。この資料の性格その他については、前章で述べたところであるから、ここでは省略する。また、福井における実勢米価は、吉田叡氏が整理された坪川家文書「米直段控」³⁾によった。吉田叡氏によれば、「「米直段控」は、坪川武兵衛氏（福井市種池町）が明治の初め頃、残存している資料をもとにして収録したり、自ら精査しまとめたものである。この資料の前半は「酒造仕込米買揚直段」として寛永十九年から享保十九年までの米価が記録され、慶応四年九月に米納津村（坂井郡）六郎左エ門より矢尾氏、渡辺氏がそれぞれ又借りしものを写したものである。後半は極月相場として、安永元年から記録され、明治二十五年まで詳しく記載している」⁴⁾という。本章でもちいたのは、後半の極月相場である。この系列には、18世紀後半から19世紀初頭にかけて

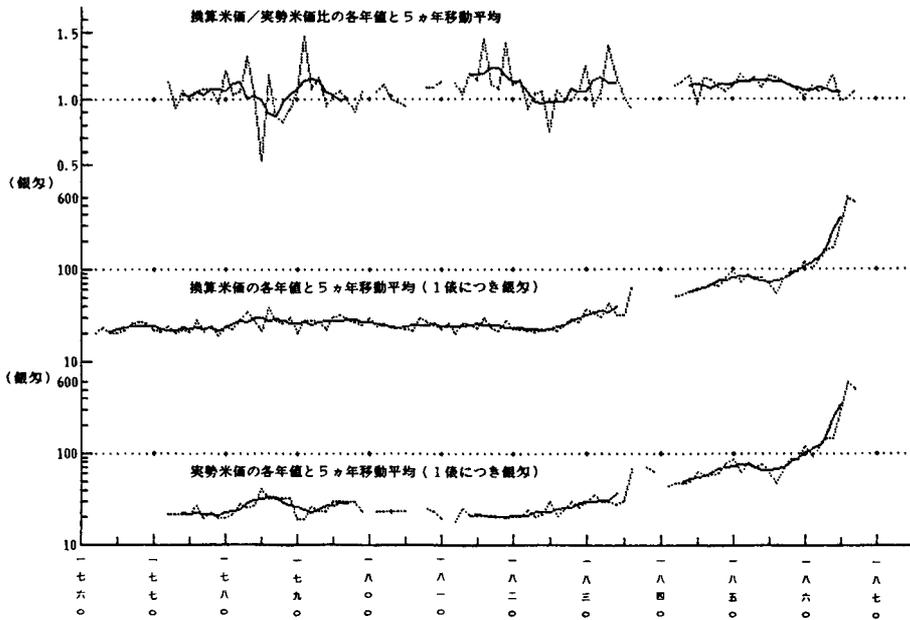
て、2～4年にわたって、同一の米価が記載されているといった不自然さがみられる。しかし、ここでは、そのままもちいるほかなかった。

資料の加工についても、一二述べておきたい。換算米価（切米値段）は、1762（宝暦12）年～1836（天保7）年までは、2月と12月について、1837（天保8）年は2月について知ることができるが、1842（天保13）年～1867（慶応3）年の期間については、毎年一回（月不明）しか記載されていない。しかし、この期間の価格は、暮れのものであるとみなしてよい理由が存在する⁵⁾。また、実勢米価は、極月相場である。そこで、換算米価（切米値段）については、実勢米価（極月相場）に合わせて（1842～1867年の期間も含めて）暮れのものを採用することにした。なお、切米値段も極月相場も、年によっては、最高価格と最低価格が示されている場合があるので、このときは、その平均値をとった。さらに、いずれの米価も、一俵（4斗5升6合）建てである。

さて、図8-1、図8-2、図8-3は、福井における実勢米価と換算米価、および、その加工系列をグラフ化したものである。図8-1には、下段に実勢米価、中段に換算米価（いずれも1俵につき銀匁、半対数目盛）、上段に両者の比、すなわち、換算米価／実勢米価比が描かれている。いずれの場合も、変動の激しい折れ線グラフ（点線）は各年値で、比較的変動の少ない折れ線グラフ（実線）は、5ヵ年移動平均による趨勢線である。図8-2には、これら三つの各年値をもちいて計算した「5ヵ年移動変動係数」の系列が図示されている。図8-3には、やはり各年値をもちいた実勢米価と換算米価の「5ヵ年移動相関係数」が描かれている。

さてつぎに、図8-1、図8-2、図8-3をもちいて、福井における、換算米価（切米値段）と実勢米価（坪川家文書による極月相場）と

図 8 - 1 福井における実勢米価と換算米価



を比較検討し、二三の事実を観察することとしよう。

まず、換算米価の5ヵ年移動平均の系列をみると(図8-1)、換算米価は、1784(天明4)年を峰として、1824(文政7)年の谷へとなだらかに下降し、以後は、幕末まで急速な上昇傾向をしめしている。いっぽう、実勢米価の5ヵ年移動平均の系列によれば、それは、1787(天明7)年を峰として、1819(文政2)年の谷へとなだらかに下降し、以後は、幕末まで、やはり急速な上昇傾向をしめしている。したがって、両米価は、趨勢的には、ほぼ同じように動いたと考えられる。

ところで、両米価の各年値の動きについてはどうであろうか。ここでは、換算米価(切米値段)が、実勢米価を参考にしながらも、それに対して、時間的遅れをもって決定されたのではないか、という問題について、すこし考えてみることにしたい。

換算米価（切米値段）の実勢米価に対する時間的遅れを、ある程度明瞭に認めることができるのは天明期（1781～88年）である。いま、この時間的遅れを列挙すれば以下のとおりとなる。

実 勢 米 価		換算米価（切米値段）
1782（天明2）年の峰	→	1783（天明3）年の峰
1783（天明3）年の谷	→	1785（天明5）年の谷
1785（天明5）年の峰	→	1786（天明6）年の峰
1786（天明6）年以降の低水準	→	1788（天明8）年の谷

また、同様の時間的遅れは、あるいは天保（1830～43年）初期にも見いだすことができるかもしれない。

しかし、ここで考察の対象とした期間を、全体として眺めれば、実勢米価が、換算米価に先立って変動するという傾向は、かならずしもこれを明瞭に認めることはできないと言ってさしつかえないであろう。

さて、図8-1上段には、換算米価（切米値段）を実勢米価で除した系列がグラフ化されている。これによると、考察の対象とした期間を、全体としてみれば、換算米価（切米値段）は、実勢米価よりもかなり高く決定されたと言えるであろう（この比が得られる87年間を単純に平均すれば、換算米価は、実勢米価よりも7.036パーセント高い）。さきに述べたように、換算米価の変動は、1824（文政7）年の谷をさかいとして、趨勢的転換をとげている。そこで、換算米価／実勢米価比の系列を、この比の5ヵ年移動平均もまた谷を記録している1824年以前と1824年以後とに分けて、この比が得られる年について単純に平均してみる。すると、1824年以前では、換算米価は、実勢米価よりも6.277パーセント高く、1824年以降になると、この比はさらに上昇して、換算米価は、実勢米価よりも7.927パーセント高くなっている。

さらに詳しく観察すれば、天明期（1781～88年）および文政期（1818～29年）においては、換算米価（切米値段）が、実勢米価よりも低く決められていることがあるのに対して、幕末期になると、換算米価は、ほぼ恒常的に、実勢米価よりも高く設定されていることが明らかである。

観察事実〔1〕

全期を通じて、換算米価（切米値段）は、実勢米価よりもかなり高く（約7パーセント）決定された。この傾向は、化政期（1804～29年）以降顕著となり、幕末期には、換算米価は、ほぼ恒常的に、実勢米価よりも高く（約10パーセント）決定された。

さて、図8-2は「5ヵ年移動変動係数」の系列をグラフ化したものである。これによると、実勢米価の変動が、換算米価（切米値段）のそれに較べて目立って大きいとは言えないけれども、幕末期になると、実勢米価のほうが、より大きく変動する傾向が定着していることがわかる。

また、変動係数の系列を波動として眺めてみると、幕末期には、実勢米価の変動係数の系列と換算米価のそれとが、ほぼ並行的に動いていることが観察される。さらに、換算米価／実勢米価比の変動係数の系列によれば、やはり幕末期において、低位安定的となっている。いま述べた二つの点は、幕末期において、実勢米価と換算米価が、ほぼ平行に動いたことを示唆している。

このことは、図8-3にグラフ化された「5ヵ年移動相関係数」の系列を観察することによって、いっそう明確となる。下段は「5ヵ年移動単純相関係数」とでも呼ぶべきもので、また上段は「5ヵ年移動残差相関係数」とでも呼ぶべきものである。これによれば、弘化期（1844～47年）以降の幕末期になると、換算米価と実勢米価の5年ごとの相関係数は、単純相関係数の場合も残差相関係数の場合も、1に向かって急速に

図8-2 福井米価の「5ヶ年移動変動係数」

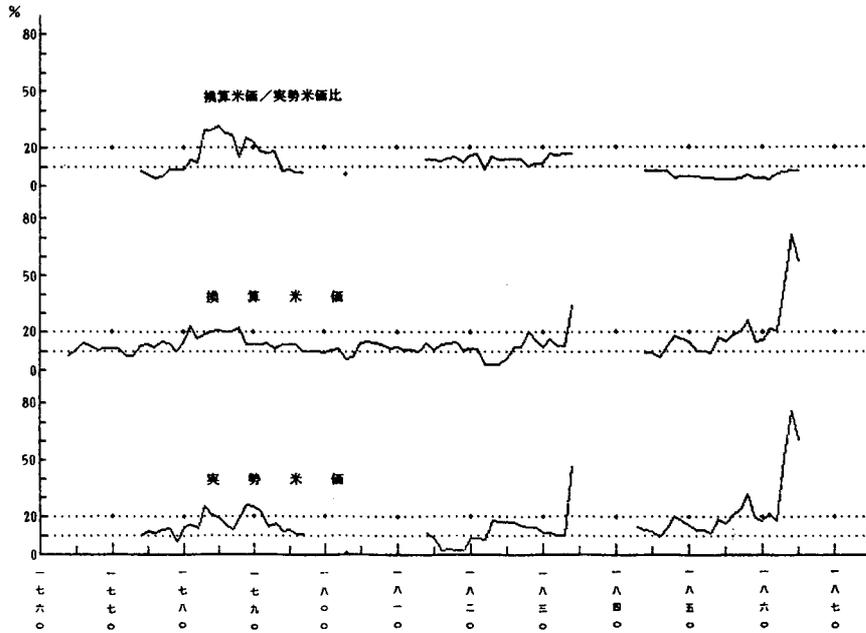
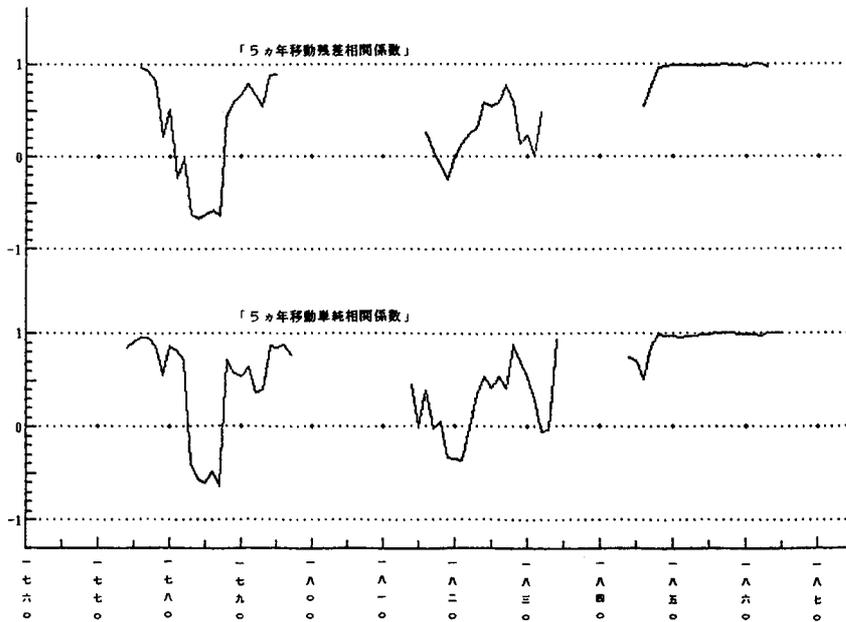


図8-3 実勢米価と換算米価の「5ヶ年移動相関係数」



上昇している。

なお、相関係数の系列は、天明期（1781～88年）に、大きく負の方向に振れている。さきに述べたように、天明期においては、換算米価（切米値段）が実勢米価に対して時間的遅れをもつという傾向が、ある程度明瞭に認められる。したがって、このことが、相関係数が負の方向に振れる原因となっている。

観察事実〔2〕

実勢米価の変動は、換算米価（切米値段）の変動に較べて目立って大きいとは言えない。しかし、幕末期には、実勢米価が、より大きく変動する傾向が定着する。

観察事実〔3〕

変動係数と相関係数の分析によれば、弘化期（1844～47年）以降の幕末期には、実勢米価と換算米価は、ほぼ平行に動いた。

ところで、切米値段と同様の換算米価である、江戸張紙値段については、岩橋勝氏による研究がある⁶⁾。また、これをさらに深めた、山崎隆三氏の研究もおおやけにされている⁷⁾。以下、福井切米値段の動きと比較しながら、江戸張紙値段の変動について、すこし考えてみることにしたい。

岩橋氏は、江戸張紙値段の動きを、江戸実勢米価との対比において考察し、大略、つぎのような結論をえている。まず、天明期（1781～88年）においては、実勢米価が、一時的に高騰したのに対して、張紙値段は、さほど高く決定されなかった。また、寛政期（1789～1800年）から文政期（1818～29年）にかけては、張紙値段の水準が、実勢米価のそれに対して、しだいに低くなっているとみることができるかもしれない。とはいえ、化政期（1804～29年）以前については、おおむね、江戸張紙値段は江戸の実勢米価をあらわすと考えてよいであろう⁸⁾。

しかし、1833（天保4）年の凶作時以降、張紙値段は、年々江戸実勢米価との相関を低めていった。張紙値段は硬直化し（幕末に向かうほど趨勢線に対する各年値の振幅が小幅となり）、一方で実勢米価は急騰したから、両者の乖離は大きくなった。

さてつぎに、岩橋氏が明らかにした江戸張紙値段の動向（誤読を恐れるものであるが）と、さきの福井切米値段の動きとを、比較してみることとしよう。まず、観察事実〔1〕にみられるように福井切米値段は、全期を通じて、実勢米価よりもかなり高く（約7パーセント）決定された。この傾向は、化政期（1804～29年）以降さらに顕著となり、幕末期には、切米値段は、ほぼ恒常的に、実勢米価よりも高く（約10パーセント）決定された。これは、明らかに江戸張紙値段の動向とは異なる。江戸張紙値段は、化政期以前は、おおむね、実勢米価の動きに等しく、天保期（1830～43年）以降になると、実勢米価の水準を大きく下回ったからである。もっとも、天明期（1781～88年）において、張紙値段がさほど高く決定されなかったという点では、福井も江戸も同じである。

また、観察事実〔2〕によれば、幕末期には、実勢米価が、切米値段よりも大きく変動する傾向が定着している。江戸張紙値段の場合も、天保期以降、変動が小さくなっているから、この点では福井も江戸も同じである。が、福井切米値段は、この時期に決して硬直的というわけではなかった。さらに、観察事実〔3〕によれば、幕末期の福井では、実勢米価と切米値段は、ほぼ平行に動いた。これはもちろん江戸の場合と異なる。

それでは、以上のような現象は、どのように解釈すればよいであろうか。もとより、この問題に答える準備はないので、つぎの点だけを指摘しておきたい。一般に、張紙値段は、幕府および藩の財政収入（貢租の

金納部分など）の面からみれば、実勢米価よりも高く設定する方が都合がよく、財政支出（旗本・御家人、藩士に対する貨幣渡しの部分など）の面からみれば、（救済的な面はべつにして）低く設定した方がよいことになる。また実勢米価よりも高く（低く）設定した場合には、金納比率は大きく（小さく）、貨幣渡し比率は小さい（大きい）方が都合がよい。もっともこの場合、一般的に、金納比率の高低が財政収入におよぼす効果は、貨幣渡し比率の高低が財政支出におよぼす効果よりも大きいであろう。そこで、とりわけ幕末期において、福井切米値段のように実勢より高く設定している場合は、金納比率が大きければ、収入の増加をはかっていると考えられ、江戸のように実勢より低く設定している場合には、金納比率が小さければ、やはり収入の増加をはかっていることになる。

もう一つの考え方もできよう。のちに述べるように、幕末期の福井においては、藩札が濫発されたと考えられ、このことが、一時的な藩収入の増加につながっていたとすれば、藩は張紙値段を高く設定する余裕をもちえたと考えることもできよう。

II 三貨交換比率の地域差と物価の地域差

本節の課題は、三貨交換比率の地域差と物価の地域差について論ずることである。

① 金相場の地域差 — 福井と大阪 —

最初に、福井における金相場（金1両につき銀匁）の動向を、大阪におけるそれとの対比において、観察することにしよう。

さきに述べた史料「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額區別調」には、相当数の欠年を含んではいるが、天保（1830～43年）末から明治初年にかけて、若干の福井金相場データが記載されている。本章では、これをもちいることにした。年によっては、金相場が、ある幅をもって示されているので、この場合には、その最高値と最低値の平均を、この年の金相場とみなした。また、大阪金相場（金1両につき銀匁）のデータは、新保博氏作成のもの⁹⁾をもちいた。

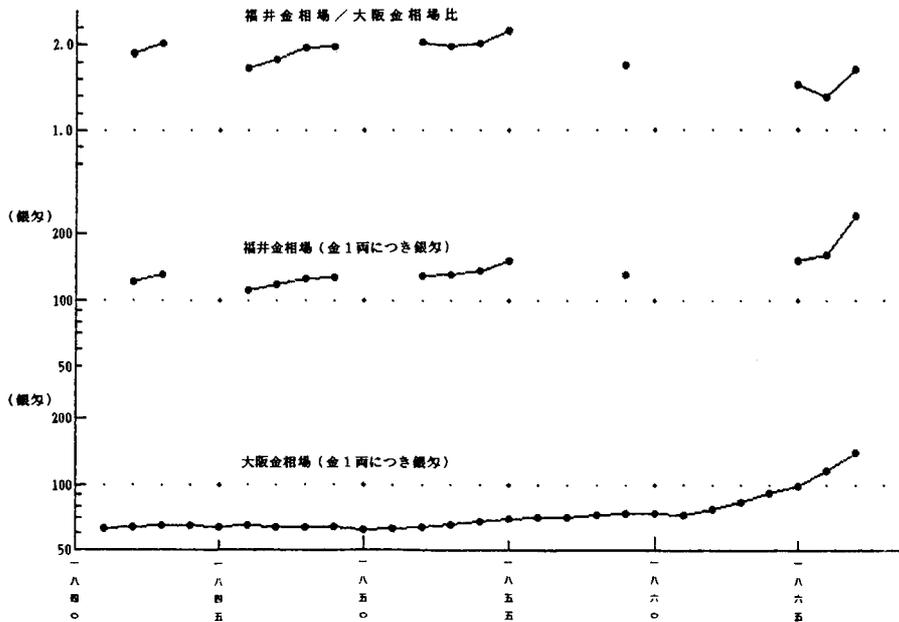
図8-4には、中段に福井金相場、下段に大阪金相場（いずれも金1両につき銀匁、半対数目盛）、上段には両者の比、すなわち、福井金相場／大阪金相場（単位1）の系列がグラフ化されている。

図8-4によれば、福井金相場の系列に相当数の欠年があり、観察には慎重を要するものの、おおむねつぎのように言ってさしつかえないであろう。すなわち、1840年代以降、幕末にいたるまで、福井金相場と大阪金相場は、趨勢的には、ほぼ同じように推移した。

ところが、福井／大阪比の系列をみると、以下に述べる二つの事実が明らかとなる。一つは、この期をつうじて、福井金相場の水準は、大阪金相場のそれに比べて、はるかに高かったということである。たとえば、1855（安政2）年に、福井／大阪比は、2.16という高い値（最大値）を示しているが、これは、福井金相場が大阪金相場のじつに116パーセント増しであったことを意味している。また、1866（慶応2）年になると、この比は小さくなったが（1.38、最小値）、それでも38パーセント増しであった。

もう一つの事実は、福井金相場／大阪金相場の比率が、1850年代をピークとして、以後、低下することである。すなわち、福井の金高銀安傾向は、いぜんとして、大阪の金高銀安傾向を上回ってはいるものの、18

図8-4 福井金相場と大阪金相場



60年代になると、急激に、大阪の金高銀安傾向がすすんだことが観察される。

観察事実〔4〕

1840年代以降、幕末にいたるまで、福井金相場と大阪金相場は、趨勢的には、ほぼ同じように推移した。しかし、この期をつうじて、福井金相場は、大阪金相場に比べて、倍近く高い水準にあった。また、福井金相場／大阪金相場の比率は、1850年代をピークとして、以後、低下した。

さて、いまの段階で、地方における金相場の長期にわたる連続的の時系列を得ることは、はなはだ困難である。数少ない例として、山崎氏が整理した「幕末期各地の金・銀相場¹⁰⁾」がある。そこでは、三都のほか、西摂農村、北摂池田町、および土佐の金相場が取り上げられている。

本章ではこれとは別個の、天野雅敏氏によって紹介された徳島における金相場の系列¹¹⁾をもちいて、これを大阪における金相場との対比において検討し、中央と地方における金相場の地域差の問題について多少の考察を行なうこととしたい。なお、徳島における金相場の系列は、1822（文政5）年から1869（明治2）年まで利用できるのもので、この期間にかぎって観察をすすめることとする。

まず、徳島金相場と大阪金相場は、1820年代以降、趨勢的には、ほぼ同じように推移した（この事実、および、以下の事実の観察のために、何枚かのグラフを用意したけれども、紙幅の制約もあり、これらのグラフを掲げることは割愛して、以下、観察事実のみを列記するにとどめたい）。つぎに、徳島金相場と大阪金相場の比率、すなわち、徳島金相場／大阪金相場比の系列をみると、1850年代までは、徳島金相場の水準は、大阪金相場のそれに比べて、およそ2、3パーセント高かったことがわかるが、1860年代になると、この比は急速に低下し、徳島金相場の水準は、大阪金相場のそれに比べて、ついには、20～30パーセントも低くなった。

また、徳島金相場、および、大阪金相場の「5ヵ年移動変動係数」を比較してみると、1860年代には、大阪金相場の変動が著しくなっている。けれども、徳島金相場と大阪金相場の「5ヵ年移動相関係数」を計算してみると、文政期（1818～29年）以降、（1840年代後半を例外とすれば）幕末まで、両地金相場の相関は明らかに強まっていることが観察された。

以上、福井と徳島の場合について、大阪との比較で、金相場の地域差についてファクト・ファインディングをこころみてきた。両地に共通しているのは、程度の差はあっても、大阪に比べて、地方金相場の水準が高いことであり、これが1860年代になると、大阪における急激な金高銀

安傾向の進展に比して、地方の金相場は、相対的に（福井）、あるいは金相場の水準そのものが大阪に追いつかないというかたちをとりながら（徳島）、大阪ほどには金高銀安傾向が進まなかったということである。

なお、福井金相場の高騰については、藩札の問題に触れておかなければならない。山崎氏も指摘しているように、^{1,2)} 福井米価は藩札建てである可能性が大きい。したがって、金相場も正銀に対するものではなくて、藩札価格であると考えられる。^{1,3)} よって、福井金相場の高騰は、すなわち藩札の減価であるということになる。

② 米価の当地金相場による両建て換算 — 福井と大阪 —

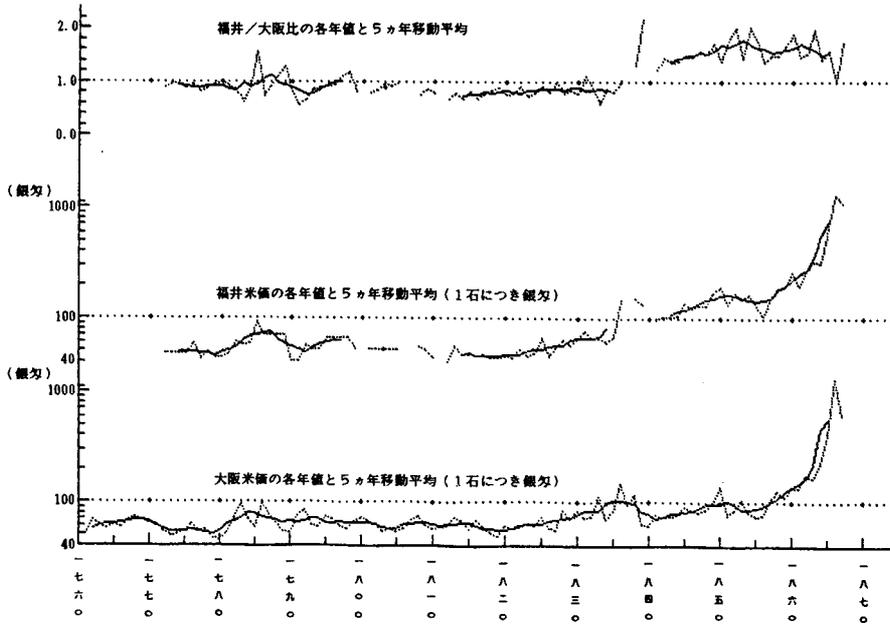
ところで、1840年代以降の、福井金相場と大阪金相場の著しい懸隔は、福井米価と大阪米価を正しく比較する際に、ひいては物価の地域差を考へる場合に、どのような問題をもたらすであろうか。

このことを検討するために、われわれは以下の米価系列を用意した。

(A)、(1) さきに述べた福井における実勢米価（坪川家文書による極月相場）。(2) 岩橋勝氏作成の「大坂堂島の正味1石当り年末相場の代表値」^{1,4)}。(B)、(1) これもさきに述べた福井における換算米価（切米値段）。(2) 5章および7章でもちいた三井大阪米価系列。

Aの系列は、福井、大阪いずれの場合も年末の実勢米価で、両地の米価水準を正しく比較しようとするわれわれの目的にかなうものである。したがって、ここでは主として、Aの系列をもちいて検討をすすめることにしたい。なお、福井実勢米価は1俵（4斗5升6合）建てで書かれているので、石建てに換算した。図8-5は、下段に、大阪米価、中段に福井実勢米価（いずれも1石につき銀匁、半対数目盛）、上段に、福井／大阪比の系列をグラフ化したものである（5ヵ年移動平均）。つづ

図8-5 福井米価と大阪米価



いて両米価を金建てに換算した。この換算のためにもちいた金相場は、さきに述べた福井金相場と大阪金相場である。

Bの系列は、福井、大阪いずれの場合も、主として年間平均の米価である。ただし福井米価は換算米価（切米値段）であるのに対し、大阪米価は相場である（福井米価はやはり石建てに換算した。また、両米価とも金建て系列を作成した）。Bの系列についても必要に応じて適宜触れることにしたい。

さて、図8-5上段の福井/大阪比（すなわち、坪川家文書による極月相場の「大坂堂島の正味1石当り年末相場の代表値」に対する比）の移動平均系列に着目しよう。まず、1780年代から1830年代にかけて、福井米価は大阪米価に比べて、おおむね、10~20パーセント低い水準にある。これに対して、1840年代以降になると、福井の米価水準は大阪のそ

れに対して、およそ40～80パーセントも高くなっている。また、Bの系列によって福井／大阪比（すなわち、福井切米値段の三井大阪米価に対する比）を計算してみると、（グラフを掲げることはできなかったが）1780年代から1830年代にかけては、やはり福井米価の方が10～20パーセント低い水準にあり、それが、1840年代以降になると、福井米価は大阪米価に比べて、なんと60～100パーセントも高い水準になっている。B系列の方が、福井／大阪比の値が大きくなる一因は、さきに指摘したように、とりわけ1840年代以降、福井において、換算米価が実勢米価よりも、ほぼ恒常的に割高であったという事実^{1,6)}に求められよう。

ところで、図8-6は、A系列による福井実勢米価と大阪米価の「5ヵ年移動相関係数」をグラフ化したものである（グラフの作り方は図8-3とまったく同じである）。これをみると、（相当数の欠年があって）観察には慎重を要するものの、おおむね、1840年代以降、福井と大阪の実勢米価は、相関の度合を強めていると言ってさしつかえないであろう。

観察事実〔5〕

1780年代から1830年代にかけて、福井実勢米価は大阪のそれに比べて、おおむね10～20パーセント低い水準にあった。これに対して、1840年代以降になると、福井の米価水準は大阪のそれに対して、およそ40～80パーセントも高くなった。しかし一方で、福井と大阪の実勢米価の変動は、1840年代以降、相関の度合を強めていた。

つぎに、福井と大阪の両建て米価の検討に移ろう。図8-7は、1840年代以降の時期について、下段に、A系列による両建て換算後の福井／大阪比（すなわち、坪川家文書による極月相場の「大坂堂島の正味1石当り年末相場の代表値」に対する比）、上段に、B系列による、やはり

図8-6 福井米価と大阪米価の「5ヵ年移動相関係数」

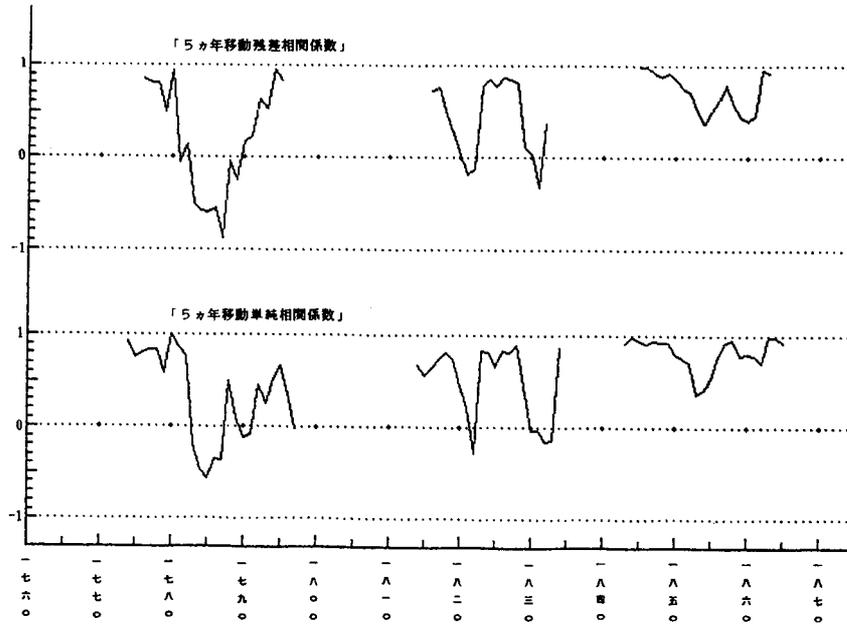
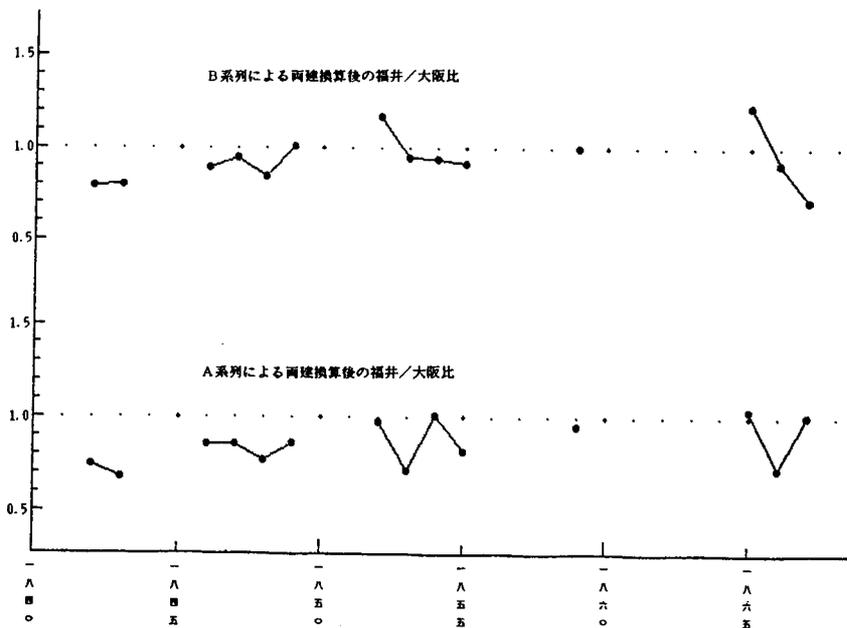


図8-7 両連換算後の福井米価／大阪米価比



両建て換算後の福井／大阪比（すなわち、福井切米値段の三井大阪米価に対する比）をドットしたものである。

両建てへの換算を行なうことで、1840年代以降の福井米価の伸び率は、大幅に下方修正される。もちろん大阪米価の伸び率も、とりわけ幕末期には、大きく下方修正される。これらの結果として、最終的に、福井／大阪比は、どのような動きを示したであろうか。

A系列による年末実勢米価の福井／大阪比の動きをみると、（欠年が多いので、観察には慎重を要するが）この比は、1840年代から60年代の中ごろにかけて、たしかに上昇していることがわかる。とはいえ、この比が1を超えることは稀であるから、この期におよんでも、なお、福井米価は大阪米価よりも安く、この価格差の解消は、明治期以降に持ち越されることとなる。¹⁷⁾

さらに、B系列による福井（切米値段）／大阪比の動きをみると、（欠年が多いので、観察には慎重を要するが）この比は、1840年代から60年代の中ごろにかけて、やはり、たしかに上昇していることがわかる。しかも、A系列のばあいと比べると、福井／大阪比の値は全般に大きく、場合によっては、福井米価が、大阪米価より20パーセントも高かったりする。しかし、この現象には、（この時期に、切米値段が、実勢米価よりも、ほぼ恒常的に割高であったという）さきに指摘した事実が反映していると考えられるから、これをそのまま、米価の地域差の解消であるとみることにはできないであろう。

ところで、観察事実〔5〕で述べたように、1780年代から1830年代にかけて、銀建て福井実勢米価は銀建て大阪米価に比べて、おおむね10～20パーセント低い水準にあった。この時期に、福井金相場が、大阪金相場より安かったとは考えにくいので、上記観察事実については、額面どお

りにうけとってよいであろう。

そうすると、米価の福井／大阪比は、江戸後期をつうじて、銀建ての場合はもちろん、両建て換算後も、やや上昇傾向にあったといえる。

観察事実〔6〕

両建て年末実勢米価の福井／大阪比の動きをみると、この比は、1840年代から60年代の中ごろにかけて、たしかに上昇している。

観察事実〔7〕

米価の福井／大阪比は、江戸後期をつうじて、銀建てのばあいはもちろん、両建て換算後も、やや上昇傾向にあったといえる。

なお、岩橋氏は、長州、広島、佐賀のばあいについて、このような札建て米価から正銀建て米価への換算を行なっていることをつけ加えておきたい。¹⁸⁾

③ 錢建て勝山米価について

今回、勝山米価（錢建て）についても、福井および大阪米価との対比で、再検討をこころみた。が、得られた結論は、前章で述べたところと変わらなかった。¹⁹⁾ 勝山／福井比（1781年＝1.00）は、全期をつうじて、基本的には不変の趨勢と考えられ、勝山／大阪比（1781年＝1.00）は、文政期（1818～29年）以降になると顕著な上昇趨勢をしめしている。

問題は、三貨交換比率の地域差を考慮にいれた勝山／大阪比の動向はどのようであったかということであるが、勝山における金相場、錢相場を知ることができない以上、この問題に答えることはできない。ただ、勝山／福井比が、基本的には不変の趨勢であったことを考慮すれば、²⁰⁾ 勝山／大阪比の上昇趨勢は、やはり下方に修正されると考えたい。

おわりに

本章で明らかとなったのはつぎの二点である。まず、福井切米値段は、全期を通じて、実勢米価よりもかなり高く（約7パーセント）決定された。この傾向は、化政期（1804～29年）以降さらに顕著となり、幕末期には、切米値段は、ほぼ恒常的に、実勢米価よりも高く（約10パーセント）決定された。さらに、幕末期の福井では、実勢米価と切米値段は、ほぼ平行に動いた。これらの事実は、明らかに江戸張紙値段の動向とは異なる。

つぎに、両建て年末実勢米価の福井／大阪比の動きをみると、この比は、1840年代から60年代の中ごろにかけて、たしかに上昇している。したがって、米価の福井／大阪比は、江戸後期をつうじて、銀建てのばあいはもちろん、両建て換算後も、やや上昇傾向にあったといえる。

注

- 1) 米価の地域間格差の縮小傾向について、宮本又郎氏はつぎのように整理している。文政期以降になると、（この）福井、龍野、松山、佐賀などのように大阪より米価が高くなる、あるいは、上昇率が高くなる地方が多くなってくる。前掲原田・宮本編著『歴史のなかの物価』、167～168ページ。
- 2) 前掲「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額区別調」。
- 3) 「米直段控」（坪川家文書、福井県立図書館蔵）。なお、「米直段控」、および、前掲「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額区別調」に収められている福井米価は、はじめ、前掲吉田「近世末

期の福井に於ける米価変動について」において取り上げられ、その後、前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、383ページ、および、前掲山崎『近世物価史研究』、67、115、206、386ページ、さらに、前掲宮本『近世日本の市場経済』、74ページ、でもちいられている。

- 4) 前掲吉田「近世末期の福井に於ける米価変動について」、47～50ページ。
- 5) すなわち、1842（天保13）年～1867（慶応3）年の切米値段を、かりに2月のものであるとみなして、全期間について2月米価の系列を作ったうえで、これを極月相場の系列と比較してみると、つぎのことが明らかとなる。すなわち、1837（天保8）年以前の時期については、正しくも、極月相場の峰と谷が、2月米価のそれに比べて、1年ずつ早くなっている場合がみられるのに対して、1842年以降になると、意外にも、両者のラグは消滅する。つぎに、結局は同じことであるが、切米値段の上記2月系列を、1781（天明元）年のものは、1780（安永9）年にドットするというふうに、全体に1年ずつ早めたうえで、これを極月相場と比較してみると、こんどは、1837年以前の時期については、正しくも、さきのラグは消滅し、1842年以降になると、あらたに、切米値段の方が極月相場を先導するといった不都合が発生する。以上のことから、1842（天保13）年～1867（慶応3）年の切米値段を、2月のものとみなすことは誤りで、暮れのものであるとみなしなければならない。当年暮れの価格と、翌年2月の価格に大きな差はないからである。なお、1837年以前の時期について、いま試みたように、切米値段の2月系列を、全体に1年ずつ早め、これを極月相場と比較する

ために、後述の図8-1、図8-2、図8-3を作りなおし、ふたたび、事実の観察を行なった。が、観察結果は、ほとんど同一であった。

- 6) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、4章1節。
- 7) 前掲山崎『近世物価史研究』、1章1、2節、2章1節、3章2節。
- 8) 山崎氏は、この結論に否定的である。氏は、近世中後期における江戸地域の米価として、この張紙値段を採らず、八王子米価を充てている（前掲山崎『近世物価史研究』、199ページ）。
- 9) 前掲新保『近世の物価と経済発展』、171～173ページ。
- 10) 前掲山崎『近世物価史研究』、391ページ。そこでは、前掲宮本「幕末明治初期京都の物価変動について；1830～79年」で紹介された京都金相場の系列も取り上げられている。
- 11) 前掲天野『阿波藍経済史研究』、138～139ページ。また、前掲同「幕末明治前期の地方産業と商業経営」（前掲『数量経済史論集 4 幕末・明治の日本経済』所収）、89ページ。
- 12) 前掲山崎『近世物価史研究』、214～215ページ、224ページ。
- 13) たとえば、前掲『福井県史』第2冊、234ページには、「……藩主松平慶永入部に際し、（天保）十四年閏九月札所趣法書を出して整理に決し、弘化三年十二月に至りて、引換相場金一両宛百三匁換を六十五匁換に恢復したりき」とある。
- 14) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、272～277ページ。
- 15) 前章では、この両米価を指数化し（1781-1785=100）、福井／大阪比の動きを検討した。
- 16) 同様の事実は、6章でみたように、勝山と大阪の米価変動の場合

にも観察された。

- 17) われわれは6章で、この問題にかんして、勝山と大阪の米価変動を検討することによって、つぎのような観察事実を得ている。すなわち、1868（明治元）年以降の実米価にかんする勝山／大阪比のグラフを観察すると、明治期から大正期にかけて、明らかに、均衡値1に向かって減衰振動を繰り返しながら収束しており、1910年代（明治43～大正8年）初期には、両米価水準はほぼ等しくなったと考えられる。
- 18) 前掲岩橋『近世日本物価史の研究』、225～272ページ、293～299ページ。
- 19) なお、錢建て（実勢）勝山米価は、5、6、7章でもちいたデータと同一で、これは5章で述べたように年末価格であると考えてよい理由が存在する。福井米価は、さきの極月相場であり、また大阪米価は、これもさきの大阪堂島の年末相場である。このように米価を年末実勢のものにそろえたうえで、これらを1781年＝100として指数化した。
- 20) なお勝山米価と福井米価の相関は、弘化期（1844～47年）以降強まっている。勝山米価を（かりに大阪錢相場で）銀建てに換算すると、さらに相関は強まる。

付表 8-1 (その1) 福井における実勢米価と換算米価の動向

年次	福井実勢米価 (極月相場)						福井換算米価 (切米値段)				大阪米価	
	極月相場 (1俵(4斗 5升6合)につき 銀匁)	同代表値 (1俵につき 銀匁)	同5年 移動平均	極細 代表値 (石につき 銀匁)	同5年 移動平均	5年 移動 変動 係数	12月 代表値 (1俵につき 銀匁)	同5年 移動平均	5年 移動 変動 係数	年間 代表値 (石につき 銀匁)	年末 相場 (石につき 銀匁)	同5年 移動平均
1760(宝暦10)											50.0	
1761(11)											51.4	
62(12)							20.2			45.4	68.9	57.7
63(13)							23.8			48.2	60.7	60.2
64(明和 1)							20.4	21.3	7.55	46.8	57.5	61.8
65(2)							20.0	22.4	10.84	44.0	62.4	61.7
1766(3)							21.9	23.0	13.88	51.6	59.4	64.2
67(4)							25.8	24.2	12.75	53.3	68.6	66.5
68(5)							27.0	24.5	10.59	59.0	73.3	67.3
69(6)							26.4	24.4	11.49	59.8	68.8	67.9
70(7)							21.6	24.1	11.17	47.4	66.3	65.0
1771(8)							21.2	22.7	11.51	46.3	62.7	60.2
72(安永 1)	21.6	21.6		47.4			24.3	22.0	7.55	47.8	54.0	56.6
73(2)	21.6	21.6		47.4			20.0	21.9	7.71	44.6	49.4	53.9
74(3)	21.6	21.6	22.6	47.4	49.5	9.7	22.9	23.2	12.96	46.9	50.4	53.7
75(4)	21.6	21.6	22.2	47.4	48.6	11.7	21.2	22.6	13.71	48.4	53.1	53.8
1776(5)	26.5	26.5	22.3	58.1	49.0	11.5	27.8	23.4	11.86	57.3	61.7	55.0
77(6)	19.5	19.5	22.0	42.8	48.2	12.8	20.9	22.6	14.91	54.4	54.3	54.1
78(7)	22.5	22.5	21.6	49.3	47.4	13.8	24.1	23.2	14.28	48.7	55.3	52.4
79(8)	19.8	19.8	20.7	43.4	45.4	6.8	19.2	22.2	9.57	44.1	46.0	50.6
80(9)	19.8	19.8	22.3	43.4	48.9	14.1	24.0	23.7	14.62	45.1	44.6	54.2
1781(天明 1)	22.0	22.0	23.0	48.2	50.5	15.5	22.6	25.8	23.06	48.8	52.9	62.0
82(2)	27.5	27.5	24.5	60.3	53.6	13.8	28.8	27.6	16.86	57.6	72.2	66.4
83(3)	26.0	26.0	28.8	57.0	63.2	25.8	34.5	27.2	18.99	69.7	94.2	69.3
84(4)	27.0	27.0	30.8	59.2	67.5	20.8	28.2	30.2	20.43	75.0	68.3	78.2
85(5)	41.5	41.5	31.7	91.0	69.5	19.4	21.8	30.0	20.87	53.3	58.7	79.1
1786(6)	32.0	32.0	32.9	70.2	72.1	16.0	37.8	28.4	20.61	64.9	97.6	73.0
87(7)	32.0	32.0	33.9	70.2	74.3	12.5	27.7	28.6	20.50	69.7	76.9	70.2
88(8)	32.0	32.0	29.4	70.2	64.5	19.8	26.4	28.3	22.39	59.2	63.5	68.9
89(寛政 1)	32.0	32.0	26.8	70.2	58.8	26.6	29.6	26.4	13.66	61.3	54.3	64.1
90(2)	19.0	19.0	25.6	41.7	56.1	25.4	20.3	26.4	13.71	50.9	52.4	65.6
1791(3)	19.0	19.0	23.9	41.7	52.4	22.7	28.0	26.6	13.69	49.5	73.6	65.0
92(4)	26.0	26.0	22.2	57.0	48.7	13.9	27.9	25.1	14.39	61.0	84.1	66.0
93(5)	23.5	23.5	24.4	51.5	53.5	16.5	27.3	27.2	11.16	62.2	60.6	70.2
94(6)	23.5	23.5	26.6	51.5	58.3	12.3	22.3	28.0	13.30	52.2	59.1	69.6
95(7)	30.0	30.0	27.4	65.8	60.1	13.0	30.6	28.3	13.35	59.5	73.6	64.8
1796(8)	30.0	30.0	28.7	65.8	62.9	10.1	31.9	28.2	13.43	67.4	70.7	64.0
97(9)	30.0	30.0	28.7	65.8	62.9	10.1	29.4	28.7	9.95	64.5	60.1	65.3
98(10)	30.0	30.0		65.8			27.0	28.7	9.83	57.0	56.7	64.9

付表 8 - 1 (その2) 福井における実勢米価と換算米価の動向

年次	福井実勢米価 (極月相場)						福井換算米価 (切米値段)				大阪米価	
	極月相場 (1俵(4斗5升6合)につき 銀匁)	同代表値 (1俵につき 銀匁)	同5年 カ移動 平均	翻騰 代表値 (石につ き銀匁)	同5年 カ移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	12月 代表値 (1俵につ き銀匁)	同5年 カ移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	年間 代表値 (石につ き銀匁)	年末 相場 (石につ き銀匁)	同5年 カ移動 平均
1799(寛政11)	23.5	23.5		51.5			24.8	27.2	9.59	56.6	65.4	63.9
1800(12)							30.3	26.5	8.79	63.4	71.6	64.4
1801(享和 1)	23.5	23.5		51.5			24.6	25.8	10.26	58.8	65.9	63.9
02(2)	23.5	23.5		51.5			25.9	25.5	11.40	54.3	62.3	62.2
03(3)	23.5	23.5	23.6	51.5	51.7	0.5	23.5	23.9	5.99	53.6	54.3	58.5
04(文化 1)	23.7	23.7		52.0			23.1	23.3	6.89	50.7	56.7	56.7
05(2)	23.7	23.7		52.0			22.2	24.1	14.08	49.2	53.3	57.9
1806(3)							21.8	24.9	14.67	46.7	56.7	62.1
07(4)							30.1	25.3	13.89	56.1	68.3	62.7
08(5)	25.3	25.3		55.5			27.4	25.3	13.79	62.2	75.5	63.3
09(6)	23.0	23.0		50.4			25.0	26.1	11.09	59.2	59.8	63.8
10(7)	19.8	19.8		43.4			22.3	24.1	11.70	51.3	56.3	62.1
1811(8)							25.7	23.8	10.19	52.6	59.1	61.2
12(9)	18.2	18.2		39.9			20.3	23.9	10.33	47.6	59.7	63.0
13(10)	25.0	25.0		54.8			25.8	24.2	9.56	50.2	71.3	63.2
14(11)	21.2	21.2	21.2	46.5	46.6	11.4	25.3	25.1	14.14	56.9	68.4	65.1
15(12)	21.0	21.0	21.8	46.1	47.8	8.2	23.8	25.7	10.47	52.0	57.6	64.9
1816(13)	20.8	20.8	20.8	45.6	45.6	2.3	30.1	24.8	13.14	58.2	68.4	61.1
17(14)	21.0	21.0	20.5	46.1	45.0	2.8	23.3	25.3	14.09	56.1	58.6	57.1
18(文政 1)	20.0	20.0	20.4	43.9	44.8	2.5	21.5	25.1	14.81	51.6	52.4	57.7
19(2)	19.8	19.8	20.3	43.4	44.4	2.4	28.0	23.6	10.67	54.7	48.7	55.4
20(3)	20.5	20.5	20.9	45.0	45.7	8.5	22.7	23.4	11.19	47.9	60.3	55.4
1821(4)	20.0	20.0	20.9	43.9	45.9	8.3	22.7	23.3	11.56	49.5	57.2	57.6
22(5)	24.0	24.0	21.3	52.6	46.8	7.7	22.1	22.3	3.21	48.7	58.3	59.8
23(6)	20.4	20.4	23.3	44.7	51.1	18.2	21.1	22.3	3.21	48.1	63.3	62.3
24(7)	21.8	21.8	23.5	47.8	51.5	17.5	22.8	22.2	3.05	47.8	59.7	62.2
25(8)	30.4	30.4	23.7	66.7	51.9	17.6	22.7	22.7	6.30	47.9	72.8	61.6
1826(9)	20.8	20.8	25.5	45.6	56.0	17.2	22.1	24.4	12.15	55.5	57.0	65.7
27(10)	25.0	25.0	26.4	54.8	57.8	14.7	25.0	25.3	12.10	51.5	55.1	67.7
28(11)	29.6	29.6	26.3	64.9	57.6	14.3	29.3	28.2	20.36	59.9	84.0	70.2
29(12)	26.0	26.0	29.2	57.0	64.1	14.1	27.4	30.5	16.07	65.6	69.8	73.1
30(天保 1)	30.0	30.0	30.2	65.8	66.3	11.2	37.3	31.7	12.10	65.4	84.9	76.9
1831(2)	35.5	35.5	30.3	77.9	66.4	11.2	33.4	34.3	16.50	79.8	71.8	82.9
32(3)	30.0	30.0	30.6	65.8	67.1	9.6	31.1	35.3	12.57	67.8	73.9	83.1
33(4)	30.0	30.0	30.8	65.8	67.5	9.5	42.1	34.2	13.08	79.3	114.2	83.0
34(5)	27.5	27.5	37.3	60.3	81.8	46.1	32.5	40.2	34.04	83.7	70.8	98.0
35(6)	31.0	31.0		68.0			31.9			63.0	84.2	101.9
1836(7)	68.0	68.0		149.1			63.3			105.6	147.0	102.3
37(8)										175.5	93.4	100.8

付表 8 - 1 (その3) 福井における実勢米価と換算米価の動向

年次	福井実勢米価 (極月相場)					福井換算米価 (切米値段)					大阪米価	
	極月相場 (1俵(44 5升6合)につき 銀匁)	同代表値 (1俵につき 銀匁)	同5年 カ移動 平均	翻騰 代表値 (石につ き銀匁)	同5年 カ移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	12月 代表値 (1俵につ き銀匁)	同5年 カ移動 平均	5カ年 移動 変動 係数	年間 代表値 (石につ き銀匁)	年末 相場 (石につ き銀匁)	同5年 カ移動 平均
1838(天保 9)	70.0	70.0		153.5							116.3	96.1
39(10)	62.0	62.0		136.0							63.0	82.2
40(11)											60.6	78.1
1841(12)	44.0	44.0		96.5							77.9	69.9
42(13)	47.2	47.2		103.5			51.8			113.5	72.5	72.8
43(14)	47.0	47.0	49.9	103.1	109.4	14.5	53.0			116.2	75.5	79.0
44(弘化 1)	48.8	48.8	52.3	107.0	114.6	12.9	57.0	57.1	8.71	125.0	77.5	80.1
45(2)	62.4	62.4	54.6	136.8	119.8	12.1	59.5	60.1	9.23	130.5	91.4	82.1
1846(3)	56.0	56.0	57.2	122.8	125.5	9.2	64.0	62.5	6.60	140.4	83.6	84.4
47(4)	59.0	59.0	63.1	129.4	138.3	13.7	67.0	67.5	12.68	146.9	82.3	88.9
48(嘉永 1)	60.0	60.0	68.0	131.6	149.2	20.2	65.0	74.6	18.15	142.5	87.1	98.3
49(2)	78.0	78.0	69.2	171.1	151.8	18.3	82.0	76.4	16.13	179.8	100.0	97.1
50(3)	87.2	87.2	73.0	191.2	160.2	15.9	95.0	80.6	14.75	208.3	138.5	97.8
1851(4)	62.0	62.0	75.0	136.0	164.6	12.7	73.0	83.8	9.82	160.1	77.6	101.9
52(5)	78.0	78.0	74.4	171.1	163.2	12.6	88.0	83.6	9.92	193.0	86.0	98.1
53(6)	70.0	70.0	69.0	153.5	151.3	11.4	81.0	78.6	9.11	177.6	107.5	85.4
54(安政 1)	75.0	75.0	66.2	164.5	145.2	18.5	81.0	75.1	16.92	177.6	80.9	85.3
55(2)	60.0	60.0	64.6	131.6	141.7	16.7	70.0	73.2	14.86	153.5	74.8	88.6
1856(3)	48.0	48.0	67.7	105.3	148.5	21.2	55.5	75.8	18.79	121.7	77.1	92.3
57(4)	70.0	70.0	70.0	153.5	153.5	23.7	78.5	78.0	20.50	172.1	102.8	98.8
58(5)	85.5	85.5	81.5	187.5	178.7	31.2	94.0	87.7	26.30	206.1	126.0	110.9
59(6)	86.5	86.5	90.2	189.7	197.8	19.1	92.0	96.7	15.08	201.8	113.3	122.8
60(万延 1)	115~120	117.5	101.0	257.7	221.5	18.1	118.5	107.0	15.48	259.9	135.4	137.8
1861(文久 1)	90~93	91.5	113.4	200.7	248.7	22.0	100.5	119.9	21.86	220.4	136.3	145.6
62(2)	120~128	124.0	125.1	271.9	274.3	18.3	130.0	135.5	21.08	285.1	177.8	167.7
63(3)	140~155	147.5	162.6	323.5	356.6	50.9	158.5	171.8	44.56	347.6	165.0	225.0
64(元治 1)	140~150	145.0	264.3	318.0	579.6	76.1	170.0	271.2	71.45	372.8	223.8	463.2
65(慶応 1)	290~320	305.0	340.6	668.9	746.9	60.8	300.0	351.2	57.87	657.9	422.3	555.2
1866(2)	600	600.0		1315.8			597.5			1310.3	1326.9	
67(3)	505.5	505.5		1108.6			530.0			1162.3	638.1	

(出所) 「米直段控」(坪川家文書、福井県立図書館蔵)、「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額区別調」(松平文庫、福井県立図書館蔵)、岩橋勝「徳川期諸地方米価の長期的時系列史料」『松山商大論集』29巻6号(1979年)。

付表 8-2 (その1) 福井における米価諸系列の動向

年次	米価の比					両建米価とその比					実勢米価と換算米価の相関係数				
	換算米価/実勢米価	同5ヵ年移動平均	5ヵ年移動変動係数	福井米価/大阪米価	同5ヵ年移動平均	福井米A(石につき)	大阪米A(石につき)	福井米A/大阪米A	福井米B(石につき)	大阪米B(石につき)	福井米B/大阪米B	5ヵ年移動単純相関係数	実勢米残	換算米残	5ヵ年移動残差相関係数
1760(宝暦10)							0.79								
1761(11)							0.80								
62(12)							1.11								
63(13)							0.97								
64(明和1)							0.92								
65(2)							0.99								
1766(3)							0.93								
67(4)							1.09								
68(5)							1.15								
69(6)							1.07								
70(7)							1.01								
1771(8)							0.94								
72(安永1)	1.13			0.88			0.80								
73(2)	0.93			0.96			0.77								
74(3)	1.06	1.03	7.4	0.94	0.92		0.82				0.84	-1.0	-0.3		
75(4)	0.98	1.02	6.1	0.89	0.90		0.89				0.90	-0.6	-1.4		
1776(5)	1.05	1.05	3.6	0.94	0.89		1.04				0.96	4.2	4.4	0.97	
77(6)	1.07	1.03	4.9	0.79	0.89		0.90				0.96	-2.5	-1.7	0.93	
78(7)	1.07	1.07	8.2	0.89	0.91		0.90				0.85	0.9	0.9	0.81	
79(8)	0.97	1.07	8.4	0.94	0.90		0.75				0.55	-0.9	-3.0	0.22	
80(9)	1.21	1.06	8.5	0.97	0.91		0.74				0.86	-2.5	0.3	0.51	
1781(天明1)	1.03	1.12	13.3	0.91	0.85		0.92		0.89		0.82	-1.0	-3.2	-0.23	
82(2)	1.05	1.13	11.7	0.84	0.84		1.20		1.06		0.71	3.0	1.2	-0.04	
83(3)	1.33	0.99	29.2	0.61	0.95		1.56		1.39		-0.40	-2.8	7.3	-0.64	
84(4)	1.04	1.02	29.5	0.87	0.92		1.14		1.54		-0.56	-3.8	-2.0	-0.67	
85(5)	0.53	0.99	31.3	1.55	0.93		0.98		1.10		-0.62	9.8	-8.2	-0.63	
1786(6)	1.18	0.89	28.0	0.72	1.03		1.64		1.18		-0.50	-0.9	9.4	-0.59	
87(7)	0.86	0.86	27.2	0.91	1.12		1.39		1.66		-0.65	-1.9	-1.0	-0.64	
88(8)	0.82	0.97	15.3	1.11	0.96		1.15		1.29		0.71	2.6	-2.0	0.44	
89(寛政1)	0.92	1.03	25.7	1.29	0.93		0.97		1.17		0.57	5.2	3.2	0.59	
90(2)	1.07	1.07	23.1	0.80	0.89		0.94		1.03		0.54	-6.6	-6.2	0.66	
1791(3)	1.47	1.14	18.0	0.57	0.84		1.29		1.08		0.64	-4.9	1.4	0.78	
92(4)	1.07	1.14	17.5	0.68	0.75		1.43		1.48		0.35	3.8	2.7	0.66	
93(5)	1.16	1.13	18.1	0.85	0.77		1.00		1.32		0.41	-0.9	0.1	0.54	
94(6)	0.95	1.05	7.4	0.87	0.84		0.98		1.01		0.87	-3.1	-5.7	0.87	
95(7)	1.02	1.03	8.0	0.89	0.93		1.21		1.05		0.85	2.6	2.3	0.90	
1796(8)	1.06	0.98	6.4	0.93	0.99		1.17		1.21		0.88	1.3	3.7		
97(9)	0.98	1.00	6.6	1.09	0.97		0.98		1.15		0.78	1.3	0.7		
98(10)	0.90			1.16			0.92		1.06						

付表 8-2 (その2) 福井における米価諸系列の動向

年次	米価の比					両建米価とその比					実勢米価と換算米価の相関係数				
	換算米価/実勢米価	同5年移動平均	5カ年移動変動係数	福井米価/大阪米価	同5年移動平均	福井米価A(石につき)	大阪米価A(石につき)	福井米価A/大阪米価A	福井米価B(石につき)	大阪米価B(石につき)	福井米価B/大阪米価B	5カ年移動単純相関係数	実勢米価残差	換算米価残差	5カ年移動残差相関係数
1799(寛政11)	1.05			0.79			1.05			1.10					
1800(12)							1.16			1.23					
1801(享和 1)	1.05			0.78			1.07			1.12					
02(2)	1.10			0.83			0.99			1.03					
03(3)	1.00	1.01	6.4	0.95	0.89		0.86			0.95		-0.77	-0.1	-0.4	
04(文化 1)	0.97			0.92			0.89			0.87					
05(2)	0.94			0.98			0.82			0.86					
1806(3)							0.86			0.88					
07(4)							1.04			0.98					
08(5)	1.08			0.73			1.14			1.08					
09(6)	1.09			0.84			0.93			1.02					
10(7)	1.13			0.77			0.89			0.90					
1811(8)							0.92			1.18					
12(9)	1.12			0.67			0.93			0.86					
13(10)	1.03			0.77			1.10			0.96					
14(11)	1.19	1.18	13.3	0.68	0.72		1.06			1.02		0.44	-0.0	0.2	
15(12)	1.13	1.18	13.4	0.80	0.74		0.88			1.01		-0.02	-0.8	-1.9	
1816(13)	1.45	1.19	12.5	0.67	0.75		1.05			0.96		0.38	0.0	5.3	0.26
17(14)	1.11	1.24	14.5	0.79	0.80		0.90			0.98		-0.04	0.5	-2.0	0.07
18(文政 1)	1.08	1.23	14.9	0.84	0.79		0.84			0.89		0.05	-0.4	-3.6	-0.11
19(2)	1.41	1.17	11.9	0.89	0.81		0.81			0.84		-0.34	-0.5	4.4	-0.25
20(3)															
	1.11	1.13	15.8	0.75	0.83		1.03			0.85		-0.35	-0.4	-0.7	-0.00
1821(4)	1.14	1.12	16.3	0.77	0.80		0.94			0.99		-0.37	-0.9	-0.6	0.14
22(5)	0.92	1.05	7.9	0.90	0.78		0.93			0.94		-0.01	2.7	-0.2	0.25
23(6)	1.03	0.98	15.3	0.71	0.82		0.99			0.92		0.34	-2.9	-1.2	0.31
24(7)	1.05	0.96	13.8	0.80	0.83		0.94			1.00		0.54	-1.7	0.6	0.59
25(8)	0.75	0.98	13.4	0.92	0.84		1.13			1.00		0.41	6.7	-0.0	0.54
1826(9)	1.06	0.97	13.2	0.80	0.86		0.89			1.09		0.54	-4.7	-2.3	0.59
27(10)	1.00	0.97	13.3	1.00	0.86		0.85			0.89		0.42	-1.4	-0.3	0.77
28(11)	0.99	1.07	9.5	0.77	0.83		1.30			1.05		0.87	3.3	1.1	0.58
29(12)	1.05	1.05	11.2	0.82	0.89		1.09			1.29		0.69	-3.2	-3.1	0.14
30(天保 1)	1.24	1.05	10.9	0.77	0.87		1.31			1.16		0.53	-0.2	5.6	0.22
1831(2)	0.94	1.14	16.3	1.08	0.83		1.15			1.28		0.30	5.2	-0.8	0.00
32(3)	1.04	1.16	15.5	0.89	0.84		1.18			1.12		-0.06	-0.6	-4.2	0.47
33(4)	1.40	1.12	16.2	0.58	0.84		1.81			1.50		-0.05	-0.8	7.9	
34(5)	1.18	1.12	16.4	0.85	0.83		1.12			1.62		0.95	-9.8	-7.7	
35(6)	1.03			0.81			1.34			1.22					
1836(7)	0.93			1.01			2.39			1.82					
37(8)							1.55			2.74					

付表 8-2 (その3) 福井における米価諸系列の動向

年次	米価の比				両建米価とその比						実勢米価と換算米価の相関係数				
	換算米価/実勢米価	同5年移動平均	5カ年移動変動係数	福井米価/大阪米価	同5年移動平均	福井米価A(石)に對し	大阪米価A(石)に對し	福井米価A(石)/大阪米価A(石)	福井米価B(石)に對し	大阪米価B(石)に對し	福井米価B(石)/大阪米価B(石)	5カ年移動単純相関係数	実勢米価残差	換算米価残差	5カ年移動残差相関係数
1838(天保 9)				1.32			1.95			1.85					
39(10)				2.16			1.06			1.45					
40(11)							0.98			1.09					
1841(12)				1.24			1.25			1.10					
42(13)	1.10			1.43		0.85	1.14	0.75	0.94	1.19	0.79				
43(14)	1.13			1.37	1.38	0.79	1.17	0.68	0.89	1.12	0.80				
44(弘化 1)	1.17	1.10	7.7	1.38	1.43		1.20			1.17		0.74	-3.5	-0.0	
45(2)	0.95	1.11	7.8	1.50	1.46		1.43			1.32		0.70	7.8	-0.6	
1846(3)	1.14	1.10	7.8	1.47	1.49	1.11	1.30	0.85	1.27	1.42	0.90	0.51	-1.2	1.5	0.54
47(4)	1.14	1.07	7.2	1.57	1.55	1.10	1.29	0.85	1.25	1.32	0.95	0.87	-4.1	-0.5	0.76
48(嘉永 1)	1.08	1.10	3.5	1.51	1.53	1.05	1.37	0.77	1.14	1.35	0.85	0.99	-8.0	-9.6	0.95
49(2)	1.05	1.11	4.5	1.71	1.59	1.36	1.57	0.86	1.43	1.41	1.01	0.98	8.8	5.6	0.97
50(3)	1.09	1.11	4.4	1.38	1.67		2.25			1.92		0.97	14.2	14.4	0.98
1851(4)	1.18	1.12	4.5	1.75	1.65		1.24			1.74		0.95	-13.0	-10.8	0.98
52(5)	1.13	1.13	3.7	1.99	1.72	1.33	1.36	0.98	1.50	1.28	1.17	0.98	3.6	4.4	0.99
53(6)	1.16	1.14	3.4	1.43	1.79	1.18	1.64	0.72	1.37	1.45	0.94	0.97	1.0	2.4	0.98
54(安政 1)	1.08	1.14	3.1	2.03	1.71	1.22	1.21	1.01	1.32	1.40	0.94	0.99	8.8	5.9	0.99
55(2)	1.17	1.14	3.2	1.76	1.62	0.88	1.08	0.81	1.02	1.12	0.92	0.98	-4.6	-3.2	0.99
1856(3)	1.16	1.12	3.3	1.37	1.63		1.10			1.11		0.99	-19.7	-20.3	0.98
57(4)	1.12	1.12	3.8	1.49	1.56		1.45			1.29		1.00	0.0	0.5	0.99
58(5)	1.10	1.09	5.2	1.49	1.58		1.74			1.63		1.00	4.0	6.3	0.98
59(6)	1.06	1.08	4.1	1.67	1.61	1.46	1.54	0.95	1.55	1.55	1.00	0.99	-3.7	-4.7	0.98
60(万延 1)	1.01	1.06	3.6	1.90	1.61		1.85			1.90		0.99	16.5	11.5	0.97
1861(文久 1)	1.10	1.06	3.2	1.47	1.71		1.88			2.33		0.99	-21.9	-19.4	0.99
62(2)	1.05	1.08	5.7	1.53	1.66		2.30			1.92		0.96	-1.1	-5.5	1.00
63(3)	1.07	1.08	6.4	1.96	1.59		1.98			1.90		0.99	-15.1	-13.3	0.97
64(元治 1)	1.17	1.05	7.2	1.42	1.50		2.46			2.19		1.00	-119.3	-101.2	
65(慶応 1)	0.98	1.05	7.2	1.58	1.54	4.46	4.30	1.04	4.39	3.59	1.22	1.00	-35.6	-51.2	
1866(2)	1.00			0.99		8.22	11.42	0.72	8.19	8.96	0.91				
67(3)	1.05			1.74		4.62	4.58	1.01	4.84	6.77	0.72				

(出所)「米直段控」(坪川家文書、福井県立図書館蔵)、「福井藩祿高中諸給人惣額公私諸費惣額區別調」(松平文庫、福井県立図書館蔵)、岩橋勝「徳川期諸地方米価の長期的時系列史料」『松山商大論集』29巻6号(1979年)、新保博『近世の物価と経済発展—前工業化社会への数量的接近—』(東洋経済新報社、1978年)、三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物價の動態』(日本學術振興会、1952年)、大蔵省編『大日本貨幣史』6巻(1877年および1878年)。

付表 8-3 (その1) 米価諸系列と金相場の動向

年次	大阪米価と福井米価の相関係数				各地金相場とその比								
	5ヵ年 移動単 純相関 係数	大阪 米価 残差	福井 米価 残差	5ヵ年 移動残 差相関 係数	福井金相場 (金1両 につき銀匁)	同 代表値	大阪 金相場	5ヵ年 移動 変動 係数	徳島 金相 場	5ヵ年 移動 変動 係数	福井 /大阪 比	徳島 /大阪 比	大阪徳 島 5ヵ年 移動単純相 関係数
1760(宝暦10)							63.5						
1761(11)							63.9						
62(12)							62.2	1.2					
63(13)							62.5	1.1					
64(明和 1)							62.4	0.8					
65(2)							62.8	0.8					
1766(3)							63.6	0.9					
67(4)							63.1	0.9					
68(5)							63.8	1.5					
69(6)							64.2	2.4					
70(7)							65.7	2.5					
1771(8)							66.9	2.3					
72(安永 1)							67.7	3.9					
73(2)							64.3	5.4					
74(3)	0.92	-3.3	-2.1				61.2	5.6					
75(4)	0.75	-0.7	-1.2				59.7	3.3					
1776(5)	0.80	6.7	9.1	0.84			59.3	1.4					
77(6)	0.83	0.2	-5.4	0.79			60.1	1.6					
78(7)	0.82	2.9	1.9	0.81			61.2	1.4					
79(8)	0.59	-4.6	-2.0	0.49			61.5	2.7					
80(9)	1.00	-9.6	-5.5	0.94			60.4	2.7					
1781(天明 1)	0.86	-9.1	-2.2	-0.06			57.4	2.5					
82(2)	0.77	5.8	6.7	0.13			59.9	2.1					
83(3)	-0.20	24.9	-6.1	-0.50			60.3	2.0					
84(4)	-0.47	-9.9	-8.3	-0.59			60.0	0.5					
85(5)	-0.56	-20.4	21.5	-0.60			60.0	3.5					
1786(6)	-0.35	24.6	-2.0	-0.56			59.4	4.2					
87(7)	-0.37	6.7	-4.2	-0.88			55.4	4.1					
88(8)	0.49	-5.4	5.7	-0.04			55.3	3.0					
89(寛政 1)	0.09	-9.8	11.4	-0.25			55.8	1.2					
90(2)	-0.13	-13.2	-14.5	0.17			56.0	2.4					
1791(3)	-0.09	8.6	-10.7	0.24			57.0	3.6					
92(4)	0.46	18.1	8.3	0.62			58.8	3.4					
93(5)	0.25	-9.6	-2.0	0.53			60.7	2.7					
94(6)	0.52	-10.5	-6.8	0.96			60.2	1.4					
95(7)	0.67	8.8	5.7	0.83			60.7	0.8					
1796(8)	0.36	6.7	2.9				60.7	1.0					
97(9)	-0.01	-5.2	2.9				61.5	1.0					
98(10)							61.5	0.9					

付表 8-3 (その2) 米価諸系列と金相場の動向

年次	大阪米価と福井米価の相関係数				各地金相場とその比								
	5カ年 移動単 純相関 係数	大阪 米価 残差	福井 米価 残差	5カ年 移動残 差相関 係数	福井金相場 (金1両 につき銀匁)	同 代表値	大阪 金相場	5カ年 移動 変動 係数	徳島 金相場	5カ年 移動 変動 係数	福井 /大阪 比	徳島 /大阪 比	大阪徳 島5カ年 移動単純相 関係数
1799(寛政11)							62.1	0.4					
1800(12)							61.8	0.9					
1801(享和 1)							61.6	1.3					
02(2)							62.9	1.6					
03(3)	-0.59	-4.2	-0.2				63.5	1.9					
04(文化 1)							64.0	1.8					
05(2)							64.8	1.6					
1806(3)							65.8	1.4					
07(4)							65.9	1.1					
08(5)							66.2	1.7					
09(6)							64.5	1.8					
10(7)							63.6	1.6					
1811(8)							64.0	0.7					
12(9)							64.4	0.8					
13(10)							64.8	0.7					
14(11)	0.68	3.3	-0.1				64.7	0.7					
15(12)	0.57	-7.3	-1.8				65.3	0.5					
1816(13)	0.65	7.3	-0.0	0.73			65.4	1.8					
17(14)	0.73	1.5	1.1	0.75			65.4	3.8					
18(文政 1)	0.81	-5.3	-0.9	0.46			62.7	4.9					
19(2)	0.74	-6.7	-1.0	0.26			60.0	4.2					
20(3)	0.46	4.9	-0.8	0.03			58.6	2.8					
1821(4)	0.22	-0.4	-2.1	-0.19			60.9	3.5					
22(5)	-0.28	-1.5	5.8	-0.13			62.5	3.6	63.0			1.01	
23(6)	0.83	1.0	-6.4	0.77			64.2	2.2	63.8			0.99	
24(7)	0.82	-2.5	-3.7	0.85			63.4	1.3	65.8	2.0		1.04	0.61
25(8)	0.67	11.2	14.7	0.77			64.3	0.7	65.6	1.2		1.02	-0.20
1826(9)	0.82	-8.7	-10.4	0.86			64.4	0.8	65.6	0.3		1.02	-0.70
27(10)	0.81	-12.6	-3.0	0.84			64.6	0.4	65.2	0.3		1.01	0.37
28(11)	0.90	13.8	7.3	0.80			64.6	0.5	65.6	0.3		1.02	0.51
29(12)	0.46	-3.3	-7.1	0.11			63.9	1.3	65.2	0.3		1.02	0.20
30(天保 1)	-0.03	8.0	-0.5	0.03			64.6	1.6	65.6	1.6		1.02	0.66
1831(2)	-0.03	-11.1	11.4	-0.32			62.6	1.4	65.4	1.5		1.04	0.62
32(3)	-0.15	-9.2	-1.3	0.37			62.5	1.3	63.2	1.5		1.01	0.59
33(4)	-0.14	31.2	-1.8				63.1	0.5	64.6	1.4		1.02	0.30
34(5)	0.86	-27.2	-21.5				63.2	1.1	64.6	1.3		1.02	-0.03
35(6)							63.0	2.0	65.4	1.3		1.04	0.70
1836(7)							61.5	2.5	65.0	1.9		1.06	0.87
37(8)							60.3	2.4	63.2	2.4		1.05	0.96

付表 8-3 (その3) 米価諸系列と金相場の動向

年次	大阪米価と福井米価の相関係数				各地金相場とその比								
	5カ年 移動単 純相関 係数	大阪 米価 残差	福井 米価 残差	5カ年 移動残 差相関 係数	福井金相場 (金1両 につき銀匁)	同 代表値	大阪 金相場	5カ年 移動 変動 係数	徳島 金相場	5カ年 移動 変動 係数	福井 /大阪 比	徳島 /大阪 比	大阪徳 島 5カ年 移動単純相 関係数
1838(天保 9)							59.7	1.8	62.6	2.1		1.05	0.37
39(10)							59.4	2.1	61.8	1.2		1.04	0.32
40(11)							61.8	3.0	61.8	1.3		1.00	0.66
1841(12)							62.3	3.3	63.4	2.4		1.02	0.86
42(13)					119.2~123.5	121.4	63.7	2.1	63.4	2.7	1.90	0.99	0.90
43(14)	0.91	-3.5	-6.3		130	130.0	64.7	1.5	65.4	1.9	2.01	1.01	0.78
44(弘化 1)	0.98	-2.6	-7.6				64.5	0.6	66.0	1.5		1.02	0.66
45(2)	0.93	9.3	17.0	0.98			63.9	0.6	65.4	0.4		1.02	0.47
1846(3)	0.90	-0.8	-2.7	0.98	110~111.3	110.7	64.1	0.5	65.4	0.4	1.73	1.02	0.73
47(4)	0.95	-6.6	-8.9	0.93	117.6	117.6	63.9	0.3	65.4	0.3	1.84	1.02	-0.86
48(嘉永 1)	0.93	-11.2	-17.6	0.88	125	125.0	63.7	1.6	65.6	0.4	1.96	1.03	-0.86
49(2)	0.93	2.9	19.2	0.92	126	126.0	63.6	1.5	65.8	0.7	1.98	1.03	-0.24
50(3)	0.79	40.7	31.1	0.85			61.6	1.4	66.0	0.8		1.07	-0.10
1851(4)	0.76	-24.3	-28.6	0.76			62.8	2.2	64.8	0.8		1.03	0.20
52(5)	0.71	-12.1	7.8	0.71	130~128	129.0	63.3	3.4	66.0	2.9	2.04	1.04	0.78
53(6)	0.37	22.1	2.2	0.50	130	130.0	65.4	4.2	66.0	3.6	1.99	1.01	0.92
54(安政 1)	0.42	-4.4	19.3	0.37	135	135.0	67.1	4.2	69.8	3.7	2.01	1.04	0.93
55(2)	0.53	-13.8	-10.1	0.50	150	150.0	69.5	3.3	70.0	3.7	2.16	1.01	0.94
1856(3)	0.78	-15.2	-43.2	0.64			70.1	2.8	71.6	2.4		1.02	0.91
57(4)	0.93	4.0	0.0	0.78			70.8	2.5	72.8	3.3		1.03	0.98
58(5)	0.95	15.1	8.8	0.57			72.5	2.2	73.8	2.6		1.02	0.98
59(6)	0.78	-9.5	-8.1	0.45	130	130.0	73.8	1.6	76.4	2.0	1.76	1.04	0.92
60(万延 1)	0.81	-2.4	36.2	0.40			73.4	2.7	75.4	1.5		1.03	0.29
1861(文久 1)	0.79	-9.3	-48.0	0.47			72.5	5.8	73.6	4.3		1.02	0.88
62(2)	0.71	10.1	-2.4	0.96			77.2	9.7	74.8	6.0		0.97	0.95
63(3)	0.98	-60.0	-33.1	0.93			83.3	12.3	82.0	8.4		0.98	0.98
64(元治 1)	0.99	-239.4	-261.6				91.0	16.2	84.0	7.5		0.92	0.87
65(慶応 1)	0.92	-132.9	-78.1		150	150.0	98.2	21.3	90.0	4.5	1.53	0.92	0.76
1866(2)					160	160.0	116.2		90.0		1.38	0.77	
67(3)					240	240.0	139.3		90.0		1.72	0.65	

(出所) 岩橋勝「徳川期諸地方米価の長期的時系列史料」『松山商大論集』29巻6号(1979年)、「米直段控」(坪川家文書、福井県立図書館蔵)、「福井藩禄高中諸給人惣額公私諸費惣額区別調」(松平文庫、福井県立図書館蔵)、新保博『近世の物価と経済発展—前工業化社会への数量的接近—』(東洋経済新報社、1978年)、天野雅敏『阿波藍経済史研究—近代移行期の産業と経済発展—』(吉川弘文館、1986年)。

結 章 近世の市場経済と地域差

はじめに

われわれはこれまで、8章にわたって、近世市場経済の地域差について、生産、物価、賃金といった数量データの分析を中心に検討をかさねてきた。そこでは、史資料の整理と加工、ファクト・ファインディング、簡単な解釈などが行なわれた。しかし、それぞれの章はそれ自体一つの小さなまとまりをもたなければならなかったので、各章における観察や分析や含意が、そのまま全体としてひとつのまとまりをもっているというわけにはゆかなかった。

そこで本章では、各章に散らばっている個別的な観察、分析、含意を、ひとつのまとまりとして論述する試みを行ないたいと思う。無論成功しているとはいいがたいであろう。思わぬ欠陥が潜んでいはいまいかと心配である。また一般に、体系的なものを目指しても、それは個別的なもの比べてさえ、長く命脈を保つことはむづかしいのではないだろうか。新しい史実が発見されるし、それ以上に問題への関心はうつろいやすい。そうではあるが、またそうあるべきだと考えられもするが、しかし、筆者としては、とりあえずは一応のまとめをしておきたいと思う。

Ⅰ 関西における生産・物価・賃金

図9-1および図9-2は、われわれがこれまでに整備した近世関西における生産、物価、賃金の時系列をグラフ化したものである。

図9-1（下から）一段目は、播州加古郡野添村（現兵庫県加古郡播磨町）における米価¹⁾（石につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛）を図示したものである。二段目は、京都消費者物価指数(A)（1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛）をグラフ化している。ここで(A)というのは、京都消費者物価指数の構成品目が、白米、餅米、塩、味噌、醤油、酢、酒、煎茶、煙草、堅炭、和炭、薪、燈油、蠟燭の計14品目からなっていることを表わしている²⁾。三段目は、播州加古郡野添村玄米反当収量³⁾（反につき石、5ヵ年移動平均、半対数目盛）を図示したものである。そして四段目は、京都日雇実質賃金指数(A)（1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛）をグラフ化している。(A)というのは、実質賃金算出の際に京都消費者物価指数(A)をもちいたことを表わしている⁴⁾。

ところで、本章で掲げたすべてのグラフには、時期区分を表わす縦の線が描き込まれている。これはさきに述べたように、京都、江戸の両地で、生産、物価、賃金データがそろそろおよそ文政期（1818～29年）以降の時期について、両地の消費者物価の峰および谷に着目して時期区分を行なったものである（ただし図9-3、図9-10を除く）。すなわち、Ⅰ期は、1820（文政3）年の谷から、1838（天保9）年の峰をへて、1842（天保13）年の谷まで。Ⅱ期は、1842（天保13）年の谷から、1852（嘉永5）年の峰をへて、1854（安政元）年の谷まで。Ⅲ期は、1854（安政元）年の谷以降の時期である。なお、図9-1、二段目の京都消

費者物価指数(A)の系列と、図9-4、二段目の江戸消費者物価指数(A)の系列には、参考のために、波動の峰(○)と谷(●)を描き込んでおいた。

つぎに、図9-2、一段目は、京都建築労働者(大工、左官)貨幣賃金⁵⁾(1人につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛)を図示したものである。二段目は、(新)京都日雇労働者貨幣賃金⁶⁾(1人につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛)をグラフ化している。ここで(新)というのは、データの出所が『近世後期における主要物価の動態』[増補改訂]⁷⁾であることを表わしている。そして三段目は、京都日雇労働者貨幣賃金(新)／京都建築労働者貨幣賃金比⁸⁾(5ヵ年移動平均、普通目盛)を図示したものである。

さて、図9-1、図9-2計7本の系列のうち米価と反収の系列を除けば、残る5本は物価と賃金の系列である。われわれはすでに1章で、これら5本の系列を個別にあるいは相互に比較対照しながら、詳しい観察を行なった。いま観察結果を、1820年代を境目として、さらには趨勢的なものと循環的なものとを区別しながら、簡単に要約すればおよそつぎのとおりとなろう。

(1)まず、京都日雇実質賃金(図9-1四段目)は、1820年代前半のピークにかけて、趨勢的には、ほぼ着実に上昇した。この間、物価(図9-1二段目)は、(データを欠いている時期を別にすれば)下降の趨勢にあったから、賃金と物価は逆相関の関係にあったといえよう。循環的にみても、1820(文政元)年以前の時期について、物価の動向と、日雇実質賃金のそれとは、やはりほぼ逆相関の関係にあった。そしてこの逆相関は、多くの場合、物価が下落しているときに貨幣賃金(図9-2二段目)が上昇し(したがってこのとき実質賃金は大きく上昇し)、物価

図9-1 近世関西における生産・物価・資金の動向—その1— (5ヵ年移動平均)

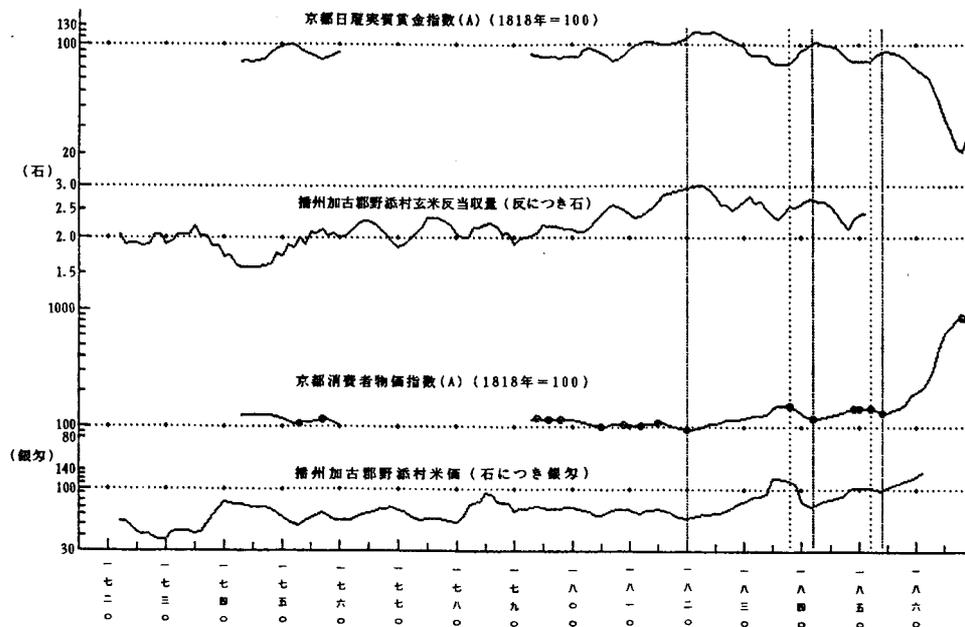
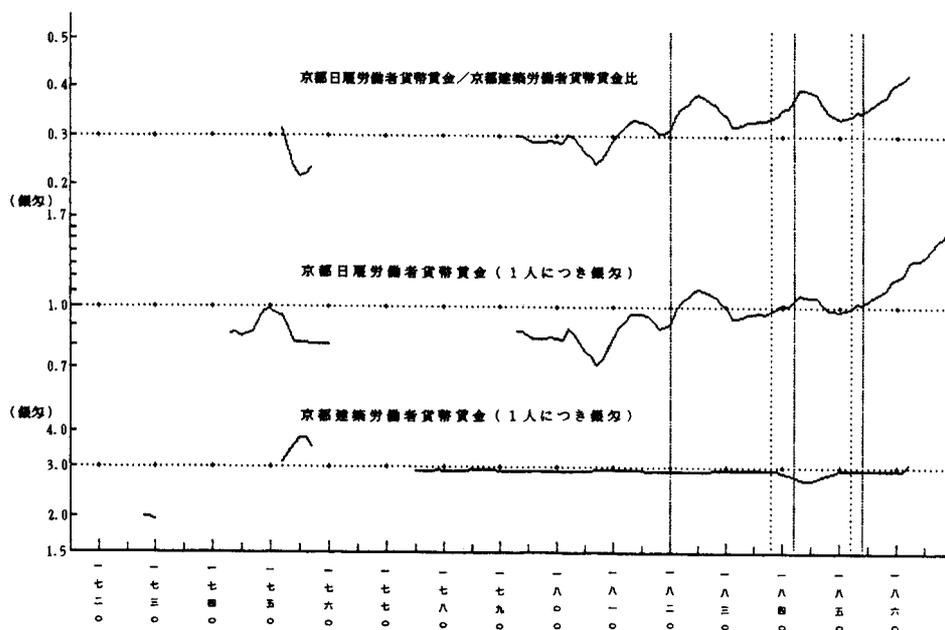


図9-2 近世関西における生産・物価・資金の動向—その2— (5ヵ年移動平均)



の上昇期には貨幣賃金が下落する（このとき実質賃金は大きく下落する）という内容をともなっていた。また賃金格差の問題に目を転じると、1820年代前半にかけて、趨勢的には、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比（図9－2三段目）は、着実に上昇した（そしてこの比は、趨勢的にも循環的にも、多くの場合、物価とは逆に動いた）。

(2)つぎに、京都日雇実質賃金（図9－1四段目）は、趨勢的にみて、1820年代後半以降、下落が著しく、とりわけⅢ期（1854年以降）においてそうであった。この間、物価（図9－1二段目）は急速に上昇したから、やはり実質賃金と物価は逆相関の関係にあったといえよう。この点は、循環的にみた場合も同様である。ところがこの逆相関の内実は、1820年以前の時期とは少しく異なると思われる。なるほど、物価が下落しているときに貨幣賃金（図9－2二段目）が上昇し（したがってこのとき実質賃金は大きく上昇し）、物価の上昇期には貨幣賃金が下落する（このとき実質賃金は大きく下落する）という局面の方が、やはりまだ多いようである。だがしかし、1830年代とⅢ期（1854年以降）のインフレ局面にみられるように、貨幣賃金は上昇(!)しているのに、物価がさらに上昇する結果、実質賃金は下落するという新しい現象（これは近代ではむしろ常態であると思われるが）もあらわれているのである。賃金格差の問題に目を転じると、これは前の時期と同じく、趨勢的には、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比（図9－2三段目）は、着実に上昇した。しかしこの間、物価は急速に上昇したから、この比は、前の時期とは異なって、物価と正に相関したことになる。（また、循環的には、前の時期と同じく逆に相関する場合と、1830年代とⅢ期にみられるように、正に相関する場合とが生じた。）

つぎに、図9－1の残る2本の系列、すなわち野添米価（図9－1－

段目)と野添反当収量(図9-1三段目)についても、われわれはすでに3章で詳しい観察を行なった。いま観察結果を、簡単に要約すればおよそつぎのとおりである。

江戸中後期における野添村米反当収量は、はじめ、おおむね2石以下の水準にとどまっていたのが、しだいに2石の水準を上下するようになり、ついには2石の水準を大きく上回る事となった。しかも、循環的には、反当収量が多い(少ない)ときには、価格が安い(高い)といった収量と価格とのあいだの逆相関を、ある程度明瞭に観察することができた。⁹⁾

ところで、図9-1、図9-2計7本の系列は、野添村および京都という特定の地域におけるデータに基づいている。しかし結論的にいえば、これらの系列は野添村および京都といった狭い地域にとどまらず、野添村の場合は、野添村近村、播州、大阪ひいては近畿、関西、そして京都の場合も大阪、近畿、関西といった広い地域の生産、物価、賃金の動向を、ある程度代表しているとひとまず考えてよいのではなかろうか。

たとえば野添村米反収データは、西摂上瓦林村岡本家¹⁰⁾ものとあまり変わらない。また野添米価の動向は、播州加古郡福里村米価と大差なかったし、¹¹⁾大阪米価さらには大阪物価の動向とも基本的に同じであった。¹²⁾京都の場合も米価や物価の動向は、大阪のそれとさほど変わらなかった。¹³⁾そういうわけで、図9-1一段目の野添米価、二段目の京都物価、および後掲図9-5一段目の京都米価が、(米価の先導性を別にすれば)ほとんど同じような動きを示したのも当然のことといえよう。賃金についても事情はさほど変わらない。京都と同様、大阪地方¹⁴⁾や播州¹⁵⁾の場合も、ほぼ文政期(1818～29年)以降になると実質賃金は低下していて基本的な動向に違いはなかったといえるであろう。もっとも以上のように述べ

たからといって、地域差の問題はどうでもよいということにはならない。地域差の問題は無論重要ではあるが、それはまた別の問題である。

本論にもどりたいと思う。さきに要約したように、われわれは物価と賃金の関係について、いくつかの重要な観察事実を得た。そこで以下第3の変数として、農業生産力（反収）の変動を組み込むことで上記観察事実の解釈を試みたいと思う。この場合やはりさきに要約した米価（物価）と反収の関係が前提となる。

斎藤修氏は、かつて、およそつぎのように述べたことがある。賃金構造の底辺を形成した未熟練労働力は、大部分農業部門から供給されてきたのであるから、農業生産力の水準は、賃金水準の最下限を決定する上で、きわめて重要な役割を果たした。さらには、農業における限界生産力の上昇は、それ自体で賃金格差縮小効果を、したがってまた賃金の一般水準上昇効果をもち得たという^{1,6)}。

また、最近新保博、斎藤修両氏は、およそ1730～1840年の期間についてはあるが、上記命題との関連で、（既存のデータをもちいることによって）「実質賃金の動きは農業生産性の推移によく対応していた」という新しい事実を指摘している^{1,7)}。

そこで、図9-1四段目の京都日雇実質賃金指数(A)の系列と、図9-1三段目の播州加古郡野添村玄米反当収量の系列とを比べてみると、両者はやはりよく対応していて、趨勢的にも循環的にもほぼ正確な順相関関係を示しているのである。したがって、実質賃金（生活水準）と農業生産性が、おおむね平行に動いたという点は、（少なくとも近畿地方にかんする限り）ほぼ疑いを容れない事実であると思われる。また、物価と実質賃金が逆に相関していたという事実を想起すれば、物価と農業生産性も、逆に相関しなければならないが、この点についても、図9

－ 1 二段目の京都消費者物価指数(A)の系列と、図 9－1 三段目の野添村玄米反当収量の系列とを比較対照すれば、たしかに逆に相関していることがわかる。

さてこれだけの準備をしたうえで、江戸後期近畿地方における生産、物価、賃金構造のダイナミズムを、要約的に述べておくこととしたい。

まず、1820（文政元）年以前の時期については、物価は下降の趨勢にあり、逆に実質賃金、貨幣賃金、日雇／建築貨幣賃金比は上昇の趨勢にあった。また循環的にみた場合も、物価が下降（上昇）するときに、貨幣賃金が増（減）し、したがってこのとき実質賃金は大きく増（減）し、また日雇／建築貨幣賃金比も増（減）することになった。

文政期（1818～29年）にかけての以上の現象は、第3の変数として、農業生産力の変動を組み込むことで、解釈が可能となった。まず循環的にみて、農業生産性が上昇すると、日雇労働者の貨幣賃金が増する。このとき物価は下落しているから、実質賃金はむしろ増することになる。当然逆も成り立って、農業生産性が下落すると、日雇労働者の貨幣賃金も下落する。このとき物価は上昇しているから、実質賃金はむしろ下落することになる。他方、建築労働者の貨幣賃金はほぼ固定されているから、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比は、日雇労働者貨幣賃金の上下変動と方向を同じくする。すなわち、物価下降期（上昇期）に、日雇貨幣賃金（ないしは実質賃金）が増（減）し、その結果、賃金格差は縮小（拡大）するということになる。

以上の論理は、趨勢的にも適用可能であると思われる。したがって、1820年以前の時期については、大ざっぱに言って、農業生産性の上昇、物価の下降、貨幣賃金および実質賃金の増、そしてこれらの結果とし

ての未熟練、熟練労働間の賃金格差の縮小という現象があらわれたことになり、これは、さきの「農業における限界生産力の上昇は、それ自体で賃金格差縮小効果を、したがってまた賃金の一般水準上昇効果をもち得た」という斎藤氏の議論に一致するものといえよう。

ところが、1820（文政3）年以降の時期になると、少しく様相は異なってくる。1820年代後半以降、物価、貨幣賃金、日雇／建築貨幣賃金比は上昇趨勢にあり、逆に実質賃金は下降の趨勢にあった。循環的にみた場合は、1820（文政3）年以前の時期と同様、物価が下降（上昇）するときに、貨幣賃金が増（減）し、したがってこのとき実質賃金は大きく増（減）し、また日雇／建築貨幣賃金比も増（減）するという局面の方が、やはりまだ多いようである。だがしかし、1830年代とⅢ期（1854年以降）のインフレ局面にみられるように、（趨勢的にみた場合と同様）貨幣賃金（および日雇／建築貨幣賃金比）は上昇しているのに、物価がさらに上昇する結果、実質賃金が下落するという現象もあらわれているのである。

さてここでさきほどの論理を当てはめるとどういうことになるであろうか。

1820（文政3）年以降の時期（主としてⅡ期（1842～1854年）までの時期）については、循環的にみた場合、さきほどの論理、すなわち、農業生産性が増（減）すると、日雇労働者の貨幣賃金が増（減）する。このとき物価は減（増）しているから、実質賃金はむしろ増（減）するという関係が少しくずれてくる。1830年代とⅢ期にみられるように、農業生産性の下落（Ⅲ期についてはわからない）、日雇貨幣賃金の増(!)、物価のさらなる増、実質賃金の下落といった因果連鎖も生じてくるからである。他方、建築労働者の貨幣賃金はほぼ固

定されているから、日雇労働者貨幣賃金／建築労働者貨幣賃金比は、やはり、日雇労働者貨幣賃金の上下変動と方向を同じくする。しかしこの場合にも、農業生産性が上昇（下降）する物価下降期（上昇期）に、日雇貨幣賃金（ないしは実質賃金）が上昇（下落）し、その結果、賃金格差は縮小（拡大）するという先ほどの論理は少しくずれてくる。やはり1830年代とⅢ期にみられるように、農業生産性が下落（Ⅲ期についてはわからない）する物価急騰期に、日雇貨幣賃金が上昇(!)し、その結果、（日雇、建築労働者実質賃金低下のもとで）賃金格差が縮小するという局面もみられたからである。

いまみたように、循環的にはいくつかの局面で、なお当てはまったさきほどの論理は、しかし、趨勢的には、もはや適用不可能であろう。1820（文政3）年以降の時期（主としてⅡ期（1842～1854年）までの時期）については、大ざっぱにいて、農業生産性の下落、物価の急騰、貨幣賃金の上昇(!)、および実質賃金の下落という状況のもとで、未熟練、熟練労働間の賃金格差の縮小という現象があらわれたからである。端的に言えば農業生産の下落にもかかわらず、賃金格差が縮小したのである。ということは前の時期と違って、賃金格差縮小の要因を、農業部門以外に求めなければならないということになるであろう。

労働市場の構造は文政期（1818～29年）をさかいに変わったと考えられよう。文政期以降は、格差縮小の要因は商工業の側に求められるべきであろう（もっと正確に言えば、文政期以前は農業部門に、以降は商工業部門にそれぞれウエイトおいて考えられるべきであろう）。すなわちプルの要因、商工業部門の労働需要が増加して、農業部門から商工業部門の方へ労働が移動するという問題を、いま一度考えてみるべきではないだろうかというのが、ここでの一応の問題提起である。これは、資料

の制約もあって、斎藤氏が残しておいた議論ではないかと思われる。

なお、ここで補足しておくのが適当と思われるが、いま見てきたような農業生産性と賃金との関係については、短期の場合について、驚くべきことに、すでに同時代人によって詳細な検討が行なわれている。

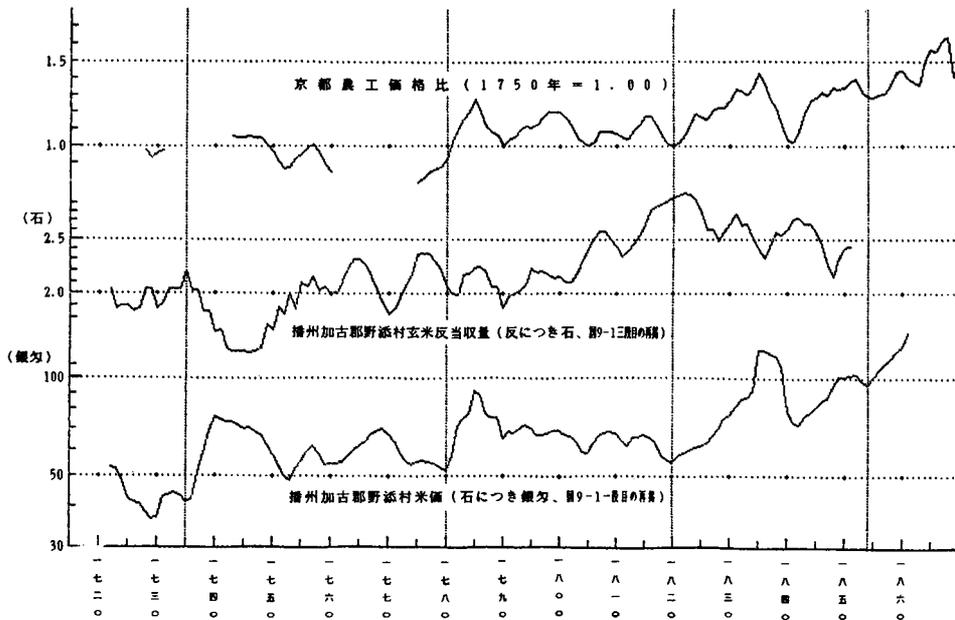
西川俊作氏によれば、三浦梅園^{1,8)}（1723（享保8）年～1789（寛政元）年）の『佃原』（1773（安永2）年）は、元来、作柄の豊凶に伴って「傭作」賃金が豊凶と正の（「負」ではない！）相関をもって変動するという現象を説明するために用意されたものである。ここで「傭作」賃金というのは、農民が「本業」（むろん農作）を離れて、地主または豪農に雇われ、「余業」として小作などに従事する際の賃金を指している。

さて、いまもし豊作が続くと、農民は「本業」にもどるので、「余業」すなわち「傭作」労働の供給は減少する。したがって「傭作」労働に対する需要に変化がなければ、「傭作」賃金は上昇することとなろう。逆に不作続きの場合は、同様の論理で「傭作」賃金が下落する。

本節で行なったわれわれの観察の一部は、反収の増加と日雇貨幣賃金の変動とが正に相関するということであつたから、梅園の議論と矛盾しないといえるであろう。

さて、図9-3は、近世中後期関西における、米価、反当収量と農工価格比（農工間相対価格）相互の関連を分析するために準備したものである。（下から）一段目は、播州加古郡野添村米価（石につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛、図9-1一段目の再掲）を図示したものである。二段目は、播州加古郡野添村玄米反当収量（反につき石、5ヵ年移動平均、半対数目盛、図9-1三段目の再掲）をグラフ化している。そして三段目は、京都における農工価格比（1750年＝1.00、5ヵ年移動

図9-3 米価、反当収量と農工価格比の動向(5ヵ年移動平均)



平均、普通目盛)をグラフ化している。これは農工間の交易条件を示すものであり、農工価格比が上昇するときは、農産物が工産物に対し価格面で優位にたつことを意味している。

なお、縦軸に平行な区切りの点線は、野添村における、移動平均による米価波動(一段目)の谷に着目して、近世中後期について、一応の時期区分(I期(1735年まで)、II期(1735～80年)、III期(1780～1820年)、IV期(1820～54年))を行なったものである(本研究3、4章に同じ)。

野添村米価および玄米反当収量系列の加工プロセスについては、すでに述べたところであるが、京都農工価格比系列のそれについては、ここで説明しなければならない。

京都データは、本研究1章1節でもちいた三井家旧データに依拠している。われわれは、1章1節ですでに、米、味噌、塩、醤油、酒、灯油

の6品目について、1750（寛延3）年＝100とした個別商品価格指数を計算している。

そこで、これに引き続いて、京都農工価格比の系列を得るために、農産物価格指数と工産物価格指数を求めることとした。ここでいう農産物とは資料上の制約から米に限られるので農産物価格指数はすなわち米価格指数と同一である。

工産物としては、醤油、酒、灯油の3品目をとりあげた。塩はウエイトが小さいうえに欠年が多く、異種のデータも含まれるのでとりあげなかった。味噌はこれを工産物のなかに含めなかった。なぜなら、1) 味噌は原料さえあれば、地域を問わず、自家生産さえ可能であったのに対し、醤油、酒、ならびに灯油は、ある程度立地条件にめぐまれた特殊の生産地を必要としたこと、2) 市場をみても、前者は局地的であったのに対し、後者は中央市場への進出が可能となったこと、3) またこれらの原因ないしは結果として、後者は、味噌に比して経営規模の拡大による大量生産の機会にめぐまれたこと、4) 以上の理由により、結局両者は異質の加工品とみなされなければならないからである。

工産物価格指数を求める場合のウエイトは、1章1節で述べた「品目別ウエイト」に依拠した。その結果、品目ごとの構成比は、醤油40.1%、酒41.7%、灯油18.2%となったけれども、年によって資料上の欠落がある場合には、結果的にウエイトの相違が生じることとなった。

以上の手続きを経て作成された、1750年＝100とする農産物価格指数（米価格指数）と工産物価格指数の系列をもちいて、各年ごとに、農産物価格指数を工産物価格指数で除したものが、農工価格比の各年値（1750年＝1.00）である。そして図9-3三段目の京都農工価格比は、その5ヵ年移動平均系列をグラフ化したものである。

さて、図9-3の観察にうつることとして、まず、京都農工価格比の近世中後期をつらぬく長期的な趨勢は、一方的な上昇であったといつてよいであろう。つぎに、農工価格比の循環的変動について調べてみると、それは1730（享保15）年ごろには低い水準にあり、1740（元文5）年ごろから1760（宝暦10）年ごろにかけては低落傾向を示している。ところが、1775（安永4）年ごろから1785（天明5）年ごろにかけて急上昇し、1785（天明5）年のピークをさかいに、1820（文政3）年ごろにかけては、いくつかの小循環を含みながら、どちらかといえば低落傾向をもっている。しかし、1820（文政3）年ごろの谷をさかいに、天保（1830～43年）中期の顕著な高水準を含みつつ、長期にわたる上昇傾向を示して明治期にいたっている¹⁹⁾。

ところで、このような京都農工価格比の動きは、一段目の播州加古郡野添村米価の動向と似通っている。3章で述べたように、野添村の場合も、米価の近世中後期をつらぬく長期的な趨勢は一方的な上昇であった。循環的変動の場合も似通っていて、米価は、享保期（1716～35年）には低い水準にあった。元文期（1736～40年）から安永期（1772～80年）までは、元文期の高い水準から、しだいに、米価が低落していく過程であると思われる。この間、宝暦（1751～63年）初期の低い水準が著しい。天明期（1781～88年）から文政（1818～29年）初期にかけても、米価は、高い水準から、しだいに、低落している。ついで文政期（1818～29年）以降幕末にかけては、米価は急速に上昇している。

このように京都農工価格比系列と野添村米価のそれとが、ほぼ並行的に動いたのは、偶然の一致というわけではない。というのは、ここではグラフを掲げることではできなかったが、まず第一に、京都農工価格比の系列は、趨勢および循環のパターンという点で、京都農産物価格指数

（京都米価指数）の変動とほぼ同一であった。そして第二に、京都米価と野添村米価もまた、地域差の問題を一応別にすれば、趨勢および循環のパターンという点で、ほぼ同じように動いた。したがって当然のことながら、京都農工価格比の系列と野添村米価のそれとは並行的に動くほかなかったのである。

ところで、農工価格比の変動が、趨勢および循環のいずれの側面からみても、米価変動とほぼ同一であったことは、なにを意味しているであろうか。そのまえにつきの点を指摘しておかなければならない。ここではグラフを掲げることはできなかったが、まず、工産物価格の変動は、米価のそれとほぼ同様の傾向をもった。しかし、米価に比べると振幅は小さかったのである。

このことを前提にすれば、農工価格比と米価の並行性は、つぎのように解釈される。すなわち、米価（物価）上昇期には、工産物価格に比べ米価上昇圧力の方が大きく、したがって農工価格比が上昇し、逆に米価（物価）下落期には、工産物価格以上に米価が下落し、その結果農工価格比も下落したのである。たとえば、データが十分に得られる時期に限ることとして、1785（天明5）年ごろから1820（文政3）年ごろまでの農工価格比の下降傾向は、米価の下降が工産物価格の下降よりもいちじるしかったことの結果であり、逆に、1820（文政3）年ごろから明治期にかけての強い農工価格比の上昇傾向は、米価の上昇が工産物価格の上昇よりも急激であったことの反映である。²⁰⁾

さて、いまみたように、近世中後期関西において農工価格比（農工間相対価格）は、趨勢的にも循環的にも、米価（物価）の動向と軌を一にしていた。そこでつぎに米反当収量の動向に目を転じると、さきにも述べたように、この時期関西における反収は、近世中後期をつうじ、長期

趨勢的には、（農工価格比や米価（物価）の場合と同様）上昇傾向にあったと考えられる。しかし、循環的にみれば、反収と米価（物価）は逆に相関したのである。したがって、農工価格比と反収も、循環的には逆に相関しなければならないが、事実、図9-3にみられるように、両者はほぼ逆に相関しているのである。

すなわち、Ⅰ期（1735年まで）は、農工価格比の系列に、欠年が多く、観察には慎重を要するものの、おそらく農工価格比は、低い水準にあったと考えられる。一方で反当収量のほうは、つぎの期に比べると高い水準にあったといえよう。Ⅱ期（1735～80年）の場合も、観察には慎重を要するが、農工価格比は、初期の高い水準から、しだいに、低落していく過程であると考えられる。しかし反当収量のほうは、逆に、初期の低い水準から、漸次上昇していく過程であると思われる。Ⅲ期（1780～1820年）についても、農工価格比は、高い水準から、しだいに、低落しているが、反当収量のほうは、逆に、初期の低い水準から、漸次上昇している。ついでⅣ期（1820～54年）は、農工価格比は急速に上昇しているが、反当収量は、逆に、下落しているのである。

もうすこし時期をしぼって、あるいはデータが十分に得られる時期に限ることとして、文政期（1818～29年）前後に焦点を合わせてみると、およそ文政前期以前は、反収の上昇に農工価格比の下降が対応し、文政前期以降になると、反収の下落に農工価格比の上昇趨勢が対応しているのである。

ところで、さきに述べたように、1820（文政3）年以前の時期については、大ざっぱに言って、農業生産性の上昇、物価の下降、貨幣賃金および実質賃金の上昇、そしてこれらの結果としての未熟練、熟練労働間の賃金格差の縮小という現象があらわれていて、このことは、結局、農

業における限界生産力の上昇が、それ自体で賃金格差縮小効果を、したがってまた賃金の一般水準上昇効果をもたらしたということの意味した。また、1820（文政3）年以降の時期（主としてⅡ期（1842～1854年）までの時期）については、大ざっぱに言って、農業生産性の下落、物価の急騰、貨幣賃金の上昇(!)、および実質賃金の下落という状況のもとで、未熟練、熟練労働間の賃金格差の縮小という現象があらわれていて、このことは、結局、農業生産の下落にもかかわらず、賃金格差が縮小したことを意味した。ということは前の時期と違って、賃金格差縮小の要因を、農業部門以外に求めた方がよいということになる。

思いきっていえば、たとえばつぎのような見通しを考えることができるかもしれない。文政期（1818～29年）以降、まず農工価格比は上昇したのであるが、このことは、反収の下落にみられるような農業生産性の低下によって米価（物価）が上昇し、一方で、工業部門においては、生産性上昇の結果、工産物価格が米価ほど上昇しなかったことから生じている（もっともどちらも上昇しているのは貨幣的要因によるものと考えてよいであろう）。いまのところ、関西における工業部門の生産性上昇については、十分な証拠をあげることはできないが、のちにみるように、工産物価格の関西／関東比は、この時期以降下落しているので、あるいはこれをもって間接的な証拠とすることも考えられよう。

つぎに、繰り返し述べてきたように、熟練労働と未熟練労働の賃金格差が縮小したという事実がある。しかも文政期（1818～29年）以降は、農業生産性の下落にもかかわらず、未熟練労働の貨幣賃金が増加し(!)、賃金格差が縮小したのである。

さて、いま述べた文政期（1818～29年）以降の、農工価格比の上昇傾向と、賃金格差縮小傾向を相互に関連づけるためには、なにを仮定すれ

ばよいであろうか。それはおそらく農業部門から商工業部門への労働の移動ではないかと思われる。

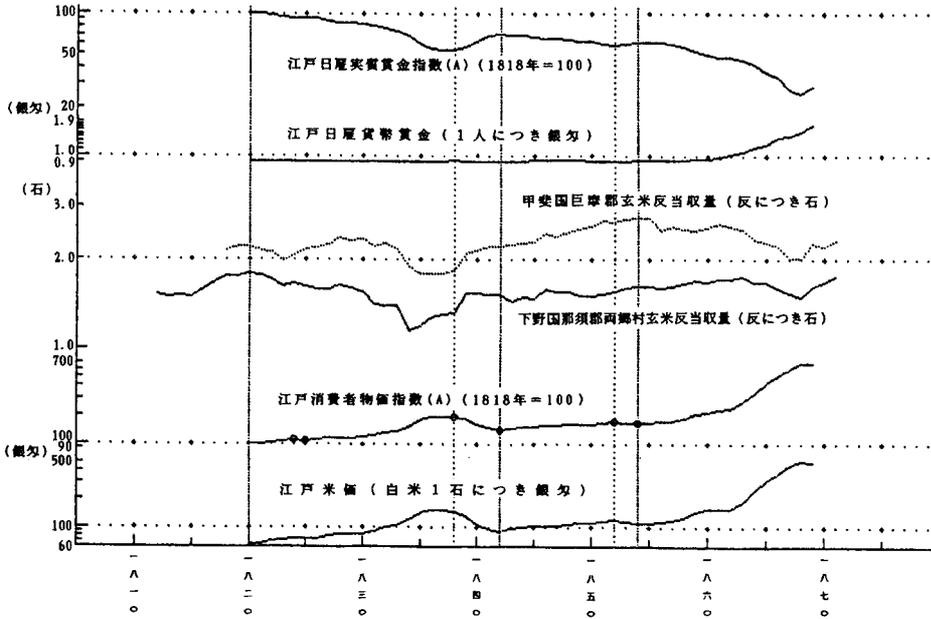
工業部門における生産性の上昇は、労働需要の増加とともに未熟練労働の貨幣賃金を上昇させ、いまや貨幣賃金が相対的に低位となった農業部門から新たに未熟練労働を吸引したであろう。またこの過程で、農業部門では反収の下落にみられるような農業生産の低下と米価（物価）の高騰が生じたのではないだろうか。

II 関東における生産・物価・賃金

図9-4は、われわれがこれまでに整備した江戸末期関東における生産、物価、賃金の時系列をグラフ化したものである。

図9-4（下から）一段目は、江戸米^{2.1)}価（白米1石につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛）である。二段目は、江戸消費者物価指数(A)（1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛）をグラフ化している。ここで(A)というのとは、江戸消費者物価指数の構成品目が、白米、餅米、塩、味噌、醤油、酢、酒、煎茶、煙草、炭、薪、水油、蠟燭の計13品目からなっていることを表わしている^{2.2)}。三段目実線は、下野国那須郡両鄉村における玄米反当収量^{2.3)}（反につき石、5ヵ年移動平均、半対数目盛）を図示したもので、また点線は、甲斐国巨摩郡における玄米反当収量^{2.4)}（反につき石、5ヵ年移動平均、半対数目盛）を図示したものである。四段目は、江戸日雇貨幣賃金^{2.5)}（1人につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛）のグラフである。そして五段目は、江戸日雇実質賃金指数(A)（1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛）を図示したものである。(A)というのとは、実質賃金算出の際に江戸消費者物価指数(A)をもちいたことを表わ

図9-4 江戸末期関東における生産・物価・賃金の動向(5ヵ年移動平均)



している。^{2.6)}

さて図9-4のうちまず物価と賃金の系列について観察することとしよう。一見して明らかなように、この時期物価と実質賃金は、関西におけると同様、趨勢的にも循環的にも逆に相関した。しかし物価と貨幣賃金とのあいだには、関西とは違って趨勢的にも循環的にも明瞭な相関をみとめることはできない。もっともⅢ期(1854年以降)の物価急騰期に、貨幣賃金も急騰しているのは関西と共通の現象である。

つぎに物価(米価)と反収の系列をみると、この時期物価の趨勢的上昇に、反収の趨勢的下降が対応していた(関西においてはほぼ対応していた)とはいえ、反収はむしろ不変の趨勢にあったと言ってよいであろう。しかし、3章でも述べたとおり、この時期短期循環的には、関西と同様、反収が多い(少ない)ときには、価格が安い(高い)とい

った収量と価格とのあいだの逆相関を、ある程度明瞭にみとめることができる。

すなわち、まずⅠ期（1820～42年）は、米価（物価）の上昇局面および下降局面に対して、反当収量の方は、おおむね下降したのち上昇しているとみられるから、米価と収量は、ほぼ逆に相関したと考えてよいであろう（もっとも甲州の場合は、1820年代については上昇の傾向とみることもできよう）。

ついで、Ⅱ期（1842～54年）になると、米価の下降局面については、反当収量と逆に相関しているといえるかもしれないが、米価のゆるやかな上昇局面に対して、逆に反当収量がゆるやかに下降しているとはいえないようである。もっとも見方を変えて、1836（天保7）年の峰から1854（安政元）年の谷までを、米価のひとつの下降局面とみなしてよいとすれば、この場合には、反当収量の上昇局面がこれに対応していると考えてよいであろう。

Ⅲ期（1854～）になると米価は急騰するが、反当収量の方は下落したと考えられる（野州については、1863（文久3）年ぐらまで、反当収量がやや上昇しているとみられるが、それでも文政期（1818～29年）の水準に達していない）。

さて、いま述べてきたように、物価と実質賃金および物価と反収は、（趨勢的にはともかく）循環的にはいずれもほぼ逆に相関した。したがって、循環的には、実質賃金と反収は、ほぼ正に相関しなければならない。実際、図9-4によれば、Ⅱ期（1842～54年）の米価（物価）上昇局面を別にすれば、関西同様、両者は正に相関しているのである。

結局、この時期の関東における生産、物価、賃金の構造と変動は、つぎのように要約されよう。すなわち、Ⅰ期（1820～42年）は、関西と同

様、農業生産性の下落から上昇への動きに対応して、物価は上昇したのち下落し、実質賃金は下落したのち上昇した。Ⅱ期（1842～54年）になると、関西とはやや様子がちがった。はじめ農業生産性の上昇にもかかわらず、物価がゆるやかに上昇し、実質賃金も低下した。もっともこの期のおわりには、Ⅰ期（1820～42年）おわりのパターンに復することとなり、ふたたび関西同様、農業生産性の上昇（関西はわからない）に、物価の下落、実質賃金の上昇が対応することとなった。Ⅲ期（1854～）も、やはり関西同様、農業生産性の下落（関西はわからない）に、物価の急激な上昇が対応し、貨幣賃金は上昇したけれども、実質賃金は低下した。

Ⅲ 関西対関東

Ⅰ、Ⅱ節では、近世後期における生産、物価、賃金の構造と変動を、関西および関東について、それぞれ別個に考察した。そこで本節では関西と関東の生産、物価、賃金そして人口の時系列を直接比較することとしたい。そうすることで、関西と関東の地域差の問題を少しでも明らかにすることができればと思っている。

図9-5は、関西と関東の米価および物価系列を、一枚のグラフにしたものである。（下から）一段目に実線で描き込まれているのは、京都米価（白米1石につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛）である。もう一つの点線で描き込まれているグラフは、江戸米価（白米1石につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛、図9-4一段目の再掲）である。二段目に描かれているのは、名目米価の京都／江戸比（5ヵ年移動平均、普通目盛）である。^{2,7)} 三段目に実線で描き込まれているのは、京都消費者

図9-5 関西と関東における米価および物価の動向(5年移動平均)

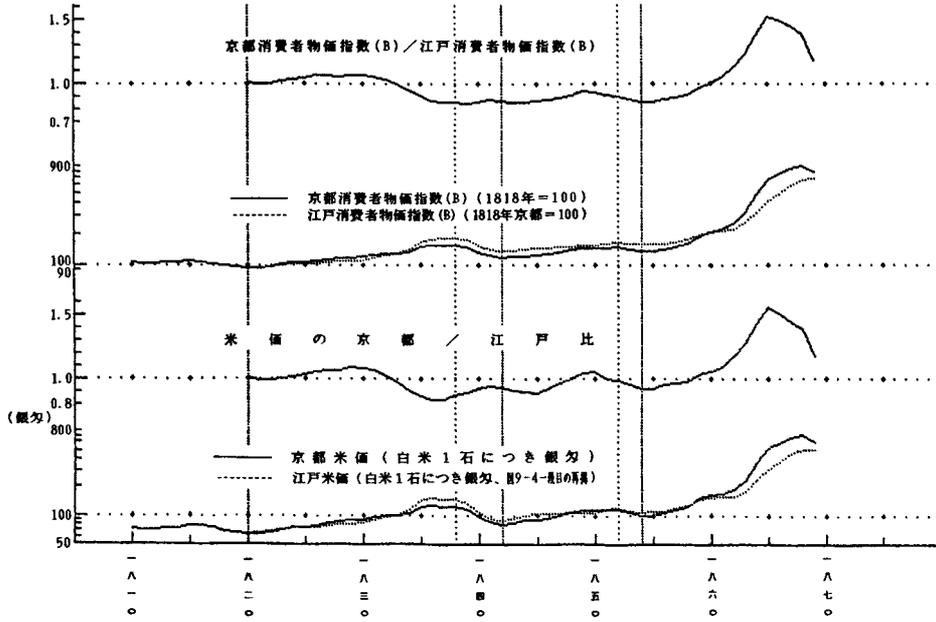
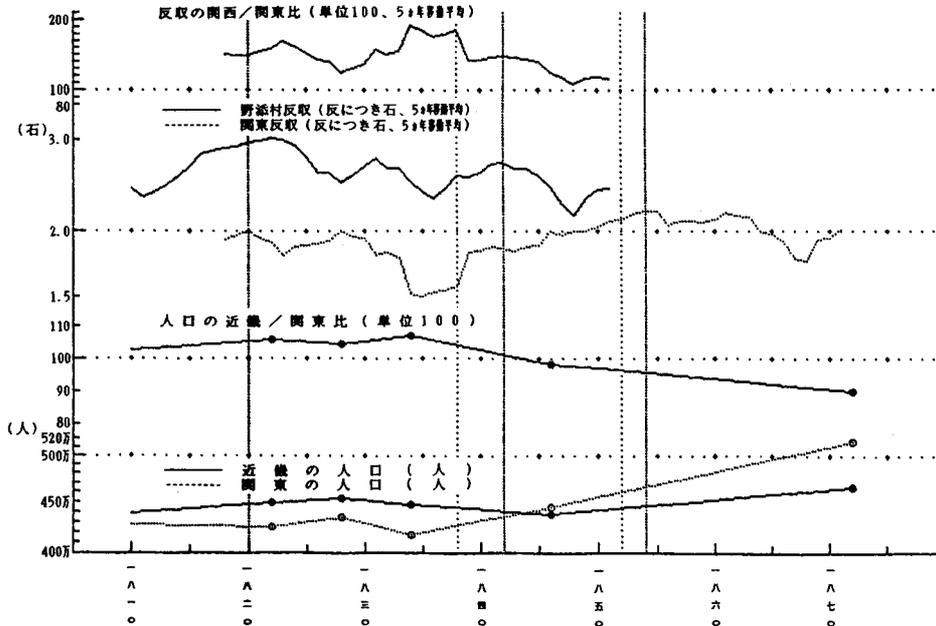


図9-6 関西と関東における人口および反取の動向



物価指数(B) (1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛) である。もう一つの点線で描き込まれているグラフは、江戸消費者物価指数(B) (1818年京都＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛) である。ここで(B)というのは、物価指数の構成目が、京都も江戸も、白米、餅米、味噌、醤油、酢、酒、煎茶、薪、燈油(水油)、蠟燭の都合10品目からなっていることを表わしている。四段目に描かれているのは、京都消費者物価指数(B)／江戸消費者物価指数(B) (5ヵ年移動平均、普通目盛) である。²⁸⁾

つぎに、図9-6(下から)一段目実線およびドット(●)は、近畿の人口(人、半対数目盛)を図示したもので、また点線およびドット(○)は、関東の人口(人、半対数目盛)を図示したものである。いずれも連続時系列ではなくて、子午年における幕府人口調査のうち現在利用できるデータのみがドットされている(1872(明治5)年は別データ²⁹⁾)。二段目は、人口の近畿／関東比(単位100、普通目盛)をグラフ化している。三段目実線は、野添村反収(反につき石、5ヵ年移動平均、半対数目盛)の再掲で、点線は野州と甲州の平均反収を関東の反収とみなして図示したものである(反につき石、5ヵ年移動平均、半対数目盛)。そして四段目は、野添村反収と関東反収の比をとって、かりに反収の関西／関東比としたもののグラフである(単位100、5ヵ年移動平均、普通目盛³⁰⁾)。

さて、われわれは2章において、物価についてつぎの二つの事実を観察している。ひとつは、「1820年代と60年代は、京都消費者物価が、江戸消費者物価よりも高い水準にあったが、逆に、1830、40、50年代は、江戸消費者物価のほうが高かった」(観察事実〔1〕)という事実であり、もうひとつは、「1830年代後半以降、1850年代前半にかけて、消費者物価指数の京都／江戸比は横ばいで推移したが、これは、京都米価の相対

的上昇（対江戸）が、米以外の他の京都物価（おそらくは工産物）の相対的下落（対江戸）によって相殺された結果である」（観察事実〔2〕）ということである。

これらの事実（とりわけ観察事実〔1〕）に対しては、貨幣改鑄、財政支出といった需要側の要因にウエイトをおいた解釈が、すでに行なわれているので、³¹⁾ここでは、農業生産性を中心とした供給側の要因に焦点を合わせた説明を模索することとしたい。

観察事実〔1〕によれば、1820年代は、京都消費者物価が、江戸消費者物価よりも高かったわけであるが、図9-5四段目に描かれている京都消費者物価指数(B)/江戸消費者物価指数(B)の系列によれば、京都/江戸比は、1827（文政10）年のピークでさえ、その値は1.07で、京都物価は江戸の7パーセント増しにすぎなかった。したがって、問題は、30年代以降の、急速な江戸物価の相対的上昇である。

まずそのまえに、1820年代は、図9-5、そして図9-6三段目にみられるように、関西関東とも、米価（ひいては物価）の上昇と、米の反当収量の下落（関東の場合は野州）とが対応していて、京都、江戸の米価（ひいては物価）の水準も同じくらいであった。そして、30年代以降、急速な江戸物価の相対的上昇が始まるわけであるが、この理由としては、無論、東北地方を中心とした天保の飢饉³²⁾（一応、1833（天保4、巳）年～36（同7）年として）を考慮にいれなければならない。図9-6三段目、四段目をみても、この飢饉の影響は、関西（播州加古郡野添村）よりも関東地方（野州那須郡両郷村および甲州巨摩郡）に強くあらわれているといえよう。

すなわち1830年代は、関西における反収の下落は、さほどではなかったが、関東のそれは、江戸末期（文政～幕末期）最大の落込みとなった。

これに呼応して、京都米価（ひいては物価）の相対的下落（対江戸）が急速に進み、米価（物価）の京都／江戸比も顕著な下降を示すこととなった（米価の場合は1836（天保7）年の谷で、0.84、物価の場合は、1839（天保10）年の谷で、0.85）。そして、このとき生じた物価の（米価ではなく）水準差は、以後しばらく解消されることなく持続した。すなわち、1830年代後半以降、1850年代前半にかけて、物価の京都／江戸比は、ほぼ横ばいで推移することとなったのである。

そこで、1830年代後半以降、1850年代前半にかけての、およそ20年の時期に目を転じると、この時期は、さきに述べたように、物価の京都／江戸比は横ばいであったが、米価のそれは、上昇していたのである。

ここでも、関西と関東における反当収量（農業生産性）の変動を引合いに試してみることとしよう。まず関西の場合、物価の1838（天保9）年の峰から、1842（天保13）年の谷までの下降局面では、米の反当収量が増加し、ついで、やはり物価の1842（天保13）年の谷から、1852（嘉永5）年の峰までの上昇局面では、米の反当収量が減少するという関係がみられた。しかし、反当収量の上昇局面は短く、増加の圧力は小さかったのに対し、その下降局面は長く、減少の方は、はなはだしかったから、傾向としては、1830年代後半以降、1850年代前半にかけて、米の反当収量は減少したというべきであろう。同時に、この時期において、図9-6一段目にみられるように、近畿は人口が減少したのであるが、このことは、反収の下落と無関係であったとはいえないであろう。

ついで、関東の場合であるが、ここでも反当収量を観察してみると、物価の1838（天保9）年の峰から、1842（天保13）年の谷までの下降局面では、米の反当収量が増加している点は関西と同じであるが、ついで、物価の1842（天保13）年の谷から、1852（嘉永5）年の峰までの上昇局

面では、さきにも述べたように、関西とは逆に、米の反当収量はむしろ上昇することとなった。したがって、関東地方では、1830年代後半以降、1850年代前半にかけて、傾向的には、反収が増加したと見てよいであろう。しかも、この時期に、図9-6一段目にみられるように、関東地方の人口は漸増しているのである。

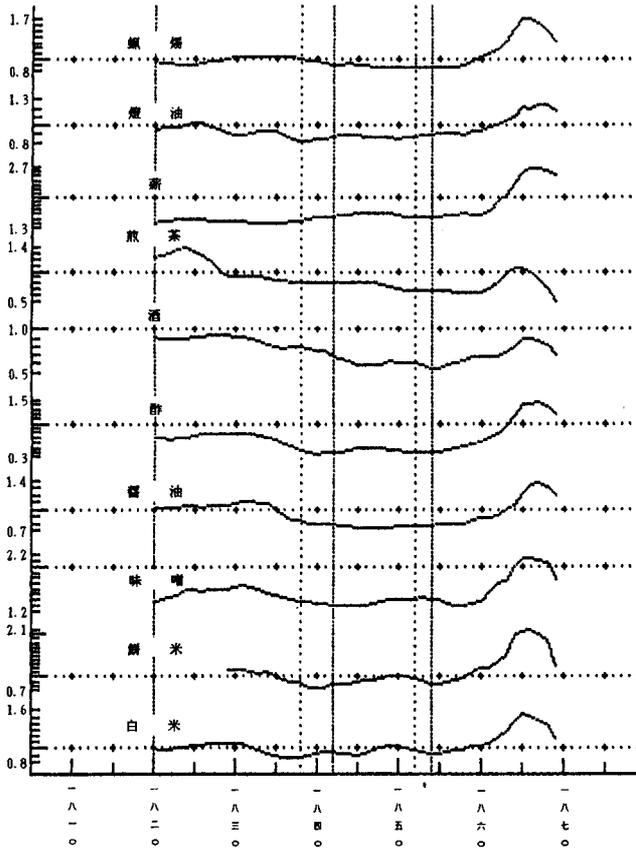
ちなみに、（データ上の問題がいろいろあって、観察には危険をとまなうが）図9-6をみながら、人口と反収の関係について若干つけくわえておくこととしたい。まず近畿人口と野添村反収とのあいだには、多少の順相関があると思われる。また関東の場合も、人口と反収の変動はほぼ平行で、相関の度合は関西より大きいと見てよいであろう。そしてさらに興味深いと思われるのは、二段目、人口の近畿／関東比の系列と、四段目、反収の関西／関東比の系列とがきれいに相関していることである。すなわち、近畿人口が相対的に上昇（下降）するときには、関西反収も相対的に上昇（下降）しているのである。

さて本論にもどって、（さきに述べたように）1830年代後半以降、1850年代前半にかけての、反当収量における関西の下落と、関東の上昇は、結果として、米価の京都／江戸比を上昇させることとなった。この点を劇的に示しているのは、図9-5二段目、名目米価の京都／江戸比と、図9-6四段目、反収の関西／関東比との逆相関である。すなわち、関西の反収が相対的に上昇（下落）するときは、逆に、関西米価は相対的に下落（上昇）しているのである。しかも、この事実は、1830年代後半以降、1850年代前半にかけての時期だけでなく、それ以前の時期についても観察することができるのである。

ともあれ、1830年代後半以降、1850年代前半にかけての時期に、米価の京都／江戸比は上昇した。しかるに同じ時期、物価の京都／江戸比は、

32字×25行＝800字

図9-7 個別商品価格の京都／江戸比（5ヵ年移動平均）



ほぼ横ばいの傾向にあったから、つぎに、米価の京都／江戸比上昇を、なんらか相殺する要因について検討しなければならない。

ところで、工産物の京都／江戸比はどのように動いたであろうか。この点について、新保博氏が作成したグラフを参照³³⁾すると、たとえば醤油、酒の場合、この時期に、京都／江戸比は明確な下降趨勢を示していることが

理解される。また、同氏作成の他のグラフによれば、この時期にやはり、工産物価格の大阪（京都）³⁴⁾／江戸比は顕著に下落している³⁵⁾し、農工間相対価格の大阪（京都）／江戸比の場合は、当然顕著な上昇傾向を示している³⁶⁾のである。

われわれは、この点を確認するために、本章でもちいた系列によって図9-7を作成した³⁷⁾。下から順に、白米、餅米、味噌、醤油、酢、酒、煎茶、薪、燈油（江戸は水油）、蠟燭価格の京都／江戸比（5ヵ年移動

平均、普通目盛)をグラフ化している。いずれも各年名目価格の京都／江戸比を計算し、しかるのち移動平均をとった。このグラフを一瞥すると、1830年代後半以降、1850年代前半にかけての時期に、まず、無論白米、そして餅米、薪といった農林産物価格の京都／江戸比が上昇している。つぎに、燈油と味噌の京都／江戸比は、同じ時期にほぼ横ばいと考えられる。しかるに残る5品目、蠟燭、煎茶、酢、醤油、酒のような工産物ないしはそれに準ずる商品の京都／江戸比は、1830年代後半以降、1850年代前半にかけての時期に、明らかに下降しているのである。

そういうわけで、京都工産物価格の相対的低下(対江戸)が、京都米価の相対的上昇(対江戸)の相殺要因として働き、その結果、この時期における物価の京都／江戸比を横ばいにしたと考えてさしつかえないと思われる。

つぎに、Ⅲ期(1854年以降)の問題について、若干触れておくこととしたい。Ⅲ期は、京都が、米価も物価も、江戸に対して、急速な相対的上昇を示した時期として特徴づけられる。そして、以前の時期とは異なって、工産物価格の方も、一応、江戸に対して相対的に上昇した^{3.8)}。これらの現象はどうして生じたのであろうか。この時期、関東における米の反収は、下落していて、やはり米価(物価)の上昇に対応していたが、関西については、残念ながら反収データを得ることができない。

すこし見方を変えてみると、京都物価の急速な相対的上昇も、明治期にはいるとほぼ沈静するので、これはいずれにせよ、幕末期における一時的な(!)現象であると考えてよいであろう。しかしながら、この相対的上昇が、掛け値なしに実勢を表わしていたかどうかは疑わしい。というのも、新保博氏の研究によれば、白米、味噌、醤油、酒といった京都データの、1860年代の相対的上昇については、大いに疑問とされているか

らである³⁹⁾。

さて、宮本又郎氏の研究によると、天保期（1830～43年）以降、京都および江戸における金（銀）相場（いずれも1両につき銀匁）の乖離は、±2%以内におさまっていて、ほぼ均衡していたが、1860年代にはいると、金（銀）相場の江戸／京都比は、1865（慶応元）年（0.9526）にかけて急速に下落し（すなわち京都の銀安が急速に進行し）、以後は上昇した。

ところで、本章でもちいた江戸データは、銀目建で表わされている。これは、多くは両建江戸価格に、金（銀）相場（1両につき銀匁）を掛けて換算されたものであると考えられる。この場合、銀安がゆるやかに進む金（銀）相場（じつは江戸銀相場）を掛けると、物価の京都／江戸比は、急速に上昇することとなろう。逆に、銀安が急速に進む金（銀）相場（じつは京都金相場）を掛けると、物価の京都／江戸比はあまり上昇しないはずである。

いま、江戸データは、無論江戸銀相場で換算されたものと仮定しよう。このことは、物価の京都／江戸比の急速な上昇と整合的である。しかも、さらに詳しく観察してみると、江戸銀相場が、相対的に（対京都金相場）もっとも小さくなるのは、1865（慶応元）年で（江戸／京都比＝0.9526）、以後は江戸銀相場は相対的に上昇している。そして、この動きは、ちょうど米価や物価の京都／江戸比と明確に逆相関しているのである⁴¹⁾（これらのピークは1865（慶応元）年である）。

以上述べたところから、1865（慶応元）年にかけて、京都の物価は高めにでていると考えられるが、じつは、高めどころではなくて、この年、京都の物価は江戸に比べて、50パーセント以上も高かったのである。

やはりこの時期の、金（銀）相場は、実勢レートではなかったであろう。1868（明治元）年、銀目廃止の際、大阪における金銀換算について、

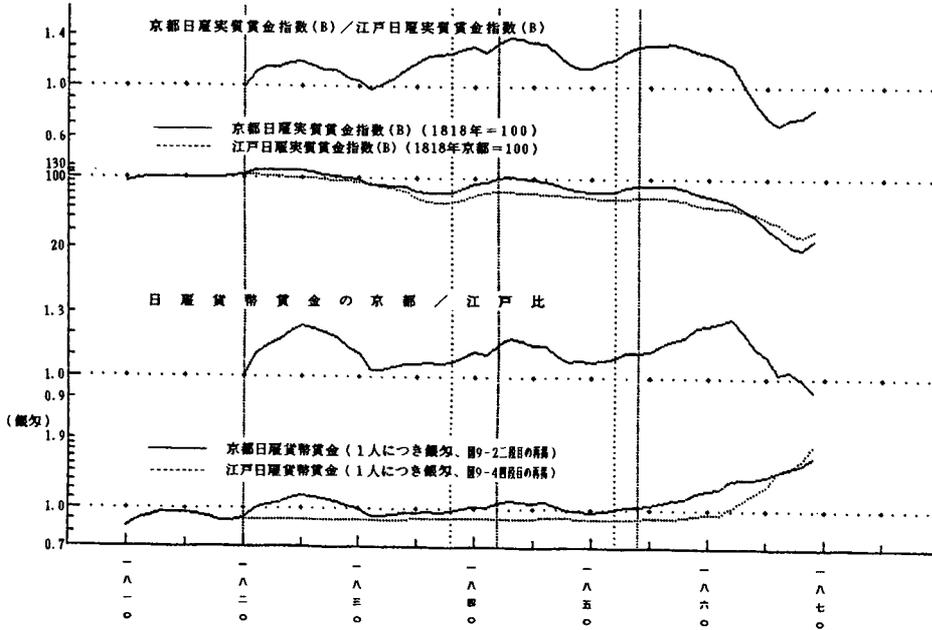
商品によっては、200目立、220目立といった場合もみられたから^{4,2)}、実勢レートは、さきの江戸／京都比＝0.9526などといった、なまやさしいものではなかったと思われる。もちろん、こうなったことについては、たとえば、上方における、藩札をも含めた銀目信用の拡大に原因を求める必要があるであろう。

物価の京都／江戸比は、貨幣的要因の観点からは、1865（慶応元）年を中心とする時期に、高めにでていることが理解されたが、しかし、実物的要因について触れたわけではなかった。したがってなお、物価の京都／江戸比の、真の動向については、何かが明らかになったとは、いえないであろう。

さて2章で、賃金については、つぎの二つの事実が観察された。ひとつは、「全期を通じていえば、日雇貨幣賃金は、明らかに、（江戸との対比で）京都の方が高かった」（観察事実〔3〕）という事実であり、もうひとつは、「1860年代を別にすれば、日雇実質賃金水準も、全期を通じて、京都の方が高かった」（観察事実〔4〕）ということである。

図9－8は、関西と関東における賃金の諸系列を、一枚のグラフにしたものである。（下から）一段目に実線で描き込まれているのは、京都日雇貨幣賃金（1人につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛、図9－2二段目の再掲）である。もう一つの点線で描き込まれているグラフは、江戸日雇貨幣賃金（1人につき銀匁、5ヵ年移動平均、半対数目盛、図9－4四段目の再掲）である。二段目に描かれているのは、日雇貨幣賃金の京都／江戸比（5ヵ年移動平均、普通目盛）である^{4,3)}。三段目に実線で描き込まれているのは、京都日雇実質賃金指数(B)（1818年＝100、5ヵ年移動平均、半対数目盛）である。ここで(B)というのは、実質賃金算出の際に京都消費者物価指数(B)をもちいたことを表わしている^{4,4)}。もう一

図9-8 関西と関東における賃金の動向(5ヵ年移動平均)



つの点線で描き込まれているグラフは、江戸日雇実質賃金指数(B) (1818年京都=100、5ヵ年移動平均、半対数目盛)である。(B)というのは、実質賃金算出の際に江戸消費者物価指数(B)をもちいたことを表わしている⁴⁵⁾。四段目に描かれているのは、京都日雇実質賃金指数(B)/江戸日雇実質賃金指数(B) (5ヵ年移動平均、普通目盛)⁴⁶⁾である。

最初に指摘しておきたいのは、つぎの点である。すなわち、賃金についても、1860年代の京都/江戸比については、貨幣的要因の影響が大きく、とうてい実勢を表わしているとは、いえないだろうという点である。京都/江戸比は、この期に、貨幣賃金の場合は高めに、実質賃金の場合は、おそらく低めにでていると思われるが、バイアスがどの程度のものかということになると、とても確定できそうにない。

ところで、さきに指摘したように、両地の実質賃金は、1820 (文政3)

年以降の時期に、趨勢的にも、循環的にも消費者物価の変動パターンとほぼ正確に逆相関した（したがってまた、京都の場合も、江戸の場合も、1820（文政3）年以降、実質賃金の下落は著しく、とりわけⅢ期（1854年以降）においてそうであった）。また、関西、関東ともに、短期循環的には、およそ文政期（1818～29年）以降、米の収量と米価（物価）とのあいだには、（江戸におけるⅡ期の物価上昇期（1842～52）を別にすれば）おおむね逆相関の現象がみられた。

そういうわけであるから、短期循環的には、両地とも、実質賃金と反当収量は同じ方向に動いたはずである。事実、同じ方向に動いたのであるが、さきに述べたように、ひとつ例外をなしていると思われるのは、Ⅱ期の物価上昇期（1842～52）である。この時期、関西は反収の減少と、実質賃金の下落が対応しているが、関東は、反収の上昇(!)にもかかわらず、実質賃金が下落しているのである。

こうなったことについては、江戸における貨幣賃金の硬直性に着目しなければならないであろう。関西の場合は、貨幣賃金は、短期循環的には、さきにみたように、おおむね反収の増加と正に相関したのであるが、関東の場合は、農業生産性にほとんど感応していないのである。

新保博氏は、生産物価格について、この時期に、江戸よりも大阪の方が、市況に感応する度合いが大きかったことを指摘している⁴⁷⁾。この点は、貨幣賃金についても、60年代を別とすれば、京都の方が、市況に感応する度合いは、明らかに大きかった。

Ⅱ期の物価上昇期（1842～52）を中心とする時期に、江戸においては、本来、農業生産性の上昇に対応して、実質賃金は上昇すべきであった。しかし、労働市場（あるいは一般に市場）は、関西に比べるといまだ成熟の段階に達していなかったというべきであろう。そしてまた、この点

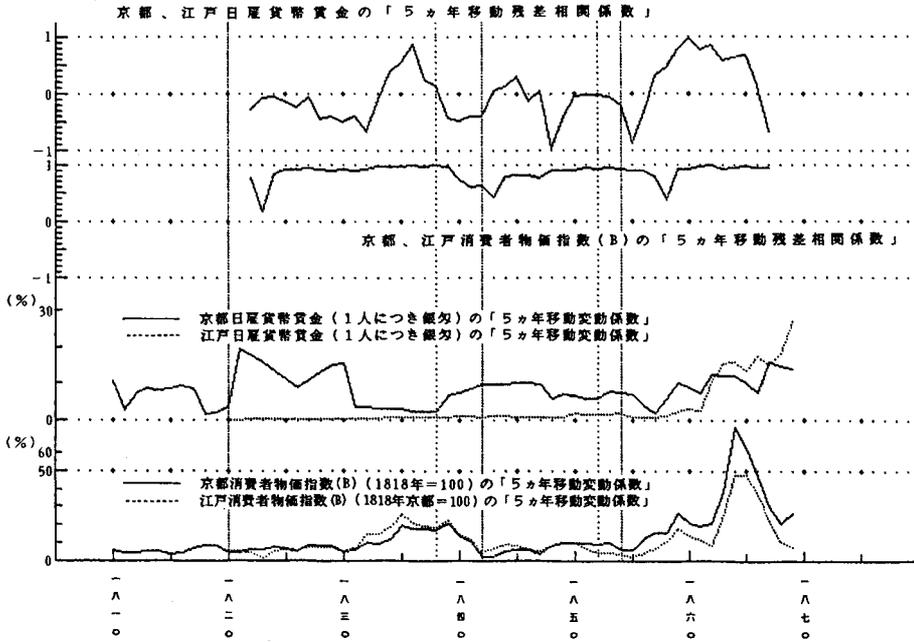
が、江戸における、貨幣賃金および実質賃金の、京都に比べた場合の相対的低位を説明する重要なファクターであったと考えられよう。

さて最後に、図9-9は、変動係数および相関係数の諸系列を、一枚のグラフにしたものである。^{4,8)}（下から）一段目実線は、さきの京都消費者物価指数(B)（1818年＝100）の「5ヵ年移動変動係数」を、また点線は、江戸消費者物価指数(B)（1818年京都＝100）の「5ヵ年移動変動係数」を表わしている。二段目実線は、京都日雇貨幣賃金（1人につき銀匁）の「5ヵ年移動変動係数」を、また点線は、江戸日雇貨幣賃金（1人につき銀匁）の「5ヵ年移動変動係数」をグラフ化したものである。そして三段目には、京都、江戸消費者物価指数(B)残差相関が、また四段目には、京都、江戸日雇貨幣賃金残差相関がそれぞれ図示されている。（普通目盛）。

さてわれわれは2章で、つぎのような観察事実をえている。ひとつは変動係数の分析によるもので、「京都貨幣賃金の変動は、全期を通じて市場感応的であったが、江戸の場合は、物価（生産物価格）とは異なって、貨幣賃金（要素価格）の方はあまり動かなかった。しかし、1850年代後半以降、徐々に江戸の日雇貨幣賃金も、市場感応的となり、ついに60年代には、変動係数が、京都を凌駕した」（観察事実〔5〕）ということ、もうひとつは、相関係数の分析によるもので、「生産物価格について、両市場は、ほぼ完全に連動していたが、要素価格については、文政期（1818～29年）以降になっても、いまだ両市場の連動はみられず、幕末の一時期になってはじめて、両市場が連動した」（観察事実〔6〕）ということである。

江戸末期、生産物価格は、両市場で、市場感応的かどうかで程度の差はあっても、ほぼ完全に連動していたが、要素価格（賃金）の方はそう

図9-9 変動係数と相関係数



ではなかった。

さきにもみたとおり、関西では、すでに文政期(1818~29年)以前から、趨勢的にも循環的にも、日雇貨幣賃金および実質賃金の変動は、反収の増減と平行で、しかも、反収の増加にともない、日雇貨幣賃金は建築労働者貨幣賃金との格差を縮小していくという構造が成立していて、このことは短期循環的には、基本的に文政期以降にも引き継がれた。もっとも文政期以降は、趨勢的には、反収は下落したから、格差縮小(格差は縮小した)の要因を、農業部門に求めることはむつかしく、商工業部門における労働需要の増加(これは無論農業部門から商工業部門への労働の移動を引き起こす)に求めるべきではなかろうかという点が示唆された。

この意味で、関西において労働市場は成熟の段階に達していたのであ

る。さきにみたように、関東では、反収の増加があっても、賃金に反映しない場合がみられるなど、賃金は硬直的で、労働市場は未成熟であった。

ようやく幕末期になって、京都および江戸で、要素価格（賃金）が、ある程度、等しい水準に向かい、連動するかにみえたのは、幕末期における、活発な商品流通が貢献したことと思われる。労働そのものの、両地間移動がなくても、商品流通の活性化によって、賃金水準の均等化は、可能であったと考えられよう。

以下では、I節からIII節までに述べてきたところを要約し、同時に、ひとつの問題提起を行なうこととしたい。

関西では、文政期（1818～29年）以降、反収は下落し、関東に比べ、米価は相対的に上昇し、また人口は停滞した。農業生産性の上昇は、賃金の高騰をとめないながら、すでに文政初期にピークに達していたのである。しかしながら、工産物価格の、江戸に対する相対的下落からも推測されるように、ある程度の、さらなる商工業部門の発展がみられたのではないかと思われる。すなわち労働市場は活性化した。反収の下落、物価の上昇、実質賃金の下落、という状況を背景に、しかし商工業部門における労働需要の増加に対応して、ある程度自由競争的と思われる賃金は、管理された賃金に比べて相対的に上昇した。これは農村から都市への労働の移動を推測させるものである。

この過程で、貨幣賃金および実質賃金は、関東と比較すれば高くなったのである。もっとも、なんといっても実質賃金そのものは低下しているので、この商工業部門の発展は、もしこの時期に総生産が上昇しているとすれば、労働分配率低下のもとに進行したと考えることもできよう。

関東は、様子がちがった。天保飢饉の影響は大きかったが、しかしその後反収が増加し、人口が上昇した時期があった。にもかかわらず、反収の増加は賃金に反映することはなかったといえよう。すなわち、労働市場は（また生産物市場も）、硬直的で、未成熟であったと考えられる。その結果、貨幣賃金も、実質賃金も関西より低かった。しかも、工産物価格の方は、関西に比べて高かったのである。以上述べたところを総合すれば、関東は関西との比較で、商工業部門の未発達が推測され、経済発展は遅れていたかもしれないと考えられよう。

IV 米価の地域差

われわれは本研究の随所で、主として近世中後期、一部は近代移行期における米価の地域差を詳細に論じてきた。いま米価の地域差をふたつに分けるとすれば、ひとつは播州対大阪、越前対大阪のような地方対中央における米価の地域差であり、もうひとつは福井対勝山のような越前内部すなわち地方内部における米価の地域差であった。

また、これら米価の地域差を検討してゆく過程で、たとえば、いわゆる換算米価は、どの程度実勢を反映していたのかとか、あるいは、当該米価は正銀建てであったのかそれとも藩札建てであったのかといった問題を詳しく検討する必要性が生じた。このような問題をなおざりにしては、米価の正確な地域比較は望むべくもなかったからである。

ここでは、本研究で行なった以上のような議論について、とりあえずのまとめを行なっておくこととしたい。

はじめに、地方対中央における米価の地域差から始めることとしよう。本研究であつかったのは、播州対大阪、越前対大阪の二例にすぎないが、

両者は、米価の地域差という点からみて、どのように異なっていたであろうか。

まず播州対大阪については、本研究4章1節で述べたように、播州加古郡野添村米価は大阪米価に比べ、近世後期をつうじておよそ5パーセント程度、ほぼ恒常的に高い水準にあった。もっとも、この期をつうじて、野添村米価／大阪米価比が上昇傾向にあったというわけではなかった。また、短期的には、野添村米価は大阪米価に比べて、天明（1781～88年）および天保期（1830～43年）に激しく騰貴していた。

つぎに越前対大阪の場合は、播州対大阪の場合とは様相が異なり、近世後期をつうじて、はじめのうち低位にあった越前米価が、しだいに大阪米価に対して差を詰めてゆくという現象がみられた。すなわち、7章および8章で明らかにしたように、米価の越前／大阪比は、文政（1818～29年）前期以前については不変（ないしはわずかな上昇）の趨勢であったが、文政前期以降になると顕著な上昇趨勢を示したのである。こうなったのは、越前米価が藩札建てであったことが大きく影響しているが、しかし、この点を補正した両建て年末実勢米価の福井／大阪比の系列によっても、1840年代から60年代の中ごろにかけて、福井／大阪比は、たしかに上昇していたのである。

また、短期的には、天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）前半および幕末期等の時期において、越前／大阪比にやや下降の傾向がみられた（大阪米価の上昇圧力が目についた）のは、播州対大阪の場合とは逆の傾向であった。

つぎに、地方内部における米価の地域差についてであるが、本研究では、越前内部における福井対勝山の米価の地域差を取り上げただけである。したがってこの点について多くを語ることはできない。

7章の観察結果によれば、福井米価と勝山米価は、やはりおおむね類似の変動を示していた。しかし、文政期（1818～29年）から天保期（1830～43年）にかけては勝山米価の上昇圧力が目立ち、天明期（1781～88年）および幕末最後の10年においては福井米価の上昇圧力が目についた。

したがって、勝山／福井比の系列も、基本的には不変の趨勢にあったと考えられるが、細かく観察すれば、文政期から天保期までの上昇傾向と、天明期および幕末期における低下傾向がみられた。

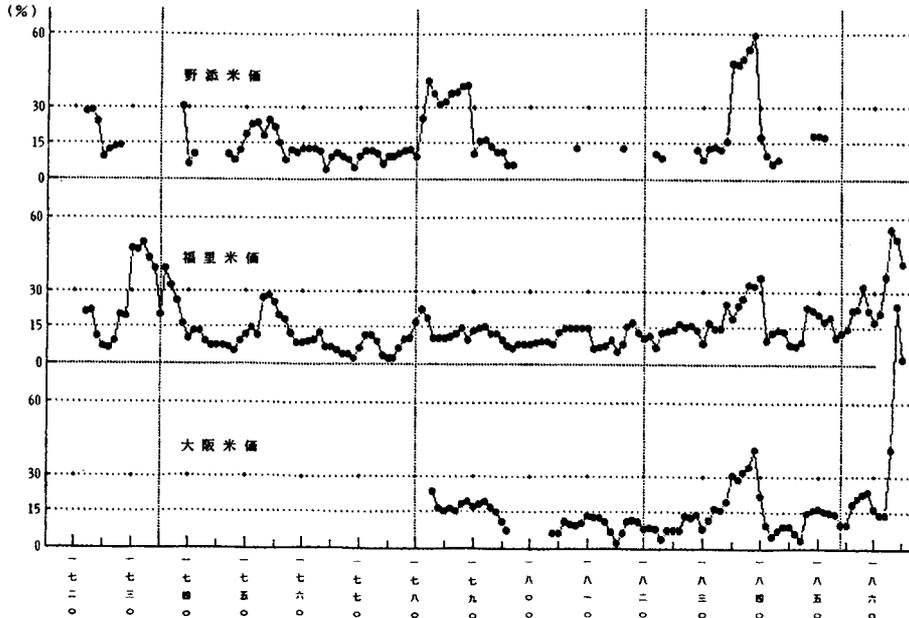
このように通覧してみると、福井対勝山のような地方内部における米価の動向はさほど変わらなかったが、播州対大阪、越前対大阪のような地方対中央の場合はそうではなかったことがわかる。

さて、図9-10は下から順に、4章でとりあげた大阪米価、播州加古郡福里村米価、同野添村米価それぞれの「5ヵ年移動変動係数」をグラフ化したものである（普通目盛、縦軸に平行な区切りの点線は図9-3と同じ）。

変動係数の比較にはいるまえに、まず、4章でもすこし触れたように、野添米価と福里米価は、趨勢的には、ほとんどパラレルに動いていた。また水準差もほとんどなかった。野添米価が売買値段で、福里米価が石代値段であったという違いはあるが、当然、両者は連動していたのである。

しかし短期変動の場合は様子がちがった。すなわち、4章で述べたように、米価の上昇、下落とも、売買値段である野添米価の方が、石代値段である福里米価よりも、上昇率、下落率ともに大きかったのである。このことは、とりわけ、天明（1781～88年）、天保（1830～43年）の飢饉年において顕著であった。

図9-10 米価「5年移動変動係数」の比較



また、さきにみたように、野添村米価と大阪米価の場合も、短期的には、野添村米価は大阪米価に比べて、天明および天保期に激しく騰貴していたのである。

これらの点は、図9-10を検討することでいっそう明らかとなる。すなわち変動係数の動きを、近世中後期全体として眺めてみれば、もっとも大きいのは①野添米価で、②福里米価がこれにつき、③大阪米価のそれはもっとも小さかった。しかし、天明（1781～88年）、天保（1830～43年）、幕末の時期においては、これが、①野添（幕末期は変動係数のデータが得られない）、②大阪、③福里というふうに順位が入れ替わって、大阪米価の変動がやや激しくなっているのである。

われわれは同様の分析を7、8章で、越前の場合についても行なった。図7-2をもちいて観察したように、近世後期を全体として見れば、①

勝山米価の変動係数がもっとも大きく、②大阪米価がこれにつき、③福井米価のそれはもっとも小さかった。しかし、天明期（1781～88年）、天保期（1830～43年）、幕末については、①大阪の米価変動係数がもっとも大きく、②勝山がこれにつき、③福井のそれはもっとも小さかったのである（ただし福井の場合は天保期におけるデータを欠く）。

また8章では、上記福井切米値段と、それとは別個の福井実勢米価を比較検討した。その結果、切米値段の変動は実勢米価の変動に較べて目立って小さいというわけではなかったが、しかし幕末期には、やはり切米値段の変動が、より小さいという傾向が定着していた。

このようにみてくると、繰り返し述べてきたように、石代値段や切米値段のような換算米価は、きわだって巧妙に機能していたことが理解されよう。

おわりに

ここでは、本章では論ずることのできなかつた一二の点について書きとめておくこととしたい。

さきにみたように、近世後期関西においては、実質賃金（生活水準）と反収（農業生産性）は、おおむね平行に動いた。また、宮本又郎氏が、明石茂生氏⁴⁹⁾に倣って推計した、近世後期関西における「実質貨幣残高⁵⁰⁾」によると、「実質貨幣残高」（すなわち実質産出量の k 倍、 k はマーシャルの k ）は、さきの実質賃金や反収と、ほぼ平行に動いているようである。したがって、実質賃金、反収、実質産出量の三者は、（いずれも物価とは逆に）ほぼ同じ方向に動いたということになる。

ところで、明石氏の近世後期における「名目貨幣残高」（すなわち貨

幣数量、また名目産出量の k 倍)の動きをみると、これは比較的単調に(おおむね指数関数的に)増加しているようである。われわれは3章で、近世後期関西(加古郡野添村)における農業収入(ただし米価と反当収量の積、すなわち名目産出量)の動向について、やはり「名目貨幣残高」の場合と同様、単調に(指数関数的に)上昇しているという観察事実をえた。すなわち農業(ひいては経済)における名目成長率は一定だったことになる。したがって、貨幣数量は、結果的に、一定の名目成長率を導くようにコントロールされていた、という可能性も考えられよう。これはひじょうに魅力的なテーマである。しかしいずれにせよ、この問題について正確に議論する準備はない。

注

- 1) 史料と加工の詳細については、本研究3章および付論。
- 2) 資料と加工の詳細については、本研究1章。
- 3) 史料と加工の詳細については、本研究3章および付論。
- 4) 資料と加工の詳細については、本研究1章。
- 5) 資料と加工の詳細については、本研究1章。
- 6) 本研究1章。
- 7) 前掲『近世後期における主要物価の動態』[増補改訂]。
- 8) 本研究1章。
- 9) 3章で述べたように、近世中後期において、耕地の拡大を無視してよいとすれば、当野添村反当収量の増加(減少)は、そのまま、当野添村米供給量の増加(減少)、さらには、もっと広範囲にわたる米供給量の増加(減少)と考えることが許されよう。

- 10) 前掲今井・八木『封建社会の農村構造』、105ページ。
- 11) 本研究4章。
- 12) 本研究3章など。
- 13) 前掲拙稿「江戸後期における生産物市場」、51ページなど。
- 14) 前掲斎藤「農業賃金の趨勢」、65ページ。
- 15) 前掲植村「近世農村における奉公人賃金」（のちに、前掲同『近世農村における市場経済の展開』に所収）、163ページ。前掲長谷川「幕末期醤油醸造業における雇用労働と賃金」、206（296）ページ。
- 16) 前掲斎藤「徳川後期の賃金格差構造と実質賃金水準」、137、148ページ。
- 17) 前掲新保・斎藤「概説 一九世紀へ」、21ページ。
- 18) 以下の叙述は、西川俊作『江戸時代のポリティカル・エコノミー』（日本評論社、1979年）、96、99～102ページ、および前掲同『日本経済の成長史』、85～86ページの叙述に負う。
- 19) 京都における農工価格比の変動については、前掲新保『近世の物価と経済発展』、105ページの図3-3によれば、天明（1781～88年）から文政（1818～29年）の時期にかけて低落傾向を観察することは困難である。また、1860年代にはいると、一時的にかなりの落ち込みを示している。依拠した資料は同一であるから、観察事実の相違は、品目の選択、ウエイトの算定等の問題に帰着する。また、新データに依拠した前掲宮本「幕末明治初期京都の物価変動について；1830～79年」、171ページ図2によると、この場合は、天保（1830～43年）中期の水準が幕末期と同じくらい高位にあることがわかる。ちなみに、大阪における農工価格比の変動につい

ても、新保博「徳川後期の価格構造 — 物価史研究への一つの試みとして — 」『国民経済雑誌』121巻4、5号（1970年）、同「徳川後期の物価 — 相対価格をめぐって — 」『国民経済雑誌』130巻6号、131巻1号（1974年、1975年）、前掲新保『近世の物価と経済発展』、3、5章、前掲斎藤「大阪卸売物価指数 1757-1915年」、前掲宮本「幕末明治初期京都の物価変動について；1830～79年」等の研究が存在するが、観察結果の点で同一であるとはいえないようである。

- 20) このように、米価（物価）上昇期に農工価格比が上昇し、米価（物価）下落期に農工価格比が下落していることについては、およそ以下に述べる二つの理由が考えられる。第一に、需要、供給いずれの場合も、米の価格弾力性は工産物に比べて小さいと考えられるので、米価上昇（下落）期に米価がいちじるしく上昇（下落）し、工産物価格の上昇（下落）はさほどでないとなれば、農工価格比は大きく上昇（下落）することとなろう。第二は、ここではグラフを掲げることではできなかったが、一般に工産物価格指数の峰および谷の時期は、米価指数のそれに対して、二三年の遅れを示すことが多かったという事実と関係をもっている。すなわち、米価上昇（下落）期に米価がいはやく上昇（下落）し、工産物価格の上昇（下落）はさほどでないとなれば、農工価格比は大きく上昇（下落）せざるをえないであろう。
- 21) 資料と加工の詳細については、本研究2章。
- 22) 同上。
- 23) 資料と加工の詳細については、本研究3章。
- 24) 同上。

- 25) 資料と加工の詳細については、本研究2章。
- 26) 同上。
- 27) 資料については、本研究1、2章。また、米価の京都／江戸比は、各年の京都米価を各年の江戸米価で除して、しかるのち移動平均をとった。
- 28) 資料と加工の詳細については、本研究1、2章。また京都消費者物価指数(B)／江戸消費者物価指数(B)の場合も、各年の京都消費者物価指数(B)を各年の江戸消費者物価指数(B)で除して、しかるのち移動平均をとった。
- 29) 前掲関山『近世日本の人口構造』、140～41ページ。なお、甲州は関東地方ではなくて東山地方に分類されている。が、本章では甲州は関東地方として議論をすすめることにした。
- 30) 関東反収の系列は、各年ごとに野州と甲州の反収を平均し、しかるのち移動平均をとった。また、反収の関西／関東比も、各年の野添反収を各年の関東反収で除して、しかるのち移動平均をとった。
- 31) たとえば、前掲新保「江戸後期の貨幣と物価に関する断章」、128～129ページ。
- 32) 西村真琴・吉川一郎編『日本凶荒史考』（丸善株式會社、1936年）、812ページには、1836（天保7）年の飢饉について、以下のような記述がみられる。「……全國大いに飢荒す、即ち山陽南海の五分五厘作を最良とし、山陰關東は三分二厘作内外を稱へ、陸奥は二分八厘作にて無收穫に終われるあり、……」。
- 33) 前掲新保「幕末期における江戸と大阪の物価」、15ページの図9。
- 34) 工産物は、種油、黒砂糖、味噌、醤油、清酒からなっているが、

味噌、醤油、清酒は、ダミーとして京都価格がもちいられている。
（前掲新保「幕末期における江戸の物価水準」、5ページ）。

- 35) 前掲新保「幕末期における江戸と大阪の物価水準」、21ページの図1(C)。
- 36) 前掲新保「幕末期における江戸と大阪の物価水準」、30ページの図2(C)。
- 37) 資料と加工の詳細については、本研究1、2章。
- 38) 前掲新保「幕末期における江戸と大阪の物価水準」、30ページの図2(C)、および本章図9-7。
- 39) 前掲新保「幕末期における江戸と大阪の物価」、16ページ。
- 40) 以下、京都、江戸における金（銀）相場の動向については、前掲宮本「幕末明治初期京都の物価変動について；1830～79年」、168ページの表2を参照した。
- 41) すなわち、米価や物価の京都／江戸比は、1865（慶応元）年のピークに向けて上昇するが、これは、ひとつには、分母の江戸価格に、相対的にしだいに小さめになる銀相場が掛けられているからであり、また、ピーク以後は、京都／江戸比が下落するが、これは、分母の江戸価格に、こんどは、相対的にしだいに大きめになる銀相場が掛けられているからである。
- 42) たとえば、前掲斎藤「大阪卸売物価指数 1757-1915年」、68ページ。
- 43) 日雇貨幣賃金の京都／江戸比は、各年の京都日雇貨幣賃金を各年の江戸日雇貨幣賃金で除して、しかるのち移動平均をとった。
- 44) 資料と加工の詳細については、本研究1、2章。
- 45) 資料と加工の詳細については、本研究2章。

- 46) 京都日雇実質賃金指数(B)／江戸日雇実質賃金指数(B)は、各年の京都日雇実質賃金指数(B)を各年の江戸日雇実質賃金指数(B)で除して、しかるのち移動平均をとった。
- 47) 前掲新保「幕末期における江戸の物価水準」、11ページ（一般物価）、前掲新保「幕末期における江戸と大阪の物価水準」、23ページ（農林産物価格）、26～27ページ（工産物価格）。
- 48) 加工の詳細については、本研究2章。
- 49) 前掲明石「近世後期経済における貨幣，物価，成長：1725－1856」。
- 50) 前掲宮本「物価とマクロ経済の変動」、76ページの図2－4。

付表 9-1 (その1) 京都における農工価格比の動向

年次	農産物価格指数 (米価指数)		工産物価格指数		農工価格比		年次	農産物価格指数 (米価指数)		工産物価格指数		農工価格比	
	指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	単位1 (17 50年= 1.00)	同5 カ 年 移 動 平 均		指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	指数 (17 50年= 100)	同5 カ 年 移 動 平 均	単位1 (17 50年= 1.00)	同5 カ 年 移 動 平 均
1713(正徳 3)	198.1		177.4		1.12		1754(宝暦 4)	64.8	86.4	84.9	92.8	0.76	0.92
14(4)							55(5)	94.5	90.8	90.9	94.2	1.04	0.95
15(5)							1756(6)	120.6	96.2	102.7	97.4	1.17	0.98
1716(享保 1)							57(7)	105.1	102.1	106.3	101.0	0.99	1.01
17(2)							58(8)	96.3	99.8	102.1	102.8	0.94	0.97
18(3)							59(9)	94.3	90.6	103.3	101.1	0.91	0.89
19(4)							60(10)	82.8	83.8	99.8	98.1	0.83	0.85
20(5)							1761(11)	74.4		94.1		0.79	
1721(6)							62(12)	71.4		91.3		0.78	
22(7)							63(13)						
23(8)							64(明和 1)						
24(9)							65(2)						
25(10)							1766(3)						
1726(11)	89.0		75.9		1.17		67(4)						
27(12)	81.3		74.8		1.09		68(5)						
28(13)	63.2	71.0	70.0	72.2	0.90	0.98	69(6)						
29(14)	58.4	65.9	70.8	70.4	0.82	0.93	70(7)						
30(15)	63.0	67.1	69.6	69.8	0.90	0.96	1771(8)						
1731(16)	63.4	71.0	66.6	72.5	0.95	0.98	72(安永 1)						
32(17)	87.4		72.2		1.21		73(2)	78.1		105.1		0.74	
33(18)	82.6		83.3		0.99		74(3)	70.3		103.0		0.68	
34(19)							75(4)	76.1	80.6	106.8	103.4	0.71	0.78
35(20)							1776(5)	86.3	82.1	102.3	101.8	0.84	0.81
1736(元文 1)							77(6)	92.4	84.2	99.7	99.9	0.93	0.85
37(2)							78(7)	85.4	83.1	97.1	97.2	0.88	0.85
38(3)	90.3		89.0		1.02		79(8)	81.0	82.6	93.6	94.6	0.87	0.87
39(4)							80(9)	70.6	85.9	93.3	93.3	0.76	0.92
40(5)							1781(天明 1)	83.6	94.8	89.2	92.6	0.94	1.02
1741(寛保 1)	117.2		99.1		1.18		82(2)	109.0	105.5	93.3	95.6	1.17	1.10
42(2)	107.7		102.0		1.06		83(3)	130.0	111.9	93.7	96.0	1.39	1.16
43(3)	104.3	106.1	102.9	100.6	1.01	1.06	84(4)	134.2	117.6	108.3	97.9	1.24	1.20
44(延享 1)	103.2	105.1	99.6	100.4	1.04	1.05	85(5)	102.5	134.7	95.4	104.5	1.07	1.28
45(2)	98.3	104.4	99.5	99.4	0.99	1.05	1786(6)	112.2	131.8	98.7	109.2	1.14	1.20
1746(3)	111.7	104.6	98.1	98.5	1.14	1.06	87(7)	194.5	125.8	126.2	112.4	1.54	1.11
47(4)	104.5	102.9	96.8	98.3	1.08	1.05	88(8)	115.8	123.2	117.1	112.6	0.99	1.09
48(寛延 1)	105.0	103.2	98.4	98.4	1.07	1.05	89(寛政 1)	103.7	119.1	124.7	110.5	0.83	1.07
49(2)	94.8	100.2	98.6	99.1	0.96	1.01	90(2)	89.7	104.0	96.4	104.9	0.93	1.00
50(3)	100.0	95.8	100.0	99.6	1.00	0.96	1791(3)	91.8	104.4	87.9	102.2	1.04	1.03
1751(宝暦 1)	96.5	88.7	101.5	97.1	0.95	0.91	92(4)	118.8	102.6	98.5	97.7	1.21	1.05
52(2)	82.9	82.7	99.4	94.4	0.83	0.87	93(5)	117.7	105.8	103.7	97.0	1.13	1.09
53(3)	69.2	81.6	86.2	92.6	0.80	0.88	94(6)	94.9	110.1	101.9	98.7	0.93	1.12

付表 9-1 (その2) 京都における農工価格比の動向

年次	農産物価格指数 (米価指数)		工産物価格指数		農工価格比		年次	農産物価格指数 (米価指数)		工産物価格指数		農工価格比	
	指数 (17 50年= 100)	同5 カ年 移動 平均	指数 (17 50年= 100)	同5 カ年 移動 平均	単位1 (17 50年= 1.00)	同5 カ年 移動 平均		指数 (17 50年= 100)	同5 カ年 移動 平均	指数 (17 50年= 100)	同5 カ年 移動 平均	単位1 (17 50年= 1.00)	同5 カ年 移動 平均
1795(寛政 7)	105.8	108.4	93.0	98.0	1.14	1.11	1834(天保 5)	153.9	132.9	111.0	98.5	1.39	1.35
1796(8)	113.5	106.9	96.5	95.6	1.18	1.12	35(6)	110.7	155.4	95.6	108.0	1.16	1.42
97(9)	110.1	109.3	94.9	93.7	1.16	1.17	1836(7)	151.0	157.7	100.8	115.0	1.50	1.36
98(10)	110.3	111.8	91.5	93.2	1.21	1.20	37(8)	223.0	154.6	137.8	121.5	1.62	1.28
99(11)	106.9	110.9	92.7	92.5	1.15	1.20	38(9)	149.9	152.1	129.9	124.1	1.15	1.23
1800(12)	118.3	109.3	90.1	91.0	1.31	1.20	39(10)	138.3	142.5	143.4	125.0	0.96	1.12
1801(享和 1)	109.0	106.3	93.4	90.9	1.17	1.17	40(11)	98.3	120.8	108.6	117.1	0.91	1.03
02(2)	102.1	100.4	87.5	89.1	1.17	1.12	1841(12)	102.8	111.8	105.3	110.0	0.98	1.02
03(3)	95.0	92.4	91.0	87.4	1.04	1.05	42(13)	114.5	107.6	98.5	99.1	1.16	1.10
04(文化 1)	77.7	87.6	83.3	85.4	0.93	1.02	43(14)	105.0	113.0	94.4	95.3	1.11	1.19
05(2)	78.3	85.2	81.7	85.3	0.96	1.00	44(弘化 1)	117.4	118.7	88.8	93.7	1.32	1.27
1806(3)	85.0	87.6	83.4	85.4	1.02	1.02	45(2)	125.3	121.0	89.5	94.3	1.40	1.23
07(4)	89.9	93.5	87.2	86.2	1.03	1.08	1846(3)	131.2	126.1	97.2	96.1	1.35	1.32
08(5)	107.0	94.9	91.7	87.2	1.17	1.09	47(4)	126.0	130.9	101.7	100.8	1.24	1.30
09(6)	107.3	95.6	87.1	88.0	1.23	1.09	48(嘉永 1)	130.6	140.3	103.2	104.7	1.27	1.34
10(7)	85.0	94.5	86.5	88.0	0.98	1.07	49(2)	141.4	148.9	112.3	111.8	1.26	1.33
1811(8)	88.8	90.6	87.4	86.3	1.02	1.05	50(3)	172.3	149.4	109.4	111.2	1.58	1.34
12(9)	84.5	89.8	87.1	86.1	0.97	1.04	1851(4)	174.2	152.2	132.4	111.1	1.32	1.37
13(10)	87.2	93.8	83.6	85.9	1.04	1.09	52(5)	128.6	154.2	98.7	111.2	1.30	1.39
14(11)	103.5	95.5	86.1	85.0	1.20	1.12	53(6)	144.6	144.7	102.6	109.8	1.41	1.32
15(12)	105.0	100.0	85.5	85.3	1.23	1.17	54(安政 1)	151.1	133.6	112.7	103.6	1.34	1.29
1816(13)	97.4	101.1	82.9	85.9	1.17	1.18	55(2)	124.8	135.6	102.4	105.8	1.22	1.28
17(14)	107.1	96.7	88.5	85.8	1.21	1.13	1856(3)	119.0	142.9	101.5	109.6	1.17	1.30
18(文政 1)	92.6	90.1	86.5	85.1	1.07	1.06	57(4)	138.5	148.8	109.9	113.1	1.26	1.31
19(2)	81.5	87.1	85.5	85.6	0.95	1.02	58(5)	181.0	161.7	121.4	117.9	1.49	1.36
20(3)	72.1	84.6	81.9	84.4	0.88	1.00	59(6)	180.8	194.9	130.1	135.2	1.39	1.43
1821(4)	82.3	85.0	85.5	83.5	0.96	1.02	60(万延 1)	189.0	208.2	126.6	144.3	1.49	1.44
22(5)	94.4	88.9	82.8	83.1	1.14	1.07	1861(文久 1)	285.3	217.9	187.9	156.1	1.52	1.40
23(6)	94.5	95.0	81.9	84.0	1.15	1.13	62(2)	205.0	239.9	155.7	176.1	1.32	1.37
24(7)	101.1	101.3	83.7	85.0	1.21	1.19	63(3)	229.2	305.6	180.1	222.8	1.27	1.36
25(8)	102.6	101.2	86.2	86.6	1.19	1.17	64(元治 1)	290.8	489.4	230.0	292.3	1.26	1.51
1826(9)	113.9	102.1	90.3	88.0	1.26	1.16	65(慶応 1)	517.8	678.5	360.2	405.8	1.44	1.56
27(10)	93.9	108.7	90.8	89.9	1.03	1.21	1866(2)	1204.3	751.0	535.4	463.6	2.25	1.56
28(11)	99.2	111.3	89.2	90.8	1.11	1.22	67(3)	1150.5	861.3	723.0	525.4	1.59	1.62
29(12)	133.9	113.0	93.3	91.8	1.44	1.23	68(明治 1)	591.7	923.1	469.3	561.4	1.26	1.64
30(天保 1)	115.5	116.3	90.3	91.7	1.28	1.27	69(2)	842.3	778.8	538.8	542.4	1.56	1.41
1831(2)	122.3	124.1	95.6	92.8	1.28	1.34	70(3)	826.8		540.2		1.53	
32(3)	110.3	128.1	90.1	96.4	1.22	1.33	1871(4)	482.5		440.5		1.10	
33(4)	138.6	127.2	94.9	97.4	1.46	1.30							

(出所) 三井文庫(中井信彦)編『近世後期における主要物價の動態』(日本学術振興会、1952年)。

付表 9-2 (その1) 人口、反収および

年次	人口			米の反収				個別商					
	近畿の人口 (人)	関東の人口 (人)	近畿/ 関東比 (単位 100)	関東 (反 につき 石)	同 5 年 カ 移 動 平 均	関西/ 関東比 (単位 100)	同 5 年 カ 移 動 平 均	餅 米	同 5 年 カ 移 動 平 均	味 噌	同 5 年 カ 移 動 平 均		
1801(享和 1)	4,336,934	4,295,684	101.0										
02(2)													
03(3)													
04(文化 1)													
05(2)													
1806(3)													
07(4)													
08(5)													
09(6)													
10(7)													
1811(8)	4,484,457	4,242,779	105.7										
12(9)													
13(10)													
14(11)													
15(12)													
1816(13)							1.73		162.2				
17(14)							1.74		164.4				
18(文政 1)							2.19	1.93	132.4	150.2	0.87		1.41
19(2)							2.09	1.97	139.3	148.4	0.84		1.34
20(3)							1.92	2.00	152.8	148.8	1.13	0.95	1.31
1821(4)	4,484,457	4,242,779	105.7	1.92	1.95	153.3	153.4	0.92			1.30	1.39	
22(5)				1.87	1.91	166.2	158.0	0.97			1.32	1.44	
23(6)				1.93	1.80	155.2	169.4				1.68	1.48	
24(7)				1.91	1.87	162.4	161.7	1.07			1.57	1.57	
25(8)				1.36	1.89	209.7	152.3	1.36			1.53	1.58	
1826(9)				4,531,450	4,343,872	104.3	2.26	1.89	114.9	142.9			
27(10)	1.98	1.91	119.0				140.9	1.05			1.32	1.57	
28(11)	1.93	2.01	108.6				123.8	1.42			1.48	1.59	
29(12)	2.04	1.96	152.1				130.8	1.13	1.16		1.76	1.58	
30(天保 1)	1.82	1.94	124.5				136.4	1.13	1.19		1.60	1.63	
1831(2)	4,470,692	4,171,388	107.2	2.01	1.80	149.6	157.5	1.10	1.17	1.72	1.66		
32(3)				1.92	1.82	147.3	150.6	1.16	1.10	1.61	1.63		
33(4)				1.24	1.78	213.9	153.6	1.34	1.08	1.60	1.60		
34(5)				2.11	1.52	117.5	191.3	0.77	1.13	1.63	1.50		
35(6)				1.64	1.50	139.9	186.9	1.02	1.03	1.43	1.49		
1836(7)				4,470,692	4,171,388	107.2	0.68	1.53	338.0	176.0	1.37	0.93	1.25
37(8)	1.81	1.54	125.0				180.2	0.65	0.89	1.56	1.42		
38(9)	1.41	1.57	159.8				185.7	0.85	0.86	1.41	1.38		
39(10)	2.17	1.82	138.3				141.1	0.55	0.74	1.45	1.38		
40(11)	1.79	1.83	167.6				142.7	0.88	0.72	1.26	1.33		
1841(12)				1.91	1.87	114.9	146.1	0.79	0.76	1.20	1.31		

個別商品価格の関西／関東比の動向

品 価 格 の 京 都 / 江 戸 比														年 次
醬 油	同 カ 5 年 移 動 平 均	酢	同 カ 5 年 移 動 平 均	酒	同 カ 5 年 移 動 平 均	煎 茶	同 カ 5 年 移 動 平 均	新	同 カ 5 年 移 動 平 均	燈 油 (江 戸 は 水 油)	同 カ 5 年 移 動 平 均	蠟 燭	同 カ 5 年 移 動 平 均	
														1801(享和 1)
														02(2)
														03(3)
														04(文化 1)
														05(2)
														1806(3)
														07(4)
														08(5)
														09(6)
														10(7)
														1811(8)
														12(9)
														13(10)
														14(11)
														15(12)
														1816(13)
														17(14)
1.03		0.79		0.97		1.15		1.41		0.94		1.00		18(文政 1)
1.03		0.75		0.93		1.24		1.41		1.00		1.01		19(2)
1.02	1.02	0.64	0.69	0.92	0.91	1.21	1.23	1.41	1.41	0.96	0.94	1.01	0.97	20(3)
1.02	1.03	0.63	0.67	0.89	0.89	1.24	1.24	1.41	1.42	0.95	0.97	0.93	0.95	1821(4)
1.01	1.03	0.66	0.65	0.85	0.88	1.30	1.28	1.39	1.44	0.85	0.97	0.91	0.94	22(5)
1.07	1.03	0.67	0.68	0.87	0.88	1.23	1.37	1.49	1.46	1.08	0.98	0.87	0.92	23(6)
1.03	1.04	0.67	0.71	0.89	0.90	1.41	1.40	1.50	1.47	1.02	1.00	0.96	0.92	24(7)
1.03	1.04	0.76	0.72	0.92	0.91	1.68	1.33	1.48	1.48	1.00	1.03	0.94	0.92	25(8)
1.06	1.03	0.79	0.75	0.95	0.91	1.41	1.26	1.50	1.47	1.05	1.01	0.92	0.95	1826(9)
1.00	1.04	0.74	0.77	0.94	0.93	0.92	1.17	1.41	1.45	1.01	0.99	0.93	0.97	27(10)
1.03	1.04	0.83	0.78	0.85	0.93	0.90	1.01	1.45	1.44	0.99	0.95	1.03	0.98	28(11)
1.07	1.04	0.76	0.78	1.00	0.93	0.92	0.91	1.43	1.42	0.87	0.91	1.01	1.00	29(12)
1.05	1.08	0.80	0.79	0.90	0.92	0.89	0.92	1.42	1.42	0.85	0.89	1.01	1.03	30(天保 1)
1.06	1.10	0.79	0.78	0.96	0.91	0.94	0.92	1.39	1.42	0.85	0.88	1.02	1.05	1831(2)
1.17	1.10	0.79	0.76	0.88	0.90	0.96	0.92	1.41	1.40	0.88	0.92	1.09	1.06	32(3)
1.14	1.09	0.76	0.73	0.80	0.86	0.90	0.91	1.43	1.38	0.98	0.93	1.12	1.06	33(4)
1.08	1.07	0.66	0.71	0.95	0.83	0.88	0.89	1.32	1.38	1.03	0.94	1.05	1.06	34(5)
0.99	1.00	0.68	0.63	0.72	0.80	0.88	0.86	1.34	1.37	0.92	0.92	1.03	1.04	35(6)
0.98	0.92	0.65	0.56	0.79	0.78	0.82	0.84	1.37	1.38	0.87	0.89	1.02	1.03	1836(7)
0.81	0.86	0.38	0.51	0.77	0.79	0.83	0.83	1.40	1.42	0.82	0.84	0.99	1.03	37(8)
0.72	0.83	0.41	0.44	0.67	0.79	0.80	0.82	1.49	1.45	0.81	0.81	1.07	1.01	38(9)
0.78	0.79	0.41	0.39	1.03	0.77	0.82	0.82	1.49	1.48	0.78	0.81	1.06	0.98	39(10)
0.88	0.79	0.36	0.37	0.69	0.76	0.83	0.81	1.51	1.51	0.77	0.84	0.89	0.98	40(11)
0.77	0.80	0.36	0.38	0.71	0.76	0.82	0.82	1.51	1.53	0.88	0.85	0.90	0.95	1841(12)

付表 9-2 (その2) 人口、反収および

年次	人口			米の反収				個別商			
	近畿の人口 (人)	関東の人口 (人)	近畿/ 関東比 (単位 100)	関東に つき (反つき)	同5年 移動平均	関西/ 関東比 (単位 100)	同5年 移動平均	餅 米	同5年 移動平均	味噌	同5年 移動平均
1842(天保13)				1.88	1.86	133.2	147.3	0.56	0.84	1.34	1.28
43(14)				1.59	1.83	176.3	146.0	1.00	0.83	1.31	1.28
44(弘化 1)				2.15	1.88	144.5	143.8	0.95	0.82	1.28	1.29
45(2)				1.64	1.88	161.3	139.2	0.85	0.90	1.26	1.29
1846(3)	4,366,456	4,438,478	98.4	2.12	2.01	103.7	123.4	0.74	0.92	1.26	1.28
47(4)				1.90	1.96	110.3	117.2	0.95	0.92	1.35	1.33
48(嘉永 1)				2.21	2.01	97.2	107.6	1.14	0.99	1.28	1.36
49(2)				1.94	2.01	113.5	115.1	0.91	1.04	1.49	1.40
50(3)				1.85	2.04	113.3	118.0	1.19	1.04	1.40	1.40
1851(4)				2.13	2.10	140.9	116.1	1.02	1.00	1.49	1.42
52(5)				2.08	2.11	124.9		0.92	0.99	1.35	1.41
53(6)				2.50	2.16	87.8		0.95	0.91	1.38	1.42
54(安政 1)				1.97	2.18			0.86	0.85	1.43	1.39
55(2)				2.14	2.18			0.80	0.82	1.47	1.39
1856(3)				2.23	2.05			0.73	0.86	1.33	1.35
57(4)				2.08	2.09			0.78	0.92	1.32	1.31
58(5)				1.83	2.09			1.12	0.98	1.18	1.29
59(6)				2.16	2.09			1.18	1.12	1.23	1.35
60(万延 1)				2.14	2.10			1.12	1.21	1.38	1.39
1861(文久 1)				2.21	2.17			1.38	1.23	1.61	1.56
62(2)				2.16	2.15			1.25	1.37	1.53	1.69
63(3)				2.20	2.13			1.22	1.49	2.03	1.75
64(元治 1)				2.03	2.00			1.87	1.97	1.92	1.98
65(慶応 1)				2.06	1.98			1.74	2.08	1.66	2.14
1866(2)				1.53	1.91			3.77	2.10	2.76	2.15
67(3)				2.08	1.78			1.80	2.00	2.33	2.10
68(明治 1)				1.86	1.75			1.30	1.86	2.10	2.07
69(2)				1.37	1.93			1.37	1.27	1.66	1.79
70(3)				1.92	1.94			1.08		1.50	
1871(4)				2.45	2.02			0.80		1.36	
72(5)	4,658,247	5,173,959	90.0	2.09							
73(6)				2.29							

(出所) 関山直太郎『近世日本の人口構造 — 徳川時代の人口調査と人口状態に関する研究 —』(吉川弘文館、1958年)、「御月見日記」(兵庫県加古郡播磨町役場所蔵)、岸英次「関谷家稲刈覚帳の研究 — 農家における文化七年以降の水田生産力の変遷 —」(農林省農業総合研究所、1947年)、佐藤常雄「日本稲作の展開と構造 — 坪刈帳の史的分析 —」(吉川弘文館、1987年)、三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』[増補改訂](東京大学出版会、1989年)。

個別商品価格の関西／関東比の動向

品 価 格 の 京 都 / 江 戸 比														年 次
醬油	同5年移動平均	酢	同5年移動平均	酒	同5年移動平均	煎茶	同5年移動平均	薪	同5年移動平均	燈油(江戸は水油)	同5年移動平均	蠟燭	同5年移動平均	
0.81	0.80	0.32	0.39	0.71	0.68	0.80	0.82	1.56	1.55	0.94	0.86	0.97	0.92	1842(天保13)
0.76	0.77	0.43	0.41	0.65	0.65	0.81	0.81	1.56	1.55	0.86	0.88	0.93	0.92	43(14)
0.76	0.76	0.47	0.44	0.63	0.62	0.82	0.81	1.59	1.58	0.85	0.88	0.92	0.93	44(弘化 1)
0.74	0.74	0.50	0.48	0.53	0.60	0.81	0.82	1.54	1.60	0.87	0.88	0.88	0.91	45(2)
0.72	0.74	0.47	0.49	0.58	0.58	0.81	0.81	1.66	1.62	0.87	0.87	0.94	0.89	1846(3)
0.73	0.74	0.54	0.49	0.58	0.58	0.83	0.80	1.66	1.62	0.95	0.87	0.87	0.89	47(4)
0.75	0.73	0.48	0.47	0.55	0.59	0.81	0.77	1.67	1.62	0.80	0.87	0.85	0.88	48(嘉永 1)
0.75	0.74	0.44	0.46	0.64	0.63	0.73	0.74	1.55	1.60	0.86	0.87	0.90	0.86	49(2)
0.72	0.75	0.41	0.43	0.59	0.62	0.68	0.71	1.58	1.56	0.86	0.84	0.84	0.86	50(3)
0.76	0.75	0.41	0.41	0.79	0.61	0.68	0.68	1.53	1.53	0.86	0.86	0.86	0.88	1851(4)
0.77	0.76	0.41	0.40	0.51	0.61	0.68	0.67	1.47	1.52	0.84	0.87	0.88	0.88	52(5)
0.75	0.77	0.38	0.40	0.53	0.60	0.66	0.67	1.52	1.52	0.88	0.87	0.92	0.88	53(6)
0.79	0.77	0.39	0.40	0.60	0.54	0.66	0.66	1.52	1.52	0.92	0.89	0.89	0.87	54(安政 1)
0.77	0.79	0.38	0.40	0.54	0.54	0.66	0.66	1.55	1.55	0.88	0.90	0.84	0.86	55(2)
0.77	0.79	0.45	0.42	0.50	0.57	0.66	0.66	1.54	1.57	0.91	0.90	0.84	0.86	1856(3)
0.85	0.79	0.41	0.46	0.55	0.60	0.67	0.65	1.60	1.60	0.90	0.90	0.82	0.88	57(4)
0.77	0.80	0.46	0.50	0.68	0.62	0.66	0.64	1.66	1.60	0.91	0.89	0.89	0.92	58(5)
0.81	0.86	0.62	0.56	0.76	0.68	0.58	0.66	1.64	1.58	0.89	0.93	0.98	0.97	59(6)
0.81	0.87	0.58	0.60	0.62	0.68	0.64	0.65	1.57	1.58	0.85	0.93	1.06	1.04	60(万延 1)
1.07	0.89	0.73	0.70	0.78	0.68	0.74	0.70	1.45	1.68	1.08	0.97	1.07	1.11	1861(文久 1)
0.91	0.92	0.63	0.77	0.58	0.69	0.64	0.83	1.58	1.88	0.94	1.00	1.21	1.19	62(2)
0.85	0.99	0.94	0.96	0.65	0.74	0.91	0.94	2.15	2.06	1.08	1.05	1.20	1.33	63(3)
0.94	1.06	0.98	1.14	0.81	0.79	1.22	1.04	2.66	2.34	1.04	1.11	1.40	1.54	64(元治 1)
1.18	1.24	1.53	1.41	0.86	0.90	1.18	1.06	2.45	2.58	1.09	1.22	1.79	1.68	65(慶応 1)
1.42	1.34	1.64	1.41	1.02	0.89	1.27	1.00	2.86	2.69	1.37	1.20	2.08	1.69	1866(2)
1.79	1.37	1.97	1.45	1.15	0.86	0.74	0.84	2.80	2.65	1.51	1.24	1.92	1.64	67(3)
1.36	1.30	0.94	1.35	0.59	0.82	0.57	0.69	2.66	2.62	0.97	1.23	1.25	1.50	68(明治 1)
1.07	1.19	1.16	1.20	0.67	0.71	0.43	0.51	2.49	2.52	1.23	1.16	1.14	1.31	69(2)
0.85		1.03		0.67		0.45		2.30		1.07		1.08		70(3)
0.89		0.91		0.49		0.34		2.38		1.02		1.16		1871(4)
														72(5)
														73(6)

付表 9-3 (その1) 米価変動係数の比較

年次	大 阪 米 価			福 里 米 価			野 添 米 価		
	価 格 (石に つき 銀匁)	同 5ヵ年 移 動 平 均	同 5ヵ年 移 動 変 動 係 数	価 格 (石に つき 銀匁)	同 5ヵ年 移 動 平 均	同 5ヵ年 移 動 変 動 係 数	価 格 (石に つき 銀匁)	同 5ヵ年 移 動 平 均	同 5ヵ年 移 動 変 動 係 数
1720(享保 5)				52.00			50.00		
1721(6)				70.00			70.00		
22(7)				54.70	52.68	21.14	67.25	53.30	27.75
23(8)				46.30	51.96	21.76	42.50	52.65	28.57
24(9)				40.40	46.96	11.13	36.75	47.90	24.08
25(10)				48.40	44.70	6.76	46.75	42.80	9.44
1726(11)				45.00	44.04	6.69	46.25	41.55	12.05
27(12)				43.40	43.36	9.56	41.75	41.10	13.65
28(13)				43.00	38.94	19.75	36.25	38.45	14.05
29(14)				37.00	36.86	19.04	34.50		
30(15)				26.30	44.18	47.31	33.50		
1731(16)				34.60	44.58	46.86			
32(17)				80.00	43.40	49.73	42.50		
33(18)				45.00	45.80	43.23	67.25		
34(19)				31.10	47.88	39.37	35.75		
35(20)				38.30	42.58	19.69	37.50		
1736(元文 1)				45.00	49.94	39.32			
37(2)				53.50	58.52	31.95	32.20		
38(3)				81.80	67.66	25.82	71.00		
39(4)				74.00	74.22	16.44	78.50	68.39	30.29
40(5)				84.00	76.30	10.38	76.75	76.45	6.52
1741(寛保 1)				77.80	72.10	13.39	83.50	74.75	10.57
42(2)				63.90	71.28	13.50	72.50		
43(3)				60.80	68.58	9.59	62.50		
44(延享 1)				69.90	65.04	7.58			
45(2)				70.50	65.74	7.57	77.50		
1746(3)				60.10	65.64	7.77	75.00		
47(4)				67.40	64.08	7.25	63.50	68.60	10.42
48(寛延 1)				60.30	61.80	5.36	65.25	67.10	8.02
49(2)				62.10	60.18	9.25	61.75	62.10	11.96
50(3)				59.10	56.06	11.49	70.00	58.20	18.63
1751(宝暦 1)				52.00	52.80	14.68	50.00	53.45	22.66
52(2)				46.80	50.08	11.61	44.00	50.00	23.21
53(3)				44.00	54.26	27.05	41.50	48.75	18.34
54(4)				48.50	57.76	27.75	44.50	52.55	24.37
55(5)				80.00	59.86	24.86	63.75	55.55	21.67
1756(6)				69.50	62.32	19.92	69.00	59.40	15.41
57(7)				57.30	63.10	18.09	59.00	61.60	8.28
58(8)				56.30	57.56	12.24	60.75	58.70	12.34

付表 9-3 (その2) 米価変動係数の比較

年次	大 阪 米 価			福 里 米 価			野 添 米 価		
	価 格 (石に つき 銀 匁)	同 5カ年 移 動 平 均	同 5カ年 移 動 変 動係数	価 格 (石に つき 銀 匁)	同 5カ年 移 動 平 均	同 5カ年 移 動 変 動係数	価 格 (石に つき 銀 匁)	同 5カ年 移 動 平 均	同 5カ年 移 動 変 動係数
1759(宝暦 9)				52.40	52.70	9.03	55.50	54.20	11.35
60(10)				52.30	52.52	8.67	49.25	54.89	12.69
1761(11)				45.20	52.78	9.19	46.50	54.94	12.78
62(12)				56.40	53.78	9.77	62.45	55.09	12.78
63(13)				57.60	56.48	13.02	61.00	57.44	11.40
64(明和 1)				57.40	59.94	6.74	56.25	60.04	3.93
65(2)				65.80	62.04	7.17	61.00	61.85	9.27
1766(3)	60.14			62.50	63.70	6.11	59.50	63.85	10.92
67(4)	69.68			66.90	66.24	4.11	71.50	67.20	9.54
68(5)	70.40			65.90	66.84	4.37	71.00	68.45	7.94
69(6)				70.10	67.80	2.44	73.00	69.50	4.89
70(7)				68.80	66.18	6.67	67.25	66.70	9.09
1771(8)	69.17			67.30	63.64	11.50	64.75	63.40	11.77
72(安永 1)	59.19			58.80	60.80	11.40	57.50	58.95	11.74
73(2)	53.55			53.20	58.06	9.55	54.50	55.70	10.36
74(3)				55.90	55.74	3.62	50.75	54.30	6.22
75(4)				55.10	55.30	2.33	51.00	55.45	9.41
1776(5)				55.70	56.32	2.18	57.75	55.75	9.32
77(6)				56.60	54.88	6.67	63.25	55.25	10.63
78(7)				58.30	53.16	9.82	56.00	54.65	11.95
79(8)				48.70	53.64	10.45	48.25	53.10	12.30
80(9)				46.50	56.42	16.88	48.00	52.20	9.36
1781(天明 1)	51.05			58.10	60.10	22.05	50.00	57.40	25.15
82(2)	63.45			70.50	64.34	18.70	58.75	71.25	40.94
83(3)	83.70	71.21	23.20	76.70	67.76	10.50	82.00	74.90	35.45
84(4)	92.15	75.05	16.48	69.90	72.98	10.69	117.50	77.65	30.80
85(5)	65.70	80.72	15.14	63.60	73.44	10.46	66.25	91.40	32.22
1786(6)	70.25	78.21	16.28	84.20	71.46	11.06	63.75	88.30	35.60
87(7)	91.80	72.86	14.96	72.80	70.40	12.07	127.50	77.65	35.92
88(8)	71.15	71.21	17.87	66.80	69.16	14.53	66.50	75.80	38.41
89(寛政 1)	65.40	69.47	19.38	64.60	67.22	10.19	64.25	75.25	39.11
90(2)	57.45	68.52	16.82	57.40	68.88	13.29	57.00	64.85	10.71
1791(3)	61.55	70.30	18.01	74.50	67.52	14.82	61.00	68.10	15.71
92(4)	87.05	69.39	19.10	81.10	67.24	15.06	75.50	67.65	16.18
93(5)	80.05	70.69	17.05	60.00	70.70	12.44	82.75	69.55	13.43
94(6)	60.85	73.08	14.94	63.20	70.78	12.49	62.00	71.75	11.19
95(7)	63.95	69.77	10.95	74.70	68.48	9.82	66.50	70.40	11.08
1796(8)	73.50	66.76	7.69	74.90	69.50	7.72	72.00	66.95	5.57
97(9)	70.50			69.60	70.32	6.24	68.75	66.85	5.83

付表 9-3 (その3) 米価変動係数の比較

年次	大 阪 米 価			福 里 米 価			野 添 米 価		
	価 格 (石に つき 銀 匁)	同 5カ年 移 動 平 均	同 5カ年 移 動 変 動 係 数	価 格 (石に つき 銀 匁)	同 5カ年 移 動 平 均	同 5カ年 移 動 変 動 係 数	価 格 (石に つき 銀 匁)	同 5カ年 移 動 平 均	同 5カ年 移 動 変 動 係 数
1798(寛政10)	65.00			65.10	71.26	8.18	65.50		
99(11)				67.30	71.26	8.18	61.50		
1800(12)				79.40	71.64	8.03			
1801(享和 1)				74.90	71.28	8.83	78.50		
02(2)	64.72			71.50	70.92	9.34			
03(3)	60.25			63.30	66.94	9.29	57.50		
04(文化 1)	55.50	58.77	6.56	65.50	63.72	8.07	57.00		
05(2)	55.54	58.79	6.61	59.50	65.34	12.91			
1806(3)	57.86	60.98	11.24	58.80	68.36	14.72	58.00		
07(4)	64.79	63.05	10.04	79.60	68.18	14.87	64.50	67.40	12.83
08(5)	71.18	63.34	9.34	78.40	68.22	14.80	77.50		
09(6)	65.85	66.83	10.38	64.60	68.20	14.84	75.50		
10(7)	57.01	64.96	13.34	59.70	63.26	14.45	61.50		
1811(8)	75.32	63.20	12.59	58.70	60.18	6.32			
12(9)	55.45	63.23	12.60	54.90	60.56	7.27			
13(10)	62.36	64.94	11.05	63.00	61.56	7.66			
14(11)	65.99	62.40	6.76	66.50	64.26	9.76	62.50		
15(12)	65.56	64.09	2.57	64.70	66.48	5.22	78.50		
1816(13)	62.66	62.81	6.46	72.20	65.30	8.29	63.00	65.35	13.10
17(14)	63.88	59.64	10.80	66.00	61.52	15.37	67.50		
18(文政 1)	55.95	56.55	11.66	57.10	59.24	16.65	55.25		
19(2)	50.14	56.02	10.82	47.60	57.36	12.81			
20(3)	50.13	54.95	8.42	53.30	56.12	10.53	52.50		
1821(4)	59.99	55.55	8.95	62.80	57.36	11.78	54.50		
22(5)	58.52	58.14	8.31	59.80	60.36	6.92	60.00	58.60	10.63
23(6)	58.95	60.92	4.10	63.30	65.94	13.10	68.50	60.10	8.67
24(7)	63.13	62.94	7.43	62.60	65.82	13.21	57.50		
25(8)	64.02	62.73	7.87	81.20	65.48	13.77	60.00		
1826(9)	70.08	64.56	7.56	62.20	69.12	16.35			
27(10)	57.49	68.37	13.31	58.10	70.26	15.31	62.50		
28(11)	68.09	70.57	12.91	81.50	70.56	15.80	72.50		
29(12)	82.19	72.54	13.79	68.30	72.66	13.93	76.25	74.95	12.18
30(天保 1)	74.98	75.07	8.10	82.70	75.18	8.67	75.50	76.90	8.39
1831(2)	79.96	80.34	11.39	72.70	78.98	16.74	88.00	81.85	12.80
32(3)	70.13	84.45	16.20	70.70	82.28	14.44	72.25	86.05	13.71
33(4)	94.43	84.82	15.78	100.50	83.60	14.71	97.25	87.30	12.23
34(5)	102.74	91.18	19.13	84.80	95.60	24.40	97.25	91.40	15.67
35(6)	76.84	110.25	30.34	89.30	100.52	18.85	81.75	121.95	47.88
1836(7)	111.77	113.43	28.48	132.70	108.30	23.74	108.50	122.50	47.44

付表 9-3 (その4) 米価変動係数の比較

年次	大 阪 米 価			福 里 米 価			野 添 米 価		
	価 格 (石に つき 銀匁)	同 5カ年 移 動 平 均	同 5カ年 移 動 変 動 係 数	価 格 (石に つき 銀匁)	同 5カ年 移 動 平 均	同 5カ年 移 動 変 動 係 数	価 格 (石に つき 銀匁)	同 5カ年 移 動 平 均	同 5カ年 移 動 変 動 係 数
1837(天保 8)	165.48	110.08	31.32	95.30	105.96	27.12	225.00	120.05	49.71
38(9)	110.33	108.24	34.06	139.40	101.52	32.81		116.90	53.51
39(10)	86.01	99.60	40.87	73.10	91.08	31.83	85.00	109.85	59.76
40(11)	67.63	81.62	21.63	67.10	85.84	35.39	66.00	78.80	17.54
1841(12)	68.53	74.04	10.01	80.50	74.80	9.81	73.25	73.30	9.73
42(13)	75.58	71.98	5.28	69.10	78.18	12.57	69.75	72.10	6.65
43(14)	72.45	75.37	7.87	84.20	85.00	13.93	72.50	76.05	8.39
44(弘化 1)	75.69	79.80	9.51	90.00	85.70	13.55	79.00		
45(2)	84.61	81.57	9.06	101.20	89.08	8.07	85.75		
1846(3)	90.69	84.22	6.42	84.00	89.84	7.49			
47(4)	84.40	87.04	3.42	86.00	92.24	9.39	86.25		
48(嘉永 1)	85.70	93.74	14.81	88.00	99.96	23.38	86.75		
49(2)	89.78	97.44	15.67	102.00	101.08	22.29	91.00	101.05	18.04
50(3)	118.11	96.78	16.54	139.80	104.02	20.16	125.00	100.90	18.22
1851(4)	109.19	98.60	15.12	89.60	107.78	17.61	116.25	101.80	17.30
52(5)	81.15	99.40	14.51	100.70	105.84	19.06	85.50		
53(6)	94.80	91.28	13.77	106.80	93.96	10.85	91.25		
54(安政 1)	93.76	85.00	10.12	92.30	91.98	13.10			
55(2)	77.51	87.04	9.95	80.40	93.32	14.51			
1856(3)	77.79	91.67	18.00	79.70	98.40	22.35			
57(4)	91.32	95.78	20.31	107.40	104.40	22.91			
58(5)	117.96	108.15	22.22	132.20	126.00	31.83			
59(6)	114.34	126.41	23.20	122.30	137.66	22.26			
60(万延 1)	139.31	137.83	16.39	188.40	145.10	17.61			
1861(文久 1)	169.13	145.90	14.29	138.00	158.40	21.02			
62(2)	148.44	162.82	14.16	144.60	196.74	35.93	135.00		
63(3)	158.28	205.39	41.00	198.70	253.16	55.50	177.50		
64(元治 1)	198.94	379.92	99.73	314.00	334.66	51.31			
65(慶応 1)	352.18	538.92	78.28	470.50	436.10	41.49			
1866(2)	1041.74			545.50					
67(3)	943.47			651.80					

(出所) 三井文庫(中井信彦)編「近世後期における主要物價の動態」(日本学術振興会、1952年)、岩橋勝『近世日本物價史の研究 — 近世米價の構造と変動 —』(大原新生社、1981年)、「御月見日記」(兵庫県加古郡播磨町役場所蔵)。